



Tohoku Gakuin University  
Faculty Activities Report

2021

東北学院大学  
教員業務・活動報告書

2020

東北学院大学

2022(令和4)年3月31日

**東北学院大学**  
**教員業務・活動報告書**  
2020

東北学院大学  
2022 (令和4) 年3月31日

## 『2021 東北学院大学教員業務・活動報告書2020』の刊行にあたって

点検・評価委員会委員長

点検・評価担当副学長 中沢正利

ここに『東北学院大学教員業務・活動報告書2020』を刊行いたします。本報告書は、『東北学院大学教員業務・活動報告書2017-2019』に続くものです。これまで、本報告書は全学的な点検・評価の実施時期に合わせて、3年に一度公刊することを原則としてきましたが、「教員業務・活動報告管理システム」が2021年度に更新されたのを契機に、年一回の発行とWeb公開に切り替えることといたしました。

大学の自己点検・評価において教育・研究活動に関する情報は、最もエッセンシャルなデータです。本報告書は、本学専任教員の教育・研究活動の基本データを収録しており、自己点検・評価の出発点となるものです。「東北学院大学教員業務・活動報告書」は、本学の教員組織及び個々の教員の教育・研究活動を活性化させることを目的として刊行いたします。

また、本報告書には、教育・研究活動だけではなく、社会貢献をはじめとする教員の多様な活動に関する情報が記載されています。さらに2016年度より「学内の管理運営に関する記載事項」を追加し、そのような活動に貢献している教員についても、その活動全体を反映できるものとなりました。報告書の内容は、「Ⅰ. 教育活動」、「Ⅱ. 研究活動」、「Ⅲ. 学内外の競争的資金の獲得」、「Ⅳ. 学会等及び社会における主な活動」、「Ⅴ. 芸術分野や体育実技等における主な活動」、「Ⅵ. 学内における管理運営に関する諸活動」で構成され、まさに本学教員の活動全般にわたる活動記録となっています。

なお、教育・研究活動をはじめとする大学教員の諸活動に関する情報を広く公開することは、それ自体、大学の社会的責任の一つです。そのため、本報告書は、本学ホームページにも掲載し、広く一般に公開いたします。

本報告書の刊行を契機として、大学及び各教員が自己点検・評価活動をさらに自ら押し進め、具体的改善につなげることが重要です。そのためには、本報告書に記載するという行動を、各教員が不断の自己点検・評価過程(PDCAサイクル)の中に明確に位置づけることが不可欠です。この点を踏まえて、本報告書では、各教員の教育活動及び研究活動について、それぞれ「現在の課題・目標」、「今年度の進捗状況」、「来年度の進捗目標」を記す欄を設定しています。これにより、各教員の教育・研究活動について、Plan-Do-Check-Actionのサイクルがはっきりと目に見える形になりました。本報告書においては、この部分の記述が最も重要であり、このように個々の教員レベルでPDCAサイクルを回すことが教育の内部質保証の第一歩となるのです。本報告書が、各教員の不断の改善努力に資するものとなることを願っています。

最後になりましたが、この報告書の刊行に関わられたすべての方々に感謝申し上げます。

2022年3月

## 凡 例

### 1. 業績の範囲

- ・2020年4月から2021年3月までとする。

### 2. 掲載対象

- ・2020年4月1日現在で本学に在職するすべての専任の教育職員を対象とする。

### 3. 掲載順序

- ・文学部（英文学科、総合人文学科、歴史学科、教育学科）、経済学部（経済学科、共生社会経済学科）、経営学部（経営学科）、法学部（法律学科）、工学部（機械知能工学科、電気電子工学科、環境建設工学科、情報基盤工学科）、教養学部（人間科学科、言語文化学科、情報科学科、地域構想学科）の順とし、さらに教授（嘱託教授含む）、准教授、講師、助教別に五十音順とした。
- ・各教員から提出された区分別に、年代の古い順から掲載した。なお、教育活動、研究活動のいずれにおいても時期が複数年にわたる場合には、活動の開始時期を基準として年月日順に記載し、学会等及び社会活動については、就任年月日順に記載した。

### 4. 掲載内容

- ・掲載内容は、すべて本人からの報告によるものである。
- ・大学院の授業担当の有無は、2020年度に開講された授業のものである。
- ・教育活動の区分は、1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）、2. 作成した教科書、教材、参考書、3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等、4. その他教育活動上特記すべき事項とした。
- ・研究活動の区分は、A. 学術書、B a. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）、B b. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）、C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文、D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）、E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）、F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）、G. 学会における研究発表、H. 翻訳（学術書や原典等）、I. 特許とした。
- ・共著（論文）の場合、該当頁数の記入にあたって、本人の分担箇所を特定できる場合は、その頁数を記載した。
- ・芸術分野や体育実技等の分野の教員は、著書・論文等以外の展覧会・演奏会・競技会等での発表のうち、特に顕著な業績と認められるものについて記載した。

# 教員一覽

## 学長

教授  
大 西 晴 樹

## 文学部

### 英文学科

教授  
植 松 靖 夫  
遠 藤 健 一  
大 石 正 幸  
豊 島 孝 之  
那須川 訓 也  
バックレイ フィリップ  
福 士 航  
吉 村 富美子

### 准教授

井 出 達 郎  
古 川 弘 子  
森 山 盛 吉

## 総合人文学科

教授  
川 島 堅 二  
木 村 純 二  
鐸 木 道 剛 ※  
出 村 みや子  
野 村 信

### 准教授

原 田 浩 司  
吉 田 新

### 講師

阿久戸 義 愛  
田 島 卓

### 助教

藤 野 雄 大

## 歴史学科

教授  
小 沼 孝 博  
河 西 晃 祐  
菊池[柳谷]慶子  
楠 義 彦  
佐 川 正 敏  
櫻 井 康 人  
佐 藤 義 則  
下 倉 涉  
谷 口 満  
辻 秀 人  
永 田 英 明  
七 海 雅 人  
政 岡 伸 洋  
渡 辺 昭 一

## 准教授

杵 淵 文 夫  
竹 井 英 文

### 講師

金 子 祥 之

## 教育学科

教授  
稲 垣 忠  
加 藤 卓  
紺 野 祐  
佐 藤 正 寿  
長 島 康 雄  
村野井 仁  
ロング クリストファー  
渡 辺 通 子

### 准教授

大 友 麻 子  
清 水 遥  
清 多 英 羽  
高 橋 千 枝

### 助教

松 本 進乃助

## 経済学部

### 経済学科

教授  
アレイ ウィルソン  
伊鹿倉 正 司  
泉 正 樹  
大 塚 芳 宏  
小 沼 宗 一  
倉 田 洋  
篠 崎 剛  
白 鳥 圭 志  
千 葉 昭 彦  
前 田 修 也  
若 生 徹

### 准教授

板 明 果  
稲 見 裕 介 ※  
小 原 拓 也  
佐々木 周 作  
谷 野 祐 可  
田 野 穂 人  
舟 島 義 謙 ※  
舩 谷 龍 二  
松 前 本 宜  
宮 本 拓 郎

### 講師

小 林 陽 介

塩見由梨  
白井大 地  
共生社会経済学科  
教授  
石川真 作  
小笠原 裕 ※  
郭基由 煥  
熊沢基由 美  
佐藤康 純  
准教授  
黒坂愛 衣  
小宮友 根  
齊藤康 則  
佐藤 滋  
谷達 彦  
宮地 克 典  
講師  
佐久間 香 子

経営学部  
経営学科  
教授

岡田耕一郎  
折橋伸哉  
北村智紀  
小池和善彰  
佐久間義浩  
佐々木郁子  
菅山真好和  
鈴木橋志朗  
高根市一孝介  
松岡村山貴俊  
村山口義教  
矢山口朋泰  
准教授  
秋池裕篤  
古賀内裕也  
竹内真登  
講師  
板橋慶明  
萩原丈男子  
棚橋則子  
助教  
窪田嵩哉

法学部  
法律学科  
教授

石垣茂光  
井上義比古  
遠藤隆幸

大窪 誠  
岡田 夫  
菊地 介  
木下 惠  
近藤 大  
斎藤 誠  
佐々木 み  
佐藤 英  
佐藤 優  
陶久 利  
辻田 芳  
富村 雄  
中村 拓  
三須 一  
宮川 也  
横田 基  
准教授  
加藤 佳  
黒田 秀  
三條 秀  
玉井 裕  
内藤 裕  
羽田 さ  
松浦 ゆ  
井坂 正 子  
宏

工学部

機械知能工学科  
教授

魚橋慶子  
遠藤春男  
小野憲文  
梶川伸哉  
加藤陽子  
熊谷正朗  
斎藤修夫  
鈴木利夫  
星松浦朗  
矢口博寛  
准教授  
岡田宏成  
佐瀬一弥  
長島慎二  
濱西伸治  
李西淵

電気電子工学科  
教授

石川和己  
岩谷幸雄  
小澤哲也  
郭金海蛟  
呉 義 鎮  
 国 紅

博之晶人 文敏正明 藤井 佐嶋土原  
 准教授 大桑佐鈴  
 環境建設工学科  
 教授 李井石櫻鈴武飛中韓宮山  
 准教授 崎千恒三戸部  
 情報基盤工学科  
 教授 淡石加神川郷志鈴中吉  
 准教授 門木物  
 講師 深森  
 教養学部  
 人間科学科  
 教授 片加神黒小

佳聡義仁 相川井木田村内口 俊知良佑 照和正 有利益英 博敏寛 道 一健博

文子卓志 勲望美弥哉弘雄治熙介晶 雄弘純太 義忍夫博憲学光則利機 之勉幸太郎 晴佑 男二史憲裕

讓三之子則雄輝子修 研隆幸智幹光裕 靖章勸嘉信貴 益俊雄 人史造宏重裕涉努美彦大  
 本井戸田葉野野毛谷 山迫崎井林水海林木田原田 安德リュース デール 勉緒子陸啓已也誠英子  
 坂櫻穴仙千平福堀水 泉大岡金小清東鈴坪萩吉 秋葉井林伯館本上 楊渡 部友 子月介昊貞郎也彦子徳嬉  
 准教授 海林木田原田 和信 世友 スコット ※ 正陸浩永亨光拓直貴昌賢 和之楠太赫  
 言語文化学科  
 教授 井巖岸金信城高原坂房 フリック ウルリッヒ 基博景冬承 紀規明  
 講師 佐宮門 藤本間 真直俊

## 情報科学科

## 教授

石	田	弘	隆
伊	藤	則	之
乙	藤	岳	志
小	林	善	司
坂	本	泰	伸
菅	原		研
杉	浦	茂	樹
牧	野	悌	也
松	尾	行	雄

## 准教授

岩	田	友	紀	子
佐	藤			篤
高	橋	秀		幸
武	田	敦		志
土	原	和		子
星	野	真		樹
松	本	章		代
村	上	弘		志

## 地域構想学科

## 教授

岩	動	志	乃	夫
佐	久	政		広
菅	原	真		枝
高	野	岳		彦
高	橋	信		二
平	吹	喜		彦
増	子			正
松	原			悟
松	本	秀		明
柳	井	雅		也
和	田	正		春

## 准教授

天	野	和	彦
遠	藤		尚
大	澤	史	伸
目	代	邦	康
柳	澤	英	明



# 教員業務・活動報告

学

長

2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	大西 晴樹	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況		書評として「マックス・ヴェーバー著戸田聡訳『宗教者社会学論集 第一巻上―緒言・プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神・プロテスタントの諸信団と資本主義の精神』』『キリスト教史学』第74集2020年7月、「岡部一興『長谷川誠三―津軽の先駆者の信仰と事績』』『本のひろば』2020年3月号に掲載					
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
「マックス・ヴェーバー著・戸田聡訳『宗教社会学論集 第一巻上―緒言・プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神・プロテスタントの諸信団と資本主義の精神』」		単著	2020年7月	キリスト教史学会『キリスト教史学』第74集,キリスト教史学会『キリスト教史学』第74集		不明	pp.279-281
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>							



## 教員業務・活動報告

文 学 部

英 文 学 科

総 合 人 文 学 科

歴 史 学 科

教 育 学 科

2020年度							
所属	文学部 英文学科	職名	教授	氏名	植松 靖夫	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
宮城野高等学校にて講義		2020年12月5日～2020年12月5日		宮城野高等学校にて2年生を対象とし「英文の書き方」をテーマとする講義を2時間実施した。 授業の内容は、日本語の発想で英文を書いても、「英文」として理解されないで、「英文」にするには基本的な「型」に従って、文章をつなげなければならない。その「型」とはどういうものかということについての具体的な解説。併せて大学入試などの「小論文」対策としても活用できる側面についても強調した。			
中新田高等学校にて講義		2020年10月29日～2020年10月29日		「英文を書くための5つのルール」というテーマで50分授業を2回実施した。 高校二年生が対象であったため、大学受験の際の「小論文」対策も視野に入れ、英文のみならず、日本語を書く場合にも応用ができるような内容にしたため、熱心にメモを取る生徒さんたちの姿が目立った。			
教育実習訪問指導 私立東北高等学校		2020年10月28日～2020年10月28日		東北高等学校にて教育実習中の英文学科の学生に指導を行ない、校長先生と指導担当の先生にも会い、引き続きご指導をお願いした。			
教育実習訪問指導 仙台市立鶴が丘中学校		2020年10月27日～2020年10月27日		鶴が丘中学校にて教育実習中の英文学科の学生に指導を行なった。主に校長先生から実習生の様子を伺い、本学に新設された教育学科についての情報も提供し、引き続き実習生の指導をお願いした。			
教育実習訪問指導 古川学園中学校		2020年10月20日～2020年10月20日		校長先生と指導担当の先生から実習生の様子を伺い、本学に新設された教育学科などについての情報交換も行ない、引き続きご指導をお願いした。			
福島県立相馬高等学校にて講義		2020年9月15日～2020年9月15日		福島県立相馬高等学校にて、同校の二年生を対象に「英文を書くためのルール」をテーマに110分の講義を行なった高校生にとってはもちろん、長年出張講義を担当してきた私にとっても「110分」という長時間の講義は初めてで、生徒さんたちが「内容」よりも「時間」に耐えられるのが、最大の不安材料だったが、結果は杞憂に終わり、講義の後で、熱心に質問に来る生徒さんもいるほどだった。			
現在の課題・目標		講義形式の授業でレポートの書式の基本を学ばせ、課題についても具体的な方針を明示して、感想文のレベルから客観性の高いレポートを書けるように指導する。					
今年度の進捗状況		新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けて、すべてZoomによるオンラインの授業となったために、すべてが模索の中での試行となり、特に重要なポイントは講義中に口頭で何度も繰り返し説明し、それをさらにmanabaのコースニュースでも流し、小テスト後にもまたmanabaで答案の問題点を指摘。しかし、予想に反して、理解していないというよりは、話をまったく聞いていないとしか思えない学生が目立った。					
来年度の進捗目標		小テストによるチェックを来年度も続け、さらに学生の理解度を上げるための方策を授業ごとに考える。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野に関連する領域)							

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	新たな出版事が加わり二種類の事業を同時進行することになった。先行する事業については準備段階にあり着手するのにあと最低2年、出版は7年以上先になる見込み。 後発の出版企業はキリスト教関係の事典で、自分の担当は半年程度で完成する見込み。		
今年度の進捗状況	先発の出版事業の資料の量が膨大で、しかも読みづらいが、今年度内には整理の見通しだけはつけられるように進めている。		
来年度の進捗目標	時間を投入することでしか解決できないので、来年度は「このペースなら」何年かかるという見通しを立てられる段階には漕ぎつけるように努める。		
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2020年10月	第28回 Creative Café(やまがた想像都市推進事業) 佐藤 孝弘山形市長・作家 黒木あるじ・植松による鼎談 題名:「H.P. ラヴクラフト&クトゥルー神話を語る〜コズミック・ホラー(宇宙的恐怖)の起源〜」委員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	新たな出版事業が加わり三種類の事業を同時進行することになった。先行する事業については準備段階にあり着手するのにあと最低2年はかかる見込み。 後発の出版事業はキリスト教関係の事典。		
今年度の進捗状況	キリスト教関係の事典の担当箇所は終了。 他の二者の出版事業のうち一つは予定より早く、12月より着手することになった。		
来年度の進捗目標	着手した出版事業の中心部分は6月までに完成を目指し、その後は何を追加するかを担当の編集者と話し合っ、年度内には出版を目指す。		
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
1. 英文学科長 2. 東北学院大学英語英文学研究所所長			

2020年度							
所属	文学部 英文学科	職名	嘱託教授	氏名	遠藤 健一	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
東京都立国際高等学校出前授業(オンライン)		2021年2月4日		「詩と絵画の交渉:ブリューゲル「イカロスの墜落のある風景」を読む」のテーマについての特別講義。 (国際バカロレアコース生徒1年生～3年生:「国語総合」、ディプロマ・プログラム「文学」履修者)			
現在の課題・目標		?テキスト講読関連の授業において、予習の習慣を身につけさせる。 ?1年次配当科目の「英米文学概説Ⅰ」や「文学」(教養科目)の授業において、文学作品、とくに小説を読む楽しさを実感させる。 ?4年次配当科目の「文学批評史」や「文学理論」の授業において、具体的な例示を通して、抽象的な批評理論のエッセンスを理解させる。					
今年度の進捗状況		?予習の習慣が、ある程度、身につけ始めている。 ?読書記録レポートの課題提出などを通して、受講生の中には、小説を読む楽しみを実感し始めているものもいる。 ?より身近な例を挙げることによって、受講生の中には、理解が深まりつつあるものもいる。					
来年度の進捗目標		?授業運営や課題の与え方を工夫することで、より多くの受講生に予習の習慣を身につけさせる。 ?課題小説のリストアップなどの工夫によって、より多くの受講生に小説を読む楽しみを実感させる。 ?例示のさらなる工夫によって、より多くの受講生に理解を促す。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
「文学国語」と「論理国語」という区別『「文学国語」と「論理国語」という区別』	単著	2020年4月	東北ロマン派文学・文化研究会『ニューズ・レター』第8号	未記入	pp.1		
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		?ナラトロジーに関する自著の出版の準備 ?ナラトロジーに関するドイツ人著書の翻訳					
今年度の進捗状況		?ナラトロジーに関するドイツ人著書の翻訳継続					
来年度の進捗目標		?ナラトロジーに関するドイツ人著書の翻訳出版の準備					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							

V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			



2020年度							
所属	文学部 英文学科	職名	教授	氏名	大石 正幸	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
授業内容に興味を持たせると同時に、学生の自発的な学習を促すための工夫		2020年4月～		学修低下の著しい学生に理解力の涵養のため、理解が進むことを実感できる指導をおこなっている。問題設定と解を自分でおこなわせ、さらに、茫漠とした解を文字化することを通して理解の整理を促している。			
授業内容の理解を促進するための工夫		2020年4月～		毎回の授業の冒頭から半分ほどまでを、復習に当て、前回の授業の概略を述べ、授業終了時には次回のための下準備を伝える。			
論文作成および研究の指導		2020年4月～		大学院において、論文作成と研究遂行に必須の基礎的事項の指導を細かくおこなっている。			
授業内容の理解を定着させるための授業以外の時間を利用した工夫		2020年4月～		授業とは別の時間を(オフィスパワー等を利用し)随時受け付け、学生個人の興味と習熟に沿った始動をしている。			
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□授業内容の組み立てに関する工夫		2020年4月～		問題設定と判断材料、論理的帰結を常時意識させるようにし、項目中心ではなく大きな議論の枠組みで感上げることが意識させている。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
Oishi, M. & K. Nasukawa Introduction to English Linguistics. Llun Press.		2020年4月		本学英文学科のレベルに特化した英語学概説入門書。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		(1) 同一の問題について視点を換えて観ることの有効性を意識させる。 (2) 日常の言語現象についての繊細な感覚を持つことを意識させる。 (3) 自分で解けるという実感の涵養をねらう。					
今年度の進捗状況		上記目標(1)については、ある程度の進捗がみられた。 上記目標(2)については、言語の間差に常時指摘し目を向けることを促し、ほどほどの進捗がみられた。 上記目標(3)については、授業時に、周囲の学生と相談しながらも、問題への複数のアプローチの仕方があることに気付け、議論させることを通し、理解することそのものを体得することで、わかりやすい授業を展開することができた。					
来年度の進捗目標		(1) 理論構築の段階を実感できるきれいな領域をさらに提示していく。 (2) 自己の言語知識と他人の言語知識との比較を通して、言語理論に沿った思考の体得を明確にする。 (3) 問題そのものを見つけられるようにしていく。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		(1) 言語の基本設計について研究する。 (2) 言語論について、言語の仕組みに根ざした研究をする。					

今年度の進捗状況	上記目標 (1)(2) について, その研究成果を学会等で発表した (「研究活動」を参照).		
来年度の進捗目標	(1) 言語の基本設計についてさらに研究する. (2) 言語論について, 言語の仕組みに根ざした研究をする. (3) 言語研究を駆動するしてんの変遷について研究する.		
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2020年11月		日本言語学会第161回大会公開講演 会員	
2004年～		日本英語学会	
1983年～		日本英語学会 会員	
1982年～		日本言語学会 (The Linguistic Society of Japan) 会員	
1981年～		Generative Linguistics in the Old World (GLOW) 会員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度							
所属	文学部 英文学科	職名	教授	氏名	豊島 孝之	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学生の習熟度を見極めながら授業を行っている。		2020年～		必修、専門、選択などの科目の性質に応じて、授業形態、学生の興味・習熟度に応じて、授業の進度、説明、練習の分量・方式を試している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
オン・ラインでの補講		2020年～		卒業予定の3年次必修科目再履修不合格者に対し、オン・ライン補講を行なった。			
現在の課題・目標		学生の興味・習熟度にあった授業の確立と、オン・ライン授業の運営方法を模索する。					
今年度の進捗状況		オン・ライン授業での学生の授業理解度を確認しながら運営している。					
来年度の進捗目標		毎年、学生の習熟度に幅があるとのことなので、引き続き学生の興味と習熟度の把握に努める。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
Discussions (on Invited Speech "Minimalism: Where we are now, and where we are going" by Noam Chomsky)	共同	2020年11月	The 161st Meeting of the Linguistic Society of Japan(Online (Tohoku Gakuin University: Sendai))	Noam Chomsky, Masayuki Oishi, Sandiway Fong, Hisatsugu Kitahara, Takashi Toyoshima			
コメント: 空範疇、空演算子、削除と文脈の決定	共同	2020年11月	日本英語学会第38回大会ワークショップ: 統語領域における copy をめぐる諸問題 - copy 派生メカニズムの単純化(オンライン(茨城大学))	宗像 孝、後藤 亘、石井 透、林 慎将、北原 久嗣、コメンテーター: 豊島 孝之			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		引き続き科学研究費補助金の研究課題に関する研究を推進する。					
今年度の進捗状況		最終年度にあたる科科学研究費補助金の研究課題で得られた知見を基に、さらに発展させる研究計画で来年度の科学研究費補助金に応募した。					
来年度の進捗目標		科学研究費補助金の研究課題に関する取りまとめを行い、生成文法理論極小主義プログラムにおける大併合操作の枠組みでの付加構造生成についての研究を進める。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				

科学研究費補助金 基盤研究(C)	2017年度～2019年度	個別	
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2020年8月～2020年10月		日本語学会 学会誌「言語研究」査読委員	
2020年6月～2020年12月		日本語学会 第161回大会 大会実行委員長	
2018年7月～		日本語学会 会員	
2018年7月～2020年6月		日本学術振興会 特別研究員等審査会/卓越研究員候補者選考委員会/国際事業委員会 専門委員/書面審査員/書面審査員・書面評価員	
1994年1月～		Linguistic Society of America,member 会員	
1990年11月～		日本英語学会 会員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
1. 大学院文学研究科英語英文学専攻主任 2. 全学点検・評価委員会 3. 全学図書館委員 4. 中央図書館委員 5. 文学部英文学科AO面接委員			

2020年度							
所属	文学部 英文学科	職名	教授	氏名	那須川 訓也	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
論文作成, および, 研究発表の指導		2020年4月1日～		大学院において, 論文作成, および, 研究発表の仕方について, きめ細やかな指導をしている。			
授業内容の理解を定着させるための授業以外の時間を利用した工夫		2020年4月1日～		授業とは別の時間を設け, 音声・音響解析装置を使いながら, 学生個人にきめ細やかな指導をしている。			
授業内容に興味をもたせると同時に, 学生の自発的な学習を促すための工夫		2020年4月1日～		授業の要点をまとめたプリントや関連資料を配布し, それに沿って授業をおこなっている。授業内容の理解を深めるように, グループ活動および学習発表の機会を設けている。			
授業内容の理解を促進するための工夫		2020年4月1日～		毎回の授業の冒頭で, 復習という意味で, 前回の授業の概略を必ず述べ, 授業終了時にはその回のまとめをおこなっている。			
授業内容全体の組み立てに関する工夫		2020年4月1日～		学生のレベルや興味を把握し, それらを授業に反映させる目的で, 独自の事前調査を初回の授業でおこなっている。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
Oishi, M. & K.Nasukawa. Introduction to English Linguistics. Lluon Press.		2020年4月1日		本学英文学科の学生のレベルに特化した英語学概説入門書			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		①授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし, 学生からのさまざまな相談に応じる。 ②「音韻論II」の授業用ハンドアウトを改善する。 ③「英語学演習III・IV」の授業用ハンドアウトを改善する。					
今年度の進捗状況		上記目標①については, 授業評価アンケートで好評価を得ることができた。 上記目標②については, 「音韻論II」の授業用ハンドアウトを改善することで, より分かりやすい授業を展開することができた。 上記目標③についても, 「英語学演習III・IV」の教材を改善することで, より理解しやすい授業を展開することができた。					
来年度の進捗目標		①今年度に引き続き, 授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし, 学生からのさまざまな相談に応じる。 ②「音韻論I」の授業用ハンドアウトを改善する。 ③「英語学演習I・II」の授業用ハンドアウトを改善する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
Linearisation and stress assignment in Precedence-free Phonology: The case of English	単著	2020年12月	Radical: A Journal of Phonology, 1	Nasukawa, Kuniya	pp.239-291		
Lexicalising phonological structure in morphemes	単著	2020年4月	Acta Linguistica Academica: An International Journal of Linguistics, 67(1)	Nasukawa, Kuniya	pp.29-38		
Conditions on the variable interpretation of [U] in Japanese	共著	2020年4月	Variation in Phonology: Special issue of Linguistic Variation, 20(1)	Backley, Phillip and Kuniya Nasukawa	pp.13-24		

Velar softening without precedence relations	共著	2020年	Kuniya Nasukawa (ed.), Morpheme-internal Recursion in Phonology. Volume 140 in the series Studies in Generative Grammar [SGG]. Boston and Berlin: De Gruyter Mouton.	Onuma, Hitomi and Kuniya Nasukawa	pp.201-229
Recursion in melodic-prosodic structure	共著	2020年	Kuniya Nasukawa (ed.), Morpheme-internal Recursion in Phonology. Volume 140 in the series Studies in Generative Grammar [SGG]. Boston and Berlin: Mouton de Gruyter	Backley, Phillip and Kuniya Nasukawa	pp.81-109
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>					
Representing tones in Precedence-free Phonology	単著	2020年4月	Phonological Externalization, Sapporo University, 5	Nasukawa, Kuniya	pp.13-24
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>					
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>					
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>					
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>					
<b>G. 学会における研究発表</b>					
音韻階層構造と派生形の外在化	共同	2021年2月	新学術領域「共創言語進化」第7回領域全体会議 東京大学(遠隔会議)(オンライン(東京大学, 駒場キャンパス))	◎那須川訓也, バックレイ・フィリップ	
Externalisation of phonological hierarchical structure and derivational structure	単独	2021年2月	The 11th Workshop on Phonological Externalization of Morphosyntactic Structure (PHEX11)(オンライン(札幌大学))	Nasukawa, Kuniya	pp.Invited
音韻階層構造における声調表示	共同	2020年6月	新学術領域「共創言語進化」第4回領域全体会議 東京大学(遠隔会議)(東京大学, 駒場キャンパス)	◎那須川訓也, バックレイ・フィリップ, 大沼仁美	
統語構造構築と音韻構造構築の統一的接近法	共同	2020年6月	新学術領域「共創言語進化」第4回領域全体会議 東京大学(遠隔会議)(東京大学, 駒場キャンパス)	◎那須川訓也, 田中伸一, バックレイ・フィリップ, 大沼仁美	
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	①音韻的回帰併合の实在性と極小論における音韻部門の位置づけについて、多角的・総合的に研究する。 ②分節内構造と韻律構造の相関関係について、多角的・総合的に研究する。 ともに、来年度も国内外の機関誌や学会で、今年度の研究成果をさらに発展させたものを報告できるように努める。				
今年度の進捗状況	上記目標①については、その研究成果を国内外の機関誌や学会で発表した(「研究活動」を参照)。 上記目標②についても、その研究成果を国内外の機関誌や学会で発表した(「研究活動」を参照)。				
来年度の進捗目標	①非時系列音韻(Precedence-free Phonology)を発展させ、その枠組みを用いて音韻分析する。 ②今年度に引き続き、分節内構造と韻律構造の相関関係について、より多角的に研究する。 ともに、来年度も国内外の機関誌や学会で、今年度の研究成果をさらに発展させたものを報告できるように努める。				
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	
科学研究費補助金 新学術領域研究(研究領域提案型)	2020年度~2021年度	個別(研究代表者)			
科学研究費補助金 基盤研究(S)	2019年度~2023年度	共同(研究分担者)			

科学研究費補助金 基盤研究(A)	2019年度～2023年度	共同(研究分担者)	
科学研究費補助金 基盤研究(A)	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2021年1月	Oxford Guide to the Bantu Languages 査読委員		
2020年8月	SKASE Journal of Theoretical Linguistics (The Slovak Association for the Study of English) 査読委員		
2020年7月	University of Botswana 教員資格審査委員		
2019年9月～2022年8月	日本言語学会 広報委員		
2018年4月～	日本言語学会 評議員		
2017年11月～	Generative Linguistics in the Old World (GLOW) 査読委員		
2017年7月～	文部科省委託 小学校英語教科化に向けた専門性向上のための講習の開発・実施事業「平成30年度東北学院大学小学校教員のための中学英語免許取得認定講習」(英語音声の仕組み) 講師		
2017年4月～2021年3月	日本音韻論学会 理事		
2016年1月～	John Benjamins 査読委員		
2015年12月～	Glossa 査読委員		
2015年5月～	Lingua 査読委員		
2013年9月～	Journal of Linguistics 査読委員		
2012年11月～	Manchester Phonology Meeting (mfm) 査読委員		
2012年11月～	Manchester Phonology Meeting (mfm) 諮問委員会委員		
2012年10月～	Old World Conference in Phonology (OCP) 査読委員		
2010年10月～	The Linguistic Review 査読委員		
2008年10月～	Congreso Internacional Phonetics and Phonology in Iberia (PaPI) 科学評議員		
2005年9月～	Restrictive Phonology Research Group (RPRG) 理事		
2005年～	Restrictive Phonology Research Group (RPRG) 会員		
1998年～	Generative Linguistics in the Old World (GLOW) 会員		
1997年～	日本音韻論学会 会員		
1993年～	日本言語学会 会員		
1993年～	Linguistic Association of Great Britain (LAGB) 会員		
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
2017年 4月～2021年3月 東北学院大学英語英文学研究所主事			
2017年 4月～2021年3月 東北学院大学英語英文学研究所『紀要』編集委員			
2018年 4月～ 東北学院大学英語英文学研究所『東北学院英学史年報』編集委員			
2020年 4月～ 東北学院大学大学院文学研究科長			
他			

2020年度							
所属	文学部 英文学科	職名	教授	氏名	バックレイ フィリップ	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
授業内容に興味をもたせると同時に、学生の自発的な学習を促すための工夫		2020年		授業内容に興味をもたせるために、マルチメディア機器(Zoom)を利用している。また、それらの機器の使用方法を具体的に指導している。			
授業の進め方、および、授業内容をよく理解させるための工夫		2020年		授業の要点をまとめたプリントや関連資料を配布し、それに沿って授業をおこなっている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切に、学生からのさまざまな相談に応じる。					
今年度の進捗状況		英語音声学分野で世界的に高い評価を受けている英国ロンドン大学UCL主催の英語の発音と聞き取り技術向上を主眼とした2週間の夏季集中プログラムの参加者援助と短期留学の手配を進めている。					
来年度の進捗目標		イギリス夏期音声学プログラム(2021)を学生にとってより魅力的なものにするために、提携校であるロンドン大学UCLの国際交流課のスタッフと話し合い、現在のプログラムを改善する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Conditions on the variable interpretation of [U] in Japanese	共著	2020年4月	Variation in Phonology: Special issue of Linguistic Variation, 20(1)	Backley, Phillip and Kuniya Nasukawa	pp.13-24		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
音韻階層構造と派生形の外在化	共同	2021年2月	新学術領域「共創言語進化」第7回領域全体会議(東京大学(遠隔会議))	那須川訓也, ◎バックレイ・フィリップ			
音韻階層構造における声調表示	共同	2020年6月	新学術領域「共創言語進化」第4回領域全体会議(東京大学(遠隔会議))	那須川訓也, ◎バックレイ・フィリップ, 大沼仁美			
統語構造構築と音韻構造構築の統一的接近法	共同	2020年6月	新学術領域「共創言語進化」第4回領域全体会議(東京大学(遠隔会議))	那須川訓也, 田中伸一, ◎バックレイ・フィリップ, 大沼仁美			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		エレメント理論の枠組みで、構造的回帰性に関する通言語学的研究を行う。					
今年度の進捗状況		上記目標については、その研究成果を国内外の学会で発表した(「研究活動」を参照)。					
来年度の進捗目標		エレメント理論の枠組みで、初期英語の音韻論に関する通言語学的研究を行う。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							



競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2008年10月～		Congreso Internacional Phonetics and Phonology in Iberia (PaPI)	科学評議員
2005年9月～		Restrictive Phonology Research Group (RPRG)	理事
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度							
所属	文学部 英文学科	職名	教授	氏名	福士 航	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		1) 演習におけるキャリア教育 2) 演習におけるアクティブラーニングの実施					
今年度の進捗状況		1) 就職キャリア支援部から講師を招き、ゼミ生に就職セミナーを受講させた 2) 毎回、グループディスカッションを行った					
来年度の進捗目標		1)?2)について、継続して実施する					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		1) エリザベス朝演劇における演技と感情理論の関係について 2) Aphra Behn 演劇の翻訳					
今年度の進捗状況		1) 基礎研究を継続中。 2) 研究に着手した段階。					
来年度の進捗目標		1)?2)について、成果発表論文の作成					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>							
英文学科 AO委員(2017年4月から2019年3月まで)							

2020年度							
所属	文学部 英文学科	職名	教授	氏名	吉村 富美子	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
プロジェクトの学生による振り返りの実施 <Academic Writing III・IV> <英語コミュニケーション演習 I～IV>		2020年4月～		学生に行わせたプロジェクトについては、詳細な振り返りシートを作成し、それに記入させることで、自分の活動やライティングプロセスの振り返りを行わせ、どのくらい努力をしたか、自分の得意・不得意は何か等自分の特徴を確認させた。			
教員独自の学生による授業評価の実施 <英語コミュニケーション演習 I～IV>		2020年4月～		学部で実施する学生による授業アンケートに加えて、授業の効果を測定するために教員自身が考案したアンケートを実施し、授業改善に役立っている。			
授業中に学生による相互評価(peer evaluation)などの活動を取り入れた <Academic Writing III・IV>		2020年4月～		学生同士が書いた英文の途中原稿を読み合っ、お互い批評をしたり補助したりする相互評価を授業中に取り入れている。			
個別指導の実施 <Academic Writing III・IV>		2020年4月～		さまざまなジャンルの英文ライティング課題をいくつかのプロセスを分けて、一つひとつの課題を丁寧に行うことで、最終的にはまとまった英文を書くように指導している。学生には各学期3つのプロジェクトを課したが、学生の書いた1st draft一つひとつにコメントを書いたり間違いを指摘したりして個別指導を行った。			
学生によるプロジェクト実施 <英語コミュニケーション演習I～IV>		2020年4月～2021年1月		Reading-Writing-Connection Studiesの説明をした後、学生に各自興味のあるトピックについてonline情報を探して読み、その内容を自分の言葉で言い換えたり要約したりして発表原稿を作成し、presentation sessionsでその内容を英語で説明してもらった。Presentation sessionsでは、司会(chair)、発表の評価(evaluation)、時間計測(timer)等の会議に必要な役割も英語で行わせている。さらに、話し言葉を書き言葉に再度書き換えさせ、引用のルールに従ってレポートを作成させた。学生の活動が中心だが、教員は工程表作成、実施確認、途中原稿へのフィードバック等を行いプロジェクトが円滑に行われるようにガイドした。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
大学院英文学専攻課程協議会第54回研究発表会 アドバイザー		2020年12月5日～2020年12月5日		英語教育関係の大学院生の発表のアドバイザーをつとめた。			
2020年度教員採用試験対策講座		2020年7月16日～2020年7月16日		教員採用試験を受験する学生向けに東北地方における教員採用試験の傾向と対策、英語ライティング力のつけかたを講義する。			
<b>現在の課題・目標</b>		?授業内容を理解するだけで終わらずに、学生が何らかの形で応用する機会を作ること。 ?現在研究を行っているacademic Englishについての知見を授業に取り入れながら、授業内容を改善すること。 ?学生に自主学習力をつけさせること。					
<b>今年度の進捗状況</b>		?英語コミュニケーション概説Ⅱ、英語教育学Ⅰ・Ⅱでは、さまざまな概念を説明する時にそれらを体験できる活動をできるだけ取り入れながら説明するようにした。 □academic Englishを学ぶことの重要性や特徴について、英語教育学Ⅰ・ⅡやThesis writingⅠ・Ⅱ、Academic writingⅠ・Ⅱで説明し、練習問題もさせることができた。 ?英語コミュニケーション概説Ⅱの授業の中で、英語のプレゼンテーションを視聴したり、Graded readersの本を読んだりしてレポートを書かせたり、毎週英語のリスニング時間を報告させることで自主学習を行わせることができた。英語コミュニケーション演習Ⅰ～Ⅳの中でも、毎週TED presentationを視聴し、その概要を英語で説明する課題を出すことで自主学習を行わせることができた。また、すべての授業において参考文献を紹介し、興味を持った学生が文献にあたるができるようにした。					
<b>来年度の進捗目標</b>		?今年度に引き続き、授業内容を理解するだけで終わらずに、学生が何らかの形でそれを応用する機会を作る。 ?来年度も引き続き、Academic Englishをさらに効率的に教える方法を工夫する。 ?これからも、学習の自主学習を促す課題を出したり、授業内容に関連する参考文献の紹介を積極的に行うようにしたい。					
<b>II 研究活動</b>							

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	1. Academic Englishの特徴についての理解を深め、英語指導に応用する方法を模索すること。 2. Genre approachに基づく英文ライティング法について理解を深め、授業に応用すること。				
今年度の進捗状況	1. Academic Englishの指導の効果についての実証研究を実施することができた。 2. なぜアカデミックイングリッシュを学ぶべきなのかについての論文を執筆することができた。				
来年度の進捗目標	□Academic Englishの指導の効果について、さらに研究を深めたい。 ?Academic Englishについて効果的な指導法について理論と実践をまとめ、名詞化、非名詞化の練習問題等授業で活用できる資料を作成したい。				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
科学研究費補助金 英語の名詞化に着目した指導が英文読解と読解への自信に与える影響に関する研究	2020年度～2022年度	個別(研究代表者)	アカデミックイングリッシュの大きな特徴の一つに名詞化(nominalization)がある。名詞化により英文は読みにくくなるが、名詞化には情報をまとめて論理展開に寄与するという働きもある。この名詞化に着目した指導を行うことで、学生の英文読解力が高まったり英文読解への自信が深まるかを実証研究によって検証することが本研究の目的である。		
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2018年5月～		全国語学教育学会 会員			
2010年3月～		TESOL International Association 会員			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動					
教職課程センター所員、教養教育センター準備委員会委員、英語センター委員					

2020年度							
所属	文学部 英文学科	職名	准教授	氏名	井出 達郎	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
自らの問いと向きあう力の育成		2020年～		こちらから問題を与えるだけでなく、自らで問題を発見し、それに向き合う授業づくりを目指した。「演習」では、こちらから基本となる情報を伝えるほかは、テキストがどのような問いを含み、またそれを読む自分たちのどのような問いと関係しているかについて、自ら考える時間を設けた。「Academic Writing」では、エッセイとして書く内容を自分たちで決定させ、それに関連する文献なども自分で見つけながら、最終的に自分独自のエッセイを完成させるようにした。			
学生同士による学びの促進		2020年～		教員と学生の間だけでなく、学生同士の間でも双方向の学習が行われるような授業づくりを試みた。「英語II」では、全員が英語でプレゼンテーションを行い、聞いている側もその感想を英語で述べるという試みを行った。「演習」では、担当者が英語でプレゼンテーションを行い、それを受けて学生同士で少人数のグループをつくり、それぞれの意見をまとめあげてミニ・プレゼンテーションを行った。			
学生との双方向の授業づくり		2020年～		学生と双方向の関係で行われる授業づくりに努めた。オンデマンド形式の授業では毎回まとめと感想を含んだ小レポートを出してもらい、その次の授業でこちらのコメントを付すかたちでフィードバックを行った。「Academic Writing」の授業では、学習支援システムmanabaで書いたものを提出してもらい、こちらからの添削をコメントをつけて返却した。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>①学生に対するフィードバックを一人ひとりに近いレベルで行える工夫をする。</li> <li>②学生自身が自分の問いを発見するための手助けをする。</li> <li>③学生同士がお互いに刺激し合えるような環境をつくる。</li> <li>④専門科目の授業内でも英語による発言やレポート作成の機会を増やす。</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>①コロナ禍の中、Zoomの録音機能やmanabaのレポート機能を活用し、遠隔授業の形式においても一人ひとりの成果をより見やすいかたちにすることができた。</li> <li>②「演習」や「Academic Writing」においては、まず学生自身から問いを促し、こちらからはそれを発展させる手助けを行うように努めた。「英語II」においては、英語のプレゼンテーションの際に、題材を自分で見つける回を設けた。</li> <li>③「演習」「Academic Writing」「英語II」の授業において、学習支援システムmanabaを使用し、学生同士の学習成果を相互閲覧できるようにすることで、お互いから学び合うという機会をこれまで以上につくることができた。またピア・レビューの時間を増やし、授業中においても学生同士がお互いの成果について話し合える時間を設けた。</li> <li>④「演習」の担当者の発表を英語で行うように変更した。加えて、発表後に教員および授業参加者との英語による質疑応答の時間を設けた。また希望者には英語でレポート作成を行えるようにした。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>①大人数の講義においてもmanabaを活用し、特にオンデマンド形式の授業において、決まった学生だけでなく、それぞれの学生から意見を汲み取れるような工夫をする。</li> <li>②少人数と大人数の授業形態の違いも踏まえながら、問いを発見の手助けとなるようなインプットとアウトプットの機会を増やしていく。</li> <li>③特に普段自ら発言できない学生がどのようにしたら発言しやすくなるか、あるいはどのようにしたら周りに意見を伝えるかたちについて引き続き考えていく。そのために有効なmanabaの活用の仕方を探っていく。</li> <li>④単に英語を使うことで満足する段階を越え、自身の考えを述べる際に有益な表現や文章の構成を学ぶ機会も作っていく。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数	
<b>A. 学術書</b>							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
「新しい小説となり、新しい感情を掻き立て、ある種の現象を見る新しい見方さえ提示するものに」—フィッツジェラルドの長編小説	単著	2021年3月	フィッツジェラルド研究(4)	不明	pp.34-38
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	①モダニズム文学における場所のモチーフについての研究をまとめる。 ②D. H. ロレンスの作品における「宗教」の主題についての研究をすすめる。 ③「傷」というテーマから近現代英米文学作品を読みとく。				
今年度の進捗状況	①それぞれの作家の論文を大きな文脈においてまとめる作業を進めることができた。 ②University of Genoa COST projectにロレンスをテーマにした研究で参加した。 ③私立探偵というモチーフを「傷」というテーマから論じる構想を進めた。				
来年度の進捗目標	①それぞれの作家の論文を大きな文脈においてまとめる。 ②University of Genoa COST projectにおいて発表を行う。 ③「傷」というテーマからアメリカ文学の古典作品を読み解く。				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2020年4月～		日本F.スコット・フィッツジェラルド協会 編集委員会			
2019年4月～		日本ロレンス協会 編集委員会			
2017年4月～		日本F.スコット・フィッツジェラルド協会 大会・研究会準備委員会			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動					

2020年度							
所属	文学部 英文学科	職名	准教授	氏名	古川 弘子	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学生との相互理解を高める工夫		2020年		Manabaのコレクション機能や掲示板機能を利用し、学生が質問や相談をしやすい環境づくりに努めている。授業以外の相談にも随時応じるなど学生の理解に努めている。			
学生の授業理解度を高める工夫		2020年		学生の理解度を高める効果的な視覚教材の使用に加え、授業でハンドアウトや参考資料の配布、関連資料や書籍の紹介を行っている。			
学生の知識の定着を促し、伝える力を伸ばす工夫		2020年		ディスカッション、プレゼンテーション、レポートを通して「自分の頭で考え、その考えを自分の言葉で人に伝えられるようになる」ことを目指した授業を行っている。効果的なプレゼンテーションの仕方とレポートの書き方の詳細な指導も行っている。			
学生が授業主体となる工夫		2020年		「アクティブ・ラーニング」を可能な限り実践するとともに、「考えながら学ぶ」ことを目的とした授業構成により学生の主体的な授業参加を促進している。			
学生の参加意欲を高める工夫		2020年		学生の要望を授業構成に反映させたり、学生の発言やレポートの内容、毎回講義の最後にマナバのアンケートを利用して提出してもらった授業の感想や質問を授業に取り入れたりしている。これらの工夫は学生の参加意欲を高める効果があった。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学生の主体的な学習を後押しするように、授業構成と評価基準を工夫する。</li> <li>2. 学生の知識の定着、考える力と発信力を高める工夫をする。</li> <li>3. 授業時間以外にも学生からの相談があれば可能な限り話を聞く。</li> </ol>					
今年度の進捗状況		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. アクティブ・ラーニング式の内容を取り入れた結果、学生の授業参加がより主体的になった。</li> <li>2. ディスカッション、プレゼンテーション、レポートを授業と評価に取り入れることで、自分で考えをまとめ、言葉によって発信する訓練ができた。プレゼンテーションやレポートのテーマ選択にも昨年度の授業よりも自主性・独創性が見られ、成長していることがうかがえた。</li> <li>3. 学生からの相談を受けたときには可能な限り時間を割いて話を聞いた。</li> </ol>					
来年度の進捗目標		来年度も上記(1)～(3)の目標達成のために努力していく。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
『からだ・私たち自身』(1988)とリプロダクティブ・ヘルス/ライツ	単独	2021年3月	日本通訳翻訳学会・関東支部第59回例会(Zoom)	古川弘子			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							

現在の課題・目標	科研で採用された計画を基に、『Our Bodies, Ourselves』(Boston Women's Health Book Collective著, 1984)とその日本語版である『からだ・私たち自身』(『からだ・私たち自身』日本語版翻訳グループ訳, 1988)を対象として、起点テキストと目標テキストの精読を通して定量・定性分析を含む比較研究を中心に行った。		
今年度の進捗状況	研究成果を日本通訳翻訳学会・関東支部第59回例会で公募制による研究発表の機会を得て口頭発表した。また、国際学会「Gender and Transnational Reception」(英ロンドン 2020年9月)でも口頭発表をする予定であったが、新型コロナウイルスの影響により学会が中止となり発表ができなかった。ここでは「Creating New Terms for Sexual Organs: A Feminist Undertaking in the Japanese Translation of Our Bodies, Ourselves」と題した研究要旨が採択されていた。 日本通訳翻訳学会の研究プロジェクト「日本の通訳翻訳史」でも、3度のオンライン会合を開いて今後の研究方針について話し合いを行った。		
来年度の進捗目標	来年度の目標は、以下の3点である。 1. 研究成果を論文にまとめて発表する 2. 『Our Bodies, Ourselves』と『からだ・私たち自身』の比較分析をさらに進める 3. 女性のからだに関する他のテキストの日本語訳の分析などを進める		
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 科学研究費補助基盤研究(C)	2020年度～2024年度	個別(研究代表者)	
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2018年～2020年	日本通訳翻訳学会(JAITS)		
2012年～	日本通訳翻訳学会(JAITS)会員		
2009年～	PALA(Poetics and Linguistics Association)会員		
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>			



2020年度							
所属	文学部 英文学科	職名	准教授	氏名	森山 盛吉	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		1「牧師の黒いヴェール」におけるヴェールの意味 1アメリカゴシック小説の分析とゴシックの構造 2"Death in the Woods"の創作と最後の場面の解釈					
今年度の進捗状況		"Aesthetic distance in the Comic Adventure of Old Mother Old Hubbard and Her Dog"を達成したかったが、都合により、進捗がうまくいかなかった。					
来年度の進捗目標		"牧師の黒いヴェール"の論考の総まとめ "Death in the Woods"の論文を出版したい。 "Old Hubbard and Her Dog"を論文を出版する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標		1. S. Anderson, "Death in the Wood"の最後の場面の解釈をめぐって 2. N. Hawthorne "牧師の黒いヴェール"のヴェールを解釈をめぐって 3. "Old Mother Hubbard and HerDog"の変遷をめぐって、解釈の可能性を探る。 4. ナンセンスの可能性					
今年度の進捗状況		1, 2, は今年度見つけた課題。 3. はほぼ仕上がってきた。 4. は少しずつ、進めている。もう少し資料が欲しいところである、					

来年度の進捗目標	3の論文を発表したい。 1の論文を完成させたい。 2と4の論文は準備を進めたい
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2020年度							
所属	文学部 総合人文学科	職名	教授	氏名	川島 堅二	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学習支援システムmanabaによる個人指導(コレクション)、レポートの提出及び評価、教材の配信、オンデマンド授業の実践		2020年		コロナウイルスの感染予防の観点から遠隔での授業を行うことが要請された1年だった。Zoomミーティングルームを使用しているオンタイム授業は、ほぼ従来の対面授業のノウハウを利用することができたが、履修者100名を超える大人数の授業では、学習支援システムmanabaの諸機能を活用した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		(1)学部のすべての授業における双方向型授業の実践 (2)学部のすべての授業における学習支援ツールmanabaの活用 (3)「人文学演習」「論文演習」においてルーブリック評価を導入する (4)必修および選択必修のキリスト教学科目においてルーブリック評価導入の準備を行う					
今年度の進捗状況		(1)コロナウイルスの感染予防の観点から遠隔での授業であったため、すべての授業で双方向性を何らかの形で確保した。 (2)については担当する授業の100パーセントで活用できた。 (3)については「人文学演習Ⅰ・Ⅱ」において導入することができた。 (4)についてはキリスト教学担当者会において授業改善FDを行いルーブリック導入の準備を行った。					
来年度の進捗目標		(1)双方向性の内容を改善する。 (2)引き続き部のすべての授業における学習支援ツールmanabaの活用 (3)引き続き「人文学演習」「論文演習」においてルーブリック評価を導入する (4)必修および選択必修のキリスト教学科目においてルーブリック評価を導入する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
神は今も語るのかー預言カフェと新使徒運動についての批判的考察		単著	2021年3月	『人文学と神学』第18号2021年3月、『人文学と神学』第18号2021年3月		不明	pp.p.1-26
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
トランプ・カルトとキリスト教(1)『トランプ・カルトとキリスト教(1)』		単著	2021年3月	キリスト新聞社、『キリスト新聞』2021年3月11日、キリスト新聞社、『キリスト新聞』2021年3月11日、キリスト新聞社、『キリスト新聞』2021年3月11日		川島堅二	pp.04頁
ウイズコロナ時代の教会(4)『ウイズコロナ時代の教会(4)』		単著	2021年1月	キリスト新聞社、『キリスト新聞』2021年1月11日、キリスト新聞社、『キリスト新聞』2021年1月11日、キリスト新聞社、『キリスト新聞』2021年1月11日		川島堅二	pp.04頁
ウイズコロナ時代の教会(3)『ウイズコロナ時代の教会(3)』		単著	2020年11月	キリスト新聞社、『キリスト新聞』2020年11月1日号、キリスト新聞社、『キリスト新聞』2020年11月1日号、キリスト新聞社、『キリスト新聞』2020年11月1日号		川島堅二	pp.08頁

ウイズコロナ時代の教会(2)『ウイズコロナ時代の教会(2)』	単著	2020年9月	キリスト新聞社、『キリスト新聞』2020年9月11日号,キリスト新聞社、『キリスト新聞』2020年9月11日号,キリスト新聞社、『キリスト新聞』2020年9月11日号	川島堅二	pp.04頁
ウイズコロナ時代の教会(1)『ウイズコロナ時代の教会(1)』	単著	2020年7月	キリスト新聞社、『キリスト新聞』2019年7月11日号,キリスト新聞社、『キリスト新聞』2019年7月11日号,キリスト新聞社、『キリスト新聞』2019年7月11日号	川島堅二	pp.04頁
研究フォーラム報告「宗教の時代としての平成—オウム事件と摂理事件が問いかけるもの」『研究フォーラム報告「宗教の時代としての平成—オウム事件と摂理事件が問いかけるもの」』	単著	2020年6月	『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第38号2020年6月,『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第38号2020年6月,『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第38号2020年6月	川島堅二	pp.35-39
十字架なき福音！？『十字架なき福音！？』	単著	2020年5月	キリスト新聞社、『キリスト新聞』2020年5月21日号,キリスト新聞社、『キリスト新聞』2020年5月21日号,キリスト新聞社、『キリスト新聞』2020年5月21日号	川島堅二	pp.04頁
預言が当たるワケ『預言が当たるワケ』	単著	2020年4月	キリスト新聞社、『キリスト新聞』2020年4月1日号,キリスト新聞社、『キリスト新聞』2020年4月1日号,キリスト新聞社、『キリスト新聞』2020年4月1日号	川島堅二	pp.04頁

E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)

G. 学会における研究発表

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	(1)専門分野での論文を執筆する (2)査読付き学術雑誌への投稿 (3)学会での研究発表を1回は行う
今年度の進捗状況	(1)1本の論文を執筆できた (2)査読付き学術雑誌への投稿はできなかった (3)学会での研究発表はできなかった
来年度の進捗目標	(1)専門分野での論文を執筆する (2)査読付き学術雑誌への投稿 (3)学会での研究発表を行う

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2020年9月～		日本脱カルト協会顧問 委員	
2016年9月～		日本基督教会	
2005年4月～		日本宗教会	

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

文学部総合人文学科長として学科の運営管理に携わった。

2020年度							
所属	文学部 総合人文学科	職名	教授	氏名	木村 純二	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		2018年度から本学に着任し、新たに担当する科目も多いので、学生の学力や受講態度に適切に対応した15回分の授業の流れを、担当するすべての科目に関して作り上げることがこれまでの課題であった。この課題はおおよそ達成することができたので、現在は、学生の理解度を適宜把握しながら、習熟度を高めてゆく授業運営の工夫が課題である。					
今年度の進捗状況		今年度は、新型コロナウイルス感染症対策のため遠隔で授業が実施されることとなり、その対応に追われることとなった。しかし、その中で、manabaやGoogleフォームを活用した学生のコメント収集の技法に習熟することができ、一定の成果を収めたと言える。					
来年度の進捗目標		毎回の授業でmanabaやGoogleフォームを活用して学生の関心や理解度を把握しつつ、次の授業に還元してゆくアクティブ・ラーニングの授業体制を、担当する各科目について確立させてゆくことが次の課題だと考えている。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		1. 和辻哲郎に関する論文集を責任編集担当者として企画しており、刊行に向けて、自分の原稿の執筆、他の執筆者からの原稿受領、出版社との交渉を進める。 2. これまでの日本倫理思想史に関する自分の論文をまとめて、単著として出版する。 3. 日本倫理思想史におけるキリスト教について、基礎的な知見を得つつ、自身の立場を明確にする。					
今年度の進捗状況		「1」については、来年度中に刊行する目途が立ち、論文の寄稿者や編集者と話し合いながら進めている。 「2」については、出版社の担当編集者と相談の上、全体の概要がほぼでき上がり、科研の出版助成を申請した状況で、計画通り順調に進んでいる。 「3」については、本学の紀要に論文1本と報告1本を掲載することができ、計画以上に進捗したと言える。					
来年度の進捗目標		「1」については、来年度中に確実に刊行する。 「2」については、出版助成申請の可否によるが、仮に採択されなくても原稿の執筆を進め、いつでも出せる状態にまで準備しておく。 「3」は、このまま順調に進めてゆきたいと考えている。 そのほかに、「4」として、『葉隠』に関する論文集の企画を立案しており、出版社との交渉、原稿の執筆依頼などを進めてゆきたい。 また、「5」として、伊藤仁斎に関する自分の研究をまとめてゆくことにも着手したいと考えている。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			

科学研究費補助金 科研費基盤研究(B)	2016年度～2019年度	個別(研究分担者)	家族・経済・超越——近現代日本の文脈からみた 共同体論の倫理的再検討(研究代表者:熊野 純彦、東京大学大学院)
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2019年10月～		日本倫理学会年報編集委員会	
2017年4月～		日本倫理学会	
2008年11月～		日本思想史学会 会員	
2004年4月～		東北哲学会 会員	
1997年4月～		日本倫理学会 会員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
・入試委員			

2020年度							
所属	文学部 総合人文学科	職名	教授	氏名	出村 みや子	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		専門分野の古代アレクサンドリア研究や古代教会史におけるジェンダー問題に関する研究を推進すると共に、次年度の準備をする。					
今年度の進捗状況		専門分野のオリゲネスの『ケルソス駁論III』の翻訳原稿を完成させ、現在解説を執筆している。外部機関からの依頼原稿のうち、12月に発行された日本宗教史研究会の『宗教史学論叢26 越境する宗教史 下』に論文を寄稿した。また上智大学中世思想研究所から刊行予定の『原罪論で紡ぐキリスト教思想』に寄稿し、校正を終えた。					
来年度の進捗目標		『新版 キリスト教事典』の項目を執筆している。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
「古代アレクサンドリアの学術研究の系譜に見る「越境」の問題」		単著	2020年12月	日本宗教史研究会『宗教史学論叢』(第26巻「越境する宗教史 下」)、日本宗教史研究会『宗教史学論叢』(第26巻「越境する宗教史 下」)		編者 久保田浩・鶴岡賀雄・林淳・◎深澤英隆・細田あや子・渡辺和子	pp.161-191頁
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		オリゲネスの研究を中心に、古代教会史におけるジェンダー理解に焦点を当てて研究を進める。					
今年度の進捗状況		日本宗教史研究会より依頼された「越境する宗教史」の特集号にジェンダー論の立場から寄稿した。また上智大学中世思想研究所から依頼されたアウグスティヌスの原罪論に関する論文を提出したが、(今年度内の予定であった)刊行が遅れ、次年度前半には刊行の予定である。					
来年度の進捗目標		『新版 キリスト教大事典』(教文館)の項目の執筆を行う。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標							



今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	
キリスト教文化研究所所長	

2020年度							
所属	文学部 総合人文学科	職名	教授	氏名	野村 信	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		1、受講生たちが良く理解出来たと実感できるように教授すること、理解度、満足度を客観的に確認する作業を検討している。 2、受講生たちが、講義内に、講義後に、今よりもっと多く質問することを期待している。 3、授業評価(アンケート)の評定値を全科目平均で4.0以上を目指す。					
今年度の進捗状況		1の満足度に関しては、コメントシートを配布し学生の意見を聞いている。徐々に効果があがっている。 2に関しては、時々学生たちから質問を受けるが、授業中に積極的になるように期待している。 3に関しては、達成できない科目が複数あった。					
来年度の進捗目標		1、引き続きコメントシートを用いて、学生たちの声を聴くように努める。 2、用紙に書かせるとかかなり多くの質問があり、来年度もその方向も取り入れる。 3、引き続き、目標に達するように努めたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
『恵によって』カルヴァン説教(エフェソ書)第3巻 編集主幹・共訳 アジア・カルヴァン学会		共著	2020年6月	キリスト新聞社, キリスト新聞社, キリスト新聞社	不明	pp.0	
『恵によって』カルヴァン説教(エフェソ書)第3巻 編集主幹・共訳 アジア・カルヴァン学会』							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		1、専門書の出版を進める。 2、専門分野に関する調査、執筆を進め、随時発表しつつ意義を広める。					
今年度の進捗状況		1、共著で専門書を発行できた。 2、調査は一つ実行できた、専門分野の発表はまだ不足している。					
来年度の進捗目標		1、学内紀要に専門の論文を発表したい。 2、さらに調査を進めたい。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
宗教部長として学内の宗教活動全般の責任を担い、統括している。			

2020年度							
所属	文学部 総合人文学科	職名	准教授	氏名	原田 浩司	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2020年度は特別研究休暇(サバティカル)のため、教育の実践的業務を免除された。		2020年4月1日～2021年3月31日					
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		アクティブ・ラーニング式教授法の導入					
今年度の進捗状況		小規模教室(受講者30名未満)では、試行錯誤しつつも積極的に取り入れているが、大規模教室(受講者120名以上)では、今なお試行錯誤が続いている。					
来年度の進捗目標		大規模教室での、その教科に相応しいかたちでの、自己流のアクティブ・ラーニング・スタイルの確立と展開の模索を継続する。講義の内容の見直し、更なる改善に取り組む。1年次後期の「キリスト教の歴史と思想」の共通シラバスに即して講義内容を文章化して整理し、書籍化に取り組む。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
ドナルド・K・マッキム著『カルヴァンと共に祈る日々』『一麦出版社』		単訳	2020年9月	一麦出版社		原田 浩司	pp.1-228
ドナルド・K・マッキム著『カルヴァンと共に祈る日々』(Donald K. McKim, "Everyday Prayer with John Calvin", P&R, 2019)『ドナルド・K・マッキム著『カルヴァンと共に祈る日々』(Donald K. McKim, "Everyday Prayer with John Calvin", P&R, 2019)』		単著	2020年9月	一麦出版社, 一麦出版社, 一麦出版社		不明	pp.四六版 総224頁
ドナルド・K・マッキム著「パンデミックの中で思いをめぐらすこと」(折込パンフレット: 出版社の公式HP上にて公開 <a href="https://www.ichibaku.co.jp/pondering_in_the_pandemic.pdf">https://www.ichibaku.co.jp/pondering_in_the_pandemic.pdf</a> ) 『ドナルド・K・マッキム著「パンデミックの中で思いをめぐらすこと」(折込パンフレット: 出版社の公式HP上にて公開 <a href="https://www.ichibaku.co.jp/pondering_in_the_pandemic.pdf">https://www.ichibaku.co.jp/pondering_in_the_pandemic.pdf</a> )』		単著	2020年8月	一麦出版社, 一麦出版社, 一麦出版社		不明	pp.総4頁
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		スコットランド宗教改革研究のさらなる深化と研究領域の拡大。特に「スコットランド信仰告白(1560年)講解」の書籍化に向けた取り組みがやや停滞しているため、引き続き研究と執筆を進めていきたい。					

<p>今年度の進捗状況</p>	<p>2015-2017年度に連載執筆した「スコットランド信仰告白」(1560年)の講解の単行本化に向けて、オリジナルの寄稿文章をベースにさらなる検証・推敲を行っているものの、講義に追われ、進捗はやや停滞ぎみである。</p> <p>今年度は『苦難と救済』(教文館、2020年:私学助成ブランディング事業の共同研究)に分担執筆者として、17世紀のスコットランドの「契約派(カペナンター)」に照明を当て、国王の命令による迫害期間、いわゆる「虐殺時代(Killing Time)」と呼ばれる期間に彼らが被った苦難と試練について、歴史神学的観点から研究し、寄稿した。これまで十分には知られていないカペナンターと呼ばれる信仰者たちの信仰についてわが国では先行研究はないため、今後スコットランドの17世紀の教会史の解明の展開に、多少でも貢献できたのではなかろうか。</p> <p>現在、日本基督教学会と教文館で行っている『キリスト教大事典』の改定作業では27の小項目について執筆を担当した。古代・中世・宗教改革期の、おもにスコットランドやイングランド、北欧地域に関する多岐にわたる項目を担当した。</p>		
<p>来年度の進捗目標</p>	<p>「スコットランド信仰告白講解」の書籍化(日本基督教団全国連合長老会出版委員会)に向けて、更なる加筆を行っていく。</p> <p>また、改革者ノックスの次世代となる「第二世代」の改革者R・ブルースによって執筆された書物の翻訳を書籍化し、刊行できるよう、訳文を精査していく。</p> <p>さらに、16世紀スコットランドの宗教改革において、①特に改革者アンドリュー・メルヴィルが学長を務めたグラスゴー大学とセント・アンドリュース大学において神学教育をはじめ「大学の教育改革」がどのように実施されたのかを調査すると共に、②「教会の礼拝改革」が「ノックスの礼拝式文(The Liturgy of John Knox)」の導入によってどのように変化したのかを調査し、それらの調査と研究の成果を論文に整理する。</p>		
<p>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</p>			
<p>競争的資金の名称</p>	<p>採用年度(西暦)</p>	<p>個別・共同の区分 共同の場合の役割分担</p>	<p>概要</p>
<p>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</p>			
<p>2020年</p>	<p>日本基督教団の教会における礼拝説教(仙台東六番丁教会、石巻山城町教会、岩沼教会)(日本基督教団の教会における礼拝説教(仙台東六番丁教会、石巻山城町教会、岩沼教会))</p>		
<p>2011年6月～</p>	<p>日本基督教学会 会員</p>		
<p>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</p>			
<p>展覧会・演奏会・競技会等の名称</p>	<p>場 所</p>	<p>開催年月日(西暦)</p>	<p>発表・展示等の内容等</p>
<p>現在の課題・目標</p>			
<p>今年度の進捗状況</p>			
<p>来年度の進捗目標</p>			
<p>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</p>			
<p>1.大学宗教主任、2.学生委員、3.奨学会運営委員、4.大学要覧(シラバス)編集委員、5.東北学院史資料センター運営委員、6.文学部入試管理委員、7.教員資格審査委員、8.「授業改善のための学生アンケート」実施委員</p>			

2020年度							
所属	文学部 総合人文学科	職名	准教授	氏名	吉田 新	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
参加型授業への工夫		2020年4月～2021年3月		コロナの渦で急遽、オンライン授業に切り替わり、大規模授業である1年次「聖書を学ぶ」「キリスト教の歴史と思想」、3年次「キリスト教学Ⅱ(キリスト教と現代)」「キリスト教学Ⅱ(キリスト教と文化)」はオンデマンド授業を提供することになり、これまで試みてきた双方向授業の運営が困難になった。授業内レスポンスや課題レポート等を用いながら、可能な限り、受講者の意見を取り入れた授業配信を試みたが、課題も多く見出された。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①「キリスト教学」における参加型授業に工夫 ②フィールドワークを取り入れた論文演習(歴史資料と直に触れ合う指導を試みる) ③初年次から卒業論文指導 ④「新葉聖書概説」の教科書作成 ⑤「キリスト教学」の教科書作成					
今年度の進捗状況		①オンデマンド授業においては、参加型の授業を構築することは困難であった。 ②コロナ禍において、フィールドワークを取り入れた論文演習は実施できなかった。 ③1年次の「総合人文学の基礎」においては、卒業論文を意識した授業を提供した。 ④今年度も教科書作成のための資料を収集している。次年度以降に出版を計画している。 ⑤教科書作成のための時間を取ることができなかった。次年度以降に取り組みたい。					
来年度の進捗目標		①オンライン授業においても、参加型授業を可能か模索したい。 ②コロナ感染症の収束後、フィールドワークを取り入れた授業を提供したい。 ③次年度も、「総合人文学の基礎」において、卒業論文を意識させる授業運営を行いたい。 ④次年度以降も本格的に執筆に取り組みたい。 ⑤初年次も「キリスト教学」(「聖書を学ぶ」他)で使用する教科書の執筆に取り組みたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
『Hoffnung inmitten der Katastrophe. Untersuchung zum psychologischen Aspekt der Passionsgeschichte Jesu.』	共著	2020年	Vandenhoeck + Ruprecht Brill Deutschland GmbH	U.E.Eisen/H.E. Mader(Hg.), Talking God in Society Muktidisciplinary (Re)constructions of Ancient (Con)texts. Festschrift for Peter Lampe, Volume 1, Theories and Application	pp.317-385		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
新約聖書における石のメタファーとキリスト論 『隅の親石』『躓きの石』 『生ける石』をめぐる考察	単著	2020年	東北学院大学『キリスト教文化研究所紀要』第38号	未記入	pp.17-33		
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
希望への新生 - 第一ペトロ書1章3-12節の考察 -	単著	2020年	東北学院大学ヨーロッパ文化総合研究所『ヨーロッパ文化史研究』第21号	未記入	pp.53-78		

D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)			
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)			
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標		①『ペトロの第一の手紙』研究 『I ペトロの書』の釈義を進めている。 ②和訳聖書翻訳史の研究 和訳聖書翻訳、とりわけ日本聖書協会に所蔵されている聖書翻訳に関する歴史資料の分析を進めている。 ③初期キリスト教における殉教論に関する研究を進める。	
今年度の進捗状況		①本年度も継続して『ペトロの第一の手紙』の釈義を発表した。 ②本年度も日本聖書協会に所蔵されている聖書翻訳に関する歴史資料の調査を継続し、口語訳についての調査結果について発表した。 ③初期キリスト教における殉教に関しては今年度は進捗状況がない。	
来年度の進捗目標		①引き続き『ペトロの第一の手紙』の釈義を発表し、全体の総括に取り組む。 ②次年度はこれまでにを行った調査をまとめる作業に移りたい。 ③初期キリスト教における殉教論について、使徒教父文書を中心に研究を前進させる。	
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2017年4月～		日本基督教学会東北支部幹事 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
宗教部 国際交流部			

2020年度							
所属	文学部 総合人文学科	職名	講師	氏名	田島 卓	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
manabaの掲示板を活用した双方向学習支援		2020年9月1日～		学生の学習状況を確認し、遠隔授業で欠落しがちな学生相互のつながりの構築のために、各階の小レポートに替えて、掲示板に小レポートと同程度の文章を投稿してもらい、学生相互のやりとりを活性化した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		大教室での授業環境の保持・改善。 大教室でのアクティブ・ラーニングの促進。					
今年度の進捗状況		大教室講義での積極的な授業参加を促すための事前の課題設定、復習での意欲づけを行うことに難がある。					
来年度の進捗目標		事前の課題について、難易度を再検討し、意欲や成功体験を高めることを目指す。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		苦難の記憶と伝承に関する旧約諸テキストの哲学的解釈を進める。					
今年度の進捗状況		イザヤ書53章「苦難の僕」における研究史に関連して資料の収集を進めた。					
来年度の進捗目標		イザヤ書における「主の僕の詩」において、出エジプト記およびレビ記との関連を探りつつ、研究史に関連する資料収集を継続する。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							
教務委員							





2020年度							
所属	文学部 総合人文学科	職名	助教	氏名	藤野 雄大	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
すべての担当科目で4以上の総合評価を受けた。		2020年4月1日～2021年3月31日		遠隔授業の中で、シンプルで学生の負担にならない授業形態を心がけた。学生のコメントや質問にも毎週できるだけ丁寧に返答した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		遠隔授業下でのわかりやすい授業					
今年度の進捗状況		授業評価アンケートで「授業の解説が丁寧、分かりやすい」などのコメントを複数の学生から受けた。					
来年度の進捗目標		遠隔授業から平常授業に移行しても、一層、分かりやすい授業を心がける。知識だけでなく、キリスト教的生き方、考え方についても伝えていきたいと考えている。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
「キリストの信条」ーフィリップ・シャフの終末論的キリスト教再一致の展望		単著	2021年3月	東北学院大学論集『人文学と神学』第18号, 東北学院大学論集『人文学と神学』第18号	不明	pp.41-60	
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
Samuel S. Schmuckerのエキュメニズム思想とアメリカ・ルター主義の展開		単独	2021年3月	歴史神学研究会発表(2021年3月22日、zoomによる遠隔開催)(不明)	不明		
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		19世紀アメリカにおけるキリスト教のアメリカ化についてプロテスタント諸教派の具体的事例を取り上げ、理解を深める。					
今年度の進捗状況		ドイツ改革派およびルター派における上記の事例を論文にまとめた。					
来年度の進捗目標		長老派や会衆派の例も研究していきたいと考えている。またマーサーズバーグ神学における聖餐論についても理解を深めたいと考えている。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要	
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所		開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等	

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>	
大学宗教主任、学生委員会、奨学金委員会、史資料センター所員、	

2020年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	小沼 孝博	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
オンライン授業用教材の作成		2020年4月～2021年3月		新型コロナ・ウイルスの防疫措置に対応し、ハイブリッド形式を含むオンライン授業用の授業ビデオ及び配布資料を作成した。			
授業用プリント		2020年		講義では各回A3の授業用プリントを配布した。左半分に講義レジュメ(テーマ、①～③の小見出し、内容に関わるキーワード)、右半分に講義内容の理解を助ける史料・地図・図版・写真を掲載し、この形式をすべての担当講義で統一している。本年度は特にオンライン授業の形式にあわせるべく、内容や資料の調整(図版のカラー化など)を進めた。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
文化講座における講師担当		2020年6月～2020年9月		NHKカルチャーセンター仙台校において、「変わりゆく“シルクロード”―歴史と現在―」と題する講座を担当した。			
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・新カリキュラムの講義形式の授業における授業レジュメを作成する。</li> <li>・講義形式の授業の体系化を進める。</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>・1年生対象の講義科目において、講義内容の取捨選択を行い、講義レジュメを改訂した。</li> <li>・専門購読において学生のスムーズな理解を導くため、文法説明のプリントを作成した。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業アンケートの結果を反映させ、順次授業内容の見直しを進める。</li> <li>・専門購読の内容変更に伴う授業内容の体系化をさらに進める。</li> <li>・授業の進捗や受講生の理解度にあわせ、柔軟に対応する。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
<新刊紹介>細谷良夫著『清朝の史跡をめぐってI:清朝全土編』		単著	2021年3月	『アジア流域文化研究』, 12	小沼 孝博	pp.106	
<新刊紹介>塩谷哲史著『転流:アム川をめぐる中央アジアとロシアの五〇〇年史』(ブックレット《アジアを学ぼう》52)		単著	2021年3月	『内陸アジア史研究』, 36	小沼 孝博	pp.52-53	
G. 学会における研究発表							
天山を越えて:ムザルト峠とその役割		単独	2021年2月	研究会「ユーラシア遊牧民の地図史」(不明)	東北大学東北アジア研究センター(Online)		
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・近世～近代の中央アジア社会に関する史料を集積・分析する。</li> <li>・科研費の研究課題・計画をふまえ、成果を国内外に広く発信する。</li> </ul>					

今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍の影響により国内外での資料調査が実施し得ず、研究活動は著しく停滞した。</li> <li>・唯一、北方交易の資料・史跡調査を北海道で実施することができ、一定の成果を得た。</li> </ul>		
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国内外の研究機関・図書館における調査に力点を置く。</li> <li>・在外研究の成果を踏まえ、研究成果の公開を進める。</li> </ul>		
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
競争的資金等の外部資金による研究 東北大学 東北アジア研究センター公募型共同研究	2019年度	共同(研究分担者)	
科学研究費補助金 文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)	2019年度～2023年度	共同(研究分担者)	
科学研究費補助金 文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	
競争的資金等の外部資金による研究 第48回 (2019年度)三菱財団法人科学研究助成	2018年度～2020年度	共同	
科学研究費補助金 文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)	2017年度～2020年度	共同(研究分担者)	
科学研究費補助金 文部科学省科学研究費補助金(基盤研究C)	2016年度～2020年度	個別(研究代表者)	
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2016年10月～2020年9月		NHKカルチャー仙台教室講師(NHKカルチャー仙台教室) 講師	
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「学生による授業評価」実施委員会 委員</li> <li>2. グループ主任(2016年度歴史学科入学生)</li> <li>3. 学生相談室 兼任カウンセラー</li> <li>4. 就職キャリア支援部副部長</li> </ol>			

2020年度								
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	河西 晃祐	大学院の授業担当の有無	有	
<b>I 教育活動</b>								
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要				
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>								
オンデマンド型キャリア教育の実施		2020年～		3年次前期科目「近現代日本と東アジア」の講義に際して、3年生の就活支援のために「就活動画」を作成し、学生への就活支援を行った。				
オンライン・アクティブ・ラーニングの一環として、一次史料解説の課題を提示し、毎回提出させている。		2020年～		毎回の講義中に、アクティブ・ラーニングの一環として、一次史料に関する課題を提示し、周囲の学生らと話し合いながら課題解決に至る時間を設け、必ず課題を提出させている。				
オンデマンド型講義動画の作成		2020年～		コロナウィルスの流行により、大講義はオンデマンド型講義となったので、映像・画像資料などを取り入れた講義動画を作成した。				
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>								
オンデマンド型講義動画の作成		2020年～		前期に2本、後期に1本の講義動画を作成した。				
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>								
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>								
第26回FD研修会での講演		2020年12月10日		2020年12月10日に開催された第26回FD研修会において講師を務めた				
現在の課題・目標		1: 時事問題と歴史事象との関連を意識的に講義中に取り入れる。 2: 卒業論文指導をきめ細かく行う。 3: 「論文指導」履修学生への就職支援を積極的に行う。						
今年度の進捗状況		1: 3年次開講科目「近現代日本と東アジア」においては、オンデマンド型講義の特性を生かすために、画像資料を豊富に取り入れ、一次史料の読解を中心とする課題を毎回課し、翌回にはそれへのレスポンスを紹介することで、学生との応答に努めた。 2: 3年生前期には卒論テーマの決定を行い、後期には卒論の「はじめに」を提出させた。そのために三年次前期から史料リストの作成や、章立ての報告、後期には卒業生の提出した卒業論文を課題として取り上げるなど、4年次の就職活動の長期化を見据えて早期からの卒業論文執筆が可能なように、きめ細かな指導を行った。また4年生に対しても就職活動を見据えながら各自のペースに合わせて指導を行い完成度の高い卒論を提出させることができた。 3: 内定者による「就職活動報告会」を2回、ゼミOB、OGによる「就職者懇談会」を1回開催し、ゼミ 3年生の就職意識を高めると同時に、実際に就活を行っている4年生の個別相談にも積極的に応じることで、ゼミ生の就職率で100%の就職率を得ることができた。						
来年度の進捗目標		1: オンデマンド型講義の特性を生かした講義を行う。 2: オンデマンドにおいても、レスポンスの紹介などによって学生との応答を積極的に行う。 3: 来年度も継続して、卒業論文指導をきめ細かく行う。 4: 来年度も継続して「総合演習」、「論文演習」履修学生への就職支援を積極的に行う。						
<b>II 研究活動</b>								
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)		発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書								
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)								
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)								
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文								
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)								
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)								
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)								
G. 学会における研究発表								
H. 翻訳(学術書や原典等)								
I. 特許								

現在の課題・目標	1: 自己の専門分野に関する論文を執筆する。 2: 学内史料の調査と保存活動を行う。		
今年度の進捗状況	今年度はオンデマンド型講義の準備に時間を取られ、研究時間を確保できなかった。		
来年度の進捗目標	1: 次著作の刊行に向けて、資料収集を進め、その一部を論文として執筆していく。 2: 学内史料の調査を進め、その成果を広く一般に公開していく。		
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2017年4月～		日本植民地研究会 理事	
2017年4月～		日本植民地研究会理事(日本植民地研究会理事就任(現在に至る))	
2009年4月～		岩沼市史編纂 委員	
2007年4月～		NPO法人宮城歴史史料保全ネットワーク 理事	
2007年4月～		東北史学会	
2007年4月～		NPO法人宮城歴史史料保全ネットワーク理事(NPO法人宮城歴史史料保全ネットワーク理事就任(現在に至る))	
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
1: 東北学院大学文学部歴史学科長就任(2019年4月) 2: 東北学院史資料センター長就任(2015年4月)			

2020年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	菊池[柳谷] 慶子	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
地域の歴史・文化財調査と成果報告の実践		2020年～		「総合演習Ⅰ」「同Ⅱ」では仙台市宮城野区新浜地区の復興まちづくりを支援する取り組みに参加し、地区内の石碑調査、および生活文化の聞き取りをおこない、その成果を町内会主催の学習会で報告した。また教養学部平吹ゼミと合同で新浜の自然と歴史をたどる現地巡見を行い、町内会が主催するフット・パスやワークショップの開催に協力する活動を展開した。これらを振り返り記録するパワーポイントをその都度、ホーイ記念館のコラトリエで作成しており、全体を通してアクティブラーニングを全面展開する授業としている。			
史跡・文化財を巡見する学外実習の実施		2020年～		「総合演習Ⅰ」「同Ⅱ」では日本近世史を学ぶアクティブラーニングの一環として仙台北城跡および城下の武家地、町人地、社寺、瑞鳳殿など伊達家の墓所を巡る市内巡見を継続して実施している。事前・事後の学習にはホーイ記念館のコラトリエを活用しており、当日の巡見と合わせて学生の自主的な学びの促進を図っている。			
教員自身の個々の授業での「学生による授業評価」の実施		2010年7月～		学部で実施する「学生による授業評価」に加えて、独自に授業の効果と達成度を調べるアンケートを実施し、自己点検をおこなっている。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
毎時間の配布資料の作成		2010年4月～		講義、専門史料講読ともに市販の研究書をテキストや参考書に用いるほか、テーマに合わせて独自にプリントを作成し、教材として配布している。			
パワーポイントによる視覚教材の作成		2010年4月～		講義科目では独自に撮影した史跡、文化財、古文書等の写真を中心にパワーポイントを作成し、視覚的に理解を深めるための教材としている。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
仙台市宮城野高等学校で出張講義		2020年12月5日		「江戸時代の文字を読もう」と題して1年生を対象に講義を行った。			
仙台市宮城野区新浜町内会主催「貞山運河境界の暮らしと新浜フットパス2020」講師		2020年11月22日		「松葉さらいの歴史ミニ講座」と題して海岸林資源を利用する「松葉さらい」の慣行について解説した。会場は仙台市宮城野区新浜地区「みんなの家」。			
<b>現在の課題・目標</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>①必修科目「論文指導」は学生全員がそれぞれ定めたテーマで卒業論文を完成できるように3年次からテーマ設定、関係文献および史料の収集、史料解説に丁寧な指導を施す。</li> <li>②「専門史料講読」は学習成果の一部を大学博物館の展示として公表する。</li> <li>③ゼミの学習・活動では4年生と3年生の交流を図り、学生相互の学び合いによる知識と理解の深化をめざす。</li> <li>④就職活動の支援では4年生の体験が3年生に十分に伝えられるよう、交流機会を増やす。</li> </ul>					
<b>今年度の進捗状況</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>①ゼミ生全員が1月中旬に論文を完成させ、3年ゼミ生に向けて報告会を実施した。大半の学生が一次史料を使い立論・検証を行うことができたが、論理展開の不十分な論文もある。次年度も授業計画を見直しながらい指導を進める。</li> <li>②前年度に引き続き仙台市宮城野区新浜で石碑の調査、および衣食住の暮らしに関して聞き取り調査を実施し、地元で報告会を行ったが、これをパネルで展示する準備を行っている。</li> <li>③日頃のゼミ学習の時間のほか、学年を超えて交流する機会を設けた。</li> <li>④就職活動報告会を開き、4年生から3年生へ経験を伝える機会とした。</li> </ul>					
<b>来年度の進捗目標</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>①4年生全員が期日までに卒論を完成できるよう、月ごとに進捗状況を確認し、特に史料解説の助言に力を入れる。</li> <li>②本学所蔵文書を使い学生企画の古文書展示を継続して実施する。仙台市新浜での歴史調査をさらに継続して行う。</li> <li>③ホーイ記念館のコラトリエ、個人研究室を有効に使い、学生相互の交流を増やせるように努める。</li> <li>④就職活動の体験談は3年生に大きな刺激を与えており、交流の機会を増やす。</li> <li>⑤大学院生の修士論文の完成に向けて史料収集と解説に助言を与え研究の推進を支援する。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		



A. 学術書					
第六章 暮らしと災害『岩沼市史編纂室編『岩沼市史2 通史編Ⅱ近世』』	共著	2021年3月	今野印刷株式会社	菊池慶子	pp.272-325
『岩沼市史 通史編Ⅱ近世』	共著	2021年3月	今野印刷株式会社	菊池慶子 ほか11人	pp.272-325
岩沼市史 近世編『岩沼市史 近世編』	共著	2021年3月	岩沼市, 岩沼市, 岩沼市	岩沼市史編纂室	pp.第5章 暮らしと災害 (pp272-325)
企画展示 性差の日本史『企画展示 性差の日本史』	共著	2020年10月	一般財団法人歴史民俗博物館振興会, 一般財団法人歴史民俗博物館振興会	柳谷慶子他25名	pp.※制限文字数100文字を超えたので『概要』へ移行。
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
クロマツ海岸林に支えられた新浜の暮らし『岡浩平, 平吹喜彦編『大津波と里浜の自然誌』』	共著	2021年3月	蕃山房	菊池慶子	pp.94-98
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	①科学研究費助成事業(基盤研究C)および公益財団法人日本生命財団助成研究で課題とした海岸林の歴史解明に関する調査研究を継続して行い, 成果を論考にまとめる。また新たな史料発掘とその分析を進める。 ②国立歴史民俗博物館基盤研究Cに関わるジェンダー史研究の分担研究, および展示の準備。 ③武家の奥女中の職制・任務に関する史料収集・解説と書籍執筆。 ④『岩沼市史 近世編』『同 震災編』の分担執筆。				
今年度の進捗状況	①予定した国立国会図書館, 都立中央図書館等での関係文献の収集はコロナ禍で実施できなかったが, 成果を公表する論文1本を書き上げた。 ②展示を準備し, 解説書の担当部分を分担執筆した。 ③関係文献・史料の収集を継続したが, 執筆は進まなかった。一方, 関係史料の一つである「伊達家奥方日記」の書誌的考察を行い, 共著の論考として仕上げた。 ④近世編については担当章を執筆した。震災編は史料の収集を行い分析を進めることができた。				
来年度の進捗目標	①海岸林の歴史研究については日本海側と比較する調査研究を進め, 名称の推移を検討する論考をまとめる。 ②大名家奥女中に関する研究の執筆を進め, 併せて新史料を発掘する調査を進める。 ③『岩沼市史 震災編』は担当分を執筆する。 ④近世ジェンダー論に関して依頼されている原稿の執筆, 講演の準備を進める。				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2020年3月～		比較家族史学会 理事			
2019年11月～		秋田県文化財保護審議会 委員			
2017年11月～2021年3月		仙台城跡保存活用計画等検討委員会 副委員長			
2016年4月～2021年3月		東京大学史料編纂所協議会 委員			
2013年4月～2021年3月		岩沼市史編纂専門部会 調査執筆委員			

2012年4月～	宮城県文化財保護審議会 委員		
2007年4月～	NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク理事(NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク理事)		
2004年12月～	東北都市学会 会員		
2004年12月～	ジェンダー史学会 会員		
2001年～	東北史学会 評議員		
2000年4月～	日本民俗学会 会員		
1990年4月～	女性史総合研究会 会員		
1987年10月～	東北史学会 会員		
1986年6月～	宮城歴史科学研究会 会員		
1982年4月～	総合女性史学会 会員		
1982年4月～2021年10月	日本史研究会 会員		
1981年4月～	比較家族史学会 会員		
1978年4月～	歴史学研究会 会員		
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	楠 義彦	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
ヨーロッパ中近世社会史(オンデマンド)		2020年4月～		ヨーロッパ中近世社会史の講義をオンデマンドで受講できるように動画を作成した。			
パワーポイントの利用(新型コロナへの対応でZoomを用いて行う)		2020年～		従来、パワーポイントを利用してきたが、今年度は新型コロナへの対応のため、Zoomを通じての画面共有で行った。「ヨーロッパ史専門講読Ⅲ」の授業で、エリザベサン・セクレタリイ・ハンドの文字の判読を指導するために補助的に使用している。			
パワーポイントの利用		2018年～		「ヨーロッパ史専門講読Ⅲ」の授業で、エリザベサン・セクレタリイ・ハンドの文字の判読を指導するために補助的に使用している。			
授業評価の実施		2017年4月1日～		学科で決定したすべての授業で実施している。			
独自に作成した資料の配布		2017年～		「ヨーロッパ中近世社会史」の授業で、授業内容を図式的に理解できるように工夫している。特に一人ひとりが資料を読み取った結果を、少人数のグループで検討させ発表させている。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
東北学院大学文学部歴史学科編『大学で学ぶ東北の歴史』		2020年～		コラム4「日本地震学会とイギリス人の地震観」95-96頁			
授業内容のレジュメの作成と配布		2010年1月～		学生の理解を深め定着させるために、授業での板書とは別にレジュメを配布している。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
2020年度から実施するTGベーシック科目「読解・作文の技法」の授業案に基づき、マナバのプロジェクトを積極的に利用し、学生相互の意見交換を促した。		2020年5月1日～		本来、多人数での授業をグループワークで行う予定が、新型コロナへの対応でできなくなった。代替策としてマナバのプロジェクトを用い、受講生を9プロジェクトに区分して、随時用いれるプロジェクト内の掲示板として活用した。オンタイムで教員側からコメントや提案を続け、授業の充実につながった。			
<b>現在の課題・目標</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の授業理解を常に確認する。</li> <li>・文章の精読のレベルの向上を図る。</li> <li>・意欲的な授業への取り組みを図る。</li> <li>・問題解決型の研究ができるように質疑応答している。</li> </ul>					
<b>今年度の進捗状況</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・鋭意努力中である。</li> <li>・読解を示すレジュメへの反映を通じて、確実な向上が見られる。</li> <li>・進展がみられる。</li> <li>・個々の学生のレベルの違いに対応するため、授業以外に毎週2時間程度個人指導を行い、卒業論文作成に大いに効果があった。</li> <li>・卒業論文集を作成し、それに基づき、新型コロナ感染拡大中であるが、オンラインで卒業論文報告会を開催することができた。</li> </ul>					
<b>来年度の進捗目標</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の授業理解を常に確認する。</li> <li>・文章の精読のレベル向上を図る。</li> <li>・意欲的な授業の取り組みを図る。</li> <li>・考える力の向上を図る。</li> <li>・学生の基礎的な知識の獲得に努める。</li> <li>・充実した卒業論文作成のため、研究報告の回数を増やしたい。</li> <li>・よりわかりやすいオンデマンドの動画ファイルを作成する。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							

Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)			
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文			
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)			
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)			
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・16・17世紀のパンフレット類の検討を進める。</li> <li>・宗教改革と魔女狩りとの関係性の究明に努力する。</li> </ul>		
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「近世イングランドの社会的周縁者とメディア」を基盤に17世紀の魔女について検討を進めた。</li> <li>・その関連でこの時代の基礎的な研究を再検討した。</li> </ul>		
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・物質的な側面を重視して研究を進める。</li> <li>・16・17世紀のパンフレット類の分析を進める。</li> <li>・研究全体を整理する。</li> </ul>		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2019年4月～	西洋史研究会 西洋史研究会理事		
2014年1月～	学際魔女研究会会員(学際魔女研究会会員)		
2014年1月～	学際魔女研究会 会員		
1997年～	東北史学会		
1986年4月～	西洋史研究会 会員		
1986年～	日本西洋史学会 会員		
1986年～	西洋史研究会理事(西洋史研究会理事)		
1986年～	西洋史研究会 理事		
1986年～	西洋史研究会会員(西洋史研究会会員)		
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	佐川 正敏	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
<p>教員自身が1986年～1998年に文化庁奈良国立文化財研究所(現独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所)で研究員・主任研究官として飛鳥地域や藤原宮・京跡、平城宮・京跡の発掘調査と研究に従事した経験を授業に活かしている。また、東・北アジアを中心とする国内外の遺跡で毎年実施してきた考古学的調査・研究の成果、その際に撮影した映像資料に基づいて作成し、更新しているパワーポイントを授業教材として使用している。</p>		2020年4月1日～		<p>考古学概説Ⅰ(1年)、基礎演習Ⅰ(2年)アジアにおける国家の誕生(2年)、考古学実習Ⅰ(2年)、考古学実習Ⅱ・Ⅲ(3年)、考古学総合演習Ⅰ・Ⅱ(3年)、考古学の諸問題Ⅱ(3年)、考古学論文演習Ⅰ・Ⅱ(4年)、考古学の諸問題Ⅲ(4年)</p>			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①新型コロナ禍における遠隔授業の進め方、②DVDやパワーポイントを組み合わせた授業の進め方。					
今年度の進捗状況		①「考古学概説Ⅰ」(泉・1年次・前期・月・1校時)は新型コロナ禍のためオンタイム授業となったが、成績評価のために学生が滞在する県の遺跡や博物館で見学レポートをまとめてもらったが、在宅学習を離れて現地見学ができたことが非常に良かったという反応が印象的であり、来年度に活かしたい。②「考古学の諸問題Ⅱ」(土樋・3年次・後期・木・1校時)は、奈良の正倉院宝物に関するものであり、内容が充実したDVDを使用しながら実施した結果が、受講生に非常に勉強になったという感想が毎回の授業レスポンスでも、3回の成績評価レポートでも記述されたので、来年度も継続したい。					
来年度の進捗目標		新型コロナ感染状況は行く先が見通せないので、①と②について引き続き創意工夫をしながら継続したい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
『アジア流域文化研究Ⅻ』	共著	2021年3月	東北学院大学アジア流域文化研究所, 東北学院大学アジア流域文化研究所	◎佐川正敏編訳、谷口満ほか15名	pp.総112頁		
『鳥居龍蔵の学問と世界』	共著	2020年12月	思文閣出版, 思文閣出版	◎石井伸夫、長谷川賢二、佐川正敏ほか21名	pp.総556頁中の159～186頁		
『大学で学ぶ 東北の歴史』	共著	2020年10月	文館, 文館	◎河西晃祐, 佐川正敏ほか17名	pp.総254頁中の1～17頁		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
『宮城県蔵王町谷地遺跡の大木8a式土器文様の施文原則と縄文時代の集団情報学習』	単著	2021年3月	宮城県蔵王町教育委員会, 蔵王町谷地遺跡発掘調査報告書	宮城県蔵王町教育委員会	pp.0		
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
考古学から見た東アジアの仏教による鎮護国家政策の展開ー都と地方ー	単独	2021年2月	日韓古代比較宗教史国際シンポジウム(仙台市・東北大学文学研究科)(不明)	堀裕(東北大学文学研究科准教授)主催			

H. 翻訳(学術書や原典等)					
『総合コメント1』	単著	2021年3月	東北学院大学アジア流域文化研究所, 『アジア流域文化研究 XII』	原著者: 董新林	pp.74～76 頁
『報告1(郭曉濤氏等)「漢魏洛陽城跡北魏宮城の考古学的な展開と意義」と報告2(何利群氏等)「鄴城における近年の考古学上の主要な発見と成果」へのコメント、及び佐川英治氏コメントへの回答』	単著	2021年3月	東北学院大学アジア流域文化研究所, 『アジア流域文化研究 XII』	原著者: 銭国祥	pp.66～68 頁
『報告2 鄴城における近年の考古学上の主要な発見と成果—核桃園北齊大莊嚴寺のボーリング調査と発掘を中心に—(原文: 近來鄴城考古的主要發現與收穫)』	単著	2021年3月	東北学院大学アジア流域文化研究所, 『アジア流域文化研究 XII』	原著者: ◎何利群・潘麗華	pp.27～37 頁
『報告1 漢魏洛陽城跡北魏宮城の考古学的な展開と意義—1999～2019年の調査成果—(原文: 漢魏洛陽城遺址北魏宮城考古新進展及其意義)』	単著	2021年3月	東北学院大学アジア流域文化研究所, 『アジア流域文化研究 XII』	原著者: ◎郭曉濤・銭国祥・劉濤	pp.13～26 頁
『中国遼上京における考古学的研究(原文: 中国遼上京考古研究)』	単著	2020年12月	思文閣出版, 思文閣出版	原著者: 董新林	pp.187～196 頁

I. 特許	
現在の課題・目標	①モンゴル国ホスティン・ボラグ遺跡における匈奴時代の窯跡と瓦?の調査およびその比較研究(科研費: 2014年～)、②モンゴル国シャルツ・オール遺跡第1地点におけるウイグル可汗国時代の地方官衙跡と瓦?の調査およびその比較研究(科研費: 2018年～)、③中国古代～中世都城の考古学的調査と研究及びその東アジアにおける比較研究(科研費及び東北学院大学アジア流域文化研究所との共同研究: 2019年～)、④東アジアの古代寺院と舍利奉安形式に関する比較研究(2005年～)、⑤東・北アジアの中世瓦の比較研究(2008年～)
今年度の進捗状況	①新型コロナウイルス感染拡大により、モンゴル国での発掘は中止されたが、匈奴時代の瓦研究を進めた。②新型コロナウイルス感染拡大により、モンゴル国での発掘は中止されたが、ウイグル可汗国時代の瓦研究を進めた。③東北学院大学アジア流域文化研究所所長として本学の谷口満教授の科研費事業と連携し、また中国社会科学院考古研究所と共同で、国際シンポジウム『中国都城考古学の最前線—北魏洛陽城と東魏北齊?城の考古学的な発見及び韓日都城研究の原状—』を2020年12月19～20日にオンラインで開催した。その成果は、『アジア流域文化研究?』に「特集」として掲載した。④九州全土の古代寺院について調査した。その研究成果は、「考古学から見た東アジアの仏教による鎮護国家政策の展開—都と地方—」という題目で『日韓古代比較宗教史国際シンポジウム』で2021年2月28日に発表した。⑤東・北アジアの中世瓦に関する比較研究の成果は、「遼宋～蒙元代の軒平瓦における造瓦変革と朝鮮半島・日本への影響」という題目で『鳥居龍藏の学問と世界』(思文閣出版)で2020年12月に発表した。
来年度の進捗目標	①匈奴の窯跡の発掘と瓦?比較研究の継続、②ウイグル可汗国時代の地方官衙遺跡の東門跡などの発掘と瓦?比較研究の継続、③先秦時代の都城遺跡と瓦?の考古学的比較研究、④北魏・東魏・北齊と南朝の寺院及び百濟・新羅寺院の比較研究、⑤東・北アジア中世瓦の比較研究について、とくに高麗を軸に遼・宋・金及び日本との比較研究を進めたい。

### III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 ①日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A)、②同左基盤研究(B)、③同左国際共同研究強化(B)	2017年度～2021年度	共同(研究分担者)	①モンゴルの匈奴時代の窯跡の発掘調査と出土瓦罫の調査及びその比較研究、②モンゴルのウイグル可汗国地方官衙遺跡の発掘調査と出土瓦罫の調査及びその比較研究、③中国歴代都城の考古学的調査・研究と日韓古代都城・都市遺跡との比較研究及び国際シンポジウム等の調整

### IV 学会等及び社会における主な活動

2017年4月～2022年3月	仙台市博物館協議会 会長
2016年11月～	国史跡 上人壇廢寺跡(福島県須賀川市)整備委員会 委員長

### V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

---

VI 学内における管理運営に関する諸活動

アジア流域文化研究所所長

2020年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	櫻井 康人	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
考える力の向上		2020年4月1日		演習等において、学生が自発的に自分の考えを発言し、そして他の学生がそれに対する自分の考えを述べられるような雰囲気を作ることに努めている。			
学習内容の定着・理解の促進		2020年4月1日		毎回の講義開始時に前回の内容を簡単に説明し、終了時には次回の内容の予告を行うことで、学習内容のさらなる理解を促すよう努めている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。 ②学生が到達目標を達成できるための授業運営方法の工夫。 ③学生が論理的思考能力を養えるようにするための演習運営方法の工夫。					
今年度の進捗状況		①授業内容およびそれ以外の点について、実際に学生からの相談に応じられたことから、ある程度の進捗が見られたと判断できる。 ②学生の理解度を量るために小テストを導入したが、授業評価アンケートの自由記述欄に小テストシステムの有効性を示す評価が見られたことから、ある程度の効果があったものと判断できる。 ③学生から提出された卒業論文の内容から判断するに、1年間で学生の論理的思考能力はある程度向上したと判断できる。					
来年度の進捗目標		①・②・③いずれもある程度の成果を挙げていると思われるが、必要に応じてさらなる工夫・改善を目指したい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
『『十字軍国家の研究—エルサレム王国の構造—』』		単著	2020年6月	名古屋大学出版会		櫻井 康人	pp.総744
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Ad liberandamまでの「十字軍運動」の展開—「贖罪」と「平和」との関係を中心に—		単著	2021年3月	『ヨーロッパ文化史研究』(22)		櫻井 康人	pp.163～192
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
「ボードゥアン4世癡王」『鈴木董(編)『侠の歴史—士は己を知る者のために死す、「侠」に生きた勇者たち—西洋編上+中東編』』		共著	2020年7月	清水書院		櫻井 康人	pp.170-185
「13 十字軍」『金澤周作(監修)・藤井崇/青谷秀紀/古谷大輔/坂本優一郎/小野沢透(編著)『論点・西洋史学』』		共著	2020年4月	ミネルヴァ書房		櫻井 康人	pp.192-193
コラム3「日本人初のエルサレム巡礼者と東北のキリシタン」『東北学院大学文学部歴史学科(編)『大学で学ぶ東北の歴史』』		分担執筆	2020年4月	吉川弘文館		櫻井 康人	pp.78-79
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							



<b>I. 特許</b>			
現在の課題・目標	①十字軍国家の構造に関する研究。 ②後期十字軍に関する研究。 ③聖地巡礼に関する研究。 ④キリシタンに関する研究。		
今年度の進捗状況	①十字軍国家(ラテン・ギリシア)に関する研究を進めた。1本の論考を公にすることができたことから、ある程度の進捗が見られたと判断できる。 ②・③1601年から1618年までに作成された史料の調査・収集および分析を行うことができたことから、ある程度の進捗が見られたと判断できる。 ④コラムの作成などを行うことができたことから、ある程度の進捗が見られたと判断できる。		
来年度の進捗目標	①アカイア侯国・キプロス王国・エルサレム王国の構造について、さらなる研究の進展を図る。 ②・③1618年から1630年までの史料収集を行う。 ④さらなる資・史料収集に努め、その分析を行うという形でさらなる研究の進展を図る。		
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
1. 大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻主任、2. 東北学院大学点検・評価委員、3. ヨーロッパ文化総合研究所所長			

2020年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	佐藤 義則	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		LMSを介した授業・学習の推進に対する学生の受け止め方について実証的に評価を行なう。					
今年度の進捗状況		リモート授業に伴い、Manaba, Google drive, Zoomを活用して授業を行った。学生からは、授業方式、システムの活用の面で好意的な評価を受けた。					
来年度の進捗目標		より対話的な授業となるよう工夫する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
『日本の図書館の歩み:1993-2017. 館種編. 大学図書館および学術情報機関』	共著	2021年3月	日本図書館協会, 日本図書館協会	竹内比呂也, 佐藤義則	pp.0		
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
『識別子とメタデータ』(国立国会図書館科学技術資料整備審議会・基本方針作成部会(第4回))	単独	2020年5月	不明(未記入)	未記入			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		学術情報流通の変化および利用(者)の変化について、論文データベース調査、アンケート調査、ログ分析等により、実証的に調査し、変化の確認と諸要素間の関係の整理を行なう。					
今年度の進捗状況		オープンアクセスジャーナル、研究データ管理、電子書籍の進展について現状調査を行うとともに、全国の研究者を対象として実施した大規模なオンラインサーベイの結果を分析した。					
来年度の進捗目標		諸学問分野における研究データの保存、公開、共用について、国内外における現状を調査するとともに、フィールドサーベイを実施し、諸分野における研究データの利用の文脈を確認する。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
2019年4月～		国公立大学図書館協力委員会・大学図書館著作権検討委員会顧問 委員					
2014年6月～		宮城県図書館協議会 委員(会長)					
2013年12月～		国立国会図書館科学技術情報整備審議会 委員					
2008年7月～		一般社団法人ALFAE(アジア・太平洋 食・農・環境 情報拠点)相談役 委員					

2006年7月～	American Society for Information Science & Technology. 会員 委員		
2005年4月～	国立国会図書館カレントアウェアネス編集企画委員会 委員		
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
図書館長・図書部長 学校法人東北学院 情報資産委員会作業部会長			

2020年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	下倉 渉	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
毎回授業においてプリントを作成した。		2020年					
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
「排時」「三日」婚放(上)		単著	2021年3月	アジア流域文化研究12	未記入	pp.83-91	
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		礼制よりみた中国の人生儀礼に関する史的展開についての研究					
今年度の進捗状況		六朝時代に流行していた「排時婚」「三日婚」に関してその復元を試みた。					
来年度の進捗目標		今年度の課題解決をさらにすすめる。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>							
大学院文学研究科アジア文化史専攻主任 アジア流域文化研究所主事							

2020年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	嘱託教授	氏名	谷口 満	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
配布する講義資料の作成において、ある現象の状況とその現象を生み出している理由の双方を正しく理解できるように、解説・図版などの内容を工夫した。		2020年4月1日～		「歴史学」などの講義資料において、ある歴史現象についての時間と位置の状況を提示するとともに、その歴史現象以前の現象についての時間と位置の状況をも提示して、その歴史現象が生じるにいたった経緯を可視的に理解できるようにした。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
中国都城史歴史図録の作成。		2020年4月1日～		「総合演習」・「論文演習」・「アジアの王権と思想」において使用する講義資料の一つとして、二里頭(夏王朝)時代から清朝にいたる、中国歴代都城の平面図を作成した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		歴史現象の正確な理解だけでなく、その現象を生み出している理由をも正確に理解できるような資料・教材を作成する。					
今年度の進捗状況		演習・講読・専門講義などの専門科目においては、上記の目標をおおむね達成することができた。「歴史学」などの教養系科目においては、学部・学科の違いによる受講生の多様性に十分こたえられるほどには、目標を達成できなかった。					
来年度の進捗目標		歴史学科以外の学生の素養にも十分こたえられるように、上記の資料・教材の作成をさらに工夫したい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
予備調査メモ・中国西南地区の塩女神廟—四川省塩源县塩井鎮開山姥姥廟と雲南省劍川縣彌井村塩神母廟—	単著	2021年3月	東北学院大学『アジア流域文化研究』・XII	未記入	pp.94～100		
先秦都城の門朝・城郭構造(二)—一文献伝承と考古知見の照合・鄭韓故城—	単著	2021年3月	『東北学院大学論集・歴史と文化』・63号	未記入	pp.(81)～(108)(縦書き)		
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
オンライン国際シンポジウム「中国都城考古の最前線1」総合コメント	単独	2020年12月	東北学院大学アジア流域文化研究所・中国社会科学院考古研究所オンライン国際シンポジウム「中国都城考古の最前線1」における総合コメント。東北学院大学『アジア流域文化研究』・XIIに口頭発表内容掲載。(未記入)	未記入	pp.79～81		
H. 翻訳(学術書や原典等)							
朱岩石「中国古代都城考古の発見と研究」『朱岩石「中国古代都城考古の発見と研究」』	単著	2021年3月	東北学院大学『アジア流域文化研究』・XII, 東北学院大学『アジア流域文化研究』・XII	未記入	pp.8～15		

<b>I. 特許</b>			
<b>現在の課題・目標</b>		1. 楚国歴史と文化の研究。2. 平面プランの変遷に視点を置いた中国都城史の研究。3. 中国塩神廟の調査と研究。	
<b>今年度の進捗状況</b>		上記1・2・3の研究課題は、いずれも中国現地での調査活動を必要とするものであるが、新型コロナウイルス感染症の拡大によって年度内に一度の訪中もかなわず、研究活動が大きく頓挫したのは、まことに遺憾である。そのような状況のなかで、かろうじてなした活動は次の通りである。1. 新発見の曾国青銅器を資料として、曾国と楚国の政治的・文化的関係に関する研究を進めることができた。2. 科学研究費・国際共同研究強化(B)によって、オンライン国際シンポジウム「中国都城考古の最前線1」を開催して、漢魏洛陽城及び北朝?城の考古最新知見の資料的価値を確認・整理したほか、年来の研究テーマである鄭韓故城の門朝・城郭構造について論文を執筆し、先秦都城の平面プランについての自説を公表することができた。3. 成都市文物考古研究所周志清氏・雲南大学陳果氏の協力をえて、中国西南地区塩女神廟についての初歩的な情報を手にし、その一部を予備報告の形で公表することができた。	
<b>来年度の進捗目標</b>		3課題とも中国現地での調査を実施して、研究を進展させたい。	
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
<b>競争的資金の名称</b>	<b>採用年度(西暦)</b>	<b>個別・共同の区分 共同の場合の役割分担</b>	<b>概 要</b>
科学研究費補助金 科学研究費・国際共同研究強化(B)	2018年度～2021年度	共同(研究代表者)	中国歴代都城の宮廟官寺・門朝城郭構造を正確に復原するための遺跡現地共同調査
科学研究費補助金 科学研究費・基盤研究(C)	2018年度～2020年度	個別	中国塩神廟の調査と研究
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	嘱託教授	氏名	辻 秀人	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
ハイブリッド、オンデマンド型式の講義でレスポンスクリッカーを使用して毎回学生からの質問、意見を受け付け交互の最初に丁寧に答えた。学生からは多数の質問が寄せられ、良い反応があられた。		2020年5月～2021年3月		授業の感想、学生の希望などを具体的に知ることができ、授業運営に有効であった。			
課題レポートを課し、その結果について講義で評価した。		2020年5月～2021年1月		学生の到達度を測ることができた。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		学生の理解のスピードに応じた授業運営をめざしたい。					
今年度の進捗状況		一部改善された。					
来年度の進捗目標		引き続き工夫を続けたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
東北地方の古墳から出土した人骨とその周囲に見られた赤色顔料の組成分析		単著	2021年2月	日本文化財学会 文化財科学81号		波田野悠夏、高橋正敏、小坂萌、吉田貴恵、高田雄京、鈴木敏彦	pp.21-31
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
宮城県山元町合戦原古墳群第4次調査報告		単著	2021年3月	『東北学院大学論集 歴史と文化』第60号		辻秀人、佐藤緋菜、大友健太郎、佐藤有莉佳、金澤大和、横山志穂	pp.2021年3月発行予定のため未確定
福島県喜多方市灰塚山古墳の発掘調査成果		単著	2020年9月	宮城県考古学第22号		未記入	pp.1-18
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
ヤマト政権の成立と東北古墳時代『ヤマト政権の成立と東北古墳時代』		単著	2020年4月	大学で学ぶ東北の歴史 吉川弘文館, 大学で学ぶ東北の歴史 吉川弘文館, 大学で学ぶ東北の歴史 吉川弘文館		未記入	pp.27-33
東北弥生社会の成立と変遷『東北弥生社会の成立と変遷』		単著	2020年4月	大学で学ぶ東北の歴史 吉川弘文館, 大学で学ぶ東北の歴史 吉川弘文館, 大学で学ぶ東北の歴史 吉川弘文館		未記入	pp.18-24
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		東北古墳時代の社会を解明すること					

今年度の進捗状況	発掘調査の実施により、具体的な状況の一部が明らかになった。		
来年度の進捗目標	来年度も引き続き発掘調査を実施し、事実関係の解明に努めたい。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			



2020年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	永田 英明	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
博物館情報・メディア論の授業として、学生による展示紹介動画の製作実習を実施した。		2020年9月～					
演習科目に於いて、木簡の製作とこれを活用した展示の作成などの実習の要素を積極的に採り入れ、アクティブラーニングの要素をとり入れた。		2020年9月～					
ゼミ学生を引率した遺跡見学会等の実施		2020年9月～2021年1月		3年次および4年次の所蔵ゼミ学生を引率して、多賀城跡および周辺地域、陸奥国分寺等の見学を実施した。			
manabaを活用した学生アンケートの実施		2020年4月～2021年1月					
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
『大学で学ぶ東北の歴史』(2020年4月刊行)		2020年					
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		授業時間以外での学生とのコミュニケーションの機会を多用に設定し、相談に応じる。					
今年度の進捗状況		前期・後期に各一回ずつゼミ生に対する個人面談の機会を設けたほか、必要に応じて随時面談等を実施した。					
来年度の進捗目標		今年度同様に多様なコミュニケーションの機会を作ると同時に、特に三年生を対象に前期の早い段階で個人面談をおこないたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
<b>A. 学術書</b>							
『大学アーカイブズで考えたこと』		単著	2020年4月	自費出版	未記入	pp.1-148	
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
永田英明「書評と紹介 川尻秋生編『古代の都城と交通』(古代文学と隣接諸学8)」		単著	2020年10月	『日本歴史』869号	未記入	pp.未記入	
<b>G. 学会における研究発表</b>							
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			

科学研究費補助金 基盤研究(C)	2019年度～2021年度	個別	本研究では、郡家・国府・城柵といった古代地方官衙の機能を、都鄙間・隣国間などの広域的な政治的交通とのかかわりに注目して再検討しようとするものである。 具体的には、交通に関わる木簡・漆紙文書などの出土文字資料の分析や『朝野群載』その他の文例集に掲載された交通に係る文書の分析と、正税帳を中心とする律令公文類の分析をもとに、国府や郡家、駅家と言った地方官衙における運送供給・使者への便宜供与の実態などの様相を、具体的な遺跡や地理的環境との関わりをも含めて可能な限り具体的かつ詳細に検討・復原する。そのことを通じて広域的な国土支配との関わりにおける古代の地方官衙の役割、その歴史的特質を明らかにしたい。
------------------	---------------	----	---

#### IV 学会等及び社会における主な活動

2020年～	郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会 委員
2017年～	NPO法人宮城歴史資料保存ネットワーク理事

#### V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	古代東北における地域間交通・交流の研究を進める		
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

#### VI 学内における管理運営に関する諸活動

東北学院大学博物館長として博物館の管理運営に従事した
----------------------------

2020年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	七海 雅人	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
ゼミにおいて実物資料の調査と博物館展示の実習活動を行っている。		2020年9月29日～		松島町雄島海底板碑群の調査と東北学院大学博物館における展示作業。			
授業内容をまとめたプリントを配付している。		2020年5月7日～		授業の内容を整理したプリントを作成・配付し、教材として利用している。このプリントの内容に関しては、授業評価により得た受講生の意見を参考にしながら修正・補訂を行っている。			
学習事項の理解促進のために授業内容を整理する。		2020年5月7日～		授業のはじめに前回の内容をふりかえり、おわりに今回の内容をまとめ、各回授業内容の整理を行っている。あわせて、授業テーマ全体の中における各回の位置づけを明確にしている。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
東北学院大学文学部歴史学科編『大学で学ぶ東北の歴史』吉川弘文館		2020年4月1日		Ⅱ 中世一01、02、03を担当した。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
<b>現在の課題・目標</b>		<p>①講義科目について受講生への配付プリントの内容整理・吟味をすすめ、受講生のペースを観察しながら板書の分量の調整を行い、授業の充実をはかる。</p> <p>②ゼミ活動に関して、学外見学会や現物資料の調査・整理作業などの時間をさらにもうけ、より専門的な学習体験の機会を増やすとともに、アクティブラーニングの方法も模索・導入する。</p> <p>③ゼミにおける卒業論文の作成指導と就職・進学活動との両立に関して、授業時間外にも研究室における個別指導・面談などの機会を増やし、受講生個々の進捗状況にそくしたきめの細かい学習・進路指導をこころがける。</p>					
<b>今年度の進捗状況</b>		<p>①課題・目標①については、1年生開講科目「日本史概説Ⅰ」がオンデマンド授業となったため、配付資料を説明する授業ビデオの作成にたいへん苦労した。また「日本史概説Ⅰ」では、歴史学科で作成した『大学で学ぶ東北の歴史』を教科書に用いた。</p> <p>②課題・目標②については、前期がオンライン授業であったため、対面授業を行うことができた後期の3年生ゼミにおいて、松島町雄島の海底板碑群の調査・整理・展示作業を行った。また、春休みには有志を募り、東北大学災害科学国際研究所において超高精細スキャンシステムを利用した大型拓本のデジタル資料化に関する実習を行った。</p> <p>③課題・目標③については、4年生のゼミへの参加が低調で、卒業論文の指導をスムーズに行うことができなかった。受講生を主体とするゼミの運営についても、あらためて考えさせられた1年間であった。</p>					
<b>来年度の進捗目標</b>		<p>①課題・目標①については、オンデマンドによる講義科目である「日本史概説Ⅰ」「歴史学」の授業内容を一層吟味し、受講生が負担なくビデオを聴講し、より関心をもてるような教材研究を進める。</p> <p>②課題・目標②については、新型コロナウイルス感染症の対策・防疫に気をつけながら、見学会やフィールドワークも盛り込んだゼミ活動の再開を模索する。</p> <p>③課題・目的③については、オンラインによるオフィスアワーの活用もうながしながら、受講生の作業の進捗状況に応じたきめ細かな指導をさらにこころがけ実行する。</p>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>							
『『相馬市史 第4巻資料編Ⅰ 中世』』		共著	2020年8月	福島県相馬市		高橋充, 渡邊智裕, 七海雅人	pp.18～86, 271～348, 503～510
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
「松島町渡島周辺海底採集板碑の報告(四)」		単著	2020年12月	東北学院大学東北文化研究所、『東北文化研究所紀要』、第52号		松嶋板碑研究会(新野一浩、七海雅人)	pp.37～92

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
『「インタビューくらしにスパイス あなたが住む街は誰が作った？ 幾層にも積み重なった郷土史を知る」』	単著	2020年10月	宮城県予防医学協会、『Smile』、第30号	七海雅人	pp.2～3
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	①中世政治制度史の研究(鎌倉幕府・室町幕府・主従制度など) ②中世東北地方史の研究(平泉藤原氏の政治権力・板碑と霊場の世界など) ③中世東北地方関係史料の集成・東日本大震災津波被災地における歴史的景観の復元				
今年度の進捗状況	①課題・目標①については、著書『鎌倉・南北朝時代の奥羽両国—鎌倉幕府御家人制の地域的展開—(仮題)』(高志書院)について、ひき続き刊行準備を進めた。しかし、作業のための時間を確保することができず、原稿を完成するまでにはいたらなかった。 ②課題・目標②については、科研費が採択され、12世紀平泉に関する共同研究を組織した。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大により、現地調査を行うことができなかった。板碑の研究については、松島町雄島海底板碑群の報告書(その4)を発表し、石巻市に建設される新しい博物館施設の板碑展示コーナーの監修作業を行い、また東北大学災害科学国際研究所の超高精細スキャンシステムを活用した大型拓本のデジタル資料化の試みにチャレンジした。 ③課題・目標③については、北畠顕家関係史料目録を作成し、また室町時代東北地方関係史料目録の作成に着手した。『相馬市史 第4巻資料編Ⅰ 中世』を刊行し、ひき続き同市史通史編の原稿を作成した。				
来年度の進捗目標	①課題・目標①については、著書『鎌倉・南北朝時代の奥羽両国—鎌倉幕府御家人制の地域的展開—(仮題)』の原稿作成を進める。 ②課題・目標②については、科研費による12世紀平泉に関する共同研究を進める。松島町雄島海底板碑群の調査と報告書の継続作成・発表を行う。石巻市周辺地域の板碑拓本のデジタル資料化を進める。 ③課題・目標③については、著書『周縁地域からみる仙台藩の成立(仮題)』(南北社)と『相馬市史 第1巻通史編Ⅰ』の原稿作成を進める。室町時代東北地方関係史料目録を完成する。				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
科学研究費補助金 科学研究費補助金 基盤研究(B)	2019年度～2021年度	共同(研究分担者)	「平泉仏教文化の諸相とその社会的基盤に関する資料学的研究」		
科学研究費補助金 科学研究費補助金 基盤研究(A)	2018年度～2022年度	共同(研究分担者)	「デジタル技術による金石文史料の研究資源化と学融合的歴史叙述への応用研究」		
科学研究費補助金 科学研究費補助金 基盤研究(B)	2018年度～2021年度	共同(研究分担者)	「中世後期から近世初頭における武家拠点形成の研究」		
科学研究費補助金 科学研究費補助金 基盤研究(A)	2015年度～2020年度	共同(研究分担者)	「石造物研究による中世日本文化・技術形成過程の再検討—東アジア交流史の視点から—」		
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2020年9月～	歴史科学協議会 全国委員				
2019年4月～	宮城県文化財保護審議会(松島部会) 委員				
2017年10月～	東北史学会				
2017年1月～	仙台市文化財保護審議会(2021年3月から副会長) 委員				
2016年12月～	北上市史編さん古代・中世部会員(中世班) 委員				
2013年6月～	東北学院大学中世史研究会 会長				
2013年5月～	相馬市史編さん調査執筆員 委員				
2009年4月～	東松島市文化財保護審議会(2020年4月から副会長) 委員				
2007年4月～	NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク 理事				
1995年9月～	宮城歴史科学研究会 委員				

V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	①大学博物館における資料調査・展示活動と充実 ②大学博物館における学芸研究員のスキルアップ		
今年度の進捗状況	①課題・目標①については、新型コロナウイルス感染症の拡大により大学博物館は閉館を余儀なくされたため、SNSによる「おうちミュージアム」(北海道博物館が企画運営)への参加、ホームページのリニューアルと企画展「コレミテ6」のビデオによる展示解説を行った。近代河原町の商家であった「西村家資料」の寄贈を受け、搬入を始めた。 ②課題・目標②については、上記「おうちミュージアム」のコンテンツ作成、企画展「コレミテ6」のパンフレット作成を指導した。		
来年度の進捗目標	①課題・目標①については、年間スケジュールを明確にし、企画展の製作・展示を継続的に実施する体制を整える。近隣高校・中学校・小学校との連携を強め、探究学習などにおける本館の利用を促進する。SMMA企画イベントに積極的に参加し、他館との交流を促進する。収蔵資料の目録の再整備と、「西村家資料」の整理と研究を進める。 ②課題・目標②については、年間スケジュールの中で学芸研究員一人一人の役割分担を明確にし、企画展の製作・展示及び学部生の館園実習の補助活動に積極的に従事してもらい、新しく始めたパンフレット「おたくミュージアム」の企画、作成に従事してもらい、これらの作業について、学芸研究員の活動を積極的に支援する。		
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
大学博物館長(～2020年5月31日) 大学アドミッションオフィサー(2020年6月1日～)			

2020年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	政岡 伸洋	大学院の授業 担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
<b>教育実践上の主な業績</b>		<b>年月日(西暦)</b>		<b>概要</b>			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
フィールドワークを実施する科目において、新型コロナウイルス感染拡大への対策を考慮した内容を試みた。		2020年9月～		これまで歴史学科3年生配当科目「民俗学実習Ⅱ」「民俗学実習Ⅲ」では、アクティブラーニングの手法も参考にしつつ、受講生が直接現地へ赴き、民俗調査を経験してもらうことになっているが、今年度は新型コロナウイルスの感染拡大のため、遠距離の移動や合宿形式での実施は難しいことから、フィールドを大学から歩いて行ける仙台城下町とし、文献調査および巡検を中心に行うことにした。インタビューが出来なくても、現地を歩くことでさまざまな情報を得ることができることを受講生も気づいてくれたようで、新たな発見も多く、感染対策をしつつディスカッションも行うことができ、試行錯誤の連続であったが、それなりの成果は出せたのではないかと思われる。新型コロナウイルス感染拡大が落ち着くまでは、今後もいろいろと工夫しつつ、より良い経験をしてもらえるように試行錯誤を重ねていき、いずれは仙台市教育委員会との地域連携事業にできればと考えている。			
学生からの質問、感想に対するコメントの実施		2020年9月～		授業に対する学生のニーズは多様化しており、これには配慮しつつも限界がある。そこで、講義科目では、授業終了後に質問や感想を出席カードの裏に任意に書かせ、次の授業の冒頭でコメントしてきたが、教員とのコミュニケーションや講義科目に対する関心を深められるようで、学生には好評であった。そこで、オンデマンド授業となった今年度の民俗学概説Ⅱでは、出席確認のResponを自由記述にし、質問や感想を書いてもらい、その内容についてコメントした動画を、次の授業の際に講義内容とは別にアップして見ってもらうようにしたところ、教員とのコミュニケーションがとれているといった実感を持ってもらえたようで、非常に好評であった。			
オンデマンド授業において、できる限り対面授業の雰囲気を出すよう心掛けている。		2020年9月～		新型コロナウイルス感染拡大により、これまで大教室で行われてきた民俗学概説Ⅱの授業について、オンデマンド授業へと変更を余儀なくされた。これについて、全国的にマスコミ等で学生がオンライン授業で非常にストレスを感じていること、対面授業を希望する声が多いことなどが報道され、本学においても同様の傾向が見られたことから、テキストを事前に配布しつつ、これまでの対面授業の雰囲気に近づけるため、動画の撮影の際に、あえて顔を出して画面の向こうの学生に語り掛けるように心がけ、あまり完璧に編集するのではなく、日常会話的な雰囲気を出しつつ、Zoomのホワイトボードを使用して、できる限り板書を行うようにするなど、工夫を凝らすことにした。初めての試みで最初は不安であったが、学生からは好評であった。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
『沖永良部島・内城の民俗―鹿児島県大島郡和泊町内城集落の暮らしの諸相』を刊行した。		2021年3月23日		2017年度および2018年度の歴史学科2年生配当科目「民俗学実習Ⅰ」では、奄美群島の沖永良部島・内城集落で総合民俗調査を実施し、その成果報告書を刊行することができた。現在、新型コロナウイルスの感染拡大により現地に行くことができないため、2021年度中に現地に配布できればと考えている。			
『漆立の民俗―岩手県紫波町片寄漆立のくらし―』を紫波町教育委員会から刊行し、現地に配布した。		2020年2月20日～2021年3月9日		2016年度歴史学科2年生配当科目「民俗学実習Ⅰ」および2017・2018年度歴史学科3年生配当科目「民俗学実習Ⅱ」「民俗学実習Ⅲ」では、学生たちを中心に、岩手県紫波郡紫波町片寄漆立地区において、紫波町教育委員会との連携事業として総合民俗調査を実施したが、その成果報告書を紫波町教育委員会から刊行することができ、それを現地に配布した。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
東北学院榴ヶ岡高等学校における高大連携事業TGタイムで出張講義を行った。		2021年2月19日		民俗行事を問い直す―岩手県のチャグチャグ馬コの事例から―			
盛岡市立高等学校で出張講義を行った。		2020年10月13日					
東北生活文化大学高等学校で出張講義を行った		2020年7月31日					

<p>現在の課題・目標</p>	<p>前年度に引き続き、  ① 身近な生活文化の当たり前を問い直す、民俗学の面白さを理解させる。  ② これを通して、イメージに流されることなく、自ら調べ考え、物事を客観的に把握できる能力を身につけさせる。  ③ そのためにも、地道な基礎的作業と深い思考の重要性を理解させ、実践できる能力を身につけさせる。  ④ 地域とのかかわりを重視し、実際の暮らしに触れつつ、座学で終わることなく、より実践的な教育を心掛ける。  といった、民俗学という学問の見方・考え方の訓練を通して、専門分野に関連するような職業はもちろんのこと、一般企業を含めた、社会人として自ら考え試行錯誤しつつ、よりよく生きるための思考法を身につけさせることを目標にしている。</p>				
<p>今年度の進捗状況</p>	<p>本学民俗学研究室の活動は、民俗学のみならず周辺諸科学の学会や文化財行政でも高い評価を受けており、卒業生の中には博物館の学芸員や文化財担当者など、高度な専門的知識を活かした職業に就く者もほぼ毎年出るようになってきた。また、一般企業に就職した学生たちからも、民俗学で学んだものの見方・考え方が社会に出てからも役立っているという声が聞かれ、これまで全国紙の教育特集でも取り上げられるなど、学生によって程度の差はあるにせよ、ある程度達成できているのではないかと判断している。  ところで、今年度は新型コロナウイルス感染拡大により、予定していた岩手県紫波郡紫波町彦部地区での総合民俗調査が実施できなくなりました。そこで、遠距離移動および宿泊形式を避けるため、大学から歩いて行ける仙台北町における歴史的展開と祭礼を対象に文献調査および現地巡検を行うことにしたが、新たな発見もいくつかあり、学生たちにも自ら調べ考えることで新たな理解を提示する経験ができたことから、不十分なながらも成果はあったのではないかと考えている。また、これまで行ってきた岩手県紫波郡紫波町片寄漆立地区と鹿兒島県大島郡泊町内城集落での調査成果報告書を刊行し、社会への還元ができた。片寄漆立地区では協力していただいた現地の方々から評価していただくなど、大きな成果を挙げる事ができたと考えている。  なお、アクティブ・ラーニングの手法も参考にしたこれらの活動は、学生たちにとっては日々の教育活動が単なる「お勉強」ではなく、自らの学習成果が地域に対して大きな意味を持つことを実感させたようで、実践的な教育成果として注目してよいのではないかと考えている。</p>				
<p>来年度の進捗目標</p>	<p>ひきつづき、現在の課題・目標に挙げた項目について、各学生のニーズに即しつつ対応していければと考えている。特に、「民俗学実習」では、次年度も新型コロナウイルス感染対策を行いつつ実施する必要があることから、仙台北町を対象とした調査を行いたいと考えている。また、中断している岩手県紫波郡紫波町彦部地区の総合民俗調査については、当分の間、実施が難しいことから、これまでの成果を中間報告書としてまとめることも視野に入れる必要があると考えている。これらも含め、新型コロナウイルス感染拡大状況下で、いかに教育効果を維持できるか試行錯誤していければと考えている。</p>				
<p>II 研究活動</p>					
<p>著書・論文等の名称</p>	<p>単著・共著の別</p>	<p>発行又は発表の年月 (西暦)</p>	<p>発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称</p>	<p>編者・著者名</p>	<p>該当頁数</p>
<p>A. 学術書</p>					
<p>継承される地域文化 災害復興から社会創発へ (「地域を映し出す民俗学の可能性—東日本大震災の被災地とのかかわりから—」を担当)『継承される地域文化 災害復興から社会創発へ (「地域を映し出す民俗学の可能性—東日本大震災の被災地とのかかわりから—」を担当)』</p>	<p>共著</p>	<p>2021年3月</p>	<p>臨川書店, 臨川書店, 臨川書店</p>	<p>日高真吾編著。政岡伸洋・小谷竜介・川村清志・加藤幸治・伊達仁美・葉山茂・石垣悟・久保田裕道・和高智美・末森薫・橋本沙知・加藤謙一・河村友佳子・武知邦博と共著。</p>	<p>pp.14-33</p>
<p>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</p>					
<p>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</p>					
<p>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</p>					
<p>沖永良部島・内城の民俗—鹿兒島県大島郡和泊町内城集落の暮らしの諸相—</p>	<p>単著</p>	<p>2021年3月</p>	<p>『東北学院大学論集 歴史と文化』64</p>	<p>政岡伸洋・真柄侑(東北学院大学文学部歴史学科民俗学研究室)編著。</p>	<p>pp.1-219</p>
<p>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</p>					
<p>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</p>					
<p>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</p>					
<p>G. 学会における研究発表</p>					
<p>民俗学の視点から新型コロナウイルス感染拡大に伴う混乱を考える—ドイツ・トリア市の場合—</p>	<p>共同</p>	<p>2020年12月</p>	<p>第39回京都市民俗学会年次研究大会(未記入)</p>	<p>未記入</p>	

H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	<p>これまで、「歴史的背景を踏まえた、民俗の実践とその意義」という視点から、従来の民俗理解の限界と新たな課題の提示について、関連するテーマを設定し研究を行ってきたが、現在、関心のある具体的な研究テーマは以下の通りである。</p> <p>① 東日本大震災被災地を中心とした復興過程の民俗誌的把握と問題群の背景の分析  ② ドイツ・トリア市における新型コロナウイルス感染拡大に伴う混乱とその民俗的背景に関する調査研究  ③ 国家的周縁域における民俗の展開とその歴史的背景に関する調査研究  ④ 近代における被差別部落の形成過程と差別言説の背景に関する調査分析  ⑤ 民俗学の展開とその歴史的背景に関する分析</p>		
今年度の進捗状況	<p>①については、宮城県本吉郡南三陸町戸倉波伝谷地区を対象に調査を行ってきたが、これまでの調査データをまとめつつある。今年度、その成果の一部については、「地域を映し出す民俗学の可能性—東日本大震災の被災地とのかかわりから—」(日高真吾編『継承される地域文化 災害復興から社会創発へ』臨川書店、2021年)と題して発表し、従来の災害研究の枠組みを超えた新たな民俗学からの視点を提示することができた。</p> <p>②については、ドイツ滞在時にロックダウンを経験したが、その際得られた資料をもとに、「民俗学の視点から新型コロナウイルス感染拡大に伴う混乱を考える—ドイツ・トリア市の場合—」と題して、第39回京都民俗学会年次研究大会で発表した。また、現地調査ができないことから、その後もロベルトコッホ研究所およびトリア市のHP等にアップされているデータを毎日記録化し、新型コロナウイルス感染拡大が落ち着いた段階で実施を予定している現地調査に備えている。</p> <p>③については、「沖永良部島・内城の民俗—鹿児島県大島郡和泊町内城集落の暮らしの諸相—」(『東北学院大学論集 歴史と文化』64、2021年)と題して発表し、東北地方と南西諸島という日本の国家的周縁域における民俗の共通点を考える意義の重要性、また歴史的展開から見た奄美における「琉球文化」的要素の意味の問い直しの必要性を主張することができた。</p> <p>④については、2021年度に全国水平社創立100周年を記念する論文集が計画されており、そこに掲載される予定の原稿を執筆しているところである。</p> <p>⑤については、上記のテーマすべてに関連することから、文献を中心に整理しているところである。今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大により、なかなか現地調査が行えなかったことから、これまでの研究成果をまとめつつ、感染拡大が落ち着いた後の現地調査の再開に向けての準備作業を中心に行った。</p>		
来年度の進捗目標	<p>①については、ある程度の方向性が見えたので、データの整理や許される範囲での補充調査を行い、最終的なまとめの作業に入っていきたいと考えている。</p> <p>②については、引き続きできる範囲での資料収集を行い、新型コロナウイルス感染拡大が落ち着いた後に実施を予定している現地調査の準備作業を行っていきたい。</p> <p>③については、沖永良部島における「琉球文化」的要素の問い直しのほか、これまで資料を収集してきた湯殿山の即身仏や新潟湊祭りの論考をまとめて行ければと考えている。</p> <p>⑤については、近年、民俗学に関するパラダイムの転換が行われつつあることから、その歴史的背景も視野に入れつつ、これまでの研究を整理していきたいと考えている。</p> <p>以上のように、来年度も新型コロナウイルス感染拡大が落ち着く可能性が低いことから、これまでの調査資料の原稿化を行いつつ、落ち着いた後の現地調査の準備作業を中心に行っていきたいと考えている。</p>		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2014年9月～		ひょうご部落解放・人権研究所 会員	
2010年10月～		岩手民俗の会 会員	
2010年6月～		民俗芸能学会 会員	
2005年1月～		環境社会学会 会員	
2004年6月～		東北民俗の会 会員	
2004年4月～		東日本部落解放研究所 会員	
2003年4月～		日本村落研究学会 会員	
2003年4月～		徳島地域文化研究会 会員	
2002年12月～		文化経済学会 会員	
2002年4月～		日本社会学会 会員	
2001年5月～		現代韓国朝鮮学会 会員	
2000年8月～		韓国・朝鮮文化研究会 会員	
1998年10月～		比較日本文化研究会 会員	



1995年2月～	沖縄民俗学会 会員		
1995年2月～	沖縄民俗学会 会員		
1994年6月～	日本文化人類学会 会員		
1994年4月～	部落解放・人権研究所 会員		
1991年11月～	比較家族史学会 会員 会員		
1988年4月～	京都民俗学会 会員 会員		
1988年3月～	日本民俗学会 会員		
1988年1月～	近畿民俗学会 会員		
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	渡辺 昭一	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		卒論必修学年の再開により、研究テーマの設定を早めに設定させる。					
今年度の進捗状況		テーマ設定に向けてゼミ生の報告を徹底した。 個別面談を徹底して就職活動をうながした。					
来年度の進捗目標		就職活動と並行して無理のないように卒論の準備をさせる。 卒業論文の課題を設定させ、完成させる。 できるだけ卒業論文に外国文献を利用できるようにうながす。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>							
冷戦期アジアの軍事と援助『冷戦期アジアの軍事と援助』		共著	2021年3月	日本経済評論社, 日本経済評論社, 日本経済評論社		横井勝彦	pp.199-232
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
南アジアの「遅れた冷戦」とケネディ・ネルー会談		単著	2021年3月	ヨーロッパ文化史研究, ヨーロッパ文化史研究(22)		不明	pp.3-39
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
大学で学ぶ東北の歴史『大学で学ぶ東北の歴史』		共著	2020年10月	吉川弘文館, 吉川弘文館, 吉川弘文館		東北学院大学文学部 歴史学科	pp.201-202
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		これまで進めてきた研究の整理と関連課題の追求。					
今年度の進捗状況		ほぼ計画を達成できた。					
来年度の進捗目標		科研費研究の推進、新たな研究課題への取り組み。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
科学研究費補助金 科学研究費 基盤B		2020年度～	共同(研究分担者)		ブリティッシュ・ワールドの共通意識と紐帯に関する総合的歴史研究		
競争的資金等の外部資金による研究 私立大学 研究ブランディング事業		2016年度～2020年度	共同(研究分担者)				
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							

V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	准教授	氏名	杵淵 文夫	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
授業評価(FD)アンケートの結果(2020年度)		2021年2月1日～2021年3月31日		2020年度の1年生向け科目「研究・発表の技法」(受講者数29名)の授業評価において、授業の総合評価に関して5段階評価で平均4.7という評価を受けた。			
卒業論文の研究テーマに関する個人面談		2020年4月1日～		前年度に引き続き、今年度も「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」の所属学生および「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」の所属学生を対象に、卒業論文のテーマ選択に関する個別相談を実施した。今年度は、新型コロナウイルス流行のためZoomも活用した。一人当たり平均2回程度で、1回あたりの平均面談時間は20分であった。新型コロナウイルスの流行により、総合演習と論文演習をZoomで実施することが増えたため、学部3・4年生それぞれの卒論研究を進めさせる代替的な方法として、この個別相談を継続した。 その結果、3年生はテーマ選択については学生それぞれの進度にバラツキは出たものの、最終的にはどの学生も卒業論文のテーマを設定することができた。			
少人数の授業における学生コメント一覧の作成・配付		2020年4月1日～		少人数の演習型授業「基礎演習Ⅱ」、「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」、「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」等では、学生が発表した後に、他の受講学生の意見感想を知ることができるようにしている。授業時間内に全員が意見を言えなかったり、口頭では言いにくい内容も多々あると推測されるため、2021年度もこれを継続した。 具体的には、授業内の発表に対して意見や批判を書かせて、それを一覧の形式で取りまとめ、次回の授業で配付した。これによって、発表学生は教員や一部学生の意見だけでなく、他の学生が自分の発表についてどのように考えているかを知ることが出来るようになり、次回の発表にフィードバックするようになった。 なお、2021年度は新型コロナウイルスの流行拡大もあり、記入では主にインターネットツールの(Respon)を活用した。Responの設定等では相応の時間と労力が掛かってしまうものの、記入内容の取りまとめと各学生への配付の作業では負担が軽減された。			
講義における競争形式の導入:「早押しクイズ」		2020年4月1日～2021年3月31日		講義型授業「ヨーロッパ史基礎講義Ⅱ」、「ヨーロッパ史専門講義Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を、いわゆる「早押しクイズ」の形式で実施した。その際には、Zoomの反応機能を利用した。 この形式を導入したのは、新型コロナウイルスの流行を背景とするZoomの講義形式授業(外国語テキストの邦語訳および解釈)が単調なものになる恐れがあったためである。そこで、ボタンを最も早く押した学生が一文ごとの邦語訳を担当しその分だけ得点を得られるという「ゲーム」にすることで、学生にとって自分から点数を取りに行ける刺激のある授業にすることを狙いとした。 また、早押しが苦手が学生もいるため、別の得点源として、各段落の論旨要約をManabaで提出させた。これらは翌週に提出分全部を講評し、とくに優秀な論旨要約については、毎週Responのアンケート機能を活用して投票と表彰を行った。 さらに、提出授業の最初と最後に各学生の得点状況を公表した。これは、各学生が単位や成績の到達状況を把握し、積極的に点数を取りに行こうとするモチベーションを引き上げるためである。 ※入力文字数が500文字までなので、残りは事項(訳)に移行			

演習形式の授業におけるラジオ番組での研究成果発表の実施	2020年4月1日～2021年3月31日	<p>ラジオ番組制作は2015年度以来継続している取り組みである。</p> <p>「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」において学部4年生は卒業論文を見据えて各自のテーマを設定し、課題の研究を進めている。学生が資料調査や研究に積極的に取り組むように刺激する効果と、情報を他者にわかりやすく伝えるプレゼンテーション能力の涵養を狙いとして、学生の希望者にラジオ番組での研究成果の公表を行わせた。</p> <p>リスナーから意見・質問を応募していたため、参加学生は緊張感をもって課題の調査や研究を自ら進んで行うようになった。また、ラジオは音声だけでしか情報を伝えることができないメディアであるため、適切な言葉と分かりやすい表現を使えるようになると、反省会を企画して改善点を確認するなど主体的に工夫するようになった。</p> <p>ただし、2020年度は新型コロナウイルスの流行のため、協力ラジオ局のスタジオを利用することができず、また集合して録音することができなかったため、音声収録の機会が限られた。学部3年生の参加は見合わせざるを得なかったが、学部4年生はZoomの録音機能を活用して音声を録音し、数回放送することができた。</p>
講義科目における課題の実施による、学生の理解度の把握	2020年4月1日～2021年3月31日	<p>講義科目において定期的に、学生の理解度を把握するための確認用の課題を実施した。過年度は、ミニットペーパー式のシートを授業中に配付して回答させる方法をとっていたが、新型コロナウイルスの流行という背景もあり、2020年度からはインターネットツール（例えば、Manaba、Respon）を活用した。その結果、入力作業には労力が要るものの、取りまとめや集計等の作業は昨年度に比べて負担が減ったように思われる。その結果を分析することで、学生が理解している点とそうでない点を把握することができた。また、その結果は成績評価の一部に反映させるため、講義への学生の集中の度合いも増した。</p>
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>		
教材「第一次大戦開戦に関する史料」	2020年4月1日～	<p>「基礎演習Ⅱ」の共通テーマとして第一次世界大戦の勃発原因研究を設定した。受講学生が、大戦の勃発原因について一次史料を使って分析できるように、関連史料を邦語訳して授業で活用した。</p> <p>その史料としては、大戦勃発研究において最も重要視されているものを選び出した。対象としたのは、サラエヴォ事件(1914年6月28日)後からオーストリア＝ハンガリー共通閣議(1914年7月7日)までのドイツとオーストリア＝ハンガリーの公文書、手記、手紙等である。</p> <p>授業では、場面ごとに5つに区分して史料を分析させ、学生同士で史料の解釈を議論させた。その成果として、受講学生それぞれがオーストリア＝ハンガリーが開戦の方針を固める経緯を考察したレポートを提出した。</p> <p>歴史上の重要史料に触れることはとても好評であったため、この取り組みは次年度も継続する予定である。</p>
学術研究の手続きに関する教材の開発	2020年4月1日～	<p>学術研究を進める際に踏まなければならない手続きを総括的にまとめた資料を加筆修正した。2018年度以来続けている取り組みであるが、学生が問題関心および研究目的の提示、先行研究の紹介と批判、研究課題の設定、研究方法の取捨選択を、実例に基づきつつ理解できる内容になるよう工夫している。「基礎演習Ⅱ」、「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ」、「ヨーロッパ史論文演習」で活用した。</p>
「卒業論文の書き方」(東北学院大学生向け)の執筆	2020年4月1日～	<p>学生が卒業論文の執筆に取り掛かる際に参照するためのマニュアルとして「卒業論文の書き方」を、2015年度以来作成している。2020年度は文献収集の方法が学生にわかりやすくなるよう加筆修正した。2021年度も、「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」の3年生および「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」の4年生に配付し、卒業論文研究等で活用させた。</p>
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>		
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>		
学内の遠隔授業サポートチームへの参加	2020年4月13日～	<p>新型コロナウイルスの流行により、2020年4月13日に学科長の要請により学内の遠隔授業サポートチームの構成員となった。</p> <p>4月15日にはそのミーティングに参加し、オンライン授業の実施方法について情報を共有した。オンライン授業に関する学科教員、学部生・大学院生からの質問にも対応した。4月末には、前期授業の実施方法に関するアンケートに従事した。4月15日と5月7日には歴史学科独自のオンライン授業の講習にも参加した。さらに、7以降は後期授業の実施形態調査に協力した。</p>

「研究・発表の技法」の授業計画の作成	2020年4月1日～	<p>新型コロナウイルスの感染拡大で前期の授業がオンラインになったために、学部1年生は学友も作れず大学に入学した実感を持っていないというメンタル上の深刻な問題が生じた。そのため、学科長が「研究・発表の技法」の担当教員数(コマ数)を増やして、対面授業で実施する計画を策定した。</p> <p>当初の授業計画とは状況(特に受講人数)が大きく変わることとなったため、当初計画にもとづきつつ授業計画を立て直す必要が生じた。そこで、この授業の計画を修正するとともに、担当教員への説明のための資料を作成した。毎授業の30分前に教員控室に集合し、授業内容の説明と調整を担当した。</p>
学生の就職活動の支援	2020年4月1日～	<p>「ヨーロッパ史総合演習」と「ヨーロッパ史論文演習」の所属学生を対象として、就職活動の支援を行った。例年のような、「就活情報交換会」、「OB/OG社会人生活報告会」、「模擬面接」、「就活個別相談会」は実施できなかったものの、適宜、履歴書やESの書き方講座、SPIの講座、就活の進め方講座を実施し、就職活動に関する情報をManabaやメールで断続的に提供し続けた。これらを通じて3年生は次年度の就職活動に向けて、準備を進めるとともに意識を高めた。</p> <p>その他に、3・4年生の履歴書やESの添削依頼や進路相談にも対応した。</p> <p>2021年度は新型コロナウイルスの流行によって新卒採用の状況は厳しさを増したものの、ゼミ所属4年生12名中11名が秋の時点で内定を獲得できていた。次年度も就活支援を継続する予定である。</p>
TA(ティーチングアシスタント)の活用	2020年4月1日～2022年3月31日	<p>学部生の授業「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」、「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」、「ヨーロッパ史専門講読Ⅰ・Ⅱ」において、大学院生をティーチングアシスタントとして活用した。</p>
他大学における講義担当	2020年4月1日～2021年3月31日	<p>2020年度は東北大学文学部の「西洋史概論」(前後期)の講義を担当した。授業においては、世界史への感染症の影響をテーマとするグローバルヒストリーの講義を行った。また、この授業は新型コロナウイルスの流行のため、動画配信型のオンライン授業として実施された。そのため、授業動画を前後期合計でおよそ30回分作成し、それらを毎週金曜日にGoogle Classroomにアップした。授業資料作成・動画収録・Googleへのアップ作業を含めて、授業1回あたり15時間以上かかっている。前後期それぞれで、学生の課題をチェックし成績を提出した。</p>
ドイツ語研究文献の自主的な講読授業	2020年4月1日～2021年3月31日	<p>ヨーロッパ史専攻分野の大学院生の希望により、大学の休業期間もドイツ語研究文献の講読を行った(1回あたり90分、準備時間は毎回90分程度)。新型コロナウイルスの状況に応じてZoomも活用した。これは、大学院修士課程に在籍する大学院生の修士論文研究をサポートすることを目的としたものである。</p> <p>実施日は2020年4月1日、4月3日、4月8日、4月14日、4月16日、5月1日、5月6日、8月5日、8月8日、8月12日、8月19日、8月26日、9月5日、9月15日、2021年1月29日、2月5日、2月19日、2月27日、3月20日、3月27日(3月中は予定)である(2020年3月1日現在)。以上により、合計20回、30時間(準備時間は20時間)となった。</p>
大学院生の研究構想発表会	2020年4月1日～2021年3月31日	<p>2020年は3回(9月8日、12月10日、12月11日)修士2年と修士1年の大学院生の研究構想発表会を独自に実施した。それぞれ年度内の修士論文提出と翌年度の修士論文構想発表に向けた準備を念頭においたものである。現状での研究上の問題点を指摘して、修正や準備を進めるよう促した。</p>
学内のFD研修会への出席(2020年度)	2020年4月1日～2021年3月31日	<p>2020年7月16日、9月16日、12月10日、2021年2月18日、3月12日に文学部、文学研究科および全学のFD研修会にオンラインないし対面で出席し、授業を実施する知識や技能を習得した。講演内容には、オンライン授業に関して、自分の授業に応用可能なものもあったため、実際に授業の中で実践した。</p>

文学部歴史学科1年生の第2グループの主任	2020年4月1日～2021年3月31日	2020年度入学の文学部歴史学科1年生の第2グループの主任を務めた。今年度は新型コロナウイルスの流行により、新入生の精神的なケアが必要と思われたため、特にその点に留意して従事した。 4月に他の担当教員やオリエンテーションリーダーとの打ち合わせを行ったが、4月実施予定であった新入生行事は中止となった。ただし、4月10日に新入生への対応の会議に出席し、第2グループの新入生のメール連絡の整備を進めた。全員に挨拶のメールも送り、質問に適宜回答する等、できる限り細やかな対応に努めた。 学科長が9月に新入生行事「後期新入生オリエンテーション」を実施することを企画したため、グループ主任としてこれに協力した。9月初旬に教養学部の牧野教授と協力の上、その準備を進めた。9月7日には、オリエンテーションリーダーとのZoom打ち合わせ会に出席した。9月16日12:00～14:00に「新入生オンライン・オリエンテーション」を実施した。			
2年生向けの「総合演習」オンライン説明会への出席、総合演習の紹介動画の制作	2020年	2020年11月5日(木)15:00～17:00にオンライン実施された歴史学科2年生向けのゼミ説明会に出席した。2020年度の「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」(杵淵担当)の履修方法や授業内容の予定について説明し、学生の個別相談に対応した。 また、学科長の要請に応じて総合演習の内容を説明する動画を制作し、学生がゼミ選びの参考にできるようManabaに掲載した。			
新入生(来年度学部1年生)のグループ主任の準備	2019年～	2020年度入学生のグループ主任を担当するため、グループ主任打ち合わせ会(3月27日)に出席し、学生協力者(オリエンテーションリーダー)と準備の協議を行った。			
現在の課題・目標	昨年度設定した「来年度の進捗目標」は以下の通りであった。 ①. 授業計画の改善を進める。2020年度は、「総合演習Ⅰ・Ⅱ」においてゼミ全体の事業は行わず、所属学生が卒業論文に向けて着実に研究を進められるように指導をする予定である。 ②. 学生の主体性を重視した研究活動の指導を継続し、4年生は卒業論文を、3年生はプレ卒論を完成させられるよう指導する。 ③. 学業との両立の観点から、3年生および4年生の進路選択に関する支援を継続する。				
今年度の進捗状況	①. 新型コロナウイルスの流行による授業環境の変化に備えた目標設定が功を奏して、おおむね計画通りに進められた。「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」の学生はそれぞれ自らの卒業論文に向けて、テーマの設定、先行研究の整理、課題の設定等を行うことができた。「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」の学生は卒業論文計画にもとづいて研究を進め、卒業論文を完成されることができた。 ②. おおむね進捗した。学部3年生には、学術的な研究方法を習得した上で各自の関心に沿って研究を進め、プレ卒論を完成させるよう指導した。ただし、プレ卒論の進捗状況は、新型コロナウイルスの流行による影響もあり、個人差が大きくなった。学部4年生は前年度の調査研究を継続し、卒業論文を完成させた。 ③. 予定通りに進捗した。学部3年生には自己分析、履歴書ES作成、就活の進め方等について指導を行った。学部4年生には、進路選択に関する個別相談や書類添削などの指導を粘り強く行った。その成果として、ほとんどの4年生が2020年4月末までに内定を得て、進路を早期に安定させることができた。そのため、進路決定に関わる心理的不安に煩わされることなく、学生は卒業論文に打ち込むことができたと考えられる。				
来年度の進捗目標	①「ゼミ関連」:新型コロナウイルスの流行状況をこらみつつ、授業計画の改善を進める。2021年度は、「総合演習Ⅰ・Ⅱ」において「第一次世界大戦の勃発原因」を共通テーマに設定し、ゼミ全体として研究を行う。「論文演習Ⅰ・Ⅱ」においては、所属学生が卒業論文に向けて着実に研究を進められるように指導をする予定である。 ②「ゼミ以外の授業」:新型コロナウイルスの流行を考慮し、特に1年生と2年生に関して学生が授業に安心して専念できるように留意する。また、ヨーロッパ史に強い関心をもつ学生に伝えられるように授業内容を改善する。 ③「授業以外のサポート」:学業との両立の観点から、3年生および4年生の進路選択に関する支援を継続する。				
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>					
ラジオ番組「学院大ジンプンRadio」制作放送事業	単著	2021年3月	東北学院大学研究ブランディング事業、『東北学院大学研究ブランディング事業報告書』	杵淵文夫	pp.106-109

20世紀初頭の中欧構想と民族観の研究	単著	2021年3月	東北学院大学研究ブランディング事業、『東北学院大学研究ブランディング事業報告書』	柁淵文夫	pp.94-99
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>					
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>					
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>					
<b>G. 学会における研究発表</b>					
世紀転換期オーストリアの通商政策論:オーストリア工業と中欧	単独	2020年9月	ドイツ現代史学会第42回大会 個別報告Ⅱ(未記入)	柁淵 文夫	
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	<p>昨年度設定した「来年度の進捗目標」は以下の通りであった。</p> <p>①. オーストリア＝ハンガリーの経済団体の史料分析に着手する。2020年度は、世紀転換期のオーストリア工業団体における通商政策論争を分析し、その研究成果を学術誌に論文を投稿する。</p> <p>②. 引き続き、世紀転換期オーストリア＝ハンガリーの経済や通商政策に関する先行研究の整理を進める。今後の中長期的な研究に向けて、従来の研究の問題点をより明確に抽出することおよび批判を展開する土台を作ることを目指す。</p> <p>③. 今年度も、「東北学院大学研究ブランディング事業」の人文科学研究推進部門の研究計画を推進する。</p>				
今年度の進捗状況	<p>①. ある程度進捗した。2020年度は、オーストリアの経済団体「工業家クラブ」の定期刊行物と「オーストリア工業家中央連盟」の刊行物の分析を進めた。その結果、これらの団体を中心に、世紀転換期オーストリアにおける通商条約の改定をめぐる議論の流れを検討した。その成果は、9月にドイツ現代史学会で公表したものの、現時点で論文としてまとめるに至っていない。</p> <p>②. ある程度進捗した。オーストリア＝ハンガリーの経済や通商の歴史に関する二次文献を中心に研究状況の把握を進めた結果、オーストリアの経済団体およびオーストリアの通商政策に関する研究水準を整理することができた。</p> <p>③. 進捗した。2020年度は「東北学院大学研究ブランディング事業報告書」の編集を担当し、2021年3月に刊行した。これをもって、同事業に関する活動は完了した。</p>				
来年度の進捗目標	<p>①. オーストリア＝ハンガリーの経済団体の史料分析を継続する。2021年度は、2020年度に学会報告した世紀転換期のオーストリア工業団体における通商政策論争について論文を執筆し学術誌に投稿する。</p> <p>②. 引き続き、世紀転換期オーストリア＝ハンガリーの経済や通商政策に関する先行研究の整理を進める。今後の中長期的な研究に向けて、従来の研究の問題点をより明確に抽出することおよび批判を展開する土台を作ることを目指す。</p> <p>③. 大学授業と連携する形で、「第一次世界大戦の勃発原因」の研究に着手する。今年度は、大戦の勃発原因に関して、特にバルカン戦争以降のドイツとオーストリア＝ハンガリーのバルカン外交政策に関する先行研究の状況を把握する。</p>				
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>					
2020年～	西洋史研究会 評議員				
2019年～	東北史学会				
2012年4月～	東欧史研究会 会員				
2010年4月～	東北史学会 会員				
2008年4月～	ドイツ資本主義研究会 会員				
2007年4月～	社会経済史学会 会員				
2004年4月～	西洋史研究会 会員				
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等	
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					



来年度の進捗目標

- 大学案内編集委員(2016年度～継続)  
2020年度は東北学院大学の『大学案内2022』の歴史学科担当の編集委員を務めた。『大学案内2021』の第2版の校正に従事し、大学案内編集委員会のメール審議(7月13日)に参加した。主に歴史学科の紹介ページに関して、インタビューの人選(3年生、4年生、既卒者、教員紹介)と依頼、対談ページの人選(3年生、4年生、既卒者)と対談への立ち合い(12月20日)、原稿の校正作業(1月～3月)などを行った。
- AO面接委員(2020年度～継続)  
2020年度はAO面接委員として、総合型選抜の入試に従事した。また、AO面接委員合同説明会(7月30日)に出席し、実施方法を確認した。また、総合型選抜試験の判定会議の審議(10月16日)に参加した。面接委員としても、A日程1次面接(10月13日、15日)および推薦入試の調査書評価・面接(11月19日)、B日程2次面接(12月19日)を担当した。また、TG推薦の書類審査・小論文採点(12月19日)にも従事した。
- 歴史学科編入学試験の面接委員  
2020年10月1日に歴史学科編入学試験の面接を行った。
- 一般入試問題(世界史)作成委員、校正委員、採点委員(2015年度～継続)  
2020年度は、一般入試の「世界史」の問題の作成(大問2つ)、校正(初校:10月19～21日、再校:11月10～12日、三校:12月8日、下見:1月8日)、研究室待機および採点(2019年2月1-4日、3月3日)に従事した。
- オープンキャンパス個別相談の担当  
2020年度は「夏のオープンキャンパス」(8月22日)において個別相談を担当した。
- 模擬授業(2019年度～継続)  
2020年度は11月21日に福島県郡山市の尚志高等学校において模擬授業を行った。
- 2021年度ヨーロッパ史分野の授業担当者の調整(2015年度～継続)  
2021年度のヨーロッパ史分野の授業科目の担当者について、資料を準備した上で、9月14日に調整の話し合いを行った。非常勤講師への依頼等を決定の上、決定内容を学科長に報告した。
- 大学入学者選抜 大学入試共通テスト試験監督(2019年度～継続)  
2020年度は大学入試センター試験監督を担当した。第1回監督者説明会(2020年12月17日)と第2回監督者説明会(12月23日)に出席し、監督業務の説明を受けた。大学入試共通テスト(2020年1月18日と19日)では予備監督として、1日目の試験監督に従事した。
- 東北学院大学研究ブランディング事業の人文科学研究推進部門長(2017年度～継続)  
2017年度から部門長として人文科学研究推進部門の活動に従事している。外部評価報告書の確認(2020年4月7日)、研究ブランディング事業計画委員会のメール審議(6月8日)、研究ブランディング事業研究推進調整委員会(2021年3月12日)および同委員会のメール審議(6月2日、11月2日)に参加した。  
さらに、『東北学院大学研究ブランディング事業報告書』の編集を担当した。研究機関事務課と協力し、主として、報告書の全体構成案の作成、退職する担当職員からのデータ引継、本事業参加者への原稿依頼、提出原稿の再編集、シンポジウム・講演会報告の再編集、学科長挨拶の原案作成、印刷業者(東北プリント)への入稿と調整(2021年2月19～3月2日)と校正(3月3～10日)、報告書送付先等の調整を行った。

VI 学内における管理運営に関する諸活動

○教務委員(2017年度～継続)

教務委員として、新入生オリエンテーションに関する対応(時間割表モデルの作成・オリエンテーション実施の協議(4月6日)、オンラインオリエンテーションの打ち合わせ(4月9日)、履修登録説明の動画作成への協力(4月13日)、)、新型コロナウイルス流行を踏まえた授業実施方法変更への対応(「研究・発表の技法」の実施方法の検討(4月～1月)、2020年度編入学生の単位読み替えに関する検討と対応(学科長・教務との打ち合わせ、規程についての情報収集、資料の読み込み本人との電話連絡など、2020年4月10日～17日)、(拡大)教務委員会への出席(6月24日、8月6日、10月1日、11月12日)およびメール審議への参加(2021年3月3日)、文学部教授会における学務部報告、前期と後期の試験実施および成績評価方法の周知(7月、1月)、文学部将来構想委員会への出席(12月10日)、2021年度科目「研究・発表の技法」のシラバス作成、学科学生の履修指導資料(履修指導の手引き、履修モデル)の作成(2021年3月)、2021年度編入学生の単位読み替えの準備作業(2021年3月2日～)を行った。また、2023年度カリキュラム改正に向けた準備に着手した。

○大学要覧編集委員の補助(2020年度、2021年1月18-25日)

大学要覧(シラバス)編集委員の竹井英文准教授の要請により、歴史学科の2021年度『大学要覧』の校正(アジア史、ヨーロッパ史、司書資格科目)を取りまとめた。

○時間割調整委員(2017年度～継続)

時間割調整会議(2021年2月17日)に出席し、問題点(例:資格科目や必修科目等のバッティング等)の事前調査、2021年度の科目の開講校時の調整などを行った。

○文学部・歴史学科点検評価委員(2017年度～継続)

文学部および歴史学科の点検評価委員会のメール審議(2020年5月10日、9月23日、11月18日、2021年3月8日)に参加した。

○文学部・歴史学科将来構想委員(2016年度～継続)

文学部将来構想委員会(12月10日、Zoom開催)に出席し、2023年のカリキュラム改正、非常勤講師のコマ数、教員構成などの議題について審議した。

○教職課程センター所員(2017年度～継続)

2019年度は教職課程センター所員会議のメール審議(2020年4月16日、9月3日、12月10日)、および所員会議(2021年3月17日)に出席した。

○ヨーロッパ文化総合研究所所員(2020年度～継続)

2020年度は東北学院大学ヨーロッパ文化総合研究所所員として、研究所の活動に従事した。本年度は、研究所総会のメール審議への参加(5月11日)、研究文献(グリム研究基礎史料)の購入、所員会議への出席(11月26日)、学術誌『ヨーロッパ文化史研究』第22号の編集委員(12月24日)、研究所事務アルバイトの募集(10月以降)、講演会講師のスライド依頼(森本慶太さん)に従事した。

※制限文字数1500文字を超えたため、後半部分を『V芸術・実技等活動-来年度進捗』に移行。

2020年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	准教授	氏名	竹井 英文	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
ゼミにおける地域史研究活動の実践		2020年～		仙台市周辺にフィールドを定め、城館跡の縄張調査、古文書・古記録の調査、石造物や古道の調査、古絵図の調査を行い、総合的に地域史を研究する活動をしている。昨年度までの松島町に関する成果は、今年度論文として公開した。今年度は昨年度から続けている東松島市域をフィールドに研究をした。			
「古文書学Ⅰ」の授業における工夫		2020年～		前年度と同様、古文書に記された文字を解説・読解するだけでなく、①本物の古文書を使っての実演・解説、②パワポによるカラー画像を使用した解説、③古文書のコピーを配布して折り方・封の仕方を学生に体験してもらい、④サインである花押を実際に書いてもらい、かつ自分オリジナルの花押を作ってもらい、などのことをした。オンライン授業であったが、動画を通じて以上のことを実施した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>①さまざまな視点、幅広い視野から歴史を考えることができる能力の育成</li> <li>②きちんとした日本語で論理的な文章が書ける能力の育成</li> <li>③授業以外の時間における学生とのコミュニケーションを図る</li> <li>④少人数授業におけるアクティブ・ラーニングを推進する</li> <li>⑤フィールドワークの充実</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>①前年度に引き続き「日本史概説Ⅱ」「歴史の中の東北」などの講義で、前後の時代との関係や日本列島・東アジアレベルとの関係などに適宜触れ、意識的に取り組んだ。</li> <li>②manabaやGoogleドライブを通じて授業課題の要約文・レポートにコメント・添削・返却するなどして対応した。</li> <li>③新型コロナウイルスの影響で対面機会が激減し、思うようにできなかった。</li> <li>④前期はZoomを使って少人数グループを作り、可能な限り実施した。後期は対面授業となったのではほぼ例年通り実施できた。</li> <li>⑤新型コロナウイルスの影響により、後期に1度だけ現地調査を実施した以外はできなかった。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>①引き続き今年度と同様に行いたい。</li> <li>②文章力・読解力が不安な学生が年々増加している感があるため、少なくともゼミについては読書習慣を身につけさせる。</li> <li>③オンラインでの交流イベントを増やすことで対応したい。</li> <li>④状況次第だが、グループワークを増やし、可能な限り教室外での調査研究活動も行いたい。</li> <li>⑤状況次第だが、可能な限り現地調査を増やしたい。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
「東北地方における中世城館関係史料集成―宮城県編―」		単著	2021年3月	『東北学院大学論集 歴史と文化』(63)		竹井英文	pp.19-100
「中近世移行期松島高城地域史の研究」		単著	2020年12月	東北学院大学東北文化研究所、『東北学院大学東北文化研究所紀要』(52)		竹井英文	pp.1-36
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
重層する地域と戦国末期の東日本		単著	2021年1月	吉川弘文館、『本郷』(151)		竹井英文	pp.22-44

「戦国争乱と東北社会」「中世東北の城」「東北近世史の幕開け」「中近世移行期の東北の城」『大学で学ぶ 東北の歴史(一般販売版)』	共著	2020年10月	吉川弘文館	東北学院大学文学部歴史学科編。竹井英文ほか18名	pp.89-109
『列島の戦国史7 東日本の統合と織豊政権』	単著	2020年10月	吉川弘文館	竹井英文	pp.1-264
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>					
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>					
<b>G. 学会における研究発表</b>					
「戦国の城のライフサイクル～本佐倉城築城から廃城、そして現代～」	単独	2021年2月	千葉県酒々井町 令和2年度国史跡本佐倉城跡講演会(新型コロナウイルスの影響で講演会は中止。レジュメのみ一定期間公開)(不明)	竹井英文	
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	①中近世移行期東国の政治史を研究する。 ②ゼミ活動と連動して、仙台市周辺の中近世移行期の地域史研究を行う。 ③東国の城郭関係史料を収集・調査し、個別研究を進めつつ、単著を出版する ④東北地方の中世城館関係史料を網羅的に収集し、データベースを構築して公表する。 ⑤委員として活動している各地の城跡・自治体史に関する研究を進める				
今年度の進捗状況	①上記『列島の戦国史7 東日本の統合と織豊政権』を刊行することができた。 ②上記「中近世移行期松島高城地域史の研究」を刊行することができた。 ③『戦国期東国城郭の基礎的研究(仮)』として原稿執筆・見直しを進めており、来年度中に刊行したい。 ④上記「東北地方における中世城館関係史料集成一宮城県編」を刊行することができた。 ⑤今年度は新型コロナウイルスの影響で委員会がほとんど開催されず、思うように進まなかった。				
来年度の進捗目標	①引き続き、東国政治史の個別研究を進めていく。 ②現在ゼミで行っている東松島市域の研究を進める。 ③引き続き、著書刊行に向けて作業を進め、来年度中の刊行を目指す。 ④引き続き史料収集・調査を進め、福島県編を刊行したい。 ⑤可能な限り委員会に参加し、調査研究を進めていきたい。				
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要	
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>					
2018年6月～	茨城県中世城館跡総合調査委員会 専門委員				
2018年3月～	杉山城跡史料整備検討委員会(埼玉県嵐山町教育委員会) 委員				
2017年～	相馬市史編さん中世部会 執筆委員				
2016年12月～	北上市史編さん委員会古代・中世部会 委員				
2013年10月～	岩櫃城跡保存整備委員会(群馬県東吾妻町教育委員会) 委員				
2013年8月～	笠間城跡調査指導委員会(笠間市教育委員会) 委員				
2012年11月～	静岡県伊豆の国市史跡等整備調査委員会(菰山城跡整備部会) 専門委員				
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>					

1. AO面接委員
2. 文学部将来構想委員会委員
3. シラバス編集委員会委員
4. 時間割調整委員
5. 文学部点検評価委員会委員
6. 全学教育課程委員会委員
7. 学生委員

2020年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	講師	氏名	金子 祥之	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
マイクロリズムにもとづく民俗調査		2020年9月～		コロナ禍のため、課外活動が大きな制約を受けた。フィールドワークといわれる現地調査による学習機会が失われてしまった。それを補うため、「民俗学調査入門Ⅱ」「民俗学総合演習Ⅱ」では、感染状況を見計らいながら、マイクロリズムの考えにもとづく非接触型の現地調査を実施した。			
オンデマンド型講義の提供		2020年4月～		「民俗学概説Ⅰ」「民俗学の諸問題Ⅱ」の講義用にyoutubeチャンネルを開設し、オンデマンド授業に対応した学習機会を提供した。毎回の小課題を通じ授業内容の理解度を確認し、次回の講義においてフィードバックを行なった。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
岩本通弥, 門田岳久, 及川祥平, 田村和彦, 川松あかり編『民俗学の思考法—いま・ここ>の日常と文化を捉える』慶応義塾大学出版会		2021年3月		担当:分担執筆, 範囲:金子祥之「自治と互助」「公共民俗学」			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
『「自治と互助」「公共民俗学」』	単著	2021年3月	『民俗学の思考法—いま・ここ>の日常と文化を捉える』慶応義塾大学出版会	岩本通弥, 門田岳久, 及川祥平, 田村和彦, 川松あかり編	pp.200-1,232-3		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
『東日本大震災と変わりゆく生活文化』	単著	2021年1月	『BIOCITY(ビオシティ)』85 特集:福島記憶・記録—複合災害と「文化」のレジリエンス	未記入	pp.30-37		
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
書評「山口弥一郎旧蔵資料調査報告書」	単著	2021年3月	『福島の民俗』(49)	金子祥之	pp.90-92		
書評「震災復興と生きがいの社会学」	単著	2021年3月	『神奈川大学評論』(97)	金子祥之	pp.122		
<b>G. 学会における研究発表</b>							
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							

来年度の進捗目標			
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 基盤研究(B)	2017年度～2021年度	(研究分担者)	<p>本研究は、広義の災害(公害・環境問題、戦争、自然災害など)が社会問題として表出する際のオラリティの力について、①オラリティが抵抗や納得のかたちとして表出する力、②文字化され記録化されたときに獲得するオラル・プロテストの力、③制度的に承認されることによって獲得されるコモン・メモリーの力に着目して、オルタナティブな当事者性や常なる現在を含む歴史的記述の可能性を拓いていくことを目的としている。</p> <p>オラリティとリテラシー、在地性と普遍性、エンパワメントとディスカレッジという3つの分析軸を用いて、これまでに、①オラリティをめぐる&lt;語る・語らない・語れない&gt;の葛藤、②制度化されたオラリティが抱える&lt;当事者の高齢化と役割の固定化&gt;という課題と世代交代や役割の流動化への動き、③同じ日常の異なる世界を生きる人々の私的な経験のパブリック化にみる&lt;ねじれ&gt;、④オラリティが文字化され、固定化されることで生まれる「衝突」について焦点化してきた。</p> <p>負の経験にカテゴライズされる出来事は、経験者でなければ&lt;語れない・わからない&gt;という当事者性の問題がつきまとうが、こうした語りの真正性を超え、被害者でありながら加害者であるという&lt;被害-加害&gt;のねじれをいかに紐解くか。経験や語りの共有は近い関係で難しく、同じ当事者であっても世代の違いや個別具体的な経験の差異によって沈黙せざるをえないオラリティがあることに留意しながら、いかに語りを拓いていくか。また、語られた者の応答性をいかに捉えていくか。語り方、伝え方、その「方法」について議論を深めた。</p>

<p>科学研究費補助金 基盤研究(B)</p>	<p>2017年度～2020年度</p>	<p>(研究分担者)</p>	<p>研究期間の最終年度にむけて、日本における生活改善諸活動の展開に関するデータベース作成作業と個別研究課題に関する現地調査を実施した。2019年度は研究計画終了の前年度にあたるため、年度末に研究成果の統合にむけての協議が実施することを前提に調査研究活動を行った。2018年度に実施した個別研究の進捗状況を共有することで、次の研究活動を行なった。</p> <p>第二次世界大戦後に日本国内で展開した生活改善諸の展開とその地域差等を検証することを目的とした生活改善諸活動データベース作成作業については、関東地方を含む東日本を小島孝夫、滋賀県を中心とした関西地方を渡部圭一、福岡県を中心とした九州地方を田村和彦が担当した。併せて、小島孝夫・渡部圭一・田村和彦・金子祥之・及川祥平・竹内由紀子・加賀谷真梨は沖縄県を含む日本国内の生活改善諸活動に関する資料収集や追跡調査を実施した。これらの作業により、日本国内の生活改善諸活動の展開と、それらの対象となる地域や集団により受容する事項や受容する主体に差異が見られることが明らかになった。</p> <p>日本の生活改善諸活動と周辺の国々との関係や影響を明らかにするための国外の調査については、中国を周星、大韓民国を金賢貞、台湾民国を富岡真央子が担当し、現地での関係資料収集と関係調査を実施した。</p> <p>国内外の現地調査から明らかになってきたことは、生活改善諸活動によって社会の平準化を図ろうとした社会的な試みが、その後展開された高度経済成長的な活動により個人的な努力によって解決されていく傾向がみられた。</p> <p>2019年度末に予定していた二つの研究方法から得られた研究成果の統合・検証のための研究会は新型コロナウイルス感染症が急速に感染範囲を拡大させたため、メール等での情報交換や協議という方法をとらざるを得なくなった。そのために、研究成果の統合・検証のための機会は次年度に持ち越すことになった。</p>
-------------------------	----------------------	----------------	--

**IV 学会等及び社会における主な活動**

<p>2020年5月～</p>	<p>現代民俗学会 編集委員</p>
<p>2019年6月～2021年6月</p>	<p>環境社会学会 第5期震災原発事故問題特別委員会委員</p>
<p>2018年10月～2020年10月</p>	<p>日本民俗学会 第32期評議員</p>
<p>2018年6月～2020年9月</p>	<p>日本学術会議、環境学委員会環境思想・環境教育分科会「環境教育の思想的アプローチ検討」小委員会 委員</p>
<p>2018年5月～2020年5月</p>	<p>現代民俗学会 編集委員</p>
<p>2018年5月～2020年5月</p>	<p>現代民俗学会 第6期運営委員</p>
<p>2017年11月～</p>	<p>日本村落研究学会 ジャーナル編集委員</p>
<p>2017年7月～</p>	<p>檜枝岐村教育委員会檜枝岐村民俗史編さん委員会 専門員(民俗)</p>
<p>2017年6月～</p>	<p>環境社会学会 会員</p>
<p>2015年11月～</p>	<p>日本村落研究学会 会員</p>
<p>2014年5月～</p>	<p>現代民俗学会 会員</p>

**V 芸術分野や体育実技等における主な活動**

<p>展覧会・演奏会・競技会等の名称</p>	<p>場 所</p>	<p>開催年月日(西暦)</p>	<p>発表・展示等の内容等</p>
<p>現在の課題・目標</p>			
<p>今年度の進捗状況</p>			
<p>来年度の進捗目標</p>			

**VI 学内における管理運営に関する諸活動**





2020年度							
所属	文学部 教育学科	職名	教授	氏名	稲垣 忠	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
<b>教育実践上の主な業績</b>		<b>年月日(西暦)</b>		<b>概要</b>			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
ルーブリックの活用		2020年～		「研究・発表の技法」において、ラーニングコモンズが作成したライティングルーブリックを学生に紹介し、レポート作成の際に参照するよう指示した。また、成績評価においてライティングルーブリックの一部を活用した。「教育工学実習」では学生自身がルーブリックを作成する学習活動を取り入れた。			
プロジェクト学習の実施		2020年～		「教育工学実習」において、小学校教科書を題材に動画制作、プレゼンづくり等に取り組むプロジェクト学習を設計する実習を試みた。			
学習支援システム(eラーニング)の活用		2020年～		教材公開、レポートやコメントの収集等が行える学習支援(eラーニング)システムmanaba courseを利用し、情報提供の効率化と学習評価との統合、学生へのフィードバックの充実等を図った(教育方法、教育工学実習、ICT教育論、研究・発表の技法、教職実践演習)			
デジタルポートフォリオの活用		2020年～		教職課程履修学生の学習履歴を把握できる「manaba-folio」を用いて学習履歴に基づく学習支援や授業中の課題提出、指導を行った(教職実践演習)			
参加型授業の実践		2020年～		ポスターセッション、ワークショップ等参加型の学習活動を取り入れ、学習者の主体的な参加を促す指導を実施した(教育方法、ICT教育論、教育工学実習)			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
慈恵医科大学看護学科FD研修会講師		2020年12月25日		「ICT活用と授業・学びの改善」と題して、初等中等教育におけるICT活用の実態と教育とテクノロジーの関係に関する講演を行った。			
東北学院大学第26回FD講演会・研修会		2020年12月10日		「コロナ禍での授業運営について」をテーマにした3名の先生方からの報告について、コーディネイトおよびコメントを行った。東北学院大学FDニュースVol.33に掲載。			
明海大学FD研修会講師		2020年12月8日		明海大学の教員を対象に「オンライン授業の可能性と課題点」に関する講演および同大教員との対談を行った。			
NewEducationExpo講師		2020年11月17日		NewEducationExpoにおいて「オンライン授業の可能性と課題点～全学の取り組みを支援した立場から」と題して講演を行った。			
東北学院榴ヶ岡高校TG選抜コース向け講話		2020年10月18日		東北学院榴ヶ岡高校1年・2年TG選抜コースの「課題研究」の一環として、榴ヶ岡高校礼拝堂にて、「研究とは何か」と題した講演を行った。			
文学部FD研修会		2020年7月16日		「遠隔授業実践に関する意見交換会～評価を中心に」において話題提供および意見交換のコーディネイトを担当した。東北学院大学FDニュースVol.33に掲載。			
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
<b>現在の課題・目標</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>①新設科目「情報教育論」においてプログラミング教育の指導方法の開発、探究における土樋キャンパス図書館の活用等を試みる</li> <li>②新設科目「教育学演習Ⅰ・Ⅱ」の運営体制の確立、ラーニングコモンズの活用</li> <li>③manabaのオンラインテスト機能を活用した自主学習支援方策の検討(教育の方法と技術、ICT教育論等)</li> </ul>					
<b>今年度の進捗状況</b>		<p>コロナ禍への対応により一部変更しながら実施した。</p> <p>①では、オンタイム授業となったが、プログラミング体験ができるウェブサイトを活用した。探究では図書館の利用を取りやめ、クラウド上での共同作業ができる環境を構築した。</p> <p>②では、年間を通してミニ卒論を制作するカリキュラムを開発した。また、最終発表会はラーニングコモンズを会場に他の4ゼミと合同で開催した。</p> <p>③では、オンデマンド授業となった教育の方法と技術で活用した。ICT教育論ではレポート・掲示板へのふりかえりとそれへの講評に力点を置いた。</p>					

<b>来年度の進捗目標</b>	現在の目標はおおむね達成したため、来年度は以下の3点に新たにに取り組む ①新設科目「メディアリテラシー教育論」において学生のメディア制作に関する指導方法の開発に取り組む ②新設科目「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」の運営体制の確立、ラーニングコモンズの活用 ③新設科目「特別活動・総合的な学習の理論と方法」において探究学習のデザインに関する指導方法の開発に取り組む				
<b>II 研究活動</b>					
<b>著書・論文等の名称</b>	<b>単著・共著の別</b>	<b>発行又は発表の年月 (西暦)</b>	<b>発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称</b>	<b>編者・著者名</b>	<b>該当頁数</b>
<b>A. 学術書</b>					
情報活用型プロジェクト学習ガイドブック：探究する学びをデザインする！：教科の「プチPBL」で探究する力を育てよう『情報活用型プロジェクト学習ガイドブック：探究する学びをデザインする！：教科の「プチPBL」で探究する力を育てよう』	共著	2020年8月	明治図書出版, 明治図書出版, 明治図書出版	稲垣忠(編著)	pp.136
学校アップデートー情報化に対応した整備のための手引き『学校アップデートー情報化に対応した整備のための手引き』	共著	2020年5月	さくら社, さくら社, さくら社	堀田 龍也 為田 裕行, 稲垣 忠, 佐藤 靖泰 安藤 明伸	pp.56-64
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>					
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>					
教育の未来ーコロナ禍・デジタル化・少子化の先にある公教育を考える	単著	2021年3月	東北学院大学教育学科論集 第3号, 東北学院大学教育学科論集 第3号	不明	pp.112-113
情報活用能力を学びの基盤に	単著	2020年6月	Rimse No.28, Rimse No.28	不明	pp.44388
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>					
情報活用能力のカリキュラム・マネジメントの現在	単著	2021年3月	学習情報研究, 2021年3月号, 学習情報研究, 2021年3月号	不明	pp.44419
個別最適化と学校の役割の再考	単著	2020年6月	学習情報研究 2020年7月号, 学習情報研究 2020年7月号	稲垣忠, 菅原弘一, 高田和江	pp.44545
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>					
「授業でICTを使う」ことが目的ではない『「授業でICTを使う」ことが目的ではない』	単著	2021年3月	教職研修2021年3月号, 教職研修2021年3月号, 教職研修2021年3月号	不明	pp.20-22
高校の授業の新しいカタチ～授業の外・教室の外とつながる学びをデザインする『高校の授業の新しいカタチ～授業の外・教室の外とつながる学びをデザインする』	単著	2020年11月	高等教育2020年11月号, 高等教育2020年11月号, 高等教育2020年11月号	不明	pp.30-33
対面授業と家庭学習のハイブリッドで学びの質を高める『対面授業と家庭学習のハイブリッドで学びの質を高める』	共著	2020年9月	教育開発研究所, 「ポスト・コロナの学校を描く」, 教育開発研究所, 「ポスト・コロナの学校を描く」, 教育開発研究所, 「ポスト・コロナの学校を描く」	「教職研修」編集部編	pp.98-107
学びの個別最適化『学びの個別最適化』	単著	2020年8月	授業力&学級経営力, 2020年8月号, No.125, 授業力&学級経営力, 2020年8月号, No.125, 授業力&学級経営力, 2020年8月号, No.125	不明	pp.20-23
個別最適化された学びにおける評価・テスト『個別最適化された学びにおける評価・テスト』	単著	2020年6月	教職研修 2020年6月号, 教職研修 2020年6月号, 教職研修 2020年6月号	不明	pp.28-29
子どもが授業以外でも学べる環境を整備し授業そのものを変えていく必要がある『子どもが授業以外でも学べる環境を整備し授業そのものを変えていく必要がある』	単著	2020年6月	総合教育技術 2020年6月号, 総合教育技術 2020年6月号, 総合教育技術 2020年6月号	不明	pp.40-44

情報活用能力をどのように育成するのか『情報活用能力をどのように育成するのか』	単著	2020年5月	教育展望 2020年5月号, 教育展望 2020年5月号, 教育展望 2020年5月号	不明	pp.48-54
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>					
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>					
<b>G. 学会における研究発表</b>					
5つの学習プロセスに情報活用能力を位置づけた各教科版情報活用能力ベーシックの提案		2021年3月	AI時代の教育学会第2回,8-9	小林祐紀,秋元大輔,稲垣忠,岩崎有朋,佐藤幸江,佐和伸明,前田康裕,山口真希,中沢研也,渡辺浩美,中川一史	
子ども向けプログラミング体験オンラインイベントの実施と学習効果の調査		2021年3月	情報処理学会 コンピュータと教育研究会 159回研究発表会,5p	松本章代,稲垣忠,菅原研	
子ども向けプログラミング体験オンラインイベントの実施と学習効果の調査	共同	2021年3月	情報処理学会 コンピュータと教育研究会 159回研究発表会(不明)	松本章代, 稲垣忠, 菅原研	pp.5p
5つの学習プロセスに情報活用能力を位置づけた各教科版情報活用能力ベーシックの提案	共同	2021年3月	AI時代の教育学会第2回発表集録(不明)	小林祐紀、秋元大輔、稲垣忠、岩崎有朋、佐藤幸江、佐和伸明、前田康裕、山口真希、中沢研也、渡辺浩美、中川一史	pp.8-9
コロナ禍のなか一人一台・個別最適化の進展による生徒の変容		2020年10月	日本教育メディア学会第27回年次大会,85-88	三浦 隆志,稲垣 忠	
「本物」感を大切に情報技術や情報社会を考える授業づくり		2020年10月	日本教育メディア学会第27回年次大会, 31-32	菅原 弘一,稲垣 忠,菅原 翔太	
教科横断の資質・能力の育成を支援するカリキュラムマネジメントシステムの検討		2020年10月	日本教育メディア学会第27回年次大会,33-34	稲垣 忠,後藤康志,泰山裕,豊田 充崇,松本章代	
コロナ禍のなか一人一台・個別最適化の進展による生徒の変容	共同	2020年10月	日本教育メディア学会第27回年次大会(不明)	三浦 隆志, 稲垣 忠	pp.85-88
「本物」感を大切に情報技術や情報社会を考える授業づくり	共同	2020年10月	日本教育メディア学会第27回年次大会(不明)	菅原 弘一, 稲垣 忠, 菅原 翔太	pp.31-32
カリキュラムマネジメントシステムの国外動向に関する調査		2020年9月	日本教育工学会 2020 年秋季全国大会,519-520	稲垣 忠,豊田 充崇,後藤 康志,泰山 裕,松本章代	
ラーニング・コモンズの学生スタッフに求められる能力の検討		2020年9月	日本教育工学会 2020 年秋季全国大会,427-428	遠海 友紀,嶋田 みのり,岩崎 千晶,村上 正行,稲垣 忠	
ラーニング・コモンズの学生スタッフに求められる能力の検討	共同	2020年9月	日本教育工学会2019年秋季全国大会(不明)	遠海 友紀,嶋田 みのり,岩崎 千晶,村上 正行,稲垣 忠	pp.427-428
カリキュラムマネジメントシステムの国外動向に関する調査	共同	2020年9月	日本教育工学会 2020 年秋季全国大会(不明)	稲垣 忠,豊田 充崇,後藤 康志,泰山 裕,松本章代	pp.519-520
ライティングルーブリックに対する学生の認識とレポート作成時の意識への影響		2020年6月	大学教育学会第42回大会発表要旨集録 p196-197	遠海 友紀,嶋田 みのり,稲垣 忠	
ライティングルーブリックに対する学生の認識とレポート作成時の意識への影響	共同	2020年6月	大学教育学会第42回大会発表要旨集録(不明)	遠海 友紀,嶋田 みのり,稲垣 忠	pp.196-197
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
デジタル社会の学びのかたちVer.2 : 教育とテクノロジーの新たな関係『デジタル社会の学びのかたちVer.2 : 教育とテクノロジーの新たな関係』	共著	2020年10月	北大路書房, 北大路書房, 北大路書房	Collins, Allan, Halverson, Richard著 稲垣, 忠(担当:編訳)・ 亀井美穂子・林向達・ 金子大輔・益川弘如・ 深見俊崇	pp.232

I. 特許			
現在の課題・目標	①カリキュラムマネジメントに関する調査研究を小学校学習指導要領の本格実施にあわせて行う ②引き続き各地の教育委員会、学校と連携する。中学校・高校段階を含めて幅広く取り組む ③書籍と関連した論文をまとめ、投稿する。 ④その他、企業との共同研究によるカリキュラム・教材開発等を行う		
今年度の進捗状況	①については、科研費を活用し、教科書資料の収集とともにカリキュラムマネジメント支援システムに関する調査、開発の経過報告等の研究発表および関連する原稿寄稿を行った。 ②については、仙台市、宮城県、山形県、福島県、青森県、秋田県、栃木県、群馬県、千葉県、東京都、長野県、鳥取県、島根県、香川県、徳島県、熊本県、長崎県等での教員研修をそのほとんどをオンラインの形式で延べ1000名以上を対象に実施した。これらの研修に関する研究発表、雑誌記事等の執筆を行った。 ③については、8月に書籍として出版した。 ④については、スマートグラスの活用に関する共同研究を実施した。		
来年度の進捗目標	①カリキュラムマネジメントに関する調査研究を中学校学習指導要領の本格実施にあわせて行う ②引き続き各地の教育委員会、学校と連携する。小学校?高校段階まで幅広く取り組む ③研究成果を書籍および論文にとりまとめ、出版・投稿する ④その他、企業との共同研究によるカリキュラム・教材開発等を行う		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2020年度～2022年度		
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2020年度～2022年度		
科学研究費補助金 科学研究費補助金(基盤研究(C))	2019年度	共同(研究分担者)	事例の分析に基づくプログラミング教育のための知見マップの構築
科学研究費補助金 科学研究費補助金(基盤研究(C))	2019年度	共同(研究分担者)	ラーニング・コモンズにおける学生スタッフのコンピテンシーリストの作成と研修の検討
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2021年3月～	日本教育工学会 評議員		
2020年9月～	文部科学省「多様な通信環境に関する実証事業」事業推進委員 委員		
2020年9月～2021年3月	文部科学省「多様な通信環境に関する実証事業」事業推進委員		
2020年7月～	一般財団法人ジャパンアートマイル 理事		
2020年7月～	一般財団法人ジャパンアートマイル 理事 委員		
2020年6月～	文部科学省委託事業「ICT活用教育アドバイザー」の活用事業 アドバイザー 委員		
2019年7月～	文部科学省 ICT活用教育アドバイザー委員		
2019年7月～	文部科学省 デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究 有識者		
2019年7月～	文部科学省「情報活用能力調査事業」企画推進委員 委員		
2019年6月～	文部科学省「デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」委員 委員		
2019年6月～2021年3月	日本教育工学会 SIG委員会 委員長		
2019年6月～2021年3月	文部科学省 情報活用能力調査企画検証委員会委員		
2019年6月～2021年3月	日本教育工学会 SIG委員会 委員長 会員		
2019年5月～	日本教育情報化振興会 情報活用能力の授業力育成事業委員		
2019年2月～	文部科学省「教育の情報化に関する手引」作成検討会委員		
2018年10月～	日本教育メディア学会 年次大会委員長		
2018年9月～	経産省「未来の教室」実証事業教育コーチ		
2018年9月～	経産省「未来の教室」実証事業教育コーチ 委員		
2018年4月～	日本教育工学協会 常任理事		
2018年4月～	日本教育工学協会 常任理事 委員		
2018年1月～	日本教育メディア学会 年次大会委員長 会員		

2017年10月～	CRET(教育テスト研究センター) 教育テストの評価・解説・活用研究委員
2017年1月～	CRET(教育テスト研究センター) 教育テストの評価・解説・活用研究委員 委員
2016年5月～	仙台市情報モラル教育推進会議 アドバイザ 委員
2016年5月～2021年3月	仙台市情報モラル教育推進会議 アドバイザ
2013年6月～2021年3月	日本教育工学会 理事
2013年6月～2021年3月	日本教育工学会 理事 会員
2012年8月～	日本教育メディア学会 理事
2012年8月～	日本教育メディア学会 理事 会員
2012年4月～	仙台市教育委員会「教育の情報化研究委員会」有識者委員
2012年4月～	NHK 学校放送番組「歴史にドッキリ」番組委員
2012年4月～	NHK 学校放送番組「歴史にドッキリ」番組委員 委員
2012年4月～	仙台市教育委員会「教育の情報化研究委員会」有識者委員 有識者委員
2010年7月～	仙台市教育委員会 仙台版『たくましく生きる力』育成プログラム開発検討会議委員 null
2010年7月～	仙台市教育委員会 仙台版『たくましく生きる力』育成プログラム開発検討会議委員 委員

#### V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

#### VI 学内における管理運営に関する諸活動

- ①学事課・ラーニングコモンズ副所長
- ②高大接続教育専門委員会委員
- ③知的財産委員会委員会委員
- ④FD推進委員
- ⑤学長特別補佐

2020年度							
所属	文学部 教育学科	職名	教授	氏名	加藤 卓	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
初等教科教育法(算数)の授業内容の改善と向上		2019年10月～		初等教科教育法(算数)の授業において、新学習指導要領による幼児教育から高学年に至るまで算数の教育内容と指導方法について指導した。また、よくある学習のつまずきに対してどのように対処すればよいかを指導した。また、模擬授業を通じ、指導案の作成力と実践的な指導力を育成した。			
算数概説の授業内容の改善と向上		2019年4月～		算数の授業において、事前学修に進んで取り組ませ、幼児教育から高等教育に至るまで数学の系統を俯瞰できるように、広範な内容を指導した。			
読解・作文の技法の授業内容の改善と向上		2018年4月～		読解・作文の技法の授業において、記述力を向上させるワークシートを複数作成し、繰り返し学生に記述させることを通じて、記述スキルを向上させた。また、JIS規格に則った校正の技能を習得くさせることができた。			
研究・発表の技法の授業内容の改善と向上		2018年4月～		研究・発表の技法の授業において、特に、プレゼンテーションのスライドに必要な基本的項目を明確にして詳細に指導を行い、また、プレゼンテーションの技能も的確に向上させることを行った。			
教員独自の学習活動に関する詳細なデータを集め、的確な評価を行っている。		2018年4月～		出席確認、授業への準備物、事前学修、発言などについて、授業中にバーコードリーダーを活用してデータを収集・蓄積し、形成的評価と指導に生かし、学生の努力を的確に反映する学期末評価を行っている。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
「教員採用試験対策講座」教育学科受講者のmanaba folioを通じたサポート		2021年3月		「教員採用試験対策講座」教育学科受講生のために、manaba folio内にコミュニティを作成し、学外からのアクセスでも試験勉強をサポートできる環境を構築した。			
「対面＋ハイブリッド参加の授業に向けた情報提供」の実施(教育学科)		2020年9月		対面＋ハイブリッド参加の授業に向けた、機材の導入とPC環境の改善についての情報提供を教育学科教員に行った。			
オンライン学習に欠かせないPCスキルの学生へのオンデマンド指導		2020年5月		オンライン授業実施に不可欠なmanabaの操作方法、Google Driveへのアップロード方法などについての教育学科の1年・2年の学生のスキルを育成するオンデマンド教材を作成、5月の授業開始直後から提供し、オンライン授業で戸惑うことが無いようにした。			
新入生のオリエンテーション用のページの作成・整備		2020年4月		オリエンテーションが対面で行えないため、新入生向けのオリエンテーション用のページをmanaba上に作成・整備した。			
「教員採用試験対策講座」(正規教育課程外)の計画改定と運営		2020年4月		2019年から開始した教員採用試験対策講座を、より効果が高まるように計画を改定し、運営した。			
「遠隔授業に向けた研修会」の実施(教育学科)		2020年4月		遠隔授業に向けたZoomの設定・操作についての研修会を教育学科教員に実施した。			
「教員採用試験対策講座」(正規教育課程外)のイントラネットサイトの作成・運営		2019年5月～		「教員採用試験対策講座」(正規教育課程外)を欠席した受講生や後日さらに学習したい受講生が、自学・自習に取り組めるように、イントラネットサイトの作成・改訂に努め、学習環境の構築を図った。			
<b>現在の課題・目標</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育学科1学年、チューター5名の学生の修学・生活指導</li> <li>・教育学科2学年、チューター7名の学生の修学・生活指導</li> <li>・担当講義での学生の実態に応じた授業内容の改善と充実</li> </ul>					
<b>今年度の進捗状況</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育学科1学年、チューター5名の学生の修学・生活指導を進めた。</li> <li>・教育学科2学年、チューター7名の学生の修学・生活指導を進めた。</li> <li>・オンタイム・ハイブリッド授業であったが、担当講義での学生の実態を把握するよう努力し、講義内容を充実させることができた。</li> </ul>					

<p>来年度の進捗目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育学科1学年チューター・2学年チューター5名の学生の修学・生活指導を進める。</li> <li>・対面・オンタイム・ハイブリッド・オンデマンドの各授業形態で効果的な授業を行う。</li> <li>・教職実践演習, ICT教育実践, 授業づくり実践 I の講義を充実させる。</li> <li>・採用試験対策講座を通して, 学生の数学の問題解決力をさらに高める。</li> </ul>				
<p>II 研究活動</p>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
<p>A. 学術書</p>					
<p>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</p>					
<p>Solving ratio sentence problems classified according to arithmetic structure.</p>	<p>単著</p>	<p>2020年9月</p>	<p>Geschützter Bereich der GDM-Onlinetagung 2020 (OITa), Beitrage zum Mathematikunterricht 2020, Geschützter Bereich der GDM-Onlinetagung 2020 (OITa), Beitrage zum Mathematikunterricht 2020, 1</p>	<p>加藤 卓</p>	<p>pp.481-484</p>
<p>Solving ratio sentence problems classified according to arithmetic structure.</p>	<p>単著</p>	<p>2020年9月</p>	<p>Gesellschaft für Didaktik der Mathematik, Beiträge zum Mathematikunterricht 2020, Gesellschaft für Didaktik der Mathematik, Beiträge zum Mathematikunterricht 2020</p>	<p>不明</p>	<p>pp.481-484</p>
<p>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</p>					
<p>小・中学校の学習の連続性を保証する記述・論述力に関する教育計画について</p>	<p>共著</p>	<p>2021年3月</p>	<p>数, 数学教育学会, 数学教育学会 2021年度 春季年会予稿集</p>	<p>加藤 卓</p>	<p>pp.65-67</p>
<p>演算構造で分類した複雑な文章問題の小学生の解決方略と傾向</p>	<p>単著</p>	<p>2020年9月</p>	<p>数学教育学会, 数学教育学会, 数学教育学会2020年度 秋期例会予稿集</p>	<p>加藤 卓</p>	<p>pp.62-64</p>
<p>演算構造で分類した複雑な文章問題の小学生の解決方略と傾向</p>	<p>単著</p>	<p>2020年9月</p>	<p>数学教育学会, 数学教育学会 2020年度 秋期例会予稿集, 数学教育学会, 数学教育学会2020年度 秋期例会予稿集</p>	<p>不明</p>	<p>pp.62-64項</p>
<p>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</p>					
<p>教育学科学生の教育および大学生活に関する意識調査</p>	<p>共著</p>	<p>2021年3月</p>	<p>東北学院大学 教育学科論集 第3号, 東北学院大学 教育学科論集(3)</p>	<p>◎高橋 千枝, 稲垣 忠, 加藤 卓, 佐藤 正寿, 長島 康雄</p>	<p>pp.67-73</p>
<p>図形の等積変形と外形の動的なイメージ化</p>	<p>単著</p>	<p>2021年3月</p>	<p>東北学院大学学術研究会, 東北学院大学 教育学科論集(3)</p>	<p>加藤 卓</p>	<p>pp.55-65</p>
<p>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</p>					
<p>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</p>					
<p>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</p>					
<p>G. 学会における研究発表</p>					
<p>小・中学校の学習の連続性を保証する記述・論述力に関する教育計画について</p>	<p>単独</p>	<p>2021年3月</p>	<p>数学教育学会 2021年度 春季年会(Online開催 慶応大学 日吉キャンパス)(Online開催 慶応大学 日吉キャンパス)</p>	<p>加藤 卓</p>	
<p>Solving ratio sentence problems classified according to arithmetic structure.</p>	<p>単独</p>	<p>2020年9月</p>	<p>Geschützter Bereich der GDM-Onlinetagung 2020 (OITa), (Online Participation)(Online Participation Universität Regensburg)</p>	<p>加藤 卓</p>	



演算構造で分類した複雑な文章問題の小学生の解決方略と傾向	単独	2020年9月	数学教育学会2020年度 秋期例会予稿集(Online開催 熊本大学 黒髪キャンパス)(Online開催 熊本大学 黒髪キャンパス)	加藤 卓	
Solving ratio sentence problems classified according to arithmetic structure.	単独	2020年9月	Geschützter Bereich der GDM- Onlinetagung 2020 (OITa), (Online Participation), (Übertragung zum GDM 2019 an der Universität Regensburg), Beiträge zum Mathematikunterricht 2020,(不明)	不明	
演算構造で分類した複雑な文章問題の小学生の解決方略と傾向	単独	2020年9月	数学教育学会, 数学教育学会 2020年度 秋期例会 熊本大学 黒髪キャンパス (Zoomでの Online参加)(不明)	不明	

#### H. 翻訳(学術書や原典等)

#### I. 特許

現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・射影量に関する教育内容・教育計画の開発と国内外での学会発表</li> <li>・ドイツでの指導内容・指導計画の文献調査</li> <li>・ドイツでの記述に関する指導の実際の実地調査</li> </ul>
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新型コロナウイルスの感染により, 学外調査を実施できない状況になった。また, 出張もできない状況になった。そのため, 国内外の実地調査は中止し, 実施済みの調査データの分析や文献調査を中心に研究を進めた。科研費は, 1年間の延長を申請した。</li> <li>・計画していた対面での教育現場に開いた研究会は実施困難になったが, オンラインでの学習会を実施できる場を, 複数の大学教員と共同で構築した。</li> <li>・2020年3月に延期となっていたドイツの学会発表は, 9月にオンラインで発表した。また, 国内の学会発表は, 2回オンラインで行った。</li> <li>・研究発表の場として, 個人のWeb Siteを更新した。</li> </ul>
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究発表の場として, 個人のWeb Siteを充実する。</li> <li>・教育現場に開いた研究会を隔月1回程度開催する。</li> <li>・記述・論述に関する教育課程の開発についての研究の進捗度を回復する。</li> <li>・14th International Congress on Mathematical Education (ICME14 2020)に参加し発表を行う。</li> <li>・新たな教育内容に関する研究領域を開拓し, 科研費の獲得に取り組む。</li> </ul>

#### III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 科学研究費助成事業 (KAKEN)基盤研究(C)	2018年度～2021年度	共同(研究代表者)	射影量の文章題に関する記述力・論述力を育成する教育課程の開発

#### IV 学会等及び社会における主な活動

2020年3月～	数学教育学会
2020年2月～	日本STEM教育学会 会員
2019年10月～	数学教育学会
2019年4月～	数学教育学会
2004年～	数学教育学会 正会員, 幼稚園・小学校部会担当 会員

#### V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

#### VI 学内における管理運営に関する諸活動

1. 全学 就職・キャリア支援委員会
2. 全学 教職課程センター所員
3. 教育学科 遠隔授業支援サポートチーム

2020年度							
所属	文学部 教育学科	職名	教授	氏名	紺野 祐	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
講義形式科目の毎授業終末における小レポートの活用		2020年4月1日～		アクティブ・ラーニング型授業のひとつの展開として、講義形式の授業すべてにおいて、授業終末に manaba の「レポート」機能を活用して小レポートを書かせている。その内容をA4判プリント1枚程度にまとめ、翌週の授業冒頭で扱い、復習と発展的学習に役立っている。またこれは、学生個人の評価(関心・意欲・態度)にも反映される。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
2020年度教育学科公開連続講義 担当		2021年2月1日～2021年2月7日		2020年度教育学科公開連続講義「教育の過去・現在・未来」において、第1回の講義「教育の過去①」を「教師『パイダゴゴス』に学ぶ」との副題のもとで実施した。なお本講義は、本学HPを通じたオンデマンド形式で行われた。			
現在の課題・目標		①講義形式科目においてコミュニケーションの双方向性を確保するため、毎授業終末における受講生の小レポートを有効に活用する。 ②講義形式科目において評価の観点の多元化をさらにすすめるとともに、その見直しをはかる。 ③演習形式科目においてフィールドワーク的な要素を組み込み、学習の広がりと深まりをはかる。					
今年度の進捗状況		①受講生の小レポートに基づき毎時「コメントから」のプリントを作成し、それに沿った復習を実施できたことから、上記の目標はおおむね達成されたと見られる。 ②とくに受講生の「意欲・関心・態度」を評価に組み込むために、授業終末における小レポートの重要性が確認できたことから、当座の課題は達成できたと考える。 ③本年度は、文学部教育学科専門教育科目「教育学演習Ⅰ」「同Ⅱ」を担当したが、受講生の興味・関心がフィールドワーク的な学修に向かなかつたことから、上記の目標は達成されなかつた。					
来年度の進捗目標		①一時間の授業において、前時終末時の小レポートに基づく復習内容と当日・当時の学習内容とをより有機的に連携させ、授業としての一体感を強める。 ②授業終末における小レポートについて評価上のルールを定め、受講生にはそれを意識させた小レポート作成を求める。 ③2021年度も文学部教育学科専門教育科目「教育学演習Ⅰ」「同Ⅱ」を担当することになるため、ゼミ生の興味・関心に応じて、フィールドワークに基づく卒業研究の作成を支援することとする。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
道徳教育における「価値」と「価値観」について(1)		単著	2021年3月	東北学院大学『東北学院大学教育学科論集』第3号、東北学院大学『東北学院大学教育学科論集』第3号		◎紺野 祐、盛下真優子	pp.13-28
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							

現在の課題・目標	①教育人間学の新たな展開について、これまでの研究を単著としてまとめる。 ②人間の道徳性に関する自然主義的な研究に着手する。		
今年度の進捗状況	①現在『教えることの人間学』(仮)というタイトルで出版するため、原稿作成および編集等の準備作業を進めているが、大きな進展が得られないことから、上記の目標はほとんど達成できていない。 ②研究全体のテーマを「道徳における『価値』と『価値観』」と設定するとともに、このテーマをもとにわが国の道徳教育における先行研究が使用してきた両概念を批判的に検討する論文を1本まとめた。このことから、上記の目標の一部は達成できた。		
来年度の進捗目標	①『教えることの人間学』(仮)につながる新たな研究課題「利他主義の功罪と規範の意味」に関する先行研究の分析・検討を進める。 ②人間の道徳性に関する自然主義的な研究の先行研究について、いっそうの分析・検討を進める。		
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2012年9月～		東北教育哲学教育史学会理事・編集委員 会員	
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
文学部教育学科長(平成30(2018)年4月～)			

2020年度							
所属	文学部 教育学科	職名	教授	氏名	佐藤 正寿	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
実務家教員として小学校教員の経験を生かした取り組み		2020年～		「現代教職論」「学級経営論」「学級経営・生徒実践」「初等教科教育法(社会科)」において、小学校教員の経験をもとにした具体的な資料等を提示し、グループワークの助言に生かした。			
参加型の講義		2020年～		ワークショップ型の学習活動を1コマに間に複数回取り入れ、学習者が主体的・対話的に学ぶ環境づくりに努めた。			
講義のねらいと評価の明確化		2020年～		全ての講義において冒頭に講義のねらいを提示し、本時間のゴールを的確に示し、終盤ではねらいが達成できたかどうかの自己評価を学生に行った。			
書き込み式テキストの作成		2019年～		「読解・作文の技法」において、書き込み式テキストを毎回作成し準備をした。課題とそれに対する回答部分、ノート部分がミックスされたオリジナルテキストであり、A4版で4～6の内容となった。			
視覚機器を用いた教材の提示		2019年～		視覚的効果を目的として、教材やポイントとなる内容をプレゼンテーションソフトや動画を使って提示を行った。			
参加型の講義		2019年～		ワークショップ型の学習活動を1コマに間に複数回取り入れ、学習者が主体的・対話的に学ぶ環境づくりに努めた。			
講義のねらいと評価の明確化		2019年～		全ての講義において冒頭に講義のねらいを提示し、本時間のゴールを的確に示し、終盤ではねらいが達成できたかどうかの自己評価を学生に行った。			
学校現場のフィールドワークを生かした学び		2019年～		「現代教職論」「研究・発表の技法」において、小学校での一日学校体験や授業参観等のフィールドワークを行い、その経験を事後のレポートにまとめさせた。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
テキストブック 授業のユニバーサルデザイン 社会(共著)		2021年2月		ユニバーサルデザインを意識した社会科の書籍であり、「第6章社会科の教材研究(P72～79)」を執筆した。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		1 学びへの意欲を喚起する参加型講義の開発 2 ルーブリックと連動させた評価の充実 3 学校現場の経験を生かした講義内容の提示					
今年度の進捗状況		1については参加活動形態を様々な方法で実施し、効果を確認できた。 2については自己評価は行ったもののさらに工夫が必要である。 3については実務家教員である自分の強みを生かして、教材の資料が講義時で具体的な内容を提示できた。					
来年度の進捗目標		1については参加型講義の方法をさらに増やし充実させる。 2についてはルーブリックの内容をより具体化させ、学生だけでなく教員側からの評価も明確化したものとする。 3については現在の学校現場の情報も今まで以上に組み入れる形にする。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
テキストブック 授業のユニバーサルデザイン 社会『テキストブック 授業のユニバーサルデザイン 社会』		共著	2021年2月	日本授業UD学会		村田辰明, 宗實直樹, 佐藤正寿(担当:共著)	pp.○
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							

いわての復興副読本による総合的な学習における地域学習の内容と可能性	単著	2021年3月	東北学院大学教育学科論集 第3号	佐藤正寿	pp.87-95
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>					
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>					
データでみる東日本大震災 地震の概要・被害・支援の視点から『道徳教育』	単著	2021年3月	明治図書, 2021年3月号	佐藤正寿	pp.28-31
『WHYでわかる! HOWでできる! 社会の授業Q&A』	単著	2020年12月	明治図書	佐藤正寿	pp.1-224
休校明けの学級経営 - 四つの視点から-『指導と評価』	単著	2020年10月	図書文化, 790	佐藤正寿	pp.18-20
授業「バスのうんてんしゅ」有田発問の神髄がここにある『授業力&学級経営力』	単著	2020年9月	明治図書, 2020年9月	佐藤正寿	pp.30-33
教材開発と「はてな? 発見力」が土台になっている授業づくり『社会科教育』	単著	2020年9月	明治図書, 2020年9月号	佐藤正寿	pp.4-9
『学級づくりに役立つ! 毎日できる「昔遊び・伝承遊び」』	単著	2020年9月	明治図書, 明治図書	佐藤正寿	pp.1-144
授業場面に即した効果のある学習評価を『月間プリンシパル』	単著	2020年5月	学事出版, 2020年5月号	佐藤正寿	pp.16-19
授業がもつとうまくなる社会科授業スキル(1年間連載)『社会科教育』	単著	2020年4月	明治図書, 2020年4月号~2021年3月号	佐藤正寿	pp.2頁×12回
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>					
深い理解にもとづく教材研究・授業計画 先輩教師を唸らせる学習指導案作成『教職1年目の即戦力化大全』	共著	2021年2月	明治図書	佐藤正寿	pp.18-25
有田先生が見通していた新しい社会科の授業づくり『社会科授業の教科書』	共著	2020年6月	さくら社	有田和正著, 佐藤正寿監修	pp.1
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>					
<b>G. 学会における研究発表</b>					
小学校における伝承遊びの可能性	単独	2021年2月	第17回和文化教育全国大会明石大会収録(オンライン)	佐藤正寿	pp.10
小学校社会科における資料読解のためのワークシートの開発と評価	共同	2020年11月	日本社会科教育学会全国大会発表論文集(16)(オンライン)	◎佐藤正寿, 山田智之, 松本卓也, 秦浩人	pp.50-51
新学習指導要領による小学校第5学年社会科教科書における情報技術を題材にした学習内容の傾向	共同	2020年9月	日本教育工学会 2020秋季全国大会(オンライン)	◎佐藤正寿, 榎誠司, 堀田龍也	pp.463-464
小学校学習指導要領社会科の産業学習における資料を活用する技能や表現力の育成に関する用語の調査	共同	2020年8月	日本教育情報学会 第36回年会論文集(オンライン)	◎佐藤正寿, 堀田龍也	pp.278-279
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	1 「小学校第5学年の産業学習における情報技術の社会的影響の理解に関する研究」を中心テーマに研究を行っている。 2 教育同人社・教育出版との共同研究で「小学校社会科の資料読解ワークシートの開発と評価」を行っている。				
今年度の進捗状況	1については、学会・研究会で2回にわたって発表を行い、継続的に研究を続けている。 2については、関連内容で学会で発表した。開発したワークシートセットを公開し、ダウンロードできるしくみを作った。また、5校のモニター校で活用し、アンケート結果や実証授業から評価データを得ることができた。				
来年度の進捗目標	1については、引き続き研究を行い、査読論文にすることが目標である。 2については今年度で共同研究は終了するが、今後もワークシートセットは公開し、ダウンロードができるようになっている。				
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 科学研究費補助金	2017年度～2020年度	共同(研究分担者)	「高度情報技術基盤社会に向けた初等中等教育の次世代情報教育の体系化に関する研究」をテーマとして、次世代の情報教育を構想し、基盤となる要素研究を実証的に推進し、次期学習指導要領の策定に対して学術的エビデンスを提供するものである。
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2020年～		NHK平和学習サイト「戦後75年サイト」編集協力 委員	
2020年～		仙台市立北六番丁小学校 学校評議員	
2019年～		NPO法人全国初等教育研究会セミナー(NPO法人全国初等教育研究会セミナー) 講師	
2019年～		仙台市立北六番丁小学校校内研究会(仙台市立北六番丁小学校校内研究会) 講師	
2019年～		仙台市立七北田小学校 学校評議員	
2019年～		奥州市立胆沢第一小学校校内研究会(奥州市立胆沢第一小学校校内研究会) 講師	
2019年～		日本教育情報学会 会員	
2019年～		盛岡市立中野小学校校内研究会(盛岡市立中野小学校校内研究会) 講師	
2019年～		和文化教育学会 会員	
2018年～		日本学級経営学会	
2017年～		日本授業UD学会	
2016年～		日本教育工学会 会員	
2016年～		全国社会科教育学会 会員	
2016年～		日本社会科教育学会 会員	
2015年～		岩手県立総合教育センター特別支援講座(岩手県立総合教育センター特別支援講座) 講師	
2015年～		岩手県中学校授業力向上研修会(中学校社会・免許状更新講習)(岩手県中学校授業力向上研修会(中学校社会・免許状更新講習)) 講師	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	小学校・中学校の教員を中心とした研究会への寄与		
今年度の進捗状況	講師役として各種研究会で指導助言を行うことができた。		
来年度の進捗目標	教員研修の講師役だけではなく、授業実践への協力者として支援を行い、研究成果としても公表していく。		
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度							
所属	文学部 教育学科	職名	教授	氏名	長島 康雄	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
少人数のクラス編成による「読解作文の技法」ならびに「研究発表の技法」の全ての授業の中で学生間の議論の場面を導入。		2020年5月10日		「事実と意見」「推論の根拠を示す」の2点を重点課題とした。新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、オンタイム授業、オンデマンド授業となったことから、学生の学習状況を適切に把握し指導に活かすために、学生のコメント記述をテキストマイニングの手法を導入して評価する方法について検討を行った。少人数のクラス編成による「読解作文の技法」ならびに「研究発表の技法」の全ての授業の中で学生間の議論の場面を導入した。回を追うごとに他の学生と異なった意見を述べるできるようになった。質問する力、反論する力を向上が見られた。テキストマイニングの手法については、現時点で成果として表記できるところまではたどり着いていないが、継続して指導内容を充実させるための手がかりの一つとしたい。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
youtubeの動画教材をフィールドワークに代わる教材として導入。		2020年5月10日		所属する理科教育学会、義務教育学会等の研究仲間と情報共有しながら、対面授業とは異なる大学教育の形について意見交換しながら、積極的に新しい指導方法を試みた。学生が実地に学ぶ経験は重要であり、画面越しに現場感を伝えることの難しさを感じつつも、他に手段がないことから、提示の仕方などを工夫してより効果的な活用法について検討を続けていく方針を持っている。			
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>●次年度開講の「理科概説」「初等理科教育法」「授業づくり実践」などの教育学科の学生向けの教材準備を進める。</li> <li>●次年度開講の「特別活動・総合的な学習論」などの全額開講科目の教材準備を進める。</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>●「理科概説」「初等理科教育法」については概ね課題を解決した。</li> <li>●「特別活動・総合的な学習論」については、急ぎ準備を進めている。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		●文系学生の多い教育学科学生に対して、理科教育を担うための資質・能力の育成のための学習プログラムを検討する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
新型コロナウイルス感染症対策課の特別活動の在り方に関する検討～臨時休業要請直後の学校の対応の検討から～	共著	2021年3月	東北学院大学教育学科論集.第3号	佐藤邦宏、長島康雄	pp.29-41		
Eco-DRRの視点からみあ自然災害からの学校防災・減災に関する事例分析と理科カリキュラム	単著	2020年12月	日本科学教育学会研究会研究報告第35巻第2号	未記入	pp.9-14		
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							



土(土壤)の教材化をめぐる課題～幼稚園における環境領域から小学校生活科・小学校低学年理科の接続を視野に～	単独	2020年11月	日本生活科・総合的な学習会第19回大会(於:国立大学法人山梨大学) 27-3(国立大学法人山梨大学)	未記入	
等値線図としての生物季節前線を教材化するための方策に関する検討	単独	2020年11月	日本理科教育学会東北支部会(宮城教育大学)	宮城教育大学	
小学校中学年から高学年への接続を考慮した学習展開～生物季節前線を事例として～	共同	2020年11月	日本理科教育学会東北支部会(宮城教育大学)	佐々木陽梨・伊藤玲香・長島康雄	
地球温暖化問題を観会えるための小学校低学年無へ教材開発～生物季節前線 動物の事例の活用～	共同	2020年11月	日本理科教育学会東北支部会(宮城教育大学)	佐々木陽梨・伊藤玲香・長島康雄	
新型コロナウイルス感染拡大をふまえた小学校・中学校理科カリキュラムへの「免疫」の位置づけに関する検討	単独	2020年8月	日本科学教育学会第44回大会(於:国立大学法人兵庫教育大学)(国立大学法人兵庫教育大学)	未記入	
Eco-DRRからみた小学校・中学校の理科カリキュラムにおけるウィルスの扱いに関する検討～新型コロナウイルスの感染拡大と理科カリキュラム～	単独	2020年6月	日本カリキュラム学会第31回大会(於:琉球大学)(琉球大学)	未記入	
ウィルスの大きさを実感させるための授業「生物のスケール」の成果と課題	単独	2020年5月	日本理科教育学会(国立大学法人岡山大学)	未記入	

#### H. 翻訳(学術書や原典等)

#### I. 特許

現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>●教科教育特に、理科、生活科、総合的な学習の視点から、その教育的効果を最大限に引き出すための学校施設設備のあり方を検討する。</li> <li>●Eco-DRRの教育的な意義を明らかにする。</li> </ul>
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>●2018年度より取り組んできた小学校理科カリキュラム編成におけるEco-DRRの視点の意義を、東北学院大学文学部教育学科紀要に報告した(印刷中)。</li> <li>●生活科ならびに理科で使われる「自然」概念が抱えている課題を整理し、その成果を各学会で報告し、他の研究者から意見をいただいた。</li> </ul>
来年度の進捗目標	●Eco-DRRの視点から気候変動、外来種の扱いなどを教科教育で取り上げることの可能性を検討する。

#### Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 科研費 基盤研究C	2019年度	共同(研究代表者)	

#### Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2020年	野外文化教育学会
2020年	日本義務教育学会

#### Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

#### Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

- 学生委員会 教育学科委員
- 教育学科 2019年度入学生 グループ主任
- 学生委員 学生アンケート評価委員 等

2020年度								
所属	文学部 教育学科	職名	教授	氏名	村野井 仁	大学院の授業 担当の有無	無	
<b>I 教育活動</b>								
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要				
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>								
協同的学習の実施		2020年4月1日～		演習、英語科目および教職科目において、グループ活動を取り入れ、学生が主体的に協同学習を行う機会を作っている。				
観点別評価の実施		2020年4月1日～		担当科目の評価に関しては、評価の観点ごとに評価規準(到達目標)を明示し、総合的な評価を行っている。教職科目、英語科目については課題ごとにルーブリックを作成し、形成的評価に活用している。				
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>								
高等学校用文部科学省検定教科書英語コミュニケーションCrossroads編集・執筆		2016年4月～		Genius English Communication I-III改訂版及びCrossroads English Communication I-III(大修館書店)の編集・執筆(編集代表)				
講義資料ハンドアウトの作成		2013年4月1日～		担当するすべての科目において配付資料を作成し活用している。				
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>								
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>								
東北学院榴ヶ岡高等学校出張講義		2021年1月28日		東北学院榴ヶ岡高等学校において高大連携事業English Academic Forumの一環として「異文化コミュニケーション能力としての英語力の育て方」と題した出張講義を行った。				
宮城県気仙沼高等学校教員研修会講師		2020年12月9日～2020年12月9日		宮城県気仙沼高等学校の英語科教員と近隣の小中教員を対象に「主体的な学びを促す領域統合型の英語授業—ライティング指導を中心に—」と題する講演を行い、公開授業の助言者を務めた。				
宮城県宮城野高等学校における出張講義		2020年12月5日		宮城県宮城野高等学校において1,2年生を対象に「第二言語習得に基づく効果的な英語学習法」と題した出張講義を行った。				
岩手県教育委員会教員免許更新講習(授業力研修講座)講師		2020年8月5日～2020年8月7日		岩手県教育委員会が主催する令和元年度授業力向上研修講座(教員免許更新講習)外国語(英語)の講師を務めた。8月5日に高等学校教員を対象として、8月7日には中学校教員を対象として「現代英語教授法—現代の英語教授法と実践—」と題した研修をそれぞれ3時間行った。				
文部科学省検定済教科書の編集		2020年4月1日～		小学校外国語検定教科書New Horizon Elementary English Course 1-2及び中学校外国語検定教科書New Horizon English Course 1-3(東京書籍)の編集協力者、高等学校外国語(コミュニケーション英語I-III)検定教科書Genius English Communication改訂版I-IIIの編集代表を務めている。				
仙台育英学園高等学校授業検討会講師		2020年		仙台育英学園高等学校において、英語科の研究授業の助言者を務め、「新学習指導要領における領域統合型の英語授業」と題する講演を行った。				
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・講義・演習では一方的な知識注入型の講義ではなく、理解し、考え、そして伝える力を伸ばすよう協同学習的な活動を取り組んで指導方法を工夫している。</li> <li>・到達目標を明確に示し、妥当性の高い評価を行うようにしている。</li> <li>・学生の学ぶ意欲高めるため、教材・授業形態を工夫している。</li> </ul>						
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の授業評価結果から判断して、講義・演習での工夫は一定の成果を上げていることがわかった。</li> <li>・全ての科目においてある程度妥当性の高い評価を行うことができた。</li> <li>・学生の授業評価結果から判断して、学生の学ぶ意欲高めるための工夫は一定程度成果を上げていることがわかった。</li> </ul>						
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・講義・演習において、理解し、考え、そして伝える力をさらに伸ばすよう指導方法を改善する。特に学生の自律性を高める支援をしていく。</li> <li>・到達目標を授業内容に合わせて再度見直し、さらに妥当性、信頼性、実用性の高い評価を行うようにする。</li> <li>・学生の学ぶ意欲をさらに高めるため、協同学習、プロジェクト型学習を取り入れて教材・授業形態を工夫する。</li> </ul>						
<b>II 研究活動</b>								
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)		発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数

A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
第二言語習得と意味	単著	2021年2月	開拓社, 河西良治教授退職記念 論文集刊行会(編)『言語研究の 扉を開く』	村野井 仁	pp.118- 131
社会的存在としての第二言語学習者—CLIL的 要素を持った英語活動の理論と実践—	単著	2020年9月	晃洋書房, 池田伸子他(編)『立 教大学異文化コミュニケーション 学部研究叢書III』	村野井 仁	pp.159- 181
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	1 第二言語指導効果研究に関するデータを分析し, 結果を公開する。 2 第二言語習得に関する単行本出版企画を進める。 3 CLILについての研究を進める。				
今年度の進捗状況	1 第二言語指導効果研究に関するデータを分析し, 結果のまとめに入っている。 2 第二言語習得に関する単行本出版企画を準備中である。 3 CLILについての科研費研究(2年目)を進めている。				
来年度の進捗目標	1 第二言語指導効果研究に関するデータ分析の結果を公開する。 2 第二言語習得に関する単行本を執筆する。 3 CLILについてデータ分析結果をまとめ, 公開する。				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要	

科学研究費補助金 基盤研究(C)	2018年度～2021年度	個別(研究代表者)	<p>2020年度は2019年度までに行った実証的研究の結果を学術論文として公表することを中心に研究を進めた。2019年にJ-CLIL東北大会において行った「CLIL的要素を持った領域統合型の英語授業と異文化能力」と題した口頭発表を学術論文としてまとめ、『東北英語教育学会紀要』に投稿し、査読の結果掲載されることが決まっている(印刷中)。この論文では本研究課題であるプロジェクト活動を含んだCLIL活動が日本人英語学習者の異文化能力の伸長にどのような効果をもたらすか事前・事後テスト法によって検証している。CLIL活動がたとえ短時間であったとしても英語学習の知識・技能・姿勢に正の効果をもたらす実験結果をまとめた。論文にまとめる過程においてデータの再分析を行い、より多角的な効果検証を行った。</p> <p>2019年度に行ったプロジェクト型CLIL活動の効果を調査する実験データの分析を進めることも2020年度の研究計画の一つであった。この授業実践研究は日本人英語学習者30名を参加者として事前・事後テスト法を用いてCLIL活動の効果を検証するものであり、2019年度までの実験に比べプロジェクト的要素がより濃いものになっている。具体的にはノーベル平和賞を上げたい人物を学習者が選びその人物に関する調べ活動を行った後、プレゼンテーションを協同的に行う活動である。インプット理解を中心とした準備活動も含めて段階的に協同的に行うことによって異文化能力を高めることをねらいとした活動である。技能の測定において口頭発表を評価対象としているためその音声の転記に膨大な時間と労力がかかり、2020年度はその対応に集中して研究を進めた。</p>
------------------	---------------	-----------	--

#### IV 学会等及び社会における主な活動

2019年～	大学英語教育学会(JACET) 副支部長
2016年～	高等学校検定教科書英語コミュニケーションI-III Crossroads編集委員会 編集代表
2008年～	文部科学省検定教科書高校英語Genius English Communication I-III(大修館書店) 編集代表 委員
2003年～	アジア英語教育学会 会員
2002年～	日本第二言語習得学会 会員
2001年～	文部科学省検定教科書中学英語New Horizon English Course(東京書籍) 編集委員 委員
1987年～	大学英語教育学会(JACET) 会員

#### V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

#### VI 学内における管理運営に関する諸活動

文学部長 体育会会長 ワンダーフォーゲル部部長
-------------------------------

2020年度							
所属	文学部 教育学科	職名	教授	氏名	ロング クリストファー	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>							

2020年度							
所属	文学部 教育学科	職名	教授	氏名	渡辺 通子	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
アクティブ・ラーニング型の授業作り		2020年5月～		これまで進めてきたワークショップ型授業やグループごとの課題解決学習は、本年度は遠隔授業の必要があったことからオンタイム授業では、Zoomのブレイクアウトルームや画面共有機能を活用することで展開した。また、受講生の比較的多いオンデマンド授業でもmanabaのプロジェクト機能を利用することで、受講生がなるべく人との関わりを通した学びを実現できるようにした。 その結果、ディスカッションの一部が見える化されたが、本来の対面のディスカッションとモニター上のディスカッションとは質が異なることを実感した。どのように違うのかを明らかにすることが課題である。もう一つの課題は、機器やネット環境の整備と操作の基本的スキルやリテラシー取得である。			
学修意欲の喚起と主体的学修のための工夫		2020年5月～		大学提出のシラバスとは別に、日程表や進め方、レジュメ様式を提示した授業用のシラバスを作成し提示することで学生の主体的学修を促している。			
manabaコースを活用した授業づくり		2020年5月～		昨年度までは出席確認とレポート機能を中心に活用していたが、本年度はオンタイムやオンデマンド授業形態を要したため、昨年度以上にmanabaコースを活用した。まだまだ手探りの状態ではあるが、授業の目的や狙いに応じた機能の使い分けをしながら、アンケート機能やプロジェクト機能を活用した。終盤には個別指導(コレクション)を活用することで双方向の授業が可能となった。 ただし、前年度からの継続課題である、①正確・公正な出席調査、及び②評価対象としての提出物増加に伴う授業評価の公正性・妥当性・客観性をどう担保していくかの2点に加え、学生のスレッドへの書き込みや個別指導コレクションへの書き込みが増えたことで対応のありかたが課題である。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
新たな時代の学びを創る 中学校高等学校国語科教育研究		2020年～		IV3-1-1「思考力、判断力、表現力を育てる授業作り 話すこと・聞くこと」執筆(2019. 全国大学国語教育学会編 東洋館出版社)			
国語科重要用語辞典		2019年～		第4部【歴史】57 話すこと・聞くことの指導執筆(2015. 高木まさき・寺井正憲・中村敏雄・山本隆春編、明治図書出版)			
小学校教育課程実践講座国語		2019年～		「7章2節 汎用的な言語能力の育成」執筆担当(2017. 樺山敏郎編ぎょうせい)			
言語活動中心 国語概説—小学校教師を目指す人のために—		2018年9月15日～		初等教育に必要とされる日本語に関する基礎知識である科目「国語」について、小学校教員養成のためのテキストとして開発した。「13章 コミュニケーションの力」執筆担当(2018. 岩崎淳・木下ひさし・中村敏雄・山室和也編、学分社)			
『教職エッセンシャル』(学文社)		2013年8月～		2013年度より新規開講の「教職実践演習」(4年次後期対象)に対応した教科書である。 Part4-2執筆担当。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
白鳥省吾賞審査委員(第16回～)		2020年7月1日～2021年3月31日		第22回 白鳥省吾賞における小中学生の部の審査委員と選評			
鹿嶋市小中一貫教育検討委員会アドバイザーを務めた		2020年4月1日～2021年3月31日		2016年よりアドバイザーとして関わっている高松地区の小中一貫教育について、検証および今後の進め方について助言した。昨年度より鹿嶋市の小中一貫教育の推進に切り替わり、高松地区については施設設備についての検討を進めている。			
教員採用試験対策講座「国語」を担当した		2019年4月～					
第26～29期 仙台市図書館協議会副委員長		2014年4月1日～2020年11月30日		仙台市図書館事業等について協議した。			

現在の課題・目標	<p>1. 学生が主体的に授業に参加し、学びが定着、応用が可能となるよう授業形態、内容の選択、評価の点を改善することを目標としている。具体的な現在の課題は下記3点である。</p> <p>① 学修者の学修意欲を喚起できるようにする。  ② 学修者が自身の学修への見通しをもち、かつ振り返りの習慣がつくようにする。  ③ アクティブラーニング型授業におけるフリーライダーの確認とその方法を検討する。</p> <p>2. 新学科の一員として教員養成に努める。</p> <p>2. 教員採用対策講座「国語について過去問題の傾向と対策を考えたテキスト作り」</p>				
今年度の進捗状況	<p>1. 新たな授業担当である「国語概説」「初等教科教育法(国語)」の、講義ノートの資料作成を行った。その他の全学にかかわる教職の授業のシラバスもマイナーチェンジした。</p> <p>①については、受講者の興味関心に基づき内容の精選をした授業では一定の成果があった。必ずしも内容だけでなく成員の特徴を活かす工夫も必要のようである、今後の課題である。</p> <p>②については、事前に課題を設けたり問いかけを提示するなどして、主体的に授業に参加する態度・思考力・判断力を働かせるような工夫をしている。</p> <p>③では、アクティブラーニング型の授業形態を取り、授業の回ごとに振り返りや課題等の提出を促すことで対応した。一定の成果はみられるが、パターン化しないような工夫、提出物に対する教師側からの評価の工夫の検討を要する。授業によっては、学生の授業評価の厳しいものもあったため検討と工夫に努める。</p> <p>2. 手探りの状態でスタートした。本年度が四字熟語中心であったので、来年度は大学史を充実させる。</p> <p>3. 十分な対応ができたとはいえない。</p>				
来年度の進捗目標	<p>①教員採用対策講座の自主テキスト初等教育関係授業の内容・方法・評価方法の見直しをしつつ充実させる。</p> <p>②教員採用対策講座の自主テキストの構想や講義ノート等の準備を中心に進める。</p> <p>③受講者集団やグループの特質などにも考慮した指導方法の工夫やmanaba courseやResponの活用を進めることでさらなる工夫をしていく。</p>				
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>					
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>					
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>					
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>					
1870～1940年代における話し言葉教育政策と国語科カリキュラムの変遷	単著	2021年3月	東北学院大学学術研究会, 東北学院大学教育学科論集 = Bulletin of Department of Education(第3号)	渡辺 通子	pp.75-86
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>					
平成29年度文献講読B報告書 みんなのちりよくをあつめたほうこくしょー『昭和26年学習指導要領(試案)国語科編』における国語科単元学習の分析と考察『平成29年度文献講読B報告書 みんなのちりよくをあつめたほうこくしょー』	共著	2021年3月	未記入	芳賀泰成、太田遙香、齋藤大輔、相澤玖実、阿部未越、小白晴陽、高野倉岳、三浦諒太	pp.未記入
平成29年度文献講読B報告書 みんなのちりよくをあつめたほうこくしょー『昭和26年学習指導要領(試案)国語科編』における国語科単元学習の分析と考察『平成29年度文献講読B報告書 みんなのちりよくをあつめたほうこくしょー』	共著	2020年4月	報告書, 渡辺通子研究室, 渡辺通子研究室	渡辺 通子, 芳賀 泰成, 太田 遙香, 齋藤 大輔, 相澤 玖実, 阿部 未越, 小白 晴陽, 高野倉 岳, 三浦 諒太	pp.3～7頁
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>					
『with コロナの中の自然、人間愛』	単著	2021年2月	白鳥省吾記念館、第22回白鳥省吾賞受賞作品集	渡辺 通子	pp.14
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>					
<b>G. 学会における研究発表</b>					
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					

現在の課題・目標	1. コロナ禍における授業方法の工夫。 2. 学習者がスライドを「みること」でわかったつもりになりがちなため学びを定着させる工夫、聞く力をどうつけるか工夫する。 3. 目標に準拠した評価の工夫：観点ごとの評価に妥当性や客観性をもたせるにはどうしたらよいか工夫する。
今年度の進捗状況	1. については、試行錯誤しつつ自身のICTリテラシーのスキルアップに勤めたがまだまだ十分とはいえない。 2. 2については、スライド等の工夫や授業後の振り返りによって工夫した。 3. 3については、今後さらに簡便で妥当性のあるものにしていく。
来年度の進捗目標	1. コロナ禍における授業方法の開発は自身のICTのスキルアップと共に検討を続ける。 2. 目標に準拠した評価の工夫：さらに簡便で妥当性のあるものにしていく。 3. 授業によっては学生評価の厳しいものもあつたため検討と工夫に努める。

### Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
----------	----------	------------------------	-----

### Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2018年～	小中一貫教育推進委員会小中一貫教育推進委員会アドバイザー 助言・指導
2014年7月～	第17～23 回白鳥省吾賞審査員(第17～23 回白鳥省吾賞審査員) 寄稿
2014年～	第16 回 白鳥省吾賞審査員 委員
2014年～	第27 ～29期仙台市図書館協議会委員副議長 委員
2013年4月～	読書学会 会員
2012年～	大村はま記念国語教育の会 委員
2009年9月～	日本教育学会 会員
2002年4月～	日本教科教育学会 会員
2002年4月～	コミュニケーション学会 会員
2001年4月～	国語教育史学会
2001年4月～	コミュニケーション学会 会員
2001年～	日本文学協会 委員
2000年～	国際俳句交流協会 委員
2000年～	俳人協会 委員
1998年4月～	早稲田大学国語教育学会 会員
1996年4月～	全国大学国語教育学会 会員
1995年4月～	日本国語教育学会 会員

### Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

### Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

学術研究会評議員 教育研究所所員 図書館委員
------------------------------



2020年度							
所属	文学部 教育学科	職名	准教授	氏名	大友 麻子	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
出張講義講師		2020年10月23日		宮城県角田高等学校において「英語のしくみー英語らしさと日本語らしさ」と題した講義を2回行った。			
教員採用試験対策講座講師		2020年7月～		教員採用試験対策講座「専門コース英語Ⅰ」「専門コース英語Ⅱ」(本学教職課程センター主催)の講師を計8回務めた。			
現在の課題・目標		所属学科が新設されたばかりであるため、学生および教職員の方々とのコミュニケーションを大切に、円滑な教育活動が行えるように努める。 人数の多い授業においても個に応じた指導ができるよう努める。					
今年度の進捗状況		チューターとしてそれぞれの学生と個人面談を行うなど概ね順調に進捗していると思われる。進路等で悩みを抱える学生も多いため、より緊密にコミュニケーションをとるように努めた。					
来年度の進捗目標		基本的な学力にやや不安のある学生には特に注意を配り、個に応じた指導を行えるようにする。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
An ethnoprismatic analysis of Japanese speech acts o/go-N-sama		単著	2021年3月	東北学院大学教育学科論集(3)	OTOMO Asako	pp.97-104	
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		日本語と英語の対照研究を進め、成果をまとめる。					
今年度の進捗状況		日英の絵本を用いた対照研究を行うため、データを収集した。 昨年度Australia Linguistic Societyにて発表した内容に更なる検討を加え、論文にまとめた。					
来年度の進捗目標		本年度収集した日英の絵本のデータ等を用いて、日英対照研究を行う。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
2020年7月～			大学英語教育学会東北支部 紀要査読委員				
2018年11月～			東京書籍 中学校英語教科書NEW HORIZON編集協力者 委員				

2018年11月～	東京書籍 中学校英語教科書NEW HORIZON編集協力者(東京書籍 中学校英語教科書NEW HORIZON編集協力者) 助言・指導		
2018年4月～	大学英語教育学会 会員		
2018年～	Australian Linguistic Society 会員		
2015年4月～	小学校英語教育学会 会員		
2015年4月～	日本児童英語教育学会 会員		
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
1. AO面接委員 2. 禁煙推進委員 3. キャンパス禁煙化推進委員 4. 大学要覧(シラバス)編集委員			

2020年度							
所属	文学部 教育学科	職名	准教授	氏名	清水 遥	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
教員採用試験対策講座		2020年～					
東北学院大学免許法認定講習		2018年6月1日～		中学校英語免許取得認定講習において講師を務めている。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
『新・教職課程演習第18巻 中等英語科教育』	分担執筆	2021年3月	協同出版	卯城祐司・樫葉みつ子(編著), 池岡慎, 今井裕之, 磐崎弘貞, 大野真澄, 笠原究, 兼重昇, 川野泰崇, 佐藤剛, 清水遥, 清水真紀, 栖原昂, 千菊基司, 高木修一, 辰己明子, 築道和明, 中川知佳子, 中島真紀子, 濱田彰, 久松功周, 土方裕子, 深澤清治, 深澤真, 星野由子, 松浦伸和, 松宮奈賀子, 山内優佳, 山岡大基, 山森直人, 吉田達弘	pp.16		
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
Effectiveness of explicit pronunciation instruction on L2 word decoding skills: A propensity score analysis	共同	2021年3月	American Association for Applied Linguistics (AAAL) 2021(Virtual Conference)	杉田千香子, 濱田彰, 清水遥, 内野駿介			
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 日本学術振興会: 科学研究費補助金(基盤C)	2020年度～	共同(研究分担者)	
科学研究費補助金 日本学術振興会: 科学研究費補助金(基盤C)	2019年度～	共同(研究分担者)	
科学研究費補助金 日本学術振興会: 科学研究費補助金(萌芽研究)	2019年度～	共同(研究分担者)	
科学研究費補助金 科学研究費補助金若手研究(B)	2016年度～	個別(研究代表者)	
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2018年6月～		日本児童英語教育学会 会員	
2018年4月～2021年3月		関東甲信越英語教育学会 学会誌委員会編集委員	
2018年4月～		小学校英語教育学会 会員	
2015年4月～		東北英語教育学会 会員	
2007年4月～		大学英語教育学会 会員	
2006年4月～		全国英語教育学会 会員 会員	
2006年4月～		関東甲信越英語教育学会 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	文学部 教育学科	職名	准教授	氏名	清多 英羽	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
双方向の授業実践		2020年4月1日～		パワーポイントの動画を作成した。学生のレポートを講義ごとにフィードバックした。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
市民向けの講座を行った		2021年2月1日		教育の過去2『教育の世紀』とつながる現代教育 というタイトルでネット配信の講演を行った			
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		学生の理解度の向上					
今年度の進捗状況		うまくいった					
来年度の進捗目標		さらにうまくやりたい					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
学校ビオトープを活用した教育の「意義」の検討		単著	2021年3月	東北学院大学教育学科論集(3), 東北学院大学教育学科論集(3)		不明	pp.44207
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		コロナなので工夫したい					
今年度の進捗状況		コロナで出張できなかった					
来年度の進捗目標		工夫して研究したい					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							

VI 学内における管理運営に関する諸活動

2020年度							
所属	文学部 教育学科	職名	准教授	氏名	高橋 千枝	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		学生にわかりやすい授業を実施することを目標とする。ただし、「誰もが簡単に楽しく学べる」といったわかり易さではなく、学部水準の専門的学びとして学生が興味を持ち主体的に学ぼうとする力を導き出す授業を目標とする。					
今年度の進捗状況		学生の授業調査では大部分が授業のねらいを達成できたと答えているため、目標は概ね達成できたと考える。しかしながらまだ授業の到達目標や意図が明確でない、また受講理由が「免許取得のため」という学生もいることから、今後も上記目標は継続していく。					
来年度の進捗目標		現在の目標を引き続き今後の目標としても継続する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
児童期における「気になる」子どもの行動特徴と情動発達との関連	単著	2020年	臨床発達心理実践研究(第15巻), 臨床発達心理実践研究(第15巻)	本郷一夫・平川久美子・飯島典子・高橋千枝・相澤雅文	pp.66-74		
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
教育学科学生の教育および大学生生活に関する意識調査	単著	2021年3月	東北学院大学教育学科論集 第3号, 東北学院大学教育学科論集 第3号	高橋千枝・稲垣忠・加藤卓・佐藤正寿・長島康雄	pp.67-73		
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
教育学科学生の教育および大学生生活に関する意識調査	単著	2021年3月	東北学院大学教育学科論集(第3号), 東北学院大学教育学科論集(第3号)	高橋千枝・稲垣忠・加藤卓・佐藤正寿・長島康雄	pp.67-73		
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
東日本大震災後に生まれた子どもの発達の研究(その2)SDQの結果	共同	2021年3月	日本発達支援学会第32回大会(不明)	氏家達夫・伊東大幸・高谷理恵子・高橋千枝			
幼児期の情動の発達と行動特徴との関連に関する研究6~8	共同	2021年3月	日本発達心理学会第32回大会(不明)	高橋千枝・本郷一夫・飯島典子・平川久美子・相澤雅文			
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		一年間に一論文、一学会発表を目標に研究を進めている。					
今年度の進捗状況		今年度は研究論文を2本執筆することができた。また学会発表も2テーマ発表することができた。					
来年度の進捗目標		少なくとも論文一編の執筆および一学会発表を目標に研究を進める。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			



2020年度							
所属	文学部 教育学科	職名	助教	氏名	松本 進乃助	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		就任して一年目に当たる今年度は、授業内外で学生とのコミュニケーションを積極的に図り、学生から相談しやすいような関係性を形成する。 オンラインでの授業が円滑に進むように教材作成や環境整備の方法を探究する。					
今年度の進捗状況		音楽(器楽)において、全くピアノが弾けない学生が伴奏に必要な力を身につけ、その実感を得ることができていた。こうした、楽器との出会いや音楽の敷居の高さを払拭するような学びの重要性を確認した。					
来年度の進捗目標		来年度よりゼミの一期生を受け持つこととなるので、学生が新たな学びと研究の楽しさを感じられるよう実践と研究を相互的に達成していくような運営をする。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
北欧の教育最前線 ー市民社会をつくる子育てと学びー		単著	2021年2月	株式会社 明石出版, 株式会社 明石出版		北欧教育研究会	pp.79-83
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		次年度の学会発表や論文投稿に向けて、研究データを収集し、整理する。					
今年度の進捗状況		スウェーデン人の音楽科教員に対して、行った質問紙調査のデータを整理し、共同研究者にトライアングレーションとしてのデータ解析を依頼。また、同様の質問紙を用いて、日本の学校における音楽科教員に向けて、調査を行った。					
来年度の進捗目標		国際学会における研究発表をする。関連学会への研究論文を投稿する。研究資金の獲得を目指し、現在の研究の幅や可能性を広げることのできる資金的基盤を整備する。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
2020年12月～2020年12月				音楽教育学会 第16回音楽教育ゼミナール(オンラインゼミナール)実行委員会 会員			
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標		尺八や箏など邦楽に関する技術・知見を深める					

今年度の進捗状況	仙台市で活躍する尺八奏者に師事する。
来年度の進捗目標	学外での演奏や楽器指導をする。
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

# 教員業務・活動報告

經 濟 学 部

經 濟 学 科

共生社会経済学科

2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	アレイ ウィルソン	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		理解力を高めること。					
今年度の進捗状況		授業のやり方を見直して、理解力を高めるようにする。					
来年度の進捗目標		eラーニングを活かして、経済の動きをより理解すること。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	伊鹿倉 正司	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①特に演習(ゼミ)の学生一人一人に対するきめ細やかな対応(学習相談、就職活動相談など) ②国際金融論の講義資料のウェブ公開					
今年度の進捗状況		上記①について、今年度よりオフィスアワーを設けるなどして実現に努めている。また、複数のコミュニケーションツールを活用して、普段の学生生活についても出来得る限りの把握に努めている。 上記②について、進捗度としては4~5割程度である。					
来年度の進捗目標		上記①について、現在週1日のオフィスアワーを週2日に増やす。 上記②について、進捗度を8割程度にまで高め、来年度中の公開を目指す。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
高まる地銀再編		単著	2020年11月	世界経済評論インパクト第1931号, 世界経済評論インパクト第1931号		不明	pp.不明
街から銀行の支店が無くなる日		単著	2020年8月	世界経済評論インパクト第1838号, 世界経済評論インパクト第1838号		不明	pp.不明
望ましい現金給付策とは		単著	2020年4月	世界経済評論インパクト第1694号, 世界経済評論インパクト第1694号		不明	pp.不明
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		①業務提携を通じた地域金融機関による海外展開支援の実態把握とその効果の検証を行う。 ②第二次世界大戦以降の邦銀の海外展開行動(横並び行動の有無など)を明らかにする。 ③邦銀による現地リテール金融業務の実態把握を行う。					
今年度の進捗状況		上記①について、各行プレスリリース等による実態把握をほぼ終了させた。 上記②について、新聞記事や各行プレスリリースなどから、進出形態、進出(撤退)時期、進出地域、進出(撤退)目的などのデータベースを独自に構築した。 上記③について、現地ヒアリング調査の準備を共同研究者とともに進めた。					
来年度の進捗目標		上記①について、その効果の検証を行う。 上記②について、構築したデータベースを用いた計量分析を行う。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2016年10月～		信用理論研究会	
2002年10月～		日本国際経済学会	
2001年5月～		日本金融学会	
2001年5月～		信用理論研究会	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	泉 正樹	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
授業理解の促進		2020年		毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概略を説明し、授業終了時にはその回のまとめと次回の予告を行った。			
学習事項の定着		2020年		講義系の科目では、各単元の終了時にeラーニング・システム「manaba」を利用した「振り返り」を実施し、学習事項の定着を図った。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
授業スライドの作成		2020年		講義科目「資本主義経済入門I・II」で使用されるテキスト(さくら原論研究会編『これからの経済原論』ぱる出版, 2019年)に準拠するパワーポイントスライドを作成した。			
授業スライドの作成		2020年		TGベーシック科目「地球社会を生きる」において、授業中に使用するスライドを作成した。これは、超長期の観点から「グローバリゼーション」についての解説を行っているManfred B. Steger [2009] Globalization, Oxford University Pressなどを参考にしたものである。また、社会的再生産と市場についての基礎的な導入を行って、経済のグローバル化が意味することの理解を促すスライドを作成した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①講義「資本主義経済入門I・II」の理解度を測定できる方策を考える。 ②演習系科目における効果的なレジュメ作成・発表の指導。 ③「地球社会を生きる」の教材の改善					
今年度の進捗状況		①については、eラーニングシステムを活用して、授業内で複数回の小テストを実施して成績評価を行なった。 ②LMSを活用して、受講者間での共同作業が行えるようにした。 ③については、現在、私自身が研究を進めている「グローバリゼーション」を捉えうる方法を紹介するスライドを作成した。					
来年度の進捗目標		①については、成績評価の方法についてさらに検討を行う。 ②については、LMSを活用したレジュメの共同作成をさらに展開する。 ③については、最新の動向も取り入れて教材を更新する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
第4章「価値形態と現代の不換銀行券制度」 『SGCIME編『マルクス経済学 市場理論の構造と転回』』	共著	2021年3月	桜井書店	SGCIME(マルクス経済学の現代的課題研究会)編(執筆: 江原慶・大黒弘慈・岡部洋實・吉村信之・泉正樹・結城剛志・塩見由梨・清水真志・柴崎慎也)	pp.125-156頁		
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							

価値形態と現代の不換銀行券制度	単独	2021年3月	「経済原論と現代資本主義」研究会@Zoom(オンライン開催)	泉 正樹	
「グローバル資本主義の変容と原論」の論点	単独	2020年9月	SGCIME(マルクス経済学の現代的課題研究会)夏季研究会@Zoom(オンライン開催)	泉 正樹	
これからの労働論についての覚書	単独	2020年6月	「経済原論と現代資本主義」研究会@Zoom(2020年6月20日)(オンライン開催)	泉 正樹	

#### H. 翻訳(学術書や原典等)

#### I. 特許

現在の課題・目標	①理論的な現状分析が可能となるような方法論を構想する ②資本主義の歴史的発展を扱うことができるような労働過程論の枠組みを整える ③現代資本主義の歴史的位相を探るという観点から、「グローバル資本主義」と呼ばれる諸説の議論の組み立てをサーベイする
今年度の進捗状況	①と③については、論文「資本主義の歴史的発展と経済原論:「変容論的アプローチ」からの展開」を執筆し、一定の成果を上げることができた。 ②については、関連文献を読み進めることができた。
来年度の進捗目標	①近年の「自動化」を念頭において、労働の原理的考察を行う ②資本主義が歴史的に発展する構造を定式化する

#### Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 基盤研究C	2018年度～2020年度	共同(研究分担者)	

#### Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

#### Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

#### Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動



2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	大塚 芳宏	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
計量経済学Ⅰ・Ⅱ(データ解析・計量経済学)は講義資料、資料で用いたデータをeラーニングシステムmanabaで公開し、復習及び受講生が自宅学習できるよう環境を整備した。		2020年～					
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		機械計算をベースとした統計的分析の学習とその応用					
今年度の進捗状況		本ゼミナールでは、仮説検定等の分析については習得させることが出来た。					
来年度の進捗目標		統計学を基礎とした実証分析能力を社会経済分析に応用させること。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
GDP Announcement and Stock Price	共著	2020年	Journal of Business Cycle Research, in press, Journal of Business Cycle Research, in press	©Funashima, Yoshito., Nobuo, Iizuka and Ohtsuka, Yoshihiro	pp.7		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
EBPMにむけた経済データ分析『EBPMにむけた経済データ分析』	共著	2021年3月	プレジデント社, プレジデント社, プレジデント社	飯塚信夫 編著・小巻泰之・山澤成康・平田英明・大塚芳宏	pp.0		
景気の現状と転換点の検証『景気の現状と転換点の検証』	単著	2020年12月	東京財団政策研究所 政策データウォッチ, 東京財団政策研究所 政策データウォッチ, 東京財団政策研究所 政策データウォッチ	不明	pp.0		
コロナ禍と地域の景況感『コロナ禍と地域の景況感』	単著	2020年7月	東京財団政策研究所 政策データウォッチ (31), 東京財団政策研究所 政策データウォッチ (31), 東京財団政策研究所 政策データウォッチ (31)	不明	pp.0		
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		景気動向指数の統計モデリング					
今年度の進捗状況		データ選択による景気局面判断の差異					
来年度の進捗目標		・多重構造変化点の推定手法の開発					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 科研費基盤研究C	2019年度	個別	本研究では、日本の景気状態を転換点と景気水準の観点から分析する。まず、景気基準日付がデータの選択によってどれほど変化するのかを分析し、景気判断における従来方法の妥当性について検証する。そして、循環期ごとに景気水準が変化する統計モデルを拡張し、日本の景気状態についてより詳細な情報提供するモデルを開発する。
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	小沼 宗一	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
音声付きスライドを作成して、オンデマンド授業を工夫して実践した。音声付きスライドの動画ファイルを作成し、Googleドライブの共有URLをmanabaのコンテンツに貼り付けて、学生がストリーミング再生することができるようにした。		2020年9月1日～2021年3月31日		「経済思想史」の授業を、遠隔授業で実施した。manabaを使い、オンデマンド授業を行った。manabaのコンテンツ、掲示板、コースニュースへ、講義資料を配付した。パワーポイントで音声付きスライドの動画ファイルを作成した。動画ファイルは、Googleドライブの共有URLをmanabaのコンテンツに貼り付けた。学生からは、ストリーミング再生ができるようになったということで、好評であった。受講生からの授業中の課題の提出物は、ワード文書にて、manabaの「レポート」へ添付ファイルにて提出させた。			
manabaを活用したオンデマンド授業。授業内容の記憶への定着と授業理解の促進		2020年4月1日～2020年8月31日		「経済思想史入門」の授業において、manabaを活用してオンデマンド授業を行った。①パワーポイントをPDF化したスライドの配付資料(PDF)、②時間配分入りの毎回の配付資料(word)、③テキスト:小沼宗一著『経済思想の歴史』(創成社)の3点を使い、遠隔授業を行った。「何が問題か」という問題の所在を明確に提示し、「考える授業」を工夫した。			
「読解・作文の技法」の授業が経済学部で3コマ開講された。学部の共通シラバスを作成した。		2020年4月1日～2020年8月31日		「読解・作文の技法」の授業において、manabaを活用したオンデマンド授業を工夫して実践した。毎回の授業中の課題の提出物は、ワードの原稿用紙(400字)に作成の上、manabaの「レポート」へ添付ファイルで提出させた。質問等は、manabaの掲示板「コメントを書く」から自由に記入してもらうことにした。授業中ではもとより、授業終了後においても、manabaの掲示板への書き込みを自由とした。受講生の多くは、経済学科の1年生であったため、随時、授業開始の30分、Zoomミーティングを開催して、課題作成におけるポイントの説明等を行った。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・「経済思想史」の授業において、「何が問題か」を明確に提示することにより、内容のある読みやすいレポートを作成させること。</li> <li>・「読解・作文の技法」の授業において、毎回の授業中のペン書きの提出物を、面白くてわかりやすい文章で作成させること。</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>・「経済思想史」の授業において、パワーポイントを使用して「何が問題か」を明示し、ノートタイムを設定して「考える授業」を行うように工夫した。</li> <li>・「読解・作文の技法」の授業において、毎回の授業中の提出物を、配付した原稿用紙にペン書きで作成するように指導した。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・「経済思想史」の授業において、学生が問題の所在を明確に理解して、内容のある読みやすいレポートを作成することができるように指導すること。</li> <li>・「読解・作文の技法」の授業において、毎回の授業中のペン書きの提出物を、面白くてわかりやすい文章で作成できるように指導すること。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							

H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	著書『経済思想の歴史—ケネーからシュンペーターまで—』の増補版を出版する。		
今年度の進捗状況	論文「経済思想におけるマーシャル」を作成する。		
来年度の進捗目標	著書『経済思想の歴史—ケネーからシュンペーターまで—』の増補版の準備を進展させる。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	倉田 洋	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学習した事項の定着と授業理解の促進		2020年～		講義動画を配信して授業を行うオンデマンド形式の授業を行った。授業では、受講生がポイントを絞れるよう「学習ガイド」を提示する、集中して見られるように動画をポイントごとに分割する、動画視聴後に小テストを行う、質問・コメントに対して1週間ごとにまとめて回答する、といった工夫を行い、学習した事項の定着、授業理解の促進に努めた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
「ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ」講義動画		2020年～		経済学科3・4年生向け「ミクロ経済学Ⅰ」、「ミクロ経済学Ⅱ」の講義動画。Youtubeを用いて配信を行っている。			
「ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ」講義資料		2020年		経済学科3・4年生向け「ミクロ経済学Ⅰ」、「ミクロ経済学Ⅱ」のパワーポイント教材。受講生には穴埋め形式の教材を配信し、受講中に完成してもらった形をとっている。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		① 適切な現実例を用いて、経済学の有用性を理解してもらう。 ② 『ミクロ経済学』の講義内容・方法を本学学生に力を伸ばせるような内容に改善する。 ③ 学生の自発的学習を促すような授業を行う。					
今年度の進捗状況		① 授業中でできるだけ多くの現実例を入れ、試験の大問1問を現実例に関連した問題とした。 ② manabaを用いて、小テストを毎回実施し、最終回に「まとめの試験」を実施した。授業評価アンケートで「よくわかる」という回答が一定数得られた。 ③ 担当している演習や講義の中で、グループワークや学内外での発表会への参加など、自主的な学習を促すような工夫を行った。					
来年度の進捗目標		受講生にとって「よくわかる」「興味深い」と思ってもらえる授業のやり方について検討する。また、より多くの学生が自主的な学習を促すような授業方法を考案する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
A higher-cost region excessively attracts firms	単著	2021年1月	Taylor&Francis, The Journal of International Trade & Economic Development, 30(1)	H.Kurata T.Ohkawa M.Okamura	pp.125-137		
Standards Policy and International Trade: Multilateralism versus Regionalism	共著	2020年9月	Wiley, Journal of Public Economic Theory, 22(5)	Y.Takarada Y.Kawabata A.Yanase H.Kurata	pp.1420-1441		
Vertical specialization in North-South trade: Industrial relocation, wage and welfare	共著	2020年8月	Wiley, Review of International Economics, 28(1)	H.Kurata R.Nomura N.Suga	pp.119-137		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							

Agri-tourism, Unemployment and Urban-Rural Migration	共同	2020年6月	日本国際経済学会関東部会 2020年度第4回研究会(オンライン)	K.Kondoh H.Kurata	
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	① 構想・予備的計算が済んでいる研究について、論文の形に仕上げる。 ② 論文の形になっている研究成果は、積極的に発表し、査読付き学術雑誌へ掲載する。				
今年度の進捗状況	研究成果2件(上記Ba)が査読付き学術雑誌に採択され、掲載された。				
来年度の進捗目標	① 現在準備中の研究を論文の形に仕上げる。 ② 論文の形になっている研究成果の国内外の学術雑誌への掲載を実現する。				
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
科学研究費補助金 科研費 基盤研究(C)	2018年度～2020年度	個別	海外進出に向けた差別化と協調のための投資		
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>					
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>					

2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	篠崎 剛	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
オンデマンド講義		2020年～		オンデマンド講義において、Zoomで録画をし、学生のフィードバックに出来る限り対応した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
演習での懸賞論文への参加およびインターゼミナールへの参加		2020年					
現在の課題・目標		1. TGベーシックでの学びを確かなものにするため、総合演習の学生に文章の書き方、プレゼンテーションの仕方、ICTを利用した自宅学習の時間を増加させる。 2. 大講義におけるアクティブラーニングを行い、また、学生の自宅学習時間をICTを用いて増加させる。 3. 演習における学生の力を把握し、先行研究を拡張させる形での研究論文を書かせ論理性を高める指導を行う。					
今年度の進捗状況		1および2の目標を新規目標として達成することとする。3については、演習に所属する全ての学生に研究論文を書かせることが出来ている。					
来年度の進捗目標		演習におけるモデル分析が可能になるよう数学のトレーニングを行う。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
水道事業における最適価格設定ルール	単著	2021年3月	自治総合センター調査研究報告書, 自治総合センター調査研究報告書	◎篠崎剛・井田知也・柳原光芳	pp.不明		
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
The effect of cultural consumption on modern economic growth path and wealth inequality	共同	2020年8月	International Institute of Public Finance(University of Iceland(Online))	Tsuyoshi Shinozaki, Anna Miglosa, Isidoro Mazza, Minoru Kunizaki, Mitsuyoshi Yanagihara			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		1. 文化活動と経済成長についての研究を投稿する。 2. 政治活動にかかわる諸問題(民営化, 垂直的補助金, 水平的・垂直的租税競争)の論文を投稿する。					
今年度の進捗状況		1. 文化活動についての新たな研究を始めることが出来、論文のドラフトを完成させることが出来た。 2. 政治活動にかかわる諸問題の論文を投稿し、いくつかの論文は本として出版できた。					
来年度の進捗目標		1. 文化と経済成長の論文の完成を目指す。 2. 政治活動にかかわる諸問題について論文を出版する。					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 科学研究費(基盤C)「政治体制と長期の経済成長プロセスの整合性に関する研究」	2018年度～	共同(研究代表者)	本研究では、政治体制の違いが経済成長に与える影響について、経済成長経路上での政治体制(独裁主義から民主主義へ)の変容の在り方とその望ましさを明らかにするものである。そのため、初めの二年間において、経済成長モデルに基づく政治制度の変容の分析および政治家の振舞い(行動)経済学的視点を導入した分析を行ったうえで、最終年度にこれらを統合し、より現実的な政策提案を行うことを目指す。
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2007年～		日本地域学会 会員	
2007年～		生活経済学会 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			



2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	白鳥 圭志	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
遠隔授業を行うため、対面授業でなくても理解しやすいように、PPFを改定し、資料集を作成しなおした。		2020年4月1日		PPFをみただけでも理解できるように、詳細な説明を記載した。史料集もデジタル化して、PPFと併用することにより、より理解し易い内容にした。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		演習科目については内容の根本的見直し。					
今年度の進捗状況		学生に読ませるべき文献の選択、運営方法の見直し(グループ学習中心への転換)を行っている。					
来年度の進捗目標		グループ学習中心で、なおかつ学生のレベルにあった内容への転換を実現すること。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
産業革命期における横浜正金銀行		単著	2020年5月	『地方金融史研究』第51号、全国地方銀行協会。『地方金融史研究』第51号、全国地方銀行協会。		不明	pp.不明
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		横浜正金銀行経営史研究の取り纏め					
今年度の進捗状況		序章、終章を書き上げ、産業革命期の部分にあたる第2章を学術誌に掲載するために、修正作業を行っている。					
来年度の進捗目標		上記第2章を学術誌に掲載することを目標としている。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							

来年度の進捗目標	
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>	
今年度から大学院経済学専攻主任を命ぜられた。大学院教育を円滑に行うために、仕事を覚えること、大学院の状況把握が、まずは目標となる。	

2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	千葉 昭彦	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
演習3年生のエクスカージョン実施		2016年～		いくつかのグループに分けて仙台市内の街なか(旧奥州街道・東北大学片平キャンパス・国分町通り・広瀬通り・一番町通り・壱弐参横丁など)を歩き、現地で町の成り立ちや変遷を解説			
講義において、前回の内容の理解確認と評価方法の工夫		2010年4月～		地域経済論と経済立地論の講義で確認の小テストなどを行い、その次の講義で解答確認を行い、前回講義内容の理解の確認を行っている。また、その採点結果を年間評価に反映させる。 2020年度は前期・後期ともに遠隔授業だったので、小テストを5回、レポート課題5回実施した			
4年生演習卒業論文		2010年4月～		4年生では調査を踏まえた卒業論文の作成を義務付けている。なお、終了後は論集として編集・発行。			
3・2年生の演習において1年間で10冊以上の書籍のレポートを提出させ、添削のうえ返却		2010年4月～		主に文献要約を行わせ、添削返却するが、それが一定水準に達するまで再提出を繰り返し、文献の理解が確実になるように指導する。なお、学生の多くがある程度十分な内容把握が出来るようになった段階で、自らの意見を論理的に記述するようなレポートへと課題内容を移行。			
2・3・4年生演習合宿		2010年4月～		年間2回の合宿(春季および夏季に3泊4日)を2年生～4年生が合同で行い、3年生は夏にインゼミレポートの中間報告、3年生春は各自の卒論テーマの検討、4年生夏は卒論中間報告、4年生春は卒論報告を行う。また、合宿地周辺地域でのフィールドワーク・エクスカージョン(2010年夏山形県山形市・2010年冬宮城県石巻市・2011年夏岩手県八幡平市および盛岡市・2011年冬福島県会津若松市および喜多方市・2012年夏岩手県花巻市)を実施。なお、合宿の日程・場所等については基本的には学生が企画・運営。 ただし、2020年度と2021年度はコロナの影響で合宿を行うことが不可能だったので、夏季休業中と春季休業中にそれぞれ2日間学内で上記のことを行った。			
1年生総合演習 I でのディベートトレーニング		2010年4月～		特に1年生後期に次年度以降の演習に備えて、ディベートを実施。「フリーターの是非」や「レジ袋有料化の賛否」「原発再稼働賛否」などの身近なテーマや社会問題を取り上げ、主張の論理性にウエートを置いて話をすることを指導。なお、それぞれの意見に対して論理的な反論も試みる。			
1年生総合演習 I でDVD/VTRの活用		2010年4月～		経済学科に入学した新入生が必ずしも経済問題に強い関心を持っているわけではない。そこで、関心喚起を目的として時節を考慮したDVD/VTRを利用。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
東北自治研修所での講義		2014年8月～		東北の自治体中堅職員を対象とした中堅職員研修(各90分授業を10回)を行い、様々なアクティブラーニングの方法を通じて、各自治体の問題の所在や解決の方向性を検討。			
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>●講義におけるアクティブラーニングの実施、新たな方法の導入。</li> <li>●「地域経済論」・「経済立地論」の講義において、教員による講義に加えて、学生による事前学修→小テスト/授業中の作業→レポート作成の流れを確立する。</li> <li>●演習において、2年生が自らの意見をレポートで論理的に記述できるようにする。</li> <li>●演習において、3年生の自らテーマを設定し、調査・検討を行い、インゼミレポートを作成する。</li> <li>●演習の合宿を通じた見学や調査、資料収集などを通じて得られた知見に基づいて、プレゼンテーションを準備し、新ゼミ生への紹介を行い、資料収集、調査、まとめのトレーニングを重ねる。</li> <li>●演習において、4年生が自らテーマを設定し、調査・検討を行って、卒業論文を作成する。</li> <li>●外国書購読ⅢおよびⅣにおいて、ゼミ生の受講を増やすとともに、授業の中でロンドン(イギリス)への関心を高める。</li> </ul>					

<p>今年度の進捗状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●「地域経済論」・「経済立地論」の講義は遠隔授業であったために、年度初めに計画していた授業の流れは大きく異なることとなり、学生の発表などはできなかった。ただ、遠隔授業の中でも、小テスト・レポート提出とそれらへの評価・解説を行うことはでき、一方的な講義に終始することは回避することができたと思われる。</li> <li>●演習においては、3年生のインゼミが中止になり、例年その中で行っていた調査のや資料整理、レポート作成、発表経験などはできなかった。また、4年生の卒業論文作成に関しては、コロナ感染拡大の中で就職活動の不安が募った学生の脱落が多くみられたし、卒業論文の調査活動や論文作成においても十分とは言えない出来で残念であった。</li> <li>●演習の合宿やエクスカージョンなどができず、例年の教室以外での様々な取り組みがほとんどできなかった。</li> <li>●2年生の演習では学生にゼミの意義・位置づけを理解させること課題であったが、今年度はZoomでの授業開始であったのでそのこと以前に授業を実施することが中心であった。</li> <li>●外国書購読では多くの受講生を確保することはできなかったが、学生が選択したテーマの発表は順調に進められたし、映画(My Fair Ladyなど)の利用も順調に行うことができた。</li> </ul>				
<p>来年度の進捗目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●「地域経済論」・「経済立地論」では遠隔授業が2年目となるので、講義内容自体のより厳選化するとともに、受講生との双方向のあり方や小テスト・レポートへのコメントのあり方を検討する。</li> <li>●2年演習においては、大学におけるゼミの位置づけの理解や主体的学習への動機付けなどが必要と思われるので、単なる知識習得にとどまらず、意見発表などの回数を増やす予定である。</li> <li>●演習全体においては、学生が自主的にテーマを設定し、インゼミレポート・卒業論文を作成させるが、卒論のレベルをより上げるように細やかなコメントを増やすと同時に前年度よりも早い時期からもう少し踏み込んだ「指導」を行うようにする。また、次年度どれだけ実施で切るか不明ではあるが、可能な限り例年に近いゼミ運営を通じて「社会人」への力を養いたいし、例年の取り組みが難しい場合には何らかの次善の(可能な)取り組みを検討する。</li> <li>●演習の中で調査やヒアリングの能力の涵養は目指すが、それが難しい場合にはPCなどを通じた資料やデータの収集能力高める。また、例年とは異なるプレゼンテーションなどの機会を増やし、学生への個別の指導の機会を増やす。</li> <li>●外国書購読は、今年度の履修者が少なかったために、次年度以降は特にゼミ生の履修を指導する。</li> </ul>				
<p>II 研究活動</p>					
<p>著書・論文等の名称</p>	<p>単著・共著の別</p>	<p>発行又は発表の年月(西暦)</p>	<p>発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称</p>	<p>編者・著者名</p>	<p>該当頁数</p>
<p>A. 学術書</p>					
<p>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</p>					
<p>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</p>					
<p>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</p>					
<p>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</p>					
<p>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</p>					
<p>コロナ感染症拡大に対する東北学院大学の2020年度前期の教学上の対応経過の報告</p>	<p>単著</p>	<p>2021年3月</p>	<p>東北学院大学教育研究所, 教育研究報告集, 東北学院大学教育研究所, 教育研究報告集(第21集), 21</p>	<p>千葉昭彦</p>	<p>pp.5-11</p>
<p>変化する東北地方の生活舞台『新・日本のすがた 6 東北地方』</p>	<p>分担執筆</p>	<p>2021年3月</p>	<p>帝国書院</p>	<p>監修 土屋純</p>	<p>pp.60-75</p>
<p>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</p>					
<p>G. 学会における研究発表</p>					
<p>H. 翻訳(学術書や原典等)</p>					
<p>I. 特許</p>					
<p>現在の課題・目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●戦後の仙台の都市機能の変遷に関して整理し、学会で報告し、論文にまとめる</li> <li>●震災復興に関してその地域的格差の実情を把握し、原因を探る。</li> <li>●郊外住宅地での人口減少・高齢化に伴う問題を把握し、今後の都市構造の変化の方向性を探る。</li> <li>●これまで進められてきた「コンパクトシティ政策」を総括し、都市郊外と都市構造の今後のあり方を考える。</li> <li>●地方創生の中で大学に対して多くのことが求められているが、実態としてそれが可能であるのかを考える。</li> </ul>				
<p>今年度の進捗状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●戦後仙台の都市機能の編成に関する研究は2018年度・2019年度の学会発表および論文発表以降止まっている状態である。</li> <li>●震災復興格差のこれまでの問題については2020年度に学会発表(経済地理学会北東支部例会)はあるが、その後は依然同様に整理しきれない状態にある。</li> <li>●郊外住宅地での「郊外問題」に関しては、いくつかの状況を把握するにとどまっている。</li> <li>●地方創生および致死構造に関連する研究テーマはほとんど着手することができなかった。</li> </ul>				

来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>●震災復興格差に関して、これまでのデータ等を早急に整理する。</li> <li>●郊外問題の実情(買い物難民・空き家問題・インフラ老朽化など)を把握する</li> <li>●合併等によるインフラ維持の問題点を把握する。</li> </ul>		
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2021年3月	地域経済入門 世界遺産登録と地域経済 講師		
2020年4月～	日本地理学会 代議員		
2019年10月～2020年5月	経済地理学会 2019年度学会論文賞選考委員会委員長		
2019年1月～	多賀城市空家対策協議会 副会長		
2018年6月～	私立大学連盟教学担当理事者会議 幹事		
2015年11月～	日本地域経済学会 理事		
2012年5月～	学都仙台コンソーシアム企画部 部会長		
2012年5月～	経済地理学会 編集委員		
2009年6月～2020年5月	宮城県特定大規模集客施設立地誘導審議委員会 会長職務代理		
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
2017年4月～ 学校法人東北学院理事 2017年4月～ 東北学院大学副学長(学務担当) 2020年1月～ 教学組織改編推進室長			

2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	若生 徹	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
演習における小テストの実施および計算問題の解法指導		2020年4月～		学生によるテキスト講読,議論,研究報告のほか,何れも独自の小テストを実施して,学生の思考能力を充実させる。また,計算問題の演習と解法指導を通じて数学的分析力を高める。			
授業評価対象外科目に関するアンケート		2020年4月～		授業の改善のために,授業評価対象外科目「総合演習」に関して,アンケートを実施した。			
講義の理解を深めるための工夫		2020年4月～		基礎知識の繰り返し学習により,現実問題の解決に応用できる学力を向上させるために,下級学年あるいは担当授業での既習事項であっても,反復を恐れずに教授し,応用のきく必須基礎学力を身につけさせる。			
演習履修者のための就職・進路指導		2020年4月～		就職活動を間近に控えている学生の求めに応じて,進路指導を実施した。			
演習履修者のための進学指導		2020年4月～		進学の準備をしている学生のために,進学指導を実施した。			
演習における小テストの実施および計算問題の解法指導		2020年4月～		学生によるテキスト講読,議論,研究報告のほか,何れも独自の小テストを実施して,学生の思考能力を充実させる。また,計算問題の演習と解法指導を通じて数学的分析力を高める。			
<b>2. 作成した教科書,教材,参考書</b>							
都市経済学,都市空間経済学ならびに基礎経済学のための講義用スライド		2020年4月～		パワーポイントを用いて講義用スライドを作成し,学生の講義内容の理解を容易にする。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表,講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所,発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
1989年4月～		応用地域学会 会員	
1988年4月～		日本交通学会 会員	
1988年4月～		日本地域学会 会員	
1984年4月～		日本経済学会 会員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	准教授	氏名	板 明果	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年 月 日 (西 暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)							
ビブリオバトルの実施		2020年4月1日～		科目「総合演習」にて、書評合戦・ビブリオバトルを実施している。学生間での評価で上位になった学生を科目外で開催される実際のビブリオバトル(宮城県図書館や東北学院大学で開催のもの)にエントリーするよう計画したかったのだが、本年は新型コロナのリスク等も勘案し、見送った。			
ディベートの実施		2020年4月～		科目「総合演習」にて、グループ別のディベート大会を行った。基本的にはディベートテーマを指定して行ったが、ディベートテーマ自体をグループで討議して決めてもらうことも試みた。さらに、ディベートで肯定・否定の意見が出揃った後に、自身の立場を明確にしたレポートを書いてもらったが、この試みが、根拠を充分に示すことを意識したレポート作成をする意識付けにつながったように思う。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		1) 授業を通じて、学生間で切磋琢磨して主体的に学ぶ機会を提供する。 2) 新型コロナのリスク対策として、学外での学生の活動を十分に提供・支援することが今年度は難しかったが、このような状況下においても、大学内での学びを学外に発信する機会を設けられるよう工夫したい。 3) 2021度から担当する「複雑系経済学」の授業テキストを作成する。					
今年度の進捗状況		上記の課題・目標1)については、少人数グループ別の課題に取り組んでもらうことにより、一定程度は効果がみられたことが授業評価アンケートからも分かった。しかし、演習Ⅰなどでは、もう少し機会の提供を増やす必要があることが、授業評価アンケートから感じられた。					
来年度の進捗目標		上記の課題・目標2)のように、学外での学習成果を発信する機会を設ける事で、進捗状況で記した残された課題を多少は解消できるであろうことが分かったので、積極的に機会の提供を行いたい。 課題・目標3)のテキスト素案を用いて、2021年度に履修する学生の反応を確認しながら、完成させたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		1) 論文「商慣習変更の影響分析」を完成させる 2) 共同研究「長期環境家計簿でみる消費者のライフスタイルおよび省エネ技術変化の効果分析」を進める。 3) 共同研究「食生活から見たスマートシティの在り方に関する考察:産業連関的環境家計簿分析を用いて」を進める。					
今年度の進捗状況		上記目標1)については、残された課題の整理が済んだことから、その対応策を検討する必要がある。 上記目標2)については、基礎的なデータ整備が進んだ。2021年度の研究費(鹿島学術振興財団による助成:研究代表者:鷺津明由(早稲田大学次世代科学技術経済分析研究所))も決まった。 上記目標3)については、科研費申請中により、採択された場合にアンケート調査を実施する準備を行った。					



来年度の進捗目標	上記目標1)の対応方針を決めて、論文にまとめる。 上記目標2)については、鹿島財団の研究費を利用してのヒアリング調査やアンケート調査の準備を進め、準備が整い次第、調査を実施する。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2018年4月～	宮城県行政評価委員会大規模事業評価部会 委員		
2018年3月～2020年6月	宮城県卸売市場審議会 委員		
2016年10月～	宮城県情報公開審査会 委員		
2016年1月～	宮城県再生可能エネルギー等・省エネルギー促進審議会 委員		
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
1. インターネット広報管理運営委員会 委員 2. 敬和会幹事 3. 学科会議書記			

2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	准教授	氏名	稲見 裕介	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	講師	氏名	小林 陽介	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
manabaを活用した双方向型授業		2020年5月～		課題提出フォームに質問・感想欄を設け、manabaを通じて返答する。多かった質問・意見については次回授業時に紹介し、全体で共有・フィードバックを行う。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
パワーポイント資料(オンデマンド型授業用)		2020年5月～		オンデマンド型授業用のパワーポイント資料。アニメーション機能を活用して学生が1つ1つじっくりと読み進められるように工夫している。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		学生が現実の経済社会の動きに興味を持てるような授業となるよう心掛けている。					
今年度の進捗状況		今年度は授業資料に時事的な内容を含めるよう意識した。					
来年度の進捗目標		今年度の取り組みを継続するとともに、さらなる内容の充実に努めたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
グローバル金融危機後の米国社債市場の構造変化『現代金融資本市場の総括的分析』		共著	2021年2月	日本証券経済研究所		小林陽介	pp.250-270
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
「金融危機後の米国証券引受業務に関する一論点」		単著	2020年7月	日本証券経済研究所、『証券レビュー』第60巻第7号, 60(7)		小林陽介	pp.58-69
「信用理論と証券取引所—ブロックチェーンの証券市場への適用実験を材料として—」		単著	2020年5月	信用理論研究会、『信用理論研究』(38)		小林陽介	pp.1-15
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
グローバル金融危機後の米国社債市場の構造変化		単独	2020年12月	ポスト・ケインズ派経済学研究会(オンライン)		小林陽介	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		グローバル金融危機(リーマンショック)後の米国金融の変化に焦点を合わせて研究を行っている。					
今年度の進捗状況		今年度は米国における社債市場の変貌について論文をまとめた。					
来年度の進捗目標		来年度もグローバル金融危機後の米国における金融証券市場の拡大について検討を進める。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							

2020年5月～2022年3月	経済理論学会 事務局補佐		
2020年4月～	公益財団法人日本証券経済研究所 客員研究員		
2020年	経済理論学会 第68回大会臨時実行委員		
2019年～	証券経済学会 プログラム委員		
2017年～2020年	証券経済学会 幹事		
2012年～	証券経済学会 会員		
2010年～	経済理論学会 会員		
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	准教授	氏名	佐々木 周作	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
教員独自の「学生による授業評価」を実施している。		2020年5月～2021年1月		担当科目「行動経済学」「実験経済学」では、学部で実施する「学生による授業評価」に加えて、授業の効果や改善点を把握するために教員自身が考案したアンケートを実施した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
医療現場の行動経済学の“過去・現在・未来”	単著	2020年11月	医学のあゆみ 275(8), 医学のあゆみ 275(8)	不明	pp.861 - 865		
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
ワクチン接種意向の状況依存性: 新型コロナウイルス感染症ワクチンに対する支払意思額の特徴とその政策的含意	単著	2021年2月	経済産業研究所ディスカッション・ペーパー (21J007), 経済産業研究所ディスカッション・ペーパー (21J007)	◎佐々木 周作, 齋藤 智也, 大竹 文雄	pp.44223		
Nudges for Public Budget Officers: A Field-based Survey Experiment	単著	2021年1月	Social Science Research Network (3772202), Social Science Research Network (3772202)	◎Makoto Kuroki, Shusaku Sasaki	pp.1 - 59		
A Japan's Experimental Comparison of Rebate and Matching in Charitable Giving	単著	2021年1月	Osaka University ISER Discussion Paper (1114), Osaka University ISER Discussion Paper (1114)	◎Shusaku Sasaki, Hirofumi Kurokawa, Fumio Ohtake	pp.1 - 36		
日本の地方自治体における政策ナッジの実装: 横浜市行動デザインチーム(YBiT)の事例に基づく体制構築と普及戦略に関する提案	単著	2020年10月	経済産業研究所ポリシー・ディスカッション・ペーパー (20P026), 経済産業研究所ポリシー・ディスカッション・ペーパー (20P026)	◎高橋 勇太, 植竹 香織, 津田 広和, 大山 紘平, 佐々木 周作	pp.44218		
Short-term responses to nudge-based messages for preventing the spread of COVID-19 infection: Intention, behavior, and life satisfaction	単著	2020年8月	Discussion Papers In Economics And Business, Osaka University, Discussion Paper 20-11, Discussion Papers In Economics And Business, Osaka University, Discussion Paper 20-11	◎Shusaku Sasaki, Hirofumi Kurokawa, Fumio Ohtake	pp.1 - 33		
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
私見卓見 行動変容に頼らぬコロナ対策『私見卓見 行動変容に頼らぬコロナ対策』	単著	2021年3月	日本経済新聞 48487, 日本経済新聞 48487, 日本経済新聞 48487	不明	pp.31		

接触確認アプリCOCOAを行動経済学で読み解く『接触確認アプリCOCOAを行動経済学で読み解く』	単著	2020年11月	金融ジャーナル 777, 金融ジャーナル 777, 金融ジャーナル 777	不明	pp.36 - 37
「マッチング寄付」は逆効果を生みかねない『「マッチング寄付」は逆効果を生みかねない』	単著	2020年9月	週刊東洋経済 6942, 週刊東洋経済 6942, 週刊東洋経済 6942	不明	pp.84 - 85
「他の人は〇〇しています」:医療・健康分野の社会比較ナッジの使い方『「他の人は〇〇しています」:医療・健康分野の社会比較ナッジの使い方』	単著	2020年5月	経済セミナー 714, 経済セミナー 714, 経済セミナー 714	不明	pp.28 - 33

#### E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)

#### F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)

アフターコロナに残したい日本の「義理」と「人情」(書評:山村英司『義理と人情の経済学』東洋経済新報社)	単著	2021年1月	行動経済学 13, 行動経済学 13	不明	pp.110 - 112
安易で無配慮なナッジの防止策(書評:那須耕介・橋本努編『ナッジ!? 自由でおせっかいなバタリアン・パターナリズム』勁草書房)	単著	2020年9月	法学セミナー 789, 法学セミナー 789	不明	pp.122 - 123

#### G. 学会における研究発表

A Japan's Experimental Comparison of Rebate and Matching in Charitable Giving	共同	2021年3月	International Workshop for Lab and Field Experiments(不明)	◎Shusaku Sasaki, Hirofumi Kurokawa, Fumio Ohtake	
環境省共催・ベストナッジ賞特別企画 日本の政策ナッジの最前線!	共同	2020年12月	行動経済学会第14回大会(不明)	◎佐々木 周作, 池本忠弘, 高橋 勇太, 勝山明日香	

#### H. 翻訳(学術書や原典等)

#### I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

#### Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
----------	----------	------------------------	----

#### Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2021年3月	International Workshop for Lab and Field Experiments セッション座長
2021年2月	行動経済学会 第04回学生論文コンテスト
2020年12月	行動経済学会 第14回大会 学生ポスター奨励賞
2020年12月	行動経済学会 第14回大会
2020年12月	行動経済学会 第14回大会
2020年9月	医療経済学会 第15回研究大会
2020年6月～	宮城県民間非営利活動プラザ 運営評議会委員
2019年12月～	経済産業省 資源エネルギー庁 総合資源エネルギー調査会 臨時委員
2019年6月～	経済産業省 METIナッジユニット・プロジェクト 会合委員
2019年5月～	公益財団法人生命保険文化センター 「人生100年時代におけるライフマネジメント」研究会 委員
2019年3月～	横浜市 温暖化対策総括本部 横浜カーボンオフセット・プロジェクト・アドバイザー 委員
2018年10月～	環境省 日本版ナッジユニット 連絡会議有識者 委員
2017年12月～	行動経済学会 若手ワーキング・グループ 会員
2016年7月～	日本ファンドレイジング協会 寄付白書発行研究会 委員

V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	准教授	氏名	谷 祐可子	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
授業理解確認の小テスト		2018年4月～		ほぼ毎回の授業(講義)の終わりに、内容確認の小テストを実施した。			
学習事項の記憶への定着と授業理解の促進		2010年4月～		授業の冒頭で前回復習および今回概略説明を行ない、授業終了時に今回まとめを行なった。			
演習レポート・論文の添削・返却・指導		2010年4月～		総合演習、演習Ⅰ、演習Ⅱの課題レポート、および演習Ⅲの卒業論文を、添削・返却・指導した。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
講義・演習で使用する補助教材の作成		2010年4月～		講義および演習で使用する補助資料・配付資料を作成した。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		講義内容の理解深化のために可能な限り新しい研究成果や情報も紹介する。 演習での主体的学習を促すために多様な実施方法を取り入れる。 授業時間以外でも学生とのコミュニケーションを図る。					
今年度の進捗状況		講義の内容を随時更新した。 オンデマンド型の授業では視聴期間を長く設定し、掲示板や個別指導機能を利用した。					
来年度の進捗目標		講義では学生の理解度に配慮した授業速度および内容にする。 演習では主体的学習を促すために多様な実施方法を継続する。 授業時間以外での学生とのコミュニケーション機会を随時もつ。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
書評 松沢裕作編『森林と権力の比較史』		単著	2020年5月	林業経済研究所, 林業経済, 73(2)		谷 祐可子	pp.15-19
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		幅広く研究交流する。 持続可能な発展に関する理論的・実証的研究を推進する。 現地調査の成果をとりまとめる。					
今年度の進捗状況		平成29年度から平成31年度の科研費による研究成果として論文を執筆し投稿中である。 2019年9月から2020年8月までロンドン大学SOASにて在外研究を実施した。 持続可能な森林資源利用に関する先行研究等の収集およびデータ分析を継続している。					
来年度の進捗目標		幅広い研究交流を継続する。 持続可能な発展に関する理論的・実証的研究を推進する。 Covid-19の影響により在外研究期間中に収集しきれなかった資料の収集を継続する。					



Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	准教授	氏名	田野 穂	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
講義内容の理解を促すための課題を毎回提示。		2020年		日本経済論では、「本日の課題」として毎回出題して、学生による講義内容を自分なりにまとめることで、理解を深めることを促した。日本産業論では、ミニツツペーパーの提出を毎回課して、学生による復習を促した。また、優れた内容のミニツツペーパーについては次回講義の冒頭で紹介し、学生の意欲を促すように工夫した。			
講義内容の理解促進のためのレジュメを毎回配布。		2020年		2年次コア科目「日本経済入門」では、講義内容のポイントを示した虫食い形式のレジュメを配布し、理解を容易にする工夫をした。			
講義内容の理解促進のためのレジュメを毎回配布。		2020年		3年次以降コース科目「日本経済論」と「日本産業論」では、講義内容のポイントを示したレジュメを配布し、理解を容易にする工夫をした。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		授業時に配布しているレジュメに一層改善を加え、受講生に分かりやすいものにする。					
今年度の進捗状況		具体的な説明が豊富で分かりやすかったという意見を数名の学生から直接伝えられた。					
来年度の進捗目標		復習ポイントを示した「本日の課題」を全ての講義科目で提示するようにする。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		(1)構造不況期における産業集積の環境適応について考察する。 (2)企業間取引研究の変遷と課題について考察する。					
今年度の進捗状況		目標(1) 地域デザイン学会(3月@富山大学)や加護野忠男ゼミ研究会(9月@神戸大学)において「平成不況期における創業と事業展開」を報告した。これらの報告をつうじて今後検討すべき調査対象や先行研究などの課題が得られた。  目標(2) 研究会をつうじて検討すべき先行研究群が明確化した。					

<p>来年度の進捗目標</p>	<p>目標(1)          当事者へのインタビュー調査をつうじて1次資料をもっと充実させていく。また、産業集積研究と企業家研究のレビューを論文としてまとめる。</p> <p>目標(2)          共起ネットワーク分析をつうじて企業間取引研究をめぐる研究者コミュニティの問題意識や分析方法の変化について検討する。その検討結果をふまえて論文としてまとめる。</p>		
<p>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</p>			
<p>競争的資金の名称</p>	<p>採用年度(西暦)</p>	<p>個別・共同の区分          共同の場合の役割分担</p>	<p>概 要</p>
<p>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</p>			
<p>2020年12月～2021年3月</p>	<p>東北学院大学東北産業経済研究所主催「新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の地域経済への影響」司会兼モデレーター担当(2020年度東北産業経済研究所シンポジウム) 司会</p>		
<p>2020年11月</p>	<p>東北学院大学東北産業経済研究所主催「新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の地域経済への影響」司会兼モデレーター担当。委員</p>		
<p>2020年6月～2026年3月</p>	<p>北上市史編さん近現代部会 調査協力員</p>		
<p>2012年9月～</p>	<p>日本経営学会 会員</p>		
<p>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</p>			
<p>展覧会・演奏会・競技会等の名称</p>	<p>場 所</p>	<p>開催年月日(西暦)</p>	<p>発表・展示等の内容等</p>
<p>現在の課題・目標</p>			
<p>今年度の進捗状況</p>			
<p>来年度の進捗目標</p>			
<p>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</p>			

2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	准教授	氏名	舟島 義人	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
受講生の理解度に応じた授業の実施		2020年4月～		e-ラーニング(respon)を活用して分からない点を確認し、受講者の理解が不足している点を重点的に講義している。			
授業時間外の学習の促進		2020年4月～		授業の補足資料を学習支援システム(manaba course)を使って配布し、授業時間外の学習を促している。			
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2020年4月～		講義形式の授業においても、学生が自ら考える演習の時間をとっている。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
経済数学講義ノート		2020年9月		経済学部2年生向けのスライド			
マクロ経済学講義ノート		2020年4月		経済学部3・4年生向けのスライド			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		前年度に引き続き課題は次の点である。 ①学生が数学を使って経済分析を行えるようになる。 ②大人数講義における学生の主体的な学びを促進する。					
今年度の進捗状況		上記の目標①については、経済数学や演習の授業において、経済学で基本となる数学を解説した。目標②については、e-ラーニング(respon)を活用することで、受講生各自が問題意識を持って受講できるように努めている。					
来年度の進捗目標		上記の目標①については、予習復習の課題をさらに充実させる。目標②については、引き続きe-ラーニング(respon)のより効果的な活用方法を模索する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
Time-Frequency Regression		単著	2021年1月	Journal of Econometric Methods, 10(1)		Yoshito Funashima	pp.21-32
Global economic activity indexes revisited		単著	2020年8月	Economics Letters, Vol. 193, 109269, Economics Letters, 193		Yoshito Funashima	pp.109269
Money stock versus monetary base in time-frequency exchange rate determination		単著	2020年6月	Journal of International Money and Finance, 104		Yoshito Funashima	pp.102150
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
Where to Go: The Japanese Government's Travel Subsidy during COVID-19		共著	2020年12月	SSRN		Yoshito Funashima, Kazuki Hiraga	pp.3746114
Efficiency and Group Size in the Voluntary Provision of Public Goods with Threshold Preference		単著	2020年7月	TGU-ECON Discussion Paper Series, 2020		Yoshito Funashima	pp.4
How Does Economic Policy Uncertainty Respond to Permanent and Transitory Shocks?		単著	2020年4月	TGU-ECON Discussion Paper Series, 2020		Yoshito Funashima	pp.3
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	① 論文“How Does Economic Policy Uncertainty Respond to Permanent and Transitory Shocks?”を学術雑誌に掲載する。 ② 論文“Efficiency and Group Size in the Voluntary Provision of Public Goods with Threshold Preference”を学術雑誌に掲載する。 ③ 論文“Where to Go: The Japanese Government’s Travel Subsidy during COVID-19”(仮題)を完成させる。		
今年度の進捗状況	上記の目標①と②については、いずれも査読付き学術雑誌に投稿中である。目標③については、学会や研究会で報告を行いつつ、論文の改訂作業を行っている。		
来年度の進捗目標	上記の目標①と②については、必要な改訂作業を行いつつ、査読付き学術雑誌に掲載されることを目指す。目標③については、改訂作業を終え、査読付き学術雑誌に投稿する。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2018年度～	共同(研究分担者)	
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2017年度～2020年度	共同(研究代表者)	政府支出のクラウドディング・アウト/イン効果の地域間スピルオーバー
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	准教授	氏名	松前 龍宜	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		経済成長・景気循環の経済学的メカニズムを平易に解説すること					
今年度の進捗状況		オンライン講義に向けた講義資料の作成					
来年度の進捗目標		講義資料に利用したデータ等のアップデート					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		DSGEモデルを用いた景気循環の要因分析と政策効果の検証					
今年度の進捗状況		過去の論文のリバイス作業					
来年度の進捗目標		財政政策の物価へ及ぼす影響(FTPL)等、新しいテーマに取り組む					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
科学研究費補助金 科研費基盤研究C		2016年度～2019年度	個別	DSGEモデルを用いた日米の財政・金融政策効果の定量的評価			
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>							

2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	准教授	氏名	宮本 拓郎	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
Advancement of Green Public Purchasing by Category: Do municipality green purchasing policies have any role in Japan?	単著	2020年10月	Sustainability 12 (21): 8979, Sustainability 12 (21): 8979	Takuro Miyamoto, Naonari Yajima, Takahiro Tsukahara and Toshi. H. Arimura	pp.不明		
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
グリーン消費者とサプライチェーンの競争環境を考慮したエコ製品の普及とグリーンイノベーションの理論的考察	単独	2020年11月	2020年度日本応用経済学会秋季大会(不明)	不明			
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標	現在、取り組んでいる研究課題は以下の3つである。 (1) 環境問題の自主的取り組み (2) グリーンサプライチェーンマネジメント (3) グリーン公共調達						
今年度の進捗状況	(3)に関する論文を査読付き学術誌に掲載され、(2)に関する研究を学会報告することができた。						
来年度の進捗目標	(1)と(2)に関する研究については、論文のブラッシュアップを行い査読付き学術誌に投稿すること。(3)については新たな研究内容で、自分自身もしくは共同研究者が学会報告するところまで研究を進めること。						
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				

科学研究費補助金 科学研究費補助金(若手研究)	2017年度～2019年度	個別	本研究では製品に関する環境規制は規制対象企業のサプライヤーのイノベーションを刺激するのかどうかという学術的「問い」に答えることで、ポーター仮説に関する研究分野に新たな学術的な貢献を行うを目指す。また、本研究の学術的な発見から(出来れば)様々な政策的含意を引き出した
IV 学会等及び社会における主な活動			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			



2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	講師	氏名	塩見 由梨	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
responを活用した双方向でのフィードバックの導入		2020年4月1日～		responを活用して教員→学生、学生→教員の双方向でのフィードバック機会を設定した。具体的には、教員→学生の取り組みとして、クリック機能を利用して学生がコメントや投票のかたちで意見を出す機会を多く用意し、それに対して次回の講義で教員からのリプライを行なっている。また、学生→教員の取り組みとして、アンケート機能を利用して教員独自の授業内容に関するアンケートを実施し、学生からの講義内容への希望や感想のフィードバックを得ている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		講義内で実際の学生の興味・関心を聞く機会を多く設けることで、より本学での講義にあった内容にブラッシュアップする材料を集める。前期は遠隔講義になるため、演習科目では学生同士で話し合う時間を確保することで、学生の交流の機会としても授業時間を積極的に役立ててもらう。					
今年度の進捗状況		Responのクリック機能を利用して、学生がコメントや投票として意見を出せる機会を設けた。授業最終回に授業内で行ったアンケートでも、responでの質問が考える機会になったと好意的な意見を得ることができた。					
来年度の進捗目標		Respon等のツールを利用して、学生同士、また学生と教員の意見交換ができる機会をますます増やしたい。授業運営は安定したが、公正な試験の実施に大きな課題があることがわかったため、来年度は講義科目の試験実施方法を再検討する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		経済学史に関するこれまでの研究成果をまとめて学術書の出版を準備する。在庫形成と景気循環の関連について先行研究を調査し、学会・研究会発表を準備する。					
今年度の進捗状況		病気療養のため十分な進捗が得られなかった。今年度予定されている研究発表を来年度に延期することになったため、それに向けて改めて各研究課題を進めてゆくこととしたい。					
来年度の進捗目標		延期となった景気循環の研究発表に向けて、原稿執筆を継続する。また、経済学史の研究について追加の調査・考察を行ない、出版に必要な原稿を完成させる。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							

V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
人間対象研究審査委員会			

2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	講師	氏名	白井 大地	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
教員独自の「学生による授業評価」を実施している		2020年		学部で実施する「学生による授業評価」に加えて、授業の効果を測定するために教員自身が考案したアンケートを実施している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
金融論の問題集の作成		2020年		2年生向けの金融論の講義用に、manabaで回答する問題集を作成した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。					
今年度の進捗状況		今年度は遠隔授業としてイレギュラーな対応が求められたが、Zoomによる個別指導や、manabaやメールを用いた質問の対応を進めた。					
来年度の進捗目標		来年度も訪問しやすい環境を継続していきたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		1) Debt-ridden borrowers and Economic Slowdownを完成させる。 2) Core Inflation and Trend Inflation in Japanの研究を進める。 3) 過剰債務問題に対する財政政策による救済政策の研究を進める。 4) What Structural Shocks Drive the Fluctuations of the Labor Wedge and the Business Cycles in Japan?の研究を進める 5) サーチマッチングモデルを用いた景気循環の実証分析					
今年度の進捗状況		1) 共著者による修正中。 2) 新しい推計方法に関する研究を進めている。 3) 一通り作業を終え、日本経済学会の春季大会に投稿し、発表が受理された。 4) ワーキングペーパーとして論文が完成し、英文の査読付き学術雑誌に投稿中 5) 基本モデルが完成し、応用の分析中。					
来年度の進捗目標		1) 早々に査読付き雑誌に投稿を予定し、受理を目指して進める。 2) 新しい推計方法を元に推計作業を進める。 3) 学会報告のコメントを受けて修正し、投稿する。 4) レプリーコメントの対応をし受理を目指す。 5) ワーキングペーパー化し、学会報告を進める。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 科学研究費補助金(日本学術振興会) 若手研究	2018年度～2020年度	個別	<p>テーマ: マクロブルーデンスのための財政政策</p> <p>概要: 本研究の目的は、企業が借入制約に直面し、過剰債務問題に直面するも、法人税減税や、財政支出の増加、債務の買い取り政策といった政策対応の効果を検討することである。中でも法人税減税は通常、景気対策の一つとして実施されるが、法人税は資本構成に影響を及ぼすことがよく知られており、税率の変更は企業の資金調達へ影響を及ぼす。財政政策の実施は通常想定されるような景気刺激策としての直接的な効果だけでなく、企業債務の動学に影響を及ぼし、借入や配当の変化を通じて実体経済に影響を及ぼす。企業が過剰債務により借入が厳しい状況において、政策の変更が過剰債務問題解消に対して効率的な方法かを検討する。これらの問題を考察するために、企業の資本構成を明示的に考慮に入れたモデルを構築し、従来考察されてこなかった企業の資本構成の変化を通じた財政政策のマクロブルーデンス政策としての効果を考察する。政策運営上も新たなメカニズムを分析することで財政政策の有効性の知見が深まり有益と考える。</p>
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2012年～		Econometric Society 会員	
2012年～		American Economic Association 会員	
2012年～		The Munich Personal RePEc Archive (MPRA), Editor 委員	
2006年～		日本経済学会 会員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
FD推進委員会			

2020年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	教授	氏名	石川 真作	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
レスポンの活用		2020年～		授業理解と取り組みの測定のため、レスポンを活用。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①日本の多文化共生に関する状況に関して学生の理解を深める ②ヨーロッパの移民問題に関して学生の理解を促す ③宮城県周辺の多文化共生の状況に関して情報を収集し授業内容に反映する					
今年度の進捗状況		①近年の宮城県における外国人住民の増加にともない、学生の関心と理解が高まっている。 ②仙台観光国際協会及び宮城県国際化協会等と連携してゼミにおいて参与観察を行った。 ③ 愛知県における「多文化ツアー」に演習およびフィールドワークの受講生が参加した。					
来年度の進捗目標		①引き続き時事の進捗をフォローし授業に反映、学生の関心を喚起する。 ②ゼミおよびフィールドワークにおいて、NPOによる継続的な外国人支援事業により深く関与し、学生の経験と理解を深める。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
「戦略としてのトランスナショナリズムとジェンダー——ヨーロッパとトルコにおけるアレヴィーの事例から」『戦略としてのトランスナショナリズムとジェンダー——ヨーロッパとトルコにおけるアレヴィーの事例から』	単著	2020年	『イスラーム・ジェンダー・スタディーズ2. 越境する社会運動』明石書店、『イスラーム・ジェンダー・スタディーズ2. 越境する社会運動』明石書店、『イスラーム・ジェンダー・スタディーズ2. 越境する社会運動』明石書店	鷹木恵子(編)	pp.123-135		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
「地域は共生の舞台となりえるカードイツの一都市の事例—」	単著	2020年7月	『都市住宅学』110、『都市住宅学』110	石川真作	pp.87-93		
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
「ドイツにおけるトルコ移民との比較」	単独	2020年9月	イスラーム・ジェンダー学科研公開セミナー『日本に暮らすムスリムを取り巻く諸問題——職場・学校・地域から』(オンライン)	石川真作			
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		① トルコにおける少数宗派集団アレヴィーについての調査 ② ドイツにおける難民受け入れ状況について調査 ③ 「ヒズメット運動」関係者の日本での活動について調査 ④宮城県周辺の多文化共生の状況について調査					

今年度の進捗状況	①オーストラリアでの調査 資料収集 ② 資料収集 オンライン講演会の開催 ③ 関係者が運営する教育機関で観察を継続 ④仙台観光国際協会、宮城県国際化協会および市民団体、企業等と協力して活動中
来年度の進捗目標	① 資料の分析 トルコでの調査を準備 ②現地調査を行う ③参与観察を継続 ④ 参与観察を継続

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 基盤研究(B)	2017年度～2020年度	(研究分担者)	<p>前年度の繰り越し事業として行った6月の日本ドイツ学会でのフォーラムをはさみ、本年度の調査前調査後の打ち合わせ研究会を3回実施し、フォーラムや現地調査参加者以外の研究分担者との情報共有を密に行い、11月に、初めてチェコ・プラハでの現地調査を実施した。チェコをはじめとする中欧の4か国(ハンガリー、スロヴァキア、ポーランド)は、EUの難民割り当てに対する抵抗勢力として知られているが、難民危機以前から、公的機関ではなく、NPOも難民・移民問題に取り組んでいることが確認できた。しかしながら、難民・移民問題は国民的課題とはみなされず、最近の研究関心は、むしろチェコから流出する移民に向けられている。</p> <p>同月にドイツ・ハレでの定点観測とハレの属するザクセン＝アンハルト州の州都マグデブルク、ハレに近いザクセン州のライプツィヒでの調査も実施した。ハレ市の移民統合専門官からハレ市のネットワークの現状と政局の影響の聴き取り、定点観測中のカシューターニエン大通り中等学校の現状に関する聴き取りとドイツ語クラスの参観、難民・移民児童の教育に効果を上げているとされる学童保育の参観、NPO運営の市民と移民の交流の場ウェルカム・トレプの見学、ハレとライプツィヒのモスクの見学と聴き取り、マグデブルクの州労働社会省の統合担当官の聴き取りと外国系園児の多いこども園の参観を行った。ハレ市のみならず、ザクセン＝アンハルト州全体としても移民・難民統合に向けて行政が積極的な政策を打ち立て、州としての独自性を保っていることが分かった。</p> <p>このように統合政策が順調とみられているハレ市であるが、現地調査直前に市外の犯人によるシナゴーク襲撃事件が起こった。そのため、ハレ市のユダヤ人の歴史、最近のロシアからのユダヤ系移民の流入などについても追加的に調査した。市民の難民・移民統合への意欲、反人種差別主義の姿勢はむしろ高まったようである。</p>

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動	
2020年2月～	宮城県多文化共生社会推進審議会 委員
2008年10月～	移民政策学会会員 会員
2002年6月～	日本移民学会会員 会員
2001年4月～	日本中東学会会員 会員
1993年4月～	日本文化人類学会会員 会員
1993年1月～	日本イスラム学会会員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	
共生社会経済学科長	

2020年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	教授	氏名	郭 基煥	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
本年度は在外研究期間につき教育には携わっていない		2020年					
本年度は在外研究期間中につき、教育には携わっていない。		2020年					
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>●批判的に考える力を伸ばすことを重視している。</li> <li>●一般的な学説を説明するのにとどまらず、それをかみ砕いて説明することで、自分の頭で判断できるようにしている。</li> <li>●学生が腑に落ちて理解すること、その理解に基づいて判断する能力を高めることを重視している。そのために様々な角度、立場から物事を見るよう、授業などでは多様な視点を提示している。</li> </ul>					
今年度の進捗状況		今年度は在外研究期間につき教育活動に携わっていない					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>●学説的なことを説明する際は、それが自分たちが生きている現代社会の問題との接点を意識するよう授業を工夫したい。</li> <li>●学生自身が社会を作っていく一員であるという意識をもつように工夫する。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>●日韓の多文化共生施策についての比較研究</li> <li>●在外国民のための選挙制度についての国際比較研究</li> </ul>					
今年度の進捗状況		●在外研究期間を利用して、韓国に滞在する期間中に特に①多文化主義的施策、②ディアスポラのアイデンティティ、③移住者への社会的まなざしについての文献調査を進めた					
来年度の進捗目標		●ナショナリズムと排外主義についての総合的な考察を進め、著書を執筆する					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							



今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2020年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	教授	氏名	熊沢 由美	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
アルバイトの紹介		2018年～		仙台銀行でのアルバイト学生に紹介し、金融について理解を深める機会を設けた。			
日本女性会議でのボランティア		2012年10月26日～2021年10月28日		3年の演習生と総合演習Ⅱの受講生に、日本女性会議の運営ボランティアをさせた。			
他大学との合同ゼミ		2003年～		他大学との合同ゼミを2回おこなった。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
講義資料の作成		2020年					
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
講演会の講師		2020年11月15日		イコールネット仙台			
講演会の講師		2020年9月17日		イコールネット仙台			
現在の課題・目標		学生が、授業の内容をよりよく理解できるようにする。知識を与えるだけでなく、現在の課題や状況について、学生が考える時間を持てるようにする。					
今年度の進捗状況		DVDや写真などの映像資料を用いた。「・・・に賛成か、反対か」など、学生に考えさせる形で感想やレポートを書かせるようにした。遠隔授業になったため、ゲストスピーカーの招聘はできなかった。					
来年度の進捗目標		学生が提出したレポートなどから、今年度の取り組みの効果を確認し、効果的と思われるものを来年度も取り入れる。これまで依頼してきたゲストスピーカーの所属団体で、遠隔授業用のコンテンツが検討されている。取り入れられるものがあれば、取り入れてみたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		1. 日本における社会保障の制度史 2. 格差についての研究					
今年度の進捗状況		1. 論文の執筆、資料収集・調査 2. 論点整理、資料収集					
来年度の進捗目標		1. 論文の発表、論文の執筆 2. 資料収集、論文の執筆					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2020年6月～		宮城県後期高齢者医療審査会委員 委員	
2020年4月～		宮城県地域年金時事業運営調整会議委員 委員	
2020年4月～		仙台市経営戦略会議委員 委員	
2020年4月～		社会政策学会幹事 会員	
2020年～		第2次多賀城市男女共同参画推進計画策定アドバイザー 委員	
2017年5月～		石巻市男女共同参画推進審議会会長 委員	
2016年6月～		宮城県公益認定等委員会委員 委員	
2014年10月～		仙台市民生委員推薦会委員 委員	
2012年7月～		岩沼市男女共同参画審議会副会長 委員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
2020年4月? 東北学院住宅資金貸付審査委員会委員長			

2020年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	教授	氏名	佐藤 純	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
・学生が理解しやすいスライドの作成・多数のPDF化した資料やテキストの公開・教科書の内容を丁寧に反映した授業の組立て		2020年4月1日～		オンデマンド授業であったこともあり、学生が理解しやすいスライドを100枚以上作成した。また、授業内容の理解を促進するためにPDF化した資料を多数公開した。その結果、学生のアンケートでは、「話がわかりやすかった」「授業内容が興味深かった」等のポジティブな評価を得ることができた。一方、授業と教科書の内容との関連性が希薄であるとの指摘も受けたため、教科書の内容を丁寧に反映した授業の組立てにも鋭意努めている。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
国際連盟経済情報局(佐藤純訳)『世界貿易のネットワーク』2021年3月、創成社。		2020年4月1日～2021年3月31日		担当科目である経済史では、19世紀末にイギリスを中心に形成されたグローバルな貿易秩序の形成と解体に関する授業を行っているが、この際に使用する教科書を作成した。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		米中の「貿易戦争」にみられるように、グローバルな貿易秩序がゆらいでいる。かかる現状を歴史的視点から冷静に分析し、世界貿易や世界経済の現状について、自分なりの意見を持てるような学生の育成を目指している。したがって、「経済史」「西洋経済史」の授業では、1930年代の世界貿易の破綻のメカニズムについて、世界経済の分断化の主因となったとされるイギリスの通商政策について解説している。研究テーマを反映させることでストーリー性の授業を行うことが目標である。また、演習においては、新聞や日本語文献、さらには英文テキストを用い世界経済の諸問題を学習していく中で、各自、関心のあるテーマを見つけてもらい、最終的にはすべての受講生に学術的体裁が整った卒業レポートを作成させることが目標である。					
今年度の進捗状況		「経済史」「西洋経済史」の講義の構成を明確化することができた。具体的には以下の通り。 ①ガイダンス／②国際収支と多角的貿易の概念／③イギリスを基軸とする多角的貿易システムの形成／④イギリスを基軸とする多角的貿易システムの構造と機能／⑤イギリスを基軸とする多角的貿易システムの特質／⑥⑦課題学習(ロンドン・シティ)／⑧イギリスを基軸とする多角的貿易システムの変質／⑨イギリスを基軸とする多角的貿易システムの「復活」／⑩イギリスを基軸とする多角的貿易システムの機能不全／⑪1930年代イギリス通商政策と投資利害の保全／⑫1930年代イギリス通商政策の展開1／⑬1930年代イギリス通商政策の展開2／⑭⑮課題学習②(教科書のまとめ)  この構成に基づき、①～⑮の部分については解説用のスライドも多数作成することができた。					
来年度の進捗目標		第一の目的は、「今年度の進捗状況」で記した⑫⑬の部分の授業内容の充実を図ることである。これにより、「経済史」「西洋経済史」の授業が一つのストーリーとして展開できるようになる。また、授業には最新の研究成果を取り入れているので、これを加筆・修正し、研究論文に仕上げ、授業内容のさらなる向上を目指していきたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							

「1930年代イギリス通商政策と投資利害—多角的貿易システムとの関連で—」	単独	2021年3月	社会経済史学会東北部会(不明)	不明	
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
国際連盟経済情報部『世界貿易のネットワーク』 『国際連盟経済情報部『世界貿易のネットワーク』』	単著	2021年3月	創成社, 創成社, 創成社	不明	pp.0
<b>I. 特許</b>					
<b>現在の課題・目標</b>	1930年代イギリスの通商政策については、「持てる国」イギリスによる排他的な輸出市場創出策として解釈されてきたが、投資利害の観点からかかる通説の見直しを図ることが目標である。そのため、計画的に学会発表と論文発表を行っていき、最終的には単著『世界貿易の破綻—1930年代イギリス通商政策と投資利害—』(仮題)の出版を目指す。				
<b>今年度の進捗状況</b>	<p>「現在の課題・目標」で記した単著は以下の5章で構成される予定である。</p> <p>1章:イギリスと世界貿易のネットワーク  2章:1930年代イギリス通商政策の背景～多角的貿易システムとの関連で～  3章:1932年オタワ会議とイギリス投資利害  4章:1930年代イギリスの対アルゼンチン通商政策の展開  5章:1930年代イギリスの対デンマーク通商政策の展開  6章:アメリカによる多角的貿易システムの再建</p> <p>以上のうち、2章と4章のもととなる論文は発表済みであり、1章と3章のもととなる論文も概ね執筆済みである。</p>				
<b>来年度の進捗目標</b>	<p>「今年度の進捗状況」で記した6章のうち、2章と4章のもととなる論文は既に発表済みである。来年度は、概ね完成した1章と3章の論文を紀要に発表することが目標となる。また、5章と6章のもととなる論文を執筆するための準備も行う。具体的には、基本的資料の収集と読解作業を行う。なお、本研究の遂行に必要な資料をイギリス公文書館(The National Archive)から入手するには一定額の研究費が必要であるため、科研費(基盤研究C)に応募する予定である。</p>				
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
<b>競争的資金の名称</b>	<b>採用年度(西暦)</b>	<b>個別・共同の区分 共同の場合の役割分担</b>		<b>概要</b>	
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>					
2020年10月		出張講義「ヨーロッパ～グローバル経済の母体～」(中新田高校) 委員			
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>					
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>		
<b>現在の課題・目標</b>					
<b>今年度の進捗状況</b>					
<b>来年度の進捗目標</b>					
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>					
国際学部設置準備委員会委員 就職キャリア支援員 ハラスメント相談委員 共生社会経済学科高校生向けパンフレット作成の取り纏め AO委員 共通テスト主任監督者					

2020年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	教授	氏名	佐藤 康仁	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
responの活用		2018年～		ほぼ毎回、授業終了時にresponを利用して、授業内容のポイントや「まとめ」、疑問点などを提出させている(授業内容の記憶への定着と正しい理解の促進)			
manabaの利用		2017年～		2016年度から経済学部で導入されたeラーニング manabaを利用して、授業資料の公開や小テストの実施、質問用掲示板の設置などを行っている(授業内容の記憶への定着と正しい理解の促進)			
ウェブサイトでの授業内容の公開		2016年～		「加齢経済論」等、担当する授業の内容(シラバス、授業配付資料等)をウェブサイト公開している(2016年度後期からは経済学部eラーニング「manaba」に移行)			
学習内容の記憶への定着と授業理解の促進		2013年～		毎回、授業開始時には前回授業内容の復習とその回の授業の概略を説明するとともに、授業終了時にはその回の授業内容のまとめを行っている			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
『東日本大震災と高齢化』同文館出版(2刷)		2021年2月1日		共生社会経済学科専門教育科目「加齢経済論」教科書として使用。編著:熊沢由美、共著:佐藤康仁・楊世英。初版2018年3月、同文館出版より出版、2021年2月初版2刷。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
経済学部FD研修会・講師		2020年9月2日		「オンライン授業の前期の振り返りと後期に向けての注意点」			
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
出張講義(宮城県登米高等学校)		2020年12月3日		「高齢社会の経済学ーマクロとミクロでみる高齢化ー」			
現在の課題・目標		① 授業内容の記憶への定着と正しい理解の促進 ② 講義における成績評価方法の改善					
今年度の進捗状況		①manabaを利用して、毎回、講義内容に関する小テストを実施することで理解度を確認した。また、次回授業の事前学修課題も課した。加えて、2020年度はCOVID-19感染拡大防止の観点から講義がオンデマンド開講となったことから、講義動画は繰り返し視聴が可能である。 ②1回の試験による成績評価ではなく、manabaを活用することで、毎回の小テスト、事前学修課題、最終回(第15回)「まとめ」のテストを行い、総合的に評価することが可能となった。					
来年度の進捗目標		・授業最終回に実施する授業評価アンケートの結果をふまえて見直しを行う ・manaba、responのより効率的、効果的な活用をはかる					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
2019年財政検証を反映した世代会計の推計		単著	2020年9月	生活経済学会第36回研究大会・自由論題報告(抄録) <a href="https://jshweb.smartcore.jp/">https://jshweb.smartcore.jp/</a>		佐藤康仁	pp.-
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							

公的年金の給付水準調整と世代間不均衡	単独	2021年3月	東北大学 高齢経済社会研究センター「社会にインパクトある研究」シンポジウム「高齢化進行の中での社会の持続可能性ーコロナ禍と震災10周年を踏まえてー」第2部研究発表(2021年3月23日、オンライン開催)(東北大学)	佐藤康仁	
分科会A-1「税制1」座長	単独	2020年10月	日本財政学会第77回全国大会(2020年10月17,18日、東北大学;オンライン大会)(東北大学)	佐藤康仁	
野呂拓生報告「地域間産業連関表から見る被災地産業経済構造の変化」へのコメント	単独	2020年9月	生活経済学会第36回研究大会(2020年9月12,13日、酪農学園大学;オンライン大会)自由論題研究報告(酪農学園大学)	佐藤康仁	
2019年財政検証を反映した世代会計の推計	単独	2020年9月	生活経済学会第36回研究大会(2020年9月12,13日、酪農学園大学;オンライン大会)自由論題研究報告(酪農学園大学)	佐藤康仁	
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	①高齢化と世代間格差に関する研究 ②世代会計による日本の世代間不均衡の計測				
今年度の進捗状況	2019年財政検証結果にもとづき、マクロ経済スライド適用による給付水準調整による影響を反映した世代会計を推計し、世代別の純負担および世代間不均衡の大きさを定量的に評価した。この結果は生活経済学会において報告された。				
来年度の進捗目標	より一層の研究の推進をはかる				
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
科学研究費補助金 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究(C)	2018年度～2022年度	共同(研究分担者)			
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>					
2020年5月	多賀城市、第2次多賀城市男女共同参画推進計画策定に係るアドバイザー アドバイザー				
2013年10月～	宮城県消費生活審議会 副会長(2017年～)				
2011年12月～	内閣府 経済社会構造に関する有識者会議 財政・社会保障の持続可能性に関する「制度・規範ワーキング・グループ」 世代会計専門チーム 委員				
1996年10月～	生活経済学会 会員(2015年6月～2021年5月:理事。2019年6月～2021年5月:東北部会長) 会員				
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>					
学務部副部長(2020年4月1日～2021年3月31日) 経済学部長(2021年4月1日～現在)					

2020年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	前田 修也	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
LMS(manabaシステム)の導入。		2020年		約1年間にわたるコロナ禍のなかで、大規模教室である経済統計学Ⅰ・Ⅱ(受講生約450名:1年生2年生)で、manabaシステムを使ってテキストを用いながらパワーポイントと音声、それにmanabaの小テストを実施した。「学生による授業評価」においても、概ね好評であった。シラバスに従い、最終回にはレポートを提出させ、試験期間中の試験は行わなかった。manabaの教育効果は、未だ十分なデータは揃っていないが、「経済学部e-learning推進委員会」が行ったアンケートによれば、授業外学修時間は格段に増えている。今後もこのシステムを活用し、大規模教室での教育効果改善に努めたい。特に次年度は、レスポンス機能を導入する予定である。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
日本学生経済ゼミナール全国大会(中止)への参加		2020年		コロナ禍のなかで、演習Ⅰ・Ⅱ(2学年3学年)は、インゼミ大会参加の目標のために、年数回の特別授業・合宿を実施してきたが、残念ながら今年度は大会は中止となった。学内で「模擬大会」を開催した。3年ゼミ生には、学生を5グループに分け、約8か月にわたって討論用論文の執筆指導をした。分科会での発表では、他グループから十分な反応があった。4年生は、卒論執筆に専念した。			
現在の課題・目標		大規模教室で文系1・2年生に、わかりやすく経済学・統計学を教える方法の開拓。コロナ禍によって、オンディマンドの授業にならざるをなかった。eラーニングの導入によって大教室(オンディマンド)での教育効果は改善できるか?					
今年度の進捗状況		①manabaシステムの導入によって、授業外学修が増えた。②ほぼ毎回小テストを実施し次回解説を行うという形式が定着してきた。 ②学生による授業評価アンケートで、「総合評価」が4.20と過去最大であった。しかし、4-1と5の「授業以外での学修」が平均以下であった。					
来年度の進捗目標		①コロナ禍におけるmanabaのさらなる効果的な利活用法の開拓、文章題設問の活用、レポート提出の可能性を追求する。 さらにレスポンス機能を活用する。 ②学生による授業評価で、「授業以外での学修」関連で、平均値に近づけたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		①学内行政に費やされる時間と研究時間の分配・調整を行う。研究時間を確保すること。 ②「復興と中小企業プロジェクト」関連の調査・研究の充実。					



今年度の進捗状況	①に関しては、ほとんど改善されていない。研究時間が確保されていない。 ②に関しては、2021年度の早い時期に学術書(共著)を刊行予定。		
来年度の進捗目標	①に関しては、引き続き研究時間を確保する努力をする。 ②に関しては、進捗があった。2021年度の早い時期に学術書(共著)を刊行予定		
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2015年4月～		東北経済学会評議員(2015.4～) 会員	
1999年4月～		経済統計学会全国理事(1999.04～) 会員	
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
1. 経済学部長(2015.04～) 2. 教学改革推進委員会委員 3. 東北学院大学東北産業経済研究所所長 4. 社会福祉研究所所長 5. 教員資格審査委員 6. 広報委員会委員 7. 国際勾留委員会委員 など			

2020年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	准教授	氏名	黒坂 愛衣	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①授業時間以外でも学生とのコミュニケーションの時間をつくり、学習のフォローをする。 ②多人教講義においては、個々の学生とのコミュニケーションをとるのは難しいが、できるかぎり学生の反応の把握につとめる。 ③ゼミナールでは、より学生を中心とした学習活動になるよう場面設定を工夫する。					
今年度の進捗状況		①については、「フィールドワークIIc」および「演習I」において学生とのコミュニケーションのための時間を授業以外にも設定しており、ある程度の進捗がみられた。 ②については、「コミュニケーションカード」に書かれた疑問や感想を、次回の授業の冒頭で紹介している。一定程度の進捗がみられた。 ③については大幅な改善があった。					
来年度の進捗目標		①および②について、来年度も継続する。 ③について、ゼミ運営における学生の役割をより明確にする。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		①福島第一原発事故による避難生活者からのライフストーリー聞き取りを精力的に進める。 ②ハンセン病問題についての発信					
今年度の進捗状況		①については、今年度はコロナウイルス感染症の影響により、ほとんど実施できなかった。 ②については、本の中身について共同研究者と具体的な相談をし、出版社に打診しているところである。					
来年度の進捗目標		①については、引き続き精力的に聞き取り調査を実施する。 ②については、可能であれば来年度中に原稿をまとめて出版したい。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
科学研究費補助金 科学研究費補助金/基盤C		2017年度~2021年度	個別	社会的少数者の家族成員間での体験共有と関係性の(再)構築をめぐる研究			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2006年5月~				ハンセン病市民学会会員 会員			
2003年4月~				日本社会学会会員 会員			

2003年3月～		日本解放社会学会会員(理事) 会員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
東北学院大学災害ボランティアステーション副所長			

2020年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	准教授	氏名	小宮 友根	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2020年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	准教授	氏名	齊藤 康則	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		1) 双方向型の授業の実現(市民活動論Ⅰ(社会運動・コミュニティ論)・Ⅱ(ボランティア・NPO論)) 2) 学生の地域参加の促進(演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、フィールドワーク) 3) オフィスアワーにおける学生対応の向上					
今年度の進捗状況		1) 講義では毎回、前週の質問内容に対する返答プリントを作成し、配布した。 2) コロナ禍によりヒアリング等の対面活動はできなかった。 3) 就職活動のアドバイス、エントリーシートの添削などの実施。					
来年度の進捗目標		1) 引き続き、質問へのリプライを継続し、学生の理解度を高める。 2) 状況に応じて、演習およびフィールドワークにおいてヒアリングを実施する。 3) 次年度も学生の意向を踏まえ、継続的に実施する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
生業復興と販路形成——サードセクターは、なぜそしてどのように、被災した生産者を支援したのか『生業復興と販路形成——サードセクターは、なぜそしてどのように、被災した生産者を支援したのか』	単著	2020年6月	『東日本大震災と〈自立・支援〉の生活記録』(六花出版),『東日本大震災と〈自立・支援〉の生活記録』(六花出版),『東日本大震災と〈自立・支援〉の生活記録』(六花出版)	吉原直樹・山川充夫・清水亮・松本行真	pp.580-610頁		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
25年後の被災地が問いかける復興と支援の現在地——阪神・淡路大震災をめぐる特別企画によせて	単著	2020年5月	『地域社会学会年報』32号,『地域社会学会年報』32号	齊藤康則・伊藤亜都子	pp.62-74頁		
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
被災者を〈迎え入れる〉地域の論理とその展開——仙台市田子西地区の災害公営住宅を事例として	単独	2021年3月	第7回震災問題研究交流会(不明)	不明			
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		1) 仮設住宅・災害公営住宅における被災者支援の分析 2) 第一次産業(農業)の復旧・復興の分析 3) 災害ボランティア論の分析					

今年度の進捗状況	1) 仙台市周辺においてヒアリング調査を実施。第7回震災問題研究交流会(日本社会学会)において「被災者を迎え入れる地域の論理とその展開」を報告。 2) 学術論文「生業復興と販路形成」を発表。コロナ禍により遠隔地に出張できず、前年度までの調査を継続できなかった。 3) コロナ禍により遠隔地に出張できず、前年度までの調査を継続できなかった。		
来年度の進捗目標	1) 引き続き調査を進め、学会報告、論文執筆を行う。 2) 引き続き調査を進め、学会報告、論文執筆を行う。2021年度末に編著を刊行する予定である。 3) 引き続き調査を進め、学会報告、論文執筆を行う。		
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究C	2016年度～2019年度	個別	社会的事業の台頭と震災復興の長期化により転換期を迎えたNPOに関する実証的研究(コロナ禍により1年延長)
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2021年1月～		青葉区区民協働まちづくり事業評価委員会 委員	
2017年11月～2021年10月		仙台市社会教育委員 委員	
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
1) カウンセリングセンター兼任相談員 2) 社会福祉研究所主事			

2020年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	准教授	氏名	佐藤 滋	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
LMSを活用した授業到達度の確認、成績評価の透明化		2020年4月～		授業の理解度を確保するため、原則として毎回、manabaを通じて小テストを実施している。また、授業内容や小テストに対する質問・疑義については、manabaの掲示板を通じて受け答えを行っている。さらに、LMSを、成績評価の透明性を高めるためにも利用している。			
他大学の学生との交流プログラムの実施		2011年4月～		他大学の複数のゼミと、合同ゼミ合宿、調査研究を実施している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
高端正幸・佐藤 滋(2020)『財政学の扉をひらく』有斐閣		2020年12月					
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①授業内容をなるべくわかり伝える、②学生の理解度を確保しながら授業を進める、③授業評価アンケートで授業内容をチェックし、授業内容にフィードバックする					
今年度の進捗状況		授業評価アンケートの満足度の結果から、①?③につき進捗が見られた。					
来年度の進捗目標		来年度も続けて、上記①?③を目標とし、進捗状況をチェックしたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野)							
序章 経済・社会の動揺と財政、第2章 税と信頼、第3章 社会保険と生活保障、第4章 財政赤字の理論と実際、第7章 格差・貧困の拡大と所得保障、第10章 グローバル化の進展と財政の変容、終章 社会統合と財政『財政学の扉をひらく』		共著	2020年12月	有斐閣		高端正幸, 佐藤 滋	pp.1-238
『日本の財政と社会政策の課題』		単著	2020年5月	公益社団法人 教育文化協会		佐藤 滋	pp.1-66
E. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
東南アジアの工業化とオイル・トライアングル－マレーシアとシンガポールを事例に－		単独	2020年10月	政治経済学・経済史学会(2020年度秋季学術大会)(オンライン)		佐藤 滋	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		①共著の執筆、②単著の執筆、③科研プロジェクトの完遂					
今年度の進捗状況		学会発表、各種研究会の開催等によって、①?③についてある程度進捗を見た。					
来年度の進捗目標		単著及び共著の執筆、科研プロジェクトの完遂					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 基盤研究(A)	2017年度～	共同(研究分担者)	<p>1. 1970年代の石油危機により、世界システム・世界経済はいかに変容し、21世紀現代世界の原型が形成されたのか。「広義の東アジア」、南アジア、アフリカの事例を双方向的に比較して考察する。</p> <p>2. 東南アジア諸国を含む「広義の東アジア地域」の工業化を中心とした経済的再興(東アジアの奇跡)はなぜ可能になり、南アジアの農業開発「緑の革命」は成果を挙げる一方で、アフリカの経済開発政策はなぜ失敗して、「南南問題」と呼ばれる新たな経済格差がグローバル・サウス内部で生まれたのか。1960年代末～70年代のアジア・アフリカ諸地域に対する、政府開発援助(ODA)、民間投資の動向と関連付けて分析する。</p> <p>3. 石油危機を通じて国際金融体制は、国際通貨基金(IMF)・世界銀行を中心としたブレトン・ウッズ体制から、「民営化された国際通貨システム」へといかに変容したのか、オイルマネーの行方とユーロダラー市場に着目して考察する。</p>
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2020年11月～2020年11月		日本の財政と社会政策の課題(Rengoアカデミー、第20回マスターコース) 講師	
2020年4月～		日本地方財政学会 理事	
2012年7月～		総務省「地方分権に関する基本問題についての調査研究会 委員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
入試委員 地域学部準備委員会			



2020年度								
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	准教授	氏名	谷 達彦	大学院の授業担当の有無	無	
<b>I 教育活動</b>								
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要				
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)								
「確認問題」の作成		2020年～		授業内容の理解度を確認するため、毎回の授業資料に確認問題を作成、掲載している。				
2. 作成した教科書、教材、参考書								
授業資料(スライド資料等)の作成		2020年～		授業毎にスライド資料や授業動画資料を作成し、スライドに沿って授業を進めている。				
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4. その他教育活動上特記すべき事項								
現在の課題・目標		①授業内容の理解を深めるため、視聴しやすく分かりやすい授業資料を作成する。②授業内容に対する関心を喚起し理解を深めるため、身近な事例を取り上げる。						
今年度の進捗状況		目標①については、「資料が丁寧でわかりやすい」という学生の評価を受けている。目標②については、新聞報道等で話題になる政策課題や事例の説明を取り入れている。						
来年度の進捗目標		課題・目標の達成に向けて引き続き授業内容や資料の改善に取り組みたい						
<b>II 研究活動</b>								
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)		発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書								
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)								
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)								
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文								
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)								
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)								
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)								
G. 学会における研究発表								
H. 翻訳(学術書や原典等)								
I. 特許								
現在の課題・目標		①アメリカにおける地方所得税の現状及び改革の動向について研究を進める。②アメリカの大都市における就学前教育の導入と財源調達について研究を進める。③「多様性に富んだ社会」の財政制度の研究を進める。						
今年度の進捗状況		①については、これまでの研究成果をまとめる作業を進めている。②については、アメリカの大都市における就学前教育の拡充についてフィラデルフィア市を事例として分析している。③については、地方自治体における外国人住民施策の現状と課題を分析している。						
来年度の進捗目標		①について、これまでの研究成果をまとめる。②について、研究成果を論文に執筆し、投稿する。③について、研究成果を学会で報告する予定である。						
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>								
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>								
2012年4月～				財務省財務総合政策研究所客員研究員 委員				
2006年10月～				日本地方財政学会 会員				
2006年4月～				日本財政学会 会員				

V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	准教授	氏名	宮地 克典	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
高校への出張講義		2020年9月10日～2020年9月10日		聖光学院高校において出張講義を行った。			
現在の課題・目標		授業改善アンケートにおける総合評価のスコアが大学平均以上となるように授業運営・展開に励む。					
今年度の進捗状況		2020年度においては前期・後期ともにひとまず以上の目標が達成できた。オンライン講義においても講義が一方的にならないよう、双方向性を意識してmanabaの個別指導コレクションなどを活用し、寄せられた質問や意見などについては、次の週の冒頭に全てフィードバックを行った。					
来年度の進捗目標		今年度と同様、総合評価が大学平均以上となるように授業運営に努める。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
日本における高齢期生活保障システムの再構築—高年齢雇用継続給付の史的経緯に着目して—		単独	2021年2月	不明(不明)		不明	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		科研の研究課題に取り組んでいる。					
今年度の進捗状況		科研の研究課題に関して、上記の研究発表を行うことが出来た。					
来年度の進捗目標		2020年度に引き続き、科研の研究課題に取り組む。研究発表の内容を加筆修正し、論文にまとめる。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
科学研究費補助金 科学研究費助成事業(若手研究)		2018年度～2021年度	個別		「日本における高齢期生活保障の形成・史的展開—雇用と社会保障の接統一」 課題番号:18K13016		
IV 学会等及び社会における主な活動							
2020年5月～				社会政策学会査読専門委員 会員			
2017年5月～2020年5月				社会政策学会編集委員 会員			
2009年4月～				社会政策学会 会員			

V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	講師	氏名	佐久間 香子	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
視聴覚資料、および学生とのコミュニケーション方法を重視した授業づくり		2020年4月1日～		(1)PowerPointをベースに、概念図、写真資料、短い視聴覚資料を併用することを視覚的にわかりやすく授業内容を伝える。 (2)毎授業後、受講生にリアクションペーパーの提出を貸すことで授業内容理解度を把握すると同時に、出席状況の確認、そして学生とのコミュニケーションに活用する。 以上を着実に実践することで、学生の授業評価アンケートにおいても高く評価された。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
森の錬金術 一ツバメの巣の生産から消費まで		単著	2020年	『立命館言語文化研究』32巻1号 2019年度国際言語文化研究所連続講座「食と政治—胃袋から支配する」、『立命館言語文化研究』32巻1号 2019年度国際言語文化研究所連続講座「食と政治—胃袋から支配する」		不明	pp.pp.95-102
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
科学研究費補助金 日本学術振興会: 科学研究費補助金(基盤研究(B))		2018年度～2022年度	共同(研究分担者)		研究課題: ボルネオの原生林保護と先住民コミュニティの自律的生存が両立する持続的管理の条件		

科学研究費補助金 日本学術振興会: 科学研究費補助金(若手研究)	2018年度～2020年度	個別	研究課題:「食」とおした共在の様式に関する基礎的研究—東南アジア産の中華食材に注目して
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

# 教員業務・活動報告

經 営 学 部

經 営 学 科

2020年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	岡田 耕一郎	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にする。 ②「読解・作文の技法」と「研究・発表の技法」の実践的な基礎教育を学生がより確実に習得できるように指導する。					
今年度の進捗状況		①週に1度、オフィスアワーを設けて対応している。 ②ゼミの時間等を活用して1・2年次の技法の内容を復習し、実践的な基礎教育を教えている。					
来年度の進捗目標		①週に1度、オフィスアワーを設けて対応する。 ②ゼミの時間等を活用して1・2年次の技法の内容を復習し、実践的な基礎教育を教える。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		①安定した介護サービスシステムを構築している機関とサービスシステムの共同研究を進める。 ②介護サービスシステムを包括的に研究して介護現場の課題を抽出し、改善活動を進める。					
今年度の進捗状況		①新入職員向けOJT教育の方法に関わる基礎的研究を進めている。 ②介護現場におけるサービスシステムの構築に関わる基礎的研究を進めている。					
来年度の進捗目標		①新入職員向けOJT業務と教育方法に関わる研究成果をまとめる。 ②介護現場における介護サービス教育システムの構築に関わる研究を行う。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>							





2020年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	折橋 伸哉	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
ビジネス・ケース実習		2020年		他の教員と共同で、自らの実態調査の成果をケースにまとめて教材とし、理論ばかりではなく経営の実態の学習を図った。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		学生により実践的な教育を行い、大学での学問が社会でも活用できるようにすることを目指す					
今年度の進捗状況		概ね達成					
来年度の進捗目標		より一層の充実を図る					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
自動車産業のパラダイムシフトと新興国・後発開発途上国一タイ、ミャンマーを中心にアセアンでの取り組みを通じて考察するー『自動車産業のパラダイムシフトと新興国・後発開発途上国一タイ、ミャンマーを中心にアセアンでの取り組みを通じて考察するー』	単著	2021年1月	創成社、折橋伸哉編著『自動車産業のパラダイムシフトと地域』第6章, 創成社、折橋伸哉編著『自動車産業のパラダイムシフトと地域』第6章, 創成社、折橋伸哉編著『自動車産業のパラダイムシフトと地域』第6章	折橋伸哉	pp.41		
『自動車産業のパラダイムシフトと東北』	単著	2021年1月	創成社、折橋伸哉編著『自動車産業のパラダイムシフトと地域』第1章	折橋伸哉	pp.1-30		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
次世代自動車産業に向けた変化と東北地方	単著	2020年7月	東北学院大学経営研究所、東北学院大学経営・会計研究、第25号	不明	pp.1-9		
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
『東北における自動車産業と今後の展望』	単著	2021年3月	一般財団法人 日本立地センター、産業立地、2021年3月号	不明	pp.18-23		
『過疎地域におけるモビリティの確保』	単著	2021年3月	東北活性化研究センター、『2020年度 東北圏社会経済白書』	不明	pp.2		
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
自動車産業のパラダイムシフトと地域	単独	2021年2月	自動車問題研究会2021年2月例会(不明)	不明			
日本メーカーの牙城の一つタイの自動車産業と電動化～過去・現在・未来～	単独	2020年10月	自動車問題研究会2020年10月例会(不明)	不明			
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							

<b>I. 特許</b>			
現在の課題・目標	飛躍的に増すばかりの学務負担の中で、一定の研究成果を上げる。		
今年度の進捗状況	編著書を上梓できたなど、一定の成果をあげることができた。		
来年度の進捗目標	より研究活動に割く時間を確保し、研究成果を出していきたい。		
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2002年～		産業学会 会員	
1997年～		国際ビジネス研究学会 会員	
1997年～		組織学会 会員	
1997年～		日本経営学会 会員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
東北学院大学経営研究所次長			

2020年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	北村 智紀	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
学生論文等コンテストへの参加		2020年～		学生が積極的・創造的に学習ができるよう、証券ゼミナール大会(演習3年)、日経ストックリーグ(演習3年)へ参加			
コンピュータを利用した実習等の実施		2020年～		講義実施にあたり、コンピュータを利用した実習と取り入れ、体験的な教育を実施。ケース・スタディーを利用し、コミュニケーションをとりながら自己の考えを主張できる教育を実施			
ケーススタディー・グループワークの実施		2020年～		講義実施にあたり、理論、実証研究、ケース・スタディーを利用した実践的な教育を複合的に実施。複雑な企業財務の問題に対処できる人材育成を目指す。			
アクティブ・ラーニングの実施		2020年～		講義実施にあたり、グループワーク・プレゼンテーションを利用したアクティブ・ラーニングを実施。多様な価値観のある学生の中、現実的な問題を解決する講義を実施。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
ZOOMによるオンタイム講義の実施。オンタイム講義におけるケーススタディーの実施。		2020年～					
現在の課題・目標		アクティブ・ラーニングの積極的な実施					
今年度の進捗状況		MANABA等を通じて、アクティブ・ラーニングの実施					
来年度の進捗目標		ケーススタディー等の拡充を行う					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
退職給付制度が高齢者雇用制度に与える影響	単著	2020年12月	証券経済研究, 112, 証券経済研究, 112	足立泰美, 北村智紀	pp.75 - 96		
Effect of Caregiving on Employment for Senior Workers in Japan	単著	2020年6月	Ageing International, Ageing International	Tomoki Kitamura, Yoshimi Adachi, Toshiyuki Uemura	pp.不明		
Effect of Debt Tax Benefits on Corporate Pension Funding and Risk-taking	単著	2020年5月	Journal of Economic Studies 47(6), Journal of Economic Studies 47(6)	Kozo Omori, Tomoki Kitamura	pp.1327 - 1337		
An Investigation of Policy Incentives for Delaying Public Pension Benefit Claims	単著	2020年4月	Review of Behavioral Finance, Review of Behavioral Finance	©Tomoki Kitamura, and Kunio Nakashima	pp.不明		
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
個人投資家の仕組債保有要因に関する分析	単著	2020年12月	信託研究奨励金論集, 41, 信託研究奨励金論集, 41	中里宗敬, 伏屋広隆, 北村智紀	pp.126 - 139		
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							

Impact of New Regulatory Policy in Japanese Mutual Fund Markets	共同	2021年3月	Western Economic Association International 2021 Virtual International Conference(不明)	Tomoki Kitamura, Kozo Omori	
Impact of New Regulatory Policy in Japanese Mutual Fund Markets	単独	2020年12月	日本ファイナンス学会第2回秋季研究大会(不明)	Tomoki Kitamura, Kozo Omori	
Impact of New Regulatory Policy in Japanese Mutual Fund Markets	共同	2020年11月	Southern Economic Association 90th Annal Meeting(不明)	Tomoki Kitamura, Kozo Omori	
Managers' Skills and Mutual Fund-Flows in the Japanese Mutual Fund Market	不明	2020年10月	日本経済学会2020年度秋季大会(不明)	Kozo Omori, Tomoki Kitamura	
中小企業における退職給付制度の決定要因	共同	2020年10月	日本財政学会 第77回全国大会(不明)	北村智紀, 中嶋邦夫	
Impact of New Regulatory Policy in Japanese Mutual Fund Markets	共同	2020年9月	第92回証券経済学会全国大会(不明)	Tomoki Kitamura, Kozo Omori	
Manager's Skills and Mutual Fund-Flows in Japanese Mutual Fund Markets	不明	2020年6月	日本ファイナンス学会第28回(不明)	Kozo Omori, Tomoki Kitamura	
Structured Product Investment Behavior in Low Interest Rate Environments	不明	2020年6月	日本ファイナンス学会第28回大会(不明)	Hiroataka Fushita, Tomoki Kitamura, Munenori Nakasato	
中堅企業における雇用方針及び退職給付制度への認識と導入	共同	2020年5月	日本経済学会2020年度春季大会(不明)	北村智紀, 中嶋邦夫	
退職給付制度と雇用制度における企業の選択行動	共同	2020年5月	日本経済学会2020年度春季大会(不明)	足立泰美, 北村智紀	
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	研究計画に沿った研究の着実な実施				
今年度の進捗状況	研究成果をまとめ学会にて研究報告の実施、研究成果を国内外の学術雑誌に投稿				
来年度の進捗目標	国際学術誌での研究成果公表を目指す				
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
科学研究費補助金 文部科学省 科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2019年度～2024年度	共同(研究分担者)	投資家の株価に対する期待形成のあり方が引き起こすミスプライスと市場への影響		
科学研究費補助金 文部科学省: 科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2018年度～2023年度	共同(研究分担者)	本邦における投信資金フローに見られる投資家行動の研究		
科学研究費補助金 文部科学省: 科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2018年度～2023年度	個別(研究代表者)	長寿リスクを軽減する公的年金の受給開始年齢の延期と金融資産蓄積促進に関する研究		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>					
2018年～2022年	「年金制度の未来をよりよくするための研究」(東北学院大学とニッセイ基礎研究所との共同研究) 委員				
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>					
入試委員					

2020年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	小池 和彰	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
『財政支出削減の理論と財源確保の手段に関する諸問題』	単著	2020年5月	税務経理協会	不明	pp.1-211		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等				
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>							

2020年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	齋藤 善之	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
総合講座Ⅳ(おもてなしの経営学)では「みやぎおかみ会」との連携のもと宮城県内の旅館ホテルの女将および観光行政・業界から実務担当者を招聘する講義を実施している。(経営学部の複数の教員と共同で授業運営)		2009年～		2017年度の外部講師は、鈴木緑女将(はまなす海洋館・気仙沼市)、佐藤恵里女将(ホテル華乃湯・秋保温泉)、大沼安希子女将(旅館大沼・東鳴子温泉)、梶村和秀氏(宮城県経済商工観光部観光課長)、古津敬浩氏(JR東日本㈱営業部長)を招聘し講義を実施した。			
演習(3年)では、地域の経営者らから聞き取り調査を実施している。その成果は報告書にまとめて刊行し、さらに市民向け報告会を実施している。		2000年～		学生が主体的に経営者らにマンツーマンで聞き取りを行い、これを活字化して報告書にまとめ、市民向け報告会で報告するアクティブラーニング型のゼミ活動である。			
演習では地域の経営者に直接聞き取りをおこない、その結果を報告書にまとめて刊行している。		1999年～		地域の経営者に対し受講生がマンツーマン形式でライブヒストリーを聞き取り報告書にまとめる			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
『齋藤善之ゼミ調査研究報告書・仙台長町の商いと暮らしの記憶』の刊行		2021年3月					
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
近世の海路・水路『郷土史大系・情報文化』	分担執筆	2020年8月	朝倉書店	齋藤善之ほか	pp.27-44		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
宮城資料ネットが経験したこと・その成果と課題ー宮城と愛知をつなぐ・経験知の共有に向けてー	単著	2021年3月	東海国立大学機構大学文書資料室, 東海国立大学機構大学文書資料室紀要	齋藤善之	pp.91-119		
海商銭屋五兵衛の旅	単著	2021年1月	吉川弘文館, 日本歴史(872)	齋藤善之	pp.75-82		
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
新釈・塩釜村風土記(塩竈町方留書)『新釈・塩釜村風土記(塩竈町方留書)』	監修	2021年3月	NPOみなとしほがま	齋藤善之監修	pp.1-309		
相馬市史5 資料編Ⅱ 近世1『相馬市史5 資料編Ⅱ 近世1』	編纂	2021年3月	相馬市役所	齋藤善之ほか	pp.1-999		
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
研究報告(Zoom)「被災歴史資料の救出保全活動と地域社会の復興再生」	単独	2020年12月	日本建築学会東北支部主催(オンライン)	齋藤善之			
研究報告(Zoom)「奥筋廻船について」	単独	2020年12月	海事史学会例会(オンライン)	齋藤善之			

H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2020年～		塩竈市文化財審議会委員 委員	
2018年～		宮城歴史資料保全ネットワーク 理事長	
2008年～		NPO宮城歴史資料保全ネットワーク 会員	
2006年～		東北史学会(理事) 会員	
2001年～		海事史学会(理事) 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			



2020年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	佐久間 義浩	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
教員独自の「学生による授業評価」を実施		2020年～		大学で実施する「学生による授業評価」に加えて、授業の効果の測定や改善点を明らかにするため、記名式の授業内容に関するアンケートを、すべての科目で実施している。			
監査論におけるディスカッションの実施		2020年～		近年、発覚した粉飾について、粉飾決算企業の公表した内部調査報告書を題材として、粉飾の概要、粉飾を引き起こす要因、公認会計士のあり方、あるべきガバナンス制度の構築について、参加者全員でディスカッションを行い、監査のあり方や社会情勢に関心をもたせた。			
演習等における新聞記事の報告		2020年～		各受講生が興味を持った日経新聞等の内容について、毎時間、報告をさせるとともに、その記事に関するディスカッションに参加者全員で行うことにより、社会情勢に関心をもたせた。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
『エッセンス簿記会計 第16版』森山書店		2020年4月7日		「第11章 営業費の記録と管理」(178-189頁)担当。			
授業におけるレジュメの作成		2020年		監査論Ⅰ・監査論Ⅱ、商業簿記Ⅱ(A)・商業簿記Ⅱ(B)において授業のレジュメを作成し配布した。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・演習参加者の進路・就職相談等を積極的に行う。</li> <li>・演習にて課題図書の特読を行う。</li> <li>・授業のレジュメを改定する。</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>・演習参加者の希望に応じて、随時、進路指導等を行った。</li> <li>・監査制度の改定にあわせて、レジュメを改定した。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・演習参加者の進路・就職相談等を積極的に行う。</li> <li>・演習にて課題図書の特読を行う。</li> <li>・授業のレジュメを改定する。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
Recognition versus Disclosure and Audit Fees and Costs: Evidence from Pension Accounting in Japan	共著	2020年12月	Journal of International Accounting Research, Vol. 19, No. 3	Kusano, M. and Y. Sakuma	pp.133-160		
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
監査上の主要な検討事項(KAM)の早期適用の影響とKAM開示企業の特徴—日本におけるKAM導入初年度における証拠—	単著	2021年3月	『現代監査』第31号(31)	佐久間義浩	pp.3-13		
監査上の主要な検討事項(KAM)に関連する文献レビューと日本におけるKAMの早期適用の状況	単著	2021年1月	『経済論叢(京都大学)』第194巻第4号	佐久間義浩	pp.1-19		
コーポレート・ガバナンス改革と監査報酬：監査等委員会設置会社に焦点をあてて	単著	2020年9月	『会計』第198巻第3号	佐久間義浩	pp.291-304		
日本企業の監査報酬の動向(2020年度版)	共著	2020年6月	『月刊監査役』第710号	町田祥弘・松本祥尚・林隆敏・佐久間義浩・高田知実・堀古秀徳	pp.18-37		
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							

Recognition versus Disclosure and Audit Fees and Costs: Evidence from Pension Accounting in Japan	共著	2020年8月	American Accounting Association 2020 Annual Meeting プロシーディングス	Kusano, M. and Y. Sakuma	pp.不明
An Empirical Evidence of Audit Firm Merger in Japan	単著	2020年8月	American Accounting Association 2020 Annual Meeting プロシーディングス	Sakuma, Y.	pp.不明
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>					
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>					
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>					
<b>G. 学会における研究発表</b>					
諸外国におけるKAM適用後レビューー日本におけるKAM導入初年度における証拠一	単独	2020年9月	第43回日本監査研究学会@関西大学(不明)	佐久間義浩	
An Empirical Evidence of Audit Firm Merger in Japan	単独	2020年8月	American Accounting Association 2020 Annual Meeting @ Online(不明)	Sakuma, Y.	
Recognition versus Disclosure and Audit Fees and Costs: Evidence from Pension Accounting in Japan	共同	2020年8月	American Accounting Association 2020 Annual Meeting @ Online(不明)	Kusano, M. and Y. Sakuma	
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・監査人の情報提供機能を研究する。</li> <li>・監査報告書を収集する。</li> <li>・戦前戦後の財務諸表監査制度の変遷を研究する。</li> </ul>				
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学会と研究会で報告した。</li> <li>・1950年代の監査報告書を一部収集した。</li> <li>・戦前戦後の財務諸表監査制度に関する文献を収集した。</li> </ul>				
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・論文にまとめる。</li> <li>・継続して監査報告書を収集する。</li> <li>・継続して財務諸表監査制度に関する文献を収集する。</li> </ul>				
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要		
科学研究費補助金 科学研究費補助金(基盤研究C)	2018年度～2020年度	個別(研究代表者)	コーポレート・ガバナンスの変容による財務諸表監査への影響に関する研究		
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>					
2019年12月～	公認会計士試験 試験委員 2019年12月～ 金融庁 公認会計士・監査審査会 公認会計士試験 試験委員				
2016年12月～	総務省東北総合通信局 受信者支援団体の公募及び事業実績に係る評価会 構成員 2016年12月～(総務省東北総合通信局 受信者支援団体の公募及び事業実績に係る評価会 構成員 2016年12月～)				
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>					

2020年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	佐々木 郁子	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
「Google 課題解決プロジェクト」(マイナビ)への参加		2020年～		演習(4年生)で、マイナビが主催する「Google課題解決プロジェクト」に1チーム3名ずつに分かれ、課題テーマに関する提言・提案を考え、発表し、企画書を提出した。ゼミ内で報告会を行いディスカッションした後、内容をブラッシュアップした上で、企画書を提出した。これによって、課題について深く考え、調査し、提案するという、自発的な学びと、それを表現するという能力を養う事が出来た。			
商業簿記、原価計算に関連する、資格取得希望者のために、試験前に模擬試験を実施		2020年～2020年		補講時間を利用して、日商簿記2級、3級の模擬試験を行った。本番より時間はかなり短いですが、答案作成の練習に役立った。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業満足度の高い授業を目指す。</li> <li>・学生たちが自発的に学習に取り組むような授業設計を目指す。</li> <li>・manabaを実施可能な授業から部分的に用いる。</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>・manabaを商業簿記 I Bに本格的に導入した。</li> <li>・ゼミ活動がコロナによって大幅な変更を余儀なくされたが、コンペを行うことにより、ゼミへの積極的な取り組みを試みた。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業満足度の高い授業を目指す。</li> <li>・manabaの本格的導入。</li> <li>・4年次前期ゼミ運営の工夫。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
管理会計は新型コロナウイルスからの復旧・復興を支援できるのか	単著	2020年6月	『企業会計』7月号(中央経済社)	三矢裕・佐々木郁子・吉田政之	pp.73-79		
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
『会計人の視点31「コロナ禍は管理会計研究を変えるのか」』	単著	2020年12月	『企業会計』1月号(中央経済社),『企業会計』1月号(中央経済社)	不明	pp.46-47		
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
解題深書 イレギュラーなことがおきたときに会計は何ができるか	単著	2020年6月	『企業会計』7月号(中央経済社)	不明	pp.61-64		
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							

現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ，震災関連の研究をより一層進める。</li> <li>・顧客関係性と財務構造に関連する研究を進める。</li> <li>・ホスピタリティ産業に関連するロイヤリティプログラムの研究を進める。</li> <li>・海外学会で発表する。</li> <li>・海外ジャーナルへ投稿する。</li> </ul>		
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・震災関連の研究については他の自然災害の影響を含めて調査中である(継続)。</li> <li>・震災研究の知見を利用してコロナ禍における論稿，エッセイを執筆した。</li> <li>・海外の研究者との共同プロジェクトを実施中である(継続)。</li> <li>・コロナの影響と学内業務の増加により，多くの研究調査ができなかった。</li> </ul>		
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・震災関連の研究をより一層進める。</li> <li>・顧客関係性と財務構造に関連する研究を進める。</li> <li>・共同の科研費が2件最終年度を迎えるので，成果を出したい。</li> </ul>		
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2021年2月	令和2年度稲盛アカデミー「特別セミナー」【コロナ禍における企業(組織)の危機管理とフィロソフィー】第1部特別講義，第2部ディスカッション 委員		
2020年10月～2026年9月	日本学術会議連携会員 委員		
2020年9月	日本会計研究学会第79回大会国際セッション司会 会員		
2020年7月	神戸大学大学院経営学研究科特別研究員 委員		
2019年6月～	日本経営会計専門家研究学会		
2019年～	日本経営会計専門家研究学会		
2014年～	公益財団法人仙台市産業振興事業団非常勤理事 委員		
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
1.国際交流部長 2.硬式野球部部長			

2020年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	菅山 真次	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
経営史Ⅰ・経営史Ⅱレジュメ(新版)		2020年4月1日～2021年3月30日		経営史Ⅰおよび経営史Ⅱの授業で使用する資料を出版した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		最新の研究成果や最新のデータ・情報を授業に取り入れる。					
今年度の進捗状況		経営史Ⅰ・経営史Ⅱ・日本企業論のいずれにおいてもできるだけ最新の研究成果や最新の情報・データを取り入れることに努めた。					
来年度の進捗目標		最新の研究成果や最新のデータ・情報を授業に取り入れる。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
Book review: 小熊英二著『日本社会のしくみ——雇用・教育・福祉の歴史社会学』		単著	2020年5月	民主教育協会、『IDE—現代の高等教育』2020年5月号, 民主教育協会、『IDE—現代の高等教育』2020年5月号		不明	pp.68—69頁
G. 学会における研究発表							
日本毛織におけるホワイトカラー人材の形成		単独	2020年12月	経営史学会第65回全国大会(不明)		不明	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		①研究成果を英語で発表する ②1970年前後の新規学卒労働市場の歴史的変化について考察する ③1920年代—60年代の大企業ホワイトカラーの人材・労働市場について考察する					
今年度の進捗状況		①について2018年度に富士コンファレンスで報告したペーパーの出版計画が進行中である。 ②について資料を収集しているが、まだ成果が上がっていない。 ③について日本毛織のケースの実証研究の成果を経営史学会第65回全国大会にて報告した。					
来年度の進捗目標		引き続き、①—③の課題を追及する。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
2021年3月～			経営史学会				

V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	鈴木 好和	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
①振り返りのテストによる知識の習得。②社史の研究による実務の修得。		2020年		①小テストができるまで何度でも返却して直してもらっている。 ②社長の自伝のレポートを課している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
ライオンズクラブの下位組織としての「翼レオクラブ」の部長としての指導を行った。		2020年4月1日～		ライオンズクラブと共同で社会貢献活動を行う。今年は、海岸の清掃や仙台駅のアルコール消毒などを行った。			
ライオンズクラブの下位組織としての「翼レオクラブ」の立ち上げと指導を行った。		2019年6月17日～2020年4月1日		ライオンズクラブと共同で社会貢献活動を行う。今年は、福島への支援と丸森の支援を中心として活動した。			
ライオンズクラブの下位組織としての「翼レオクラブ」の立ち上げと指導を行った。		2019年6月17日～2020年4月1日		ライオンズクラブと共同で社会貢献活動を行う。今年、同クラブは、福島への支援と丸森の支援を中心として活動した。			
現在の課題・目標		受講者が基本的な知識を習得するだけでなく、積極的に学習してもらう。					
今年度の進捗状況		小テストの結果、まとめの試験ではみな良い点を取れているので、基本的知識が習得されている。					
来年度の進捗目標		来年度もこれを継続していきたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		『人的資源管理論』第6版の出版。					
今年度の進捗状況		原稿はほぼ完成した。					
来年度の進捗目標		できるだけ早く出版したい。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							

来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	



2020年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	高橋 志朗	大学院の授業 担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・ 共著 の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2020年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	根市 一志	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<p>①講義概要に記載した到達目標を達成できることを目標に掲げている。そのためには、なぜ当該科目の履修が必要なのか、講義内容がいかに重要なのか、自分で考える力を身につけることがいかに重要なのかを理解させることに重点を置いている。</p> <p>②新しい内容を取り入れる。</p> <p>③講義内容を理解するための具体的な例を考える。</p> <p>④テキストや講義スライドを改善する。</p>					
今年度の進捗状況		<p>上記目標①に関しては、その達成度を自己評価すると、指示した内容の範囲内の考察が多く、そこから発展性がみられないということがあげられる。例えば、提出させたレポートをみると、調べた内容をまとめることはできているが、そこから発展的に考えることができていないものが多い。ソフトウェアの機械的な操作はできるが、内容の意味、結果の評価、考察にあいまいなところのみられる。論理や数式の内容を具体的に説明しているが、レポート、プレゼンテーション等をみると、説明に矛盾がみられることが多い。また、どこまで理解したかを見るため、講義内容のまとめを提出させているが、スライドに書いてあることを丸写した内容が多く、自分で考えていない内容が多い。</p> <p>上記目標②に関しては、現在の社会的な出来事など、新しい内容を考慮した説明はできていると思う。</p> <p>上記目標③に関しては、抽象的な講義内容の理解を深めることを意識した具体的な例題の作成はできていると思う。</p> <p>上記目標④に関しては、どのような内容にすれば、より理解が深まるか常に意識して作成しているが、新たな課題も発生するので、その都度改善が必要になっている。</p>					
来年度の進捗目標		<p>上記目標①に関しては、具体的な考え方や可能性を掘り下げて説明するようにこころがける。</p> <p>上記目標②に関しては、継続していく。</p> <p>上記目標③に関しては、継続していく。</p> <p>上記目標④に関しては、必要に応じて改善を考える。</p>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
液体アルゴンTPC内部電場評価と宇宙線トラッキング性能向上に関する研究	共同	2020年8月	2020年度電気関係学会東北支部連合大会(不明)	◎根岸健太郎, 成田晋也, 坂下健, 長谷川琢哉, 根市一志			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		<p>①非線形関数をデータにフィットするための汎用的なソフトウェア開発。</p> <p>②液体アルゴンTime Projection Chamberを用いた素粒子物理のモンテカルロシミュレーション</p>					

今年度の進捗状況	上記目標①に関しては、新しいプログラミング言語を使用して継続して開発を行っているので、進捗があったといえる。 上記目標②に関しては、現在、コードを作成中である。		
来年度の進捗目標	上記目標①に関しては、継続していく。 上記目標②に関しては、継続していく。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
土樋キャンパス情報処理センター主任 土樋キャンパス情報処理センター所員 学生による授業評価実施委員会委員 経営学部AO面接委員 体育会剣道部部长			

2020年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	松岡 孝介	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
事例を用いた理論と実践の関連付け		2020年9月1日～		おもてなしの経営学とイノベーション論では、必要に応じて、現在学んでいる会計技法を用いて実企業を分析するとどのような結果が得られるのかを示すために、事例を用いるようにしている。			
プレゼンテーション能力とディスカッション能力の育成		2020年4月1日～		少人数授業では、担当の学生によるプレゼンテーションを行う時間を設けている。また、プレゼンテーションの内容について学生同士で質疑応答をするようにして、ディスカッション能力の育成も図っている。			
manabaを利用した授業資料の共有		2020年4月1日～		すべての授業で、授業資料をすべてmanabaにアップロードして、受講者が閲覧できるようにしている。			
理論と実践を関連づけた研究・発表能力の育成		2020年4月1日～		研究・発表の技法では、経営学に関わる本を輪読した後に、その本の内容に基づいて学生たちに事例研究を行ってもらい、その内容を報告してもらっている。これにより、理論として学んだことを実践できるように促している。			
課題に対する講評の配布		2020年4月1日～		オンライン授業となったため、毎週の小テストに対する講評を配布するようにした。これにより、学生の取り組んだ課題に対する理解が深まるようにした。			
身近な日常の事例を持ちいた説明		2020年4月1日～		クリティカルシンキングでは、思考の原則を理解しやすいように、極力学生にとって身近な日常的な事例を用いて説明した。			
計算方法の習得促進		2020年4月1日～		コストマネジメント論では、最初は例題を一緒に解き、続いて学生の力だけで練習問題を解いてもらうようにし、計算方法が習得しやすいようにしている。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
イノベーション論の講義資料		2020年9月1日～2021年1月31日		イノベーション論で利用している教科書を要約した資料を作成し、毎回配布した。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
東松島市の観光競争力調査		2020年12月11日～2020年12月11日		学生による東松島市の観光競争力調査の結果を、石巻圏観光推進機構に対して報告した。コロナ対策のため、学生ではなく教員が現地に赴いての代理報告となったが、報告資料は学生が作成した。			
<b>現在の課題・目標</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>(1) コストマネジメント論は、オンライン授業の場合には小テストの難易度調整が必要かもしれない。</li> <li>(2) クリティカル・シンキングは、経営学部の学生にとって興味を持てる事例を扱うことが課題である。</li> <li>(3) イノベーション論は、事例の差し替えが必要かもしれない。</li> <li>(4) 少人数制の授業では、新しいトピックや実企業の様々な課題を探すことが課題である。</li> </ul>					
<b>今年度の進捗状況</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>(1) オンライン授業のため、例年よりも受講者は小テストの難易度が高いと感じた様子があった。</li> <li>(2) クリティカル・シンキングは、オンライン授業の準備のため経営学的事例を盛り込むことができなかった。</li> <li>(3) イノベーション論は今年度は初めて開講した科目のため、最新の事例を盛り込むことができた。</li> <li>(4) 少人数制の授業では、WOWOWやAmazonの事例を学ぶことができた。</li> </ul>					
<b>来年度の進捗目標</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>(1) コストマネジメント論は2020年度の小テストの結果をもとに、一部の小テストの見直しを行う。</li> <li>(2) クリティカルシンキングは、新人の教員採用までのつなぎとして担当しており、業務負担を考えると経営学的事例を盛り込むほどの労力をかけることはあまり生産的ではないと考えられる。ひとまず、今年度と同じ事例を用いることとする。</li> <li>(3) イノベーション論は、授業評価も高かったため、基本的に同じ内容を継続する。</li> <li>(4) 少人数制の授業は、引き続き新しいトピックや事例を盛り込めるように情報収集をする。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							

<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>					
Exploring the Interface between Management Accounting and Marketing: A Literature Review of Customer Accounting	単著	2020年4月	Springer, Journal of Management Control, 31(3)	Kohsuke Matsuoka	pp.157-208
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>					
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>					
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>					
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>					
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>					
学会ルポ:アジア太平洋管理会計学会2019年度年次大会	単著	2020年5月	企業会計, 72(5)	松岡 孝介	pp.139
<b>G. 学会における研究発表</b>					
これからの戦略MG	共同	2020年12月	日本戦略MG教育学会 第10回全国大会(オンライン)	◎川野克典, ◎松岡孝介, ◎白城真也, ◎徳永哲也	
マーケティング変数と財務業績の関係	共同	2020年8月	日本管理会計学会 2020年度年次全国大会(愛知県名古屋)	◎松岡孝介, 石井宏宗, 川口あすみ	
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	<p>(1)「研究時間の確保」が最大の課題である。研究時間の確保を常に念頭に置く必要がある。</p> <p>(2) 収益管理会計の研究の一環として、アクターネットワーク理論による論文執筆を進めている。</p> <p>(3) 収益管理会計の研究の一環として、セールス・マネジメント・コントロール・システムのデータ収集を進めている。</p> <p>(4) レベニュー・マネジメントと知覚価値、顧客満足、および顧客ロイヤルティの関係の論文執筆を検討している。</p> <p>(5) マルコフ連鎖による顧客遷移モデルの構築を進めている。</p>				
今年度の進捗状況	<p>(1) 研究時間は、オンライン授業であったため、前倒して集中的に授業準備を進めることで、研究に集中するための時間を確保できた。</p> <p>(2) アクターネットワーク理論の研究は、Glasgow UniversityのProf. Wickramasingheと連絡を取り合いながら論文を書き進めることができていた。</p> <p>(3) セールス・マネジメント・コントロール・システムの研究は、予備的データ収集と学会報告を済ませることができた。</p> <p>(4) レベニュー・マネジメントは、今年度はほとんど何も進捗がなかった。ただ、ある海外雑誌の特集号でレベニュー・マネジメントの原稿募集がかかっていることを見つけ、論文執筆を検討中である。</p> <p>(5) 顧客遷移モデルの論文はJournal of Business Research誌の査読が完了し、アソシエイト・エディターによる掲載への推薦を受けることができた。2021年5月に出版される見込みである。</p>				
来年度の進捗目標	<p>(1) コロナで状況は読めないが、どのような状況においても柔軟に対応し研究時間を確保できるように努力を重ねる。</p> <p>(2) アクターネットワーク理論の研究は、2021年度中に海外雑誌へ投稿する。査読には時間がかかることが見込まれるため、出版までは難しいかもしれない。</p> <p>(3) セールス・マネジメント・コントロール・システムの研究は、データ収集、解析および文献レビューを進める。2022年度中には投稿できるように準備をする。</p> <p>(4) レベニュー・マネジメントは時間が許すならば特集号に投稿する。データ収集は完了しており、解析もある程度済んでいる。後は文献レビューと論文執筆であるが、他の業務との兼ね合いもあるため、締め切りを踏まえると難しいかもしれない。</p> <p>(5) 観光、顧客エクイティ、ブランド・エクイティの調査を新たに企画する。調査の実施まで行いたい。</p>				
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	

科学研究費補助金 基盤研究(C)	2020年度～2024年度	個別(研究代表者)	本研究では、事例研究を通して「収益管理会計」の構築を行う。収益管理会計は、顧客データを用いて収益分析を行い、マーケティング意思決定に役立てる。本研究は、収益管理会計を支える手法や概念を発展させ、原価計算に立脚する伝統的管理会計を補完することを目指す。具体的には、①収益形成過程の促進要因の分析、②収益バランスが安定成長に与える影響の検証、および③顧客生涯価値に基づく資源配分方法の構築を行う。
その他の補助金・助成金 学校法人東北学院 個別研究助成金	2019年度	個別(研究代表者)	「顧客獲得戦略のマネジメント・コントロール」収益管理会計は、顧客データを用いてマーケティング戦略に関わるマネジメント・コントロールを行う技法である。この技法を構築するための足がかりとして、研究協力企業A社のデータに基づいて、顧客獲得戦略(例:製品認知、興味喚起、情報提供、販売)に関わるKPIが、営業マンの行動に及ぼす影響を検証する。
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2018年度～2020年度	共同(研究分担者)	論文 村山貴俊「観光地ステークホルダー論への一考察—先行研究の検討を中心に—」『東北学院大学 経営学論集』第14号(2019年12月)を公刊した。本論文での分析は、本科研費が最終目標とする欧米雑誌への投稿論文の中で一部活用される予定であり、最終目標に到達するための研究計画の一環をなす。 東北学院大学経営学部おもてなし研究チーム(編)『おもてなしの経営学【復興編】—宮城のおかみが語るサービス経営への思い—』創成社(2020年1月)を公刊した。本著作は、宮城の旅館のおかみの講演録を編集したものであるが、観光地が数多くの活動主体のネットワークによって成り立つことを窺い知ることができ、まさに観光地ステークホルダー論の事例集ともいえる。 2020年2月13日には、南オーストラリア大学の研究者Graham Brown氏とRob Hallak氏を招聘し国際シンポジウムTourism Development in the Tohoku (North-eastern) Region, Japan: Insights from Foreign Researchers (於、東北学院大学)を開催した。そこでは、Murayama, Takatoshi et al. “Measuring the Competitiveness of a Japanese Local Tourism Destination: A Case of Miyagi Zao Mountains Area”を発表した。また学術コンメンターとして本科研費の研究協力者でもある大阪大学准教授・勝又壮太郎氏を招聘した。シンポジウム終了後には、Graham Brown氏に協力仰ぎ宮城県と東京都にて日本の観光地の競争力を海外の観光学研究者の視点から分析するための共同調査を実施した。

#### IV 学会等及び社会における主な活動

2020年12月	Qualitative Research in Accounting & Management 査読
2019年2月～	APMAA (Asian Pacific Management Accounting Association) Japan Director
2019年1月～	日本戦略MG教育学会 理事
2019年1月～	日本戦略MG教育学会 理事
2019年～2021年	原価計算研究 査読
2018年12月～	日本戦略MG教育学会 会員
2018年9月～2021年8月	日本原価計算研究学会 学会誌編集委員
2017年4月～	APMAA (Asian Pacific Management Accounting Association) Steering Committee
2016年4月～	余暇ツーリズム学会 会員
2007年10月～	日本原価計算研究学会 会員
2005年9月～	日本会計研究学会 会員

2003年9月～		日本管理会計学会 会員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
経営学部新カリキュラム検討委員会 委員			

2020年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	松村 尚彦	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
演習(3年)でプロジェクト型学習の手法を導入した。		2020年4月10日～2021年1月31日		チームで課題を解決しながら、課題解決のために必要な知識やスキルを習得するプロジェクト型学習を実施した。この方法により学生のモチベーションが上がり、授業以外にも自主的な活動が活発になるなどの成果があった。			
遠隔授業ではあったが、manabaを用いて、大人数の授業における双方向授業の実現や課題提出、および課題の進捗状況把握などを行った。		2020年4月10日～2020年7月31日		ファイナンスⅠとⅡの授業では、復習用の課題(主に計算問題、一部記述式も含む)をmanabaのシステムに載せて毎回実施した。従来は困難であった大人数の授業でも、個々人の学習状況が把握可能となった。またビデオにストーリー性を持たせることと、10～15分程度の時間に区切りをつけるなど、学生の興味を引き出すとともに、分かりやすい授業運営の工夫を行った。こうした工夫により学生からの授業評価は、昨年までの対面授業よりも高い評価となった。			
キャリア形成論において、学外の社会人へインタビューするなど新しい取り組みを行った。		2020年4月10日～2020年7月31日		Zoomを使つての授業であったが、2～3人一組のグループを作り、事前準備として模擬インタビューの練習を行った上で、課題活動として社会人にインタビューをするという試みを行った。その他にも、Zoomのブレイクアウトルームを使つたグループワークを促進するために、効果的なアイスブレイクを導入したり、manabaを使つて学生の意見を吸い上げフィードバックするなど、遠隔授業ながらも双方向型の授業が実施できるよう工夫することで、学生から高い評価を得た。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		①ゼミ生がインゼミなどの全国大会でより良い結果が出せるよう指導方法を改善する。 ②ゼミにおいてプロジェクト型学習を推進できるようスキルアップする。 ③講義型の授業においても学生の興味・関心を引きつけられるよう授業デザインを再構築する。					
今年度の進捗状況		①コロナ感染症のためインゼミなどの大会が中止となり、大会への参加ができなかった。 ②ゼミにおいて株式の銘柄選択のための実践的なプロジェクト型学習を行うことができた。 ③グループワークにおいてアイスブレイクを導入したり、ストーリー性を重視した授業構成を工夫するたり、manabaを使つた双方向型の授業を展開することができた。					
来年度の進捗目標		①プロジェクト型学習においてしっかり期日管理ができるようプロジェクトマネジメントの指導ができるようになる。 ②毎回の授業で「テーマの提示→内容の学習→応用・適用」といった共通の流れを作れるように工夫する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							



現在の課題・目標	①ファイナンシャルプランナー、証券アナリストなどの実務家との意見交換と文献サーベイを行う。 ②CSRと企業業績に関する実証研究に取り組む。 ③ファイナンスと教育実践に関する新しい研究テーマを見つけ出す。 ④クリスチャン経営者に関するリサーチを行う。
今年度の進捗状況	①「食料デー仙台大会」において現在の日本の家計の現状と課題について講演を行った。 ②各企業のCSRの取り組み状況と企業業績との関係をデータを使って予備的な分析した。 ③金融教育と金融リテラシーの関係についてデータを使って予備的な分析をした。 ④信徒の友に「小林富次郎」に関する小論を掲載した。
来年度の進捗目標	①ファイナンシャルプランナー、証券アナリストなどの実務家との意見交換と文献サーベイを行う。 ②金融教育と金融リテラシーの関係について新しいデータを使った分析を行う。 ③ファイナンスの実証研究および大学における教育実践に関する新しい文献をサーベイする。 ④クリスチャン経営者に関するリサーチを行う。

### Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
----------	----------	------------------------	----

### Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2020年9月～2020年9月	小林富次郎 商業道徳と信仰の両立を実験(信徒の友(2020年9月号)) 寄稿
2014年9月～	日本証券アナリスト協会東北地区連絡委員 委員
2013年4月～	世界食料フォーラム仙台運営委員 委員
2004年4月～	行動経済学会 会員
2001年4月～	日本金融・証券計量・工学学会(JAFEE) 会員
2001年4月～	日本ファイナンス学会 会員
1994年～	日本証券アナリスト協会 会員

### Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

### Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2020年4月～2021年3月 経営学研究科専攻主任
----------------------------

2020年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	村山 貴俊	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		観光経営論に関する教科書の作成					
今年度の進捗状況		原稿を完成					
来年度の進捗目標		来年度に出版予定					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
『自動車産業のパラダイムシフトと地域』	共著	2021年1月	創成社	村山貴俊	pp.31-101		
自動車産業のパラダイムシフトと地域 第2章 東北自動車産業と次世代自動車プロジェクト『自動車産業のパラダイムシフトと地域 第2章 東北自動車産業と次世代自動車プロジェクト』	単著	2021年1月	創成社, 創成社, 創成社	折橋伸哉(編著)	pp.31-101頁		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
イベント・ツーリズムへの一考察—先行研究に学ぶ	単著	2020年12月	経営学論集、16号, 経営学論集、16号	不明	pp.37-65頁		
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		観光学関連の英語論文の執筆					
今年度の進捗状況		執筆完了					
来年度の進捗目標		来年度の公刊を目指す					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等				
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							

来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2020年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	矢口 義教	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
理論と実践に基づくアクティブラーニング		2020年4月1日		経営学科講義科目「ビジネス・ケース実習」において、経営学理論の修得に基づく実践的な思考・分析・提案力を養い、地域企業や大手上場企業への実践的戦略提案を行っている。			
復興マインドを形成するアクティブラーニング		2020年4月1日		演習(3年)・(4年)において、CSRの観点から東日本大震災被災地の復興構想をプランニングする指導を展開している。アクティブラーニングを行うことで、受講生の復興マインドの涵養に努めている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		受講生が経営学・震災復興を通じた事業や復興の構想力を修得し、東北経済や震災復興、さらには地方創生に貢献できる人材を育成すること。					
今年度の進捗状況		経営学科の講義科目「ビジネス・ケース実習」や「演習(3年)」を通じて、経営者への戦略提案活動や復興構想構築を行っており、ある程度目標が達成できている。					
来年度の進捗目標		上記の取り組みをさらに習熟したものにするために、チーム学習方法、フィールド調査の際の事前学習と事後学習を充実させていく。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
『改訂版経営学原理』		共著	2021年3月	創成社		佐久間信夫、浦野倫平	pp.68-75
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		CSR促進における経営者の役割と「社会的に責任あるリーダーシップ」の承継					
今年度の進捗状況		CSRと事業承継の関係性を明らかにするとともに、不祥事における中小企業経営者の関与を明らかにしてきた。					
来年度の進捗目標		東日本大震災の被災地企業で、何代にもわたって継続していて、かつ震災時に社会的責任を果たした企業経営者を対象に調査を行い、社会的に責任あるリーダーシップがいかに承継されているかを明らかにしていく。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							

2020年9月	社会福祉法人仙台市社会福祉協議会「2020企業の社会貢献・CSRセミナー」講師兼ファシリテーター(2020年9月)(社会福祉法人仙台市社会福祉協議会「2020企業の社会貢献・CSRセミナー」講師兼ファシリテーター(2020年9月))		
2020年6月	東北学院大学地域連携課「コミュニティソーシャルワーカー(CSW)スキルアッププログラム」講師(2020年6月)(東北学院大学地域連携課「コミュニティソーシャルワーカー(CSW)スキルアッププログラム」講師(2020年6月))		
2015年9月～	日本産業経済学会 会員		
2014年10月～	Society for Business Ethics 会員		
2014年10月～	環境経営学会 会員		
2014年4月～	日本経営倫理学会 会員		
2013年8月～	事業承継学会 会員		
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	山口 朋泰	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
学生に対する個別アドバイス		2020年4月1日～		講義終了後に、manabaの掲示板機能を使用し、解けない学生に個別アドバイスを実施することで、落ちこぼれる学生の防止に努めている。			
具体的な解答プロセスの説明		2020年4月1日～		講義では、会計処理方法の概要とその背後にある理論を説明した後に、必ず設問を設定し、解答プロセスを具体的に提示することで学生の理解を促進させている。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
連結財務諸表論の講義プリント		2020年4月1日～		連結財務諸表論に関する基礎知識を定着させるために作成した穴埋め形式の講義プリントである。理解を促すために図表を多く取り入れ、また復習に役立つように練習問題も豊富に用意している。			
財務会計論の講義プリント		2020年4月1日～		財務会計論に関する基礎知識を定着させるために作成した穴埋め形式の講義プリントである。理解を促すために図表を多く取り入れ、また復習に役立つように練習問題も豊富に用意した。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		会計学に関する学生の自主学習時間を増やすこと。					
今年度の進捗状況		講義においてレポート課題を課すとともに、会計学関連の資格について説明した。					
来年度の進捗目標		来年度以降もレポート課題を課すとともに、会計学関連の資格について説明する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
日本企業の経営者交代の特性－経営者の属性、財務比率、持株比率の観点から－		単著	2020年12月	国民経済雑誌 第222巻第6号 39-65頁、国民経済雑誌 第222巻第6号 39-65頁	榎本正博, 山口朋泰	pp.不明	
連続増益の達成と実体的裁量行動		単著	2020年12月	東北学院大学 経営学論集 第16号 1-16頁、東北学院大学 経営学論集 第16号 1-16頁	不明	pp.不明	
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		①共同研究の成果を国際的な学術雑誌に掲載する。 ②単独研究の成果を国際的な学術雑誌に掲載する。 ③学会等に積極的に参加し、自身の研究成果を報告するとともに人脈を広げる。					
今年度の進捗状況		上記目標①については、現在分析中である。 上記目標②については、現在、先行研究整理中である。 上記目標③について、今年度は学会に参加できなかった。					

来年度の進捗目標	上記目標①について、来年度は分析を終え、論文執筆を完了することが目標である。 上記目標②について、来年度は新たなデータを整理することが目標である。 上記目標③について、来年度は最低年1回学会等に参加し、人脈を広げることが目標である。		
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2011年4月～		日本会計研究学会正会員 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
紀要編集委員			

2020年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	准教授	氏名	秋池 篤	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
動画の活用		2020年4月～		オンデマンド講義に併せてyoutubeにおける企業公式の動画の閲覧などを促すことによって、経営戦略論に関する理解を深めるようにしている。			
図・表を活用しての理論・フレームワークの学習の促進		2019年～		例年通り、引き続き、経営戦略論の理論・フレームワークに関して文字のみならず、図や表を作成し伝えることを心掛けた。			
オープンアクセス論文を活用してのフレームワーク理解の促進		2019年～		例年通り、経営戦略論の理論・フレームワークの学修を促進するため、各自オープンアクセス論文上に記載されているケースを読解し、理論・フレームワークを用いて解釈するという課題をこれまで数回実施した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		経営戦略論の理論・フレームワークに関する内容理解度の向上					
今年度の進捗状況		今年度はオンデマンド型ではあったものの、事前学習・事後学習の実施をmanabaで実施し予習・復習の確認をするようにし、経営戦略論の理論・フレームワークの内容理解の促進をはかった。また、毎回のアンケートでは興味のあるフレームワーク・理論についてアンケートもとり、フィードバックも行うようにした。					
来年度の進捗目標		来年度は今年度得られた課題などに対応し、よりブラッシュアップした形で、事前学習・事後学習の促進を図ると同時にフィードバックの質なども向上させていきたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Dynamic impacts of aspects of appearance and technology on consumer satisfaction: Empirical evidence from the smartphone market		単著	2020年9月	The Review of Socionetwork Strategies, 14,205-225.		Seungjin Kim◎, Sotaro Katsumata & Atsushi Akiike	pp.209-222.
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
『自動車のデザイン創出活動の変化と地域』		共著	2021年1月	創成社、『自動車産業のパラダイムシフトと地域』, 創成社、『自動車産業のパラダイムシフトと地域』		折橋伸哉編, 秋池篤・吉岡(小林) 徹	pp.102-125
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		デザイン戦略に関する研究 技術とデザインの同時追及時のマネジメント及び新奇性の高いデザインの戦略的なマネジメント 自動車産業に関する研究 東北自動車産業に関する現状の理解と効果的なマネジメント方法の検討 観光戦略に関する研究 観光戦略についての定量的・定性的な分析					



今年度の進捗状況	デザイン戦略に関する研究 実際のデータ分析などを実施 自動車産業に関する研究 意匠の創出状況について記述統計的な分析を実施。 観光戦略に関する研究 新型コロナが観光業にもたらす影響について考察している文献の整理を実施
来年度の進捗目標	デザイン戦略に関する研究 引き続き現在の調査を論文化し、公開を目指す。 自動車産業に関する研究 引き続き調査を継続していく。 観光戦略に関する研究 引き続きこれまでの調査を進め、論文の公開を目指す。

### Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 ※制限文字数50文字を超えているので『研究課題』にのみ移行。	2018年度～2020年度	個別	デザインイノベーションと技術イノベーションの同時追及時の課題や克服方法について分析する。
科学研究費補助金 ※制限文字数50文字を超えているので『研究課題』にのみ移行。	2017年度～2019年度	共同(研究分担者)	観光地の競争力について質問紙調査なども踏まえて多面的に調査を実施する。
科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤B「市場創造と成熟過程の複眼的実証研究」	2016年度～2019年度	共同	市場創造における製品戦略について検討する。

### Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2014年3月～	国際ビジネス研究学会員 会員
2013年12月～	研究・技術計画学会員(現:研究・イノベーション学会) 会員
2012年9月～	日本経営学会員 会員
2012年6月～	組織学会員 会員

### Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

### Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

中央図書館委員
---------

2020年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	准教授	氏名	古賀 裕也	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
Operating leases and credit assessments in a debt-oriented market: The monitoring role of main banks in Japan	単独	2021年3月	The Japanese Accounting Review Research Workshop(Zoom)	◎古賀裕也			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				

<p>科学研究費補助金 若手研究</p>	<p>2018年度～2021年度</p>		<p>本研究課題の目的は日本の格付市場の特徴である複数格付が利益調整行動にどのような影響を与えるのか、またどのような経済的帰結が生じるかを実証的に検証することである。</p> <p>2020年度は、本研究課題を通じて執筆した論文1編(論文1)を海外学術誌への投稿にむけて修正し、投稿した。論文1は、投資適格と不適格のボーダーラインであるBBB-とBB+で顕著な実体的利益マネジメントが行われていること、格付機関は複数格付が付与されている企業の実体的利益マネジメントについては格付水準において割引いて評価していることを明らかにしている。2020年度では追加的な頑健性分析を実施し、投稿用論文を完成させた。2020年10月に海外学術誌であるThe international journal of accountingへ投稿し、2021年1月に査読結果が届いたが、第1ラウンドでのリジェクトの結果を受けた。結果をうけて、匿名のReviewer2名からのコメントを熟読し、今後の論文投稿に向けた論文の改善案を検討した。</p> <p>また、昨年度海外学会で発表した論文1編(論文2)を海外学術誌への投稿にむけて修正した。論文2は、IFRS適用企業の格付関連性がIFRS適用後に増加していること、また複数格付を取得している場合、その効果がより顕著に表れることを明らかにしている。2020年度では頑健性分析と追加分析を実施して論文2を完成させた。論文2は海外学術誌投稿にむけ、ワーキングペーパーを作成し、登録した。</p>
<p>IV 学会等及び社会における主な活動</p>			
<p>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</p>			
<p>展覧会・演奏会・競技会等の名称</p>	<p>場 所</p>	<p>開催年月日(西暦)</p>	<p>発表・展示等の内容等</p>
<p>現在の課題・目標</p>			
<p>今年度の進捗状況</p>			
<p>来年度の進捗目標</p>			
<p>VI 学内における管理運営に関する諸活動</p>			

2020年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	准教授	氏名	竹内 真登	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
オンライン授業への対応		2020年～		主に、オンデマンド授業・オンタイム授業に対して適切な授業実施方法を検討し、学生の能動的な学習を促す授業運営及び授業動画の作成。			
実証的研究及び論文作成		2018年～		演習(4年)で、現状調査や資料収集、定性調査などに基づく仮説設定、実証的な調査研究を用いた仮説の検証といった、仮説検証型の実証的調査研究を実施し、研究から得られた内容を論文とする一連の作業をアクティブラーニング方式で行っている。			
演習によるプレゼンテーション能力の向上		2017年～		演習(3年)において多数の個別発表・グループ発表を実施することで、パワーポイントの作成や活用、発表技術の向上を図っている。			
レポート内容の学生同士での相互確認		2017年～		読解と作文の技法などの授業において、受講者が作成したレポートを報告し、他の受講者が内容についてチェックし、修正点を議論する。学生同士での相互確認により、わかりやすい、意味の通る文章を理解し、文章作成能力の向上を図っている。			
マーケティング理論や概念の復習の促進		2017年～		毎回授業時に前回授業の短時間の復習や解説を実施。反復学習を推進することで忘却を防ぐことを意図している。			
消費者行動を理解するための簡易的な実験の実施		2017年～		概念的、抽象的な内容について授業内で受講者参加型の簡易的な実験を実施している。実験に参加することで、受講者自身が仮想的に消費行動や購買行動を変化させることを体感し、理解を促す。			
マーケティング理論における事例を用いた説明		2017年～		マーケティング理論などの説明において企業の実務事例を用いて説明することで受講者の理解を深める。			
調査・データ分析能力の習得		2017年～		演習(3年)において調査実施・データ解析能力を育成する目的で、学生主体の仮想の商品企画活動を行い、調査票の作成、データ入力、多変量解析の実施をアクティブラーニング方式で行っている。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
ビジネスリサーチ実習Ⅱ向け講義資料		2020年		マーケティング分析を実施するための講義資料を作成			
マーケティングⅠ講義資料(改善・オンライン対応)		2020年～		マーケティングⅠで使用するマーケティング論に関する投影・配布資料について資料の一部を改善。更にオンライン授業に対応した配布用、授業時用の資料に修正(見やすさ、穴埋め等の変更)を加えた。			
マーケティングⅡ講義資料(改善・オンライン対応)		2020年～		マーケティングⅡで使用する消費者行動に関する投影・配布資料について資料の一部を改善。更にオンライン授業に対応した配布用、授業時用の資料に修正(見やすさ、穴埋め等の変更)を加えた。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
東北生活文化大学高校にて出張講義		2020年7月31日～2020年7月31日		「マーケティングって何? -消費者との関係と企業活動における役割-」という題目で、高校生に対して、マーケティングの定義、経営学の中のマーケティングの位置づけなどを講義。			
現在の課題・目標		最新の研究知見などを授業に取り入れる。分かりやすい事例、最新の事例を取り入れる。					
今年度の進捗状況		事例の取り込み、オンライン授業対応を中心に行った。					
来年度の進捗目標		最新事例の取り込みと研究知見の授業での紹介、実務担当レベルで必要となる泥臭い作業(内容の読み取りよりも、作業として手法や方法論を出来る、必要な統計的技法や計算ができるなど)を授業に取り入れる。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							

Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)				
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文				
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)				
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)				
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)				
G. 学会における研究発表				
市場調査における調査回答と実行動の乖離の理解と低減: Insufficient Effort Responding回答者の除外の妥当性	共同	2020年10月	第61回消費者行動研究コンファレンス(オンライン開催)	竹内真登・新美潤一郎・星野崇宏
H. 翻訳(学術書や原典等)				
I. 特許				
現在の課題・目標	マーケティングリサーチの精度向上			
今年度の進捗状況	マーケティングリサーチの精度向上に向け実験や調査実施及び解析、論文執筆・投稿などを実施した。			
来年度の進捗目標	論文執筆及び投稿、採択を目指す。			
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)				
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要	
科学研究費補助金 科学研究費 基盤研究B	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	帰属理論に基づく新たな人的資源管理モデルの構築に向けた統合的研究	
科学研究費補助金 科学研究費 若手研究	2018年度～2021年度	個別(研究代表者)	行動経済学や心理学に基づく調査回答と事実の乖離の理解及び低減	
IV 学会等及び社会における主な活動				
2016年7月～	日本行動計量学会 会員			
2015年6月～	日本商業学会 会員			
2014年12月～	行動経済学会 会員			
2013年6月～	日本消費者行動研究学会 会員			
2013年6月～	日本マーケティング・サイエンス学会 会員			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動				
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等	
現在の課題・目標				
今年度の進捗状況				
来年度の進捗目標				
VI 学内における管理運営に関する諸活動				
①AO委員 ②センター試験委員 ③教育研究支援室・実習室管理委員(マーケティング実習室の予算策定、管理運営) ④親和会幹事 ⑤研究環境改善委員				

2020年度								
所属	経営学部 経営学科	職名	講師	氏名	板橋 慶明	大学院の授業担当の有無	無	
<b>I 教育活動</b>								
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要				
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)								
学生に対する(学習や大学生活に関する)個別相談		2020年9月～		大学における学習や大学生活について相談を必要とする学生に対して(オフィスアワーの枠とは別に)個別相談に応じている。自分が望んでいることと現状を確認し、目的達成の障害となっている事柄がある場合には、それについて共に考え、大学生活について適切な意思決定をし、行動を起こすことができるようサポートしている。				
発表担当グループによる円滑な演習進行を促進するためのサポート		2020年9月～		3,4年向け演習(ゼミ)において発表担当のグループが円滑にゼミを進行させ、ディスカッションを活性化することができるよう、ゼミ時間外に担当グループとのミーティングの時間を設けることによって、アドバイスやサポートを提供している。				
読解・作文の技法及び研究・発表の技法において、人間性の理解に資すると思われる幅広い視野からのアプローチをとった。		2020年5月～		学科共通の内容に加えて、人と組織に関して様々な視点から深く理解できるように、カウンセリング的視点(カウンセリング・マインド)、思春期の子供のコーチング、多様性の理解(異文化理解)といった多彩な内容を取り入れ、現代組織と現代社会において必要とされる人間性の理解と育成に関係した能力を高めることに資する内容とした。				
2. 作成した教科書、教材、参考書								
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4. その他教育活動上特記すべき事項								
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・マネジメントにおける心理的現象に関わる複数の要因に配慮しながら注意深く考える能力を高めてもらえるよう努力する。</li> <li>・レポート提出に関して、盗作・コピペがよくないことを理解してもらい、自分の力で取り組むよう指導する。</li> <li>・現代の学生に対応するために必要な理解(学生相談等に必要)を深める。</li> </ul>						
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>・2年配当講義科目の試験を採点する際には、注意深く考える能力に注意しながら評価しているが、今年度も前期科目(経営心理学Ⅰ)の試験をレポート試験とした。課題本に取り組むことを必須とし、(選択肢の中から選んだ)課題本の内容と授業の内容を結びつけながらレポートを作成するよう要求した。よく考えた内容のものやオリジナリティの見られるレポートもあり、今年度も単位取得率が高かった。学生の考える能力と創造性を伸ばすのにある程度役立つものと見られる。後期科目(経営心理学Ⅱ)は、コロナ対応のため、遠隔受講と対面受講の両方が存在する形となった。対面での受講者に対しては、論述の筆記試験を行い、理論的構造を理解しながら自分の知識や考えをまとめる力を発揮してもらった。遠隔での受講者には、授業で学んだことをリーダーシップや意思決定の事例(事例の資料として、いくつかの動画を指定)に適用して考察し、考えをまとめてレポートとして提出してもらった。すぐれた考察力や創造性を発揮してくれる学生が予想していた以上に現れた。内容が濃い専門科目の単位取得に苦しむ学生もいるので、今後とも専門科目にしっかり取り組む必要性を伝えながら講義を進めることとする。</li> <li>・今年度も、盗作・コピペを含むレポートの比率は、前期のレポート試験及び後期の(遠隔受講者向けの)レポート試験では、低かった。盗作例を示しての注意喚起を今年度も行ったが、効果が出たものと見られる。</li> <li>・学生相談室での仕事に関しては、コロナの影響もあり、講演等への参加がほとんどできなかった。現代の学生の心理について理解を深めたり、対応の仕方について貴重な知識にふれる機会なので、残念である。(学生相談室の業務において)学生との面談を担当する機会も今年度はほとんどなかった。</li> </ul>						
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・引き続き複数の重要な概念を結びつけながら注意深く考えたり、実際の状況や事例に理論を適用して考えることができるようになるよう指導する。</li> <li>・盗作・コピペについての注意喚起を継続し、これらの発生を低く抑える。</li> <li>・自身の研究・生活環境が十分に整っていないため、必要な時間とエネルギーが確保できるかについて不安があるが、可能であれば学生相談室の業務に関連した研修会・研究会等に参加して理解を深めるとともに、学生への対応能力を高めたい。</li> <li>・コロナ下での授業の効果的なやり方について、模索・検討していきたい。</li> </ul>						
<b>II 研究活動</b>								
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)		発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書								
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)								
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)								

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文			
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)			
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)			
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マズローの理論やマズローの理論と関係したマネジメント理論や心理学理論についてリサーチを進める(リサーチを進める環境を整える)。</li> <li>・上記と間接的に(直接・間接的に)関係している現代の若者(学生)の心理について理解を深める。</li> <li>・リサーチにおいて必要となる英語能力を高い水準に維持する。</li> </ul>		
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自身の研究・生活環境がまだ十分に整っていない中、コロナ対応の授業のために時間と労力を大きくとられ、その他の事柄は、なかなか進展しなかった。自身の体調管理も含めて、何とかリサーチ等のための安定的状態を回復したいところである。</li> <li>・学生相談室関係の講演会等へはほとんど出席できなかったため、そこで基礎的・周縁的知識を得ることはほとんどできなかった。しかし、これとは別に、哲学・心理に関係した理論・考えについて調べるのが少しできた。</li> <li>・リスニングについては、テレビ番組やオンラインサイトなどを利用してブラッシュアップの継続をある程度してきた(前年度よりは時間が減少)。文献読破については、あまり進めることができなかった。</li> </ul>		
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安定した生活・研究環境の確保や自身の体調管理などについて、状況を改善し、自身の生活・研究環境の回復を早期に行い、リサーチを前進させる環境を整えたい。</li> <li>・時間と体調が許せば、学生相談関連の研修会・研究会に参加したい。また、これとは別に、現代社会を理解するための思想や理論について調べることを続けたい。また、時事問題にも目を向け、時代の流れの中での理論の役割について考えて行きたい。</li> <li>・リスニングの機会をふやすとともに、文献読破量もある程度確保したい。</li> </ul>		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
1997年9月～		日本経営学会会員 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度								
所属	経営学部 経営学科	職名	講師	氏名	荻原 丈男	大学院の授業担当の有無	無	
<b>I 教育活動</b>								
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要				
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)								
学生の知的好奇心を刺激し、授業内容の理解を深める工夫		2020年4月1日～2021年3月31日		最新の新聞記事・雑誌等から授業に関連する事例(ケース)を紹介したり、そのケースに関する小レポートを提出させている。				
毎回の授業の進め方と、授業理解定着の工夫		2020年4月1日～2021年3月31日		冒頭で前回の復習、終了時に次回予告をしている。又、授業中の小テストや小レポートで授業理解の定着をはかっている。				
初回授業時のアンケート実施と、最終回の教員独自の授業アンケート実施		2020年4月1日～2021年3月31日		学生による授業評価の他に、初回授業でシラバス理解等の調査をし、最終回に授業改善点等の教員独自のアンケートを実施している。				
2. 作成した教科書、教材、参考書								
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4. その他教育活動上特記すべき事項								
現在の課題・目標		特に4年の受講生に履修上の注意事項(就活による欠席扱い等)を周知徹底すること。						
今年度の進捗状況		上記課題について、前後2回(初回と最終回)の説明の結果、進捗があった。						
来年度の進捗目標		オフィスアワーの利用者が少ないので、予めメールアドレスを知らせて疑問・質問等に対応すること。						
<b>II 研究活動</b>								
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)		発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書								
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)								
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)								
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文								
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)								
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)								
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)								
G. 学会における研究発表								
H. 翻訳(学術書や原典等)								
I. 特許								
現在の課題・目標		約一世紀にわたるサービス・マーケティング研究の展開を跡づけること。						
今年度の進捗状況		これまでサービス・マーケティング研究の起源と目される「戦間期」に焦点を当ててきたが、今年度は、それを約一世紀にわたるサービス・マーケティング研究史のなかで位置づけ直すつもりだった。ところが、残念ながらコロナ禍の感染症対策等に追われ、それが実行できなかった。						
来年度の進捗目標		来年度は、再度、サービス・マーケティング研究「前史」として、「戦間期マーケティングにおけるサービス研究」を位置づけ直した上で、それをテーマとして論文をまとめる。						
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>								
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>								
2010年4月～				日本商品学会会員 会員				
2010年4月～				日本商業学会会員 会員				
2010年4月～				日本経営学会会員 会員				



V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	助教	氏名	窪田 嵩哉	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
事例・研究の紹介		2020年～		理論やフレームワークの学修を促すため、理論やフレームワークに対応する事例を紹介した。また、学習した理論が近年の研究でどのように扱われているかを紹介し、より深い学修に触れ、興味を持つことができるよう工夫した。			
学生が主体となってビジネスプランを考えることを中心とした授業の設計		2020年～		学生が主体となり、いちからビジネスプランを作成するよう、授業を設計・運営した。授業では実際に学生がインタビュー調査を行うなど、学生自身が収集した情報をもとにビジネスプランを作っていく過程が体験できるようにした。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
ビジネス・リサーチ実習 授業資料の作成と改善		2020年					
起業論Ⅱ 授業資料の作成と改善		2020年					
起業論Ⅰ 授業資料の作成と改善		2020年～					
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・起業論Ⅰにおける授業資料等の教育資料の改善</li> <li>・起業論Ⅱにおける学生の自発的発言の増加</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>・事例の蓄積を進めている</li> <li>・発言になれてもらうため、指名による発言の機会を増やしている</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度得られた経験をもとに、課題の緩和に取り組みたい</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
Upper Echelons Perspectiveを用いた管理会計研究の動向 — 経営者個人の特性に着目した研究を取り上げて —	単独	2020年12月	日本経営学会東北部会 2020年12月12日(不明)	不明			
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・経営者の特性が組織の管理会計システムに与える影響の探索</li> <li>・組織間に形成される結びつきに関する研究</li> <li>・共同研究開発における参加主体の動機付けに関する研究</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>・レビューの内容をまとめ、紀要に掲載することができた</li> <li>・査読付き雑誌へ投稿するための投稿論文を執筆することができた</li> <li>・質問票調査を実施した</li> </ul>					

来年度の進捗目標	質問票調査の結果の解析など、研究を継続、論文の完成を目指す		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
知的財産委員会			

2020年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	講師	氏名	棚橋 則子	大学院の授業 担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業内容の見直し(トピックスの追加と変更、取り上げる企業の変更)</li> <li>・manabaを用いた効果的な事前学修と事後学修の検討</li> <li>・担当授業の再設計</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<p>昨年度掲げた目標はすべて達成したのに加えて、さらに以下の点も達成することができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・オンデマンド授業となったため、イラストなどをたくさん用いることでわかりやすい授業ができた。</li> <li>・manabaを例年以上に活用した(質問の受付、課題の提出など)。</li> <li>・担当授業のうち、専門科目の授業の進め方を変更した。</li> <li>・専門科目のレポート課題では、授業で習ったことだけではなく、各自で自由に考えて行う項目を追加し、これまで経営学部で学んできたことと結びつけるようにした。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の学習意欲が高まるようなmanabaの使い方を検討する。</li> <li>・担当授業の達成目標を各回で詳細に設定し、授業後の到達点をより明確にする。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
Bank valuation and size: Evidence from Japan	共著	2020年10月	Pacific-Basin Finance Journal, 63	Hideaki Sakawa, Naoki Watanabel, Hitoshi Sasaki, Noriko Tanahashi	pp.1-7		
信用金庫のガバナンスについての検証—理事会の構成・運営状況を考慮した実証研究—	共著	2020年5月	信金中金月報, 19(5)	佐々木均, 坂和秀晃, 渡辺直樹, 棚橋則子	pp.60-75		
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・次のテーマに関する論文の調査を行う。</li> <li>・現在進めようとしているテーマの先行研究を論文としてまとめる。</li> <li>・データベースの作成を行う。</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<p>昨年度掲げた目標の75%を達成できたが、データベースの作成だけはできなかった。加えて、論文を紀要へ投稿できなかったのは来年度に持ち越す。</p>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在考えている研究テーマに関するサーベイを行う。</li> <li>・サーベイした論文をまとめ、紀要へ投稿する。</li> <li>・引き続きデータベースの作成を行う。</li> </ul>					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2018年9月～		東北防衛局入札監視委員会 委員	
2013年9月～		日本会計研究学会 会員	
2012年6月～		日本経済会計学会(旧 日本ディスクロージャー研究学会) 会員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
1.就職キャリア支援委員 2.美術部顧問			

# 教員業務・活動報告

法 学 部

法 律 学 科

2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	石垣 茂光	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		1年生2年生の演習では、彼らの発言を誘発し、明るく活気のある大学生活の一助とすること。また、大学での勉強の仕方を身をもって理解し、これから受ける専門課程の授業についていけるようにする。3年生4年生の演習では、判例を実際に読んだり、実際に法律解釈を行うなど、法的問題について具体的に触れ、自ら考える力を養っていく。					
今年度の進捗状況		ゼミの学生とは親和的な関係を構築できた。 manabaを利用しての小テスト・レポート課題の提出・採点を行った。					
来年度の進捗目標		manabaの利用を一層行い、学生の理解度を図ることに努めたい。 分かり易い授業とはどのようなものかについてより深く学ぶとともに、アクティブラーニングの手法をより多く取り入れる。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		相殺に関する債権法改正では大きな修正は見られなかった。しかし、残された問題も数多くある。そこで、債権法改正から漏れてしまった相殺に関する問題点について、再度検討をおこなう。					
今年度の進捗状況		債権法改正に伴う様々な修正点についての理解を深めた。 相殺に関する基礎的な資料も収集した。					
来年度の進捗目標		相殺に関して現時点で問題点についてまとめる。 電子債権化されたことによる金銭債権のについての取り扱いを、相殺・債権譲渡といった観点から調べ直す。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							

VI 学内における管理運営に関する諸活動



2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	井上 義比古	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>							

2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	遠藤 隆幸	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
manabaを介した双方向授業の実践		2020年～		manabaを用いて各種課題の採点基準・講評を示した。またオンライン上の判例・文献情報をmanabaにリンクし収集を指示した。また、適宜チャットツールを用い、課題の提出・講評・採点をおこなうことで、講義時間帯以外でも双方向的やりとりができるよう努めた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
判例教材の執筆・出版		2020年12月20日～2020年12月20日		詳細は研究活動欄に記す			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		マイノリティー問題と家族法					
今年度の進捗状況		卒論につながる課題研究を実施し、「戸籍制度と家族法」に関する考察を深める取り組みを行った。理論的含意を学生が十分に受け止めることができたかどうかは、今後の演習により追証する必要があるが、学習効果として一定程度の意義があったのではないかとと思う。					
来年度の進捗目標		家族登録制度を含めた広い視点から「家族法」を理解する視野を養成すべく、引き続きこのプロジェクトを進めたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
子の引渡しを命ずる審判の間接強制と権利濫用(最決平成31・4・26家法22号67頁)『家事法の理論・実務・判例4』	分担執筆	2020年11月	勁草書房	遠藤 隆幸	pp.120-134		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
面会交流紛争における「子連れ別居」	単著	2020年5月	月報司法書士579号	遠藤 隆幸	pp.36-43		
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
89 子の引渡請求の可否(4) 非親権者の親権者に対する請求	単著	2020年12月	信山社, 松本恒雄＝潮見佳男＝羽生香織 編『判例プラクティス民法Ⅲ 親族・相続【第2版】』	遠藤 隆幸	pp.98		
88 子の引渡請求の可否(3) 監護権者の非監護権者に対する請求	単著	2020年12月	信山社, 松本恒雄＝潮見佳男＝羽生香織 編『判例プラクティス民法Ⅲ 親族・相続【第2版】』	遠藤 隆幸	pp.95		
86 子の引渡請求の可否(1) 親権者の非親権者に対する請求①	単著	2020年12月	信山社, 松本恒雄＝潮見佳男＝羽生香織 編『判例プラクティス民法Ⅲ 親族・相続【第2版】』	遠藤 隆幸	pp.94		
80 子の引渡請求 親権に基づく妨害排除請求	単著	2020年12月	信山社, 松本恒雄＝潮見佳男＝羽生香織 編『判例プラクティス民法Ⅲ 親族・相続【第2版】』	遠藤 隆幸	pp.92		

92 親権者の代理権濫用	単著	2020年12月	信山社, 松本恒雄=潮見佳男=羽生香織 編『判例プラクティス民法 III 親族・相続【第2版】』	遠藤 隆幸	pp.86
相続法コンメンタール(第16回)	単著	2020年7月	戸籍時報798号, 戸籍時報798号	遠藤 隆幸	pp.46-55
相続法コンメンタール(第15回)	単著	2020年6月	戸籍時報797号, 戸籍時報797号	遠藤 隆幸	pp.24-33
相続法コンメンタール(第14回)	単著	2020年5月	戸籍時報796号, 戸籍時報796号	遠藤 隆幸	pp.26-35
相続法コンメンタール(第13回)	単著	2020年4月	戸籍時報794号, 戸籍時報794号	遠藤 隆幸	pp.26-35
<b>G. 学会における研究発表</b>					
「311震災孤児及其養育—以寄養制度為中心」	単独	2021年3月	台湾家事法學會110年春季研討會(輔仁大学)	遠藤 隆幸	
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	(1)後見制度の現代的再定位 (2)相続選択制度における相続財産清算の研究 (3)児童養護制度における民法と児童福祉法の協働				
今年度の進捗状況	後見法の比較研究を進めているが、コロナ禍の下海外実態調査がまったくできず、研究成果の公表含め大幅に遅れている。				
来年度の進捗目標	後見法の研究を進めながら、相続法に関する原稿に着手したい。				
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要	
科学研究費補助金 科学研究費基盤研究(c)	2019年度～	個別(研究代表者)			
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>					
2019年4月～		仙台弁護士会懲戒委員 委員			
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>					

2020年度								
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	大窪 誠	大学院の授業担当の有無	有	
<b>I 教育活動</b>								
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要				
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)								
授業で使用するレジュメ、動画を作成する。		2020年5月1日～2021年1月31日		比較的詳細なレジュメと動画を作成して、レジュメと動画に基づいて授業を進めた。				
2. 作成した教科書、教材、参考書								
・債権法各論Ⅱの分野についてのレジュメ・契約に関する事例問題についてのレジュメ・民法財産法の分野についてのレジュメ		2020年5月1日～2021年1月31日		担当授業科目について、上記のレジュメを作成した。				
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4. その他教育活動上特記すべき事項								
現在の課題・目標		来年度に担当する授業科目で使用するレジュメ、授業動画、小テスト問題を作成する。						
今年度の進捗状況		今年度担当した授業科目についてのレジュメ、授業動画、小テスト問題の作成は完了した。						
来年度の進捗目標		来年度に担当する授業科目で使用するレジュメ、授業動画、小テスト問題を完成させる。						
<b>II 研究活動</b>								
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)		発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書								
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)								
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)								
賃貸不動産の譲渡前に生じた債務不履行等を理由とする賃貸借不動産の譲渡後における賃貸借契約の解除—ドイツの学説を参考にして—(3・完)		単著	2021年3月		東北学院大学学術研究会、東北学院法学(81号)、東北学院大学学術研究会、東北学院法学(81号)		不明	pp.57～82頁
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文								
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)								
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)								
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)								
G. 学会における研究発表								
H. 翻訳(学術書や原典等)								
I. 特許								
現在の課題・目標		①2021年7月に発行される予定の私法判例リマックス63号(日本評論社)に掲載する判決(東京地判平成31年4月25日判タ1476号49頁)の解説原稿を完成させる。 ②日本評論社から出版予定の債権法改正講座に掲載する論文をまとめる。 ③不動産賃貸借において賃貸人が意思によらずに交替する場合を類型化して検討する。						
今年度の進捗状況		①について 資料を収集して、内容をまとめている段階である。 ②について 初校が終わった段階である。 ③について 論点を整理している段階である。						
来年度の進捗目標		①について 原稿を期限までに完成させて出版社に提出する。 ②について 次の校正があれば校正を完了し、原稿を出版社に提出する。 ③について 内容をまとめて東北学院法学82号に掲載する。						
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>								
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		

IV 学会等及び社会における主な活動			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学術研究会評議員(全学)</li> <li>・キャリアアップ支援委員会委員(法学部)</li> <li>・東北学院法学編集委員(法学部)</li> <li>・労働法新任教員選考委員(法学部)</li> </ul>			

2020年度								
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	菊地 雄介	大学院の授業担当の有無	無	
<b>I 教育活動</b>								
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要				
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>								
遠隔授業形態の演習授業におけるZoomシステムの全面的活用		2020年4月1日～2022年3月31日		コロナ禍の時代状況における遠隔授業形態の導入に伴い、演習授業中の多方向的な意見交換と連動したZoomシステム上のグループワーク作業の活用や各グループへの教員の個別参加によるきめ細かな学習指導、学生各人や各グループへのこまめな教材配信等を重ねることで、通常の対面授業では得られがたい学習指導上の成果を上げている。				
学習事項の定着確認と全体的な授業計画との関連性の明示		2015年4月1日～		毎回の授業の冒頭に前回の授業内容を要約して説明し、また学期全体の授業計画進行の流れと関連づけて説明することで、各回の授業の位置づけを逐一確認させる。				
異なる授業項目の下で共通する事項を意識化させることによる相互参照的学習の活用		2015年4月1日～		以前の関連する授業回の説明をあえて引き合いに出し、相互参照的な効果を意識させることで、教育項目の多角的な学習を可能にするよう工夫している。				
各学期授業計画の明示と各回授業進行予定の具体的な説明		2013年4月1日～		各学期の冒頭に各回授業計画の進行予定を詳しく順を追って説明し、学生の自主学習が円滑に進捗するよう工夫している。				
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>								
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>								
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>								
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>① 教師として何を教えるかより、受講生に何が得られたかを毎回の授業テーマとして意識する。</li> <li>② 授業の進行について行けない受講生が出ないよう各授業回の連携関係や各回の重要事項を特に意識させ、当該回では何を学んだかを確認させるよう心掛ける。</li> <li>③ 講義形式の授業でも、可能な限り多くの学生に語りかけ、理解度や理解困難な箇所を推し量るよう努める。</li> <li>④ 遠隔授業の利点を生かして、Zoomシステム上の画面共有機能により根拠条文や参照資料の提供などに柔軟性と即時性をもたせるように工夫する。</li> </ul>						
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>① 学生の理解度を重視する結果、学生との親密な関係はある程度まで得られたが、依然として授業内容に関心の乏しい学生(途中退席者・無反応者等)がいて、道半ばの状況である。</li> <li>② 授業上の重点項目を強調すると、その裏面において、強調していない授業項目が軽視されがちにも感じられる。時に、最終的な成績評価と直結しない事項は教えないでほしいと訴え、教授事項の削減を求める学生もいて、多様な学生の要望を充足することの困難を感じさせられた。</li> <li>③ 法学学習に必須の六法を持ち合わせない経済学部生が受講生の場合、電子政府提供のe-Govから該当法令の関連条項を参照するように勧めた結果、受講ノートの作成上それらの条文を貼り付けることのみで終始し授業の進行内容を把握できなくなってしまう例が頻発した。</li> </ul>						
来年度の進捗目標		今年度の上記進捗状況①②③に記したようなマイナス面と、本来企図するプラス面の効果とを融合させるための継続的工夫を重ねていく予定である。						
<b>II 研究活動</b>								
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)		発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>								
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)								
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)								
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文								
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)								
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)								
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)								
G. 学会における研究発表								
H. 翻訳(学術書や原典等)								
I. 特許								

現在の課題・目標	<p>①会社法分野で自ら編集の任に当たる共著(「レクチャー会社法」)の継続的な改訂を進め、常に内容的なアップデートを図る。</p> <p>②会社法分野で執筆を予定している論文の資料収集その他の執筆準備を進める。</p> <p>③会社法分野の法改正及び判例法理の進展等に合わせ、共同執筆にかかるコンメンタール(会社法条文注釈書)の改訂による内容的なアップデートを図る。</p> <p>④手形法小切手法と商取引の電子決済システムに関する法を包含した新たな証券・決済法のテキストを執筆する。</p>
今年度の進捗状況	<p>①は第3版の刊行予定に向けて出版社編集部との端緒的な打ち合わせを開始した。</p> <p>②会社法分野の論文執筆は、大学内役職(総務担当副学長・ハラスメント対策委員会委員長・生協理事長等々)の職務多忙のため十分な時間をとれず、資料収集作業と思索の継続に終始した(寄稿予定の記念論文集については執筆を断念した)。ただし、執筆テーマについては、取締役責任論の制度趣旨(立法趣旨)と現行法上の役員等責任制度との乖離に関する批判的再検討という具体的内容に絞り込むことができた。</p> <p>③については、出版社(日本評論社)との間で、『新基本法コンメンタール会社法[第3版]』の改訂執筆に関する契約関係にある。</p> <p>④は出版社(中央経済社)との間で、現在の学内役職等の見通しに基づき、刊行時期の再延期を申し入れ、確認を得た。</p>
来年度の進捗目標	<p>上記①の会社法テキストについては、毎年秋の私法学会開催時期に執筆予定者が参集できる状況にあるかどうかを見極めながら、出版社編集部との間で第3版の改訂スケジュールについて具体的な中身の詰めを進める。</p> <p>上記②の会社法論文を執筆し完成に持ち込む。</p> <p>上記③のコンメンタール改訂については、いわゆるコロナ禍の中で刊行計画が遅れている状況の落ち着きに合わせ、執筆原稿を完成させる。</p> <p>上記④の新たなテキストについては、引き続き問題意識を持続させるとともに、新たなテキストの基本構想を固める。</p>

### Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2018年4月～		東北大学出版会評議員 委員	
2016年5月～2020年5月		東北学院大学生生活協同組合理事(理事長) 委員	
2016年5月～2020年5月		東北学院大学生生活協同組合理事(理事長)(東北学院大学生生活協同組合理事(理事長))	
2014年10月～		日本海法学会理事 会員	
2014年10月～		日本海法学会会員 会員	
2014年10月～		東北地方社会保険医療協議会宮城部会委員(部会長) 委員	
2014年10月～		東北地方社会保険医療協議会委員(会長) 委員	
2014年9月～2021年9月		社会保険診療報酬支払基金宮城支部幹事 委員	
2014年9月～2021年9月		社会保険診療報酬支払基金宮城支部幹事(社会保険診療報酬支払基金宮城支部幹事)	
1999年4月～		東北大学商法研究会会員 委員	
1987年7月～		現代企業法研究会会員(名古屋大学内) 委員	
1984年10月～		金融法学会会員 会員	
1983年4月～		日本比較法研究所嘱託研究所員(中央大学内) 委員	
1983年4月～		日本比較法研究所嘱託研究所員(中央大学内)(日本比較法研究所嘱託研究所員(中央大学内))	
1981年10月～		日本私法学会会員 会員	

### Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

## VI 学内における管理運営に関する諸活動

副学長(総務担当)、学校法人東北学院理事、学校法人東北学院人事委員会委員、ハラスメント対策委員会委員長、全学組織運営委員会副委員長、学部改組全学委員会副委員長、大学財政専門委員会委員長、大学施設拡充委員会委員長、大学キャンパス整備準備室副室長、大学災害対策委員会委員長、研究環境改善推進委員会委員長、研究力強化委員会委員長、研究不正防止推進委員会委員長、キャンパス禁煙化推進委員会委員長、内部質保証委員会副委員長、大学キャンパス移転事業委員会委員長、体育会洋弓部長、東北学院大学生協同組合理事長として、法人・大学各組織の管理運営に当たった。



2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	木下 淑恵	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学習した事項の整理と記憶への定着、授業理解の促進		2020年9月～		講義科目では、毎回、授業のはじめに、その回の全体の構成と達成目標を明示する。授業の最後には、その回の要点まとめを行い、さらに、その回の復習としてふりかえりの小テストを行う。また、次の回の冒頭で、前の回の小テストについて詳しく解説する。また、配付レジュメには空欄をところどころ設け、意識的な学習と復習を促している。			
学習した事項についての知識の定着		2020年4月～		講義科目では、半期に3～5回、それまでの複数回の講義内容について小テストを行っている。解答時には各自のノートを振り返ることにより、自らの知識を再確認する機会としている。また、小テスト終了後に重要ポイントの解説を行うほか、必要に応じて多くの受講生が間違えた問題について、次の回の冒頭であらためて解説している。			
授業理解の促進		2020年4月～		込み入っていて理解しにくいと考えられる事柄については、その時期のニュースと関連づけて説明するほか、写真や図表を用いたり、また、実例を紹介するなど、できるだけ具体性をもたせた解説を行っている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①すべての授業で、学習した事項の整理と定着を促進する。 ②すべての授業で、担当教員の講義による座学以外の要素を取り入れる。 ③講義科目を中心に、学習後一定期間を経た事項の復習を促進する。					
今年度の進捗状況		①講義終了時のまとめを、毎回行うことができた。 ②演習では、4年生をゲストとして進路について考えさせる機会を作った。アクティブラーニング科目では、manabaのプロジェクト機能を使用して、受講生同士の議論を行わせることができた。 ③講義科目で復習の小テストを行い、重点項目のほか、誤答が目立った問題についても解説した。					
来年度の進捗目標		①ひきつづき毎回の講義でまとめを十分に行い、受講生の理解を促す。 ②講義内容を絞りこみ、DVD視聴やゲストスピーカーの活用などの機会を設ける。 ③小テストの後には、重点項目だけでなく、受講生の実際の理解をもふまえた解説を行う。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		①スウェーデン型福祉国家成立についてまとめる。 ②スウェーデンのまちづくりにおける自治体の役割について調査を進める。 ③スウェーデンの女性環境についてまとめる。 ④今日の地方自治における基本的課題を整理する。					

今年度の進捗状況	①資料整理を少し行った。 ②これまでの文献を整理した。 ③関連する資料を整理した。 ④いくつかの分野について、基本的課題を整理した。		
来年度の進捗目標	①スウェーデン型福祉国家成立について、引き続き資料の収集と文献の読み込みを進める。 ②スウェーデンのまちづくりにおける自治体の役割について、ひきつづき文献調査を進める。 ③女性の労働環境および政治参加について、基本的事項と課題を整理する。 ④今日のスウェーデンにおける地方自治の課題について、資料を読み込み整理する。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2018年～		北ヨーロッパ学会理事 会員	
2017年～		宮城県国民健康保険運営協議会委員 委員	
2016年～		宮城県後期高齢者医療広域連合 情報公開・個人情報保護審査会委員 委員	
2015年～		宮城県議会 情報公開審査会委員 委員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	准教授	氏名	黒田 秀治	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
詳細なプリントの作成と論点整理		2020年4月27日～		国際法Ⅰ、同Ⅱの講義では、すでに学習した国内法の知識と関連づけながら、国際法と国内法の異同、国際法の規範的分類および国際先例などを提示したプリントを配付し、授業の進捗と理解の定着という二律背反的な講義課題の調整を図った。			
学生の関心を惹起させるテーマの選択と学内施設の利用		2020年4月27日～		「演習一部」および「演習二部」では、可能な限り受講者の意思を尊重し、先例やテーマの選択は彼らに委ねる一方で、随時相談に乗り、レポートの添削を行うなど、受講生の自主性と適切な指導とのバランスをとることを心がけた。			
学習内容の記憶への定着と授業理解の促進		2020年4月27日～		国際法Ⅰ、同Ⅱ、および国際経済法の講義では、冒頭で前回の復習と概略を説明し、年間を通じた講義のタイムスケジュールの中で、当日の授業の位置づけを理解させるように努めた。			
英米文献を読むための基礎的作法・文献渉猟方法の学習		2020年4月27日～		「外国書購読」では、英米文献を購読する過程で、日本と異なる独特の引用スタイルや文献渉猟方法を教授し、英語・法学の学習のみならず、英米文献の学習のためのリテラシーの教育に努めた。			
いわゆるアクティブ・ラーニング的手法の導入		2020年4月27日～2021年1月		「基礎演習Ⅱ」、「演習一部」および「演習二部」では、報告・学習テーマの設定、予習の励行、メンバー全員での討論等によって、学生の能動的学習を促すように努めた。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		1.すべての授業で、学士課程における必要性という観点から、達成目標を見直す。 2.授業時間外でも学生とのコミュニケーションを重視し、学生からの相談・質問に真摯に対応する。 3.次年度担当の「基礎演習Ⅰ」の「講義ノート」を作成する。					
今年度の進捗状況		1.上記目標①については、授業アンケートでは、さまざまな点で受講者の満足度が増加しているため、進捗がみられる。 2.上記目標②については、授業の前後および研究室に在室の際も、学生の相談に応じた。 3.上記目標③については、速やかに「講義ノート」の準備にとりかかる。					
来年度の進捗目標		1上記目標①については、学生の理解度を深め、関心を増大させるという観点から、より適切なものに変更する。 2上記目標②については、相談に応じた学生には好評であったので、真摯な対応を継続する。 3上記目標③については、社会情勢の変化を迅速に取り入れ、「講義ノート」を作成するように努める。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
地球公共財と国際裁判手続		単著	2021年1月	東北学院大学法学政治学研究所紀要第29号(29)		黒田秀治	pp.1-22
手続的ユース・コーゲンスの概念		単著	2021年1月	東北学院大学法学政治学研究所紀要第29号(29)		黒田秀治	pp.23-52
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							

G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	1.H.L.A .Hartの理論を使用して整序した主権免除および国際法律行為の研究 2.国際法から見た国家の主権的行為の規制の態様の研究 3.国際投資法と国際人権法との交錯に関する論文をまとめる。 4.投資紛争解決国際センターによって保護される投資の定義についての動向 5. 国際裁判を地球公共財の観点から分析する。 6. ユース・コーゲンスを手続法として捉えなおす。		
今年度の進捗状況	1.上記目標①については、資料を収集中である。 2.上記目標②については、最近手を付けたばかりで、進捗がなかった。 3.上記目標③については、ほぼすべての資料を集めた。 4.上記目標④については、資料を収集中である。 5.上記目標⑤については、論文を執筆した。 6.上記目標⑥については、論文を執筆した。		
来年度の進捗目標	1.上記目標①については、視点を換え、法議論の観点からの研究にとりかかる。 2.上記目標②については、資料の収集を完成する。 3.上記目標③については、近年の進展に留意し、さらに資料を収集し、論文をまとめる。 4.上記目標④については、最近の動向を分析する論文を執筆する。 5.上記目標⑥については、法の断片化・統合と、形式的序列の観点から研究に着手した。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	近藤 雄大	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
ゼミ内模擬裁判の実施		2020年9月17日～2021年1月21日		ゼミ生の学力向上を目的として演習一部で模擬裁判を実施した。ゼミ生に民事の事案を提示し、原告班、被告班、裁判官班に分かれ、それぞれの役割に応じて準備をし、授業日を公判期日として事件ごとに議論を行った。最終日に裁判官班のメンバーが判決文の読み上げ、最終的な勝敗を決することになった。			
レポートの講評とフォローアップ動画の配信		2020年5月7日～		最終レポートの解説動画を作成し配信をした。その際の資料として、「採点基準」と「解答例」を作成した。これらを前提としてレポートの結果に疑問をもった学生や評価に納得がいかない学生に対して詳細に解説した回答書を作成し交付した。			
学習した内容の定着を図る		2020年5月7日～		毎回の授業の初めに、前回の重要点について復習をおこなっている。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
授業の補助教材としてのレジュメの作成		2020年5月7日～		授業の内容を理解しやすくするため、毎回補助教材としてレジュメを作成し、配付している。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
ランチョンセミナーの企画および講師		2020年11月25日～		法学部主催のランチョンセミナーを今年も引き続き実施した。内容を企画して他の先生方の協力も仰ぎ開催した。			
公務員試験等対策勉強会の実施		2020年9月18日～2021年1月8日		3年生向けに公務員試験等を目指す学生を対象に勉強会を実施した。後期に実施し、債権法分野を中心とした。将来的な公務員試験や各種資格試験の合格を目標として問題演習および解説を行った。			
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>授業の理解を深めるために、イメージしやすい具体例をあげて説明するように心がける。</li> <li>アクティブ・ラーニングの要素をできる限り取り入れる。</li> <li>評価に不満や疑義のある学生に納得してもらうために、採点基準を明確化し、それに基づいて不満や疑義のある学生に対して十分な説明を行う。</li> <li>演習Ⅰ・Ⅱは連続受講してもらうことにより、卒業までの2年間にわたり単位修得、就職など学生生活全般について相談や指導を行う。</li> <li>将来の目標達成のために意欲ある学生の学習をサポートし、モチベーションの維持を図るため継続的に勉強会を実施する。</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>関係図や補足資料を配布するなどして、学生が具体的なイメージを浮かべて考えられるような工夫をした。</li> <li>最終レポートの解説動画を配信し、その上で評価に疑問のある学生については、manabaを利用して採点基準をもとに詳細な解説を記した回答を交付し、その中でなぜその点数なのかを説明した。その結果、ほとんどの学生は納得していた。</li> <li>本年度の卒業生は、全員が演習Ⅰと演習Ⅱを連続受講し、ほとんどの学生が進路を決定して卒業することができた。また、新4年生もほとんどが連続受講する予定であり、単位修得や就職活動の相談に応じている。</li> <li>学生のキャリアアップおよび将来の目標達成に向けた基礎固めとなるように公務員試験対策の実践的な練習として勉強会を開催した。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>一部の学生からは難しかったとの声もあったので、分かりやすいとの評価が多くなるように、具体例を用いてイメージしやすく、また分かりやすい説明をしていく。</li> <li>次年度以降も、本年度と同様の対応を続けていこうと考えているが、採点基準についてはより明確化し、学生への説明が分かりやすくなるようにする。</li> <li>法学検定試験をはじめ各種資格試験への合格者が増加するように、勉強会の実施のみならず個別の進路相談や学習相談にも応じるようにする。</li> <li>新3年生への履修指導を4月中に実施し、単位修得についての意識を高め、また就職についての具体的なイメージをもたせる。また、新4年生には引き続き単位修得と就職活動についてのフォローをする。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							

Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)			
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)			
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文			
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)			
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)			
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ドイツ法律行為論研究会での共同研究を進める。</li> <li>・法学部での共同研究プロジェクトを進める。</li> <li>・一部無効に関する論文を執筆する。</li> </ul>		
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先に発表した論文に続く内容の論稿を執筆するために、必要な裁判例や評釈類を収集した。</li> <li>・今までに執筆した論文以降について発表された論文などのフォローを始め、資料の収集を始めたので進捗があった。</li> </ul>		
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ドイツの民法総則分野の逐条解説本出版へ向けた準備を進める。</li> <li>・今回の論稿の続きとなる内容についての論文作成を目指し、資料収集や検討をおこなう。</li> <li>・年度内に論文を公表できるようにする。</li> </ul>		
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2008年1月～	日本消費者法学会 会員		
2004年4月～	比較法学会 会員		
2004年4月～	日本私法学会 会員		
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	齋藤 誠	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
○学習支援システムmanabaを活用した授業改善		2020年5月～2021年1月		各授業において、遠隔授業に対応するため、manabaの諸機能(レポート、アンケート、小テスト、プロジェクト)を積極的に活用した。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
○「政策・行政入門 授業ノート(2020年)」		2020年4月		「政策・行政入門」テキストの改訂版の作成した。			
○「現代の政治 授業ノート(2020年)」		2020年4月		「現代の政治」のテキストの改訂版を作成した。			
○「政治思想史Ⅰ・Ⅱ 授業ノート(2020年)」		2020年4月		「政治思想史Ⅰ」及び「政治思想史Ⅱ」テキストの改定版を作成した。			
○「読解・作文の技法 授業ノート(2020年)」		2020年4月		「読解・作文の技法」テキストの改訂版を作成した。			
○「市民社会を生きる 授業ノート(2020年)」		2020年4月		「市民社会を生きる」テキストの改訂版を作成した。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
歴史学科「研究・発表の技法」担当者FD研修会での報告		2020年10月16日		歴史学科「研究・発表の技法」担当者FD研修会において、manaba「プロジェクト」を使ったグループ学習について報告を行った。			
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		1「比較政治論Ⅱ」の授業内容・方法を確立する。 2「コース総合演習」の授業内容・方法を確立する。 3「東北学院の歴史」の授業内容・方法を確立する。 4 学習支援システムmanabaの利用による授業改善を進める。 5 担当するすべての授業で授業評価の「総合評価」スコアが4.2以上となる授業を行う。 6 担当するすべての授業で「関連学習」スコアが2.5以上、半分以上で3.0以上となる授業を行う。					
今年度の進捗状況		1については、2019年度の授業参加者がいなかったため、進捗しなかった。 2については、現在の内容・方法でほぼ問題ないことがわかった。 3については、来年度の授業開始にむけて、細かい授業計画をたて、シラバスを作成した。 4については、「レポート」以外の多くの機能を用いて、授業改善を試みた。 5については、担当した9つの授業のうち、5つの授業で達成できなかった。 6については、担当した9つの授業のうち、8つの授業で3.0以上を達成できた。					
来年度の進捗目標		1については、2019年度の内容・方法を検証し、改善策を検討する。 2については、目標からはずす。 3については、シラバスに沿った授業を行い、問題点を2022年度の授業で改善する。 4については、2020年度の経験をふまえ、2021年度の対面授業でも諸機能を積極的に活用する。 5については、スコアが特に低かった「政策・行政入門」で4.0を超えること目標に授業を改善する。 6については、担当するすべての授業で「関連学習」スコア3.0とする。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
鈴木義男研究序説―歴史的意義を再評価すべき3つの仕事―		単著	2021年3月	東北学院大学経済学論集(194・195合併号)、東北学院大学経済学論集(194・195合併号)		不明	pp.181～198頁
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							

G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	経済学部教授仁昌寺正一教授による鈴木義男に関する著書出版を支援する		
今年度の進捗状況	定期的に研究会をもち、編集・執筆作業を支援している。また、みずからも、研究会の成果を論文にまとめ、発表した。		
来年度の進捗目標	執筆作業を終了させるとともに、みずからも、研究会の成果を論文にまとめ、発表する。		
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2014年4月～		公立大学法人宮城大学外部委員 委員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
○英語教育センター所長として、共通(必修)英語教育の組織的運営・実施のための体制づくりと、具体的な施策を実施している。			
○法学部基幹構想委員会の委員長として、コース制の実質化、卒業時「質保証」を中心に、教育内容・方法の改善に係る諸問題について検討をすすめた。			



2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	佐々木 くみ	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2020年4月～		授業の予習と復習をリアルタイムに行わせるため、manabaのドリル機能を利用して、ほぼ毎週、予習問題を合格点に達成するため繰り返し解答させ、また、復習問題に全10回解答させた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
日評ベーシックシリーズ『憲法Ⅰ』『憲法Ⅱ』(日本評論社)		2020年～		問題を噛み砕き、平易な語りかけをすることで、憲法の基礎知識について初学者でも理解できることを目指している。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①教養科目「日本国憲法」の授業について、基礎知識がより多く定着するようにする。 ②専門科目「憲法」の授業について、学生により多くの時間を予習・復習にあてさせるようにする。 ③授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、講義に関する学生からの様々な相談に応じる。					
今年度の進捗状況		①については、基礎知識を中心に学ぶ内容を厳選した。 ②については、manabaの復習問題のドリルと小テストの解説の時間を増やした。 ③については、manabaの「個別指導」とメールで学生とコミュニケーションをとり、ある程度の進捗がみられた。					
来年度の進捗目標		①教養科目「日本国憲法」の授業について、基礎知識がより多く定着するようにする。 ②専門科目「憲法」の授業について、学生により多くの時間を予習・復習にあてさせるようにする。 ③授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、講義に関する学生からの様々な相談に応じる。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
憲法Ⅱ人権[第2版]『憲法Ⅱ人権[第2版]』	共著	2021年3月	日本評論社, 日本評論社, 日本評論社	新井誠、曾我部真裕、横大道聡	pp.全260頁		
憲法Ⅰ統治[第2版]『憲法Ⅰ統治[第2版]』	共著	2021年3月	日本評論社, 日本評論社, 日本評論社	新井誠、曾我部真裕、横大道聡	pp.全278頁。		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
学校教育における信教の自由と政教分離—選択と平等な尊重原理—	単著	2021年3月	東北学院法学81号, 東北学院法学81号	中林暁	pp.121-169頁		
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
18歳から考える人権[第2版]『18歳から考える人権[第2版]』	共著	2020年11月	法律文化社, 法律文化社, 法律文化社	宍戸常寿・編著	pp.全106頁		
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							

現在の課題・目標	①統治、人権の両分野について、最新の研究成果を踏まえ、教科書を改訂する。 ②国民主権と天皇制について研究する。 ③宗教系私学と信教の自由について研究する。 ④居住移転の自由について研究する。		
今年度の進捗状況	①については、教科書を改訂した。 ②については、教科書を改訂する範囲で研究した。 ③については、論文「学校教育における信教の自由と政教分離―選択と平等な尊重原理―」を公表した。 ④引き続き、研究する。		
来年度の進捗目標	①居住移転の自由について研究する。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2019年8月～2021年7月		仙台市個人情報保護審議会委員 委員	
2018年4月～		宮城県労働委員会委員 委員	
2015年10月～		多賀城市情報公開・個人情報保護審査会委員 委員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
①公務員試験・連携講座小委員 ②AO委員 ③学術研究会評議員 ④ハラスメント相談員 ⑤『東北学院法学』編集委員			

2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	佐藤 英世	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
レジュメの作成と授業評価		2020年4月1日～		講義科目である「行政法総論Ⅰ」、「行政法総論Ⅱ」、「法曹養成実習Ⅲ」、「日本法と外国法」について、学生が理解を深めることができるようにレジュメを作成し、配布している。行政法総論Ⅰ・Ⅱでは、レジュメをWeb上でも公開している。また、法学部の演習科目、大学院の担当科目を含め、すべての担当授業で授業評価を行っている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
科学研究費補助金 科学研究費助成事業		2019年度～2021年度	共同(研究分担者)	『公的文書の管理・保存におけるアーキビストとジェネラリストの役割に関する比較研究』			
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
2021年3月～			多賀城市入札監視委員会(委員長) 委員長				
2020年8月～			宮城県個人情報保護審査会委員 委員				
2017年4月～			亘理町入札監視委員会(会長) 委員				
2013年4月～			柴田町固定資産評価審査委員会委員(2020年から会長) 委員				
2007年5月～			白石市情報公開・個人情報保護審査会委員(2010年4月から会長) 委員				

2004年4月～	東北弁護士連合会弁護士任官候補者推薦委員会委員 委員		
2003年10月～	大崎市情報公開審査会委員(会長代理) 委員		
1985年4月～	日本公法学会会員 会員		
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	佐藤 優希	大学院の授業 担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
<b>教育実践上の主な業績</b>		<b>年月日(西暦)</b>		<b>概要</b>			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
ゼミ論文の製作		2020年4月1日～2021年3月31日		演習一部では判例研究論文、演習二部ではゼミ論文の執筆および提出を単位修得の要件としている。とくに演習二部では、卒業論文としてポリシーある論文を執筆させ、報告会・討論会をしたうえで、ゼミ論文集にすることで、法学部で学んだことの集大成ができるよう丁寧な指導を心掛けている。本年度は演習二部ゼミ生12名が論文執筆し、ゼミ論文集「東北学院法学研究第8号」を発行した。			
民事模擬裁判の実践		2020年4月1日～2021年3月31日		裁判官、原告、被告に分けて、該当事者のみに証拠等の資料を配布し、口頭弁論から判決の言渡しまでを行う。法科大学院用の民事裁判DVDを視聴し、裁判傍聴をした後で、民事裁判で行われる答弁書の作成、主張、証拠の提出、判決文の作成等を自分たちが行うことにより実践能力が高まることを目的としている。			
演習におけるフィールドワークの導入		2020年4月1日～2021年3月31日		裁判傍聴や裁判所見学などを行い、裁判実務に対する理解を高める助力を行っている。			
演習におけるディベートの実施		2020年4月1日～2021年3月31日		演習においては、時事問題や法律問題について、報告者のレジュメによる報告に基づき議論を行うことで、報告の仕方や効果的なプレゼン方法を学び、ディベート力を向上させるための実践練習を行っている。今年度の前期は、zoomで行ない、後期は対面で行なったが、いつもと変わらないレベルで行うことができた。			
manabaのフル活用		2020年4月1日～2021年3月31日		manabaを通じて、講義動画や視聴させ、レジュメを配布し、小テスト機能やレポート機能を利用して、小テストおよび論述形式の課題小テストを実施した。今年度は、manabaなしでは授業を行えなかったこともあり、フル活用して、学生の便宜を図るように努めた。			
講義ノートの作成		2020年4月1日～2021年3月31日		講義および演習では、毎回講義ノートを作成し、授業進行速度の適否や学生の理解度などを記録することにより、授業の改善を図っている。			
小テスト問題による授業理解の定着		2020年4月1日～2021年3月31日		毎回の講義の最後に司法試験問題や司法書士問題から授業のまとめとなる問題を作成し、小テスト問題を実施した。次回の講義動画の冒頭で、前回の小テスト問題の解答および解説を加えることにより、学生自身が講義内容をどれだけ理解できたかを確認させ、知識の定着を図っている。			
板書を講義動画に取り入れた授業理解の促進		2020年4月1日～2021年3月31日		通常の講義であれば、裁判例や重要事項などを体系的に説明するために行う板書を、手書きで書きPDF化したり、図や記号などを多用したレジュメを作成して、文字だけではなく視覚的にも、学生の授業理解の促進を図った講義動画の作成を心掛けた。			
事例を多用した講義による授業理解の促進		2020年4月1日～2021年3月31日		オンデマンドによる授業であるため、より丁寧な授業内容を心がけている。具体的事例を多用し説明することで、抽象的な法律学を身近に感じさせ、理解を深める工夫を行っている。			
講義動画と詳細なレジュメの配布による授業理解の促進		2020年4月1日～2021年3月31日		オンデマンドでの授業であるため、講義動画を作成し、アップした。同時に、講義内容の重要ポイント、判例の解説、小テスト問題をまとめた、これまでよりも詳細なレジュメも作成し、アップして、授業理解の促進を図る工夫を行った。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
市民社会を生きるで利用するレジュメおよび講義動画		2020年4月1日～2021年3月31日		毎回の授業で、学生に考えてもらい、資料収集してもらい、考えをまとめてレポート作成および提出をしてもらうため、授業の前半は、問題提起に関する基礎的な解説および資料で作成したレジュメを準備し、それに沿った講義動画で授業を行う。アクティブラーニング科目であるため、学生へのレスポンスなどの資料を準備して丁寧に対応した。			
民事執行法講義におけるレジュメ		2020年4月1日～2021年3月31日		毎回の講義の際に、講義内容の重要ポイント、板書の図解をPDF化したもの、判例、小テスト問題をA4で10枚ほどにまとめたレジュメを配布し、それらを見ながら講義動画を視聴してもらい、授業理解の促進を図る工夫を行っている。			

民事訴訟法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの講義におけるレジュメ	2020年4月1日～2021年3月31日	毎回の講義の際に、講義内容の重要ポイント、板書の図解をPDF化したもの、判例、小テスト問題などをB4で10枚ほどにまとめたレジュメを配布し、それらを見ながら講義動画を視聴してもらい、授業理解の促進を図る工夫を行っている。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>					
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>					
体育会ライフル射撃部部長としての指導	2020年4月1日～2021年3月31日	体育会ライフル射撃部の部長として、サポートおよび教育面での指導を行っている。コロナ禍での活動について、慎重に行うよう学生と連絡をとりながら、平常時より手厚い指導を心がけた。			
現在の課題・目標	①より見やすいレジュメ作りを工夫する。 ②早口で話さなくて済むよう講義内容のボリュームを再考する。 ③飽きずに視聴してもらえるような講義動画の作成を工夫する。				
今年度の進捗状況	①視覚的にわかりやすいものを入れ込むことで、それなりのレジュメはできていた。 ②については、授業内容のボリュームの関係で、授業時間が長めになったものがあった。 ③については、初めて作成したので、工夫すべき点が多くあった。				
来年度の進捗目標	①内容や資料などにより工夫を加えて、さらに見やすいレジュメ作りができるようにする。 ②毎回の講義内容のボリュームを再検討して、安定した講義ができるようにする。 ③講義動画作成の準備にさらに時間をかけて、より充実した講義動画を作成する。				
<b>Ⅱ 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	①専門分野における研究を深化させ、その成果を論説として発表する。 ②研究成果を研究会で報告する。 ③教科書を作成する。				
今年度の進捗状況	①について、今年度は論文を完成させることができなかった。 ②について、今年度は研究会において論文発表することができなかった。 ③について、今年度は教科書の作成を完成させることができなかった。				
来年度の進捗目標	①現在研究中の論文執筆を進め、発表する。 ②研究論文を完成させ、研究会などで報告する。 ③教科書の作成を完成させる。 ④外部資金を獲得できるよう申請する。				
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要		
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>					
2013年4月～		民事手続法研究会会員 委員			
2004年4月～		九州法学会会員 会員			
1999年4月～		日本民事訴訟法学会会員 会員			
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>					

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	陶久 利彦	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
(1)遠隔方式授業への対応。(2)毎回の達成目標に併せて具体的事例を用いた、問題解決型学習の一層の浸透。(3)事前・事後の課題提出義務付けと、その積み重ねによる成績評価方法の実施。		2020年4月1日～2021年		(1)前期のTGベーシック科目「読解・作文の技法」では担当者3名に共通する動画をgoogle driveで一定期間閲覧してもらい、各担当者は履修生が提出する課題への全体・個別双方の対応に終始した。各履修生へのコメント等はmanabaを利用した。 (2)前期の専門科目「法哲学Ⅰ」では、毎回の達成目標に併せて具体的事例を用意し、問題解決型学習を前年度以上に強化した。ただ、履修者相互でその問題を議論する時間を取ることは、遠隔授業形式内で実施できなかった。 (3)演習を含め、すべての授業で事前・事後の課題提出を毎回課し、その積み重ねによって最終成績をつける方式をとった。そのため、学生からは負担加重であるとのクレームが寄せられたこともあった。ただ最終的には、授業内容の理解に大いに視するところがあつたとの授業評価アンケート結果が出ている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		科目の位置づけや受講者数などによって異なるが、次のように考えている。 (1)受講生が大学で勉学に関心を持ち、身近な事柄への視野を新たにし、自主的な問題提起と解決に向けた思考を磨くことを目指す。 (2)具体例を素材として、より原理的考察へと至る問題解決型授業を深化させる。 (3)担当授業科目ごとに達成目標を明確にし、履修生の現状から一歩でも先へと進めるような成果を身に着けさせる。					
今年度の進捗状況		(1)専門科目は受講者数が予想外に少なかったこともあって、教育上の課題を一定程度達成できたのではないかと考える。 (2)TGベーシック科目については、遠隔授業ゆえのプラスマイナス両面が現れた。共通動画以外の素材を提供する機会がなくなったマイナス面の一方、毎回の課題に対する私からの応答は前年度よりもきめ細やかになった。ただ、授業評価は一回答数が例年よりも下がっていることもあってか、若干下がっている。 (4)演習科目については、前期はzoomのみ、後期は対面とzoom併用であった。併用形式での授業運営は決して簡単ではなく、何度か通信環境でのトラブルに見舞われた。それでも、毎回事前・事後の課題提出やそれらへのコメントは、例年以上に丁寧に行うことができた。					
来年度の進捗目標		(1)遠隔授業が常態化すると、動画作成に一工夫をする必要がある。 (2)遠隔ゆえの利点を最大限に生かすような授業内容を工夫する。同時に、事前学習・授業・事後学習のサイクルがうまく回るように、それぞれの課題提出への対応を一層密にすることを心掛けたい。 (3)3年次の演習では、久しぶりに古典を輪読する授業を前期に展開した。受講者数の違いはあるものの、次年度ではその効果を検証したい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							



<b>I. 特許</b>			
現在の課題・目標	当面、2つの課題がある。一つは、出生前診断と中絶に関する論文のまとめである。二つめは、法学方法論に関連する諸問題への取り組みである。同時に、法哲学全体の総括を向こう数年の間にまとめたいと考える。		
今年度の進捗状況	2020年度は学部長任期中であった。新型コロナ感染症対策に追われ、前期はその体制整備に多大の時間を取られた。ようやく後期になって担当授業の進め方に慣れてきた面もあったが、依然として新型コロナ感染症が収まるわけではなく、研究の時間を当てる余裕がほとんどなかった。		
来年度の進捗目標	学部長職が2020年度で任期を終了する。2021年度は積み残した研究課題について、再び研究活動を活発化させたい。一つは「法と道徳」について、もう一つは「親が子を引き受ける論理」について私見を公にしたい。		
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
1977年11月～		日本法哲学会 会員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
2018年4月より、法学部長。2021年3月末で任期が切れる。			

2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	辻田 芳幸	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
高校生(受験生)向けの模擬講義の実施		2020年～		高校への出前講義(福島県立安積黎明高等学校)			
現在の課題・目標		①毎回の授業がそれぞれにどのように関連しているかを学生に理解させるように心がける。 ②演習科目はもちろんのこと、講義形式の授業であっても、できるだけ多くの学生と対話しながら理解度を確認しつつ進行するよう努める。					
今年度の進捗状況		①前回の授業および次回の講義予定を説明することで授業の関連性を説明できたほか、同時に講義内容を振り返ることになり、予習や復習のポイントを示すことができた。 ②対話式の授業は学生の理解度を知ることができて有益であったが、授業の進行がやや遅れた面があった。また、発言者は挙手した者から選んだので、結果的に発言者が偏ることになった。					
来年度の進捗目標		「今年度の進捗状況②」で示した問題点を克服できるような工夫をする。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
自己の名称の表示[小僧寿し事件]		単著	2020年7月	別冊ジュリスト248号『商標・意匠・不正競争判例百選』(第2版、有斐閣)、別冊ジュリスト248号『商標・意匠・不正競争判例百選』(第2版、有斐閣)		茶園成樹・田村善之・宮脇正晴・横山久芳(編)	pp.64～65 頁
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		知的財産法(とくに特許法, 商標法, 著作権法)の現代的課題が同法のどのような基礎理論に関連しているのかを明らかにしつつ, その基礎理論に関連して考察を行うこと。					
今年度の進捗状況		著作権法の基礎理論に関する論文を執筆できたので, 進捗したといえる。					
来年度の進捗目標		商標法の基礎理論に関連する論文を執筆すること。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
1996年6月～			工業所有権法学会会員 会員				
1994年10月～			日本私法学会会員 会員				

1992年5月～		著作権法学会会員 会員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
1.知財委員会 2.発明審査委員会 3.AO面接委員			

2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	富田 真	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
基本的な知識を確実にするための工夫		2020年4月5日～2021年3月31日		レジュメに基本知識に関する問題、具体的な事例を用いた設問を挿入することで、学生が自主的に予習・復習を行うことができるようにし、授業では前回の問題について質問をしつつ解説を行うことで、理解が定着するようにしている。更に、Semester毎に4回程度の小テストと併せてレポートを課題とすることで、自主的な学習を促すことにしている。			
刑事手続に関する規範構造を立体的に理解できるようなレジュメを作成する		2020年4月5日～2021年3月31日		レジュメに判例や学説を丁寧に記述するだけでなく、論点の意味、判旨、学説を丁寧に解説することで、解釈論の基礎を学ぶことができるように努める。特に最高裁判例については判例百選解説、最高裁調査官解説も掲載し、判例の意味をより具体的に理解することができるように解説をした。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 一方的な授業になるのを避けるため、基本的な事項について学生に質問しながら進行する。</li> <li>2 既に学習している重要な概念等についても繰り返し説明する。</li> <li>3 刑事訴訟法の解釈の上で重要な憲法や刑法の基本的な条文、用語等についても説明する。</li> <li>4 小テストを課すことにより理解が深まるようにする。</li> </ol>					
今年度の進捗状況		1～4については、授業で実践している。					
来年度の進捗目標		論述式の問題を活用することで具体的な事案から解釈論ができるようにすることで、法的思考力がつくようする。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 事実認定と判決理由に関する著書を公刊する</li> <li>2 訴因の基礎理論に関する著書を公刊する</li> </ol>					
今年度の進捗状況		<ol style="list-style-type: none"> <li>1について わが国の戦後の理論を整理する作業を継続する</li> <li>2について 戦前の学説を中心に理論を整理する作業を継続した</li> </ol>					
来年度の進捗目標		<ol style="list-style-type: none"> <li>1について 昨年度に続いてドイツの理論、判例についての研究を整理する</li> <li>2について 戦前から現在までの学説を包括的に研究する</li> </ol>					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	

<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2014年7月～		日本民主法律家協会 理事	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
2021年4月から法学部長に就任した。			

2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	中村 雄一	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
学部授業における学生の興味の喚起		2020年4月1日～2021年1月31日		本年度は、新型コロナの影響により、授業は前期・後期を通しオンデマンドでの遠隔授業となった。受講生の顔が直接見えないこともあり、講義動画の作成では困難な点もあった。学部授業では、担当科目が刑法・刑事政策といった科目であることから、まず当該科目に対する学生の興味・関心の喚起が重要であるという観点から、その時々起こった事件等の簡単な解説等を取り入れ、授業内容と現実社会の関連を意識できるように工夫している。			
演習科目における受講生に集中してもらったための工夫		2020年4月1日～2021年1月31日		新型コロナの影響のため、前期の演習はすべて、後期の演習も「基礎演習Ⅰ」を除きすべてZoomを用いた遠隔授業となった。演習科目においては、受講生の自発的な発言が望ましいが、必ずしも常にそのようになるとは限らない。そこで、従来テキストを読ませたり発言を求めたりする場合は、受講者名簿順や座席順に担当者を当てるが多かったが、それでは、自分の順番が過ぎてしまえば緊張感がなくなるといった傾向が見られた。そこで、数年前から、多少の遊び的要素も含めて、多面サイコロ(受講者の人数に応じ、20面、24面、30面等を使う)を使って、担当者を当てることにしたところ、受講生のほぼ全員が常に緊張感をもって演習に臨むことができるようになった。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>●講義科目や演習等のうち前年度と同様の科目については、おおむね前年度の反省を生かしつつ、さらに充実させることが現在の課題である。「法曹養成実習Ⅱ」(2年生対象)の担当時期が、昨年からそれまで、後期から前期となったことから、ほとんど刑法をまだ学んでいない受講生に対する授業となることから、初学者でもある程度理解可能な内容となるようにレジュメ・課題等を工夫することとした。</li> <li>●今年度から「市民社会を生きる」を担当することになったため、授業の進め方、レジュメの作成等の準備を行った。</li> <li>●講義科目においては、定期試験を廃止し、数回のレポート提出により評価を行うこととしたが、受講生の学力向上を目指し、さらに工夫を加えることをけんとうする。</li> <li>●授業において、学生が興味・関心をもてるような導入を工夫する(例えば、時事的な刑事事件とその日学ぶ内容の関連付け等)。</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>●新型コロナの影響もあり、講義科目については、15回のレポート提出により、受講生の成績評価をしているが、レポートを重ねるにつれて、形式的にも、内容的にも、レポートとして充実してくる学生も増えつつある一方、教科書やレジュメの該当部分のほぼ丸写しや、ネット上の記事のほぼ丸写しでレポートを提出してくる学生もかなり見受けられ、工夫が必要と感じている。</li> <li>●学生が自発的に考え学ぶ授業の工夫については、演習科目ではある程度成果を上げているといえるが、講義科目に関してはさらなる工夫が必要である(たとえば、1回の授業で当日予定の項目が終わらず、次回に持ち越しということがないような工夫)。</li> <li>●学生が興味・関心をもてる授業の導入等はある程度成果を上げている。</li> <li>●manabaを使って授業のレジュメを配布しているが、レジュメの閲覧履歴が必ずしも多くないという問題もある。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>●来年度は、刑法に関しては、「刑法各論」から「刑法総論」に担当が代わる(2年ごとに代わっている)。「刑法総論」、「刑事政策」という講義科目においては、評価方法の工夫を行う予定である。それは、①レポートの課題については、文献やネット上の記事の丸写しができないように、刑法ではとくに最終回のレポートでは、簡単な事例形式の問題とし、刑事政策でも、簡単に検索ワードでネット上の記事が探せないような考えさせる問題とする等の工夫をする、②事前にレポートの評価基準を明確に示し、事後の簡単な講評を行うといったことを予定している。</li> <li>●すべての科目で、成果を評価するにあたり、できるだけ、客観的で、説明しやすい方法(ルーブリック等を用いて)を試みているが、ルーブリックについては、まだ工夫の余地があるので、改善を試みる。また、レポート等の受講生へのフィードバックをしっかり行う。</li> <li>●学生が興味・関心をもてる授業の導入については、さらに、学生自身にもかかわりのある出来事に関する意識を持たせ、実際に社会で起きている事件等につき、正確で分かりやすい解説を行う等の工夫をする。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	①刑法の判例・裁判例の新しい動向の研究 ②間接正犯における「規範的障害」の研究 ③いわゆる離隔犯における実行の着手時期および未遂犯の処罰の研究				
今年度の進捗状況	①については、法学部・法学研究科の教員として欠かせないので常に気を配っている ②については、このテーマでの論文執筆のために文献を収集している ③については、今年度このテーマで論文をまとめようとしたが、諸般の事情でできなかった				
来年度の進捗目標	①については、法学部学生、法学研究科院生、法務研究科修了生の指導上重要なので、継続する ②については、論文にまとめた ③については、すでに資料の読み込みはほぼ終了しているので、論文にまとめた				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動					
1. 法学部キャリアアップ支援委員会委員 2. キャリアアップ支援委員会法律関係専門職小委員会委員 3. 法学部卒業試験実施委員会委員					

2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	三須 拓也	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
メールおよびmanabaでの掲示板を通じた授業改善。		2017年4月1日～		講義科目「国際政治論I・II」「現代の政治」「クリティカル・シンキング」「平和学」で実施。講義の際に、学生からの改善要望を募ることを心がけている。2回～3回の小テストを実施し、講義の効果を測るとともに、学生の習熟程度に応じた講義内容の微修正を行った。			
小テスト、リアクション・ペーパーを通じた授業改善。		2017年4月1日～		講義科目「国際政治論I・II」「現代の政治」「クリティカル・シンキング」「平和学」で実施。講義の際に、学生からの改善要望を募ることを心がけている。2回～3回の小テストを実施し、講義の効果を測るとともに、学生の習熟程度に応じた講義内容の微修正を行った。			
映像を用いた学習効果の向上		2017年4月1日～		講義科目「国際政治論I・II」「現代の政治」「クリティカル・シンキング」「平和学」において実施。図説だけでは説明しにくい箇所を動画を用いつつ説明したところ、以下の改善がはかれた。(1)学生からのリアクション・ペーパーで、理解できなかった箇所を具体的に理解できた、とのコメントを貰った。(2)また映像データの一部をインターネットなどで閲覧できるようにし、学生の自学自習に役立たせることができた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
文章作成、就職活動支援		2017年4月1日～		主に4年生向け演習で実施。希望者に限定されるが、就職活動中の学生の文章力向上の指導を行った。具体的には、エントリーシートや志望理由書などのチェックを行った。狙いは学生が自分の言葉で志望動機などをまとめられるようにすることにある。副次的効果として、教員が学生の就職活動の進捗状況を知ることで、適切な指導を行えた。			
演習での共同研究の実施。		2017年4月1日～		3年生、4年生向け演習科目で実施。2020年度東北学院大学学生懸賞論文の応募に向けて、学生が主体となった共同研究を実施した。今年度のテーマは3年生が「コロナ後の大学教育を展望する」、4年生が「経済格差と教育格差について」であった。最終的には、プレゼンテーション用データと報告用原稿(約1万字)を作成する。			
現在の課題・目標		メールなどを通じて学生の要望に柔軟に対応できるように心がけている。特に就職活動中の4年生に対して、就学上のアドバイスを適宜与えるようにしている。またmanabaを通じた双方向学習にも取り組んでいる。					
今年度の進捗状況		アンケート等の結果から判断して、学生の満足度は概ね良好のようである。					
来年度の進捗目標		学生にわかりやすい講義プリント等を作り、細かな改善を図りたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
討論者「アフリカ分科会・国連研究分科会」	単独	2020年10月	日本国際政治学会2020年度研究大会(不明)	不明			



研究報告者「部会2『帝國的秩序の崩壊と西側同盟関係』」	単独	2020年10月	日本国際政治学会2020年度研究大会(不明)	不明	
-----------------------------	----	----------	------------------------	----	--

#### H. 翻訳(学術書や原典等)

#### I. 特許

現在の課題・目標	国内外を問わず、冷戦史、国連史研究の専門家との共同研究を実施、継続する。研究成果を論文、学術講演、学会報告などを通じて公表する。
今年度の進捗状況	本年度は研究の基礎作業を中心に行った。コロナのため予定していた海外調査が出来なかったため、今年度は入手済みの米国、英国政府史料の分析に集中した。また研究成果の一部は、日本国際政治学会の研究大会で報告した。
来年度の進捗目標	研究成果を様々な媒体を通じて発信する。

#### Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 基盤研究(A)	2017年度～2020年度	(研究分担者)	本研究は、いわゆるグローバル化として知られる世界的な規模の変化と、デタントの動揺から1980年代初頭の新冷戦に至る冷戦秩序の変化の間にいかなる関係があったかを問いかけることで、冷戦期に形成された国際秩序が冷戦終焉に向けて変容し始める過程を実証的かつ総合的に解き明かすことを目的とした。本研究はその成果として、1970年代半ば以降に進行したグローバル化が西側諸国を変質させ、東側諸国を衰退させ、第三世界を解体し、世界を一つの新自由主義的潮流に飲み込むことによって、デタントから新冷戦にいたる時期の冷戦対立の帰趨に決定的な影響をもたらしたことを明らかにした。

#### Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2004年12月～	日本アメリカ史学会 会員
1996年6月～	日本国際政治政治学会 会員

#### V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

#### Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

1. 学生部副部長
-----------

2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	宮川 基	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
manaba, zoom, googledrive, youtubeを利用して, 遠隔授業を実施した。		2020年		manaba, zoom, googledrive, youtubew利用した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
法学の基礎, 刑法総論Ⅰ・Ⅱ, 日本法と外国法においてレジュメを作成した。		2020年4月～2021年1月					
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
「入れ墨をめぐる刑事規制の歴史」小山剛・新井誠編『イレズミと法—大阪タトゥー裁判から考える』	単著	2020年11月	尚学社, 尚学社, 尚学社	小山剛・新井誠 編	pp.62頁～90頁		
「JKビジネス規制条例の紹介」小山剛・新井誠・横大道聡編『日常のなかの〈自由と安全〉—生活安全をめぐる法・政策・実務—』	単著	2020年7月	弘文堂, 弘文堂, 弘文堂	小山剛・新井誠・横大道聡 編	pp.133頁～145頁		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
「電子計算機使用詐欺罪(3)—東京高裁平成24年10月30日判決—」佐伯仁志・橋爪隆編『刑法判例百選Ⅱ各論[第8版]』	単著	2020年11月	有斐閣, 有斐閣	宮川 基	pp.122-123		
「包括一罪か併合罪か(1)—最高裁平成26年3月17日第一小法廷決定」佐伯仁志・橋爪隆編『刑法判例百選Ⅰ総論[第8版]』	単著	2020年11月	有斐閣, 有斐閣	宮川 基	pp.204-205		
JKビジネス規制条例の紹介	単著	2020年7月	弘文堂, 小山剛・新井誠・横大道聡編『日常のなかの〈自由と安全〉』	宮川 基	pp.133-145		
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
入れ墨をめぐる刑事規制の歴史	単著	2020年11月	尚学社, 小山剛・新井誠編『イレズミと法』	宮川 基	pp.62-90		
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							

最高裁判所令和2年8月24日第二小法廷決定・裁判所時報1750号3頁の報告	単独	2021年1月	2020年度第3回刑事法判例研究会(2021年1月23日(土)午後2時～), Zoomでのオンライン形式(不明)	不明	
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	法学の基礎の教科書の原稿を完成させる。				
今年度の進捗状況	法学の教科書の原稿を執筆中である。				
来年度の進捗目標	法学の教科書の出版・刊行。 非行集団結成等罪に関する論文の完成。				
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>					
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>					
法学部研究室委員として, 土樋キャンパス総合研究棟への法学部教員13名の研究室移動を担当した。 就職キャリア支援委員の業務を遂行した。					

2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	横田 尚昌	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
菊地雄介ほか著『レクチャー会社法(第2版)』(2019年、法律文化社)「第4章 株式」を分担執筆		2020年					
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・担当科目の授業においては、基本概念を念入りに説明する方向性は維持しつつも、もっと端的にメリハリのある説明の仕方を工夫する。</li> <li>・学生が授業について来ることができないのか、ついて来ようとしていないのかを見極める工夫(小テストやアンケート)を試みながら、効率の良い授業が行えるように努める。</li> <li>・学生らが、彼らなりに一生懸命勉学に励もうとしている姿勢のあることを酌み取る努力を通して、どのような学生も決して悔えることの出来ない優れた面があることへの認識を深める。併せて、学生らにも、他人を見下したり小馬鹿にしたりするのは、自分に自信が持てないことの裏返しであることを、わかってもらえるようにする。</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎回の授業ごとに達成目標を設定し、これを授業の冒頭で示す。その際、今日学ぶことが一体どこでどのように役立つのかを具体的に説明する。そして、基本となる概念と知識のポイントをしっかりと理解してもらえるように解説を行った。</li> <li>・授業のわかりやすさ等については、各論点の解説の際に、まず結論を先に示し、なぜそのような結論が導かれるのかを説明していくという順序で行う工夫をした。また、レジュメを充実させた。</li> <li>・就職をめぐる学生からの相談については懇切に対応したが、よい内定先が得られたというのは、ひとえにその学生自身の心構えと努力によるものであって、教員の指導の成果によるものではないことを認識するように努めた。</li> <li>・組織の中で同僚の信用を低下させるような悪口を言っていると、組織力が低下し競争力が鈍ってしまうことを(主としてゼミ生に)折に触れて話した。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生が、授業の内容を体系的に理解できるようにするために、基本概念の定着を促す工夫をさらに行う。</li> <li>・レジュメを充実させる。</li> <li>・授業にかんする学生からの質問や要望について懇切に対応することはもとより、折に触れての学生との話し合いを通じて、学生が能動的な学修のスキルを身につけていけるような授業および演習の運営の在り方について考えていく。</li> <li>・就職活動については、しっかりと学生生活を送ることがしっかりと就職につながることを学生に理解させる仕方を工夫する。また、学生が社会的に自立しようとする動機づけの機会をなるべく多く提供できるように努める。</li> <li>・たとえば学生が企業の採用面接を受けたときに、もし授業の内容について質問があっても、学生が端的にその要点が答えられるようにするべく、ポイントの明確なメリハリのある授業の提供に努める。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
『注釈モンリオール条約』(2020年、有斐閣)全604頁『注釈モンリオール条約』(2020年、有斐閣)全604頁		共著	2020年12月	有斐閣、有斐閣、有斐閣		藤田勝利＝落合誠一＝山下友信編	pp.モンリオール条約47条及び同条約49条の各条注釈を分担執筆
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・傷害保険における保険金支払要件である事故の偶然性、外来性および急激性の相互関係について考察する。</li> <li>・最近、各社各様に改定が進められている生命保険契約の災害関係割増特約約款について考察する。</li> <li>・判例・通説は、第三者のためにする生命保険契約の保険金受取人は、その指定がなされるのと同時に保険金請求権を同人固有の権利として原始取得すると解するが、その保険事故発生前における保険金請求権とはどのような法的性質を有するのかについて考察する。</li> <li>・会社法の株式の規定に係る裁判例の解釈について検討する。</li> </ul>		
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・故意による事故招致と事故の偶然性との関係および疾病による死亡と事故の外来性との関係について、最判平成19年7月6日の判例解釈によれば、何が事故を発生させた作用(直接原因)であり、その作用を惹起した理由(間接原因)は何かというがまず問題となる。しかし、直接原因も、間接原因もともに被保険者の傷害との間に相当因果関係があるといえるならば、両原因の峻別は難しいのではないかと、という考え方が、吐物誤嚥事故の検討を通じてみえてきた。</li> <li>・生命保険契約の災害関係割増特約約款の改正が、保険事故の定義やその性質に影響を及ぼす可能性があると考えられる点について論点整理をした。</li> <li>・研究会での議論を通じて、第三者のためにする生命保険契約と一般の第三者のためにする契約との違いについて整理を進めることができた。</li> <li>・民法(債権)改正の保険法解釈への影響について、研究者らと意見交換する機会に恵まれた。</li> </ul>		
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・傷害保険金請求権成立の要件要素である保険事故の偶然性と外来性との関係について、被保険者の傷害の直接原因と間接原因との区別に着目して考察する。</li> <li>・保険契約の射伴契約性の観点から、保険事故発生前の保険金請求権の法的性質について更に考察を進める。</li> <li>・会社法の株式の規定に係る裁判例の解釈と学説の流れについて、整理し考察する。</li> </ul>		
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
IV 学会等及び社会における主な活動			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
管理職としての活動なし			

2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	准教授	氏名	加藤 友佳	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
家族と租税法～これからの家族と税制の考察～『家族と租税法～これからの家族と税制の考察～』	単著	2021年3月	中央経済社, 中央経済社, 中央経済社	不明	pp.不明		
『多様化する家族と租税法』	単著	2021年3月	中央経済社, 中央経済社, 中央経済社	不明	pp.264頁		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
取引相場のない株式の譲渡と所得税法59条1項「その時における価額」の判定方法	単著	2020年8月	判例秘書HJ100079, 判例秘書HJ100079	不明	pp.44204		
多様化する家族と税制の対応	単著	2020年6月	租税法研究48号, 租税法研究48号	不明	pp.44212		
租税条約における芸能人・運動家条項	単著	2020年4月	国際商事法務48巻4号, 国際商事法務48巻4号	不明	pp.512-517		
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
米国事業体の性質と法人該当性	単著	2021年3月	東北学院法学第81号, 東北学院法学第81号	不明	pp.83-120頁		
法人税法と知的財産権についての考察(上)(下)	単著	2021年2月	特許ニュース, 特許ニュース	不明	pp.15354号1-8頁、15355号1-8頁		
取引相場のない株式の評価と最近の判例	単著	2020年11月	租税研究853号, 租税研究853号	不明	pp.63-96		
芸能人・スポーツ選手の知的財産権と課税(上)(下)	単著	2020年4月	特許ニュース15145・15146, 特許ニュース15145・15146	不明	pp.1-8 1-8		
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
租税法における通達解釈と法規性	不明	2021年3月	税務大学校 第2回税務研究会(不明)	不明			
判例報告:福岡高裁令和1年7月31日判決	不明	2021年1月	法務省 租税判例研究会(不明)	不明			
多様化する家族と法政策～税制を中心に～	不明	2020年9月	法政策研究会(不明)	不明			

取引相場のない株式の評価と最近の判例	不明	2020年8月	租税研究協会会員懇談会(不明)	不明	
判例報告:最高裁令和2年3月24日第3小法廷判決	不明	2020年6月	租税判例研究会(不明)	不明	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要		
IV 学会等及び社会における主な活動					
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
VI 学内における管理運営に関する諸活動					

2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	准教授	氏名	三條 秀夫	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
専門用語、基礎概念習得の促進		2020年4月1日～		専門用語とその意味内容を理解させるために、その都度概説を加えている。さらに理解を深めるために、受講生に対して自分で専門の辞書やテキストで調べたことを次回の講義出席の際にレポートとして提出することを求めている。			
学習した事項へ記憶の定着と授業内容理解の促進		2020年4月1日～		毎回の講義終了時に、講義まとめとして内容要点を整理しつつ再度説明を加えている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
向山高校「アカデミック・インターシップ(探求学習活動)」の指導に従事した他、同校にて出張講義を行う。		2020年10月1日～2020年10月20日		アカデミック・インターシップとして、生徒が関心を持った社会的諸問題(コロナウイルス対応の法制、若者が働きやすい社会形成)について法的論点から指導した。模擬講義では「大学で法を学ぶということ」と題して講義を行った。			
現在の課題・目標		自主的に関心事を見出して探求する姿勢が乏しいので、まずは、大学生としての学びを習得させるために、事前学習・講義・事後学習の要点と方法を学ばせ、習慣化させる。					
今年度の進捗状況		事前学習内容を具体的に指示することから着手し、習慣化を促進しようとした。					
来年度の進捗目標		事前学習ポイント・事後学習ポイントを学生自らが発見して展開できるように指導すること。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		1)「法人類学の基礎的視点」をまとめること 2)一般大衆向けの「人権読本」をまとめること					
今年度の進捗状況		1)については、基本構想がまとまりつつある 2)については、構想案を検討中である					
来年度の進捗目標		1)については、概要スケッチを形にしたい 2)については、具体的な構想をまとめたい					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要			
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							



2021年2月	医療現場における人権問題 講師		
2015年4月～	宮城県人権教育指導者研修事業(企画委員、研修講師) 委員		
2015年4月～	宮城県気仙沼市情報公開・個人情報保護審査委員会(会長) 委員		
1996年5月～	宮城県人権教育指導者養成事業・企画推進委員会('97年より委員長) 委員		
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	准教授	氏名	玉井 裕貴	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
入門講義における興味・関心の喚起		2020年		<p>「法学部生入門」では、法学学習をスタートさせる学生がスムーズに学習を進行させることができるよう、上級生がつまづいている内容についてインタビューを行った上で、それを重点的にフォローする形で、講義を構築した。</p> <p>「民事手続法入門」では、学問分野の全体像を示すという講義目的に加え、3年次以降の関連科目にスムーズに取り組むことができるよう、言葉の定義などは、特に入念に講義するようにし、多くの受講生が着実にステップを踏むことが出来るよう留意した。また、モデルケースや、訴状サンプル、フローチャートなどを多用し、受講生の興味・関心を喚起することに努めた。</p>			
学習内容理解の促進を図る		2020年		<p>報道等で話題となった事件や、教科書事例などを多用し、概念や制度の理解の促進を図っている。また、法技術的側面の強い内容の説明に際しては、板書の方法を工夫したり、学生がメモをする上での留意点などを説明した上で解説を行うなど、精確に理解することができるよう工夫している。</p> <p>また、各単元終了毎に復習問題を作成・配信し、各自自習できるような工夫を行った。</p>			
学習内容の体系的理解を図る		2020年		<p>各回の講義冒頭に、前回の講義内容の復習を兼ねたまとめを行っている。また、その回で解説する内容の全体像を概説し、各回講義の位置づけを明確化することで、講義内容の理解を促している。</p> <p>カリキュラム変更に伴い、他科目との連携がやや取りづらくなったため、必要な場合は、他科目で説明されるであろう内容の概略についても可能な限りで指摘しつつ説明するよう心がけている。</p>			
遠隔授業の対応		2020年		<p>動画講義の作成、オンライン講義、ハイブリッド型講義の作成・改善を行った。LMS (Manaba) のみならず、そのほかのWebベースのサービスなどを活用し、より効率的かつ学習効果の高いと思われる方法論を模索している。特に大人数受講の講義においては、動画(オンデマンド)講義のため、動画として提供するメリットを最大限活かすことができるよう、講義内容・表現方法を適宜見直した。</p>			
演習の運営の改善		2020年		<p>基礎演習Ⅰ・Ⅱでは、法学学習の基礎力を錬成するとともに、学生が大学における学習をより充実させることができるよう、比較的身近な社会問題をテーマとしてディベートを実践させた。その際、情報収集の方法、主張・反論の組み立て方、レジュメ作成方法などについて、解説と実践を織り交ぜながら、学生が自主的に取り組めるように工夫した。さらに、レポート・論文の作成にディベートの経験を繋げられるよう、説明の方法を適宜見直した。</p> <p>現行カリキュラムから、演習二部が実質的に必修化された関係で、従前から行っていたゼミ論の指導をより体系的に行うことができるように、計画を見直した。これにより、通常の学生であれば無理なくゼミ論文を作成できるようになったものの、教員側の負担増加は否めないため、より効率的な方法論を考える必要がある。</p>			
演習における基礎力の錬成		2020年		<p>基礎演習Ⅰ・Ⅱでは、法学を学び始めたばかりの学生が直面する困難について、基礎的な内容を概説した後、それに関連する内容を、グループや個人で実践させることで、概説した内容を体得できるよう、演習内容を構築した。</p> <p>昨年度に引き続き、事前の予習の実質化のため、各自が予習内容を事前に提出させる形のシステムの改善・改良を加えたほか、各取り組みにおいて、フィードバックまで行わせ、通常の学生であれば、基礎的な力が定着するような授業設計に努めた。</p>			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
『民事手続法入門—講義ノート—(第2版)』(自費出版、2020年)の出版		2020年		<p>昨年度制作した『民事手続法入門—講義ノート—[補訂版]』を改版(自費出版)した。2019年の民事執行法改正についての内容の折込み、ならびに、学生からのフィードバックをもとに、改訂を行った。</p>			

『法学部生入門—法学学習メソッドを学ぶ—』(自費出版、2020年)の出版。	2020年	本年度から担当することとなった「法学部生入門」のテキストを自費出版した。			
『倒産法—講義ノート—』(自費出版、2020年)の出版	2020年	現在担当している倒産法の講義に使用するテキスト(自費出版)を作成した。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>					
2020年度第1回法学部・法学研究科FD研修会における報告	2020年4月24日	法学部・法学研究科FD研修会において、遠隔授業に関する報告を行った。			
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>					
現在の課題・目標	①授業時間外での学生とのコミュニケーションの時間を大切に、学生からの様々な相談に応じる。 ②より学生が興味を持つような授業の構築を行う。 ③演習科目の実践内容を充実させる。				
今年度の進捗状況	①ゼミ生のみならず多様な学生との交流機会に恵まれ、学生ニーズの把握に大きな進捗があった。 ②講義内容のスリム化・興味関心が向くような形で説明方法の変更により一定の方向性はつけることができた。 ③専門演習については運用が安定してきた。基礎演習については、今一度学生のニーズを把握しながら講義・実践内容の再構築を図っている。				
来年度の進捗目標	①来年度以降も、オフィスアワーの設定、課外活動への引率参加を積極的に行い、学生とのコミュニケーションを充実させ、教育活動に活用する。 ②学習内容のボリュームやバランスを見直す。 ③演習科目について、全ての受講生が、何らかの形で主体的に関わることが出来るよう、仕掛け作りを引き続き考える。				
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>					
『中島弘雅＝玉井裕貴「調査委員[533条-534条]」、「清算株式会社の行為の制限[535条]」、「(特別清算の終了[573条-574条])」』	単著	2020年4月	未記入、『逐条解説会社法(6)計算等・定款の変更・事業の譲渡等・解散・清算：第431条～第574条』	酒巻俊雄、龍田節、上村達男、片木、晴彦	pp.531-554、671-686
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>					
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>					
小規模個人再生における清算価値保障原則—東京高決平成22年10月22日判タ1343号244頁—	単著	2021年1月	倒産判例百選[第6版]、倒産判例百選[第6版]	松下淳一＝菱田雄郷編	pp.196-197
裁量免責の判断枠組み—平成26年3月5日(判時2224号48頁)—	単著	2021年1月	倒産判例百選[第6版]、倒産判例百選[第6版]	松下淳一＝菱田雄郷編	pp.215
話し合ってたたむ特別清算—ワニは死して皮を留め、会社は死して名を残す	単著	2020年10月	法学セミナー(790号)、法学セミナー(790号)	玉井裕貴	pp.22-27
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>					
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>					
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>					
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>					
<b>G. 学会における研究発表</b>					
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	①研究分野に関する論文をまとめる。 ②他の研究者との学術上の交流を進める。 ③研究領域の拡大を図る。				
今年度の進捗状況	①研究分野を広げ論文の執筆・公表に至った。 ②研究会に積極的に参加した。研究活動の人的広がりは一定程度得られた。 ③比較法についてはやや進捗が鈍化しているが、国内法研究については一定程度すすめている。				

来年度の進捗目標	①引き続き、研究成果を論文にまとめることができるよう研究を継続する。なお、一定程度の進捗があった場合には、研究会での報告等に積極的に参加する。 ②引き続き研究会に積極的に参加し、研究をすすめる。 ③資料収集を進め、これまでの研究成果との関連性を意識しつつ、研究をすすめる。		
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2019年4月～		利府町 個人情報保護審査会委員	
2019年4月～		利府町 情報公開審査会委員	
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	准教授	氏名	内藤 裕貴	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①学生が授業でのシラバス上の到達目標を達成できるような教材作りを目標とする。 ②授業後の質問や回収した小レポートを通じて、学生がどのような点を理解しづらいかを把握する。					
今年度の進捗状況		①シラバス上の到達目標を達成する一助となるような教材を作成できた。 ②学生が理解しづらい箇所を部分的ではあるが、把握することができた。 ③学修の補助となるスライドを作成した。					
来年度の進捗目標		①今年度の進捗状況や授業アンケートを通じて、今年度より良い教材づくりや授業設計をしていきたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
任期短縮の定款変更により退任した取締役の不再任に係る「正当な理由」『任期短縮の定款変更により退任した取締役の不再任に係る「正当な理由」』		単著	2020年9月	新判例解説・Watch ◆商法 No.134, 新判例解説・Watch ◆商法 No.134, 新判例解説・Watch ◆商法 No.134		不明	pp.1頁-4頁
取締役会に代表取締役の選定・解職に係る裁量を認め、解職決議が有効とされた事例『取締役会に代表取締役の選定・解職に係る裁量を認め、解職決議が有効とされた事例』		単著	2020年8月	経済法令研究会、金融商事判例1597号, 経済法令研究会、金融商事判例1597号, 経済法令研究会、金融商事判例1597号		不明	pp.2頁-6頁
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
早稲田大学商法研究会における判例報告 論題:一人株主の同意がある取締役の行為について善管注意義務違反を否定した事例(東京地判平成31年3月22日判タ1474号249頁)		不明	2021年1月	不明(不明)		不明	
東京商事法研究会における研究報告 論題:任期短縮の定款変更により退任した取締役の不再任につき「正当な理由」があるとされた事例(名古屋地判令和元年10月31日金判1588号36頁)		不明	2020年9月	不明(不明)		不明	
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		ドイツ法を比較対象として、株主代表訴訟についての研究を深化させる。					
今年度の進捗状況		博士(法学)の学位を取得することができた一方で、株主代表訴訟に関する研究に着手することができなかった。					
来年度の進捗目標		株主代表訴訟に関する学術論文を公表する。					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
競争的資金等の外部資金による研究 一般社団法人 日本内部監査協会 研究助成金	2017年度～2019年度	個別(研究代表者)	内部統制システム構築局面における取締役の裁量の範囲—ドイツ株式会社法における監督システム構築義務の議論を手掛かりとして—
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2019年5月～		日本海法学会会員 会員	
2016年4月～		日本私法学会会員 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
キャンパス禁煙推進委員会			

2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	准教授	氏名	羽田 さゆり	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年 月 日 (西 暦)		概 要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)</b>							
ゼミ活動において学習させる工夫		2020年4月1日～		基礎演習 I II・演習一部において、学生が発表を行う前に事前に時間をかけて説明をし、レジュメの例を示し模擬発表も行うことによって、発表すべき内容や方法について理解を深めさせるように努めている。			
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2020年4月1日～		レジュメを毎回作成している。授業の冒頭にその回の概略を記載して示し、前回の復習を必ず行い、レジュメの最後には、授業終了後にその回のまとめを自習できるよう穴埋め式の箇所を設けている。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
講義用レジュメ・動画		2020年4月1日～		担当講義のレジュメを作成し、パワーポイントによるスライドを動画にして毎回作成し上映している。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
高校への出張講義		2020年4月1日～2021年3月31日		聖光学院(9/10)・郡山商業(10/14)・東北高校(2/17)・東北学院高校(2/24)において出張講義を行った。			
現在の課題・目標		1, 分かりやすいレジュメを作成するとともに、パワーポイントを用い講義の効果を高める。 2, 高い目標を持つ学生に対する指導方法を工夫する。 3, 演習におけるレベルの違う学生への対処を適切に行う。					
今年度の進捗状況		1については、レジュメ配布・パワーポイント動画の工夫を昨年に引き続き行った。小テスト実施については、manabaシステムを活用し、概ね問題なく行うことができた。成績も全体的に向上したように思う。 2については、法曹養成実習 II における指導に注力した。ただし、効果は限定的であったように思う。 3については、今年度は法科大学進学を目指せるレベルから単位取得が困難なレベルまで差が大きかった。ハイレベルの学生がそうでない学生とチームを組んだ時には円滑だが、やる気や能力が欠けている学生は連絡すら取れずに苦勞した。遠隔授業では、連絡が取れない・連絡を無視する学生を相手にすることとなり、指導が特に困難であった。MyTGを通じての連絡手段が確立しているかを再確認する必要がある。					
来年度の進捗目標		1について、レジュメ・スライドの工夫は一定の評価を得ているようであり今後も継続する。来年度は動画作成技術のさらなる向上を図る。 2について、法曹養成実習 II の担当を外れたため、法科大学院進学指導を意識する必要が減じた。他方で、manabaを活用してオンラインで学ばせる工夫の必要性が増したため、「manabaを活用した課題について、オンライン学習に適した内容・実施方法・成績評価方法を工夫する。」に変更する。 3について、今後も継続することとし、さらに遠隔授業におけるより良い指導方法という観点からも探求したい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月 (西 暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文 (審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文 (審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー (専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー (専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評 (専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
孤児をめぐる財産管理上の諸問題		単独	2021年3月	台湾家事法學會110年春季研討会「災後子女權益研討會」(不明)		不明	
<b>H. 翻訳 (学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							

現在の課題・目標	1, 消費者問題研究を進める。 2, 「震災と子ども」研究を進める。 3, 財産管理制度の研究をする。		
今年度の進捗状況	1については、「消費者市民ネットとうほく」の検討委員として、取引の法的問題点の指摘や業者への申し入れ案の作成に携わっているところである。 2・3については、3月に台湾家事法学会において研究発表を行った。		
来年度の進捗目標	1については、「消費者市民ネットとうほく」の活動に加え、美容医療に関する論文の執筆を行う予定である。 2については論文の書籍化を進める予定である。 3として、「葬儀・祭祀に関わる契約トラブルの研究をする。」を付け加える。		
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2021年1月～2022年12月		宮城県青少年問題協議会 委員	
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
1.入試委員会 2.体育会副会長			



2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	准教授	氏名	松浦 陽子	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
学習発表の機会(ゼミ)		2020年4月～		一つの論点や事例研究について、文献講読とプレゼンテーション・ディベート・ディスカッションなどの学習発表を組み合わせることにより、研究を深め、かつ、参加者同士の議論を促している。			
文献講読(ゼミ)		2020年4月～		ゼミでの研究に関連する学術書の講読をすることにより、学生が文章を批判的に読み、興味関心を深めるよう配慮している。			
レジュメ配布による学習事項の確認(講義)		2020年4月～		毎回の講義内容をmanaba上にアップデートし、学生に配布した。レジュメでは、参考文献を参照できるように注を付し、学ぶ意欲のある学生が自発的に学習しやすいよう配慮している。また、時事問題を積極的に取り入れ、新たな国際社会の問題を国際法の視点で学習できるよう配慮している。			
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進(講義)		2020年4月～		授業の冒頭で前回の学習とのつながりを確認し、新たな項目へと進むことにより、学習事項の学問的位置づけを明らかにする。その上で学習事項を時事問題や身近な例に例えて説明することで、記憶への定着と理解の促進を図っている。今年度のオンデマンド方式での講義においても、同様である。			
演習二部における卒業レポートの指導		2020年4月～2021年3月		演習二部においては、学生個々人の研究を深めさせるために、卒業レポートの作成を指導し、完成させた。最終的には卒業レポート集にまとめた。			
小テストに基づく評価の導入(講義)		2020年4月～2021年1月		今年度はオンデマンド方式による講義であったために、毎回の授業で小テストを実施し、知識の確認と定着を促した。小テストに基づく評価を導入することにより、それぞれの学生の理解度に応じた教育と評価ができるよう配慮している。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
講義で使用するレジュメ等		2020年4月～		レジュメには毎回の講義概要を掲載し、重要項目を穴埋めにするなどの工夫をしている。また、毎年情報を更新し、脚注を付けて典拠および参考文献を明示することで、学生が主体的に調べやすいよう配慮している。このレジュメはmanaba course上で配布した。			
オンデマンド授業で使用するビデオ動画		2020年4月～2021年1月		毎回の動画は、長時間の視聴を避けるため、二つから三つのビデオ動画を作成し、学生には適宜休憩の時間を与えた。ビデオ動画では、ビデオの利点を生かし、ビジュアル的に理解しやすいよう、時事問題に関する映像や画像を多く取り入れた。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
学生による相談への対応		2020年4月～2022年3月		教務委員であったこともあり、法学部勉強質問メールへの対応(質疑応答および担当教員への連絡等)(通年)、新入生オリエンテーションに関連しては、学生の遠隔授業対応のためのLINEビジネスを用いた質疑応答(4-5月)、manabaでの個別の質問に対する対応にあたった。			
<b>現在の課題・目標</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>①授業やゼミでは、わかりやすく、かつ、学術的意味のある説明を心がける。</li> <li>②学生の学問への主体性を引き出すために、授業方法を工夫する。</li> <li>③授業時間外での学生との学習に関するコミュニケーションのため、オフィスアワーにかかわらず学生の相談に乗る。manaba courseの効率的な利用を進める。</li> </ul>					
<b>今年度の進捗状況</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・上記目標①については、毎時間講義録を見直し、時事問題を差し挟むなどしてわかりやすさを工夫し、同時に、最新の研究をチェックして学術的意味のある説明になるようにしている。特にゼミでは、一次資料を読む機会を増やした。また、学生の理解促進のために、視覚的に映像教材を利用した。</li> <li>・上記目標②については、授業内で学生の主体性を引き出すために、レジュメに参考文献を記している。ゼミでは、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッションなどの企画を学生が主体的に企画するよう促してきた。また発言しやすい空気を創るため、お茶会やお食事会など、直接学習には関係がないと思われる活動も積極的に行った(今年度は特に感染症対策に配慮しながら実施した)。</li> <li>・上記目標③については、オフィスアワーにかかわらず、多くのゼミ生に対し学習の指導を行うことができた。今年度は、特にmanaba courseの個別指導(コレクション)機能を頻繁に用いた。</li> </ul>					

来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上記目標①については、一次資料を重視する学習を継続し、基本的資料を学生とともに検討する機会を増やすことを目標にしたい。</li> <li>・上記目標②については、講義では学生の主体的学びに資する企画を考えたい。ゼミでは、引き続きプレゼンテーションやディベートなどを企画する予定であるが、特に学生同士の主体的学びを中心にゼミを運営できるように指導したい。</li> <li>・上記目標③については、オフィスアワーのみでは指導時間が限られるため、講義等のない時間にはできるだけ学生指導に当たりたい。</li> </ul>				
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>					
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>					
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>					
<研究ノート>災害支援の受入れと拒否に関する国際法	単著	2020年9月	法の科学(51)	松浦 陽子	pp.176-184
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>					
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>					
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>					
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>					
<b>G. 学会における研究発表</b>					
新型コロナ対応におけるWHO/IHRの役割と日本の対応に関する論点	単独	2021年3月	民主主義科学者協会法律部会 春合宿(オンライン開催)	松浦 陽子	
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 災害支援に関する国際協力における国際法の形成</li> <li>② 新型コロナ対応をめぐるWHOの機能</li> <li>③ 国際法における国家性概念の再検討</li> </ul>				
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上記目標①については、8月に研究ノートを出した。また、関連するテーマを持つ法学部教員による共同研究の一環として、11月に現地調査を行った。</li> <li>・上記目標②については、3月に研究会で報告した。</li> <li>・上記目標③については、継続して古典的資料を検討している。</li> </ul>				
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上記目標①については、法学部教員による共同研究において、さらに進展させる予定である。</li> <li>・上記目標②については、論文として発表する予定である。</li> <li>・上記目標③については、継続して検討を進める。</li> </ul>				
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>					
2020年～	日本海洋法研究会 会員				
2018年～	国際法協会日本支部 会員				
2013年4月～	国際法協会日本支部 会員				
2012年～	日本国際経済法学会 会員				
2000年～	世界法学会 会員				
2000年～	民主主義科学者協会法律部会 会員				
1999年～	民主主義科学者協会 法律部会 会員				
1999年～	国際法学会 会員				
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>	
<p>&lt;全学&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 教務委員</li> <li>2 全学組織運営委員</li> <li>3 拡大教務委員</li> </ol> <p>&lt;法学部&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>4 法学部入試委員</li> <li>5 一般入試・推薦入試小委員</li> <li>6 法学政治学研究所共同研究プロジェクト</li> <li>7 法学政治学研究所研究</li> <li>8 法学部点検・評価委員</li> <li>9 法学部改革FD委員</li> <li>10 基幹構想委員</li> <li>11 法学部学習教育支援委員</li> <li>12 同委員会分析・企画小委員</li> <li>13 卒業試験実施委員</li> </ol>	

2020年度							
所属	法学部 法律学科	職名	講師	氏名	井坂 正宏	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>							

# 教員業務・活動報告

## 工 学 部

機 械 知 能 工 学 科

電 気 電 子 工 学 科

環 境 建 設 工 学 科

情 報 基 盤 工 学 科

2020年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	教授	氏名	魚橋 慶子	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
機器運用資料の提示によるシステム制御工学教育		2020年		工学部機械知能工学科3年生対象「システム制御工学」の授業において、システム制御理論を実際に利用し機器を動かす様子を説明した資料を、何度か履修者へ提示した。計算や公式の応用を理解できるよう、工夫した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
工学基礎教育センター相談員		2020年		工学基礎教育センター相談員を務めた。数学・物理の質問に応じ、学生の学力を高めた。遠隔相談(リアルタイム、メール添削)を新たに実施した。			
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>●「常微分方程式」について、教科書・問題集の利用のさせ方をさらに工夫し学力向上を図る。</li> <li>●「システム制御工学」の内容応用例を履修者へ紹介しながら、授業を行う。</li> <li>●「微分積分学I・II」の予習・復習内容を今年度よりも具体的に提示し、履修者の学力向上を図る</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>●「常微分方程式」の予習・復習内容を、昨年度よりも具体的に助言し、今年度も毎回の授業時に提出させた。履修者の学習習慣がついた模様である。</li> <li>●「システム制御工学」の内容応用例の紹介を行った。応用例との繋がりに興味を持ってもらえた。</li> <li>●「微分積分学I・II」の予習・復習内容を、授業数回分まとめてではなく、毎回の授業時に提出させた。履修者の学習習慣が概ねついた模様である。しかしオンライン授業のためか、未提出の続く履修者への喚起が難しかった。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>●入学年度にはほぼオンライン授業だった1年生が進級し、対面授業「常微分方程式」を受講する予定である。学習習慣、教科書・問題集の利用のさせ方を工夫し学力向上を図る。</li> <li>●「システム制御工学」の内容応用例を履修者へ紹介しながら、授業を行う。</li> <li>●「微分積分学I・II」の予習・復習を多くの履修者へ促し、学力向上を図る。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Mechanism of vasomotor symptoms based on frequency responses and ramp responses of blood flow		単著	2020年9月	Proceedings of the SICE Annual Conference 2020, September 23-26, 2020, Chiang Mai, Thailand		Keiko Uohashi	pp.1707-1712
Generalized parallel sums on symmetric cones and series parallel circuits		単著	2020年8月	Applied Sciences, 22		Keiko Uohashi	pp.239-247
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
Mechanism of vasomotor symptoms based on frequency responses and ramp responses of blood flow		単独	2020年9月	The SICE Annual Conference 2020(Chiang Mai, Thailand (Online))		Keiko Uohashi	pp.1707~1712頁
H. 翻訳(学術書や原典等)							

I. 特許			
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>●年度あたり1回は、研究集会で口頭発表を行う。</li> <li>●年度あたり1回は、査読付き論文誌へ研究論文を投稿する。</li> <li>●昨年度得た成果を今年度の研究へ反映させる。</li> </ul>		
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>●口頭発表1件を行った。</li> <li>●論文発表2件を行った(内1件は国際会議録(口頭発表1件と同内容), 他1件は昨年度に投稿した論文(査読付き))。</li> <li>●昨年度得た成果を発展させた。</li> </ul>		
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>●年度あたり1回は、研究集会で口頭発表を行う。</li> <li>●年度あたり1回は、査読付き論文誌へ研究論文を投稿する。</li> <li>●今年度得た成果を来年度の研究へ反映させる。</li> </ul>		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2021年1月～		計測自動制御学会	
2016年9月～		日本女性医学学会 会員	
2012年3月～		日本数学会幾何学分会	
2007年4月～		システム制御情報学会 会員	
1998年6月～		日本数学会 会員	
1997年4月～		日本応用数学会 会員	
1996年12月～		計測自動制御学会 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
1. 工学基礎教育センター 相談員 2. 学生相談室 兼任カウンセラー			

2020年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	教授	氏名	遠藤 春男	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		1. 講義時間外に学生が質問に来るように指導する。 2. 授業時間内に講義内容を理解させる指導をする。 3. 卒業研究に関する学生への課題の理解に努めさせる。 上記1.2. に関し講義中に教室内を周り教室の後ろにいて、黒板の見づらい学生とコミュニケーションを取る。 上記3. に関し、就職試験と重なることが多いことから、学生中心のスケジュールを作成。					
今年度の進捗状況		上記1.2. に関し、授業評価アンケートや直接学生から意見を聞くことで進捗が見られた。 上記3. に関し、学生中心のスケジュールにしたが、段取りなどが悪く予定通り進めなかった					
来年度の進捗目標		上記1. に関して、講義始めと終わりに質問時間を連絡する。 上記2. に関して、授業に取り組む姿勢のない学生が見られたので、コミュニケーションを重視したい。 上記3. に関して、卒業研究のスケジュールの立て方や時間配分に着いて指導強化する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
Trial of nondestructive inspection of concrete specimens by photothermal radiometry with a line heat source	単著	2020年11月	Proc. of Symposium on Ultrasonic Electronics, Vol. 41, Proc. of Symposium on Ultrasonic Electronics, Vol. 41	T. Hoshimiya, H. Endoh	pp.3J5-1		
熱可塑性樹脂砥石を用いた脆性材料の研削性能に関する研究 第一報: 石英光ファイバの鏡面加工	単著	2020年7月	J. Jpn. Soc. Abras. Tech., 64, 7, J. Jpn. Soc. Abras. Tech., 64, 7	鹿野祐樹、奈良健太、津田雄一郎、菜嶋理、松浦 寛、遠藤春男、斎藤 修	pp.375～379頁		
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		1. 超音響法による構造材の非破壊検査 2. 超音響顕微鏡による塗料面下の観察 3. 赤外線サーモグラフィによる非破壊検査の検出精度の向上 上記項目に関し、他学科の先生と共同研究を進める。					
今年度の進捗状況		上記1. 2. について、測定装置の故障、および動作ソフト変更により満足できるデータが取れなかったが、基本的データの収集および解析は出来たことから、進捗があったといえる。 上記3. について、試験片作製や基礎実験データ収集に時間が掛かったが、基本的データの収集および解析は出来たことから、進捗があったといえる。					
来年度の進捗目標		上記1.2. 3. について、満足できうるデータが得られれば研究会で報告し論文にまとめる。					



Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
1985年4月～		日本鑄造工学会 正会員 会員	
1981年4月～		日本機械学会 正会員 会員	
1980年4月～		日本材料学科 正会員 委員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	教授	氏名	小野 憲文	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
「メカノデザイン工作演習I・II」に関するWeb(電子)教材を用いた授業		2020年～		本講義のうち、機械製図の内容をWeb上に掲載した。この電子教材には、3D動画も含まれており、学生は視覚的に対象物を確認することができる。			
「熱流体解析工学」に関するWeb(電子)教材を用いた授業		2020年～		本講義の内容はすべてWeb上に掲載されている。この電子教材には、流れに関する静止画および動画が含まれており、学生は視覚的に流れの計算方法や計算結果を確認することができる。これは、式の誘導・展開を中心とする数値流体工学の講義とは一線を画するものである。また、流れの計算を行うプログラムも本ページに掲載されており、学生は授業中にそれをダウンロードし、動かすことができる。2020年度からはGoogleアプリに対応し、より効果的な学生の自学が期待できる。			
「基礎流体工学」に関するWeb(電子)教材を用いた授業		2020年～		本講義に関するWeb(電子)教材を用いた学習環境は、数値計算・動画生成ソフトが含まれており、これにより学生のより一層の学習効果の向上が見込まれる。また、2020年度から、Googleアプリを利用した学習環境も構築し、学生の自学補助に役立つことが期待できる。			
「情報リテラシー」および「プログラミング基礎」に関するWeb(電子)教材を用いた授業		2020年～		担当している「情報リテラシー」および「プログラミング基礎」は全て自作のWeb(電子)教材を使用して授業を進めている。主な内容はコンピュータリテラシーとC言語の入門に関するものである。2020年度から全項目学外からも閲覧可能となった。また、Googleアプリへの対応を強化した。さらに、今年度は「プログラミング基礎」の学外学習の大幅な強化をはかった。			
卒業研究による総合的成果を担当学科目に反映させる教育研究の実施		2020年～		学科科目「卒業研究I,II」において「流体工学分野における学習環境の開発」に関する指導を行ってきた。これは、学部4年生が開発することによって自分が学びたい部分・未修得な部分をその開発教材に反映できるという特色を持っている。卒研生が主体となって作成した教材を担当科目の授業中に使用し、受講学生への学習効果や学生の声をフィードバックすることによって更なる教育環境・教材の改良をはかる教育研究を実施している。今年度は特に数値熱流体工学の学習環境整備をさらに充実させている。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		1.学生が自主的に予習・復習できる環境に関しWebを中心に構築し、アクティブラーニングも視野に入れる。 2.演習科目に関して学生の理解度・解答作成速度などに対応できる課題の作成・出題を行う。 3.すべての授業において学生とのコミュニケーション増大の方策を練り実践する。					
今年度の進捗状況		1.1年生の科目「情報リテラシー」「プログラミング基礎」「メカノデザイン工作演習I・II」について、自作教材を大幅に改良中である。 特に「プログラミング基礎」については自習環境を大幅に整備した。 2.「基礎流体工学」、「熱流体解析工学」においてWebでの学習環境に一層の改良を施した。					
来年度の進捗目標		1.学生からのフィードバックをいかして授業内容、教材の改定に常に努める。 2.授業形態によっては、学生とのやり取りが不十分であるため、事前事後の来室(遠隔含む)等も含めて対応する。 3.学生が授業外に学習できる環境をさらに整備する(Web教材、双方向的)。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文			
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)			
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)			
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	1.熱流体工学新型デバイスの応用に関する研究を一層進める。 2.産学官連携につながる熱流体機械関連制御技術・環境を整備する。 3.新しい流れの数値解析とその結果表示方法、流れの可視化方法についての環境構築を推進する。 4.室内の空調および電子機器の冷却に関わる研究について新たな手法および知見を得る。		
今年度の進捗状況	1.企業との共同研究を継続中である。 2.新たな熱流体計算環境の構築を進めた。 3.最新の結果については、講演会・報告書で発表済または発表予定である。		
来年度の進捗目標	1.産官との連携をさらに強化し、そこからの技術・意見をより反映させたものを構築する。 2.未公表の技術・開発物をまとめて順次発表していく。 3.未公開データ・手法があるため、より洗練・検討して発表する。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2020年10月		Frontier of Applied Plasma Technology 査読員 委員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
1.工場主任			

2020年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	教授	氏名	梶川 伸哉	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
卒業研究ゼミの開催		2020年4月1日～		卒業研究の各学生担当テーマとその進行状況の相互理解、および問題解決策を議論する目的で週一回実施している。(オンラインと対面の併用)			
映像を用いた授業内容の解説		2020年4月1日～		4年次の「ヒューマンマシンインターフェイス」の授業において、映像資料を用いた解説を行い、理解と興味の向上に努めている。また、身近な機器を取り上げ、そのインターフェイスの良し悪しについての調査とプレゼン、ディスカッションの場を設けている。			
学生による相互評価の実施		2020年4月1日～		1年次に開講される「研究・発表の技法」における各自の取組姿勢を学生間相互によって評価する方法を実施し、成績評価にも反映させている。			
Webを利用したレポート課題		2020年4月1日～		3年、4年次に開講される「制御工学」「システム工学」において、Webを利用した課題提示と回収を行ない、学習状況の把握と学習習慣の定着に努めている。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
学生実験資料の作成		2020年4月1日～		機械知能工学実験Ⅰ、Ⅱのテーマである「生体の電気信号の計測」、「ロボットの制御」で使用する解説資料を作成し、使用している。(Web上で公開)			
授業補助資料の作成		2020年4月1日～		「制御工学」「システム工学」「ヒューマンインターフェイス」の授業で使用する補助資料を作成し、使用している。(今年度はWebを介した配布)			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>予復習の課題を課す講義科目を増やす。また、最新の話題を取り上げた資料の更新を引き続き行う。</li> <li>内容への関心から、さらに学習内容の理解へつなげる授業作りを行う。</li> <li>学生同士のディスカッションやプレゼンテーションを行う場を、より多く授業内で取り入れる。</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>Webの利用等により複数の科目で予習、復習の課題を効率的に課すことが可能となった。</li> <li>「制御工学」「システム工学」「フレッシュパーソンセミナー」の授業で使用する資料の刷新、充実を行った。</li> <li>オンライン形式の講義内容となったため、学生同士のディスカッションやプレゼンの機会を十分に確保できなかった。</li> <li>学生実験で使用する解説資料を作成し、授業内で活用した。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>Web等をさらに活用し、効率的で効果的な予復習課題の提示を通して学生の学習習慣の定着に努める。また、講義内での予復習内容の確認作業を設ける。</li> <li>Web等を利用した質問や要望受付の体制を構築する。</li> <li>学生のディスカッションやプレゼンの機会に対する準備期間をもう少し与え、プレゼン内容の充実とディスカッションの深化を図る。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							

H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>腰部パワーアシスト機構の開発</li> <li>視覚障害者用歩行支援機の開発。</li> <li>舌機能トレーニングシステムの開発</li> </ul>		
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>腰部パワーアシスト機構として、受動要素を利用した省エネ機構を提案した。</li> <li>視覚障害者用歩行支援機の製作を行い、歩行誘導の有効性を検証した。また、新たな問題点を把握した。</li> <li>舌機能トレーニングシステムの試作機を製作した。</li> </ul>		
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>腰部パワーアシスト機構の設計・製作・評価。</li> <li>歩行支援機の改良と評価。</li> <li>舌運動とトレーニングシステムの構築と実験による評価。</li> </ul>		
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(C)	2018年度～2020年度	個別	舌の運動および触力感覚の機能維持・向上を目的としたトレーニングシステムの開発
IV 学会等及び社会における主な活動			
2020年9月～	東北防衛局入札監視委員会 委員		
2013年～	みやぎ高度電子機械人材育成センター 運営委員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	教授	氏名	加藤 陽子	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
基礎となる諸法則の具体的な展開の提示		2020年4月1日～2021年3月31日		講義内容において重要な諸法則について、具体的にどのように展開されているのかを丁寧に説明する事により、学生の理解を促す			
学生にとって理解が難しいと考えられる点について、学生自らが取り組む事ができるように促す		2020年4月1日～2021年3月31日		レポートの再提出および採点を介して、あきらめず、自らの努力によって理解を得る事を促す			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		① レポート課題を、幅広いもの(応用分野を今以上に含むもの)を検討する ② 返却されたレポートについて、再提出による復習の促しを検討する					
今年度の進捗状況		① 再提出の提示に対する学生からの反応(提出率)は良好である ② 合格率が良好な状態に保たれている ③ 前年度とは異なる、遠隔講義での開催となったが、レポート提出率、合格率共に大きな影響はなかったと考えられた					
来年度の進捗目標		① 演習問題の解説を丁寧に行う事により、学生の理解を促す ② 各論に対する詳細な説明に加え、全体像がつかみやすくなるような説明方法を検討する					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Active Deformation in the Tunic of <i>Halocynthia roretzi</i> : How the Tissue Composed of Cellulose Responds to Stimuli and Deforms	単著	2020年6月	Plant Stress Physiology (Chapter 17), Plant Stress Physiology (Chapter 17)	Yoko Kato	pp.327-348		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		① 胎盤に関するテーマを継続させ、誌上発表・口頭発表する。 ② マボヤ被囊に関する研究について、誌上発表・口頭発表する。 ③ 画像処理手法の構築に関する成果を発表する。					
今年度の進捗状況		① 胎盤のバイオメカニクス(血流)に関連し、構築した計算モデルの診断支援への適用を検討した。 ② マボヤ被囊に関し、誌上発表を行った。 ③ 画像処理に関し、細胞運動に関するプログラムを構築した。					
来年度の進捗目標		① 胎盤の血流関連: 診断支援に関する方向へ展開し、誌上発表を行う。 ② マボヤ被囊関連: 技術の基盤となる研究へと展開し、誌上発表を行う。 ③ 画像処理: 上記2テーマに関するプログラム手法を構築し、誌上発表を行う。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2020年		一般社団法人 日本機械学会東北支部	令和2年度(第56期)
2019年8月～2021年8月		一般社団法人 日本キッチン・キトサン学会	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
1. 教務委員 2. 外部評価対応委員			

2020年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	教授	氏名	熊谷 正朗	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
<b>教育実践上の主な業績</b>		<b>年月日(西暦)</b>		<b>概要</b>			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
オンラインホワイトボードを併用した遠隔授業と事後学習用記録の保存提供		2020年5月1日～		<p>講義の遠隔化にともない、以下のスタイルを採用した。  講義の資料はオンラインホワイトボードであるmiro.comのサービス上に構築し(科目よって、従来のスライド資料ベースの配布PDFの貼り付け、従来板書型+講義ノート公開型科目では、ある程度の骨格部分を用意)、講義中(オンタイム)では、この画面をZoomで中継しつつ、そこに書き込みながら解説をするスタイルとした。これは「消えない黒板」であり、講義前から学生が内容を直接見ることができるURLを提示(Zoom画面から消えても、直接開けば任意の場所が講義中にも確認できる)、講義後も年度末まで保存した。また、自分の手元に再構成できるデータの提供もした。アンケートによれば、講義の録画の提供も含め、事後学習にかなり活用されていた。加えて、前回までの内容をコピーして今回の内容のスタートとすることで、複数回にわたる内容でも扱いやすいなど、講義する側にも利点は多い。  今後の対面授業でもこの活用を前提として計画している。</p>			
専門科目の必修化に伴う講義内容の抜本的見直し		2015年4月～		<p>カリキュラム改訂に伴い、以前は「ほぼ全員履修」の選択と「2/3程度の学生が履修」の選択だったメカトロニクス2科目が必修となったことから、2015年に抜本的な見直しを行った。コンセプトは「専門科目としてのメカトロニクスから機械の教養としてのメカトロニクスへの移行」であり、全員が学び、かつ全員が必要水準に達することの実現を目指した。そのためには枝葉の理論よりは総合的な知識とセンス獲得を優先した。また講義スタイルも従来の板書主体から変更し、毎回決まったフォーマットでのスライド16枚(A3用紙1枚にカラー縮刷して配付)+重要点などを板書で補足するようにした。配付付きスライド化により、写真を含むビジュアルな資料が提供できるようになったこと、意欲ある学生は板書に気を取られることなく講義内容をメモしていけるなど、狙い通りの効果を得た。上記同様、資料はWEBでも配付している。  後述の企業技術者向けのメカトロニクスセミナーとの相互運用で内容の修正は続けている。  他の科目への展開については、一部本科目の評価方式を適用しつつ、現状で検討中であり(おもに時間確保が課題)、現在は遠隔授業ともシームレスにした方向で全体的に調整中。</p>			
講義ノートのオンライン化とWEBでの一般公開		2003年9月～		<p>以前の授業評価アンケートにて「字が読めない」「図が書き写せない」との指摘があり、その対応策として講義ノートをWEB上で作成し、公開することとした。復習などの他、病欠などの際の補填にも活用できる。現在、学外からも膨大なアクセスがあり、他大学の教員からも活用されている形跡がある。電子情報化したことで修正も容易となった。  ※2003年9月～継続</p>			
テスト・レポート電子処理システムの開発および運用		2003年9月～		<p>膨大な量の小テスト、レポート、単位の実質化に伴う復習シートの、試験の答案での集計業務の省力化、ミスの低減、データ保存を目的として、処理システムを開発した。独自のマークシートを開発し、それをスキャン、解析することで集計を行う。これにより、プレゼン系科目の学生同士の相互評価にも対応できた。  ※2003年9月～継続(2020以降は提出オンライン化で利用停止中)</p>			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
ロボット博士の基礎からのメカトロニクスセミナー		2011年1月18日～		<p>メカトロニクスセミナーの実施のために作成した資料、教材は講演終了後に研究室WEBページで提供しており、一般からも利用できる。現時点で27+1回分、延べ1500ページを超える資料となっている。  ※2011年1月18日～継続</p>			



オンライン講義ノート	2003年9月～	<p>担当する5講義(および旧担当あわせて11科目)の講義ノートをWEB上で作成し、公開している。これにより受講学生の自習、病欠に於ける欠損などを穴埋めすることが可能となったほか、外部からの参照も多く、社会貢献ともなっている。本報告執筆時点で総計720万回の参照があり、“ロボット工学”“マニピュレータ”“座標変換”などの主要キーワードをネット検索した際にトップクラスの上位に表示される(一般にネットにおける評価が高いことを示す)。そのほかに公開している技術情報も含め、1日平均500人程度の利用者がある。</p> <p>※2003年9月～継続</p>
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
県外の工業高校系の研究会での講演依頼	2021年3月12日	<p>長野県で開催の、「令和2年度 第17回ロボコンロボット製作技術講演会」にて、外部講師として特別講演を行った。知能ロボットコンテストの紹介などに加え、直感的なものづくりにくわえての、数学理論の重要性を説いた。もとは、2020年に実施予定であったがコロナ感染症の広がりで中止となっていたもので、同会が今年度オンライン実施となったことで再度依頼があった。これまでは数日をかけての出張ということが制約であったが、オンライン化でより広範囲に貢献できる可能性が増えたといえる。</p>
ロボット博士の基礎からのメカトロニクスセミナー(仙台市地域連携フェロー活動)	2011年1月18日～	<p>社会活動である仙台市地域連携フェローの活動の一環として、地域のエンジニアのためのメカトロニクスの総合セミナーを企画し、仙台市産業振興事業団を会場に実施している。開発業界においては、自分の専門性を高めることも重要なが、幅広く技術的知識をもつことが大事であり、周囲の分野との連携のためにも「隣も知る」ことが大事である。その観点から、「技術的雑学」を提供することを目的に様々な講演を行ってきた。本学卒業生も聴講に来ることがある。同内容を地域の企業にも出張講座している(のべ30回以上)。また、ここで確立した講義スタイルを学科科目の講義にも応用している。</p> <p>※2011年1月18日～</p>
ロボット教育特別コースの設置(ロボット研究会)	2005年1月～	<p>機械知能工学科ではロボットに関する講義はいくつかあるが、ロボット関連技術は座学では到底学べず、実践が必要である。一方で、卒業研究の時点で学ぼうとしても時間は足りない。そこで、積極的意欲を持った、配属前の1～3年生以下の学生を募集し、研究室への出入り、工具等の使用を許可し、消耗品も一部提供することで、自らロボットを学ぶ機会を提供することとした。これまでに、ロボットコンテストに参加して上位入賞したほか、希望者が研究室に正式に配属となり、技術習得の段階をすぐに越えて本題に入るなど、大きな効果が得られている。このコースを分析し、教育論文にもまとめた。</p> <p>※2005年1月～継続(コロナ禍で活動低下中)</p>
出前授業の実施	2003年～	<p>高校・高専からの依頼に応じて、出前授業を行った。テーマは「ロボットをつくる」であり、ロボットの基礎の講義とともに、高校における科目が如何に意義のあるものかを説いた。</p> <p>(2010年12月: 泉松陵高校, 2011年1月: 一関高専, 2011年2月: 石巻西高校, 2012年2月: 石巻工業高校, 2012年3月: 仙台西高校, 2012年12月: 泉松陵高校)</p>
知能ロボットコンテストの運営	2000年～	<p>毎年仙台市で6月に開催されている知能ロボットコンテストの運営に深く関与している(2011年は震災の影響で10月開催)。過去に実行委員長も4回務めた(直近は2018年)。本コンテストは中学～大学生の参加が多く、ロボット技術教育の効果もある大会であり、現に、本大会の参加者の中から優れたエンジニアも育っている。上記ロボット研究会も主たる目標は本大会への参加である。</p> <p>※2000年1月以前より継続</p> <p>※2020,21年度は開催を模索したがコロナ禍で断念</p>
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>●この18年間の教員としての取り組みを通して、一通りの技術教育のフォーマットを得るに至ったが、現状では「ある程度意欲を持つ者」「かなり意欲を持つ者」には効果が認められるものの、「意欲のない者」「関心のない者」に対しての効果が薄い。担当分野は、現在では機械技術の必須分野であるため、興味ある者を伸ばすことだけにとどまらず、後者に対しても必要知識を身につけさせる必要があり、この改善が必要である。一つには興味をより持ってもらうことであるが、ある程度は強制的に学ばせるための手法の検討も必要と思われる。</li> <li>●単位の実質化に伴う、予習復習のエビデンスのある実施形態準備。</li> <li>●講義ノートページのインタラクティブ化、具体的には簡単な練習問題の提示や計算練習を可能とするような改修。</li> <li>●技術的専門知識の普及啓蒙および獲得支援。</li> </ul>	

<p>今年度の進捗状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●コロナ禍の対応で多くの時間を要したことで本来の目標についての進捗はほぼ無かった。一方で、遠隔化対応のため、新たにオンライン併用型の講義スタイルの展開に至り、予想以上に効果があったため、今後の講義方針の新しい土台とする。</li> <li>●上述の通り、カリキュラム変更に際して、一部講義の大幅変更を行い、6年目として継続して様子を見ているが、内容面では安定したと考えられる。まだ他の科目については対応できていない。</li> <li>●単位の実質化に伴う復習の方式として「講義の中で重要であったと考える図とその説明を3点まとめる」を実施し、理解の促進と苦手な者への学修機会への二つの面で一定の成果を得ている。受講者からは、授業評価アンケートなどでも好評価を受けている。この復習とあわせて予習も行うように誘導しており、本年度は3科目で実施した。ただ、復習に比べて予習の程度が弱く感じられ(シラバス記載の予習内容を転記する書式にしたことで改善)、とくに今年度は遠隔化の影響もあってか「意欲あるものはしっかりとするが、全体的に提出率の低下」という傾向があった。</li> <li>●サーバの更新と、大きめのソフトウェア開発を行う必要があり、その時間を確保できていないが、準備は進みつつある。</li> <li>●啓蒙活動については、ここ数年間、仙台市地域連携フェローとしての活動を通して、かなりの成果をあげているほか、上記「特筆すべき事項」に示すように種々の貢献を果たしている。企業への出前も継続して実施している。</li> </ul>				
<p>来年度の進捗目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●全体の見通し背景:本年度の最重要課題であったメカトロニクスの方針転換は達成したので、その完成度の向上と、関連科目の内容の再検討に着手する。</li> <li>●2020年度に導入したオンラインホワイトボード型の講義を対面授業で実施、ハイブリッド化するための効率的な手段を開発する。</li> <li>●実質化の手法については今年度の方式を継続するほか、予習の実効性向上を検討する。従来は紙での回収であり、昨年度はPDF提出としたがその手段の効率化を図る。</li> <li>●上記について、学生諸君の自習を促す教育面のIT支援が必須となるため、その実装を進める。</li> <li>●技術的専門知識の啓蒙活動についてはこれまでの水準を維持する。</li> </ul>				
<p>II 研究活動</p>					
<p>著書・論文等の名称</p>	<p>単著・共著の別</p>	<p>発行又は発表の年月(西暦)</p>	<p>発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称</p>	<p>編者・著者名</p>	<p>該当頁数</p>
<p>A. 学術書</p>					
<p>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</p>					
<p>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</p>					
<p>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</p>					
<p>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</p>					
<p>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</p>					
<p>身の回りを見つけるメカトロ雑学 第85回～第96回『プラントエンジニア 第52巻第4号～第53巻第3号』</p>	<p>単著</p>	<p>2020年4月</p>	<p>日本プラントメンテナンス協会、プラントエンジニア 第52巻第4号～第53巻第3号, 第52巻第4号～</p>	<p>熊谷正朗</p>	<p>pp.号による-号による</p>
<p>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</p>					
<p>G. 学会における研究発表</p>					
<p>H. 翻訳(学術書や原典等)</p>					
<p>I. 特許</p>					
<p>現在の課題・目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●現在、研究を進めている球面誘導モータの開発を中心として、メカトロニクス関連の技術の発展に貢献すること。現時点では教育および大学運営業務に重点を置いており(置かざるを得ない)、研究とのバランスをどのようにするかは課題である。</li> <li>●開発した技術成果の学内外への還元の方法。</li> </ul>				
<p>今年度の進捗状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●本年度も学内用務(および家庭内事情)に多くの時間を割かざるを得なかったため、研究に回せる時間が大幅に減り、進捗は芳しくない。</li> <li>●学生原案による卒業研究では種はできているが、それを学術レベルまで育てるには至っていない。</li> <li>●現状では学会等での学術発表にとどまっており、広く一般業界向けへの提示が不十分である。技術の総論的な面は地域連携フェロー活動、および学外から依頼の技術講演を通して地域への還元を行っている。(ロボコンマガジンでの連載が好機であったが雑誌休刊により休止)</li> <li>●研究発表にはつながりにくい、パイプオルガン模型の開発を行っている。</li> <li>●研究の根幹に関わる(現時点で公表すべきではない)ものではない、製作した要素技術などについては、SNSを通じて比較的高頻度に紹介し、関心を得ている。</li> </ul>				
<p>来年度の進捗目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●球面誘導モータの開発は科研費の支援期間終了後も効率改善に挑む。</li> <li>●パイプオルガンの開発は引き続き継続する。</li> <li>●教育コンテンツを有するサーバのリプレイスとコンテンツ管理の改善を行う。</li> </ul>				

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2020年		宮城県および仙台市のICT, メカトロニクス関連分野の民間企業向け補助金の審査委員(非公開) 委員	
2020年		知能ロボットコンテスト運営委員 委員	
2011年7月～		仙台市地域連携フェロー 委員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
●学務部 副部長(多賀城、工学部)			

2020年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	教授	氏名	齋藤 修	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
オープンキャンパスおよび工学部祭の研究室公開		2020年4月1日～2021年3月31日		オープンキャンパスにおいて施設公開のため、研究室学生の指導を行った。同時に研究内容についての説明と高校生に対するプレゼンテーション資料を作成した。			
卒業研究ゼミの開催		2020年4月1日～2021年3月31日		卒業研究について各自の研究テーマの進捗状況の報告をさせ問題解決のための指導を行った。			
学生による授業評価の実施		2020年4月1日～2021年3月31日		学生から授業アンケートを取り、配布するプリントや授業内容の充実に努めている。			
授業内容充実のためのプリント作成		2020年4月1日～2020年8月31日		「機械工作学」および「MCによる切削加工」のためのプリントを作成し、配布説明を行った。			
学生による相互評価の実施		2020年4月1日～2020年8月31日		「研究・発表の技法」においてテーマを決め、調査研究を指導した。そして図表の描き方の添削およびプレゼンテーションにより学生間で相互評価による学習を行った。			
大学院博士(前期)課程学生の講義用資料の作成		2020年4月1日～2020年8月31日		「機械加工学特論」に使用する文献資料のまとめと追加を行った。			
授業内容理解のための添削指導		2020年4月1日～2020年8月31日		「先端の科学・技術」においてテーマを決め、要点をまとめて小論文を作成させた。それに基づいて限られた字数による的確な文章表現を指導した。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
機械知能工学実験テキスト		2020年4月1日～2021年3月31日		実験内容についてのプリントおよびテキスト作成を行った。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>●授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切に、学生からのさまざまな相談に応じる。</li> <li>●すべての授業で、学士課程における必要性という観点から到達目標を見直す。</li> <li>●「機械工作学」および「特殊加工学」についての新たな授業テキストをつくる。</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>●授業時間以外での学生とのコミュニケーションは研究室の学生については取れている。</li> <li>●到達目標については授業評価アンケートで「わかりやすい」との回答が有意に増えていることから、ある程度の進捗がみられた。</li> <li>●テキスト作成については各分野での資料等を収集中である。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>●授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間をさらに大切に、学生からのさまざまな相談に応じる。</li> <li>●すべての授業で、学士課程における必要性という観点から到達目標をさらに見直す。</li> <li>●「機械工作学」および「特殊加工学」についての新たな授業テキストのための情報収集に努める。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
熱可塑性樹脂砥石を用いた脆性材料の研削性能に関する研究 石英光ファイバの鏡面加工	共著	2020年7月	Journal of the Japan Society for Abrasive Technology Vol.64 No.7 2020 JUL. 375-379	◎鹿野祐樹, 奈良健太, 津田雄一郎, 菜嶋理, 松浦 寛, 遠藤春男, 齋藤 修	pp.375-379		
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野)</b>							

E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)			
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	移転に向けた実験装置の整備 新たな研究テーマの検討		
今年度の進捗状況	新たな基礎的加工実験装置等のデータ収集が整いつつある		
来年度の進捗目標	移転後の研究を平滑に行うための条件整備		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2020年4月		社団法人 精密工学会東北支部商議員 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
授業評価委員会委員 授業改善委員会委員 工学部図書館分館長			

2020年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	教授	氏名	星 朗	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
毎回の講義の内容に関して、復習問題ならびに予習課題などを次週までの宿題として課すことにより、自学自習する習慣を付けるようにしている。		2020年4月～		「基礎熱力学」、「応用熱力学」、「工学総合演習Ⅰ」において、毎回の講義に関する復習問題ならびに予習課題を、自学自修してもらうようにしている。次週の講義で解答例を解説して評価している。			
講義の最後に、その日の講義内容の理解度をチェックする目的でQuiz(小テスト)を実施している。		2020年4月～		「基礎熱力学」、「応用熱力学」、「工学総合演習Ⅰ」ならびに「応用熱工学特論」において、講義中に説明した内容についてQuizの問題解法を通じて理解度を確認している。「環境エネルギー工学」においては、「eco検定」の受検にも対応できる内容でQuizをmanaba上において実施している。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
その日の講義で扱う例題、Quiz、復習問題ならびに予習課題を、講義資料としてmanaba上に公開している。		2020年4月～		「基礎熱力学」、「工学総合演習Ⅰ」、「応用熱力学」、「環境エネルギー工学」ならびに「応用熱工学特論」において、講義で扱う例題、Quiz、復習問題ならびに予習課題を講義資料としてmanaba上に公開しており、自ら予習・復習できるようにしてある。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
日本機械学会2020年度年次大会において、「太陽光・熱利用発電システムの提案」というタイトルで卒業研究の成果を講演した。		2020年9月16日		本研究では、太陽エネルギーに着目して、高効率利用できる新たな太陽光・熱利用発電システムを提案した。提案する太陽光・熱利用発電システムでは、熱線反射フィルムを用いることで波長選択を行い、温度上昇の原因となる赤外線域の光は反射させて太陽熱発電に利用し、可視光線域の光は太陽光発電に用いることで、総合熱効率を向上させることを研究の目的とした。			
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
日本機械学会 技術と社会部門主催「第13回 新☆エネルギーコンテスト」において学生のアイデアを投稿した。		2020年10月17日		卒研学生である坪井優君・日下隼人君の卒研テーマの一部を「模型スターリング冷凍機の提案」というタイトルで「新☆エネルギーコンテスト」においてアイデア投稿し、「アルトナー賞」を受賞した。			
現在の課題・目標		①卓上ミニ実験、測定器などの実物に触れることを通して、体感的に講義内容に興味を持ってもらい、理解度を深めてもらうようにする。 ②毎回の講義で実施するQuiz、自学自習のためのHome Work等を充実させる。					
今年度の進捗状況		上記目標①については、メインの実施科目である「基礎熱力学」がコロナ禍にあつてリモート授業(オンデマンド)となったために実施することはできず残念な結果であった。大学院講義「応用熱工学特論」では、少人数でzoomによるオンデマンドが可能であったため、一部について実物を画面上に写して講義を行うことができた。上記目標②については、例題、Quiz、復習問題ならびに予習課題をmanaba上に講義資料として公開することで、リモート授業(オンデマンド)であったわりには理解力の向上に繋がったものと思う。さらに、manaba上に講義資料や講義中の例題・解答などを公開したことにより、予習・復習の自学自修ができるようになったものと考えている。					
来年度の進捗目標		上記目標①に関しては、良い成果に繋がることが期待されるので、対面授業に戻った後には大講義室でも実施可能な新しい教材を準備するなどして、内容をさらに充実させていきたい。 上記目標②に関しては、予習・復習も含めた形で自学自習できるHome Workの充実を、さらに図っていきたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							

機械遺産委員を務めて思うこと 一包餡機の認定をはじめとして『日本機械学会誌 特集 第100号を迎えた「機械遺産」』	単著	2020年	日本機械学会, Vol.123, No.1225	星 朗	pp.28
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>					
<b>G. 学会における研究発表</b>					
太陽光・熱利用発電システムの提案	共同	2020年9月	日本機械学会2020年度年次大会(名古屋)	横山 優, 星 朗	pp.CD-ROM S20208
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	①外部研究者との共同研究, 外部資金の調達などを旨とする。 ②1編/年の学術論文の発表, 1回/年の国際会議発表を目標とする。 ③地域に根ざした研究テーマを模索する。				
今年度の進捗状況	上記目標①については, 公益財団法人 不二科学技術振興財団より研究助成金を頂戴した。 上記目標②については, 国際会議発表の予定があったが, コロナ禍にあって残念ながら中止となった。 上記目標③については, コロナ禍にあって, 鳴子の温泉旅館との共同研究も中断している。				
来年度の進捗目標	上記目標①に関しては, 玉川大学, 東北大学の先生との共同研究を計画している。 上記目標②に関しては, 学術論文が準備中にある。国際会議での発表を計画している。 上記目標③に関しては, 新規テーマを開拓していきたい。				
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>					
2019年4月～2021年3月	日本機械学会エンジンシステム部門代議員 会員				
2016年6月～	宮城県工業高等学校学校評議員(宮城県工業高等学校学校評議員)				
2016年6月～	宮城県工業高等学校学校評議員 委員				
2015年4月～	自動車技術会東北支部学生自動車研究会幹事 会員				
2015年4月～	自動車技術会東北支部学生自動車研究会幹事(自動車技術会東北支部学生自動車研究会幹事)				
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>					
機械知能工学科 学科長					

2020年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	教授	氏名	松浦 寛	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
LMS(Moodle)を活用したeラーニングシステムの構築(機械設計学, 機構学, 機械知能工学実験1)をおこなった.		2020年4月～		資料の円滑な配布が可能となった. 学内からのアクセスのみ対応できる出席管理を可能とした. 予習復習課題の提出を時間単位で把握でき, 提出内容をソフトでコピー&ペーストチェックソフトを使うことでコピー率を出すようにしたこと成績上位者と下位者で明らかな相関が得られた. これらを教育系学会で発表した.			
2. 作成した教科書, 教材, 参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		大学院進学率(目標50%) 大企業就職率(100%)					
今年度の進捗状況		2020年度(75% 3/4) 2020年度大企業就職率100%					
来年度の進捗目標		10年連続 研究室ゼミ生就職率100%維持					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所, 発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Multileveled tunable silicon grating array bonded on large scale integration substrate by polymers		単著	2021年1月	Journal of Optical Microsystems Vol. 1, Issue 1 (Jan 2021), Journal of Optical Microsystems Vol. 1, Issue 1 (Jan 2021)		Tomohiro Suzuki, Chernroj Sawasdivorn, Takashi Sasaki, Hiroshi Matsuura, Kazuhiro Hane	pp.不明
熱可塑性樹脂砥石を用いた脆性材料の研削性能に関する研究(第1報)石英光ファイバの鏡面加工		単著	2020年7月	砥粒加工学会, 64(7), 375-379, 2020-07, 砥粒加工学会, 64(7), 375-379, 2020-07		鹿野祐樹, 奈良健太, 津田雄一郎, 菜嶋理, 松浦寛, 遠藤春男, 斎藤 修	pp.5
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
TEM00モードの性質を利用した光コリメータの簡易製造方法(第五報)		共同	2020年9月	精密工学会 秋季全国大会(不明)		三浦陽太, 柳田慎吾, 阿部柚人, 松浦寛	pp.2
従来型対面授業とCOVID-19によるZoom遠隔授業の比較		単独	2020年8月	コンピュータ利用教育学会PCカンファレンス(不明)		松浦寛	pp.2
Moodleを利用した実習科目における学生の行動形態調査		共同	2020年8月	コンピュータ利用教育学会PCカンファレンス(不明)		今智哉・堀尾克己・松浦寛・千葉正昭・菊地雄介・高木龍一郎	pp.2
新型コロナウイルス対策による遠隔授業と対面授業の学習効果の比較		共同	2020年8月	コンピュータ利用教育学会PCカンファレンス(不明)		丹勇人, 齋裕大, 松浦寛, 千葉正昭, 菊地雄介, 高木龍一郎	pp.2



COVID-19の影響によるZoom同時接続での遠隔アクティブラーニングの効果	共同	2020年8月	コンピュータ利用教育学会PCカンファレンス(不明)	柳田慎吾・阿部柚人・松浦寛・千葉正昭・菊地雄介・高木龍一郎	pp.2
新型コロナウイルスによる遠隔授業での自発性とペアリング	共同	2020年8月	コンピュータ利用教育学会PCカンファレンス(不明)	橋本知弥, 高橋悠, 松浦寛, 菊池雄介, 高木龍一郎, 千葉正昭	pp.2
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>					
2014年～		精密工学会 精密工学会東北支部 商議員 会員			
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>					
1, 知的財産・知的財産審査委員 2, 大学院工学研究科 機械専攻主任(H30-33年度)					

2020年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	教授	氏名	矢口 博之	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<p>実践的かつ専門的な知識を修得するための講義を行うことを目標とする。</p> <p>1.初等力学系の基礎的な講義科目については、生活での身近な事例を示しながら説明し、学生の理解を促す。</p> <p>2.演習系の科目では、こちらから質問するように心がけ、学生とのコミュニケーションをはかるように努める。</p> <p>3.実験系の科目では、学生一人一人に対して質疑応答の時間を設け、より理解を促すようにする。</p>					
今年度の進捗状況		各項目について、1の項目は約65%程度、2および3の項目については85%程度、目標が達成できたものと考えている。					
来年度の進捗目標		学生が講義に興味を持って参加できるように努めると共に、学生と講義時間および講義時間以外でのコミュニケーションの時間を有効活用できるように努める。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
A new type of electromagnetically propelled vibration actuator for appearance inspection of iron structure		単著	2021年1月	International Journal of GEOMATE, Vol. 20, No. 77, pp.69 - 76 (2021), International Journal of GEOMATE, Vol. 20, No. 77, pp.69 - 76 (2021)		H. Yaguchi	pp.8頁
A new type of rotary magnetic actuator system using electromagnetic vibration and wheel		共著	2020年7月	Actuator, Vol. 9, No. 3, pp 1 - 12 (2020), Actuator, Vol. 9, No. 3, pp 1 - 12 (2020).		H. Yaguchi, I. Kimura and S. Sakuma	pp.12頁
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
A new type of actuator for appearance inspection of iron structure		単独	2020年11月	The Sixth International Conference on Structure, Engineering & Environment (SEE2020), ID:6234 (2020)(不明)		H. Yaguchi	pp.7頁
変位の位相差により往復移動が可能な振動型アクチュエータ		共同	2020年9月	日本機械学会東北支部第56期秋季講演会(不明)		矢森 修 矢口 博之	pp.2頁
電磁-振動を利用したポンプの流量特性改善に関する考察		共同	2020年9月	日本機械学会東北支部第56期秋季講演会(不明)		渡邊 拓也 矢口 博之	pp.2頁
振動の位相差を利用した電磁アクチュエータ		共同	2020年8月	日本機械学会関東支部第28回茨城講演会(不明)		矢森 修 矢口 博之	pp.2頁
振動を利用した電磁ポンプの流量および効率特性の改善		共同	2020年8月	日本機械学会関東支部第28回茨城講演会(不明)		渡邊 拓也 矢口 博之	pp.2頁

A new type of rotary magnetic actuator system using electromagnetic vibration	共同	2020年5月	The 2020 IEEE International Magnetics Conference, FU-04 (2020)(不明)	H. Yaguchi I. Kimura S. Sakuma	pp.2頁
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	<p>メカニカルな振動と電磁力を結合させ、新たな原理で動作するアクチュエータに関する解析と試作を行っている。各テーマについての目標は、以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 複雑な小口径の管内を検査可能な磁気アクチュエータの実機を試作し、その走行特性を理論と実験により解明する。</li> <li>2. 配管内を数百メートルの距離にわたり物体を搬送可能なアクチュエータを開発する。</li> <li>3. 橋梁や巨大タンクなどの大型鋼構造物を走行し、外観の状態を検査できるアクチュエータシステムのプロトタイプを試作する。</li> <li>4. 安価で効率の高い電磁ポンプのプロトタイプを試作し、その基本性能を解明する。</li> <li>5. 振動振幅の勾配を利用した新たな原理のマイクロモータを開発する。</li> </ol>				
今年度の進捗状況	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 磁場解析と実験により高い磁気発生力を発生する磁気回路を試作し、それを基に実機を試作中である。今年度の進捗状況は約80%程度に留まる。</li> <li>2. ケーブルレス型磁気アクチュエータによる模擬的な試作を行い、走行特性を調べた。約80%程度の進捗状況である。</li> <li>3. 外観の状態を検査できるアクチュエータ本体の走行特性を理論と実験により完全に解明するための実験を行っている。往復移動化の原理の確立がはかられた。</li> <li>4. 安価で効率の高い電磁ポンプのプロトタイプを試作し、その基本性能を解明した。ただし、効率が最大15%と低いため、進捗状況は50%程度に留まる。</li> <li>5. 動作原理がまだ完全に確立されていないため、進捗状況は20%程度に留まる。</li> </ol>				
来年度の進捗目標	<p>次年度は、上述の1～5のテーマについて、動作原理の完全確立をはかりながら、走行特性あるいは効率を改善するように磁場解析と振動解析の両社から検討する。新たな動作原理を有する新型アクチュエータの試作および開発に取組む予定である。</p>				
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要		
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>					
2020年11月	The GEOMATE International Society The 6 th International Conference on Structure, Engineering & Environment (SEE-Kyoto 2020) Best Paper Award (ID:6234) 2020年11月20日(The GEOMATE International Society The 6 th International Conference on Structure, Engineering & Environment (SEE-Kyoto 2020) Best Paper Award (ID:6234) 2020年11月20日)				
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>					

2020年度								
所属	工学部 機械知能工学科	職名	准教授	氏名	岡田 宏成	大学院の授業担当の有無	有	
<b>I 教育活動</b>								
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要				
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>								
実験課題のオンライン化		2020年～		自然科学実験ファンダメンタルズの物理学実験テーマに関するスライドと動画を作成して、オンタイム/オンデマンドでの受講を可能にした。				
講義ノートのスライド化		2020年～		オンライン授業に対応するために講義ノートをスライド化した。それに伴って図や表も追加してより充実した講義内容に改善した。				
manabaを利用したオンライン学修		2020年～		manabaの小テスト、ドリル機能を利用して講義内容の予習復習を促すための課題の提出を行った。				
工学基礎教育センター利用の促進		2020年～		小テストなどの成績が不振な学生に対し、工学基礎教育センター学習相談コーナーを利用する補習レポートを課した。				
レポートのプレゼンテーション化		2020年～		毎回の講義内容に関するレポート課題を、書画カメラやプロジェクターを用いたプレゼン形式で評価した。そのための課題内容や評価方法を前年度の方法より改善した。				
復習用のパワーポイント資料の作成		2020年～		プロジェクターを使用した復習用パワーポイント資料を作成して、毎回の講義の冒頭で、前回の講義内容を視覚的に復習した。				
予習・復習を促すための講義毎の課題の作成とその評価		2020年～		今回の講義内容に関する復習問題と、次回の講義内容に関する予習問題をレポートの課題として毎回提出した。講義の冒頭で復習問題の解説を行い、予習問題に沿った内容で講義を進めた。				
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>								
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>								
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>								
現在の課題・目標		① ST利用者を増やすため、成績評価に対する条件を課すなど、対策を講じる ② 予習・復習の促進、内容の改善						
今年度の進捗状況		① 一定期間であるが、利用者を増加させることができた。 ② 学生の提出状況は良好、授業評価アンケートでの回答						
来年度の進捗目標		① 利用者を増やすため、成績評価に対する条件を改善する ② 問題数など内容量の検討を行い、より効果的な学習内容を検討する						
<b>II 研究活動</b>								
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)		発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>								
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>								
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>								
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>								
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>								
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>								
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>								
<b>G. 学会における研究発表</b>								
D022型構造をとるMn <sub>2</sub> .7Gaに対する元素置換効果		共同	2020年9月		日本金属学会(不明)		藤田裕史, 岡田宏成	
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>								
<b>I. 特許</b>								

現在の課題・目標	① レアメタルを使用しない新規磁性材料の開発 ② マルテンサイト変態を示すホイスラー合金の開発 ③ 高異方性Mn合金の開発		
今年度の進捗状況	① 軽元素添加を施したFe-Mn-Ga系合金に関する物質開発を行った. ② Fe-Mn-Ga合金のマルテンサイト変態の発現条件を見出した.		
来年度の進捗目標	① 高圧磁化測定の高圧化. ② Fe-Mn-Ga合金の高異方性合金の開発. ③ 金属系新規超伝導物質の開発.		
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2008年～		日本高学力学会 会員	
2004年～		日本磁気学会 会員	
2003年～		日本物理学会 会員	
1999年～		日本金属学会 会員	
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	准教授	氏名	佐瀬 一弥	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
オンライン授業の実践		2020年		COVID-19に伴うオンライン授業の実施が決まったことにより、オンライン授業の実施方法を検討し実践した。形態としては、人間工学オンタイム(ブレイクアウトルームの活用)、機械知能工学実験Iオンタイム(学生が書いた設計図に基づいた、教員・TAによる回路作成実践の実演)、人と機械工学オンデマンド(VRアバタを用いた動画教材作成)			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・機械知能工学実験II「人間の知覚に関する実験」のデジタル化</li> <li>・大学院科目「動力学解析特論」の改良</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>・機械工学実験IIのテーマ「人間の知覚に関する実験」の内容を一新し、さらにハイブリッド授業の実施のためにオンライン教材の作成、オンラインでの実験環境の整備を行った。</li> <li>・動力学解析特論の実施に向けて、マルチボディダイナミクスや柔軟物体の動力学のプログラミング実践を行うことが可能な教材開発を進めた。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・機械知能工学実験II「人間の知覚に関する実験」で、より深い考察を引き出すような実験結果の解釈の仕方を促す教材開発を行う。</li> <li>・「動力学解析特論」はPythonベースで開発を進め、受講者が自分のPCで興味に応じて学習できるようにする。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
柔軟物体の力覚提示に対応したゲームエンジンプラグインNamakoの開発		単著	2020年12月	日本バーチャルリアリティ学会論文誌, 日本バーチャルリアリティ学会論文誌		©佐瀬一弥, 陳曉帥, 辻田哲平, 近野敦	pp.366-373頁
Motion analysis for better understanding of psychomotor skills in laparoscopy: objective assessment-based simulation training using animal organs		共著	2020年9月	SPRINGER, SURGICAL ENDOSCOPY AND OTHER INTERVENTIONAL TECHNIQUES, 35		Koki Ebina, Takashige Abe, Madoka Higuchi, Jun Furumido, Naoya Iwahara, Masafumi Kon, Kiyohiko Hotta, Shunsuke Komizunai, Yo Kurashima, Hiroshi Kikuchi, Ryuji Matsumoto, Takahiro Osawa, Sachiyo Murai, Teppei Tsujita, Kazuya Sase, Xiaoshuai Chen, Atsushi Konno, Nobuo Shinohara	pp.4399-4416
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
手術ナビゲーションのための弾性体リアルタイム接触変形シミュレーションシステムの開発	共同	2021年3月	日本バーチャルリアリティ学会ハプティクス研究委員会第26回研究会(オンライン)	澁谷 紗也華, 小水内 俊介, 辻田 哲平, 佐瀬 一弥, 陳 曉帥, 近野 敦	
鼻腔内視鏡手術手技計測システムの開発	共同	2021年3月	第53回計測自動制御学会北海道支部学術講演会(オンライン)	宮路 洸, 鈴木 正宣, 中丸 裕爾, 佐瀬 一弥, 陳 曉帥, 辻田 哲平, 小水内 俊介, 本間 明宏, 近野 敦	
重心移動を利用した重量感提示デバイスの軽量化と重量弁別実験による性能評価	共同	2020年12月	日本バーチャルリアリティ学会ハプティクス研究委員会第25回研究会(オンライン)	木村 尚斗, 佐瀬 一弥	
Surgical skill analysis based on the way of grasping organs with forceps in dissection procedure of laparoscopic surgery	共同	2020年9月	Proceedings of 23rd CISM IFToMM Symposium on Robot Design, Dynamics and Control (ROMANSY 2020)(不明)	Koki Ebina, Takashige Abe, Shunsuke Komizunai, Teppei Tsujita, Kazuya Sase, Xiaoshuai Chen, Madoka Higuchi, Jun Furumido, Naoya Iwahara, Yo Kurashima, Nobuo Shinohara, and Atsushi Konno	
ロボットの手先接触力測定による柔軟物接触時反力データの収集とその視触覚提示における利用	共同	2020年5月	ロボティクス・メカトロニクス講演会 2020(不明)	武田 賢, 鈴木 裕也, 佐瀬 一弥	pp.2P1-M09
吸引触覚・力覚統合ディスプレイを用いた硬軟感知覚における皮膚感覚と深部感覚の寄与の調査	不明	2020年5月	ロボティクス・メカトロニクス講演会 2020(不明)	木下 祐樹, 永野 光, 佐瀬 一弥, 昆陽 雅司, 田崎 勇一, 横小路 泰義	pp.2A2-D15
吸引触覚・力覚統合ディスプレイを用いた硬軟感知覚における皮膚感覚と深部感覚の寄与の調査		2020年	ロボティクス・メカトロニクス講演会 2020	木下 祐樹, 永野 光, 佐瀬 一弥, 昆陽 雅司, 田崎 勇一, 横小路 泰義	
腹腔鏡手術剥離操作における鉗子把持力・把持位置の技量分析		2020年	ロボティクス・メカトロニクス講演会 2020	海老名 光希, 安部 崇重, 小水内 俊介, 辻田 哲平, 佐瀬 一弥, 陳 曉帥, 樋口 まどか, 古御堂 純, 岩原 直也, 倉島 庸, 篠原 信雄, 近野 敦	
ロボットの手先接触力測定による柔軟物接触時反力データの収集とその視触覚提示における利用		2020年	ロボティクス・メカトロニクス講演会 2020	武田 賢, 鈴木 裕也, 佐瀬 一弥	
津波防災まちづくりゲームへの避難行動および家屋破壊の導入		2020年	令和元年度土木学会東北支部技術研究発表会	木村 達也, 三戸部 佑太, 佐瀬 一弥, 阿部 政哉	
データ駆動力覚提示のための小型三軸直交ロボットを用いた柔軟物体の反力分布の測定と推定		2020年	日本機械学会東北学生会第50回学生員卒業研究発表講演会	武田 賢, 佐瀬 一弥, 鈴木 裕也	
手の影との接触に反応するバーチャル物体のプロジェクタ投影		2020年	日本機械学会東北学生会第50回学生員卒業研究発表講演会	打矢 峻, 佐瀬 一弥	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	触覚提示技術の新しい応用先開拓と応用のために必要な技術開発及び基礎研究。				
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>触覚技術の基礎研究として、測定に基づく触覚モデルの生成手法の研究を行っている。データ収集方法としてロボットやモーションキャプチャシステムの利用を進めた。</li> <li>物理エンジンの効率的な開発を行うためのビルドシステムの整備を行った。</li> </ul>				

<p>来年度の進捗目標</p>	<p>・柔軟物体変形シミュレーションの高速化のためのマルチGPU利用。 ・測定データに基づく柔軟物の不均質材料特性の推定手法開発。</p>		
<p>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</p>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
<p>科学研究費補助金 基盤研究(A)</p>	<p>2018年度～2021年度</p>		<p>腹腔鏡手術は低侵襲で患者への負担が少ない反面、手術器具操作の自由度が制限される、器具から受ける力を術者が感じにくい、カメラに死角が存在する、出血時の止血が難しい、などの理由により高度な手術手技が要求される。本研究は、腹腔鏡手術中のヒューマンエラーを未然に防ぎ、安全性を高めつつ手術を容易にする手術支援システムを開発することを目的とする。</p> <p>この目的の達成のために、研究開発項目を大きく、1手術支援システムの開発、2アニマル実験での手術支援システムの評価、に分け、小課題として、1-1手術手技の定量的評価法の確立、1-2医用画像からの臓器モデル自動生成法の確立、1-3臓器変形・発生応力実時間推定、1-4臓器プロジェクションマッピング、2-1アニマル実験での手術手技の記録と解析、2-2臓器変形、発生応力実時間推定の実験・評価、2-3手術支援システムの評価・検証、を設けた。平成30年度は1-1、1-2、1-3、1-4、2-1の小課題に取り組んだ。</p> <p>課題1-1、2-1では、赤外線反射マーカーを取り付けた腹腔鏡手術器具(把持鉗子、はさみ鉗子、持針器、血管用クリップ結紮器)を用いて、40名の泌尿器科外科医(そのうち泌尿器腹腔鏡技術認定医は9名)および5名の医学生にブタ臓器を用いたリンパ節郭清と腎実質縫合を行ってもらい、熟練医師と初学者で、どのような指標で有意差が生じるのかを解析した。</p> <p>課題1-2、1-3では、医用画像から臓器の有限要素モデルを「埋め込み」と呼ばれる手法で半自動的に生成する手法を開発し、その臓器有限要素モデルを用いて模擬手術での反力と変形を実時間で計算するシミュレーション技法を開発した。</p> <p>課題1-4では、実時間手術シミュレーションで予測した臓器の状態を実際の患者に投影して表示する技術の開発に取り組んだ。</p>
<p>科学研究費補助金 基盤研究(C)</p>	<p>2018年度～2021年度</p>		<p>共同研究者と定期的に(概ね1/月TV会議などを利用し)会議を行い新規レトラクタの構造や材料について議論を行なっている。また、共同研究者と共に試作品を設計製作し会議にて議論を重ね、数度の改変を行い暫定的なレトラクタを作成した。</p> <p>さらにレトラクタが直接脳組織に接する部分については一体型の構造とせず、着脱可能なディスプレイなシース構造とすることを模索しており、このシースに圧モニターを装着可能とする構造を工夫中である。こちらについては新たに専門的な知識と技術を持った共同研究者を加え、東京都にて共同研究者間で議論を行い、今後の方向性や必要な準備について議論を行なった。</p> <p>また、次年度に予定している動物実験の実施計画書を作成し動物実験に備えた。</p> <p>本年の研究内容関連の報告として、第27回脳神経外科手術と機器学会のシンポジウム(2018.4月)に“小児水頭症シャント手術の技と道具”，第77回日本脳神経外科学会総会の口演(2018.10月)に”局所麻酔下内視鏡下脳内血腫摘出術の有効性の検討 preliminary study”を発表した。</p> <p>また、Endoscopic hematoma evacuation for intracerebral hemorrhage under local anesthesia: Factors that decide removal rate of hematoma evacuationをWorld Neurosurgeryに投稿しacceptされた。</p>



科学研究費補助金 若手研究	2018年度～2020年度		<p>2018年度は研究実施計画に従い、三次元力覚スキャナのハードウェア構築、および、最適化ソフトウェアの基礎検討に取り組んだ。</p> <p>ハードウェアでは、反力測定用の力覚プローブの軌跡と接触に伴う反力の記録が可能な装置の開発を進行中である。本年度は、構成要素である3軸ロボット、6軸力覚センサを導入し、制御システムの構築を行った。また、手法開発段階でも円滑な測定データ作成を実現するため、ロボットの代わりに人間の手により直感的な入力を可能とするモーションキャプチャシステムの導入を行った。</p> <p>最適化ソフトウェアについては、最終的には3次元かつ不均質な材料に対する内部材料特性の推定を目指す、本年度は初期検討として2次元均質材料を対象とした検討を行った。また、最終的には開発したハードウェアを用いて得られたプローブの軌跡と反力の実測値を最適化ソフトウェアに入力し、物体内部の材料特性の推定を行うが、現段階では実測値の代わりにデータを数値シミュレーションにより作成し最適化アルゴリズムの入力値とした。したがって材料値が既知であり、最適化アルゴリズムによる推定値とこの既知の値を比較することでアルゴリズムの妥当性を評価可能である。現状では、MATLAB Optimization Toolbox の非線形計画法ソルバーを用い、均質な線形弾性体モデルに対しヤング率の推定が可能であることを確認した。今後は本フレームワークをベースに発展させていく。</p> <p>また、2018年度はソフトウェア開発において最適化アルゴリズムの一部である物理エンジンの改良を行い、能動的運動対象物に対する力覚的相互作用と接触力の時空間分布計算が可能となった。これらの成果についてはそれぞれ CEDEC2018, VR学会年次大会, ハプティクス研究委員会研究会等で発表し, VR学会年次大会では学術奨励賞を受賞した。</p>
科学研究費補助金 科研費 基盤研究(C)	2017年度～2021年度	共同(研究分担者)	新規な脳組織圧排器具の開発
科学研究費補助金 科研費 基盤研究(A)	2017年度～2020年度	共同(研究分担者)	実時間動力学シミュレーションと複合現実を用いた手術支援システム
科学研究費補助金 科研費 若手研究	2017年度～2019年度	個別	力覚提示のための柔軟物体モデリングを自動化する三次元力覚スキャナ
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2021年1月～2021年1月		サイエンス・デイin多賀城2020にてオンライン講座を実施	
2021年1月		みやぎ地域連携マッチング・デイズ2021に出展。タイトルは「柔軟物体の触覚提示」	
2020年9月		第25回バーチャルリアリティ学会大会, オープンバーチャルエキシビジョンにて発表	
2020年9月		デジタルハリウッド大学院×株式会社DWARF PLANET「新たな音楽レッスンの具体的な方法(プロタイプ版)」出演(加茂フミヨシ氏と共同開発した PICK FEELについて) 出演	
2020年1月～		日本バーチャルリアリティ学会 ハプティクス研究委員会 幹事	
2018年1月～		計測自動制御学会 触覚部会 委員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			



2020年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	准教授	氏名	長島 慎二	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
2019年6月～2020年8月			野球場における防球ネット設置条件を検討するための打球飛跡解析に関する長谷川体育施設株式会社との受託研究契約締結(野球場における防球ネット設置条件を検討するための打球飛跡解析に関する長谷川体育施設株式会社との受託研究契約締結)				
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>							

2020年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	准教授	氏名	濱西 伸治	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
仙台高等専門学校 ジュニアドクター育成塾 サイエンスセミナー 「聴覚のミステリーへようこそ！」		2020年8月8日					
現在の課題・目標		オンライン講義の導入に伴う、本学が有する教育ツールの試行(respon, manaba)					
今年度の進捗状況		カリキュラムについては概ね理解した。また、担当する講義では積極的にmanaba, responを活用している					
来年度の進捗目標		manabaの積極的利用。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
Objective assessment of autophony during phonation in the diagnosis of patulous Eustachian tube patients	単著	2020年12月	Elsevier, Auris Nasus Larynx, 48(4)	Ryouchichi Ikeda(*), Shinji Hamanishi(*), Toshiaki Kikuchi, Hidetoshi Oshima, Yoshinobu Kawamura, Yusuke Kusano, Tetsuaki Kawase, Yukio Katori, Hiroshi Wada, Toshimitsu Kobayashi *equal first author	pp.738-744		
Analysis for Packing State of the Packed Bed of Hydrogen Storage Alloy Using Discrete Element Method	共著	2020年4月	Journal of the Japan Institute of Energy, Journal of the Japan Institute of Energy, 99(4)	Yuya ONO, Tomohiro OTANI, Masahiko OKUMURA, Shinji HAMANISHI, Yasuhiro SAITO, Yohsuke MATSUSHITA, Hideyuki AOKI	pp.41-51		
Longitudinal changes in dynamic characteristics of neonatal external and middle ears	共著	2020年4月	International Journal of Pediatric Otorhinolaryngology, International Journal of Pediatric Otorhinolaryngology	Nattikan KANKA, Michio MURAKOSHI, Shinji HAMANISHI, Risako KAKUTA, Sachiko MATSUTANI, Toshimitsu KOBAYASHI, Hiroshi WADA	pp.不明		
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
「でるラジ」出演(北日本放送ラジオ)『「でるラジ」出演(北日本放送ラジオ)』	単著	2021年3月	不明	不明	pp.0		

「でるラジ」出演(北日本放送ラジオ)『「でるラジ」出演(北日本放送ラジオ)』	単著	2020年6月	不明	不明	pp.0
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
Cntn5-ex4欠損マウスの聴覚機能と社会的行動の解析	共同	2020年7月	第43回日本神経科学大会, 神戸市, 2020年7月29日(不明)	佐野 英美, 石田 悠, 田中 絢子, 秋元 将吾, 今井 悠二, 吉見 一人, 濱西 伸治, 小出 剛, 霜田 靖	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	査読付き論文の投稿				
今年度の進捗状況	査読付き論文を投稿中である(1編)				
来年度の進捗目標	筆頭著者としての査読付き論文の投稿				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要	
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2017年度～2020年度	共同(研究分担者)		発声音を用いて、外耳道音圧を測定することにより、新規耳管機能検査装置の開発を行った。開発を行った耳管機能検査装置は、さまざまな有用性・妥当性の検討を行うことにより、耳管開放症ではないコントロール群と耳管開放症群において発声音の有意な差を認め、耳管開放症の新しい診断機器としての有用性並びに妥当性を示すことに成功した。新たな耳管機能評価装置としての可能性を示す結果となった。	
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2016年度～2020年度	個別(研究代表者)		我々は、頭部への打撃実験やシミュレーションにより、頭部に激しい衝撃を伴うコンタクトスポーツの愛好者に見られる難聴が、打撃によって頭蓋骨を伝わる振動である「骨導」が大きな要因となっているのではないかと考え、本課題ではサポーターを面防具に装着すれば、打撃による骨導が低減できるのではないかと考え、本課題ではサポーターによる面防具への打撃・音圧低減効果を評価するため、人頭模型を用いた打撃実験を行った。その結果、サポーターを面防具に装着した場合、約30%衝撃を低減しており、サポーターの使用により打撃低減効果が認められた。	
IV 学会等及び社会における主な活動					
2011年4月～2021年3月		日本設計工学会 会員			
2011年4月～2021年3月		日本設計工学会 東北支部 商議員			
2003年4月～		日本機械学会 バイオエンジニアリング部門 会員			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等	
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
VI 学内における管理運営に関する諸活動					

**【教務・学生支援関係】**

機械知能工学科1年グループ主任

工学部学生会 剣道部顧問

工学部学生会 ソフトテニス部顧問

**【学内委員】**

工学部オープンキャンパス実施委員長

国際交流委員

地域連携センター所員

**【出張講義】**

2020.9.11 出張講義(東北生活文化大学高校)

2021.3.18 出張講義(古川工業高校)

2020年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	准教授	氏名	李 淵	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
イオンマイグレーションによる金属微細材料の位置制御に関する研究	共同	2021年3月	日本機械学会東北支部 第56期総会・講演会(ONLINE)	菅原 隆寿, 李 淵			
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要				
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2020年度～	共同(研究代表者)					
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等				
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>							

2020年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	教授	氏名	岩谷 幸雄	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
模擬講義		2021年2月19日		東北学院榴ヶ岡高等学校「TGタイム」遠隔授業を行った・			
現在の課題・目標		電気電子工学科の情報通信分野を1年生から4年生までの講義の中で体系立て教授する。研究室の学生が自信を持って社会に出て行けるように指導する。社会活動としての教育活動に積極的に取り組む。					
今年度の進捗状況		模擬講義等に積極的に参加している。					
来年度の進捗目標		電気電子工学科で新しく立ち上げる音響通信工学の講義の評価が良くなるように工夫する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>							
Toward Cognitive Usage of Binaural Displays『Toward Cognitive Usage of Binaural Displays』		共著	2020年	※制限文字数100文字を超えたので『概要』へ移行。、※制限文字数50文字を超えたので『概要』へ移行。、※制限文字数50文字を超えたので『概要』へ移行。		Yoiti Suzuki, Akio Honda, Yukio Iwaya, Makoto Ohuchi, and Shuichi Saskamoto	pp.665-696
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
【招待パネリスト】オンラインをこえて		共同	2020年9月	第25回日本バーチャルリアリティ学会大会 1A3(不明)		廣瀬 通孝(東京大学名誉教授)、岩谷 幸雄(東北学院大学)、中村 聡史(明治大学)、雨宮 智浩(東京大学)	
【招待講演】頭部運動を伴う音像定位と刺激長に関する考察		単独	2020年9月	2020年秋期 日本音響学会講演論文集(不明)		岩谷幸雄	pp.44354
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		人間をサポートする情報通信システムのあり方について、システム構築、人間の知覚特性等を往来させながら研究を深化させる					
今年度の進捗状況		在外研究中の研究成果を各種学会で発表した。					
来年度の進捗目標		在外研究中に新たに得た知識や知見を基に、学生の指導法、研究の進捗よく管理について工夫をする。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	



科学研究費補助金 科学研究費補助金 基盤研究(C)	2018年度～2020年度	個別(研究分担者)	音像定位システムを用いた空間認識訓練システムの構築
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2020年5月～	日本音響学会2020年秋季研究発表会 遠隔開催実行委員長 会員		
2020年1月～	Chair of IEEE SPS Sendai chapter 委員		
2019年5月～	日本音響学会理事 会員		
2017年3月～	仙台市環境影響評価審査会委員 委員		
2015年10月～	国際計量研究連絡委員会 音響・超音波・振動分科会委員 委員		
2014年5月～	情報処理学会東北支部運営委員 会員		
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
工学部長 東北学院 評議員			

2020年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	教授	氏名	小澤 哲也	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
オンデマンドによる授業理解の促進		2020年		オンデマンド講義では、動画を多用し理解を促進させている。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
「科学技術社会を生きる」のオンデマンド講義資料		2020年		「科学技術社会を生きる」では科学技術と生活に関連した諸問題について取り上げて講義した。			
「技術者倫理」のオンデマンド講義資料		2020年		「技術者倫理」では技術者に必要な人間関係の問題、著作権と特許について講義資料を作成した。また、技術者としての作業の安全確保の手段や危険予知訓練などにも言及した内容とし、人為的な問題による事故事例研究についても講義した。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
FD研修会への参加		2020年		「コロナ禍での授業運営について」FD研修に参加。			
FD研修会への参加		2020年		「遠隔授業の受講状況に関する学生調査」報告へ参加。			
FD研修会への参加		2020年		遠隔授業、後期授業に関する工学部FDに参加。			
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
高校生向けの出張講義活動		2020年		古川工業高校にて職業指導に関する講義を実施した。			
高校生向けの出張講義活動		2020年		古川工業高校にて電気工事士および電気主任技術者の資格に関する講義を実施した。			
高校生向けの出張講義活動		2020年		東北生活文化大学高校にて「科学技術社会を生きる」の講義を実施した。			
現在の課題・目標		基礎的知識の獲得を目指した卒業研究の指導。 反復演習による理解度の向上。 学生とのコミュニケーション時間を増やし学生の意識高揚に努める。					
今年度の進捗状況		細やかな卒業研究の指導および発表練習を実施している。 勉強方法だけでなく学生生活のあり方や進路等についても相談に応じている。 オンデマンド講義資料を完成させた。					
来年度の進捗目標		オンデマンド講義資料を充実させる。 コロナ禍における就職活動中の学生に対し、適切な助言を与える。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							

現在の課題・目標	ナノグラニューラー磁性薄膜を利用した磁気センサの開発。 磁気センサを応用した電磁探傷計測システムの開発。 磁氣的相互作用を使用した位置検出システムの開発。		
今年度の進捗状況	ナノグラニューラー磁性薄膜の温度依存性について評価し改善策を検討中。 磁気を利用した位置検出システムの開発を完了。 磁気センサを利用した厚さ測定システムの開発に成功。		
来年度の進捗目標	磁性流体の印加磁界特性の評価。 磁性流体を用いた減衰機構の開発。 磁気探傷を応用した鉄粉検出システムの開発。		
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2020年4月～	電気学会東北支部役員 会員		
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
大学案内編集委員会 委員 入試部副部長 電気電子工学科1年 グループ主任			

2020年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	教授	氏名	郭 海蛟	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
授業内容の定着における工夫		2020年5月1日～2021年3月30日		担当する授業について対面授業に近い形で動画作成をした。半分事前に作成したものと半分その場で手入力することにより、臨場感を出すことで、学生が一人で見ても注意力を引き付けるように工夫した。			
学生実験における工夫		2020年5月1日～2021年3月30日		学生実験も対面ができない状況ではあるが、いつもより丁寧に説明する動画を工夫して作った。実際の操作を想定し、ステップ毎の操作を説明しながら実際の操作過程を経験できるように作成した。			
演習科目における工夫		2020年5月1日～2021年3月30日		今年度は遠隔授業となったので、例年通りのやり方は通用しない。授業の時間帯に常にネット上に貼り付けて、学生達がManabaからいつでも質問ができるような形を取った。質問をしたい場合はすぐに質問ができるような体制を取ったので、対面授業に近い形と考えられるから従来通りの質を保証するように努めた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		遠隔授業で学生の理解度を如何に正確に把握することが課題となる。まずは学生の質問とレポートの出来からその理解度を把握することを目標とする。					
今年度の進捗状況		学生の質問とレポートの出来をよく分析して、よくある質問とよくある間違いしやすい箇所を抽出して次回の授業の最初に重点的に復習すると同時にレポートを解説時によく間違いのあるところの例を挙げながら丁寧に説明することに努めるように心がけている。					
来年度の進捗目標		解説などをした後に、学生の理解の度合いを高めたかどうかを再検討したい。Manabaを活用して、学生達に再度質問及び近い課題を出し、理解度の再確認を行う。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
A Design Method of High Order Repetitive Controllers		単著	2020年6月	The 21th World Congress of the International Federation of Automatic Control (IFAC), Berlin, Germany, June 2020, The 21th World Congress of the International Federation of Automatic Control (IFAC), Berlin, Germany, June 2020		©Haijiao Guo, Otomokazuki and Ishihara Tadashi	pp.Paper-ID 3035, 6pages
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							

現在の課題・目標	1. 繰り返し制御による非対称性を持つモータの駆動システムの研究 2. 高次繰り返し制御系の設計と特性に関する研究 3. 離散時間系の外乱キャンセル制御に関する研究		
今年度の進捗状況	1. 上記1について、シミュレーションの検討を行った。国際大会に投稿準備中。 2. 上記2について、詳細の解析を行った。国際大会にて発表した。 3. 上記3について、理論の解析を行った。国際会議に投稿準備中		
来年度の進捗目標	前年度の課題を発展すると共にその成果を国際、国内学会での発表を目指す		
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2014年～			計測自動制御学会東北支部運営委員会顧問 会員
2012年～			SICE エネルギー・環境システム制御技術調査研究会委員 委員
2010年～			IEEE Senior Member 委員
1995年～			IEEE
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
1. 大学財政専門小委員会 委員 2. 工学部将来計画委員会 委員 3. 電気工学専攻主任			

2020年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	教授	氏名	金 義 鎮	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
オンライン授業のためのマルチメディア講義資料作成		2020年4月～2021年3月31日		オンライン授業のため、オンタイム用およびオンデマンド用のマルチメディア講義資料を作成した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
多賀城市教育委員会との連携事業		2020年8月		工学総合研究所主催の「21世紀のキーテクノロジーを学ぶII」を企画したが、コロナウイルスの影響によりすべてキャンセルせざるを得なかった。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
顔認識向上のためのStyleGANを用いた疑似訓練画像生成	共同	2020年9月	第19回情報科学技術フォーラム(北海道大学)	佐藤立基, 金義鎮			
単極脳波信号の瞬きアーチファクト除去に関する考察	共同	2020年8月	電気関係学会東北支部連合大会(日本大学)	守春道, 金恵鎮, 金義鎮			
教育現場における眼鏡型端末活用に関する一検討	共同	2020年8月	電気関係学会東北支部連合大会(日本大学)	佐藤立基, 金義鎮			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要				
科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤(C)	2017年度～2020年度	共同(研究分担者)	韓国語会話授業におけるICTを活用したアクティブラーニング教授学習システムの開発				
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							

2017年～	映像情報メディア学会 ※ 東北支部庶務幹事
2010年4月～	映像情報メディア学会 ※ 会員
2008年～	コンピュータ利用教育学会 会員
2006年～	教育システム情報学会 会員
1998年～	電子情報通信学会 会員

#### V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

#### VI 学内における管理運営に関する諸活動

--

2020年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	教授	氏名	呉 国紅	大学院の授業 担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
<b>教育実践上の主な業績</b>		<b>年月日(西暦)</b>		<b>概要</b>			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
授業の秩序を維持し学生の学習意欲を刺激するインセンティブ		2020年4月1日		授業中に教室で真面目に勉強できる雰囲気を極力保つことなどで、学生が学習しやすい環境を作る(例えば、私語などを厳しく注意させることなど)。また、評価する際に、授業中で学生をメモさせた重点的な内容を試験問題に組み込んで回答させ、真剣に勉強してきた学生が比較的良い成績を取れるように試験問題の出し方も工夫する。これらのことにより、学生の学習意欲を刺激することに繋がる。			
学生の授業参加の意欲の促進と独自の授業評価の実施		2020年4月1日		学習成果の評価は最終試験だけでなく、授業の途中でも参加意欲の考察や小テストなどを行い、その結果を合わせて総合的に評価しているので、学生は積極的に授業に参加する意欲が強まる。			
学生の科学知識の修得、良い人格の育成と研究能力の向上の重視		2020年4月1日		学生教育については、科学知識を修得させることだけでなく、健全な社会常識、豊かな人間性を持った人物に育つように心掛ける。更に、新知識の獲得力、新事物への創造力を育成させることにも力を注ぐ。			
学生との接し方(質問対応、個別指導、人間的交流など)における工夫		2020年4月1日		<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎週研究発表会を行っており、学生はその間に勉強または研究した結果について発表資料を作成して発表する。また、学生の研究をスムーズに進めるために、文献の検索、研究内容の絞り、研究テーマの決定などについて、やり方や自分の経験、ノウハウなどもその際に学生に教える。</li> <li>・毎週のゼミおよび発表スケジュールの計画、オープンキャンパスの実施、研究室ホームページの作成、研究室の日常管理、スポーツ活動の実施などの役目を細かく分けてそれぞれ学生を担当させ、学生を自主的に研究室の運営に参加させることに心がける。</li> <li>・学生同士では、研究活動、研究室管理などにおいて、先輩の学生が後輩の学生へ指導や助言をさせ、学生のリーダーシップ能力を向上させる。</li> <li>・勉強、研究における質問などだけでなく、学生生活・就職活動に関しても学生からの質問や相談などを随時に対応する。</li> <li>・毎年、研究室のスポーツ大会、研究合宿、研修旅行などを開催する。</li> </ul>			
学生が分かりやすく、勉強しやすい授業のやり方の工夫		2020年4月1日		PowerPointで授業を行い、画像や図などの多種多様な情報を利用して説明することにより、学生が授業内容に対する理解を深める。また、講義内容を準備する際に、多人数・大教室で行う講義のことを配慮し、文字を大きくしたり、当該内容が教科書における頁数を記述してあるため、学生にとっては分かりやすく授業を受けることを工夫する。また、授業中に教室雰囲気を極力保つことなどで、学生が学習しやすい環境を作る。			
学習する内容の明確化と学生を授業に集中させる工夫		2020年4月1日		毎回の授業では、その回の内容が記載されたプリントを用意して学生に配布する。プリントに講義内容の概略および流れを明記してあるので、その回の授業中では何の内容を勉強するのかまたはどこまで進めるのかは一目瞭然である。更に、プリントに空白欄を設けてあり、学生が授業の内容を聞きながらメモをとらなければいけないことで授業に集中することもできる。			
学習した内容の記憶への定着と授業理解の促進		2020年4月1日		毎回の授業の冒頭で、前回の講義内容の復習およびその回の内容の流れを簡単に説明する。授業中に、学生を質問させることを励まし、随時に対応する。また、授業終了時に簡単なまとめを行う。			
英語教材を利用した専門知識の教育		2020年4月1日		学部三年、四年生又は大学院生を対象とし、英語専門教材(例えば《Power System Stability and Control》)を使って、学生達に専門知識を説明しながら、英語又は日本語の専門用語や英語論文の読み方・書き方などを学習させる。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
東北学院大学「電気情報工学実験Ⅲ、Ⅳ指針」		2021年1月～2021年2月		「電力システムの基礎特性」と「DC-ACインバータ回路」の内容を執筆した。			
第18回東北地域電力技術研究交流会における招待講演を行った。講演テーマ:「電気系学科における電力・エネルギーに関する教育研究の取り組み」		2020年11月25日		東北大学が主催した電力研究に関するコンソーシアムにおいて電力制御研究者の代表として招待講演を行い、東北学院大学工学部における電気・電力エネルギー関係の教育・研究活動を他の大学関係者や電力会社の技術者らに説明し、これらの関係者と技術交流を行った。			



3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4. その他教育活動上特記すべき事項					
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業中に学生とのコミュニケーション時間を増やすこと</li> <li>・授業時間以外で学生とのコミュニケーションの機会をもっと多く作ること</li> <li>・自分の研究室所属以外の学生達とのコミュニケーションも増やすこと</li> </ul>				
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生が授業中に積極的に質問したり、発言したりすることが少ない傾向に対し、本年度では、授業中に学生が答えやすい質問や演習課題を用意し、状況に応じて教員のほうが学生に答えさせることなどの方策を講じ、授業の雰囲気を活発させることを努力した。その結果、以前よりも学生から多くの質問が出てきたことが見受けられた。</li> <li>・本年度では、授業やゼミ以外の時間帯にも、合宿やスポーツ大会、飲み会などさまざまな場において学生とコミュニケーションを行ったことにより、学生達との間に信頼関係を更に深めた。</li> <li>・食堂や学校活動の場において、積極的に学生と会話、交流を行い、学生の心情、考えなどを理解することを努力した。</li> </ul>				
来年度の進捗目標	今までに学生に評価された点を継続しつつ、更に学生との接触する機会を作ること				
II 研究活動					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Prospects of key technologies of ontegrated energy systems for rural alectrification in China	共著	2021年2月	Journal of Global Energy Interconnection,Vol.4,Issue 1	J.Li, D.Wang, H.Jia, G.Wu, W.He, H.Xiong	pp.3-17
集中キャパシタと先端短絡スタグを用いた集中分布混在型2周波変成器	共著	2021年1月	電気学会論文誌C(電子・情報・システム部門誌), 141(1)	丹野 友佑, 大場 佳文, 呉 国紅	pp.1-2
Small-current grounding fault location method based on transient main resonance frequency analysis	共著	2020年8月	Journal of Global Energy Interconnection, 3(4)	Y. Zhang, X. Wang, J. Li, Y. Xu, G. Wu	pp.324-334
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
Improvement of Voltage Stabilization in a Hybrid Microgrid Supplied by RES by use of Weighted Moving Average Filter	共著	2021年1月	東北学院大学工学研究報告書, 1	Seiya ISHIDA, Guohong WU	pp.6頁
Optimization of Off-grid Industrial Park Integrated Energy System Considering Production Process	共著	2020年8月	IEEE Power & Energy Society General Meeting (PESGM), No. 20296240	Y. Zhang, X. Wang, Y. Xu, J. He, W. Sun, Z. Li, G. Wu	pp.1-5
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
Split Redix Algorithmを用いた高周波解析手法の検討	共同	2021年3月	令和3年電気学会全国大会論文, No.1-046(日本)	鶴田祐天、呉国紅	
集中キャパシタと先端短絡スタブを用いた集中分布混在型2周波変成器に関する検討	共同	2021年3月	令和3年電気学会全国大会論文, No.1-104(日本)	丹野友佑、大場佳文、呉国紅	

マイクログリッド最適運用計画問題における差分進化法の解析特性に関する研究	共同	2021年3月	令和3年電気学会全国論文, No.6-185(日本)	小山春香、呉国紅	
低圧セルに直流電源を用いたトランスレスSTATOOMの配電系統における電圧補償効果に関する検討	共同	2021年3月	令和3年電気学会全国大会論文, No.6-159(日本)	小野寺大斗、三角素史、清川崇、呉国紅	
ハイブリッドマイクログリッドシステムにおける加重移動平均フィルタによる電圧変動抑制効果の評価	共同	2021年3月	令和3年電気学会全国大会論文, No.6-190(日本)	石田聖夜、呉国紅	
MMC方式を用いたトランスレスSTATCOMによるRESを含む配電系統の電力品質改善効果に関する検討	共同	2021年3月	令和3年電気学会全国大会論文, No.6-168(日本)	清川崇、呉国紅	
Improvement of Voltage Stabilization in a Hybrid Microgrid Supplied by RES by use of Weighted Moving Average Filter	共同	2020年9月	2020年電気学会電力・エネルギー部門大会(日本)	石田 聖也、呉 国紅	

#### H. 翻訳(学術書や原典等)

#### I. 特許

現在の課題・目標	関係する他の分野、他の学校、他の国の研究者との交流を深め、共同研究を進めること
今年度の進捗状況	大学の学生教育に支障のないように心がけながら、可能な限りに国際・国内の会議に参加し、大学院生や学部生の高度な学生教育を実現することと共に、他の研究者との技術交流、意見交換が多く実施した
来年度の進捗目標	他の学校、他の国の研究者と共同研究などを通して技術交流を深める

#### III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
----------	----------	------------------------	----

#### IV 学会等及び社会における主な活動

2018年12月～	IEEE Tran. On Smart Grid論文審査委員会 委員
2018年9月～	IEEE Tran. On Sustainable Energy論文審査委員会 委員
2017年10月～	IET Generation, Transmission & Distribution論文審査委員会 委員
2017年4月～	International Tran. on Electrical Energy Systems論文審査委員会 委員
2016年8月～	東北学院大学工学総合研究所中学校啓発活動 講師, 実演
2016年8月～	日本電気学会上級会員 会員
2015年11月～	IEEE Senior Member 会員
2012年8月～	International Journal of Smart Grid and Clean Energy 委員会 編集委員会委員
2011年8月～	International Journal of Science and Engineering 委員会 編集委員会委員
2009年8月～	電気学会東北支部連合大会 パネル司会・セッションチェア等
2009年8月～2021年8月	工業教員免許更新講習 講師
2007年11月～	日本電設工業協会と教職員・学生の懇談会 情報提供, 運営参加・支援
2006年8月～	電気学会電力・エネルギー部門YPC審査委員 会員
2005年8月～	電気学会電力・エネルギー部門論文誌審査委員 会員
1996年4月～	日本電気学会 会員

#### V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

#### VI 学内における管理運営に関する諸活動

工学研究科電気工学専攻主任などの委員会委員多数  
国際交流副部長  
学生部活ダンス部顧問

2020年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	教授	氏名	佐藤 文博	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
遠隔講義に関する効果的な手法		2020年～		オンデマンド、オンライン講義における特性を最大限に利用した、学習意欲を高める工夫を行っている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①学生の学習意欲を高める様に、講義内容と社会的事項との関連をより具体的に理解できる様にする ②講義レベルを学習意欲の低い学生に合わせて簡易化する事をせず、対外的に通用する様に、常に標準的な学術レベルを学生に強く意識させる様にする ③学生の習熟度合と講義内容への理解度を適切に把握する					
今年度の進捗状況		①と②についてはレポートの記載内容と質問回数増加により、効果があったと思われる。 ③については、各講義毎に行う確認テストの実施によりある程度進捗があった。					
来年度の進捗目標		①については更に詳細なレポート内容を実施する ②については、限られた講義時間の中で、客観的な習熟レベル、対外的な知識レベルを学生自らの判断で行える様に資格試験問題等の提示をより多く行う ③については講義確認テストの内容を改訂する					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
生体ファントムを想定したFESシステムの実験構築に関する検討		共同	2021年3月	令和3年東北地区若手研究者研究発表会(不明)		長田 樹也 佐藤 文博 宮原 敏 松木 英敏	pp.R3-D-07
EV用非接触給電中継システムにおける送電側コイル構成の基礎的検討		共同	2021年3月	令和3年東北地区若手研究者研究発表会(不明)		山崎 渚 安部 拓馬 宮原 敏 佐藤 文博 松木 英敏	pp.R3-D-06
EV走行中非接触給電システムにおけるLCブラスター方式を用いた受電コイル構築に関する基礎的検討		共同	2021年3月	令和3年東北地区若手研究者研究発表会(不明)		齋藤 陽 安部 拓馬 佐藤 文博 宮原 敏	pp.R3-D-05
車内電装ハーネスのワイヤレス化と実適用に関する基礎的検討		共同	2021年3月	令和3年東北地区若手研究者研究発表会(不明)		大森 達貴 安部 拓馬 宮原 敏 佐藤 文博	pp.R3-D-04

移動中非接触給電用漏洩磁界低減キャンセルコイル構築に関する基礎的検討	共同	2021年3月	令和3年東北地区若手研究者研究発表会(不明)	横澤 将貴 安部 拓馬 宮原 敏 佐藤 文博 松木 英敏	pp.R3-D-03
Construction of Wireless Power Transfer System Assuming Drone Operation and Examination of Booster Coil Size	共同	2020年11月	65th Annual Conference on Magnetism and Magnetic Materials(不明)	T. Sawa F. sato S. Miyahara H. Matsuki S. Sasaki	pp.D3-10
A Study on Leakage Magnetic Field Reduction Configuration for High Power Contactless Power Transfer for Industrial Moving Systems.	共同	2020年11月	65th Annual Conference on Magnetism and Magnetic Materials(不明)	T. Abe M. Yokosawa S. Miyahara F. sato H. Matsuki K. Inada	pp.D3-07
車内電装品に着目したワイヤレス電力伝送の高機能化に関する基礎的研究	共同	2020年9月	電気学会基礎材料共通部門退会(A部門大会)(不明)	大森 達貴 佐藤 文博 宮原 敏 松木 英敏 安部 拓馬	pp.2-P-B-6
AGV用ワイヤレス移動中給電システムの構築に関する基礎的研究	共同	2020年9月	電気学会基礎材料共通部門退会(A部門大会)(不明)	横澤 将貴 安部 拓馬 佐藤 文博 宮原 敏	pp.2-P-B-5
EVインフラを想定したワイヤレス給電中継コイルの基本構成に関する検討	共同	2020年9月	電気学会基礎材料共通部門退会(A部門大会)(不明)	齋藤 陽 安部 拓馬 宮原 敏 佐藤 文博 松木 英敏	pp.2-P-A-3
漏洩磁界低減効果を付したEVインフラワイヤレス中継コイルの基本特性に関する検討	共同	2020年9月	電気学会基礎材料共通部門退会(A部門大会)(不明)	山崎 渚 安部 拓馬 宮原 敏 佐藤 文博 松木 英敏	pp.2-P-A-2
FES通信システムの効率化に向けた体内素子ノイズレベル最適化に関する基礎研究	共同	2020年9月	電気学会基礎材料共通部門退会(A部門大会)(不明)	長田 樹也 安部 拓馬 宮原 敏 佐藤 文博 松木 英敏	pp.2-P-A-1
ドローン運用を想定したワイヤレス充電システムの構築とブースターコイルサイズの検討	共同	2020年9月	電気学会基礎材料共通部門退会(A部門大会)(不明)	澤 友宏 安部 拓馬 宮原 敏 佐藤 文博 佐々木 秀	pp.2-P-A-4
産業用移動体システムを想定した大電力非接触給電における漏洩磁界低減構成に関する検討	共同	2020年9月	電気学会基礎材料共通部門退会(A部門大会)(不明)	安部 拓馬 横澤 将貴 宮原 敏 佐藤 文博	pp.2-C-a2-3
連続中継コイルを用いたEV用非接触給電システムにおける給電効率に関する基礎検討	共同	2020年8月	電気関係学会東北支部連合大会(不明)	齋藤 陽 安部 拓馬 宮原 敏 佐藤 文博 松木 英敏	pp.F16
AGV用コイルに対する600W移動中非接触給電の基礎検討	共同	2020年8月	電気関係学会東北支部連合大会(不明)	横澤 将貴 安部 拓馬 宮原 敏 佐藤 文博 松木 英敏	pp.F15

FESシステムにおける通信周波数の設定とノイズレベルの最適化に関する基礎検討	共同	2020年8月	電気関係学会東北支部連合大会(不明)	長田 樹也 安部 拓馬 宮原 敏 佐藤 文博 松木 英敏	pp.F14
ワイヤハーネス削減に向けた車内電装品への非接触給電システム構築に関する基礎的検討	共同	2020年8月	電気関係学会東北支部連合大会(不明)	大森 達貴 安部 拓馬 宮原 敏 佐藤 文博	pp.F12
漏洩磁界低減効果を付したEV用非接触給電システムにおける中継コイル適用時の基本特性に関する検証	共同	2020年8月	電気関係学会東北支部連合大会(不明)	山崎 渚 安部 拓馬 宮原 敏 佐藤 文博 松木 英敏	pp.F11
ドローン運用を想定したワイヤレス充電システムの構築とブースターコイルサイズ変更による特性改善の研究	共同	2020年8月	電気関係学会東北支部連合大会(不明)	澤 友宏 安部 拓馬 宮原 敏 佐藤 文博 松木 英敏 佐々木 秀	pp.F10
漏洩磁界低減構成におけるAGVシステムへの非接触給電に関する検討	共同	2020年8月	電気関係学会東北支部連合大会(不明)	安部 拓馬 横澤 将貴 宮原 敏 佐藤 文博 松木 英敏	pp.F13

#### H. 翻訳(学術書や原典等)

#### I. 特許

現在の課題・目標	①産業機器用ワイヤレス給電技術に関する研究 ②走行中EVワイヤレス伝送に関する研究 ③ニューロモジュレーション・神経刺激システムの研究 ④生体及び医療機器用ワイヤレス給電に関する研究 ⑤ハイパーサーミア治療システムに関する研究
今年度の進捗状況	①プロトタイプ製作 ②小型モデルでの検証 ③動物実験モデルでの検討 ④実証試験検討 ⑤能動型発熱素子の検討
来年度の進捗目標	①実用化モデルの試作 ②インフラ適用への検討 ③動物実験モデルでの検討 ④試作開発 ⑤引き続き能動型発熱素子の検討 何れも学会, 研究会等で発表を行う。

#### Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
----------	----------	------------------------	----

#### Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2011年4月～	国土交通省宮城ブロック総合委員 委員
2010年4月～	照明学会東北支部会計幹事 会員

#### V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

#### Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

就職キャリア支援部副部長

2020年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	教授	氏名	嶋 敏之	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
ナノテクノロジー工学に最先端技術を理解するための自学自習時間を取り入れた		2020年		3年生向けの講義において、次世代薄型ディスプレイ(FPD)のスタンダードになりうる薄膜作製技術についての理解を深めるため、Webにより調査させ、分析させた。			
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2020年		毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概略を必ず説明し、授業終了時にはその回のまとめを行っている。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
オンライン授業のための講義資料の作成を行った。		2020年		オンライン授業になったために、オンタイム用およびオンデマンド用の講義資料の作成を行った。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
多賀城市教育委員会との共同開催		2020年		例年、工学総合研究所の開催行事として「21世紀のキーテクノロジーを学ぶII」、「工学に関わる啓発活動」、「地区講演会」を企画しているが、今年度は新型コロナウイルスの影響により対面の企画はすべてキャンセルせざるを得なかった。			
現在の課題・目標		予習・復習を行っていない学生が大半を占めるが、如何に授業の内容を理解させるかの習熟度の向上を目指している。					
今年度の進捗状況		コロナ禍において多くの講義がオンラインで行わざるを得なかった。そのためオンラインでも双方向でコミュニケーションが取れるようアクティブラーニングを行った。					
来年度の進捗目標		講義では出来る限り学生とコミュニケーションがとれるように、積極的な姿勢で行い、マンツーマンで常に対応できる研究室の学生には満足度が向上できるようにさらに務める。オンライン講義においては工夫して双方向でやり取りが可能なアクティブラーニングを取り入れる。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
Achievement of High Coercivity in Anisotropic Sm(Fe <sub>0.8</sub> Co <sub>0.2</sub> ) <sub>12</sub> Magnet Film by Boron Doping	共著	2020年5月	Adv. Mater. 194 (2020), Adv. Mater. 194 (2020).	H. Sepehri-Amin, Y. Tamazawa, M. Kambayashi, G. Saito, Y. K. Takahashi, D. Ogawa, T. Ohkubo, S. Hirose, M. Doi, T. Shima, and K. Hono	pp.337-342		
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
Magnetic properties of ThMn <sub>12</sub> -type Sm-rich Sm-Fe-Co thin films with V buffer layer	共著	2020年	2019 IEEE 9th International Conference Nanomaterials: Applications & Properties (NAP), 15-20 Sept. 2019, 2019 IEEE 9th International Conference Nanomaterials: Applications & Properties (NAP), 15-20 Sept. 2019	G. Saito, M. Kambayashi, Y. Tamazawa, F. Nakagawa, M. Doi, T. Shima,	pp.02M27-1-5		
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野に関連する領域)</b>							



F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)				
<b>G. 学会における研究発表</b>				
Sm(Fe <sub>0.8</sub> Co <sub>0.2</sub> ) <sub>12</sub> 系薄膜の軽元素添加による構造と磁気特性	共同	2020年12月	第44回日本磁気学会学術講演会, オンライン, 2020年12月14日~17日, (口頭)(不明)	神林守人、加藤大夢、森裕一、土井正晶、嶋敏之 pp.14pc-12
Fe <sub>2-x</sub> MnGa <sub>1+x</sub> (x = 0~0.5) 合金の磁気特性とメスバウアー効果	共同	2020年12月	第44回日本磁気学会学術講演会, オンライン, 2020年12月14日~17日, (口頭)(不明)	三浦 悠太、嶋 敏之、土井正晶 pp.17pA-1
MnxFeyGa薄膜における磁気特性の作製手法依存性	共同	2020年12月	第44回日本磁気学会学術講演会, オンライン, 2020年12月14日~17日, (口頭)(不明)	片山 靖和、渡邊 彩恵、峯田 睦、嶋敏之、土井 正晶 pp.17aB-5
Recent advance in SmFe <sub>12</sub> -based hard magnetic materials	共同	2020年11月	The 65th Annual Conference on Magnetism and Magnetic Materials (MMM2020), Virtual conference, Nov. 2-6, 2020(不明)	H. Sepehri-Amin, Y. Tamazawa, M. Kambayashi, G. Saito, Y. Takahashi, D. Ogawa, T. Ohkubo, S. Hirotsawa, M. Doi, T. Shima, and K. Hono pp.H3-10
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>				
<b>I. 特許</b>				
現在の課題・目標	五橋キャンパスへ移転のためにスクラップ&ビルドを始めとした研究環境の再構築が急務である。学生の基礎学術レベルを向上させ、出来る限り多くの研究成果を残す努力をする。			
今年度の進捗状況	コロナ禍のため行動が制限され、対外的な研究アクティビティーを一切行うことができなかった。			
来年度の進捗目標	継続して移転に向けた研究の再構築を行い、研究環境を整備しつつも出来る限り多くの研究成果を残す努力を引き続き行う。			
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>				
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要	
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>				
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>				
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等	
現在の課題・目標	研究活動を行うのに十分な時間を確保するのが非常に難しいと感じている。また、エビデンスを残すための事務手続きが多いと相変わらず感じている。何とか上手に教育活動との両立を目指したい。これまで、大学院生の家計の負担軽減ならびに研究に集中できるように外部資金から出来る限り謝金として学生に拠出している。研究改善推進委員会が再度復活して機能を果たし、学生・研究環境改善に対して大学上層部からのトップダウンの手厚いサポートを切に求める。			
今年度の進捗状況	新型コロナウイルス蔓延のため、多くの研究活動が制限されているが、外部資金確保のために精一杯努力している。			
来年度の進捗目標	研究活動の活性化のために、体外的な共同研究活動が再開できることを祈っている。また、注目に値すべき成果が得られるようにを努力を継続的に行う予定である。			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>				
電気電子工学科 学科長、研究環境改善推進委員会委員、その他各種委員				

2020年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	教授	氏名	土井 正晶	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2020年4月1日～2021年3月		人担当するすべての授業において、毎回の授業の最後に、その復習・まとめと理解を深めるために予習・復習演習と題した問題を課し、翌週の授業には添削して返却し、復習することを促した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Achievement of high coercivity in Sm(Fe <sub>0.8</sub> Co <sub>0.2</sub> ) <sub>12</sub> anisotropic magnetic thin film by boron doping	共著	2020年	Acta Materialia, 194	H. Sepehri-Amin, Y. Tamazawab, M. Kambayashi, G. Saito, Y.K. Takahashi, D. Ogawa, T. Ohkubo, S. Hirosawa, M. Doi, T. Shima, K. Hono	pp.337342		
Magnetic properties of ferromagnetic Heusler alloy Co <sub>2</sub> NbGa	共著	2020年	Journal of Magnetism and Magnetic Materials, 503	T. Kanomata, H. Nishihara, T. Osaki, M. Doi, T. Sakon, Y. Adachi, T. Kihara, K. Obara, T. Shishido	pp.166604		
Metallurgical Synthesis of Mg <sub>2</sub> FexSi <sub>1-x</sub> Hydride: Destabilization of Mg <sub>2</sub> FeH <sub>6</sub> Nanostructured in Templated Mg <sub>2</sub> Si	共著	2020年	Inorganic Chemistry, 59(5)	Kohta Asano, Hyunjeong Kim, Kouji Sakaki, Yumiko Nakamura, Yongming Wang, Shigehito Isobe, Masaaki Doi, Asaya Fujita, Naoyuki Maejima, Akihiko Machida, Tetsu Watanuki, Ruud J. Westerwaal, Herman Schreuders, and Bernard Dam	pp.2758-2764		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							

Mn <sub>3-x</sub> Fe <sub>x</sub> Ga <sub>y</sub> 薄膜における磁気特性の膜厚依存性	共同	2020年9月	日本金属学会 2020年秋期(第167回)大会(オンライン)	◎片山 靖和、渡邊 彩恵、峯田陸、嶋敏之、土井正晶
Fe <sub>2-x</sub> MnGa <sub>1+x</sub> (x = 0 ~ 0.5) 合金の磁気相転移とメスバウアー効果	共同	2020年9月	日本金属学会 2020年秋期(第167回)大会(オンライン)	◎三浦悠太、嶋敏之、土井正晶
Sm(Fe <sub>0.8</sub> Co <sub>0.2</sub> ) <sub>12</sub> 系薄膜の軽元素添加による構造と磁気特性	共同	2020年9月	第44回 日本磁気学会学術講演会(オンライン)	◎神林守人, 加藤大夢, 森 裕一, 土井正晶, 嶋 敏之
Fe <sub>2-x</sub> MnGa <sub>1+x</sub> (x = 0~0.5) 合金の磁気特性とメスバウアー効果	共同	2020年9月	第44回 日本磁気学会学術講演会(オンライン)	◎三浦悠太、嶋敏之、土井正晶
Mn <sub>x</sub> FeyGa薄膜における磁気特性の作製手法依存性	共同	2020年9月	第44回 日本磁気学会学術講演会(オンライン)	◎片山 靖和、渡邊 彩恵、峯田陸、嶋敏之、土井正晶

#### H. 翻訳(学術書や原典等)

#### I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

#### Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 科学研究費 基盤研究(S)	2019年度	共同(研究分担者)	軽元素を利用した新しい物質合成法の確立と希土類フリー磁石材料への展開:希土類フリー磁石材料の開発のために軽元素添加微粒子における新しい物質合成法に関する研究課題である。

#### IV 学会等及び社会における主な活動

#### V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

#### VI 学内における管理運営に関する諸活動

2020年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	教授	氏名	原 明人	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
manabaを使ったオンデマンドビデオ講義		2020年4月1日～2021年1月22日		オンデマンド講義により、すべての講義のパワーポイントビデオを作成し、板書の形式で講義を行った			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
オンデマンド講義用のビデオ資料		2020年4月1日～2021年1月22日		オンデマンド用のビデオ講義資料			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		分かりやすい講義					
今年度の進捗状況		分かりやすい講義					
来年度の進捗目標		分かりやすい講義					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
Raman scattering spectroscopy for solid-phase and metal-induced crystallization of extremely thin germanium films on glass	共著	2021年3月	Jpn. J. Appl. Phys. 60 (2021)	Kuninori Kitahara, Shinya Tsukada, Akari Kanagawa and Akito Hara	pp.035505-1 - 035505-6		
Crystallization of Cu-doped thin Ge film assisted with a Cu-Ge droplet	共著	2020年8月	Jpn. J. Appl. Phys 59 (2020), 59(8)	Akito Hara, Hitoshi Suzuki, Hiroki Utsumi, Ryo Miyazaki, Kuninori Kitahara	pp.088004 - 088004		
Four-terminal polycrystalline Ge <sub>1-x</sub> Sn <sub>x</sub> thin-film transistors using copper-induced crystallization on glass substrates and their application to enhancement/depletion inverters	共著	2020年5月	Jpn. J. Appl. Phys. 59 (2020), 59(5)	Ryo Miyazaki, Akito Hara	pp.051008-1 - 051008-8		
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
Effect of Electron-Irradiation on Acceptor State of Germanium	共著	2020年9月	UVSOR ACTIVITY REPORT 2019	A. Hara and T. Awano	pp.p. 48		
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
SIMS分析によるGeのCu金属誘起固相成長のメカニズムの解明	単著	2020年	文部科学省ナノテクノロジープラットフォーム事業 微細加工プラットフォーム 令和元年度 利用報告書	原明人	pp.F-19-RO-0043		
RTAによる強誘電体Hf <sub>1-x</sub> Zr <sub>x</sub> O <sub>2</sub> の形成	単著	2020年	文部科学省ナノテクノロジープラットフォーム事業 微細加工プラットフォーム 令和元年度 利用報告書	原明人	pp.F-19-RO-0055		
負性容量4端子poly-Si TFTの開発	単著	2020年	文部科学省ナノテクノロジープラットフォーム事業 微細加工プラットフォーム 令和元年度 利用報告書	原明人	pp.F-19-RO-0004		

ダブルゲート・ジャンクションレスn-ch多結晶ゲルマニウム薄膜トランジスタの開発	単著	2020年	文部科学省ナノテクノロジープラットフォーム事業 微細加工プラットフォーム 令和元年度 利用報告書	原明人	pp.F-19-RO-0003
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>					
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>					
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>					
<b>G. 学会における研究発表</b>					
ガラス基板上のレーザラテラル結晶化poly-Si <sub>1-x</sub> Ge <sub>x</sub> TFTの特性	共同	2021年3月	2021年春季応用物理学会学術講演会(不明)	原明人、北原邦紀	pp.16p-P13-1
ガラス基板上の4端子poly-Si TFTの高性能化と光センサへの応用	共同	2021年3月	令和3年東北地区若手研究者研究発表会(不明)	木村純樹、工藤健太、早坂奏音、原明人	pp.R3-E-02
Cuナノ粒子を含有するGe薄膜におけるナノスケール液滴による結晶化	共同	2020年9月	2019年秋季応用物理学会学術講演会(不明)	原明人、鈴木仁志、北原邦紀	pp.8p-Z26-1
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	次世代IoTに向けた革新的な薄膜トランジスタをガラスやプラスチック上に実現する。				
今年度の進捗状況	High-Kを利用したpoly-Si TFTの開発を進めE/Dインバータを作製し、VDD=1.0 Vでの動作を実現した。プラスチック基板上に4端子poly-Ge TFTの形成・動作に成功。				
来年度の進捗目標	High-Kを利用したpoly-Si TFTの高性能化。 Negative Capacitance技術を使ったpoly-Si TFTの開発。 ゲルマニウム系TFTの性能の向上。 プラスチック上TFTの研究加速。				
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	
その他の補助金・助成金 自然科学研究機構分子科学研究所UVSOR共同利用研究	2019年度	共同(研究代表者)		IV族半導体中の新種不純物中心・格子欠陥の電子状態に関する研究	
科学研究費補助金 基盤C	2019年度～2021年度	共同(研究代表者)			
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>					
2017年4月～			応用物理学会 東北支部 幹事		
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等	
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>					
工学部内委員会の委員					

2020年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	准教授	氏名	大場 佳文	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		1. 日頃から学生に勉強させる癖・講義中に理解させる癖をつけさせる。 2. わかりやすい講義を提供する。 3. いつでもどこでも学生の質問に答える。					
今年度の進捗状況		1. については、中間テストを適宜行うことでその対策を施した。しかし、思いのほか良い点数を採ってくれる学生は、毎回、そう多くはない。このため、さほど進捗があったとは思っていない。 2. については、すべての講義において、学生がその講義に興味・関心・必要性を感じてくれるように、また、できるだけやさしく理解できるように、いろいろな方面から話題を抽出し、学生が理解しやすい別のものに置き換えるなどして講義を遂行するよう努めた。「わかりやすい」といつってくれる学生の声を聞く時もある。しかし、進捗具合を定量的に判断していないため、現在、進捗状況は未知数。 3. については、案外、「質問しやすい先生」と見られているのかも知れない。このためか、講義終了後にその場で質問に来る学生が毎回のようにいる。このことから、「進捗はあった」と思う。					
来年度の進捗目標		1. については、勉強不足・理解不足の学生がまだ多くいると思われるため、次年度も引き続き継続していくつもりである。 2. については、現在、この路線を変更することは考えていないので、次年度も継続。 3. については、「授業評価アンケート」の記述欄にでも記載されるよう努力していく。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
集中キャンパスと先端短絡スタブを用いた集中分布混在型2周波変成器に関する検討		共同	2021年3月	令和3年電気学会全国大会論文概要集、1-014、pp.19-20、2021/3/9~11、オンライン(不明)		◎丹野 友佑、大場 佳文、呉 国紅	pp.2頁
H. 翻訳(学術書や原典等)							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		1. 新しい2周波整合回路に関して行っている研究を、整理し論文にまとめる。 2. 集中分布混在型2周波分波器に関して行っている研究を、整理し論文にまとめる。					
今年度の進捗状況		1. については、結果を整理し、論文として執筆中。 2. については、結果を整理し、今後、論文投稿を検討中。					
来年度の進捗目標		従来までに提案されていない、新しい伝送回路を提案したい。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	

<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
1996年6月～		電気学会会員 会員	
1987年5月～		電子情報通信学会会員 会員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	准教授	氏名	桑野 聡子	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
講義におけるアクティブラーニング的学習方法の試み		2020年5月～		実験実習講義において、実験動画を作成し、さらにmanabaにおける実験内容の振り返りテストを作成した。このことにより受講生に授業として動画を視聴するだけでなく、テストに回答する為に、動画を複数回に渡り確認させることで学習効果を深めさせた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
自然科学実験ファンダメンタルズ 改訂版第7版(東北学院大学工学部)について、学生が予習・復習しやすくなるように、実験動画に加え、オンラインによる小テスト、講義解説を行った。		2020年5月～		予習・復習テストの課題を出すことで、円滑な修学に繋がった。また、それらのテストの解説を実験内容の解説に加えて、説明した。加えて、基礎化学演習などの他の関連科目の講義において、当実験講義についての内容を解説することで、実験における予習・復習が円滑に進む様にした。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
4年生グループ主任		2020年4月1日～2021年3月31日		4年次への進級指導および卒業指導。学年全般に渡る就職活動支援。			
現在の課題・目標		復習を効果的に行える様に、課題のポートフォリオとしてmanabaを積極的に活用する。					
今年度の進捗状況		担当した全ての講義において、新たな課題問題をmanaba上で作成した。更に難易度を学生の到達度に合わせるために複数の問題を作成し、学生の学習到達度を調査した。					
来年度の進捗目標		今年の反省点を踏まえ、改善した内容についてmanabaを積極的に活用する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
TiおよびNi系ナノワイヤーの成長機構の解明	共著	2020年	平成31年度東北大学金属材料研究所、新素材共同研究開発センター共同利用研究報告書、平成31年度東北大学金属材料研究所、新素材共同研究開発センター共同利用研究報告書	◎桑野 聡子、小野 文裕、古閑 健人、齋藤 雅史、佐々木 新之介、佐々木 隆仁、菅原 瑞希、野村 凌矢、岸田 宏平、大村 和世、野村 明子、吉年 規治	pp.未定		
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
Ti系ナノワイヤーの成長機構と構造	共同	2021年3月	2020年度 工学総合研究所公開シンポジウム(不明)	佐藤隼、齋藤直毅、菅原瑞貴、佐々木新之介、菊地翔太、紺野恭平、佐藤寛佳、津田陸登、鈴木仁志、桑野聡子			



Ti系ナノワイヤーの成長機構と構造	共同	2021年3月	令和3年東北地区若手研究者発表会(不明)	◎佐々木 新之介、佐藤隼、齋藤直毅、菅原 瑞希、菊地 翔太、紺野 恭平、佐藤 寛佳、津田陸登、鈴木仁志、吉年規治、野村明子、桑野 聡子
多孔質金の熱粗大化に対する気圧の影響について	共同	2021年3月	日本物理学会第76回年次大会(2021年)(不明)	桑野 聡子、笠原 務、熊谷 勇真、小野 文裕、真舘 渉、渡邊 竜也、文堂 司、赤間 浩大、菊池 雅樹、山口 有朋
酸化チタンナノワイヤーの成長機構について	共同	2020年11月	2020年日本表面真空学会学術講演会(不明)	◎桑野 聡子、佐々木 新之介、菅原 瑞希、菊地 翔太、佐藤 寛佳、鈴木 仁志、野村 明子、大村 和世、吉年 規治
酸化チタンのナノ構造の成長様式について	共同	2020年9月	日本物理学会2020年秋季講演大会(不明)	桑野 聡子、佐々木 新之介、菅原 瑞希、菊地 翔太、佐藤 寛佳、鈴木 仁志、大村 和世、野村 明子、吉年 規治
第50回石油・石油化学討論会	共同	2020年9月	第50回石油・石油化学討論会(不明)	山崎 清行、佐々木 隆仁、渡邊 竜也、桑野 聡子、三村 直樹、佐藤 修、山口 有朋

#### H. 翻訳(学術書や原典等)

#### I. 特許

現在の課題・目標	1.Nanoporous Gold膜の孔形成について、孔の粗大化について詳細な測定を行う。 2.Nanoporous Gold膜の触媒作用と孔形状の関連について研究を進める。 3.金属酸化物の形成メカニズムについて研究を進める。
今年度の進捗状況	1.Nanoporous Gold膜の孔形成について、気圧に関する孔の粗大化について詳細な測定を行った。 2.Nanoporous Gold膜の複合材料の作製を行った。 3.金属酸化物の形成メカニズムについて、組成と形成条件の詳細について研究を進めた。
来年度の進捗目標	1.Nanoporous Gold膜の孔形成について、気体の種類の違いに関する孔の粗大化について詳細な測定を行う。 2.Nanoporous Gold膜の複合材料の作製を行う。 3.金属酸化物の形成メカニズムについて、組成と形成条件の詳細について研究を進める。

#### Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2013年2月～		日本物理学会 会員	
2009年9月～		日本表面科学会 会員 会員	
2008年5月～		日本金属学会 会員 会員	

#### V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

#### VI 学内における管理運営に関する諸活動

東北学院大学工学部工学会評議員、教職課程センター所員、

2020年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	准教授	氏名	佐々木 義卓	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
遠隔授業での学習支援		2020年4月～2021年3月		遠隔授業では直接的な指導が難しいため、模範解答を付した演習問題を作成し、それを解いた後に行う確認テストで、授業内容の理解度の把握に努めた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		学生の学力の把握に努め、それに応じて授業内容や課題の適正化を図る。学習支援が必要な学生をいち早く抽出し、適時指導を行う。					
今年度の進捗状況		1年間を通じて適切な授業内容、課題内容、運営方法が確立できたと思われる。遠隔授業であったこともあり、学習支援が必要な学生の把握は難しかった。					
来年度の進捗目標		今年度の成績を元に学習支援が必要な学生を抽出して引き続き指導にあたりたいと考えている。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Recursion formulas for poly-Bernoulli numbers and their applications		共著	2021年2月	World Scientific, International Journal of Number Theory, 17(1)		Yasuo Ohno and Yoshitaka Sasaki	pp.175-189
A functional relation for analytic continuation of a multiple polylogarithm		共著	2020年5月	Acta Arithmetica, 195		Yusuke Kusunoki, Yayoi Nakamura, Yoshitaka Sasaki	pp.131-148
Recurrence formulas for poly-Bernoulli polynomials		共著	2020年	Advanced Studies in Pure Mathematics, 84		Yasuo Ohno, Yoshitaka Sasaki	pp.353-360
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
On dualities for poly-cosecant polynomials		単独	2021年3月	青葉山ゼータ研究会(不明)		佐々木義卓	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		種々の多重ゼータ関数の整数点における特殊値の性質を解明していく。多重ベルヌーイ数および関連するゼータ値の性質を解明していく。ゼータMahler測度を通じた多重ゼータ値の性質の解明を図る。					
今年度の進捗状況		多重ベルヌーイ数の双対性の構造を多重ベルヌーイ多項式の観点から解明することができた。多重コセカント数とその類似に関する双対性を新たに解明することができた。多重ゼータ値のタンジェントシンメトリーを多重ゼータ関数の観点から解明した。					
来年度の進捗目標		多重ベルヌーイ数および多重コセカント数の双対性に関していくつかの結果が得られた。今後は付随するゼータ関数の性質を追求することで、多重T値やその双対版として予想される多重ゼータ値を追求していく。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2006年10月～		日本数学会会員 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	准教授	氏名	鈴木 仁志	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
東北学院大学工学部「自然科学実験ファンダメンタルズ」改訂第5版第1刷		2020年4月1日		1年生対象学部共通専門科目「自然科学実験ファンダメンタルズ」の教科書の物理部分を執筆、編集した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
FD研修会参加		2020年12月10日		FD研修会参加			
SD研修会参加		2020年11月5日		SD研修会参加			
SD研修会参加		2020年10月20日		manabaでのオンデマンドSD研修会に参加			
FD研修会参加		2020年9月16日		FD研修会参加			
学科google drive用いたレポート回収講習会参加		2020年4月28日		学科で行われたgoogle driveを用いたレポート回収方法の講習会に参加した			
学科でのZoom講習会参加		2020年4月14日		学科で行ったZoom講習会に参加			
工学基礎教育センター相談員		2020年4月1日～		講義の分からない学生に対する補助教育業務 週1コマ			
現在の課題・目標		①学生の理解度に合わせて授業の組立を柔軟に変更する ②すべての科目で学士課程における必要性という観点から到達目標を検討する ③授業時間以外での学生とのコミュニケーションを大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる					
今年度の進捗状況		①授業評価アンケートの自由表記欄に「字が読みにくい」等の記述が無くなったことから、ある程度の進捗がみられた。 ②新カリキュラムの物理学Ⅰ、物理学Ⅱの内容、目標の切り分けを行なった。物理学ⅠA、Bクラスの試験内容のすりあわせを行なった。 ③私の相談担当時間に工学基礎教育センターに来る学生が現れており、ある程度コミュニケーションがはかれつつあり、進捗が見られた。					
来年度の進捗目標		①「電子物性工学」、「物理学Ⅰ」など新たに受け持つ講義、新カリキュラムで始まった講義において、学生の理解度に合わせて授業進度を対応させる。 ②「基礎数学演習」、「自然科学実験ファンダメンタルズ」など、新学科で始まった講義、実験において、学生の理解度に合わせて授業内容を検討する。[物理学Ⅰ]A、Bクラスの内容のすりあわせをさらに進める。 ③主に基礎科目の成績評価法を、到達目標の測定という観点からより効果的なものがあれば変更する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Crystallization of Cu-doped thin Ge film assisted with a Cu-Ge droplet		単著	2020年7月	Japanese Journal of Applied Physics 59, Japanese Journal of Applied Physics 59		Akito Hara, Hitoshi Suzuki, Hiroki Utsumi, Ryo Miyazaki, and Kuninori Kitahara	pp.88004
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							

Pd-Si系、Pd-SiO <sub>2</sub> 系粒子の形態と構造に関する研究	共同	2021年3月	第76回日本物理学会年次大会 (2021.3.12金～15月)PSJ-1(不明)	鈴木仁志、津田陸登、 後藤紘貴、小松豊	pp.日本物理学会 第76回年次大会(2021年)概要集 p.2667
酸化チタンのナノ構造の成長様式について	共同	2020年9月	日本物理学会 2020年秋季大会 PSJ-2(不明)	桑野聡子,佐々木新之介, 菅原瑞希,菊地翔太,佐藤寛佳,鈴木仁志	pp.日本物理学会 2020年秋季大会 概要集 p.2382
Cr-Si系、Cr-SiO <sub>2</sub> 系粒子の形態と構造に関する研究	共同	2020年9月	日本物理学会 2020年秋季大会 PSJ-3(不明)	鈴木仁志、津田陸登、 遠藤伸太郎、柴田暁	pp.日本物理学会 2020年秋季大会 概要集 p.2383
酸化チタンナノワイヤーの成長機構について	共同	2020年	2020年日本表面真空学会学術講演会(不明)	桑野聡子,佐々木新之介, 菅原瑞希,菊地翔太,佐藤寛佳, 鈴木仁志,野村明子,大村和世, 吉年規治	pp.日本表面真空学会学術講演会要旨集 1P72

#### H. 翻訳(学術書や原典等)

#### I. 特許

現在の課題・目標	①他の専門領域の研究者との共同研究を進める。 ②外部資金の獲得を目指す。 ③彗星状粒子が成長する組成を系統的に調べる。
今年度の進捗状況	①産業技術総合研究所の研究者と交流は一部停滞している。 ②科学研究費補助金に応募したが、獲得はならなかった。株式会社KRIより奨学寄附金30万円を頂いた。 ③候補物質の一部でホイスカー粒子が成長することを確認している。
来年度の進捗目標	①産業技術総合研究所との交流を進め、新形態の触媒粒子作製・評価を進める。 ②科学研究費補助金に応募する。 ③実験していない条件、候補物質について研究を進める。

#### III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
----------	----------	------------------------	----

#### IV 学会等及び社会における主な活動

2009年2月～	日本地球惑星科学連合会員 委員
2003年6月～	日本結晶成長学会会員 会員
2000年1月～	日本物理学会会員 会員

#### V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

#### VI 学内における管理運営に関する諸活動

工学総合研究所副所長  
 学生委員  
 工学部教育の質保証・改善委員会授業評価小委員会委員  
 工学基礎教育センター運営委員  
 「学生による授業評価」委員  
 LMS(manaba)担当者

2020年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	教授	氏名	李 相勲	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
「構造力学Ⅱ」における講義中の質問・毎回のレポートまたは小テストの実施		2020年9月～2021年1月		毎回レポート(演習問題)を出題し、学生の自習の習慣と問題を解く基本能力を身につけさせた。また、manabaを通じてコミュニケーションを取り必要に応じて講義ビデオを公開し復習できるようにした。			
「研究・発表の技法」における非破壊検査法に対する理論と実験		2020年9月～2021年1月		専門的な内容でありながら身近によく使われている非破壊検査法(衝撃弾性波法)による構造物欠陥探査実験について、簡単な理論から実技を通じて関心度と理解度を高めた。			
「環境建設工学設計製図」における数量算出書を作成		2020年9月～2021年1月		構造計算による設計図面の作成だけでは図面に情報を十分に表現できない。数量算出書を作成することで図面の完成度および理解度を高めた。			
「ジュニアセミナー」における創造的プロジェクト		2020年9月～2021年1月		高速フーリエ変換の利用を共通にし、学生が直接テーマを決め、課題の計画、実験、分析、まとめを行うことで、問題解決能力を高めた。			
「卒業研究」における工学基礎教育		2020年4月～2020年7月		動的解析・スペクトル解析について毎週2回ゼミを行い、卒業研究に必要な基礎知識を修得させた。			
「環境建設工学実験」の鋼材の引張実験の自主作業		2020年4月～2020年7月		供試体の準備や実験の実施等すべての作業を学生が自ら行うことで実験への理解度を高めた。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・構造力学Ⅱは、たわみや不静定構造物など授業内容が難しくなるため不合格者の割合が比較的が多い。受講者とのコミュニケーションを徹底し再履修者の数を段階的に減らしたい。</li> <li>・環境建設設計製図の対象構造物に対する理解度を高めるため数量算出を積極的に利用する。</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>・構造力学Ⅱでは、manabaの個別指導を通じて受講生とのコミュニケーションをとっている。対面指導や講義ビデオの公開につながっている。</li> <li>・環境建設設計製図では、数量算出方法を説明するためpowerpointによる講義資料を作成した。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・構造力学Ⅱで、受講生とのコミュニケーションを徹底するためmanabaの個別指導や対面指導を積極的に歌謡する。</li> <li>・環境建設設計製図で、数量算出方法を熟知させるため数量算出の説明に対する講義時間の配分を増やす。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
コンクリート内部の鉄筋の大きさや位置が弾性波速度に及ぼす影響に関する解析的研究		共同	2021年3月	令和2年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集、V-28(日本)	井上 智暉 大竹 翔 金 起弘 李 相勲		

コンクリート内部の鉄筋の大きさや位置が弾性波速度に及ぼす影響に関する解析的研究	共同	2021年3月	令和2年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集、V-26(日本)	高橋 凌 楯石 凌平 李 相勲
コンクリートの弾性波速度の推定に影響を及ぼす因子に関する研究	共同	2021年3月	令和2年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集、V-25(日本)	李 東建 李 相勲
コンクリートの鉄筋および欠陥の有無が弾性波速度に及ぼす影響	共同	2021年3月	令和2年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集、V-24(日本)	楠木 智之 飯淵 大暉 李 東建 李 相勲
立体構造解析によるトラス橋主構に対する構造形式と設計法の比較検討	共同	2021年3月	令和2年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集、I-31(日本)	佐藤 優太 李 相勲
発展途上国の組積造耐震化に向けたすべり免震に関する動的実験	共同	2021年3月	令和2年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集、I-24(日本)	大槻 駿斗 岩澤 直也 李 相勲
エネルギー伝達境界を考慮した半無限の高架橋構造物の地震応答スペクトル	共同	2021年3月	2年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集、I-7(日本)	小林 亮太 李 相勲
発展途上国の組積造建築を対象とした滑り免震機構の開発に関する基礎的研究	共同	2020年9月	日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)、21369(関東)	多田麻也子、高木 次郎 荒木 慶一、五十子幸樹 Sanjay Pareek、李 相勲

#### H. 翻訳(学術書や原典等)

#### I. 特許

現在の課題・目標	組積造建築を対象とした滑り免震機構の開発、弾性波速度を利用したNDT法のアップグレード
今年度の進捗状況	コンクリートの弾性波速度の推定に影響を及ぼす因子の特定
来年度の進捗目標	コンクリート内部欠陥の検出に機械学習を導入するためのツール開発

#### III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
競争的資金等の外部資金による研究	2020年度～2020年度	個別(研究代表者)	振動モードを考慮した弾性波速度の測定によるコンクリート劣化診断技術の開発
科学研究費補助金 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))	2019年度～2023年度	共同(研究分担者)	途上国の組積造建物耐震化に向けた滑り免振機構の開発と社会実装基盤の整備

#### IV 学会等及び社会における主な活動

2020年～	建築学会 会員
2015年10月～	土木技術奨励賞選考委員会委員 委員
2012年～	コンクリート教会 会員
2010年4月～	非破壊検査協会 鉄筋コンクリートの非破壊検査試験部門委員会 幹事
2010年～	非破壊検査協会 会員
2006年4月～	韓国防災学会 会員
1999年4月～	土木学会 会員

#### V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

#### VI 学内における管理運営に関する諸活動





2020年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	教授	氏名	井川 望	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		1. 授業内容が実社会でどのように使われているのか、を伝えることを意識して授業を行う。 2. 授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。 3. 授業全体の到達目標や個々の課題等の意図を学生に伝える。 4. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。					
今年度の進捗状況		着任5年目で、今年度初めての科目も無く、すべて前年からの継続科目であり、目標に沿うよう努めたが、オンライン対応等で授業の準備に追われ、授業をこなすことしか、考える余裕がなかったが、少しでも目標にそえるよう努めた。					
来年度の進捗目標		今年度の経験を活かし、目標に沿うよう取り組んでいきたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
静的増分解析プログラムの解析結果のばらつきについて		単独	2020年9月	日本建築学会 大会梗概集(不明)		不明	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		衝撃、地震観測以外についても研究を進める					
今年度の進捗状況		授業の準備に時間を取られ、あまり進捗しなかった。					
来年度の進捗目標		今年の経験を活かし、成果を出したい。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
2019年4月～2022年3月			日本建築学会 基礎構造部材の強度・変形性能小委員会、同小委員会 RC基礎部材性能検討WG 会員				
2019年4月～2022年3月			日本建築学会 基礎構造部材の強度・変形性能小委員会、同小委員会 RC基礎部材性能検討WG 会員				
2018年4月～2022年3月			日本建築学会 衝撃作用低減対策WG 会員				
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							

V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
3年生 グループ主任 図書館分館長			

2020年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	教授	氏名	石川 雅美	大学院の授業 担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
6) 環境建設設計製図		2020年9月29日～2021年1月26日		<p>1) 学生一人一人に対して諸元の異なるRC擁壁の設計計算書の作成、設計図面および鉄筋数量計算書を作成する課題を課している。</p> <p>2) 設計計算書の参考例を資料して学生に配布し、学生はその資料を参考にして、与えられた諸元の設計計算書を作成する。</p> <p>3) 1回目から4回目までの授業は、遠隔によるオンタイム形態で実施し、実際の設計業務を模擬した授業内容であることを説明した。</p> <p>4) 各自が作成した設計計算書に誤りがあるかどうか、学生が設計内容を理解しているかどうかを確認する目的で、10月29日、11月17日、12月1日、12月22日に学生ひとりひとりの設計計算書のチェックを行った。</p> <p>5) 1月26日に、最終段階の計算書のチェック、設計図面および鉄筋数量票のチェックを行い、学生一人一人に誤りを指摘した。</p> <p>6) 学生の理解を深めるため、実際のRC擁壁の1/2の鉄筋モデルを作成し、実物と図面の関係を把握させている。</p>			
3) 建設マネジメント		2020年5月12日～2020年8月11日		<p>1) オンタイム形態の遠隔授業を実施した。全15回の授業のうち13回の授業において、その回の講義内容の概略と意見をA4ミニッツペーパーという形で学生に提出させている。</p> <p>2) ミニッツペーパーは、「manaba」を介して提出させ、毎回評価し、点数をつけて学生に返却している。</p> <p>3) 「災害対応マネジメント」として2回分の授業をアクティブラーニング形式で実施している。</p> <p>4) この2回分の授業では、東日本大震災において国土交通省三陸国道事務所宮古出張所長が実施した通行止めと住民避難方法の決断を実例をとりあげ、学生に「もし、自分が宮古出張所長の立場であればどのような決断をしたか」を議論させている。</p> <p>5) この授業は学生にとっても大変好評であった。</p>			
5) 環境建設基礎数学演習		2020年5月7日～2020年8月6日		<p>1) 遠隔によるオンタイム授業形態での授業実施に対応するため、講義ノートを全てパワーポイントに起こし講義コンテンツとして学生に提供した。</p> <p>2) 毎回の授業で、「manaba」上での小テストを行うとともに、5問程度の課題を与え「manaba」での課題提出を求めた。授業のはじめの15分間で前回授業の課題の解答を行った。毎回、小テストと課題の解答状況をみて、学生の理解度を確認して、翌週の授業にびて重要な点や振り返りに割り当てる時間を調整した。</p> <p>3) 本授業はリメディアル授業であるが、テラー展開の基本となるロルの定理など重要な定理の導出を丁寧に講義した。</p> <p>4) 遠隔授業ゆえ、試験が実施できないため15回目に達成度確認問題を出し、ノートに解答を記載させ、ノートの提出を求めた。</p> <p>5) ひとりひとりのノートを確認し、各回の課題の正解率、講義内容の記載状況、達成度確認問題の正解率を基に評価を行った。</p>			
4) 環境建設基礎数学演習		2020年5月7日～2020年8月6日		<p>1) 遠隔によるオンタイム授業形態での授業実施に対応するため、講義ノートを全てパワーポイントに起こし講義コンテンツとして学生に提供した。</p> <p>2) 毎回の授業で、「manaba」上での小テストを行うとともに、5問程度の課題を与え「manaba」での課題提出を求めた。授業のはじめの15分間で前回授業の課題の解答を行った。毎回、小テストと課題の解答状況をみて、学生の理解度を確認して、翌週の授業にびて重要な点や振り返りに割り当てる時間を調整した。</p> <p>3) 本授業はリメディアル授業であるが、テラー展開の基本となるロルの定理など重要な定理の導出を丁寧に講義した。</p> <p>4) 遠隔授業ゆえ、試験が実施できないため15回目に達成度確認問題を出し、ノートに解答を記載させ、ノートの提出を求めた。</p> <p>5) ひとりひとりのノートを確認し、各回の課題の正解率、講義内容の記載状況、達成度確認問題の正解率を基に評価を行った。</p>			

2) 地震工学I	2020年5月7日～2020年8月6日	<p>1) 遠隔によるオンタイム形態での授業実施に対応するため、講義ノートを含めてパワーポイントに起こし、講義コンテンツとして学生に提供した。</p> <p>2) 授業回数15回のうち、毎回の授業内容の理解度を確認するため12回の課題を与えた。毎回の授業のはじめに前回の授業で課した課題の解説を行い、学生の理解度を確認しながら、オンタイム授業の進捗を調整した。</p> <p>3) 講義内容を学生が理解できているかを学生自身に確認させる目的で、第8回目と第15回目の授業において、達成度確認課題を与え、重要な点の振り返りを行った。</p> <p>4) Ksegという機構表示ソフトを使って振動現象が三角関数を使って表示できることを直感的にわかりやすく説明した。</p> <p>5) 遠隔授業のため試験を実施できないことから、学生にノートを提出させた。学生のひとりひとりのノートを確認し、講義内容の記載状況、12回分の課題の解答状況、8回目と15回目の達成度確認課題の正解率などを基に評価を行った。</p>			
1) コンピュータプログラミング	2020年4月8日～2020年8月12日	<p>1) 遠隔によるオンタイム形態で授業を実施することになり、114名の受講者を2つのクラス(水曜クラス:56名、金曜クラス:58名)に分けた。</p> <p>2) 少人数教育とすることで学生との対話を重視し、授業の理解度を高めるよう努力した。</p> <p>3) 毎回、マクロ作成課題を出して、授業時間中に20分程度の時間を与えて、学生自身が考え理解する機会を設けた。</p> <p>4) 授業開始時に、前回の課題の解説を行った。</p> <p>5) 達成度を確認する試験は「manaba」の小テスト機能を利用した。</p>			
1) コンピュータプログラミング	2020年4月～	<p>1) 全15回の授業のうち11回の課題を与え、提出状況を確認している。</p> <p>2) 課題については、授業時間中に20分程度の時間を与えて、学生自身が考え理解する機会を設けた。</p> <p>3) 授業開始時に、前回の課題の解説を行った。</p>			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>					
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>					
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>					
現在の課題・目標	<p>1. 講義内容が実社会でどのように使われているのか、を伝えることを意識して授業を行う。</p> <p>2. 授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。</p> <p>3. 授業全体の到達目標や個々の課題等の意図を学生に伝える。</p>				
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>					
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>					
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>					
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>					
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>					
プレキャストコンクリートを用いた構造物の構造計画・設計・製造・施工・維持管理私信(案)『プレキャストコンクリートを用いた構造物の構造計画・設計・製造・施工・維持管理私信(案)』	共著	2021年3月	土木学会 コンクリートライブラリー, 土木学会 コンクリートライブラリー, 土木学会 コンクリートライブラリー	著者多数	pp.製造WG担当
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>					
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>					
<b>G. 学会における研究発表</b>					
東北のコンクリート構造物を対象とした初期ひび割れ発生確率図の提案	共同	2021年3月	土木学会東北支部 技術研究発表会(不明)	石川雅美, ©増井優哉	pp.2
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					

<b>I. 特許</b>			
現在の課題・目標	英文で学術論文を執筆する。		
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2020年12月			インフラメンテナンス国民会議 東北フォーラム 令和2年度マッチングイベントをフォーラムリーダーとして主催 国土交通省東北地方整備局12階大会議室よりWeb配信 参加者およそ200名 委員
2020年11月			オンライン形式 参加者数 およそ200名 会員
2020年11月			土木学会東北支部とともにインフラメンテナンス国民会議東北フォーラムリーダーとして主催 会員
2020年11月			インフラマネジメントシンポジウム(副題:復興から新しい東北のインフラ創世へ)を会員
2020年9月			東北自治研修所 令和2年度 第53回行政課題研修「事例に学ぶ公共施設のアセットマネジメントコース」講師「インフラメンテナンス国民会議 東北フォーラムの活動と自治体への支援事例」委員
2020年6月～2021年3月			株式会社 ネクスコ・エンジニアリング東北 令和2年度 超高強度繊維補強コンクリートにより防水機能を付与したプレキャストPC床版に関する技術検討会 委員 委員
2020年6月～2021年3月			国土交通省 東北地方整備局 富谷地区電線共同溝PFI事業有識者等委員会 委員 委員
2019年10月～2020年9月			公益社団法人 日本コンクリート工学会 助成金検討委員会 委員 会員
2019年5月～2021年4月			公益社団法人 日本コンクリート工学会 役員候補者推薦・調整委員会 会員
2019年5月～2021年4月			公益社団法人 日本コンクリート工学会 役員候補者推薦・調整委員会 会員
2019年4月～2021年3月			国土交通省東北地方整備局事業評価監視委員会 副委員長 副委員長
2019年4月～2021年3月			国土交通省 東北地方整備局 宮城ブロック総合評価委員会 委員 委員
2019年4月～2021年3月			国土交通省東北地方整備局事業評価監視委員会 委員 委員
2019年4月～2021年3月			国土交通省 東北地方整備局 樋門等健全度評価検討委員会 委員 委員
2019年4月～2021年3月			国土交通省 東北地方整備局 宮城ブロック総合評価委員会 委員 委員
2018年5月～			公益社団法人 日本コンクリート工学会 マスコンクリートのひび割れに関する調査委員会 幹事長 会員
2018年5月～2020年4月			公益社団法人 土木学会 プレキャストコンクリート工法の設計施工・維持管理に関する研究小委員会 委員 会員
2018年4月～			インフラメンテナンス国民会議 東北フォーラム フォーラムリーダー 委員
2017年5月～			公益社団法人 日本コンクリート工学会 マスコンクリートソフト普及委員会 幹事 会員
2017年4月～			ダム工学会 会員 会員
2016年4月～			公益社団法人 プレストレストコンクリート工学会 会員 会員
1981年～			公益社団法人 日本コンクリート工学会 フェロー会員 会員
1981年～			公益社団法人 土木学会 正会員 会員
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2020年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	教授	氏名	櫻井 一弥	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
実施プロジェクトへの学生参加による建築実務教育		2020年4月～		実際に進んでいる建築やまちづくりのプロジェクトに学生を参加させることにより、講義や演習で学んだ内容が実社会でどのように活用されているか学習させる機会を積極的に設けている(主に卒論生や大学院生が対象)。			
少人数対話方式(エスキース)による学生の自主的な建築作品制作の促進		2020年4月～		学生が提案する建築空間(図面や模型)に対して、一対一での対話方式(エスキース)によるデザインの高度化を図るとともに、自主的な制作を促すような指導を行っている。2020年度前期はリモート授業のため、成果物を画面共有した状態での指導を試みた。2020年度後期は対面授業とし、新型コロナウイルス感染症対策を万全に施した上で実施した。			
施工中の現場見学, 完成した建物の見学による都市・建築の現場感覚の涵養		2020年4月～		施工中の建物や完成した後の建物の見学会などを行い、三次元空間のスケール感を涵養する講義・演習を行っている。2020年度後期は、新型コロナウイルス感染症対策を万全にとった上で見学会を実施した。			
建築初学者に対する建築教育の効果的な導入に関する工夫		2020年4月～		初等教育で全く触れる機会のない建築やデザインに関する興味と理解を深めるため、画像・映像などのビジュアル資料や模型による講義・演習を心がけている。2020年度前期はリモート授業であったが、画面上でも効果的になるようビジュアル資料を準備した。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
宮城県知事指定建築士技術講習の講師		2020年4月～		宮城県建築士事務所協会の依頼に基づき、建築士に対するCPD事業の一貫として開催された知事指定講習の講師を務めた。			
一級建築士定期講習の講師		2020年4月～		建築士法で3年に一度の受講が義務づけられている一級建築士の定期講習において、建築技術教育普及センターの依頼に基づき年に数回の講師を務めた。			
建築家の講演会等に対する学生の積極的な参加促進		2020年4月～		仙台市内などで開催される、一般向けの建築関連講演会やセミナーに学生を積極的に参加させ、社会との接点を増やすよう指導している。			
<b>現在の課題・目標</b>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 講義内容が実社会でどのように使われているのか、を伝えることを意識して授業を行う。</li> <li>2) 授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。</li> <li>3) 授業全体の到達目標や個々の課題等の意図を学生に伝える。</li> <li>4) 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。</li> </ol>					
<b>今年度の進捗状況</b>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 現場見学への学生の参加など、実社会における実務に触れさせる機会を積極的に導入した。</li> <li>2) 折に触れて、前に学修した内容を振り返り、繰り返し説明した。</li> <li>3) 授業全体の到達目標、個々の課題等の意図を、そのたびごとに学生に説明した。</li> <li>4) 遠隔授業において、一方向の解説とならないよう注意して講義を進めた。</li> </ol>					
<b>来年度の進捗目標</b>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 来年度も積極的な実務教育を導入し、講義での内容が実社会でどのように活かされているかを具体的に理解させるよう努める。</li> <li>2) 学生の知識の定着度合いを確認しながら、適宜まとめや重要点の振り返りを行う。</li> <li>3) 何のために課題をやっているのかなど、詳しく説明しながら授業を進める。</li> <li>4) 授業内外において学生とのコミュニケーションを図る。</li> </ol>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							



C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
「みやぎボイス」の変遷と果たす役割(座談会)	単著	2020年11月	公益社団法人日本建築家協会, JIA MAGAZINE 381, 公益社団法人日本建築家協会, JIA MAGAZINE 381	櫻井一弥, 増田聡, 石塚直樹, 真壁さおり, 宇都彰浩, 渡邊宏, 手島浩之, 佐伯裕武, 阿部元希, 佐藤克枝	pp.14~17 頁
せんだいデザインリーグ2020卒業設計日本一決定戦作品解説等	単著	2020年9月	建築資料研究社, せんだいデザインリーグ SDL:Re-2020オフィシャルブック, 建築資料研究社, せんだいデザインリーグ SDL:Re-2020オフィシャルブック	◎櫻井一弥, 恒松良純ほか10名	pp.116~157 頁
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	1) 建築家として, 社会的に意義ある建築作品を生み出し, 地域の発展に寄与する。 2) 震災復興にかかわる活動を積極的に行う。 3) 地方公共団体の公共施設整備にかかわる審査員などを積極的に引き受ける。				
今年度の進捗状況	1) いくつかの建築作品を学会等で口頭発表することができた。 2) 震災復興に関係する活動を継続することができた。 3) 多くの地方公共団体の公共施設に関して, 審査員などを行うことができた。				
来年度の進捗目標	1) 建築作品の設計を積極的に行い, 然るべき方法で発表する。 2) 継続的に震災復興に関わる活動を行い, 東北の復興に寄与する。 3) 引き続き東北地方を中心とした地方公共団体の公共施設整備に積極的に関わる。				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要	
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2020年7月～		宮城県収用委員会 委員			
2020年7月～		登米市指定管理者選定委員会 委員			
2019年6月～2020年6月		山形県寒河江市PFI事業者選定審査委員会 委員			
2019年5月～		宮城県大河原町大規模事業評価委員会 委員			
2015年5月～		NPO法人 とうほくPPP・PFI協会 理事			
2014年10月～		宮城県多賀城跡調査研究委員会 委員			
2014年4月～		日本建築家協会東北支部役員 事業委員会 委員長			
2013年4月～		日本建築学会東北支部 建築デザイン教育部会			
2012年4月～		管理建築士定期講習 講師			
2012年3月～		せんだいデザインリーグ 卒業設計日本一決定戦 審査員(せんだいデザインリーグ 卒業設計日本一決定戦)			
2011年4月～		日本建築家協会東北支部宮城地域会 事業委員会 委員長			
2010年5月～		一級/二級/木造建築士 定期講習 講師			
2010年4月～		仙台建築都市学生会議 アドバイザリーボード アドバイザー(仙台建築都市学生会議 アドバイザリーボード アドバイザー) 助言・指導			
2009年10月～		公益社団法人 日本建築家協会 会員			
2004年7月～		日本建築学会 司法支援建築会議運営委員会 調査研究部会			
2002年4月～		日本建築学会東北支部 建築デザイン教育部会			
2000年5月～		日本インテリアコーディネーター協会 会員			

2000年4月～		日本建築学会 会員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
東日本大震災復興支援活動報告シンポジウム 「みやぎボイス2020」	せんだいメディアテーク1 階 オープンスクエア	2020年10月	建築家協会等の主催による被災地復興支援活動のシンポジウムにおいて、企画立案・会場構成・当日運営責任者、総合司会等を担当。
現在の課題・目標	1) 建築家の地位向上と地域の発展のために、学外活動を積極的に行う。 2) 建築作品の賞には積極的に応募する。		
今年度の進捗状況	1) シンポジウムなどを通して、学外での活動を十分に行うことができた。 2) いくつかの賞に応募したが、受賞することができなかった。		
来年度の進捗目標	1) シンポジウムや展覧会等には積極的に参加するとともに、自ら企画を行う。 2) 建築作品に関する賞に積極的に応募する。		
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
1) 学校法人東北学院 理事長特別補佐(キャンパス整備担当) 2) 東北学院大学キャンパス整備推進本部 委員 3) 東北学院大学キャンパス整備準備室 委員 4) 東北学院大学キャンパス整備学内調整会議 副委員長 5) デフォレスト館維持管理委員会 委員 6) ラーニングコモンズ運営委員会 委員 7) 博物館運営委員会 委員 8) 東北学院史資料センター 調査研究員			

2020年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	教授	氏名	鈴木 道哉	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
講義内容を理解できているか確認させる時間・機会を設ける。		2020年～		授業でこまめに小テストを行いこれに伴い毎回の授業の復習の動機付けを行い、学生自身に自分の理解度を確認させる。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		1.講義内容が実社会でどのように使われているのか、を伝えることを意識して授業を行う。 2.授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。 3.授業全体の到達目標や個々の課題等の意図を学生に伝える。					
今年度の進捗状況		1.に関して: 講義内容が建築分野でどのように使われるかを分野ごとに解説した。 2.に関して: 重要な点に関して定期的に小テストを実施しさらに解説を行うことで知識の定着を促した。 3.に関して: 初回にシラバスを用いて到達目標を説明した。					
来年度の進捗目標		1.に関して: 継続して講義内容が建築分野でどのように使われるかを分野ごとに解説していく。 2.に関して: 継続して重要な点に関して定期的に小テストを実施しさらに解説を行うことで知識の定着を促していく。 3.に関して: 初回にシラバスを用いて到達目標を説明を行うとともに、課題の意図の解説を行っていく。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
東北地方(仙台市)の中規模零・エネルギービルに関する研究(第1報)建築概要と躯体蓄熱空調システムを利用した環境技術	共同	2020年9月	空気調和・衛生工学会大会学術講演論文集(不明)	長田 真一郎, 成田 政杜, 村上 宏次 長谷部 弥, 川村 聡宏, 鈴木 道哉			
東北地方におけるZEBを目指した中規模オフィスの研究 その1 建物概要及びエネルギー削減施策	共同	2020年9月	日本建築学会大会学術講演梗概集(関東) 2020年9月(不明)	○長田 真一郎, 成田 政杜, 村上 宏次 長谷部 弥, 川村 聡宏, 鈴木 道哉	pp.1993-1994		
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		●東北地方における再生可能エネルギーを用いた地域のエネルギー自給率に関する研究をさらに進める。					
今年度の進捗状況		●ネガワットに関するデータ収集を実施中(来年度も継続)					

来年度の進捗目標	●ネガワットに関するデータの取りまとめ完了		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2019年4月～	日本建築学会東北支部 環境部会 委員		
2016年4月～	空気調和・衛生工学会 東北支部 運営委員会 委員		
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
4年G主任 産学連携推進センター長			

2020年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	教授	氏名	武田 三弘	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
実験用の動画や写真撮影を行い、疑似体験できるようなパワーポイントによる講義の実施		2020年4月1日～		今年度は、対面による授業ができなかったため、リアルに実験を経験できるように、TAによる実験方法の動画や写真を撮影し、パワーポイントでまとめ、理解力の向上に努めた。			
zoomによる講義とresponを用いた回答、manabaによる復習演習の実施		2020年4月1日～		新型コロナウイルス感染症によって対面授業ができないが、学生の積極的な参加を促すため、zoomによるパワーポイントの講義と、講義の中に選択形式で出題した問題をresponで回答させ、他の学生がどの様に思っているのかを理解しながら、チャットやresponによる質問を受け付けた。講義後は、manabaによる演習を行い、講義の理解度を確認させた。			
最新の情報を取り入れたパワーポイントの作成		2020年4月～		講義内容については、毎年最新の情報を取り入れてパワーポイントを作成している。			
予習・復習用の問題の作成		2019年4月6日～		線形代数学の講義においては、講義終了後にその日に行った内容に関する問題を解かせ、理解力を計ると共に、時間内に正解にたどり着けなかった学生に関しては、自宅で復習し、その問題を自力でクリアできた場合、認め印を押すやり方を実施した。これによって15回の講義において、全ての課題を自力で解くことができたかどうか確認しながら授業に参加できるようになった。			
毎回の講義内容に合わせた問題の作成と評価		2019年4月6日～		講義の内容に合わせた問題を作成し、課題として問題を解くように指導するとともに、翌週、課題を提出後に、その内容について、正解を伝えるだけではなく、書き方のポイントやアドバイスをを行っている。			
専門的な情報が書かれた資料の作成		2019年4月6日～		コンクリートメンテナンス工学においては、内容が特殊すぎて、適当な教科書が無い状況である。その為、自ら講義資料を作成し、それをコピーして学生に配付している。昨年度作成した資料には、誤字脱字があったため、今回はそれも修正して配布した。			
一問一答のクイズ形式による学習内容の確認		2019年4月6日～		コンクリート工学の講義の冒頭で、前回までの講義の中で重要な事項を質問し、答える形式を繰り返し、記憶に定着させる事を行っている。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
閲覧資料の作成(コンクリートメンテナンス工学)		2020年4月1日～		コンクリートメンテナンス工学においては、内容が特殊すぎて、適当な教科書が無い状況である。その為、自ら講義資料を作成し、それをGoogle上で閲覧できるようにしている。			
教科書として、コンクリート工学、鉄筋コンクリート工学の教科書を共同で作成し、使用している。		2020年4月1日～		最新の情報を入れた教科書を作成し、講義で使用している。また、年ごとに増えていく最新情報についても、講義中に紹介している。			
配付資料の作成(環境建設工学実験)		2019年4月6日～		コンクリート実験における実験方法や報告書の書き方、図面の作成方法について書かれた教材を作成し、配付した。			
配付資料の作成(コンクリートメンテナンス工学)		2019年4月6日～		専門的な用語や劣化画像などについてまとめた40枚の配付資料の作成し、講義前にmanabaから閲覧できるようにした。			
講義内容の復習のための課題の作成(コンクリート工学、課題1～13)		2019年4月6日～		各講義内容の復習として課題を出し、その内容について添削・説明した。			
演習問題の作成(14回分、線形代数学)		2019年4月6日～		講義中に行う演習問題を作成し、不正解の問題は宿題として実施させ、翌週解答を行った。問題は、毎年数値を変えた問題としているため再履修者や過去問を持っている学生にも対応できるようにしている。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
出前講義の実施		2021年2月12日		花巻南高校に出前講義をしてきた。参加人数は12人であった。講演題目は「魅惑のコンクリート」であり、コンクリートの材料から性質まで問題形式で行ってきた。			
宮城県コンクリート診断士会の講習会で講演		2020年12月22日		宮城県コンクリート診断士会において「各種非破壊検査による同一箇所のコンクリート表層品質評価」についてzoomにて発表した。			

山形県コンクリート診断士会において講演	2020年11月20日	山形県コンクリート診断士会に依頼され、「塩水吸い上げがコンクリートの劣化に及ぼす影響」および「各種非破壊検査によるコンクリートの表層品質評価について」の2題について講演してきた。			
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>					
JABEEアンケートにおける「分かりやすい講義に努めた教員」のアンケートで一位となった。	2020年4月1日～	本学科ではJABEEを受審しており、環境建設独自にJABEEアンケートを行っている。その中で、「分かりやすい講義に努めた教員」というアンケートで昨年度1位であった。今年度も同様の結果であった。			
<b>現在の課題・目標</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●学生の理解度の向上を図ること。また、講義に対して積極的に参加できる雰囲気と講義内容を検討する。具体的には、小テストとその後の自己チェックと間違い箇所に関して反省する時間を設ける講義を行う。</li> <li>●講義内容が実社会でどのように使われているのか、を伝えることを意識して授業を行う。</li> <li>●講義内容を学生が理解できているか、学生自身に確認させる時間・機会を設ける。</li> </ul>				
<b>今年度の進捗状況</b>	●小テストに対して解答をしっかりと行うことで、学生の理解度が向上していると思われる。教えたことは沢山あるが、教えずぎると飽きてしまうこともある。また、小テストも問題内容も、教科書に記載されていることなのか、講義中に説明したか確認し、その内容を出題するように心がけている。				
<b>来年度の進捗目標</b>	<p>&lt;学科の教育目標&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①講義内容が実社会でどのように使われているのか、を伝えることを意識して授業を行う。</li> <li>②授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。</li> <li>③授業全体の到達目標や個々の課題等の意図を学生に伝える。</li> <li>④授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。</li> </ol> <p>&lt;個人の目標&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①評価が終わると同時に忘れるような記憶に定着しない講義を行わないこと。</li> <li>②講義を通して、学生が興味を持つ授業を実施すること。</li> <li>③適切な量と講義内容と、それにあった問題を組み合わせるような講義を行う。また、学生の反応についても、注意深く観察しながら話を進めていく。</li> </ol>				
<b>II 研究活動</b>					
<b>著書・論文等の名称</b>	<b>単著・共著の別</b>	<b>発行又は発表の年月(西暦)</b>	<b>発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称</b>	<b>編者・著者名</b>	<b>該当頁数</b>
<b>A. 学術書</b>					
WOODHEAD PUBLISHING SERIES IN CIVIL AND STRUCTURAL ENGINEERING『Acoustic Emission and Related Non-destructive Evaluation Techniques in the Fracture Mechanics of Concrete』	共著	2020年11月	ELSEVIER, Second Edition	Ohtsu, et al	pp.1-308
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>					
コンクリート床版のポットホールを対象としたゴム系の接着型補修材料に関する研究	単著	2020年6月	公益社団法人 コンクリート工学会, コンクリート工学年次論文集, Vol.41(No.1)	大友鉄平, 武田三弘, 一反田康啓, 岡本光弘	pp.1390-1395
長期塩水吸い上げによるコンクリートの劣化に関する研究	単著	2020年6月	公益社団法人 コンクリート工学会, コンクリート工学年次論文集, Vol.42(No.1)	岩館佑樹, 武田三弘, 大久保佑哉, 東海林裕喜	pp.599-604
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>					
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>					
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>					
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>					
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>					
<b>G. 学会における研究発表</b>					
簡易透気試験機を用いた新設樋門・樋管構造物の表層評価に関する基礎研究	共同	2021年3月	令和2年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集, V-19(不明)	尾形拓海, 武田三弘	pp.2頁
各種非破壊検査によるコンクリート表層評価の基礎研究	共同	2021年3月	令和2年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集, V-18(不明)	菅原 瑛, 武田三弘, 鈴木恵子, 小川裕也, 高橋祐樹	pp.2頁

保水量の異なる養生マットの使用がコンクリート表層の品質評価に及ぼす影響	共同	2021年3月	令和2年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集, V-17(不明)	大友鉄平, 武田三弘, 菅原 瑛, 一反田康啓, 岡本 光弘	pp.1頁
塩水吸い上げによるRC製壁高欄の劣化に及ぼす打ち継ぎ処理の影響	共同	2021年3月	令和2年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集, V-15(不明)	岩館佑樹, 武田三弘	pp.2頁
X線造影撮影法による実コンクリート構造物の強度推定に影響を与える要因の基礎研究	共同	2021年3月	令和2年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集, V-9(不明)	石井 暉, 武田三弘	pp.2頁
コンクリート製壁高欄を想定した塩化物イオンの吸い上げ低減技術に関する研究	共同	2020年9月	令和2年度土木学会全国大会第75回年次学術講演会, V-546(不明)	大友鉄平, 武田三弘, 一反田康啓, 岡本 光弘	pp.1頁
はつり方法の違いがコンクリート表面のマイクロクラックの発生状況に及ぼす影響	共同	2020年9月	令和2年度土木学会全国大会第75回年次学術講演会, VI-722(不明)	前原聡, 中野義浩, 桂 孝之, 渡部丈夫, 植田 均, 末廣明寛, 平神拓真, 阿部勝博, 武田三弘	pp.1頁
RC梁型供試体を用いた長期塩水吸い上げ劣化に関する実験的考察	共同	2020年9月	令和2年度土木学会全国大会第75回年次学術講演会, V-545(不明)	岩館 佑樹, 武田三弘	pp.2頁
各種非破壊検査によるコンクリート表層の品質評価に関する比較検討	共同	2020年9月	令和2年度土木学会全国大会第75回年次学術講演会, V-399(不明)	菅原 瑛, 武田三弘, 上西 通	pp.2頁
X線造影撮影法による実コンクリート構造物の強度推定に関する基礎研究	共同	2020年9月	令和2年度土木学会全国大会第75回年次学術講演会, V-382(不明)	石井 暉, 武田三弘	pp.2頁
ひび割れ補修後の再劣化に及ぼす各種要因に関する基礎研究	共同	2020年9月	令和2年度土木学会全国大会第75回年次学術講演会, V-140(不明)	尾形拓海, 新沼佳苗, 武田三弘	pp.2頁

#### H. 翻訳(学術書や原典等)

#### I. 特許

現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>●X線造影撮影法を用いたコンクリート性状評価に影響を与える骨材の影響について検討する。</li> <li>●壁高欄の塩水上げが耐久性に及ぼす影響を明らかにする。</li> <li>●津波履歴を受けた土間コンクリートの塩害調査を実施する。</li> </ul>
今年度の進捗状況	X線造影撮影法については、コアサイズの影響、骨材寸法の影響について調べることが出来た。壁高欄の塩水吸い上げは、コンクリート表面の空隙性状の差で吸い上げが変わることが分かり、打ち継ぎ部は欠陥を生じやすくエポキシ樹脂などを使用する方法が提案できた。津波履歴を受けた土間コンの塩害調査は、震災後10年を迎え再調査することができた。さらに各種非破壊検査方法を用いた表層評価手法の評価結果の意味について多くの実験を行い、水分率の違いで結果が変わる点など明らかにした。
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>●土間コンクリートの色むらの原因を明らかにし対策方法についても提案できるようにする。</li> <li>●X線造影撮影法を用いたコンクリートの品質評価方法の精度を上げる。</li> <li>●樋門・樋管に発生した沈みひび割れの性状把握のための非破壊検査として透気試験装置を開発し、実用化を目指す。</li> </ul>

#### III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2020年8月		東日本高速道路株式会社東北支社宮城地域技術懇談会委員 委員	
2020年4月		東北地方整備局総合評価委員会専門部会委員 委員	

#### V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

## VI 学内における管理運営に関する諸活動

就職キャリア支援部長として、学生の就職支援活動を行っている。



2020年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	教授	氏名	中沢 正利	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進(プログラミング応用)		2020年9月23日～2021年1月20日		2020年度前期の「プログラミング応用」では、ノートパソコンを用いた例題演習について、pdf配付した講義ノートと新しく作成したpptを用いて遠隔授業中に説明した。また、授業後に復習用の計算課題を出題し、次週の授業前までに提出させてチェックし、次週の遠隔授業で模範解答を行った。			
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進(構造力学Ⅲ)		2020年5月12日～2020年8月11日		2020年度前期の「構造力学Ⅲ」は遠隔授業であったため、pdf配付した問題集と新しく作成したpptにより授業を行い、その講義内容を録画して事後学修の資料とした。また、毎回授業で復習用計算課題をpdfで配付し、それを印刷して解答を記入しカメラで撮影した後に、画像ファイルとして提出させた。授業では毎回模範解答について説明した。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
「プログラミング応用」(旧:数値解析演習)		2020年9月23日～2021年1月20日		学生が独自に予習できるように、エクセルVBAの使い方の授業テキストをpdf資料として配付した。昨年度版にBASIC文法の基礎を追加し、解説も加えた。			
「構造力学Ⅲ」		2020年5月18日～2020年8月11日		学生が独自に予習できるように、構造力学問題集を作成して配付した。総ページ数30P程度。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		(JABEEに関連する要請) ①講義内容が実社会でどのように使われているのか、を伝えることを意識して授業を行う。 ②授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。 ③授業全体の到達目標や個々の課題等の意図を学生に伝える。					
今年度の進捗状況		(JABEEに関連する要請) ①機会を見ては実務の話をし、その際には実例写真を見せるようにしている。 ②計算を要する課題を与えるようにしており、間違えた場合は復習させることにしている。 ③シラバス更新時に講義内容と到達目標を見直している。また、授業の開始時にシラバスのコピーを配付して、説明をしている。					
来年度の進捗目標		(JABEEに関連する要請) ①講義内容が実社会でどのように使われているのか、を伝えることをさらに意識して授業を行う。 ②講義内容を学生が理解できているか、学生自身に確認させる時間・機会をさらに増やす。 ③授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
周期性構造橋梁を構成する基本モジュールとカンチレバー形式橋梁のトポロジー最適形状		共著	2021年3月	土木学会, 構造工学論文集, 67A		中沢正利・近広雄希・有尾一郎	pp.90-98
Structural analysis of a scissor structure		単著	2020年12月	Bulletin of the Polish Academy of Sciences: Technical Sciences, Vol.68, No.6, Bulletin of the Polish Academy of Sciences: Technical Sciences, Vol.68, No.6		I.ARIO, T.YAMASHITA, Y.CHIKAHIRO, M.NAKAZAWA, K.FEDOR, C.GRACZYKOWSKI and P.PAWLOWSKI	pp.1319-1332

Analysis of multiple bifurcation behaviour for periodic structures	単著	2020年8月	Archives of Mechanics, Vol.72, Issue 4, Archives of Mechanics, Vol.72, Issue 4	I.Ario, M.Nakazawa	pp.283-306
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>					
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>					
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>					
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>					
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>					
<b>G. 学会における研究発表</b>					
架設橋を構成する基本モジュール試作のための設計方法	単独	2021年3月	令和2年度土木学会東北支部技術研究発表会(不明)	中沢正利	pp.2
パネル橋を構成する基本モジュールの最適構造について	共同	2020年9月	土木学会2020年度全国大会第75回年次学術講演会(不明)	中沢正利・有尾一郎・近広雄希	pp.2
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	①他大学の研究者との共同研究をより一層進める。 ②科研費テーマに関する研究の更なる推進				
今年度の進捗状況	①広島大学・信州大学との共同研究を推進し、研究論文を公表した。 ②科研費で採択されたテーマに関する数値解析を行って成果の一部を国内学会で発表した。 ③科研費テーマの年次計画に沿って、研究分担者と協働して研究を行った。				
来年度の進捗目標	①科研費が終了するので、科研費成果報告書の作成を真摯に進める。 ②新しい研究テーマに関する調査を行う。				
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要		
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>					
2020年9月～	土木学会構造工学委員会 災害時の緊急仮設を目的とした緊急仮設橋に関する調査小委員会顧問 会員				
2020年8月～	日本鋼構造協会 土木鋼構造診断士専門部会委員 委員				
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>					
副学長(点検・評価担当)					

2020年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	教授	氏名	中村 寛治	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
最新の環境問題の情報資料を利用した説明		2020年4月1日～		NHK等で放映される環境問題の内容、および新聞記事を加え、知識と現実問題のリンクを重視した講義を行っている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
授業の配布資料の改訂		2020年4月1日～		情報リテラシー、環境建設工学実験、環境保全工学、環境工学IIの配布資料を見直し、オンライン授業で理解しやすいように手直しをした。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 現実に起きている環境問題を授業内容に取り入れる。</li> <li>2. 卒業研究では最先端の研究内容を取り入れる。</li> <li>3. 講義内容が実社会でどのように使われているのか、を伝えることを意識して授業を行う。</li> <li>4. 授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。</li> <li>5. 授業全体の到達目標や個々の課題等の意図を学?に伝える。</li> <li>6. 授業内外において学?と教員との双?向コミュニケーションを意識し、学?の理解度の確認や質問機会の確保に努める。</li> </ol>					
今年度の進捗状況		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 仙台周辺区域の浸水の実態を講義内容に取り入れた。</li> <li>2. 河川水中に生息する薬剤耐性細菌の問題に取り組み、新たなデータ取得が出来た。</li> <li>3. 講義内容に、実社会での適用例を意識して増やした。</li> <li>4. 定期試験前の自己確認機会を増やしたため、学生の理解度が深まった。</li> <li>5. 授業の開始時、中間時に特に意識して課題等を伝え、質疑応答を行った。</li> <li>6. マナバの機能を活用して、オンライン授業での学生とのコミュニケーションを図り、理解度向上に努めた。</li> </ol>					
来年度の進捗目標		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 新しい環境問題の講義内容を追加して、現代社会の問題として解説する。</li> <li>2. 昨年度に引き続き、薬剤耐性細菌の研究を進める。</li> <li>3. 上下水道の民営化に関する問題を講義内容に取り入れる。</li> <li>4. 講義内容に対して、学生の理解度が深まるように、確認に務める。</li> <li>5. 環境工学IIの中で、計算によって解を出す授業内容では、確認を繰り返して、定着を促す。</li> <li>6. 引き続き、マナバを利用して、学生とのコミュニケーション機会を向上させる。</li> </ol>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
BACTERIAL GRAZING-RESISTANCE DEVELOPED DURING CO-EXISTENCE WITH A BACTERIVOROUS PROTIST		単著	2021年2月	Journal of JSCE, Vol.9, Journal of JSCE, Vol.9		K.Nakamura, M.Fukuda	pp.86～93頁
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		・採択中の科学研究費補助金テーマの研究計画を達成する。					

今年度の進捗状況	・基盤研究(A)および挑戦的研究(萌芽)の研究計画は予定通りに進捗した。また、採択中の基盤研究(A)は最終年度のため、新たに基盤研究(A)に応募した。		
来年度の進捗目標	・新たに採択された挑戦的研究(萌芽)の研究を計画通りに進捗させる。		
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 科学研究費補助金挑戦的研究(萌芽)	2019年度～2021年度	個別	Flectobacillus属の糸状化細菌による捕食環境センシング技術の確立
科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(A)	2016年度～2019年度	共同(研究代表者)	環境浄化における原生動物の捕食を回避するためのエンジニアリング手法の確立
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2017年8月～	多賀城市水道事業運営委員会 委員 委員		
2016年5月～	東北地方整備局新技術活用評価会議 委員 委員		
2005年4月～	環境バイオテクノロジー学会 会員 会員		
2005年4月～	土木学会会員 会員		
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	教授	氏名	韓 連熙	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2020年4月1日～		毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概略を説明し、授業中は説明した内容を含む問題を提示し、理解の確認を行う。授業終了時にはその回のまとめを行っている。			
「学生による授業評価」と授業進度等に関するアンケートの実施		2020年4月1日～		学部で実施する「学生による授業評価」を担当科目で実施している。さらに、授業の効果を測定するために教員自身が考案したアンケートを、毎年度実施している。			
独自テキストの作成		2020年4月1日～		必要と考えられる教科には、独自の試料を作成し、配布している。			
ビジュアルな授業		2020年4月1日～		授業を円滑に実施するためパワーポイントを利用している。さらに、レポートを提出させ、これを評価することで修学状況を把握し、アドバイスを与える。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
「自然科学実験ファンダメンタルズ」における実験テキスト作成		2020年4月1日～		「化学実験」分野の4テーマの実験テキストを作成した。			
「環境の化学」における教材プリント作成		2020年4月1日～		環境に応用されている化学原理と演習問題を穴埋めの形式の教材プリントを作成した。			
「基礎化学演習」における教材プリント作成		2020年4月1日～		様々な化学原理と演習問題を穴埋めの形式の教材プリントを作成した。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
<b>現在の課題・目標</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>●作成教材プリント内容(パワーポイント)の改善</li> <li>●講義中の学生とのコミュニケーション</li> <li>●学生の学習(予習・復習)のチェック</li> <li>●(学科教育目標)</li> </ul> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義内容が実社会でどのように使われているのか、を伝えることを意識して授業を行う。</li> <li>2. 授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。</li> <li>3. 授業全体の到達目標や個々の課題等の意図を学生に伝える。</li> </ol> <p>(以下、今年度のみ追加する目標)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>4. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。</li> </ol>					
<b>今年度の進捗状況</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>●作成教材プリント内容(パワーポイント)の改善について:見やすいパワーポイント作成とわかりやすい例題を増やす。</li> <li>●講義中の学生とのコミュニケーションについて:学生への質問と学生からの質問を講義中いつでもできるように積極的に促す。</li> <li>●学生の学習(予習・復習)のチェックについて:開始5分程度に前回の学習内容のまとめを説明、終了前の5分程度に再度講義内容をまとめて説明する。</li> <li>●環境の化学では、二酸化チタンを用いた光触媒の有機物分解の過程を説明した。現在に、二酸化チタン系の光触媒の生活用品の利用についても説明を行った。</li> <li>●授業中に出た重要スライドを自分でまとめさせる宿題を課し、得た知識を学生自身が確認できるようにした。また、そのとき分からなかった点も書かせ、授業中に回答するようにした。</li> <li>●授業毎の重要なポイントを到達目標と関連付けて説明を行い、学生自らは到達目標のみならず、さらに応用可能な部分などについて考えるよう促した。</li> </ul>					
<b>来年度の進捗目標</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>●作成教材プリント内容(パワーポイント)の改善について:最新データの追加。</li> <li>●講義中の学生とのコミュニケーションについて:学生への質問と学生からの質問を講義中いつでもできるように積極的に促す。</li> <li>●学生の学習(予習・復習)のチェックについて:開始5分程度に前回の学習内容のまとめの説明と宿題の確認、終了前の5分程度に再度講義内容をまとめて説明すると共に予習・復習の課題を設ける。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数	

A. 学術書			
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)			
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)			
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文			
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)			
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)			
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>●高電圧を用いた水中プラズマの形成と水処理への応用の研究を進める。</li> <li>●抗酸化作用に関する研究を進める。</li> <li>●上水用の凝集剤を用いた水質実験に関する研究を進める。</li> </ul>		
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>●高電圧を用いた水中プラズマの形成と水処理への応用の研究を進めるについて:電圧増幅器を用いて高電圧発生させ、水中プラズマの形成について検討と脱色実験を行った。</li> <li>●抗酸化作用に関する研究を進めるについて:ミトコンドリアを活性化させると言われているニコチンアミドとニコチン酸を用いて活性酸素反応(フェントン反応やキサンチンオキシダーゼ反応)に添加し、その効果の確認を行った。</li> <li>●様々な上水用の凝集剤を用いた水質実験に関する研究について:近年開発された上水用の凝集剤を用いて水質(濁度、アルカリ度など)実験を行う。</li> </ul>		
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>●上水用の凝集剤を用いた水質実験に関する研究について:近年開発された高塩基度のポリ塩化アルミニウムを用いて水質(濁度、アルカリ度など)実験を行う。</li> <li>●水中プラズマを用いて水中添加物による水の性質変化に関する研究を行う。</li> <li>●抗酸化作用に関する研究を進めるについて:抗酸化作用の物質(植物由来の抽出物)をフェントン反応やキサンチンオキシダーゼ反応に添加し、その効果について検討を行う。</li> </ul>		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2015年4月～		日本水道協会 委員	
2012年4月～		日本環境化学学会会員 会員	
2009年8月～		日本オゾン協会会員 委員	
2006年6月～		土木学会会員 会員	
2003年4月～		電子スピンスイェンス学会会員 会員	
1999年4月～		日本水環境学会会員 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
1. 工学部教育の質保証・改善委員会 2. 工学部学生委員会(副部長)			

2020年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	教授	氏名	宮内 啓介	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
<b>教育実践上の主な業績</b>		<b>年月日(西暦)</b>		<b>概要</b>			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
manabaの活用		2020年		授業中に使用したパワーポイントファイルを、授業終了後にmanaba上で公開した。今年度は遠隔授業だったので、例年の穴埋めファイルと全て埋まっているファイル両方を配布し、好きな方を使えるようにした。			
予習・復習の時間の設定		2020年		毎回の授業でプリントを配布した。復習となるような問題と、次回の予習になるような課題をmanabaで与えた。解答は授業開始直前に公開し、出来が悪い回は、授業の最初に解説もおこなった。先端の科学と技術、環境生物工学、生命の科学について行った。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
出前実験授業		2021年3月16日～2021年3月16日		宮城県工業化学工学科の生徒40名に対して、実験の授業を行った。			
バイオテクノロジー・リサーチ・コモン棟見学会対応		2020年12月22日		宮城県工業			
工学部FD講演会に参加		2020年8月1日～2020年8月1日		工学部FD講演会に参加し遠隔授業についての教員の講演を聴講した。			
遠隔授業の支援		2020年		学科教員にmanabaやzoom等の使用方法を教えた。実施期間中も相談に乗り、円滑な授業運営の一部に貢献した。			
工学総合研究所 バイオ部門 部門長		2020年		工学総合研究所 バイオ部門長をつとめた			
FD講習会に参加		2020年		9/16と12/10			
manabaウェビナーの聴講		2020年		朝日ネットが主催するmanabaを用いた授業実施例やmanabaの使用方法に関するセミナーに参加した。 8/28、11/27、12/16、1/26、3/5			
授業見学		2020年		学科で行なっている学生に対するアンケートで良い授業であると評価された科目の授業見学を行った(山口先生、地盤力学I)。また、自分の授業を他の教員に見ていただいた(環境建設工学総合演習)。			
環境建設工学専攻 専攻科長		2020年～2021年3月31日		専攻科長をつとめた			
<b>現在の課題・目標</b>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1.「講義内容が実社会でどのように使われているのか、を伝えることを意識して授業を行う。」(学科の教育改善目標)</li> <li>2.「授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。」(学科の教育改善目標)</li> <li>3.「授業全体の到達目標や個々の課題等の意図を学生に伝える。」(学科の教育改善目標)</li> <li>4.「授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。」(学科の教育改善目標)</li> <li>5. 質問を受け付けて回答(manabaに掲載)を載せているが、それを閲覧させる試みを行いたい。</li> <li>6.「情報リテラシー」引き続き練習問題を宿題にして、自宅学習の時間を増やす。自分で考えてやるようにするにはどうすればよいのか考えたい。理解度のチェックは途中の回でおこなう。</li> <li>7.「生命の科学」引き続き、常に最新の話題を入れるように気を配る。</li> </ol>					

<p>今年度の進捗状況</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1.「講義内容が実社会でどのように使われているのか、を伝えることを意識して授業を行う。」生命の科学については、遺伝子組換えや遺伝子診断について伝えることができた。環境生物工学についても、バイオエタノール等で伝えることができた。情報リテラシーについても、各ソフトウェアやプログラミングについて、伝えることができた。</li> <li>2.「授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。」授業の最後に今回の授業で大事だった点をresponで答えさせた。またresponを使って授業中に確認問題を解かせるということも行った。</li> <li>3.「授業全体の到達目標や個々の課題等の意図を学生に伝える。」授業の最初には到達目標について述べた。単元が終わるごとに、授業で教える知識の全体と今どこが終わったかを伝えた。課題については、明確に伝えることができたと思っている。</li> <li>4. manaba掲示板やメール等、質問があった際にはできるだけ早く答えた。授業終了後のresponを用いた質疑応答も有効に使うことができた。</li> <li>5. 復習の問題に、質問に対する回答を見ないと正解が分からない問題を入れるようにした。</li> <li>6.「情報リテラシー」VBAの教え方は良くなったと思われる。</li> <li>7.「生命の科学」新聞記事を適宜紹介するようにした。</li> </ol>				
<p>来年度の進捗目標</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. このまま続ける。もう少し強調したほうが伝わるかもしれない。</li> <li>2. 引き続きmanabaを用いた予習・復習を続ける。写せばよい、という考えの学生を減らしたい。</li> <li>3. responを用いた確認試験を多く行いたい。コミュニケーションを増やすことにも通じると思う。</li> <li>4. manabaの個人指導の存在をしっかりと知らせる。</li> <li>5. 引き続き、質問を受け付けて回答をmanabaに載せているが、閲覧させる試みを行いたい。</li> <li>6. 引き続き練習問題を宿題にして、自宅学習の時間を増やす。自分で考えてやるようにするにはどうすればよいのか考えたい。理解度のチェックは途中の回でおこなう。</li> <li>7. 常に最新の話題を入れるように気を配る。</li> </ol>				
<p>II 研究活動</p>					
<p>著書・論文等の名称</p>	<p>単著・共著の別</p>	<p>発行又は発表の年月 (西暦)</p>	<p>発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称</p>	<p>編者・著者名</p>	<p>該当頁数</p>
<p>A. 学術書</p>					
<p>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</p>					
<p>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</p>					
<p>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</p>					
<p>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</p>					
<p>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</p>					
<p>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</p>					
<p>G. 学会における研究発表</p>					
<p>河川水中からのビオラセイン生産細菌の単離と関連遺伝子群の解析</p>	<p>共同</p>	<p>2021年3月</p>	<p>令和2年度 土木学会東北支部 技術研究発表会(不明)</p>	<p>片倉啓祐、宮内啓介、 中村寛治</p>	
<p>Transcriptional Regulation of Benzoate Degradation Genes in PCB-degrader, <i>Rhodococcus jostii</i> RHA1</p>	<p>共同</p>	<p>2020年6月</p>	<p>ASM General Meeting(不明)</p>	<p>Keisuke Miyauchi, Takuya Chida, Shuta Mizusawa, Ginro Endo, Masao Fukuda</p>	
<p>H. 翻訳(学術書や原典等)</p>					
<p>I. 特許</p>					
<p>現在の課題・目標</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 科研費の維持</li> <li>2. 余計な雑務を避け、1報は書く。</li> <li>3. 引き続きヒ素汚染土壌の浄化の研究に注力する。</li> </ol>				
<p>今年度の進捗状況</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 基盤Cの研究を続ける。代表者として国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B)。分担者として基盤A(中村先生と東北大井上先生)。</li> <li>2. 低調。</li> <li>3. 進行中。</li> </ol>				
<p>来年度の進捗目標</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 科研費の維持</li> <li>2. 余計な雑務を避け、1報は書く。</li> <li>3. 引き続きヒ素汚染土壌の浄化の研究に注力する。</li> <li>4. 在外研究の準備</li> </ol>				
<p>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</p>					



競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2017年3月～2021年3月		日本農芸化学会英文誌編集委員 会員	
2013年6月～		環境バイオテクノロジー学会理事 会員	
2012年1月～		日本微生物生態学会会員 会員	
2012年1月～		Assistant Editor of Microbes and Environments 委員	
2011年8月～		日本生物工学会北日本支部委員 会員	
2007年3月～		ゲノム微生物学会会員 会員	
2006年4月～		土木学会会員 会員	
2004年1月～		アメリカ微生物学会会員 会員	
2000年4月～		環境バイオテクノロジー学会会員 会員	
1996年4月～		日本生物工学会会員 会員	
1994年1月～		日本農芸化学会会員 会員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
2019年4月?2021年3月 環境建設工学専攻科長			

2020年度								
所属	工学部 環境建設工学科	職名	教授	氏名	山口 晶	大学院の授業担当の有無	有	
<b>I 教育活動</b>								
教育実践上の主な業績		年 月 日 (西 暦)		概 要				
<b>1. 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)</b>								
卒業研究の実験実施のための企業研修		2020年4月1日～2021年3月31日		共同研究を行っており、卒業研究のテーマとなっている地盤改良工法の実験について、本学実験室に小野田ケミコの技術者に来てもらい、1日の研修と実験を実施した。				
試験直前まとめ演習の実施		2014年4月～		期末試験直前にまとめの演習を課し、これまでの講義の復習を行わせている。				
小テストの実施		2005年4月～		複数回小テストを行うことで、学生の理解を促している。				
土木学会東北支部技術研究発表会の学生の参加		2001年3月2日～		土木学会東北支部主催の技術研究発表会に参加した。学生の発表を4件行い、討論に参加した。				
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>								
測量学I 講義内容の穴埋めノートの作製と配布、パワーポイントによる遠隔講義の実施		2020年4月1日～		講義15回分のパワーポイントの作製と公開、講義内容の穴埋めノート15回分				
地盤力学I 講義内容の穴埋めノートの作製と配布、パワーポイントによる遠隔講義の実施		2020年4月1日～		講義15回分のパワーポイントの作製と公開、講義内容の穴埋めノート15回分				
測量実習製図 オンライン授業講義資料、演習問題作成		2020年4月～2020年8月						
地盤力学I 演習プリント		2014年4月～		演習プリント13回分、まとめプリント1回分				
測量学I 演習プリント		2014年4月～		演習プリント9回分、まとめプリント1回分				
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>								
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>								
現在の課題・目標		卒業研究を通じて、学生の自主性と考える力を養う方向で教育を行いたい。講義の演習の実施については、自己学習ができてよいと学生からも支持されており、継続している。今年度は特に演習問題の解説を行うようにしたところ、理解が深まったとの意見があった。来年度も引き続き、学生の様子を見ながら、まずは考えさせ、それから説明を行う方法を継続した。 今年度の学科の教育改善目標は ①講義内容が実社会でどのように使われているのか、を伝えることを意識して授業を行う。 ②授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。 ③授業全体の到達目標や個々の課題等の意図を学生に伝える。 である。これも引き続き意識して講義を実施したい。						
今年度の進捗状況		学科の教育改善目標①については、担当科目が測量学、測量実習製図、地盤力学と、実務に直結した講義であることから、現場でどのように用いるかの具体例を出しながら説明を行った。 ②については、講義中に小テスト、演習を多く行ったため、学生の理解は深められたと思うが、その分採点等に時間を取られたのは昨年度と同様である。また、講義の最後の時間に、必ずこれまでの全講義の重要ポイントのまとめプリントを配布している。また試験問題もこれをしっかり復習すれば十分合格できる試験としている。しかし、逆に甘く見ているせいか、試験の点数は良い学生と悪い学生に二分されている。 ③については、講義で行った内容を演習問題等の自己学習用プリントとし配布しているので、おのずと意図は理解しているだろうという考え方があったが説明をもう少し丁寧にした方がよかったかもしれないと反省している。						
来年度の進捗目標		今年度と同様に、上記の学科の教育目標を頭に入れなが、講義をおこなっていきたい。 年度初めに学科の教育改善目標が新たに設定されるので、そちらも引き続き意識しながら講義を行う予定である。 今年度の学科の目標の③については、前年度の反省を踏まえ、配布時に何を意図しているか、何に注意して計算を実施しないといけないか、説明を行った。そのため、演習問題の正解数が増えた気がする。来年度も引き続きと実施したい。						
<b>II 研究活動</b>								
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月 (西 暦)		発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>								

Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
縦回転攪拌混合工法をモデル化した杭の貫入実験による根入れ深さの検討	共同	2021年3月	令和2年度土木学会東北支部技術研究発表会, III-2, 東北学院大学(不明)	石坂 裕希 丹野 照久 細谷 学 山口 晶 山根 行弘 多田 光一郎	pp.2頁
攪拌混合工法における粘性土地盤の共回り現象に含水比が与える影響	共同	2021年3月	令和2年度土木学会東北支部技術研究発表会, III-10, 東北学院大学(不明)	大村 優斗 菅原 俊輝 須藤 大樹 山口晶 山根 行弘 蓮香 朋宏	pp.2頁
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	今年度から, 有機質土の地盤改良に加えて, 改良柱の先端形状に関する研究, 可塑性グラウトの浸透性能に関する研究についても新しく取り組んでいる。有機質土および改良柱の研究は小野田ケミコとの共同研究であり, 引き続き共同研究をおこなっていききたい。可塑性グラウトに関する研究は日本基礎技術との共同研究である。今年度からの研究なので, うまくいっていない点もあるが, 引き続き検討を続けたい。				
今年度の進捗状況	有機質土の研究については, できれば今年度に論文にしたかったが, そこまでの結果が得られなかった。引き続き研究を続ける予定である。改良柱および可塑性グラウトについては, 本年度から実施した研究であることと, 現場で苦勞していることの解決を目指した共同研究であることから, 結論がでも論文作成にいたるかどうかは不明である。ただ, 現場に役立つ研究として続けたいと思っている。				
来年度の進捗目標	有機質土, 改良柱, 可塑性グラウトに関する研究は引き続き実施したい。特に可塑性グラウトは実際に実験にはいるまでに, 装置の製作などのために時間をかなり使ってしまい, 時間的に厳しい状況となっているので, 引き続き, 実施する予定である。				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要		
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2020年4月～	富谷柔道スポーツ少年団 団長				
2019年11月～	スポーツ少年団認定指導員				
2018年～2020年	地盤工学会 理事 地盤工学会 技術普及委員会委員長 会員				
2017年～	仙台市宅地保全審議会 技術専門委員 委員				
2017年～	仙台市宅地保全審議会委員 委員				
2014年～	仙台市環境影響評価審査会委員 委員				
2007年～	地盤工学会東北支部東北地域地盤災害研究委員会委員 会員				
2001年～	地震工学会会員 会員				
2000年～	土木学会会員 会員				
1997年～	地盤工学会会員 会員				
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		

現在の課題・目標	<p>来年度の全日本理工科学生柔道優勝大会で、好成績を残す。 ボランティア活動として、富谷柔道スポーツ少年団に本年から参加している。 柔道スポーツ少年団の所属のC指導員およびC級審判員として、引き続き、練習にも参加し、青少年の育成にも貢献していきたい。</p>
今年度の進捗状況	<p>工学部柔道部の部員は5名以上集まっているが、練習があまりできていない。また、大学業務が多く、自分自身も練習に参加できていない。ただし、今年度に、初心者で入部した学生が講道館柔道1級を取得した。初段(黒帯)の取得を次は目指したい。</p> <p>ボランティア活動である富谷柔道スポーツ少年団については、思うように参加できていないが、できるだけ都合をつけて参加したいと思っている。また、柔道について技の研究を行い、教えていけるようにしたいと考えている。また、スポーツ少年団については、ホームページの更新も引き続き行っている。ホームページを見て入った団員も出てきており、成果が出始めている。ただし、少年団の保護者には柔道を理解せずに自分の意見を述べる人がおり、ボランティアとして人と関わる難しさを感じ始めている。今年度はスポーツ少年団継続のために最低2名の取得が義務付けられているスポーツ少年団認定員の資格を取得した。</p>
来年度の進捗目標	<p>工学部柔道部ではなるべく練習に参加したいと考えている。初心者の学生の初段黒帯取得に向けて指導を行う。</p> <p>富谷柔道スポーツ少年団については、指導員として参加するとともに、ホームページの更新なども行い、青少年の健全育成について情報を発信するとともに引き続き貢献していきたい。団員の昇段試験についても積極的に指導していきたい。</p>
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>	
<p>1.2015年度～2019年度入試委員 2.2016年度～2018年度 入試副部長(工学部) 3.2017年度～2020年度(予定) グループ主任</p>	

2020年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	准教授	氏名	崎山 俊雄	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
地域の建築文化に対する視点の醸成		2020年		建築やまちづくりの分野では、地域への視点が極めて重要である。そこで「日本建築史」においては、特に仙台市、多賀城市、宮城県、東北地方への視点を重視した事例の紹介等を心がけている。数回のレポート課題では地域的課題を取り入れた。ジュニアセミナーの少人数課題(講座配属学生対象)では、土樋キャンパスの歴史的建造物の実測調査等も実施した。			
毎回のレポート作成(または演習問題)による学習内容の定着と自主学習の促進		2020年		「西洋・近代建築史」および「日本建築史」では、毎回の授業後に、講義内容の定着を図るためのレポートや小テストを課している。レポートの作成に際しては、単なる配布資料のコピーで終えるのではなく、積極的に自主学習することを促し(参考文献の明示化)、その成果(参考文献の妥当性および活用方法)を成績評価に反映する仕組みとしてしている。採点にはルーブリックを活用し、提出の翌週には標語を付して返却している。優れたレポートは翌週に紹介して受講生と目標の共有化を図っている。			
建築設計教育における初学者向け対話指導の工夫		2020年		建築設計課題での初学者に対する指導において、学生個々人の感性や考えを尊重しつつ、より建築的に思考を深め、造形を発展させていくための対話型指導(1対1指導)を実施している。また、オフィスアワー以外も可能な限り丁寧に学生対応を行うことにしている。			
クイズ形式等(問いかけ)による学生の授業参加の促進		2020年		特に「西洋・近代建築史」および「日本建築史」においては、多くの建築や美術の事例を取り上げるため、著名な建物の名称や所在地、設計者などについて小テスト形式で学生に問いかけたり、学生の反応を見ながら進行する授業方法を意識している。小テストは前の週に範囲を提示して予習を促し、解答の集約にはresponを活用し、結果は成績評価に反映することとしている(総合的な成績評価方法については初回の講義で資料を配布して詳しく説明している)。学生の授業参加を促し、メリハリのある授業を心掛けている。			
講義資料の1週間前配布と演習問題中心の講義による理解の促進		2020年		法律を扱う「建築法規」においては、難解な法律的かつ技術的記述を技術者としての実践的観点から理解する上で「繰り返し学習」が特に重要との判断から、自主学習に配慮して作成した資料を当該講義の1週間前に配布して自習箇所(予習)を指示した上で、各回の講義では、前半を前週の演習問題と解説、後半を配布済み資料の重要部分の解説に充てる形式で講義展開した。演習はmanabaのドリルを活用して繰り返し学習できる仕組みとし、理解できなかった問題はresponを通して詳しい解説を希望することができるようにした。予習・演習・解説を連動させた講義は、学生アンケートにおいて「演習がセットになっているので理解しやすい」との回答が見られるなど、一定の効果を有することが確認されている。			
ミニッツペーパーを活用した理解度測定ならびに授業改善		2020年		ミニッツペーパー(manabaによる)を活用し、講義内容に対する振り返り、疑問点、授業評価(意見や要望)などを記入してもらい、学生の理解度の把握や授業改善に活用している。これらは翌週の授業で返却しているが、学科専門科目(建築コース)の40名程度の講義では、全受講生の毎回の反応に対しすべてコメントを付して、学生一人一人に目配りするように心がけている。また、特筆されるべき振り返りや疑問点については成績に反映するとともに翌週の授業において紹介または補足説明することでフィードバックしており、ミニッツペーパーを通して発展的な問答が継続されていくこともある。学生アンケートにおいて「感想に対するコメントが毎回楽しみだった」との回答が見られるなど、学生の授業参加意欲の向上に一定の効果を有することが確認されている。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
「日本建築史」の講義スライド・配布資料		2020年		日本建築の、古代から現代に至るまでの歴史に関する講義資料を更新した。特に宮城県内および東北地方の歴史的建築を多く取り上げ、建築を通して地域文化を理解することを促す内容とした。			
「建築法規」の講義スライド・配布資料		2020年		建築基準法の重要事項を解説する講義資料を更新した。特に難解な法律用語と照らし合わせて、条文が如何なる目的で、何を、どのように規制しているのかを理解することを促す内容とした。特に説明と例題を交互に並べることで、予習復習に活用しやすい資料づくりを目指した。			

「フレッシュパーソンセミナー」の講義スライド・配布資料	2020年	初年次学生に対する導入的専門科目の講義資料として更新した。作成に際しては、関連分野の最新の動向を調べて資料に反映させるとともに、図や写真、時に映像を用いて視覚的に理解できる内容とした。また、特に大学での学びが実社会にどのように関わっていくのかの理解を促す内容とすることを心がけた。
「西洋・近代建築史」の講義スライド・配布資料	2020年	西洋建築の、古代から現代に至るまでの歴史に関する講義資料を更新した。写真や図面を多用して視覚的に理解できる内容とすることを心がけるとともに、歴史的背景を含み広い視野で建築を理解できるよう工夫した。

### 3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等

#### 4. その他教育活動上特記すべき事項

青森県立木造高等学校での模擬講義の実施	2020年10月20日	青森県立木造高等学校で模擬講義を実施した。テーマ『工学であり、芸術である。～建築の魅力と可能性～』
東北生活文化大学非常勤講師	2020年	
宮城学院女子大学非常勤講師	2020年	
FD講演会への参加	2020年	FD講演会に参加し、授業技術の向上に努めた。

現在の課題・目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 講義内容が実社会でどのように使われているのか、を伝えることを意識して授業を行う。</li> <li>2) 授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。</li> <li>3) 授業全体の到達目標や個々の課題等の意図を学生に伝える。</li> <li>4) 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。</li> <li>5) 予習・復習時間が適切な分量になるように課題の再検討を行い、学生アンケート等において成果を確認する。</li> <li>6) 配属学生とのコミュニケーションによる、きめ細かな卒業研究および就職活動の指導を実施する。</li> </ol>
----------	---

今年度の進捗状況	<p>上記1)については、全ての担当講義で実社会とのつながりを伝えることを意識した。ミニッツペーパーや学生の授業アンケートには肯定的な評価が一定に見られたが、進捗状況の確認手段は限定的なものにとどまった。上記2)については、授業の冒頭で前回の復習を実施するとともに、当該講義のテーマと全体の中での位置づけを示した上で、その日の講義を行うように心がけた。また講義の最後には、ミニッツペーパーによる振り返りを実施した。疑問点などはミニッツペーパーに記入してもらい、コメントを付けて返却した。なおこれらの効果については、学生の授業アンケートやミニッツペーパーによれば、一定の興味関心や理解および気づきに繋がっているように見受けられたが、知識の定着という点では改善の余地がありそうであった。この点は、取り組みの一層の強化が求められる。</p> <p>上記3)については、初回のガイダンスで丁寧に説明することを心がけた。また、レポートの採点にはルーブリックを導入し、到達目標（要求水準）を明示することを心がけた。ただ特にレポートの内容や分量に関しては改善の余地がありそうで、特に遠隔授業で全般的な負荷が増した状況での前期課題は重かったようである。後期ではこれを改善した。より具体的な言葉での説明、丁寧な説明、学生の要望の吸い上げなどを試み、学生との認識の共有化を図る必要があろう。</p> <p>上記4)については、授業後にオフィスアワーを設け、manabaでの質問を受け付け、またはミニッツペーパーにコメントを付けて返却することで、双方向のコミュニケーションを意識した。</p> <p>上記5)については、前期の授業アンケートでの要望を踏まえて後期に活かし、後期の授業アンケートで一定の改善成果を確認した。ただし、全体的にはまだ十分とは言えず、特に予習については重点的な改善が必要であろう。</p> <p>上記6)については、研究室所属学生の研究・就職活動状況を常に把握し、指導に活かすことを心がけた。</p>
----------	---

来年度の進捗目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 講義内容が実社会でどのように使われているのか、を伝えることを意識して授業を行う。(継続)</li> <li>2) 授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。(継続)</li> <li>3) 授業全体の到達目標や個々の課題等の意図を学生に伝える。(継続)</li> <li>4) 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。(継続)</li> <li>5) 予習・復習時間が適切な分量になるように課題の再検討を行い、学生アンケート等において成果を確認する。(継続)</li> <li>6) 配属学生とのコミュニケーションによる、きめ細かな卒業研究および就職活動の指導を実施する。(継続)</li> </ol>
----------	---

## II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
-----------	---------	-------------------	--------------------------	--------	------

### A. 学術書

『ラーハウザー記念東北学院礼拝堂建造物調査報告書』	編者 (編著者)	2021年3月	学校法人東北学院(発行)	崎山俊雄(編著)	pp.1-160
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>					
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>					
旧西山農場日輪講堂の建築について	共著	2020年6月	日本建築学会, 日本建築学会東北支部研究報告集, 計画系(83)	木村 達海, 崎山 俊雄	pp.143-146
東北学院大学の正門について ~その1 設計から現在までの履歴~	単著	2020年6月	日本建築学会, 日本建築学会東北支部研究報告集, 計画系(83)	崎山 俊雄	pp.137-140
植田登の経歴と?翠館・仙台区役所の建築概要	共著	2020年6月	日本建築学会, 日本建築学会東北支部研究報告集, 計画系(83)	黒瀬 香菜, 崎山 俊雄	pp.141-142
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>					
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>					
『旧青笹村役場庁舎の建築について』	単著	2021年2月	遠野市文化課, 遠野市文化課	不明	pp.0
『宮城県庁における最初の建築技師』	単著	2020年10月	宮城県建築士会仙台支部広報誌「アーチ」(第31号), 宮城県建築士会仙台支部広報誌「アーチ」(第31号)	不明	pp.0
『建築との対話: 礼拝堂建築調査の現場から(7)~(11)』	単著	2020年	『水曜通信』(東北学院宗教センター通信)連載コラム, 『水曜通信』(東北学院宗教センター通信)連載コラム	不明	pp.0
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>					
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>					
<b>G. 学会における研究発表</b>					
東北学院大学の正門について~その2 建築家 Jay H.モーガンの作品経歴の観点から~	単独	2020年9月	日本建築学会大会(-)	崎山俊雄	pp.245-246
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	1) 審査付きの学術論文誌への継続的な投稿(筆頭著者で年1編以上) 2) 審査無しの学術論文誌および学会口頭発表への継続的な投稿(筆頭著者で年2編以上) 3) 内外の競争的資金の継続的な獲得(年1件以上) 4) 研究成果および関連分野での積極的な社会・学内貢献(随時)				
今年度の進捗状況	上記1)については、学術報告書(建築調査報告書)1編を成したが、これを含む学内外の建築調査等の活動が多かったため、筆頭著者として実現することができなかった。 上記2)については、目標を達成した。 上記3)については、科研費・基盤(C)での新規採択課題が1件、私立大学研究ブランディング事業の分担が1件あった。 上記4)については、市民が多く参加する地域史の研究会に参加し交流を継続しているほか、前掲ブランディング事業「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業」に関連して、東北学院礼拝堂を主とする土樋キャンパスの建築史的調査の報告書を刊行した。				
来年度の進捗目標	1) 審査付きの学術論文誌への継続的な投稿(筆頭著者で年1編以上)(継続) 2) 審査無しの学術論文誌および学会口頭発表への継続的な投稿(筆頭著者で年2編以上)(継続) 3) 内外の競争的資金の継続的な獲得(年1件以上)(継続) 4) 研究成果および関連分野での積極的な社会・学内貢献(随時)(継続)				
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要	
科学研究費補助金 基盤C	2019年度~	個別(研究代表者)			
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>					
2020年7月~2021年12月			「旧青笹村役場庁舎」建築調査 学術調査立案・実施		
2018年4月~			日本建築家協会		

2011年4月～	日本都市計画学会 会員		
2011年4月～	建築史学会 会員		
2000年8月～	日本建築学会 会員		
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
1) 工学部図書館委員会 委員 2) 工学部時間割委員会 委員 3) 工学基礎教育センター 所長 4) 東北学院史資料センター 調査研究員 5) 工学部環境建設工学科2年生グループ主任			



2020年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	准教授	氏名	千田 知弘	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
オフィスアワーを拡大し、学生が任意時間に質問をしに来れるようにした。また、学生室の一部を開放し、当該科目に限って自習できるようにしている。		2020年		オフィスアワーは教員が自分の予定等を鑑み指定するものであり、学生が行ける時間に設定されているとは限らない。また、質問をしたい学生が大勢いる場合、オフィスアワー内に終わらないことがある。そこでオフィスアワーに限らず、学生の質問に応じることにした。また、聞いたことをすぐに確認できるように、学生室の一部を開放し、すぐに復習できるようにした。今年度は、コロナ禍ということもあり、毎週土曜日に5時間ほどzoomをつなげ、学生の質問対応を行った。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
本学学生のレベルに最適化したテキスト(教科書)を作成した。		2020年		学生に専門科目を習熟させるためには、壁にぶつかった際は迷いながらも自己で繰り返し演習し解決させていくことが望ましいが、本学の学生の場合、壁にぶつかった時点であきらめるクセがあるように見受けられた。その壁が、例えば、東北大生でもぶつかったり、壁を乗り越えること自体が社会に出た時に役立つような場合は本学学生でも乗り越えさせるように訓練させたほうが良いが、それ以外の場合、教員側が学生がぶつかりそうな壁を予想し、乗り越えやすいようにする必要がある。そこで多くの図解入りの分かりやすいテキストを作成した。今年度はコロナ禍ということもあり、測量実習の実習書を作成し、学生に配布した。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>①講義内容が実社会でどのように使われているのか、を伝えることを意識して授業を行う。</li> <li>②授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。</li> <li>③授業全体の到達目標や個々の課題等の意図を学生に伝える。</li> <li>④授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>①に関し、講義内で実構造の設計例や施工時に注意すべき点を挙げ、勉強している内容が、どのような時に、どのように用いられるのかを、講義内で逐次説明した。例えば、力のつり合いを教える際、数年前に起きた施工中の橋梁の崩落事故の話題提供を行い、一番の初歩的な力のつり合い計算を間違えたため、事故につながった説明を行った。また、2年生のインターンシップの斡旋を行い、自分たちの学んでいる内容が、如何に実学であり、将来に役に立つかの経験を積めるようにした。本年度は27名の2年生がインターンシップに参加した。学生からは、千田先生がいつも講義中に、人の命を守る学問だと言っている理由が分かった、実際使われる技術と分かってやる気が出てきた、などの声があった。</li> <li>②に関しては、オフィスアワーの時間を固定化せず、学生が学びたい時間に教員室に来てよいというルールとした。また、中間テスト後に、一人づつ教員室に呼び、間違えたところの説明を行った。</li> <li>③①の内容と連動させ、単に単位取得を目標とするのではなく、なぜ到達目標に達する必要があるかなどの説明を可能な限り行うようにした。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		本年度の実施状況を鑑み、適宜最適化を図りながら、上記①～③を継続的に行っていく。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
地震時の地盤変動によって生じるワーレントラス橋の損傷に関する数値解析的検討	単著	2020年	令和2年度東北学院大学工学部研究報告, Vol.55, 令和2年度東北学院大学工学部研究報告, Vol.55	松井友希, 星宮魁人, 千田知弘, 馬越一也	pp.11		
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							

地盤変動によって損傷を受けたワーレントラス橋を対象とした地震応答解析に関する基礎的研究	単著	2021年1月	第23回橋梁等の耐震設計シンポジウム講演論文集, 第23回橋梁等の耐震設計シンポジウム講演論文集	松井友希, 千田知弘, 馬越一也, 星宮魁人, 崔準祐	pp.8
地震時のアバットの滑動によって生じるワーレントラス橋の損傷に関する静的研究	単著	2021年1月	第23回橋梁等の耐震設計シンポジウム講演論文集, 第23回橋梁等の耐震設計シンポジウム講演論文集	星宮魁人, 千田知弘, 馬越一也, 松井友希, 崔準祐	pp.8
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>					
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>					
木質構造物のFEM解析(第2回)～FEM解析による木質構造物の性能評価～『木質構造物のFEM解析(第2回)～FEM解析による木質構造物の性能評価～』	単著	2020年	Mechanical CAE NEWS Vol.33, Mechanical CAE NEWS Vol.33, Mechanical CAE NEWS Vol.33	不明	pp.5
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>					
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>					
<b>G. 学会における研究発表</b>					
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	耐震系の論文を2本以上投稿する。				
今年度の進捗状況	目標を達成している。				
来年度の進捗目標	地滑り系の研究と、MPSを用いた解析研究の論文を投稿していく予定。また、危機耐性を考慮した橋梁設計に関する論文も順次投稿予定。				
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>					
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>					

2020年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	准教授	氏名	恒松 良純	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<p>①授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切に、学生からのさまざまな相談に応じる。</p> <p>②建築計画関連科目について実例を踏まえた講義を実施する。</p> <p>③建築設計関連科目について個々の提案に対応する</p> <p>&lt;学科の教育目標&gt;</p> <p>④講義内容が実社会でどのように使われているのか、を伝えることを意識して授業を行う。</p> <p>⑤授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。</p> <p>⑥授業全体の到達目標や個々の課題等の意図を学生に伝える。</p>					
今年度の進捗状況		<p>上記目標①については、本年度着任により進捗に関して未確認である。</p> <p>上記目標②については、個別のアンケートにより複数名より「わかりやすかった」として指摘されており、一定の成果が見られた。</p> <p>上記目標③については、個々の提案に対応しアドバイスできた。</p> <p>上記目標④については、②に関連して実施出来た。</p> <p>上記目標⑤⑥については、小テスト・レポートなどの実施により確認できた。</p>					
来年度の進捗目標		<p>上記目標①については、重要な要件であると認識しており、継続的に応じていく。進捗については今後の活動により確認する。</p> <p>上記目標②については、実例についての資料収集を行う。それにより講義の充実を図る。</p> <p>上記目標③については、重要な要件であると認識しており、継続的に応じていく。進捗については今後の活動により確認する。</p> <p>上記目標④については、②と併せて充実させる。</p> <p>上記目標⑤⑥については、継続的に実施する。</p>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
図書館の閉架書庫における経路選択行動に関する実験的研究 その2 ヒアリング調査に基づく避難時の経路選択とその影響要因に関する考察	共著	2020年9月	日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)、日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)	◎門倉博之・大江真帆・恒松良純	pp.1111-1112		
図書館の閉架書庫における経路選択行動に関する実験的研究 その1 避難時の経路選択行動とその影響要因	共著	2020年9月	日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)、日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)	◎門倉博之・大江真帆・恒松良純	pp.1109-1110		
秋田市の景観への取り組みと補助制度の評価についての考察 秋田の景観に関する研究(その8)	共著	2020年9月	日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)、日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)	◎佐藤涼風・鎌田光明・恒松良純	pp.927-928		
17道府県の公共図書館の災害対策についての傾向と考察 図書館建築における災害時を想定した対応に関する基礎的研究 その3	共著	2020年9月	日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)、日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)	◎佐藤晴基・恒松良純	pp.577-578		
大学図書館の閉架書庫内の経路探索についての考察	共著	2020年6月	日本建築学会東北支部研究報告集計画系第83号、日本建築学会東北支部研究報告集計画系第83号	◎大江真帆・佐藤晴基・恒松良純	pp.105-106		

秋田市景観重要建造物のイメージに関する研究	共著	2020年6月	日本建築学会東北支部研究報告集計画系第83号, 日本建築学会東北支部研究報告集計画系第83号	◎佐藤涼風・恒松良純	pp.113-114
宮城県内の東日本大震災における図書館の被害に関するヒアリング調査	共著	2020年6月	日本建築学会東北支部研究報告集計画系第83号, 日本建築学会東北支部研究報告集計画系第83号	佐藤晴基・大江真帆・恒松良純	pp.101-104
宮城県内の東日本大震災における図書館の被害に関するヒアリング調査	単著	2020年6月	日本建築学会東北支部研究報告集計画系第83号, 日本建築学会東北支部研究報告集計画系第83号	◎佐藤晴基・大江真帆・恒松良純	pp.101-104

### C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文

#### D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)

空間五感 世界の建築・都市デザイン『空間五感 世界の建築・都市デザイン』	共著	2021年3月	井上書院, 井上書院, 井上書院	日本建築学会(編)編集担当	pp.0
日本の図書館建築 建築からプロジェクトへ『日本の図書館建築 建築からプロジェクトへ』	共著	2021年3月	勉性出版, 勉性出版, 勉性出版	五十嵐太郎・李明喜(編)	pp.0

#### E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)

SDL:Re-2020 official Book『SDL:Re-2020 official Book』	共著	2020年9月	建築資料研究所/日建学院, 建築資料研究所/日建学院, 建築資料研究所/日建学院	仙台建築都市学生会議+仙台建築都市学生会議アドバイザリーボード 編	pp.133-141
--	----	---------	--	-----------------------------------	------------

#### F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)

#### G. 学会における研究発表

#### H. 翻訳(学術書や原典等)

#### I. 特許

現在の課題・目標	①景観計画における補助制度の実情に関する研究 ②景観まちづくりに関する色彩基準に関する研究 ③図書館建築における空間構成と計画に関する研究 ④土樋キャンパス周辺の街路景観に関する研究 ⑤図書館建築における避難に関する研究
今年度の進捗状況	上記目標①については、既に実施した全国の自治体のアンケート結果の集計と分析を行いまとめることができた。 上記目標②については、特に秋田市の景観計画を対象に制定後のあり方について検討できた。 上記目標③については、基本的な資料の収集ができたことから、進捗があったといえる。 上記目標④については、CGによるモデル化とアニメーションを用いたシミュレーションを実施できた。 上記目標⑤については、研究助成により現地調査を実施し、歩行実験も進捗があった。
来年度の進捗目標	上記目標①については、資料を精査した上で論文としてまとめる。 上記目標②については、大会や研究会などで発表した後、論文としてまとめる。 上記目標③については、計画上の問題点を明らかにした上で全国の図書館へのアンケート調査を実施する。 上記目標④については、モデルの精度を向上させシミュレーションを再考する。 上記目標⑤については、条件変更により歩行実験を再考する。

### III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
----------	----------	------------------------	----

#### IV 学会等及び社会における主な活動

2018年12月～2020年9月	仙台市 仙台市役所本庁舎建替基本計画策定委員会
2018年6月～	多賀城市 都市計画審議会
2016年9月～	日本建築学会 建築計画委員会 計画基礎運営委員会 空間研究小委員会 調査分析WG主査 会員
2014年4月～	日本建築学会 建築計画委員会 計画基礎運営委員会
2014年4月～	日本建築学会 建築計画委員会 計画基礎運営委員会 空間研究小委員会 委員(2012年4月～幹事) 会員

2008年9月～	国土交通省東北地方整備局 東北地方道路研究会		
2002年4月～	日本建築学会 建築計画委員会 空間研究小委員会		
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
次世代の都市交通空間-新モビリティシステムに対応する空間デザイン-	zoom遠隔開催	2020年12月～2020年12月	
「建築計画委員会「秋の建築計画祭り」P会場:建築計画部門【研協】「これからの「建築・都市計画のための調査・分析方法」— AI・IoT・ビッグデータでなにが変わるのか—」	zoom遠隔開催	2020年9月～2020年9月	
<b>現在の課題・目標</b>			
<b>今年度の進捗状況</b>			
<b>来年度の進捗目標</b>			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	准教授	氏名	三戸部 佑太	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
応用水理学特論における津波数値計算演習		2020年		大学院生向けの「応用水理学特論」において演習として実際に津波数値計算に取り組みました。修士研究においてプログラミングを使っていない学生に対して、基礎的なプログラミングの演習から始め、1次元の津波数値計算までを順を追って実行させた。また、これに基づいてレポート作成をさせることで、津波数値計算の原理・方法に対する理解を深めるとともに、津波の性質についてもより深く学ぶことができるように工夫した。			
学生の工夫を取り入れた体験型演習の実施		2020年		「研究・発表の技法」において、自作している津波シミュレーションのアプリを利用した演習を行った。タッチ操作で簡単に堤防設置およびそれを反映させたシミュレーションを実行可能なアプリであり、授業内で簡単に解説をしながら実施した。複数段階に分けて目標を設定し、数名ごとのグループで相談しながら最適な堤防配置を検討させ、津波に対する防災・減災対策を体験させるようにした。繰り返し試行していく中で、巨大津波に対する堤防の効果や多重防御の重要性を学べるように工夫した。			
図およびアニメーションや実験動画などの積極的な使用		2020年		遠隔授業であったため、パワーポイントのスライドを用いた説明がほとんどであったが、その中で、図やアニメーション機能を用いることで、現象やそのとらえ方をイメージしやすい資料を作成することを意識した。また、例年同様に実験の動画や数値シミュレーション結果のアニメーションなどを見せることで、対象としている現象について直感的にとらえやすいように工夫した。			
毎回の授業での課題演習の実施		2020年		水理学Ⅰ・Ⅱおよび応用水理学において、毎回の授業の後半に小課題を実施することで、授業内容を頭の中で整理するとともに、重要な方程式等の具体的な使用方法についての意識を持たせる機会を設けるようにしている。問題は比較的簡単なものとし、多くの学生が解答可能な難易度とした。今年度は遠隔授業として実施したため、manabaの自動採点小テストを利用し、当日22時には採点結果が公表されるようにした。また次の授業の冒頭で、前回授業の復習とかねて解説を加えるようにした。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
<b>現在の課題・目標</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>①講義内容が実社会でどのように使われているのか、を伝えることを意識して授業を行う。</li> <li>②授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。</li> <li>③授業全体の到達目標や個々の課題等の意図を学生に伝える。</li> <li>④授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。</li> </ul>					
<b>今年度の進捗状況</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>①: そもそも講義の対象とする現象がどのような場面を考える上で重要かを概論として初回授業時に説明した。また、各項目についてその実社会との関連がわかりにくい点については、例を出して説明し、授業資料の中に写真等を多く加えることを心掛けた。また、レポート課題の内容を自然災害への対策や実際の水害の被災事例に関連させることで、実社会との関連を意識させるように工夫した。</li> <li>②: 授業ごとの小課題の実施により、その回の授業内容を振り返る機会を設けた。また、次回授業の冒頭に要点を復習してから新しい内容の説明を行うようにすることで、繰り返しによる知識の定着や重要なポイントの認識を図るようにした。また、ほぼ毎回の授業で前回の小課題の解説を行い、フィードバックを行った。</li> <li>③: 初回授業時に全体の目標について説明した。毎回の授業時の小課題を解かせる際には、その課題を通して理解・習得すべきポイントを明示するようにした。また、レポート課題を出す際にもなぜこんな課題を出しているのか、それが実社会の問題を考えるのになぜ重要なのかを説明した。</li> <li>④: オンタイム授業の中で、前半は講義、後半は小課題&amp;質問時間という構成とし、Zoom上でリアルタイムに質問ができる環境を作った。また、manabaやメールの質問も受け付けることを明示し、遅滞なく反応することができた。</li> </ul>					

<p>来年度の進捗目標</p>	<p>①:より実社会における活用がイメージしやすいように写真や動画を見せることを積極的に取り入れていきたい。また、実際の災害の事例等を画像を示しながら説明する機会を設けることも検討する。          ②:この目標についてはおおむね達成できているものと考えているが、重要点として強調するポイントや小課題の内容について再度検討しながら改善していく。          ③:一部の課題では時間の都合上、説明が簡略になることがあったので、丁寧に意図を説明するように心がける。また、レポート等に対するフィードバックも充実させ、学生の学習意欲の向上も意識したい。          ④:Zoom上で質問を受け付けたことは学生から好評であったようなので、引き続き継続していく。ただし、一部の学生は解けていないにもかかわらず質問をして来ないため、より多くの学生が質問しやすい環境を作れるように心がける。</p>				
<p>II 研究活動</p>					
<p>著書・論文等の名称</p>	<p>単著・共著の別</p>	<p>発行又は発表の年月 (西暦)</p>	<p>発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称</p>	<p>編者・著者名</p>	<p>該当頁数</p>
<p>A. 学術書</p>					
<p>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</p>					
<p>津波数値計算および画像解析を用いた津波防災教育ツールの開発</p>	<p>単著</p>	<p>2020年11月</p>	<p>土木学会論文集B2(海岸工学), 第76巻, 2号, 土木学会論文集B2(海岸工学), 第76巻, 2号</p>	<p>◎三戸部 佑太, 佐瀬一弥, 木村 達也, 阿部政哉</p>	<p>pp.L1237-L1242</p>
<p>航空写真解析による津波瓦礫判別の広域適用に向けた検討</p>	<p>単著</p>	<p>2020年11月</p>	<p>土木学会論文集B2(海岸工学), 第76巻, 2号, 土木学会論文集B2(海岸工学), 第76巻, 2号</p>	<p>◎三戸部 佑太, 今井健太郎, 橋本 隆司, 増田 達男</p>	<p>pp.L1315-L1320</p>
<p>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</p>					
<p>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</p>					
<p>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</p>					
<p>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</p>					
<p>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</p>					
<p>G. 学会における研究発表</p>					
<p>津波数値計算および画像解析を用いた津波防災教育ツールの開発</p>	<p>共同</p>	<p>2020年11月</p>	<p>第67回海岸工学講演会(不明)</p>	<p>◎三戸部 佑太, 佐瀬一弥, 木村 達也, 阿部政哉</p>	<p>pp.L1237-L1242</p>
<p>航空写真解析による津波瓦礫判別の広域適用に向けた検討</p>	<p>共同</p>	<p>2020年11月</p>	<p>第67回海岸工学講演会(不明)</p>	<p>◎三戸部 佑太, 今井健太郎, 橋本 隆司, 増田 達男</p>	<p>pp.L1315-L1320</p>
<p>STEREO IMAGE ANALYSIS OF AERIAL IMAGES FROM TWO UAVS FOR WAVE MONITORING IN SURF ZONE</p>	<p>単独</p>	<p>2020年10月</p>	<p>virtual International Conference on Coastal Engineering(不明)</p>	<p>◎Yuta MITOBE</p>	
<p>H. 翻訳(学術書や原典等)</p>					
<p>I. 特許</p>					
<p>現在の課題・目標</p>	<p>①開発する基礎技術の高度化を進め、現地でのモニタリングや実験における計測に応用することで、種々の現象解明に寄与する          ②防災教育のためのツール開発を行い、また実際に防災教育へ用いていく          ③個々の研究の質を高め学術誌への投稿を行う</p>				
<p>今年度の進捗状況</p>	<p>①:UAVを用いた海浜モニタリング手法について卒業研究等を通して改良を行っている。今年度は実用に向けて計測法の改良および計測範囲の拡大を実施した。今後これらの成果をまとめて論文等での発表につなげていく予定である。          ②:防災教育用のツールとして津波シミュレーションを取り入れたアプリ開発を行った。基礎的なツールとしての開発はできたので、今後実用できるように更なる改良や実践の場の調査や実際の使用を進めていきたい。          ③:昨年度卒業研究で学生と行ったテーマについて査読有の論文誌に掲載された。また、その他共同研究で実施した内容についても共著の査読付き論文が発表された。一方で英文の論文投稿がないので、その点が課題である。</p>				
<p>来年度の進捗目標</p>	<p>引き続き、従来技術では測れない物理量やその分布を計測可能な技術の開発を進め、これを用いて具体的な現象の解明に努める。また、防災教育用のツールの開発および実践はさらに進めていく。さらに、英文での投稿を含め、学術誌への投稿等は引き続き進めていく。</p>				
<p>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</p>					

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 科研費(基盤B)	2018年度～2020年度	共同(研究分担者)	南海トラフの巨大地震津波による瓦礫火災の市街地延焼リスクと管理手法の構築
科学研究費補助金 科研費(基盤B)	2016年度～2020年度	共同(研究分担者)	陸域水循環モデルを用いた全球内陸湖の環境影響評価
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2017年10月～		土木学会 減災・防災委員会 緊急対応マネジメント小委員会 委員 会員	
2017年4月～		土木学会東北支部幹事 会員	
2014年～		国際水理学会(IAHR) 会員 会員	
2013年～		自然災害学会 会員 会員	
2008年～		土木学会 会員 会員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
1. 工学部環境建設工学科教育改善委員会(FD小委員長)			



2020年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	教授	氏名	淡野 照義	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
遠隔講義対応		2020年		講義・演習科目については、教材を作成し、授業を運用した。実験実習科目については、ハイフレックス対応を試みた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		情報基盤工学科の学生のための、情報物理学教材を開発する。					
今年度の進捗状況		遠隔対応を行う事により、教材をある程度電子化できた。					
来年度の進捗目標		卒業研究については、データサイエンス的テーマを拡充する。 物理学Iについては、レポート中のシミュレーション課題への取り組みを最適化する。 データサイエンス演習については、新しい分析課題を追加する。 自然科学実験ファンダメンタルズについては、貸与ノートPCを利用した分光実験のICT化を進める。 物理学IIIについては情報物理学分野の教材を充実させる。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
Effect of Electron-Irradiation on Acceptor State of Germanium		共著	2020年	UVSOR Activity Report 2019		◎A. Hara and T. Awano	pp.1頁
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
データサイエンス系学生の電子系実習の実態調査と教材作製に関する検討		共同	2020年8月	2020年度電気関係学会東北支部連合大会(不明)		◎鈴木順, 森島佑, 淡野照義, 志子田有光	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		コヒーレントイオン伝導の研究を進める。					
今年度の進捗状況		イオン液体のミリ波・テラヘルツ吸収帯の分光データ解析					
来年度の進捗目標		コヒーレントイオン伝導とイオン液体の計算機シミュレーション マテリアルズインフォマティクス					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2020年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	教授	氏名	石上 忍	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
応用電子工学特論(教材):20枚程度の授業スライドを毎回用意しManabaを利用して配布 通信工学基礎III(教材):授業動画を毎回用意しManabaを利用して配布 情報通信法規(教材):20枚程度の授業スライドを毎回用意しManabaを利用して配布		2020年4月1日~2021年1月31日		2年情報基盤後期の授業「通信工学基礎III」の動画を教材として毎回作成し配布した。また大学院修士課程の前期授業「応用電子工学特論」及び4年情報基盤前期の授業「情報通信法規」のスライドを教材として毎回作成し配布した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		1.1年生の科目「情報リテラシー」をよりわかりやすく、達成度の高い授業を行う。 2.「通信工学基礎III」「応用電子工学特論」の内容をブラッシュアップし、教科書化を目指す。					
今年度の進捗状況		上記1.については現在遂行中。2については現在準備中。					
来年度の進捗目標		今年度評価結果が示される「授業評価アンケート」の結果をふまえ、悪かった点を改善する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数	
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
近接放射イミュニティ試験用TEMホーンアンテナのインパルス波励振によるアンテナ開口面の過渡磁界分布	共著	2020年12月	電気学会論文誌A(基礎・材料・共通部門誌) Vol.140 No.12, 電気学会論文誌A(基礎・材料・共通部門誌) Vol.140 No.12		◎川上源, 川又憲, 石上忍, 石田武志, 張間勝茂, 後藤薫	pp.601-602	
球電極間の衝突ESDにおけるペアチップの光電界センサーを用いた静電界の過渡応答	共著	2020年12月	電気学会論文誌A(基礎・材料・共通部門誌) Vol.140 No.12, 電気学会論文誌A(基礎・材料・共通部門誌) Vol.140 No.12		◎加藤健人, 石上忍, 川又憲, 大沢隆二, 石田武志, 藤原修	pp.599-600	
大型電気機器からの電磁雑音測定方法の検討	共著	2020年12月	電気学会論文誌A(基礎・材料・共通部門誌) Vol.140 No.12, 電気学会論文誌A(基礎・材料・共通部門誌) Vol.140 No.12		◎五日市達, 猪狩好司, 石上忍, 川又憲	pp.573-579	
球電極対のESDに伴う過渡磁界ピーク値の距離特性	共著	2020年12月	電気学会論文誌A(基礎・材料・共通部門誌) Vol.140 No.12, 電気学会論文誌A(基礎・材料・共通部門誌) Vol.140 No.12		◎加藤健人, 川又憲, 石上忍, 藤原修	pp.597-598	
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
Study on Measurement Method of Electromagnetic Interference from Large-scale Electric Equipment/System	共著	2020年12月	2020 IEEE Asia-Pacific Microwave Conference (APMC), 2020 IEEE Asia-Pacific Microwave Conference (APMC)		◎Tatsuru Itsukaichi, Koji Igari, Shinobu Ishigami, Ken Kawamata and Yasutoshi Yoshioka	pp.855-857	

Development of a New Broadband Antenna for EMI Measurement Usable in Microwave Band	共著	2020年9月	2020 International Symposium on Electromagnetic Compatibility - EMC EUROPE, APEMC Invited Session, 2020 International Symposium on Electromagnetic Compatibility - EMC EUROPE, APEMC Invited Session	©Kyo Kobayashi, Toshiya Ishizaki, Shinobu Ishigami, Ken Kawamata, Katsushige Harima	pp.1
Development of folded long-hexagon antenna	共著	2020年8月	2020 IEEE Electromagnetic Compatibility and Signal & Power Integrity Virtual Symposium, W3_TH_PM_C, 2020 IEEE Electromagnetic Compatibility and Signal & Power Integrity Virtual Symposium, W3_TH_PM_C	©Kyo Kobayashi, Takuya Ishizaki, Shinobu Ishigami, Ken Kawamata, Katsushige Harima	pp.1

#### D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)

『これからのEMC (IEEE EMC-S Sendai Chapter)』	単著	2021年1月	電磁環境工学情報 月刊EMC, No.393 (Vol.33, No.9), 2021年1月号, 電磁環境工学情報 月刊EMC, No.393 (Vol.33, No.9), 2021年1月号	石上 忍	pp.63
『これからのEMC (電気学会電磁環境技術委員会)』	単著	2021年1月	電磁環境工学情報 月刊EMC, No.393 (Vol.33, No.9), 2021年1月号, 電磁環境工学情報 月刊EMC, No.393 (Vol.33, No.9), 2021年1月号	石上 忍	pp.56
これからのEMC (ACEC)『これからのEMC (ACEC)』	単著	2021年1月	電磁環境工学情報 月刊EMC, No.393 (Vol.33, No.9), 2021年1月号, 電磁環境工学情報 月刊EMC, No.393 (Vol.33, No.9), 2021年1月号	石上 忍	pp.30

#### E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)

#### F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)

#### G. 学会における研究発表

高圧大容量電気機器の放射磁界測定ためサイト評価検証	共同	2021年1月	電気学会スマートファシリティ研究会 SMF-21-009(不明)	◎石上忍, 川又憲, 吉岡康哉	
球電極対のマイクロギャップ ESD に伴って発生する近傍過渡電磁界の一特性	共同	2020年12月	電気学会電磁環境研究会 EMC20-071(Web), EMC20-071, SPC20-198	加藤健人, 川又憲, 石上忍, 藤原修	
球電極対のマイクロギャップESDに伴って発生する近傍過渡電磁界の一特性	共同	2020年12月	電気学会電磁環境研究会 EMC-20-071(不明)	◎加藤健人, 石上忍, 川又 憲, 藤原 修	
IEC TC77における第5世代移動通信システムの審議動向	単独	2020年11月	電気学会電磁環境研究会 EMC-20-056(不明)	単著	
大型電気機器・システムからの電磁雑音測定方法に関する研究	共同	2020年10月	電気学会電磁環境研究会 EMC20-047(web), EMC20-047	五日市達, 猪狩好司, 石上 忍, 川又 憲, 吉岡康哉	
球電極ESDに伴う近傍過渡電磁界の距離特性に関する一考察	共同	2020年10月	電気学会電磁環境研究会 EMC-20-048(web), EMC20-048	加藤健人, 川又憲, 石上忍, 藤原修	
独立成分分析を用いた電磁雑音波形抽出の基礎検討	共同	2020年10月	電子情報通信学会技術研究報告EMCJ2020-28(web), 120, 199	高橋直央, 石上 忍, 川又 憲	pp.20-24
広帯域長六角形折返しアンテナの試作と特性測定(1)	共同	2020年10月	電子情報通信学会技術研究報告(Web)(web), 120, 199	石崎利弥, 小林亨, 石上忍, 川又憲, 張間勝茂, 梶真悟	pp.31-35

広帯域長六角形折返しアンテナの試作と特性測定(1)	不明	2020年10月	電子情報通信学会技術研究報告 EMCJ2020-29(Web), 120, 199	小林 亨, 石崎利弥, 石上 忍, 川又 憲, 張間勝茂, 袴 真悟	pp.25-30
球電極ESDに伴う近傍過渡磁界の距離特性に関する一考察	共同	2020年10月	電気学会電磁環境研究会 EMC-20-048(不明)	◎加藤健人, 石上 忍, 川又 憲, 藤原 修	
大型電気機器・システムからの磁雑音測定方法に関する研究	共同	2020年10月	電気学会電磁環境研究会 EMC-20-047(不明)	◎五日市達, 猪狩好司, 石上 忍, 川又 憲, 吉岡康哉	
広帯域長六角形折返しアンテナの試作と特性測定(2)	共同	2020年10月	電子情報通信学会 環境電磁工学研究会 (EMCJ), EMCJ2020-30(不明)	◎石崎利弥, 小林亨, 石上忍, 川又憲, 張間勝茂, 袴真悟	pp.31-35
広帯域長六角形折返しアンテナの試作と特性測定(1)	共同	2020年10月	電子情報通信学会 環境電磁工学研究会 (EMCJ), EMCJ2020-29(不明)	◎小林亨, 石崎利弥, 石上忍, 川又憲, 張間勝茂, 袴真悟	pp.25-30
独立成分分析を用いた電磁雑音波形抽出の基礎検討	共同	2020年10月	電子情報通信学会 環境電磁工学研究会 (EMCJ), EMCJ2020-28(不明)	◎高橋直央, 石上 忍, 川又憲	pp.20-24

#### H. 翻訳(学術書や原典等)

#### I. 特許

現在の課題・目標	①情報通信研究機構(NICT), 富士電機, エレナ電子, 及び(一社)日本電機工業会との共同研究を推進する。 ②研究室の体制を一部改正する。(大学院進学学生への対応)
今年度の進捗状況	上記目標①については, 研究報告等を数件行ったことより, ほぼ達成した。 上記目標②については, 卒業研究をほぼ滞りなく進めていることにより, 達成予定である。
来年度の進捗目標	上記目標①については, 引き続き推進する。 上記目標②については, 優れた研究結果に対しジャーナル論文化を進める。 情報基盤工学科 完成年度に向けた講義内容の確立: 来年度が完成年度となるので, 1年生から4年生までの講義内容をブラッシュアップするとともに, 内容の確立を行う。

#### III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
----------	----------	------------------------	----

#### IV 学会等及び社会における主な活動

2020年4月～	情報通信審議会 情報通信技術分科会 CISPR/A作業班 主任
2020年1月～2021年3月	IEEE EMC Society Sendai Chapter Chair 企画立案・運営等
2019年4月～	電気学会電磁環境技術委員会
2019年4月～	情報通信審議会 情報通信技術分科会 電波利用環境委員会 委員
2019年4月～2021年3月	電気学会 放電・静電気に起因する電子機器の故障・誤動作防止調査専門委員会
2017年11月～	電気学会電磁環境部会
2017年11月～	IEC SC77B国内委員会 委員長
2017年8月～	電子デバイスに対するESD過渡電磁界の影響評価調査専門委員会 委員
2017年1月～	IEEE EMC Society Sendai Chapter Treasurer 委員
2016年4月～	国立研究開発法人情報通信研究機構 協力研究員(2018年4月より 特別研究員) 非常勤職員
2015年9月～	IEC ACEC国際委員 委員
2015年9月～	IEC ACEC国内分科会 分科会長
2015年1月～	電気学会
2015年1月～	静電気学会
2014年10月～	電気学会 スマートグリッド・コミュニティのEMC問題調査専門委員会

2014年9月～	電気学会 スマートグリッドのスマートファシリティ内におけるEMC環境特別調査専門委員会		
2014年4月～	電気学会 過渡電磁界の電子機器及び通信に対する障害調査専門委員会		
2013年5月～	電子情報通信学会		
2013年4月～	電子情報通信学会		
2011年8月～	CISPR/A エキスパート 委員		
2010年6月～	電子情報通信学会環境電磁工学研究専門委員会		
2006年3月～	IEC TC77 WG13 (作業部会) エキスパート 委員		
2006年3月～	電磁環境両立性標準化委員会 (IEC TC77国内委員会) 幹事		
2003年1月～	電気学会		
1992年1月～	IEEE (米国電気電子学会)		
1991年4月～	電子情報通信学会		
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
1. 工学基礎教育センター副所長 2. 工学部図書委員			

2020年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	教授	氏名	加藤 和夫	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①実験・演習を含む担当講義における受講生の理解度の向上を目的とした講義内容の改善を行う。 ②出前講義等, 本学学生以外を対象とした学内外での講義を魅力あるものとするための簡易実験の開発・改良を行う。 ③大学院生を含むゼミ学生に対し, 実社会における工学技術の重要性を理解させることを目指した教育を行う。					
今年度の進捗状況		①講義時間外に復習・予習課題を課し, 講義内容の理解の定着を促すなど, 進捗が見られた。また今年度は複数の科目で遠隔講義用のオンデマンド教材の開発を行った。 ②例年近隣の中学生向けに実施していた工学に関わる啓発活動が, コロナ禍の影響で中止になり, 今年度は進捗は見られなかった。 ③大学院生に企業との共同研究に参画してもらい, 実社会における工学技術の重要性を理解させることができたので進捗が見られた。					
来年度の進捗目標		①受講生の更なる理解度向上に貢献できるよう講義内容の改善を継続して行う。 ②簡易実験装置を使った出前講義での問題点や装置開発の改良点を検討し, 更なる改善改良を行う。 ③企業の研究員とのディスカッションや研究発表を通して実社会との交流を深める教育を行う。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
Rejecting Artifacts Based on Identification of Optimal Independent Components in an Electroencephalogram during Cognitive Tasks	共著	2021年1月	17th International Conference on Biomedical Engineering, Selected Contributions to ICBME-2019, IFMBE Proceedings, (eds) Chwee Teck Lim et al., 79	K. Kato, K. Suzuki, T. Suzuki and H. Kadokura	pp.73-80		
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
事象関連電位に基づく画像背景の空間周波数が大脳神経活動へ与える影響評価	共同	2020年8月	第22回日本ヒト脳機能マッピング学会(Online)	鈴木 貴登, 加藤 和夫, 門倉 博之, 黒木 友裕	pp.プログラム・講演抄録集, P23, p.90		
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		①生体情報計測に基づく視環境評価に関する研究を実施する。 ②生体情報計測に基づく人の移動速度や行動判別に関する研究の実現可能を探る。 ③生体信号処理方法の開発に関する研究を実施する。					

今年度の進捗状況	①視空間が観察者の大脳神経活動へ与える影響に関する研究を実施し、学会発表を行った。 ②研究を進め、研究テーマとしての実現可能性を確かめることができた。 ③独立成分分析を用いた脳波瞬きノイズの除去方法に関し研究を進め、査読付き論文として学術雑誌に掲載された。		
来年度の進捗目標	①継続して、より詳細に実験・データ解析を進め、更なる考察・検討を行い、学会発表等を行う。 ②今年度の研究成果に基づき、本格的に研究を進める。 ③継続して、より詳細に実験・データ解析を進め、更なる考察・検討を行い、論文作成および学会発表等を行う。		
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究C)	2019年度～2021年度	共同(研究代表者)	空間周波数が潜在的な感覚に与える影響と関連する大脳神経活動の評価
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2018年9月～2021年2月		International Joint Meeting 2020 in Kansai プログラム委員会 プログラム委員	
2016年8月～		国際複合医工学会 会員	
2016年8月～		国際複合医工学会 評議員	
2009年6月～2021年5月		日本磁気学会 論文委員	
2006年～		日本人間工学会 会員	
2001年3月～		電気学会 会員	
2000年5月～		日本生体磁気学会 会員	
1999年～		日本磁気学会 会員	
1994年10月～		電子情報通信学会 会員	
1994年～		生体医工学会 会員	
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>			



2020年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	教授	氏名	神永 正博	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
工学部向け数学教育の実践		2020年4月1日～		工学を学ぶ上で必要となる数学、数学的な考え方は、標準的な数学のカリキュラムとは異なっている。講義では、理論的に興味深い、応用上不要と思われる部分をカットし、必要な部分に説明を集中している。「情報セキュリティ工学」では、Pythonによる実習に取り組み、「確率統計学」でRによる実習の導入に取り組んだ。今年度は、『Pythonで学ぶフーリエ解析と信号処理』(コロナ社)を出版し、フーリエ解析の講義にPythonと信号処理を導入した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
『Pythonで学ぶフーリエ解析と信号処理』	単著	2020年9月	コロナ社	未記入	pp.0		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
A True Random Number Generator Method Embedded in Wireless Communication Systems	単著	2020年4月	IEICE Transactions on Fundamentals E103-A(4)	©Toshinori Suzuki, Masahiro Kaminaga	pp.686-694		
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
浜田宏著『その問題、数理モデルが解決しやす』書評	単著	2020年12月	数理学会学会機関誌『理論と方法』67号	不明	pp.160		
<b>G. 学会における研究発表</b>							
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		(1)耐タンパー軽量ブロック暗号の論理実装評価研究 (2)大学用教科書の執筆 (3)無線を利用した乱数発生方式の研究					
今年度の進捗状況		(1)同テーマにて科研費を獲得しており、継続中である(2019年度は3年目)。 (2)単著『Pythonで学ぶフーリエ解析と信号処理』コロナ社を出版した。 (3)T. Suzuki, M. Kaminaga, A True Random Number Generator Method Embedded in Wireless Communication Systemsが電子情報通信学会英文誌に掲載された。					
来年度の進捗目標		(1)論理演算型ブロック暗号の相関電力解析に関する安全性評価の論文を執筆し投稿する。 (2)『Pythonで学ぶ微分方程式』をコロナ社から出版する。 (3)Oscillator sampling methodを用いた乱数発生装置のランダムネスの数学的考察に関する論文を執筆し投稿する。					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 科研費基盤研究(C)	2019年度	共同(研究代表者)	耐タンパー性を持つ論理演算型軽量ブロック暗号の設計原理の研究とその周辺の暗号技術、暗号回路技術の研究を行う。
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	教授	氏名	川又 憲	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
より効果的な知識定着をおこなうため、学生自らの自主学習を促すための授業システムの構築を継続して進めている。本年度は演習および実験系の科目において、自学による予習・復習課題の設定を行う。		2020年4月1日～		授業における学習内容、課題を持ち帰り、日常的に自主学習が行われるよう、授業システムの整備を継続して進めている。課題は、なるべく学生が取り組みやすいように工夫し、第一段階は昨年度まで自主的な学習機会の定着を目指した。特に自主的な演習問題の取り組みにより確実な実力が定着するための方法について検討した。2020年度においては、動画によるオンデマンド授業資料の作成を行い、本年度ではこれらの資料の改訂を行い、より効果的な自主学習プログラムの構築を行う。			
学生の能動的な学習によるアクティブ・ラーニングを推進するため、専門分野の演習課題に対する取り組みの機会、ならびに実験・実習による学びの機会を連携させ、確実な知識定着を図る。		2020年4月1日～		アクティブラーニングの一環として、演習科目での学生自身の能動的な課題取り組みに加え、板書による解法のプレゼンテーションを行わせ、他の学生に「教え・伝える」プロセスを設けて、より効果的な知識定着を行えるよう務めている。また、実験・実習系科目にける主体的な学習ならびに考察力の向上を進めるための改題設定を行っている。演習科目では、学生の問題解決力を向上させるため、効果的な演習課題の絞り込みを行っている。本年度においては実験の補助資料として学生実験テーマの動画資料を作成し、オンデマンドにて公開した。			
情報工学分野の体系化された講義、演習、さらには実験・実習科目のより効果的な知識定着と、学習効果の向上に向け、情報通信工学分野のカリキュラム・マップの整備を行っている。		2020年4月1日～		体系化された情報通信工学分野において、知識伝達型の講義科目と、基礎問題の解決能力を身につける演習科目、さらには課題解決力を身につける実験・実習科目のカリキュラム体系に従って、各科目の位置づけおよび科目間の連携を意識させるための説明の強化を進めている。本年度は2018年からスタートした通信工学基礎Ⅰ、Ⅱならびに情報通信工学実験のカリキュラム上の連携を再確認し、カリキュラムと内容の整合の確認、改善点の抽出、次回カリキュラム変更に向けた改正点について検討した。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
情報基盤工学科科目「情報通信工学実験Ⅰ、Ⅱ」に関する実験指導資料の整備と実験テーマの構築		2020年4月1日～		3年生の科目となる「情報通信工学実験Ⅰ」および「情報通信工学実験Ⅱ」において、実験指導資料を作成すると共に座学講義との関係整備を行った。さらに、開講一年目にて実験課題の整備、実験指導書の作成、レポートの管理法などについて、授業の構築作業と実施を行った。また、本年度は実験に関する動画資料の作成を行い、実験指導の補助資料を充実させた。			
情報基盤工学科科目「通信工学基礎Ⅰ、Ⅱ」に関する講義資料の整備と改訂		2020年4月1日～		「通信工学基礎Ⅰ」および「通信工学基礎Ⅱ」において、講義資料の整備を行った。さらに、内容の見直しを行い、資料の改定作業を継続して進めている。また、通信工学基礎演習Ⅰについては、演習解法に関する動画資料の作成を行った。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
講義科目および実験科目に関する動画資料の作成		2020年4月1日～		感染症予防の観点から実施される遠隔授業に対応するため、各担当科目の動画配信資料の作成を行った。			
ノートPCとバーコードリーダーによる授業出席管理システムの構築と運用		2020年4月1日～		必修等の主要科目への出席を促すため、授業への出席をとることとしている。この際、学生証のバーコードをリーダーで読み取り、PCで出欠状況を管理できるシステムを構築し、運用している。これにより、長期欠席者へのアラームや、出欠状況の把握が容易になった。本システムを継続的に運用している。			
<b>現在の課題・目標</b>		(1)情報基盤工学科における通信系科目のカリキュラムマッピングの検討とカリキュラム体系化 (2)情報通信系専門科目における重要法則、重要課題、重要演習問題の抽出と整理 (3)学生の能動的な学修を引き出すための講義手法の検討と実践 (4)PC等の情報機器を活用した授業運営サポートへの応用 (5)遠隔講義に対応したオンデマンド講義資料の充実					

<p>今年度の進捗状況</p>	<p>上記(1)については、新学科の関連教員間でのコミュニケーション機会の確保、連絡体制の強化が進んでいる。また、学生実験指導書の作成作業の具体的成果も得られつつある。  上記(2)については、継続して作業を進めている。  上記(3)については、専門科目等についてアクティブラーニングを取り入れるための工夫と仕組みを検討し、可能な部分から実践している。また、学生の自己学習時間の確保のための仕組みづくりも絡めて、より効果的な学習効果を引き出す工夫を重ねたい。  (4)については試作システムで運用中で、効果の検証中である。</p>				
<p>来年度の進捗目標</p>	<p>(1)改組後の新学科における講義内容の検討と準備(継続)  (2)改組後の新学科における学生実験科目の検討と改善(継続)  (3)専門科目におけるアクティブラーニングの活用と視覚資料等の整備(継続)  (4)情報端末を活用した授業運用サポート手法の開発(継続)  (5)遠隔授業のためのコンテンツの改訂と強化(新規)</p>				
<p>II 研究活動</p>					
<p>著書・論文等の名称</p>	<p>単著・共著の別</p>	<p>発行又は発表の年月(西暦)</p>	<p>発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称</p>	<p>編者・著者名</p>	<p>該当頁数</p>
<p>A. 学術書</p>					
<p>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</p>					
<p>近接放射イミュニティ試験用TEM ホーンアンテナのインパルス波励振によるアンテナ開口面の過渡磁界分布</p>	<p>共著</p>	<p>2020年12月</p>	<p>電気学会論文誌 A, Vol.140, No.12, pp.601-602 (2020), 電気学会論文誌 A, Vol.140, No.12, pp.601-602 (2020)</p>	<p>川上源, 川又憲, 石上忍, 石田武志, 張間勝茂, 後藤薫</p>	<p>pp.601-602</p>
<p>球電極対のESDに伴う過渡磁界ピーク値の距離特性</p>	<p>共著</p>	<p>2020年12月</p>	<p>電気学会論文誌 A, Vol.140, No.12, pp.597-598 (2020), 電気学会論文誌 A, Vol.140, No.12, pp.597-598 (2020)</p>	<p>加藤健人, 川又憲, 石上忍, 藤原修</p>	<p>pp.597-598</p>
<p>球電極間の衝突ESDにおけるペアチップの光電界センサーを用いた静電界の過渡応答</p>	<p>共著</p>	<p>2020年12月</p>	<p>電気学会論文誌 A, Vol.140, No.12, pp.599-600 (2020), 電気学会論文誌 A, Vol.140, No.12, pp.599-600 (2020)</p>	<p>加藤健人, 川又憲, 石上忍, 大沢隆二, 石田武志, 藤原修</p>	<p>pp.599-600</p>
<p>大型電気機器からの電磁雑音測定方法の検討</p>	<p>共著</p>	<p>2020年12月</p>	<p>電気学会論文誌 A, Vol.140, No.12, pp.573-579 (2020), 電気学会論文誌 A, Vol.140, No.12, pp.573-579 (2020)</p>	<p>五日市達, 猪狩好司, 石上忍, 川又憲</p>	<p>pp.573-579</p>
<p>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</p>					
<p>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</p>					
<p>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</p>					
<p>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</p>					
<p>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</p>					
<p>G. 学会における研究発表</p>					
<p>球電極対のマイクロギャップ ESD に伴って発生する近傍過渡電磁界の一特性</p>	<p>共同</p>	<p>2020年12月</p>	<p>電気学会電磁環境研究会 EMC20-071(Web), EMC20-071, SPC20-198</p>	<p>加藤健人, 川又憲, 石上忍, 藤原修</p>	
<p>大型電気機器・システムからの電磁雑音測定方法に関する研究</p>	<p>共同</p>	<p>2020年10月</p>	<p>電気学会電磁環境研究会 EMC20-047(web), EMC20-047</p>	<p>五日市達, 猪狩好司, 石上忍, 川又憲, 吉岡康哉</p>	
<p>球電極ESDに伴う近傍過渡磁界の距離特性に関する一考察</p>	<p>共同</p>	<p>2020年10月</p>	<p>電気学会電磁環境研究会 EMC-20-048(web), EMC20-048</p>	<p>加藤健人, 川又憲, 石上忍, 藤原修</p>	
<p>独立成分分析を用いた電磁雑音波形抽出の基礎検討</p>	<p>共同</p>	<p>2020年10月</p>	<p>電子情報通信学会技術研究報告EMCJ2020-28(web), 120, 199</p>	<p>高橋直央, 石上忍, 川又憲</p>	<p>pp.20-24</p>

広帯域長六角形折返しアンテナの試作と特性測定(1)	共同	2020年10月	電子情報通信学会技術研究報告(Web)(web), 120, 199	石崎利弥, 小林亨, 石上忍, 川又憲, 張間勝茂, 梶真悟	pp.31-35
広帯域長六角形折返しアンテナの試作と特性測定(1)	不明	2020年10月	電子情報通信学会技術研究報告 EMCJ2020-29(Web), 120, 199	小林 亨, 石崎利弥, 石上 忍, 川又 憲, 張間勝茂, 梶 真悟	pp.25-30

#### H. 翻訳(学術書や原典等)

#### I. 特許

現在の課題・目標	(1)ESDなどの放電に伴って発生するインパルス性電磁ノイズの諸特性について究明を行う(継続課題) (2)上記課題を連携して解決するための研究組織を学会傘下に構築し, 組織的かつ継続した活動を行う(継続的取り組み) (3)国内のESDのEMC問題に取り組む研究グループを母体として, 関連する国内大会および国際会議へのセッションオーガナイズを行い, 研究成果の公開を積極的に進める(継続的取り組み)
今年度の進捗状況	上述(1)および(2)については, 電気学会傘下に「電子デバイスに対するESD過渡電磁界の影響評価調査専門委員会」および2020年度から「ESD現象のEMC的解明のための計測・評価技術調査専門委員会」を構成して, 組織的かつ連携して研究活動を推進している。さらに, 2014年4月より放電のEMC問題に関する放談会を設置した。 しかし, 2020年度においては新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため, 対面での研究会・勉強会の活動は自粛したため, オンラインでの活動となり十分な研究活動の進捗は得られなかった。
来年度の進捗目標	比較的長期的な目標として, 上述(1)が挙げられ, 短期的な目標として, (2),(3)が挙げられる。さらに昨年度は, 電気学会電磁環境技術委員会傘下に, ESDのEMC問題に関する新たな研究グループを構築し, 研究基盤をより強化した。今後も上述の研究ネットワークを活用して, 研究計画の一層の推進を図る予定である。また, 令和2年度の科学研究費助成事業(基盤研究(B))の新規外部資金の獲得に向け申請を行った。

#### III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2020年4月～			「ESD現象のEMC的解明のための計測・評価技術調査専門委員会」委員 会員
2020年4月～			電気学会基礎・材料部門 電磁環境技術委員会 会員
2017年10月～			(公)全日本学生スキー連盟, 教育本部, 専門委員, 運営委員会委員 委員
2009年4月～			電気学会 基礎・材料・共通部門 電磁環境技術委員会1号委員 会員
2006年4月～			日本学術会議電気電子工学委員会URSI分科会「電磁波の雑音・障害」小委員会(URSI-E委員会) 委員

#### V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

#### VI 学内における管理運営に関する諸活動

2020年度工学部委員会 (1) 学生委員会委員 (2) 資料管理編纂委員 (3) 外部資金導入推進委員 (4) 研究装置・設備および学内研究助成等評価委員 (5) 宮城県高度電子機械人材育成センター委員
2020年度全学委員会 (1) 知的財産委員会 (2) 知的財産審査委員会 (3) アドミッションズオフィス委員会
2020年度その他 (1) 敬和会幹事

2020年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	教授	氏名	郷古 学	大学院の授業 担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2020年～		前回の講義で実施した課題のなかから、いくつかの回答を選び紹介することで、前回講義内容の復習を行っている。2020年度はオンライン講義が主だったため、講義動画内で、前回課題の回答の中から、いくつかピックアップして、学生に紹介した。			
講義内容の定着を目的とした課題の実施		2020年～		講義(「情報工学基礎」)において、講義内容の定着を目的とし、講義で扱った内容に関する課題をオンラインで実施し、毎回採点し評価に組み込んでいる。			
講義用ホームページの作成		2020年～		講義や卒業研究で扱った資料や参考文献の情報を確認できるように、講義用のホームページをmanabaで作成し、運用している。			
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2020年～		毎回の講義の冒頭で、前回の復習とその回の概略を必ず説明し、講義終了時にはその回のまとめを行っている。2020年度はオンライン講義が主だったため、manabaの掲示板機能やレポート提出機能を用いて対応した。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
クリティカル・シンキングの技法テキスト		2020年～		講義内容についてまとめたテキストを作成した。2020年度はオンライン講義が主だったため、manabaの機能を利用して、資料等を配布した。			
読解・作文の技法テキスト		2020年～		講義内容についてまとめたテキストを作成した。また、より理解を深めることを目的として、様々な配布資料を作成し、講義内で使用した。2020年度はオンライン講義が主だったため、manabaの掲示板機能やレポート提出機能を用いて対応した。			
卒業研究用の資料		2020年～		卒業研究に必要な知識をまとめた資料(プログラム、文章等)を作成し、PDF化してホームページからダウンロードして利用できるようにした。2020年度はオンライン講義が主だったため、manabaの掲示板機能やレポート提出機能、slackなどのアプリケーションを用いて、指導を行った。			
講義(情報工学基礎)の配付資料に関する工夫		2020年～		講義(情報工学基礎)では市販のテキストの他、毎回配付資料を用いた講義を行っている。配布資料は、当該回の講義内容をまとめたものに加え、例題や課題を多く掲載し、学生の理解を深めることができるような工夫をしている。また、講義内的小テスト等をすべてmanaba上で実施可能とし、学生の利便性を上げるとともに、講義運営の効率化を図った。			
講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)演習教材の開発		2020年～		講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)で用いる教材を作成した。教材はマイクロコンピュータ、センサ、プログラム等からなり、円滑な講義運営ができるように、何度も試行&評価を繰り返して作成した。2020年度はオンライン講義が主だったため、新規に作成した教材を、各学生の自宅に郵送した。			
講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)配付資料		2020年～		講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)で配布する講義内容をまとめた資料を作成。同資料には学習内容の定着を目的とした課題も記載されている。2020年度はオンライン講義が主だったため、manabaの掲示板機能やレポート提出機能を用いて対応した。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
授業への参加&出前講義		2020年12月15日		宮城県宮城第一高等学校にて行われた、総合的な探究の時間「中間発表会」(1年生)に参加し、生徒の発表に対し、専門的な視点からコメント等を行った。また、自身の最新研究について出前講義も行った。			
出前講義		2020年		東北学院榴ヶ岡高等学校の高校1年生を対象として、最新の研究成果等の紹介を行った。2020年度はオンラインで開催した。zoomをもちいた講義に加えて、紹介動画も準備し、オンラインでも安定して実施できるように工夫した。			
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		(ア)グループワークなど、学生同士が互いに相談し、より積極的に教え合う仕掛けを導入する。 (イ)すべての講義において、その講義の重要性に関して、実例と組み合わせで説明する。 (ウ)講義中の学生とのコミュニケーションを大切にす。					

今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上記目標(ア)について、zoomの機能を用いてグループワーク実施を検討した。</li> <li>・上記目標(イ)について、講義の重要性に関する身近な時事問題を加えた。</li> <li>・上記目標(ウ)について、manabaの掲示板機能を利用して、活発な議論を実現できるような工夫を取り入れた</li> </ul>				
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上記目標(ア)について、さらにブラッシュアップする。</li> <li>・上記目標(イ)について、最新の時事問題に加え、事例紹介を充実させる。</li> <li>・上記目標(ウ)について、グループワークの活性化について更に工夫する。</li> </ul>				
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>					
Determining the Most Effective Way of Ensuring a Tidying-Up Behavior: Comparison of Effects of Reminders Using Oral Instruction, Posters, and Robots『Determining the Most Effective Way of Ensuring a Tidying-Up Behavior: Comparison of Effects of Reminders Using Oral Instruction, Posters, and Robots』	共著	2020年	※制限文字数100文字を超えたので『概要』へ移行。、※制限文字数50文字を超えたので『概要』へ移行。、※制限文字数50文字を超えたので『概要』へ移行。	Akihiro Ogasawara and Manabu Gouko	pp.6
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>					
Determining the Most Effective Way of Ensuring a Tidying-Up Behavior: Comparison of Effects of Reminders Using Oral Instruction, Posters, and Robots	共著	2020年	Journal of Advanced Computational Intelligence and Intelligent Informatics, 24(4)	Akihiro Ogasawara and Manabu Gouko	pp.543-548
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>					
把持物体の特徴抽出のためのロボットの行動学習法の提案	共著	2021年3月	情報処理学会第83回全国大会	菅ノ又恵, 郷古 学	pp.1Q-01
IoT技術を活用した発酵食品のモニタリングシステムの開発,	共著	2020年5月	ロボティクス・メカトロニクス講演会2020(ROBOMECH2020)	川崎統孔, 郷古 学	pp.1P1-D02
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>					
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>					
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>					
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>					
<b>G. 学会における研究発表</b>					
把持物体の特徴抽出のためのロボットの行動学習法の提案	共同	2021年3月	情報処理学会第83回全国大会(不明)	菅ノ又恵, 郷古 学	pp.2
IoT技術を活用した発酵食品のモニタリングシステムの開発	共同	2020年5月	ロボティクス・メカトロニクス講演会2020(ROBOMECH2020), 講演論文集(DVD)(不明)	川崎統孔, 郷古 学	pp.2
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>(ア)被験者による実験により得られたデータの解析を完了させる。</li> <li>(イ)改良した数理モデルの性能を検証する。</li> <li>(ウ)共同研究を進展させ、学会等での発表に力を入れる。</li> </ul>				
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上記目標(ア)については、新型コロナウイルスの影響のため、実験ができなかった。</li> <li>・上記目標(イ)については、論文を執筆する。</li> <li>・上記目標(ウ)については、共同研究を進展させ、学会等での発表に力を入れる。</li> </ul>				
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上記目標(ア)については、コロナ禍のなかでも実施可能な実験手法を検討する。</li> <li>・上記目標(イ)については、論文を執筆する。</li> <li>・上記目標(ウ)については、共同研究を進展させ、学会等での発表に力を入れる。</li> </ul>				

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2017年4月～2021年3月		enPiT(成長分野を支える情報技術人材の育成拠点の形成)組み込み分野 連携 大学 事業責任者 委員	
2014年～		日本ロボット学会研究専門委員会 開かれた知能研究専門委員会 委員 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
1) 広報・ホームページ委員委員長 2) 学生委員 3) 中高大一貫教育実施委員会 4) 大学案内編集委員会 5) ICT教育専門委員会委員委員 6) 教学組織改編推進室準備委員会情報学部データサイエンス学科(仮称)委員			



2020年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	教授	氏名	志子田 有光	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2017年度から東北学院大学が採択されている文部科学省プロジェクト「enPiT2 成長分野を支える情報技術人材の育成拠点の形成」の実践教育対象授業について、特に実技を含む講義の実習教材の開発を行った。		2020年4月1日～2021年3月31日		enpit2成長分野を支える情報技術人材の育成拠点の形成は、高度IT人材の育成を目指して実施されている全国的プロジェクトであり、ビッグデータ・AI分野、セキュリティ分野、組込みシステム分野、ビジネスシステムデザイン分野を含む。東北学院大学は、この中で組込みシステム分野に参画し、カリキュラムの中で教材の開発、実践的に導入・評価を行っている。2021年3月をもって、本プロジェクトは終了となる。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		現在の課題は、2020年度から開始された全学的遠隔授業のチームリーダーとして、その環境整備を行うことである。現在の目標は、全教職員、学生に対して、従来の講義方法に質・量ともに劣ることが無いように充実させることである。					
今年度の進捗状況		2020年度の遠隔授業実施については、全学的協力体制が確立し、本学として外部評価委員などからも、その成果を高く評価していただくことができた。今年度の遠隔授業実施を振り返り、来年度以降に向けてその内容を充実させる計画を行っている。					
来年度の進捗目標		今年度に引き続き、遠隔授業の実施体制をさらに充実させ、質・量ともに向上させることが目標である。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
データサイエンス系学生の電子系実習の実態調査と教材作製に関する検討		共同	2020年8月	2020年度電気関係学会東北支部連合大会(不明)		◎鈴木順, 森島佑, 淡野照義, 志子田有光	
データサイエンス系学生の電子系実習の実態調査と教材作製に関する検討		共同	2020年	2020年度電気関係学会東北支部連合大会(不明)		鈴木順, 森島佑, 淡野照義, 志子田有光	pp.1
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		採択されている科学研究費のテーマに従い、研究を推進し成果をまとめる。					
今年度の進捗状況		大学院生を指導し、比較的活発な学会活動ができたと思われる。					
来年度の進捗目標		本年得られた知見をベースに、研究成果をまとめる。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	

科学研究費補助金 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤C	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	今後、IoTデバイスは近くのデバイスと通信するため、一つのデバイスのセキュリティが破られることで被害が拡大する可能性がある。ハードウェアリソースが限られたIoTデバイスに暗号を実装するために軽量暗号が考案され、サイドチャネル攻撃とその対策技術が研究されている。電力解析攻撃の観点から見ると軽量暗号の中でもSIMONに代表されるSボックスを持たない論理演算型ブロック暗号への攻撃が困難であることが注目される。論理演算型ブロック暗号のサイドチャネル耐性の解明と格子理論を用いた鍵スケジュールのサイドチャネル攻撃(差分故障解析)に対する安全性解析により耐タンパーブロック暗号の設計原理を解明する。
科学研究費補助金 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤C	2018年度～2020年度	共同(研究代表者)	研究題目「データサイエンス系学生の自律的IoT課外学習に特化した実験システムの開発と検証」データサイエンス系学生がIoT技術を学ぶにあたり、特に課外教材として用いるのに適した実験システムの開発と検証を行う。
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
2020年度まで予定されていた情報基盤工学科長を2019年度末で退任し、2020年4月から学長室長に着任した。学長室インスティテューショナル・リサーチ課、学長室事務課の業務にあたるほか、4月から急遽対応が必要となった遠隔授業のサポートチームリーダーとして業務を遂行した。			

2020年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	教授	氏名	鈴木 利則	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
講義資料の充実, 動画の活用など		2020年4月1日～2021年3月31日		担当している全科目の講義資料の充実を図り、事前に配布している。通信システムに関してタイムリーな話題(リモート会議の急増によるネットワークトラフィックの増大など)を取り入れた資料を作成し解説を行っている。情報通信工学実験IIIに関して、オンタイム講義を踏まえて内容を見直し、遠隔で受講者が個別に実験を遂行できるような内容とした。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
動画作成		2020年4月1日～2021年3月31日		通信システム概論、通信システム工学、情報通信工学のオンデマンド動画の作成			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
東北学院中学校・高等学校「プレカレッジ」		2021年3月11日～2021年3月11日		東北学院中学校・高等学校「プレカレッジ」出張講義を行った			
現在の課題・目標		①小テストやレポートのフィードバックを継続実施 ②受講生全体の理解度向上を目指した教材等の一部見直し					
今年度の進捗状況		2020年度より選択専門科目が2科目増えた。このため①に関しては個別のフィードバックをTAの協力を得て進めているところである。講義回ごとに課すレポートや小テストに対してフィードバックを行っている。②に関しては、昨年度より担当した科目(電波法、情報通信工学)の教材を大幅に充実させた。					
来年度の進捗目標		引き続き、目標①と②を推進する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Asynchronous Successive Interference Cancellation for 5G Receiver Operating in Shared Spectrum with Different Radio System	共著	2020年11月	Asilomar Conference on Signals, Systems, and Computers	Issei Kanno, Ryochi Kataoka, Toshinori Suzuki, Hiroyasu Ishikawa, Kosuke Yamazaki, Yoji Kishi	pp.WE3-4-4		
A True Random Number Generator Method Embedded in Wireless Communication Systems	単著	2020年4月	IEICE Transactions on Fundamentals, IEICE Transactions on Fundamentals	T. Suzuki, M. Kaminaga	pp.E103-A		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
(翻訳論文)無線通信システムに組み込まれた真性乱数生成器法	単著	2021年2月	東北学院大学 工学部研究報告 55号 1巻, 東北学院大学 工学部研究報告 55号 1巻	戸村康汰, 鈴木利則	pp.不明		
シングルセルにおけるNOMA通信容量の導出に関する一検討	単著	2021年2月	東北学院大学 工学研究報告 55号 1巻, 東北学院大学 工学研究報告 55号 1巻	石井洋平, 鈴木利則, 吉川英機	pp.不明		
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							

周波数共用におけるリソース再構成を用いる5Gのスループット評価	共同	2021年3月	2021年 電子情報通信学会 総合大会(不明)	菅野一生, 津町直人, 堅岡良知, 鈴木利則, 石川博康, 山崎浩輔, 岸洋司
ダイナミック周波数共用における異システム干渉除去の屋外実験評価	共同	2021年3月	2021年 電子情報通信学会 総合大会(不明)	堅岡良知, 菅野一生, 林高弘, 津町直人, 鈴木利則, 石川博康, 山崎浩輔, 岸洋司
下りリンク非直交多元接続の演算量削減手法の提案	共同	2021年1月	電子情報通信学会 無線通信システム研究会(不明)	石井洋平, 鈴木利則, 吉川英機
ダイナミック周波数共用における異システム干渉除去の評価報告	共同	2020年10月	革新的無線通信技術に関する横断型研究会(MIKA)(不明)	堅岡良知, 菅野一生, 津町直人, 鈴木利則, 石川博康, 山崎浩輔, 岸洋司
ダイナミック周波数共用における適応的リソース再構成の評価	共同	2020年9月	2020年電子情報通信学会ソサイエティ大会(不明)	津町直人, 菅野一生, 堅岡良知, 鈴木利則, 石川博康, 山崎浩輔, 岸洋司
ダイナミック周波数共用における異システム干渉除去の実験評価	共同	2020年9月	2020年電子情報通信学会ソサイエティ大会(不明)	堅岡良知, 菅野一生, 津町直人, 鈴木利則, 石川博康, 山崎浩輔, 岸洋司

#### H. 翻訳(学術書や原典等)

#### I. 特許

現在の課題・目標	①第5世代移動通信システムに関する検討を進める。②Wi-Fi, セキュリティ, 人工知能などを視野に入れた新たな無線技術の研究課題を発掘する。
今年度の進捗状況	第5世代移動通信システムに関する検討を進め外部発表を行った。Wi-Fiと機械学習を組み合わせた位置推定法の初期実装を行い、研究室紹介のデモに用いるなどした。
来年度の進捗目標	①第5世代移動通信システムに関する検討を継続して進める。②WiFi, セキュリティ, 人工知能などの新たな無線技術の研究を発展させる。③研究成果を取りまとめ外部発表を行う。

#### Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
----------	----------	------------------------	----

#### Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

#### Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

#### Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2020年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	教授	氏名	吉川 英機	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
遠隔授業における双方向性の確保		2020年～		2020年度の遠隔授業ではオンデマンドが主となったが、時間割上の時間帯においてはZOOMにて質問対応ができるようにして、双方向性を確保した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
三木、吉川、「情報理論」、コロナ社		2020年		授業において自著を使用している。 なお、2020年度は改訂版を執筆し、2021年4月に発刊される。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・担当科目に対して興味を引き出させること</li> <li>・自主的に行うことができる内容の課題を出すこと</li> <li>・講義内容を応用できるようになること</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>・担当科目に対して興味を引き出させること</li> <li>・自主的に行うことができる内容の課題を出すこと</li> <li>・講義内容を応用できるようになること</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・上記の点について授業資料の内容を見直しながら継続する</li> <li>・評価項目をより明確にする</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
下りリンク非直交多元接続の演算量削減手法の提案		共同	2021年1月	電子情報通信学会 無線通信システム(RCS)研究会 講演論文集(不明)		石井洋平、鈴木利則、吉川英機	pp.pp.21-24
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・従来より行っている誤り訂正符号の数学的解析を続けている</li> <li>・学内において組織しているアタックラボで行っている差分電力解析による共通鍵暗号の解析</li> <li>・誤り訂正符号、および暗号システムの実装への応用</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでに国際シンポジウムに投稿した内容の論文投稿の準備をしている。</li> <li>・卒業研究において、軽量ブロック暗号や誤り訂正符号の復号器のFPGAボードへの実装を試みた。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報基盤工学科の新設に伴い、新カリキュラムの充実を全てに優先させる。</li> <li>・誤り訂正符号の解析テーマに関しては既発表の内容の論文投稿を行う。</li> <li>・ブロック暗号だけでなく、ストリーム暗号の攻撃を行う。</li> <li>・暗号攻撃にFPGAボードを利用するためのスキルを身につける。</li> </ul>					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2009年～		電子情報通信学会 東北支部 運営委員 会員	
2005年～		電子情報通信学会 論文誌査読委員 会員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
情報基盤工学科 学科長			

2020年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	准教授	氏名	門倉 博之	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
授業理解促進のためのオンライン動画の作成配信および資料作成と配布		2020年5月7日～2021年1月31日		授業のオンライン動画の作成と配信, 演習資料および授業内容のポイントをまとめたPDF資料を配布し, 授業理解促進を図った。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
情報数理演習Ⅲの解説動画の配信および演習資料と小テストの配布		2020年9月28日～2021年1月30日		1年後期の授業「情報数理演習Ⅲ(微分積分学Ⅱ)」の教材の解説動画と資料を毎回作成し配信・配布した。			
応用線形代数学演習の解説動画の配信および演習資料と小テストの配布		2020年9月26日～2021年1月31日		1学年後期の授業「応用線形代数学演習」の教材の解説動画と資料を毎回作成し配信・配布した。			
情報数理演習Ⅱの解説動画の配信および演習資料と小テストの配布		2020年5月13日～2020年8月21日		1年前期の授業「情報数理演習Ⅱ(微分積分学Ⅰ)」の教材の解説動画と資料を毎回作成し配信・配布した。			
情報数学演習の解説動画の配信および演習資料と小テストの配布		2020年5月12日～2020年8月20日		2年前期の授業「情報数学演習」の教材の解説動画と資料を毎回作成し配信・配布した。			
データサイエンス演習の解説動画の配信および演習資料の配布		2020年5月12日～2020年8月17日		3年前期の授業「データサイエンス演習」の教材の解説動画と資料を11回分作成し配信・配布した。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		授業内容が理解しやすいような, わかりやすい説明をする。学習効果が得られるように教材を工夫して作成する。					
今年度の進捗状況		授業内容が理解しやすいように教材を工夫作成するなど, 一定の進捗があったといえる。					
来年度の進捗目標		授業評価アンケートの結果等を踏まえ, 引き続き, よりわかりやすい説明と教材の工夫を行う。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
Rejecting Artifacts Based on Identification of Optimal Independent Components in an Electroencephalogram During Cognitive Tasks	単著	2021年1月	ICBME 2019, ICBME 2019	K. Kato, K. Suzuki, T. Suzuki, H. Kadokura	pp.73～80頁		
高層事務所ビルの避難訓練時の階段避難流動分析に基づく順次避難の改善～高層建築物からの全館避難を円滑化するリアルタイム技術の可能性～	共著	2020年12月	ライフサポート学会, ライフサポート, 32(4)	朴聖經, 水野雅之, 藤井皓介, 門倉博之他3名	pp.118-125		
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
高層事務所ビルの避難訓練調査とコントロールボリュームモデルによる予測の比較分析	共同	2021年3月	2021年度日本建築学会関東支部研究報告集(不明)	朴聖經, 水野雅之, 呉貫遠, 藤井皓介, 佐野友紀, 関澤愛, 門倉博之			

図書館の閉架書庫における経路選択行動に関する実験的研究(その2)ヒアリング調査に基づく避難時の経路選択とその影響要因に関する考察	共同	2020年9月	2020年度日本建築学会大会(関東)(千葉)	大江真帆, 門倉博之, 恒松良純
図書館の閉架書庫における経路選択行動に関する実験的研究(その2)ヒアリング調査に基づく避難時の経路選択とその影響要因に関する考察	共同	2020年9月	日本建築学会2020年度大会 学術講演概要集(不明)	大江真帆, 門倉博之, 恒松良純
図書館の閉架書庫における経路選択行動に関する実験的研究(その1)避難時の経路選択行動とその影響要因	共同	2020年9月	2020年度日本建築学会大会(関東)(千葉)	門倉博之, 大江真帆, 恒松良純
難訓練参加者へのアンケート調査結果 —— 斉避難を採用した高層事務所ビルの避難訓練における避難行動の調査 その4——	共同	2020年5月	2020年度日本火災学会研究発表会(不明)	朴聖經, 鄭英博, 水野雅之, 藤井皓介, 佐野友紀, 奥山将行, 関澤愛, 門倉博之
滞留の発生・解消時の階段内の密度と流動量の関係の変化 —— 斉避難を採用した高層事務所ビルの避難訓練における避難行動の調査 その3——	共同	2020年5月	2020年度日本火災学会研究発表会(不明)	朴聖經, 鄭英博, 水野雅之, 藤井皓介, 佐野友紀, 門倉博之
避難者の合流や何らかの要因による滞留の発生と解消の伝播に関する分析 —— 斉避難を採用した高層事務所ビルの避難訓練における避難行動の調査 その2 ——	共同	2020年5月	2020年度日本火災学会研究発表会(不明)	鄭英博, 朴聖經, 水野雅之, 藤井皓介, 佐野友紀, 門倉博之, 関澤愛
階段室における観測調査方法および流動状況の概要 —— 斉避難を採用した高層事務所ビルの避難訓練における避難行動の調査 その1 ——	共同	2020年5月	2020年度日本火災学会研究発表会(不明)	藤井皓介, 朴聖經, 鄭英博, 水野雅之, 佐野友紀, 門倉博之

## H. 翻訳(学術書や原典等)

## I. 特許

現在の課題・目標	①同専門領域の研究者との共同研究を進める。 ②高層建築物における避難時の滞留伝播について分析を行う。
今年度の進捗状況	上記目標①については、共同研究として図書館の避難実験に参加することができた。上記目標②については、分析と学会の報告を行い、進捗があったといえる。
来年度の進捗目標	上記目標②については、引き続き、学会での報告と学術論文として投稿する。

## III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 科学研究費助成金若手研究	2019年度～2022年度	個別(研究代表者)	
科学研究費補助金 科学研究費助成金基盤研究(C)	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	
科学研究費補助金 科学研究費助成金基盤研究(C)	2016年度～2019年度	共同(研究分担者)	

## IV 学会等及び社会における主な活動

2005年5月～	日本火災学会会員 会員
2005年4月～	日本建築学会会員 会員
2002年6月～	情報処理学会会員 会員

## V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

## VI 学内における管理運営に関する諸活動



---

入試委員
------

2020年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	准教授	氏名	木下 勉	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
1年生を対象としたオンライン学習の基本操作説明資料の作成		2020年		1年生の前期の科目, 情報数理演習I・情報数理演習II・数理的思考の基礎について, manabaの操作イメージの説明を説明する資料を配布した。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
応用線形代数学演習の演習資料と小テストを毎回配布		2020年		「応用線形代数学演習」の教材を毎回作成し配布した。			
応用線形代数学の講義資料と理解度確認テストを毎回配布		2020年		「応用線形代数学」の教材を毎回作成し配布した。また, 講義の最後に理解度を確認するテストを作成した。			
情報数理演習IIの演習資料と小テストを毎回配布		2020年		「情報数理演習II」の教材を毎回作成し配布した。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		毎回の講義内容が理解できるように, わかりやすい説明をする。また, 講義資料をブラッシュアップし, 理解しやすいものにする。					
今年度の進捗状況		応用線形代数学においては, 前年度作成の資料を大幅に見直し, 図表の追加および説明の加筆を行った。					
来年度の進捗目標		授業評価アンケートの結果を踏まえ, 改善すべき項目に対処する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
A Study on 3D Face Similarity by Point Cloud Based Metric for Japanese Terracotta Figurines (Haniwa)		単著	2020年9月	The Journal of the Society for Art and Science, 19(3)		X. Lu, C. Li, T. Kinoshita, A. Kimura	pp.25-39
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
複数断面の解析に基づく縄文土器の紋様抽出法		共同	2020年11月	芸術科学会, NICOGRAPH 2020(関西大学)		◎早坂啓太, 木下 勉, 王 澤鵬, 今野 晃市	
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		①研究成果を学術論文, 口頭発表などの形で発表する。 ②外部資金等を獲得し, 研究環境を整備する。 ③学外の研究者と共同研究を実施する。					
今年度の進捗状況		①1本の査読付き学術論文が採択された。 ②科研費の申請が未実施であり, 次年度は申請をする。 ③岩手大学との共同研究を実施している。					
来年度の進捗目標		①研究成果を学術論文, 口頭発表などの形で発表する。 ②研究室の運営に備え, 外部資金獲得を目指す。 ③学外の研究者との共同研究により, 研究環境をよりよくする。					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2020年10月		日本図学会 会員	
2020年10月		芸術科学会 芸術科学会論文誌 論文委員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
シラバス・時間割委員			

2020年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	准教授	氏名	木村 敏幸	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
「確率統計学演習」演習問題資料		2020年9月～2021年1月		オンデマンド授業に対応するため、演習問題を後半計6回分作成し、授業開始時にmanabaを通じて配布した。また、演習問題の解答を後半計6回分作成するとともに、その説明動画を計14回分作成し、次回授業開始時にmanabaを通じて配布した。			
「情報理論演習」演習問題資料		2020年5月～2020年8月		オンタイム授業に対応するため、演習問題、解答、課題及びその解答を計13回分作成し、演習問題と課題は授業開始時に、解答は授業の後半に、課題の解答は次回授業開始時にmanabaを通じて配布した。			
「基礎物理演習」演習問題資料		2020年5月～2020年8月		オンタイム授業に対応するため、演習問題、解答、小テスト及びその解答を計5回分作成し、演習問題は授業開始時に、解答は授業の後半に、小テストは授業終了後に、小テストの解答は次回授業開始時にmanabaを通じて配布した。			
「情報数理演習 I (線形代数学)」演習問題資料		2020年5月～2020年8月		オンデマンド授業に対応するため、演習問題、解答、解答の説明動画、課題を計14回分作成し、授業開始時にmanabaを通じて配布した。また、課題解答とその説明動画も計14回分作成し、次回授業開始時にmanabaを通じて配布した。			
「研究・発表の技法」講義スライド		2020年5月～2020年8月		組版ソフトウェア(TeX Live)やプレゼンテーションソフト(Microsoft PowerPoint)を用いて発表資料(レジュメ、スライド、ポスター)をどのようにして作成するかについて解説したスライドを計15回分作成し、manabaを通じて配布した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>●学生が授業内容を容易に理解できるように、授業を分かりやすく説明する。</li> <li>●学生が自信を持って発表できるようにジュニアセミナー、卒業研究及び修士研究の指導をする。</li> <li>●学生に研究開発の重要性を理解させ、学生の大学院進学率を向上させる。</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>●卒業研究指導学生7名のうち2名が進学を希望し、本学大学院に進学した。</li> <li>●就職を希望している修士学生2名及び卒業研究指導学生5名全員が就職内定を獲得した。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>●「分かりやすい」という評価がより多く得られるように授業内容を工夫する。</li> <li>●就職を希望している修士学生及び卒業研究指導学生全員が就職内定を獲得できるように指導をする。</li> <li>●できるだけ多くの卒業研究指導学生が進学するように研究開発の重要性を理解させる。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
個人用三次元音場再生システム用収録装置の主観評価		共同	2021年3月	電子情報通信学会応用音響研究会(オンライン), EA2020-81		羽生史, 木村敏幸	pp.128-133

Multiple Vertical Panningを用いた立体音響システムにおける奥行き表現の比較検討	単独	2021年3月	日本音響学会春季研究発表会(オンライン), 2-11-8	木村敏幸	pp.1309-1312
垂直パニングの有効距離の音像位置による影響	共同	2021年3月	令和3年東北地区若手研究者研究発表会(書面発表), R3-A-15	増田光新, 木村敏幸	pp.29-30
音響信号に対応したフットスイッチ式自動伴奏システムの開発及び評価	共同	2021年3月	電子情報通信学会応用音響研究会(オンライン), EA2020-80	安部綾太, 木村敏幸	pp.122-127
音響信号のループ再生条件に関する研究	共同	2020年11月	第3回東北地区音響学研究会(オンライン), 3-20	安部綾太, 木村敏幸	pp.1-4
Multiple Vertical Panningを用いた立体音響システムにおけるスピーカ配置の臨場感への影響	単独	2020年9月	日本音響学会秋季研究発表会(オンライン)	木村敏幸	pp.4

#### H. 翻訳(学術書や原典等)

#### I. 特許

現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>●実験装置を構築し, 実験を実施する.</li> <li>●競争的資金を獲得する.</li> <li>●研究成果を外部に発表する.</li> </ul>
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>●個人研究費や学内予算により物品を調達し, 実験装置を構築することができた.</li> <li>●研究成果を外部に発表することができた.</li> </ul>
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>●引き続き実験装置を構築し, 研究成果を得るための実験を実施する.</li> <li>●指導学生の研究活動を支援するため, 競争的資金を申請する.</li> <li>●引き続き実験によって得られた成果を外部に発表する.</li> </ul>

#### III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
----------	----------	------------------------	----

#### IV 学会等及び社会における主な活動

2019年4月～2021年3月	日本音響学会東北支部 庶務幹事
2018年6月～	電子情報通信学会基礎・境界ソサイエティ英文論文誌編集委員会 会員
2018年6月～	電子情報通信学会基礎・境界ソサイエティ英文論文誌編集委員会 編集委員
2018年6月～	電子情報通信学会基礎・境界ソサイエティ和文論文誌編集委員会 会員
2018年6月～	電子情報通信学会基礎・境界ソサイエティ和文論文誌編集委員会 編集委員
2017年4月～	日本音響学会東北支部 会員
2012年5月～	電子情報通信学会ソサイエティ論文誌編集委員会 会員
2012年5月～	電子情報通信学会ソサイエティ論文誌編集委員会 査読委員
2007年12月～	日本音響学会編集委員会 会員
2007年12月～	日本音響学会編集委員会 査読委員

#### V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

#### VI 学内における管理運営に関する諸活動

2020年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	准教授	氏名	物部 寛太郎	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
Zoomの導入		2020年～		担当している授業全てでZoomを導入することで、遠隔授業を実施した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。					
今年度の進捗状況		授業評価アンケートで、ある程度の評価は得られた。					
来年度の進捗目標		学生とのコミュニケーションをさらに増やす。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Assisting Regional Disaster Prevention through Open Data Visualization		単著	2020年	Asia Pacific Journal of Advanced Business and Social Studies, YEAR 2020, VOLUME 06, ISSUE 01, Asia Pacific Journal of Advanced Business and Social Studies, YEAR 2020, VOLUME 06, ISSUE 01		不明	pp.不明
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		データの空間的可視化。 最近の研究成果を発表する。					
今年度の進捗状況		自治体のオープンデータの空間的可視化をある程度実現することができた。					
来年度の進捗目標		最近の研究成果を論文誌に投稿する。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
2018年4月～2020年6月				日本感性工学会会員 会員			
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標							

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>	
1.グループ主任 2.教務委員 3.地域共生推進機構 4.中高大一貫教育事業ICT教育専門委員会 5.学科無償貸与PC担当 6.学科アクティブラーニングスタジオ世話役 7.大学院設置WG委員会 8.学科manaba担当 9.情報処理センター主任 10.遠隔授業サポート委員	

2020年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	講師	氏名	深瀬 道晴	大学院の授業 担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
教育支援システムのmanaba folioを活用し、学生がいつでもどこでも課題等に取り組める仕組みを実施している。		2020年4月～		教育支援システムのmanaba folio上に授業の講義資料と課題・レポートを毎回アップロードし、学生が授業時間外においていつでもどこでも予復習や課題に取り組み、どこからでもレポートを提出できるように工夫している。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
「プログラミング基礎」の講義資料「プログラミング応用」の講義資料		2020年4月～		自身が今年度担当する講義について、独自の講義資料を作成した。それぞれについて、教科書・参考文献と整合性が適切に取れていること、一方で、教科書・参考文献の内容をより分かりやすくなるように学習の流れを整形し、必要な説明を加えながら、教科書・参考文献にはない発展的な内容・課題を取り入れた。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		授業に最先端の話題を常に取り入れ、また、より視覚や直感に訴える内容にするなどの工夫により、学生の学術的関心を高める。					
今年度の進捗状況		上記目標①については、先端テーマに関する文献やニュースなどを逐一追いながら、授業資料に組み入れた。					
来年度の進捗目標		上記目標②については、数理系の講義で学んだ内容を直接的に応用できるテキスト作成をし、学生が数理的思考が重要である理由を十分に把握することを目指す。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数	
<b>A. 学術書</b>							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		情報セキュリティ領域の研究者との共同研究を進める。 次世代暗号の安全性評価に関連する基礎理論研究を進める。					
今年度の進捗状況		上記目標①については、情報セキュリティ技術の要素技術である格子暗号に関連するアルゴリズムの高速化に関する論文を執筆中であり、研究が進捗した。					
来年度の進捗目標		上記目標②については、次世代暗号の候補である格子暗号に関連する計算困難問題に関する基礎理論研究に取り組み、安全性評価の精度を高めることを目指す。成果については、まずは研究会で報告し、その後論文作成に取り組む。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要			



科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(C)	2019年度～2023年度	個別	格子基底簡約アルゴリズムの改良とRSA暗号安全性解析への応用
科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(C)	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	耐タンパー性を持つ論理演算型軽量ブロック暗号の設計原理の研究
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
1.オープンキャンパス委員 2.産学連携推進センター委員 3.教務委員 4.工学基礎教育センター運営委員			

2020年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	講師	氏名	森島 佑	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		学生が気兼ねなく質問・コメントできるような授業運営を目指し、仕組みを整備する。					
今年度の進捗状況		LMSを用いて、全授業資料の公開、質問対応などを電子的に実施できるようにした。授業内容に限らず、教室の室温や、照明等の軽微な内容でも積極的にコメントを発信してもらっており、一定の効果があつたと思われる。					
来年度の進捗目標		実施初年度の授業について、授業評価やコメント等で得られたフィードバックを元に、内容の拡充、クオリティの向上を目指す。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
データサイエンス系学生の電子系実習の実態調査と教材作製に関する検討		共同	2020年8月	2020年度電気関係学会東北支部連合大会(不明)		◎鈴木順, 森島佑, 淡野照義, 志子田有光	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		(1) 環境中の電波を電力源とする通信システムの設計についての研究を進める。 (2) データサイエンス系専攻分野に所属する学生を対象としたIoT学習環境に関する共同研究を進める。					
今年度の進捗状況		上記(1)については、研究会への報告、学会への投稿を予定している。(2)については、関連文献の調査、既存教材の整理および実験を実施した。					
来年度の進捗目標		上記(1)の結果を論文にまとめ、(2)は追加の実験を行い、論文としてまとめる予定である。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	

科学研究費補助金 基盤研究(C)	2019年度～	共同(研究分担者)	近年、情報工学を専門とする大学や高等専門学校の学科では、ICT技術の急激な進歩に伴い新しい知識と技術を修得させるため、情報系専門科目の履修時間を以前に増して充実させる必要が生じているが、特に組み込み開発やIoT分野で重要となる物理学や電子回路学に関連する知識を実体験で確認する実験時間を充分確保することが難しい。そこで本研究では、電子工学系カリキュラム用に開発した教材と、その評価システムを発展させ、グループワークで課外実験を行う教材と環境の開発と、集団活動に心理的抵抗を示す学生へ配慮した遠隔実験環境の開発について、実践的導入と評価を行う。
------------------	---------	-----------	---

#### IV 学会等及び社会における主な活動

2020年6月～2020年11月	International Symposium on Information Theory and its Applications 2020 (ISITA2020) Symposium Committee 委員 (出版)
2019年4月～2020年12月	IEEE Information Theory Society Japan Chapter Treasurer 委員 (会計)
2016年6月～2020年5月	電子情報通信学会 衛星通信研究専門委員会 委員
2013年～	電子情報通信学会 会員
2013年～	IEEE 会員

#### V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

#### VI 学内における管理運営に関する諸活動

<ul style="list-style-type: none"> <li>1. 入試対応委員会</li> <li>2. 図書委員会</li> <li>3. オープンキャンパス委員会</li> <li>4. アドミッションズ・オフィス委員会</li> <li>5. 多賀城キャンパス情報処理センター所員</li> </ul>
---

## 教員業務・活動報告

# 教 養 学 部

人 間 科 学 科

言 語 文 化 学 科

情 報 科 学 科

地 域 構 想 学 科

2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	片瀬 一男	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
社会学・メディアリテラシー等のオンライン授業		2020年					
2. 作成した教科書、教材、参考書							
社会学・メディアリテラシー等のオンライン授業のためのビデオ		2020年					
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
社会調査協会「社会調査士」の設定		2020年					
現在の課題・目標		オンライン授業への対応(アクティブラーニングの導入・双方向授業への対応ほか)					
今年度の進捗状況		オンライン授業への教材作成に時間が撮られ、十分な対応ができなかった					
来年度の進捗目標		オンライン授業への対応(アクティブラーニングの導入・双方向授業への対応ほか)					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
『健康格差の社会学』	共編者(共編著者)	2021年1月	ミネルヴァ書房	片瀬 一男 神林 博史 坪谷 透	pp.1-295		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
明治30年代・弘前女学校卒論のテキストマイニング	単著	2021年3月	宮城学院女子大学, キリスト教文化研究所研究年報: 民族と宗教, 54	片瀬 一男	pp.49-68		
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
機能分化社会における性愛の消滅?	単著	2021年3月	東北学院大学教養学部論集, 185	未記入	pp.1-43		
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
AO入試再訪: 10年の後に	単著	2021年3月	東北学院大学教育研究所報告集, 20	未記入	pp.5-34		
少女たちのリスペクタビリティー—明治30年代・弘前女学校卒論のテキスト・マイニング—	単著	2021年2月	東北の女子ミッション教育の社会史	片瀬 一男	pp.1-12		
統制される「不良少女」・脱連結された統制—明治後期における弘前女学校の事例—	単著	2021年2月	東北の女子ミッション教育の社会史	片瀬 一男	pp.1-12		
津軽地方における女子ミッション教育の受容—草創期の弘前女学校を中心に—	単著	2021年2月	東北の女子ミッション教育の社会史	片瀬 一男	pp.1-12		
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		科研費研究を見据えた研究を起動に乗せる					

今年度の進捗状況	コロナ禍のためもあり進捗せず		
来年度の進捗目標	科研費研究を見据えた研究を起動に乗せる		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2019年10月～	日本教育社会学会評議員 会員		
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	加藤 健二	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
統計授業(心理学統計法)における情報処理センター及び無料統計アプリHADを用いた実習的活動の活用		2020年4月1日～		心理統計に関する専門科目において、エクセル及び統計パッケージを用いた自作の例題実習を取り入れて、理解定着を図っている。			
心理学専門科目のオンデマンド授業における、動画を含めた映像資料、プリント資料、実験実施を活用した動機づけ・理解促進の工夫		2020年4月1日～		オンデマンド授業として、毎時間の授業時に、動画を含めた映像資料とプリント資料を提供し動機づけを高めている。一部授業(知覚・認知心理学)では、学生各自に心理実験を実施させ、その結果を回収してグラフ化してフィードバックしている。			
教養科目におけるクラウド型学習支援システムmanaba course、及びアプリケーションResponを活用したアクティブラーニング型授業の実施		2020年4月1日～		担当している講義授業それぞれにおいて、manaba courseの諸機能を使い、授業進行に伴う情報を提供し、また提出課題の確認ができるようにしている。また、毎授業の最後に振り返りコメントを提出させて、それを一覧にして提供し、学生自らの学習状況について自覚させるよう工夫している。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
学長教育改革研究助成金による研究成果を、学内発表会にて発表。		2021年3月26日		2019年度学長教育改革研究助成金による研究(研究代表者:加藤健二)成果を、学内報告会において発表した。タイトル「学習支援および授業支援を通じたライティング及びプレゼンテーションループリックの活用・評価・改善」(登壇発表者:遠海友紀助教)			
東北学院大学教育研究所報告集に、遠隔授業実施に関する実践総括を報告・掲載した。		2021年3月					
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
遠隔授業に関する教員アンケートの実施と結果公開		2020年8月25日～2020年9月8日		前期の遠隔授業実施に関して教員向けにアンケートを実施した。回答数420(専任240、非常勤180)であった。その結果の一部は、FD研修会およびmanabaコースコンテンツにて公開した。			
各種学内FD研修会に参加		2020年4月1日～		<ul style="list-style-type: none"> <li>4月14日 新任教員研修会にて「今年度前期の授業運営について」のタイトルで話した。</li> <li>9月16日 新任教員座談会にて司会を務めた。</li> <li>9月16日 学内FD研修会にて「後期授業に向けて」と題して、教員向けアンケートの結果概要とあわせ、遠隔授業、特にハイブリッド授業実施について話した。</li> <li>10月17日～ SD研修会に参加。オンラインによる「TG Grand Vision 150 第II期中期計画概要及び実行計画作成説明会」。</li> <li>12月10日 FD研修会「コロナ禍での授業運営について」に参加。</li> </ul>			
遠隔授業実施のためのサポートチームを組織し、学生・教員ともに支援している。		2020年3月～					
<b>現在の課題・目標</b>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 授業の中に極力アクティブ・ラーニングの要素を取り入れる。</li> <li>2. 評価方法を見直し、試験に頼らない方法を試みる。</li> <li>3. 授業内容と授業資料を、新しい内容に、そして学生のレベルにあったものに改訂する。</li> </ol>					
<b>今年度の進捗状況</b>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 授業にmanaba courseを活用できているところは前進である。しかし、授業時間外の学習活動促進という面が不十分である。</li> <li>2. 評価において毎授業での学習活動(振り返り問題やコメントの評価)の割合を高めたことは一歩前進であった。しかし、未だに形成的評価の意味合いを生かしきれていない。特にオンデマンド授業における評価方法について工夫できていない。</li> <li>3. オンデマンド授業のためのビデオ資料作成により、かなり内容の見直しが進んだ。</li> </ol>					
<b>来年度の進捗目標</b>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. できれば反転授業的学習を試みたい。</li> <li>2. オンデマンド授業における評価方法を確立したい。</li> <li>3. 評価にループリックを導入し、授業目標に対応し、形成的評価要素をより強化した方法を模索する。</li> <li>3. さらに授業内容改訂を進める。</li> </ol>					
<b>II 研究活動</b>							

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
遠隔授業実施を通して見えたこと	単著	2021年3月	東北学院大学教育研究所報告集, 11	加藤健二	pp.13-26
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	1.食認知, 食行動に関する共同研究2件, 空間認知に関する共同研究1件のそれぞれを充実させ, 実験実施まで進め, 少なくとも1件は学会発表まで達成する。 2.研究装置(VR)を更新し, 空間認知実験に使用できるようにする。 3.年間に, 複数の第一著者論文投稿, 複数の学会発表を必ず行う。				
今年度の進捗状況	1唾液中オキシトシン濃度測定に関する実験は停滞のままである。 2.予定していた邦文論文2件の執筆は終わっていない。 3.ラーニングコモンズに関わる研究が加わった。				
来年度の進捗目標	1.食認知, 食行動に関する共同研究1件, 空間認知に関する共同研究1件のそれぞれを充実させ, 実験実施まで進め, 学会発表までは達成したい。 2.引き続き, 第一著者年2論文, 学会発表2回を継続する。 3.授業評価に関わる問題について, 研究テーマの一つにできるよう情報収集を続ける。				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要		
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2017年4月～2021年3月		日本認知心理学会 編集委員			
2001年4月～		日本イメージ心理学会 会員			
1986年4月～		日本教育心理学会 会員			
1985年4月～		日本心理学会 会員			
1979年4月～		東北心理学会 会員			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動					
学務部長 教学DX準備委員会委員長 教学組織改編推進室副室長					



2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	神林 博史	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
manabaおよびresponを用いた学生が能動的に参加できる授業運営		2020年4月1日～		<ul style="list-style-type: none"> <li>・講義系科目において、学生が能動的に授業に参加できるようResponを積極的に利用した。</li> <li>・授業で使用したスライドおよび資料をmanabaで公開し、授業後の学修を効率的に行えるようにした。</li> <li>・学習内容の確実な定着のための補助となるよう、一部担当科目でmanabaを用いた小テストを実施した。</li> <li>・以上3点について、オンライン授業でも対応できるよう工夫した。</li> </ul>			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
仙台南高校「課題研究」の指導助言		2020年10月7日～2021年3月19日		仙台南高校「課題研究」(総合的な探求の時間「公孫樹プログラム」)の指導助言(2020年10月7日、2021年1月20日、2021年3月19日の3回)			
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・教える側の一方通行にならない講義系科目の運営</li> <li>・授業時間以外での学生の学びの促進(講義系科目)</li> <li>・オンライン授業への対応</li> </ul>					
今年度の進捗状況		manabaおよびその他のオンラインシステムを積極的に利用し、上記課題に取り組んだ。授業時の学生の反応および授業評価アンケートの結果から概ねよい成果が得られたと考えている。					
来年度の進捗目標		<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 今年度の成果と反省点をふまえ、学生が能動的に参加できる授業運営を工夫する。</li> <li>(2) 学生の能力を多面的かつ正確に把握するための評価方法を検討する。</li> <li>(3) 学生の能力を多面的かつ正確に把握するための授業課題を作成する。</li> <li>(4) オンライン授業、ハイブリット授業に適切に対応する。</li> </ol>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
Images of social stratification and the "Gap Society"『Images of social stratification and the "Gap Society"』	共著	2021年3月	Routledge, Routledge, Routledge	Carola Hommerich, Naoki Sudo, and Toru Kikkawa (eds.) Social Change in Japan, 1989-2019: Social Status, Social Consciousness, Attitudes, and Values.	pp.19-35		
Images of Social Stratification and the "Gap Society"『Social Change in Japan, 1989-2019: Social Status, Social Consciousness, Attitudes and Values』	分担執筆	2020年10月	Routledge, 1	Hiroshi Kanbayashi	pp.19-35		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
2020年代の統計リテラシーを考える	単著	2020年9月	青土社, 現代思想, 48(12)	神林博史	pp.22-30		
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							

H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	(1) 現代日本における格差意識の実態とそのメカニズムの解明 (2) 現代日本における社会階層と健康格差の実態とそのメカニズムの解明		
今年度の進捗状況	(1) について、コロナ禍での不平等化の進展と意識の変化を把握するため、所属する科研費プロジェクトで4波からなるオンラインパネル調査を行った。第1波調査の結果はプレスリリースとして公表した(2020年9月、東北学院大学ウェブサイト)。 (2) について、この課題に関連する学術書の刊行に編者として関わり、出版に向けた準備を行った(2021年度にミネルヴァ書房より刊行予定)。		
来年度の進捗目標	(1) 格差意識に関する論文の執筆および研究報告 (2) 現代日本における社会階層と健康格差の実態とそのメカニズムの解明に関する研究の推進(論文執筆)		
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 科研費:基盤A	2019年度～2024年度	共同(研究分担者)	「国際調査を通じた報酬格差の受容・正当化メカニズムの比較社会学研究」(研究代表:有田伸)
科学研究費補助金 科研費:基盤A	2018年度～2022年度	共同(研究分担者)	「階層意識全国調査の時系列データの収集と標本抽出WEB調査法の確立」(研究代表:吉川徹)
IV 学会等及び社会における主な活動			
2019年7月～2021年7月	東北社会学会 庶務理事		
2019年4月～2021年3月	数理社会学会 編集理事		
2010年12月～	American Sociological Association 会員		
2005年4月～	International Sociological Association 会員		
1998年4月～	日本社会学会 会員		
1998年4月～	数理社会学会 会員		
1995年7月～	東北社会学会 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
教育研究所所長			

2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	黒須 憲	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
<b>教育実践上の主な業績</b>		<b>年月日(西暦)</b>		<b>概要</b>			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
研究合宿の開催		2020年8月1日～		年1～2回, 3年生4年生それぞれに日帰り及び一泊の合宿を行い, 課題の検討と意見の交換、懇親を行っている。			
発表会の実施		2020年4月1日～		構想発表(対面), 中間発表(対面)と総合研究(zoom)の作成のための公開発表会を前期1回, 後期1回実施した。その他ゼミでは調査結果や小論文を作成し発表、質疑応答、コメントを行った。前期zoomミーティング、後期対面			
WEBサイトを利用した情報の提供		2020年4月1日～		個人blog, Facebook, Messenger, ラインを利用して, 研究内容の公表や活動報告, 連絡事項等を行った。ゼミ専用のページやグループを作り活用した。manabaを利用しレポートの提出コメントを行った。Googleドライブに動画をヤスライドをUPLし視聴してもらった。			
視覚教材によるイメージの確認と定着		2020年4月1日～		体育学基礎論A2回、B15回、スポーツ文化論15回、スポーツ実技15回の授業毎にリモートオンデマンド用のテーマに関する、ビデオ、スライドを作成し提示している。確認の意味で内容の要約と意見をまとめさせ、提出させコメントを返した。			
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2020年4月1日～		毎回の授業の冒頭で前回の復習とその回のテーマを説明し最後にまとめを行い次回の予告をする。レポートを毎回提出させ、コメントを返した			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
スポーツ実技(弓道)のオンデマンド用動画を作成した。15回		2020年4月1日～		弓道概論から歴史、技術、道具に関する内容。GoogleドライブにUPLしmanabaを通じて視聴してもらった。			
(スポーツ文化論)授業や講習会で使用するスライド教材を動画などを追加し更新した。		2020年4月1日～		パワーポイント用「スポーツのグローバル化」「スポーツ文化論武道」スライドを更新した。スポーツ文化論15回のシラバスに合わせて、オンデマンド用の動画を作成した。			
体育学基礎論A B 授業で使用する教材を追加更新した		2020年4月1日～		パワーポイント用「体育学概論」113枚、「運動生活場の整備」「肥満・食事・運動」「トレーニング」のスライドを更新した。A 武道文化論 B15回ハイブリット授業をおこなった。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
雑誌秘伝の取材をうけた		2021年3月17日		手内、道具の管理、秘伝などについて解説をおこなった			
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
本学スケート部の指導を行った		2020年4月1日～		4年連続でインカレに出場することができた			
梨割り弓道場において外国人弓道家を指導した。乳ジランド、アメリカ		2020年4月1日～		宿泊し技術指導を行った。			
本学応援団の指導した。		2020年4月1日		日本の伝統的な応援活動について本学の伝統を守るとともに技術の伝承を行った。			
本学スクーバ・ダイビング部員を指導した。		2020年4月1日～		学科と海洋トレーニングを指導しアドバンスの技術認定証を認定した。			
伊達印西派研修会の講師を務めた。		2020年4月1日～		週末を利用し、的的に遠刈田梨割弓道場, 技術練習, 腰矢数矢稽古年30回程度			
ヨーロッパ日置流弓道講習会の講師を務めた		2020年4月1日～		今年はコロナ渦により、メール、ライン、メッセージ、Facebook、blogなどによる質疑応答を行ったPoland、Austria、Finland、Germany、などから質問がきた。			
紅葉会研修会の講師を務めた		2020年4月1日～		年20回、毎回数名の参加者で、技術研修、腰矢組弓、目録解説を行った			
<b>現在の課題・目標</b>		授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切に、学生からのさまざまな相談に応じる。弓道文化論、目録に関する資料をパワーポイントにまとめ、執筆する。地元文化を大切に発信すると共に海外に貴重な日本文化を正しく紹介する。					

今年度の進捗状況	学生と密を避け、二度合宿を行い親しくコミュニケーションを図った。 スポーツ文化論15回、体育学基礎論A2回、B15回、スポーツ実技(弓道)15回のリモート授業、オンデマンド用動画とスライドを作成した。「伊達印西派弓術研究会の」紹介パンフレットを作成した。日置流弓目録の欧州での講義をまとめた書籍がイタリアで発行された 全体で3/4程度の達成度であった。
来年度の進捗目標	合宿を年二回とし、学会発表を行う。 目録の全体のスライドをまとめる、本として出版する。武道文化論、体育学基礎論の資料をスライド化する。動画の作成

## II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
『伝書を読む 日置流印西派秘歌01』	単著	2020年12月	日本騎射協会、うまゆみ(No.2), 日本騎射協会、うまゆみ(No.2)	未記入	pp.14-15
『「和弓の歴史」概論 日本の弓矢と弓術の歴史の変遷を紐解く』	単著	2020年12月	株式会社BABジャパン、月刊秘伝(通巻397号), 株式会社BAB ジャパン、月刊秘伝(通巻397号)	未記入	pp.16-19
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	流派弓術に関する古文書資料の入手、印西派目録と仙台藩雪荷派の既存資料の解読と内容の把握。 弓射神事、流鏑馬、奉射に関する資料収集				
今年度の進捗状況	秘歌の解説についてWEB、雑誌に発表した。				
来年度の進捗目標	騎射神事・歩射神事に関して論文としてまとめた。				

## III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
2019年8月～		日本騎射協会 理事 委員	
1980年8月～		ヨーロッパ弓道指導講師 昭和56,60,平成 3,7,8,10,13,15,16.17.18.19.20.21,22,23,24,24,25,26,27,28,29,30,令和元年、2 委員	

## V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
ドイツ弓道連盟 ゴールドピン賞受賞	ドイツ	2020年12月～	長年のドイツにおける弓道指導の功績を認められ、ドイツ弓道連盟より表彰された。
仙台青葉祭り	仙台市街	2018年5月～	腰矢組弓演武 コロナ渦により中止
スクーバダイビングインストラクター	山形県由良海岸、セブ島、阿嘉島、パラオ、女川	2015年4月～	部員を対象射OWDライセンス講習、レスキュー、CPR等の講習とトレーニングを行った。
一ノ蔵弓道大会	石巻弓道場	2014年10月～	腰矢組弓の演武を行った。コロナ渦により中止

<p>日本文化の海外普及のため1979年よりほぼ毎年夏期及び春期にドイツ、イタリアより招聘され、弓道セミナーの講師を務めている。現在ヨーロッパには数百名の生徒がいる。語学や異文化理解能力が必要である。</p>	<p>ドイツ、イタリア、オーストリア、ハンガリー、スロベニア、フィンランド、ノルウェー、デンマーク</p>	<p>1979年4月～</p>	<p>ドイツ弓道連盟公認トレーナー イタリア弓道連盟公認指導者</p>
<p><b>現在の課題・目標</b></p>	<p>現代の競技弓道では無く、伝統的な射術や儀式について調査し明らかにする。それを実際に再現し、保存することを目的とする。また、伝統的な日本の運動文化を正しく海外に伝えることを目的とする。</p>		
<p><b>今年度の進捗状況</b></p>	<p>新たな仙台藩の印西派弓術伝書を入手した。 ヨーロッパの指導者に的についてと射法訓の講義を行った 新たな国として、デンマークに伝えた。 伊達印西メンバーに伝統射術腰矢組弓の技術を伝えた</p>		
<p><b>来年度の進捗目標</b></p>	<p>伊達藩印西派の子孫と会うことができ、家業の復活を協力する。伊達藩弓組の演武を行う。 流鏑馬を行う。 新たな資料の入手と内容の解析。目録の残り部分の解説、メンバーの増大、技術の固定化</p>		
<p><b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b></p>			
<p>AO委員会</p>			

2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	小林 裕	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進(2)		2020年4月1日～2021年1月31日		授業終了時に小レポートおよび質問・感想などを書いて提出させ、翌週の授業で結果をまとめて回答・報告した。			
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進(1)		2020年4月1日～2021年1月31日		毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概略を必ず説明し、授業終了後にはその回のまとめを行った。また、毎回プリント用資料を配布し、パワーポイント動画やビデオなどを使って視覚的に教材を提示した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。 ②すべての授業で、学生の評価を高める。					
今年度の進捗状況		上記目標①については、オフィスアワーを設けて学生に周知したが、オフィスアワーの利用者は必ずしも多くないので、相談等の態勢についてはまだ十分進捗しているとは言えない。②については、教科書の使用、資料配布の方法・内容の改善を行ったが、授業評価アンケート等では必ずしも十分な評価は得られなかった。					
来年度の進捗目標		上記目標①については、オフィスアワーの周知の方法、他のコミュニケーション手段についての検討を行う。②については、資料配布の方法・内容、パワーポイントスライドの改善を引き続き行う。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
学会賞受賞セッション		単独	2020年10月	経営行動科学学会第23回年次大会(不明)		不明	
企業のワーク・ライフ・バランス施策と女性従業員の定着・昇進の関係:3波交差遅れ 効果モデルに基づく分析		単独	2020年10月	経営行動科学学会第23回年次大会発表論文集(不明)		不明	pp.15-19
H. 翻訳(学術書や原典等)							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		①人的資源管理施策が企業業績に及ぼす過程についての実証研究を行う。 ②人的資源管理施策が企業業績に及ぼす過程についての理論的研究を進展させる。					
今年度の進捗状況		①については、科研費を用いてデータ収集と分析を行い、結果を学会で発表した。②については、文献レビューを行い、データベースに追加したが、まだ十分とは言えない。					
来年度の進捗目標		②については、さらにデータ分析と結果の整理を行い、学会および論文で発表する。③については、文献レビューを行い、データベースを充実させる作業を継続する。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 日本学術振興会科学研究費助成事業(科学研究費補助金)(学術研究助成基金助成金) 基盤(C)	2017年度～2019年度	個別	テーマ「人的資源管理と企業業績の循環的因果プロセス-3波交差遅れ分析による実証-
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2020年4月～		経営行動科学学会理事・「組織行動部門」研究部会長・「経営行動科学」編集委員 会員	
2003年6月～		組織学会会員 会員	
1997年11月～		経営行動科学学会会員 会員	
1981年2月～		日本心理学会会員 会員	
1976年4月～		東北心理学会会員 会員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	坂本 譲	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
授業理解の促進(コメントペーパーの利用)		2015年4月～		毎回の授業終了時に指定した内容に対する小レポート及び質問・感想を書かせ提出させることで、授業の要点を受講者自身に確認させた。			
授業内容理解の促進(プレゼンテーションソフトの利用と資料配付)		2015年4月～		授業内容をプレゼンテーションソフトで提示すると共に同様のものを資料として配付し、各自復習できるように配慮した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		講義内容の理解と学生の考える力を向上させうる効果的な方法についての検討。					
今年度の進捗状況		コメントペーパーを利用した授業理解の促進に関する試行を行っている。					
来年度の進捗目標		現状把握と方法論の検討。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
自然災害に起因する生活リズムの変化が子どものストレスや免疫応答に及ぼす長期影響		共同	2020年10月	第79回日本公衆衛生学会総会(京都(オンライン開催))		坂本 譲, 岡崎勘造, 植木章三, 鈴木宏哉	
Effect of long-term treadmill exercise on basophil mediated Th2 immunoregulation in mice		単独	2020年10月	25th European College of Sport Science Congress(Sevilla, ESP (virtual congress))		Sakamoto Y.	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		現在進めている研究課題について成果発表を積極的に行う。					
今年度の進捗状況		現在の研究課題については国内・国際学会において学会発表を行った。					
来年度の進捗目標		現在の研究課題について、特に論文発表を積極的に行っていく。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	
科学研究費補助金 基盤研究(C)		2019年度～2021年度		個別(研究代表者)			
競争的資金等の外部資金による研究 東北大学 加齢医学研究所共同利用・共同研究助成		2019年度～2021年度		個別(研究代表者)		運動によるアレルギー予防効果の検討	



IV 学会等及び社会における主な活動			
2021年2月～		東北体育・スポーツ学会 監査	
2017年4月～		東北体育・スポーツ学会 会員	
2013年6月～		European College of Sport Science (ECSS) 会員	
2012年6月～		日本発育発達学会 会員	
2010年9月～		日本運動免疫学研究会 運営委員	
2009年4月～		日本学校保健学会 会員	
2009年4月～		日本体育学会 会員	
2005年7月～		日本分子生物学会 会員	
2002年9月～		日本運動免疫学研究会 会員	
2001年7月～		日本公衆衛生学会 会員	
2001年2月～		International Society of Exercise and Immunology (ISEI) 会員	
2000年1月～		日本免疫学会 会員	
1997年10月～		日本体力医学会 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
1. (全学)人間対象研究審査委員会 委員 2. (全学)学術研究会 評議委員 3. (学部)学部点検・評価委員会 委員 4. (学部)カリキュラム委員会 委員 5. 学生部副部長 6. 教育研究所 所員			

2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	櫻井 研三	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
サバティカルで授業担当なし		2020年4月1日～2021年3月31日					
2. 作成した教科書、教材、参考書							
三種の心理物理学的測定法でみる精度と確度 ( <a href="http://psyche.mind.tohoku-gakuin.ac.jp/psy3/psycho/ja/index.html">http://psyche.mind.tohoku-gakuin.ac.jp/psy3/psycho/ja/index.html</a> )		2020年4月1日～		コロナ禍での遠隔授業に対応できるよう、従来の心理物理学的測定法学習サイトをHTML5に対応させ、スマートフォンやタブレット等の携帯情報端末でも利用できるように調整して、バージョンアップを継続中。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		1) 心理学実験実習A(心理学実験)で使用しているwebアプリ「三種の心理物理学的測定法」のバージョンアップ。					
今年度の進捗状況		1) 当該アプリの日本語版新バージョンを作成中である。					
来年度の進捗目標		1) 当該アプリの最終版(4カ国語版)を完成させ、本学とカナダのヨーク大学で使用を開始する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
『有斐閣現代心理学辞典』	共著	2021年2月	有斐閣	子安増生, 丹野義彦, 箱田裕司(監修)	pp.※制限文字数100文字を超えたので『概要』へ移行。		
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		1) 円図形変形錯視「ポリゴン化効果」の生起機序に関する研究を継続して、研究成果を論文化する。 2) 自己運動知覚を含む多感覚統合の共同プロジェクトで、海外の研究者の招聘を企画する。 3) 有斐閣の「有斐閣現代心理学辞典」について、校正と出版まで進める。 4) 誠信書房の「感覚・知覚心理学ハンドブック新版」の担当分を完成させる。 5) サイエンス社から出版予定の「ライブラリ 心理学の杜」の担当分を完成させる。					
今年度の進捗状況		1) コロナ禍で円図形変形錯視「ポリゴン化効果」の生起機序に関する実験の中断を余儀なくされ、科研費の研究期間を延長した。 2) 東北大学電気通信研究所の共同プロジェクト研究「3次元空間内の自己運動知覚と多感覚統合」が新規に採択され、オンライン研究会を3月に開催した。 3) 有斐閣から「有斐閣現代心理学辞典」が2021年2月に出版された。 4) 誠信書房から出版予定の「感覚・知覚心理学ハンドブック新版」の担当分原稿を全て完成させ、編集者チェック済みの段階まで進んだ。 5) サイエンス社から出版予定の「ライブラリ 心理学の杜」の担当分を執筆中。					

来年度の進捗目標	1) 円図形変形錯視「ポリゴン化効果」の生起機序に関する研究を継続して、研究成果を論文化する。 2) 自己運動知覚を含む多感覚統合の共同プロジェクトで、海外の研究者の交流を加速させる。 3) 誠信書房の「感覚・知覚心理学ハンドブック新版」の担当章全体を完成させる。 4) サイエンス社から出版予定の「ライブラリ 心理学の杜」の担当分を完成させる。		
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2017年11月～2020年11月		日本基礎心理学会理事 会員	
2017年3月～		日本心理学会代議員 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	宍戸 隆之	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
オンラインで実施するスポーツ実技授業		2020年5月7日～2020年8月12日		毎時間、zoomを用いてのエクササイズ動画の提示と、その身体活動量を調査するために、心拍数(脈拍)の測定を行って記録させた。授業時間においては、自宅の部屋でできる運動しか実施できないため、課題研究レポートとして、日常の授業以外での運動について記録させることで、身体活動量の確保を目指した。少なくとも1日あたり30分以上の中程度運動が確保されるように成績評価のルーブリックに示し、それと並行して、国際標準化活動調査票(IPAQ)への記述も行うことで、妥当性のあるデータを得ながら、学生の運動の機会を確保した。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
Google Form振り返りカード		2020年5月7日～		2020年度のオンライン授業における学生の授業後の振り返りカードとして、Google Formを活用して授業時間の振り返りと課題の提出を実施した。新型コロナウイルス感染症予防のため、特に、後期からの対面授業においても、教員と学生相互のソーシャルディスタンスを保つために、プリントアウトした配布物を極力減らし、接触する機会を減らした。スマートフォンやPCを授業に持参させ、対面授業であってもオンラインでの課題提出ができる教材を提供している。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		教育の質を高めるオンライン授業の開発					
今年度の進捗状況		zoomを用いた双方向オンライン授業により、授業目標の達成が図られた。					
来年度の進捗目標		オンデマンド授業で使用する質の高い教材開発					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
身体情報の可視化で持久走の授業はどう変わる?『体育科教育3』	分担執筆	2021年3月	大修館書店, 69	宍戸隆之	pp.38-41		
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
とっておき!魅せる!英語授業プラン 思考プロセスを重視する中学校・高校CLILの実践 教科の学習内容を深め、英語力を磨く指導法』とっておき!魅せる!英語授業プラン 思考プロセスを重視する中学校・高校CLILの実践 教科の学習内容を深め、英語力を磨く指導法』	共著	2020年11月	明治図書	柏木賀津子/伊藤由紀子 編著	pp.42-47		
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		ICTを活用した体育の授業実践研究					

今年度の進捗状況	コロナ禍で、学校現場におけるデータ収集が滞っている		
来年度の進捗目標	受託研究を受けている北海道上川郡比布町でのデータ収集		
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2017年度～2021年度	共同(研究分担者)	<p>本研究は、用法基盤モデルに基づく、小学区英語教育と中学校英語教育の指導内容の連携と文法指導を関連付け、その上でCLIL(内容言語統合型学習)の指導を行い、教科内容(理科・体育・環境)が深まる思考場面での英語使用を創り出し、言語運用を行っていく、授業実践を提案するものである。</p> <p>令和1年度は、研究代表者および研究協力者らが、半年に及ぶフィンランド海外教育実習プロジェクトを行い12名の大学院生(現職を含む)と大学生の共同学習においてCLIL授業開発を行い、フィンランドのオーボ・アカデミー大学附属実習校と、ユバスキュラ大学を訪問し、現地の小学校でのCLIL授業を行った。一つ目は、21世紀の環境教育として、SDGsを扱った「サーキュラーエコノミー」の実践、二つ目は、ICTと表現、リズムダンスを創造する体育CLILの実践、三つめは、理科のストロー笛についてピタゴラスの韻律の原理に基づく音階づくりである。授業は全て英語で行い、フィンランドの小学生に考えを述べてもらうアクティブラーニングで行った。フィンランドでは2020年の現象ベースの学習への教育改革を行い、カリキュラムマネジメントによる教科連携の授業を行っている。授業観察を行い、教員らとのラウンドテーブルを持つと共に変化の激しい社会に向けて「学び方を学ぶ」指導について議論を行った。成果は12月14日に成果研究報告会を開催し周知した。「フィンランド海外教育実習－CLIL授業開発」の報告書配布した。研究代表者は、令和1年12月21日(土)日本CLIL教育学会で招聘講演を行い、21世紀型スキルと理科CLILについて講演を行った(早稲田大学)。また、2019年12月8日には、日本経済教育学会より招聘を受け、経済教育におけるCLILの可能性について講演を行った。英語以外の分野でのCLIL指導の広まりを感じており要請に応じている。</p>
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2018年～	日本CLIL教育学会 会員		
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	准教授	氏名	清水 貴裕	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
体験により理解を深める講義(教育コミュニケーション論)		2018年4月～		コミュニケーションの中で生じる現象を実際に体験し、グループ討議をすることで授業内容に関する知識を深め、関心や学習意欲を持ちやすくするよう工夫している。			
学生との間に双方向性を持たせる講義(健康の科学)		2018年4月～		一方的な講義にならないよう、授業内でスマートフォンを用いたリアルタイム・アンケート(Respon)を活用し、講義内容に関する質問や意見を求め、クラス内の意見を共有することによって双方向型の授業を行っている。			
マルチメディア機器の利用		2018年4月～		パワーポイントやビデオ等によって図表や映像を提示することで視覚的にも理解を深めやすくなるよう努めている。			
シャトルカードの利用(教育の相談と指導Ⅰ・Ⅱ, 教育コミュニケーション論, 教職実践演習)		2018年4月～		比較的少人数の授業においては、シャトルカードを用いて、学生の毎回の授業に対する感想・疑問・質問を求め、一人ひとりに対してコメントを返すことで授業に関するコミュニケーションを取っている。学生はシャトルカードに蓄積される自分と教員のコメントをみることで、授業全体の振り返りや理解の深まりにも役立てることができる。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		学生が授業内容に興味・関心が持てるよう工夫する。					
今年度の進捗状況		専門科目「教育コミュニケーション論」において、総合評価は4.6(昨年度4.83)となり若干低下したが、今年度は遠隔授業であったため比較は難しい。					
来年度の進捗目標		遠隔授業であっても教育の質を落とさず、かつ、学生がより興味・関心が持てる授業内容へと見直しを行っていききたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
「催眠とは何か - 催眠の可能性を考える-」被催眠性(尺度)の観点から		単独	2020年11月	日本催眠医学心理学会第66回大会 シンポジウム「催眠とは何か - 催眠の可能性を考える-」(不明)		シンポジスト: 清水貴裕, 鈴木常元, 松木繁, 水谷みゆき 指定討論: 笠井仁 司会: 小泉晋一	
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		これまでの研究知見をまとめた専門書を出版する。					
今年度の進捗状況		これまでの研究知見をまとめ終え、専門書として出版するために研究成果公開促進費に応募した。					

来年度の進捗目標	専門書として出版する。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2019年1月～		日本心理学諸学会連合 心理学検定局常任運営委員 会員	
2018年4月～		日本応用心理学会 機関誌編集委員会委員 会員	
2016年4月～		日本催眠医学心理学会 編集委員会委員 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
1. ハラスメント相談員 2. 教職課程センター所員 3. 東北学院インターネット広報管理運営委員会			

2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	仙田 幸子	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
オンライン対面授業への対応		2020年		少人数授業であるため、教員が受講生一人一人と対話する時間と、全体で討論する時間に分け、細かな指導を踏まえたうえでの全体の学修による効果を上げるよう努力した。			
オンデマンド授業への対応		2020年		教科書または教科書に変わる独自作成の資料を用い、教科書/独自資料の各項目で何を理解するべきかについての指示書、理解した各パーツを全体としてどう統合して理解すればよいのかの指示書を示すことで、学生の学修を促進した。 授業時間中は必ず待機し、学生からの質問にはすぐに対応した。また、授業時間外にも、可能な限り即応した。 学生からの授業改善の要望に応じて、大学の規則の許す範囲で資料の公開時間の工夫などをおこなった。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		日本の現状について、英語を媒体に、世界に向かって情報を発信する					
今年度の進捗状況		英語の単著の本の執筆中、および査読付き国内学術雑誌への投稿の採択決定、国際学会での報告採択決定					
来年度の進捗目標		単著を刊行する。新しい研究の速報を紀要に掲載する。競争的研究資金の獲得に努める。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
2019年～2020年			ERIA project "Health and Long-Term Care Information in Ageing Asia" 委員 委員				
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							



展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	千葉 智則	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
運動処方理論を導入したスポーツ実技(フィットネス)		2020年～		従来のスポーツ技能向上型のスポーツ実技授業ではなく、運動処方理論の理解と実践を中心とした授業を試みてきた。授業は有酸素的および無酸素的トレーニングを組み合わせたスーパーサーキットトレーニングさらに軽スポーツで構成される。毎回、受講者が体重、体脂肪率の測定を実施し、授業で実施した運動の総エネルギー消費量を記録しながら、健康関連指標である身体組成、全身持久力および筋力の向上を目的とする試みである。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>1 学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる</li> <li>2 学生が内容を理解しやすいスライドや資料などの教材作成</li> <li>3 スポーツ実技「フィットネス」のテキストの改訂</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>1 特に、成績に問題がある学生からの相談に応じ対応してきた</li> <li>2 映像等を多く含め、イメージしにくいと考えられる身体の生理的な働きを理解しやすいように試みている</li> <li>3 新しい機器の取り扱いおよび利用方法についてまとめたので進捗していると言える</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>1 今年度同様</li> <li>2 動画等を教材に取り入れ、身体の生理的な働きをより理解できるように試みる</li> <li>3 最新のトレーニング方法についての内容を新たに加える</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>1 高強度間欠的運動時の疲労</li> <li>2 長期的間欠的低酸素暴露が有酸素的能力に及ぼす影響</li> <li>3 間欠的低酸素暴露が筋緩衝能力に及ぼす影響</li> <li>4 高温下運動時の恒常性機構と代謝機構の競合</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>1 論文作成中</li> <li>2 学会発表予定</li> <li>3 文献研究を継続し、レビューをおこなう</li> <li>4 文献研究を継続し、レビューをおこなう</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>1 論文投稿予定</li> <li>2 論文投稿予定</li> <li>3 総説としてまとめる</li> <li>4 総説としてまとめる</li> </ul>					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2016年4月～		日本生理人類学会会員 会員	
2016年4月～		日本体育学会会員 会員	
2016年4月～		日本運動生理学会評議員 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
学生部長			

2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	准教授	氏名	萩原 俊彦	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
本学「授業改善のための学生アンケート」実施委員会が実施する「授業改善のための学生アンケート」		2020年4月1日～		2020年度前期・後期授業アンケート結果(5点満点中): 心理学基礎論A(総合評価)4.5 発達心理学(総合評価)4.3 教育心理学(総合評価)4.2 心理学(総合評価)4.6 心理学実験実習B(総合評価・複数教員担当)4.6 人間科学演習A・B(総合評価)4.6(A), 4.9(B)			
manabaのresponやGoogleフォームを用いた学生コメントの共有と実験結果の即時提示		2020年4月1日～		無料で大小様々のアンケートフォームをつくり、インターネットを介して回答してもらいmanabaのresponやGoogleフォームを用いて、心理学の簡単な実験や意見調査を実施し、授業で直ちに結果をフィードバックした。学生は自分たちが参加した心理学実験や意識調査の結果をすぐ知ることができ、教授事項への関心を高めることができた。			
心理学の研究技法を効果的に習得させるために、自作マニュアルを用いた実習授業を複数教員により体系的に運営している。		2020年4月1日～		2年生向けの心理学に関する実験実習授業において、担当教員の綿密な打ち合わせの上で作成されたマニュアルを用い、心理学各領域の代表的、基本的なデータ収集・分析技法を体験的に学習させている。授業後、学生が提出したレポートについて、予め公開してある基準に従って丁寧に添削し、コメントをつけて返却する。学生には、修正したレポートの提出を義務付けている。全体をシステム化して運営しているのが特徴である。			
授業内容に関連する視聴覚資料の提示		2020年4月1日～		インターネットを活用し、過去の著名な心理学実験や視聴覚資料を提示した。視聴覚資料を用いることで、心理学の知見が過去の研究の蓄積によって構成されていることを実感させるようにした。			
PowerPointアニメーションを活用した解説		2020年4月1日～		初学者にはイメージしにくい心理学の諸概念について、図表に加えアニメーションを用いて解説した。これによって、抽象的な心理学概念を視覚的にイメージしやすくし、理解を助けるようにした。			
学期終了前の講義総覧		2020年4月1日～		試験前にこれまでの講義内容を総覧することで、授業が共通するいくつかの視点によって構成されていることを再確認させ、学習への動機づけを高めるようにした。また、一定の枠を設けたまとめを行うアドバイスにより、学生の要約力を高めるようにした。			
学生コメントの活用		2020年4月1日～		毎講義時に学生の質問や、授業進行に関するコメントを記入させた。記入内容についてのフィードバックを次回講義時に行い、授業規模にかかわらず受講生と講師の双方向コミュニケーションができるよう配慮した。			
ワークの実施(個人・全体)		2020年4月1日～		授業で取り扱った事項について、自分の場合はどうだったか、受講生が自己省察を行うための短時間のワークを講義時間内に実施した。これによって講義内容への受講生の自我関与を高めるようにした。また、ワークの結果を少人数グループやクラス全体で共有することにより、受講生が他者の経験を理解・受容する機会を提供した。なお、プライバシーには最大限配慮し、発言の自由とともに秘匿の自由を保証した。			
初回講義における履修契約		2020年4月1日～		授業の最初に授業計画とともに、講義時間中に受講生が遵守すべきルールを提示した。これによって、受講生が講義時間内に守るべきルールを自覚できるようにした。			
実証的・批判的検討を経た科学的知見の教授と問題解決能力の育成		2020年4月1日～		実証的・批判的検討を経た科学的知見について、基礎的教養から専門的知見までを教授した。これによって、学生が大学入学までに形成してきた既存概念へのとらわれに自ら気づき、データに基づいた客観的な分析・考察によって、現実の問題を把握し、その解決法を構想し実現できるよう指導した。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
心理実験実習・心理学実験実習Bにおける実験でのマニュアル・プリント類の作成・配布		2020年4月1日～		心理学各領域の代表的、基本的なデータ収集・分析技法を体験的に学習させるために、担当教員の綿密な打ち合わせの上でマニュアルを作成し、配布している。			

授業内容のレジュメ資料を毎回配布	2020年4月1日～	1回の講義で解説する事項を示した自作のレジュメ資料を配布することで、受講生が講義内容の全体像をつかめるようにした。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>					
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>					
現在の課題・目標	<p>①学習支援システムのより高度な活用を目指す。</p> <p>②学生が学習内容に興味を持てるよう、実験・調査のデモデータを活用したり、他の魅力ある資料を収集・更新して教材に取り入れる。</p> <p>③演習・ゼミ・総合研究における相互評価用ルーブリックについて、グループワークへの参加度や総合研究への関与度などについて教員が客観的に評価できるルーブリックを作成する。</p>				
今年度の進捗状況	<p>上記目標①については、COVID-19感染対策による遠隔授業実施のため、すべての授業において学習支援システムの全面的活用を余儀なくされた。とはいえ、学習支援システムは従前より利用していたこともあり導入に支障はなかった。目標②については、教養科目、専門科目の授業で、実験や調査をmanabaやGoogleフォームにて実施した。学生が自ら入力したデータを次回授業でフィードバックでき、授業の双方向性が高まり好評であった。目標③については、観点を少なくして授業時に実施できる相互評価ルーブリックを作成し、実施した。総合研究ルーブリックについては学部で共通使用したルーブリックを活用した。目標①～③について、以上のような進捗があった。</p>				
来年度の進捗目標	<p>目標①については、引き続き学習支援システムのより高度な活用を目指す。遠隔授業で疎かになりがちな双方向性の確保を可能な限り図る。目標②については、引き続き実験・調査のデモデータを活用したり、他の魅力ある資料を収集・更新して教材に取り入れる。目標③については、ひとまず実用できるルーブリックがあるため、現状のものを活用しながら改善点を検討していく。</p>				
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	<p>①他機関の研究者とキャリア教育実践研究を継続する。</p> <p>②本学学生の進路意識に関する研究を進めるため、資料を収集する。</p> <p>③①の研究を行いながら、大学生における共同学習と動機づけの研究に関する研究デザインを検討する。</p>				
今年度の進捗状況	<p>COVID-19パンデミックにより、今年度はいずれの活動も大きく制約を受けた。上記目標①は、調査や実践が例年通りには実施できず、限定的な調査にとどまった。目標②については十分に実施できなかったが、進路指導に関する分担執筆の依頼を受けたため、進路指導にかかわる文献、資料を収集した。目標③については①の研究に関する検討にとどまった。目標①～③について、以上のような進捗があった。</p>				
来年度の進捗目標	<p>COVID-19のパンデミック下のため、①～③いずれも、少しでも進捗があるように進めていくこととする。上記目標①については、実践と調査を継続しながら遠隔でも実施できる研究方法を模索していく。目標②については、依頼を受け執筆中の進路指導に関する分担執筆原稿の完成と出版を目指す。目標③については、研究対象を拡大する余裕がないため、①を継続しながら研究デザインを検討していく。</p>				
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>					
2017年12月～	日本キャリアデザイン学会会員 会員				
2010年6月～	日本キャリア教育学会会員 会員				
2005年11月～	日本教育心理学会会員 会員				

2005年1月～		日本心理学会会員 会員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
2014年4月1日～2018年3月31日 就職キャリア支援部副部長			

2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	平野 幹雄	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学生からの授業評価(全教科)		2020年～		第一回の講義開始時に講義への要望について調査し講義内容に反映するよう努力している。加えて、講義内容についての毎回感想や要望を書いてもらい、その代表的なもののいくつかを次回講義の開示時にコメントバックしている。			
授業における興味関心の喚起(講義形式の授業)		2020年～		今日の課題を取り上げている視聴覚教材・パワーポイントをできるだけ多く提供し、視聴の観点を示してそこから掘り下げて問題を整理するよう指導している。また、タブレット端末の手書き機能を積極的に活用し、手書きで概念図等を作成して理解しやすい工夫をしている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
海外の資料の訳出		2020年～		National Dissemination Center for Children with Disabilitiesのwebpageに所収されている障害類型別のガイド、並びにNational Institute of Mental Healthが編集している自閉症スペクトラム障害のガイドの翻訳(人間科学演習で使用)			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		学生とのコミュニケーションを円滑におこなうことのできる機会を十分に確保する。					
今年度の進捗状況		本年度はコロナウィルス感染拡大の影響で受け持った講義の多くがオンデマンドとなった。上述したように、毎回マナバに講義の感想を書いてもらい、その代表的なもののいくつかを次回講義の開始時にコメントバックして相互応答的な機会を確保するように努めた。					
来年度の進捗目標		オンライン上で継続的なやりとりに発展させるための方策をさらに具体的に考えていきたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
保育・教育の場における子どもの支援『保育・教育の場における子どもの支援』	共著	2021年2月	日本評論社、こころの科学special issue 東日本大震災とこころのケア	足立智昭・平野幹雄・柴田理瑛	pp.118-124		
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		支援者における他職種の連携を意識して研究にあたること。					
今年度の進捗状況		子どもをとりまく保育士や保健師などとの連携は深まったが、学校教員との連携については少し進んだ程度であった。					
来年度の進捗目標		次年度は、さらに学校教員との連携を深めながら研究を進めていきたいと考えている。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(C)(一般)	2018年度～2020年度	共同(研究分担者)	東日本大震災の長期的影響としての子どもの攻撃性に対する介入プログラムの構築
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
1. 教職課程センター所長 2. 教育・研究業績編集委員会委員 3. 教員資格審査委員会専門委員 4. 学科将来構想委員 5. 教学組織改変推進室副室長			



2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	福野 光輝	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
2019年4月～2021年3月			日本グループ・ダイナミクス学会地区別理事(東北) 会員				
2019年4月～2021年3月			日本グループ・ダイナミクス学会「実験社会心理学研究」編集委員 会員				
2017年11月～2021年10月			日本心理学会認定心理士認定委員 会員				
2017年11月～2021年10月			日本心理学会認定心理士資格認定委員 会員				
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>							



# 東北学院大学教員業務・活動報告書 2020

発行日 2022(令和4)年3月31日  
編集 東北学院大学点検・評価委員会 教育・研究業績編集委員会  
発行 東北学院大学  
問い合わせ先 東北学院大学学務部教務課  
〒980-8511 仙台市青葉区土樋一丁目3番1号  
TEL. 022(264)6461 / FAX. 022(264)6480  
E-mail: [gakuji@mail.tohoku-gakuin.ac.jp](mailto:gakuji@mail.tohoku-gakuin.ac.jp)  
印刷 ハリウ コミュニケーションズ株式会社

2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	堀毛 裕子	大学院の授業 担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
コロナ禍によるオンデマンド授業における学生との相互作用に関する工夫		2020年4月～		コロナ禍のため遠隔授業をオンデマンドで実施する場合でも、できる限り学生との相互作用を行うべく、manabaやresponを活用してクイズやミニ課題を実施し、その回答については必ずmanaba上でフィードバックするなどの工夫を行った。			
演習系科目における学習参加促進の工夫		2020年4月～		コロナ禍のもと、1年次対象の導入科目である「人間科学基礎演習A」はzoomによるオンライン授業となった。新入生はキャンパス内に足を踏み入れることもなく孤立化も心配されたため、zoom内のブレイクアウトルームやmanabaのプロジェクト機能を活用して、全員が互いによく知り合いディスカッションに参加できるよう工夫した。			
心理学の研究技法を効果的に習得させるために、自作マニュアルを用いた実習授業を複数教員により体系的に運営している		2020年4月～		2年生対象の「心理学実験実習」の授業において、担当教員の綿密な打ち合わせの上で作成されたマニュアルを用い、心理学各領域の代表的・基本的なデータ収集・分析技法を体験的に学習させている。授業後、学生が提出したレポートについて、あらかじめ公開してある基準に従って丁寧に添削し、コメントを付けて返却する。学生には、修正したレポートの提出を義務付けている。全体をシステム化して運営しているのが特徴である。			
講義科目における理解促進の工夫(当日の授業概要見出し項目の提示等)		2020年4月～		専門科目も含めて講義科目では、毎回の授業の最初に、当日の講義内容の見出し項目を提示し、個別の内容説明も全体の枠に位置付けながら行っている。これは、学生の特性によらず、各時点での話題や説明が当日に扱うテーマのどの部分に該当するかをわかりやすくするためのユニバーサルな工夫である。 この方針は従来から継続しているものであるが、今年度の遠隔授業(オンデマンド)においても同様に実施した。			
教養教育科目の講義における理解促進の工夫(ワークの導入・manabaによるミニ課題提出等)		2020年4月～		教養教育科目における入門の授業では、できるかぎり大学生活で学生が出会う事象を取り上げながら、簡単な問いや課題を考えるワークを随時行い、また事前学修や事後学修のミニ課題をmanabaにより提出させて、関心を深め理解を促進する工夫を試みた。 この方針は従来から継続しているものであるが、今年度の遠隔授業(オンデマンド)においても同様に実施した。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
白石高校における出張講義		2020年10月2日		宮城県白石高校において、全校生徒820名および教職員80名を対象とした新型コロナウイルス感染症への対応に関する保健講話の依頼があり、「心身の健康をめざして―臨床・健康心理学から新型コロナウイルスの問題を考える―」と題する講話を行った。 コロナ禍での不安等に対するストレス・マネジメントの方法、差別や偏見などの防止等について伝え、さらにこれらに関する心理学の研究の面白さや本学で心理学を学ぶメリットなどについても紹介した。			
<b>現在の課題・目標</b>		①学生の多様化を意識して、講義科目における伝達方法について、できるかぎりユニバーサルなわかりやすさを工夫する。 ②2020年度においては、遠隔授業(オンデマンド型およびオンライン型)の授業が中心となったため、できる限り学生の理解が進むように工夫を行う。 ③多面的な成績評価を行う。					
<b>今年度の進捗状況</b>		①受講学生の多様性を念頭に、明瞭な発話を心がけ、スライドの作成においても文字フォントや色彩等の用い方に留意するなどの工夫を行った。さらにオンデマンド型授業では、学生の通信環境に配慮して容量の圧縮などにも努めた。 ②特に新入生対象のオンライン型授業ではできるかぎり学生同士が知り合えるような工夫を行い、またオンデマンド型授業では、動画のわかりやすさ等に配慮し、またmanabaを活用してできる限り双方向性の授業となるよう工夫した。出席確認を兼ねた授業内容に関する簡単なクイズ等を重ね、その結果のフィードバックなども毎回実施して、学生の意欲を高めまた理解度を把握するなどの工夫を行った。 ③講義科目においては、授業内容に関する簡単なクイズ、ミニ課題や確認小テストなどを活用して、多面的な評価を行った。					

来年度の進捗目標		コロナ禍の影響で、来年度も遠隔授業(オンデマンド型授業)を継続せざるを得ない状況にあり、また受講学生の性質は年度および対象クラスによって異なるものであるため、上記3項目の目標については引き続き工夫と改善を続けることが必要と考えている。 対面授業の良さや遠隔授業の良さを双方をうまく生かして、できる限り受講生に理解しやすい授業を提供したい。			
II 研究活動					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
健康生成論『社会福祉学習双書2021 第11巻 心理学と心理学的支援「健康生成論」(第4章第3節)』	分担執筆	2020年12月	全国社会福祉協議会	堀毛裕子(分担執筆)	pp.151-157
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
「sense of coherenceの心理学における活用」 第85回日本健康学会総会:シンポジウム「アントノフスキーの健康生成論とコヒアレンス感(SOC)によるパラダイム変換」における話題提供(オンライン)	単独	2020年12月	日本健康学会, 日本健康学会誌第86巻付録 第85回日本健康学会総会講演集(オンライン)	堀毛 裕子	pp.30・31頁
日本心理臨床学会第39回大会(web大会)の発表セッション(岩崎眞和・五十嵐透子「日本語版感謝尺度短縮版(JAI-S)の作成」)における司会	単独	2020年11月	日本心理臨床学会第39回大会(web大会)(オンライン)	堀毛 裕子	
「ポジティブな「状況」に関する研究(1)」	共同	2020年9月	日本心理学会第84回大会(東洋大学)デジタルポスター発表(オンライン)	◎堀毛一也・堀毛裕子・山崎有望	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	①これまでの科研費による研究成果の分析・検討を進め、さらに学会発表や論文作成を行う。 ②現在関わっている各種の共同研究などをさらに進展させる。				
今年度の進捗状況	①コロナ禍のため、発表が採択されていた国際学会は翌年度に延期となるなど、学会発表の機会が例年とは異なる状況となった。 ②これまでの科研費で蓄積された研究成果について、学会(オンライン)のシンポジストを務めた。 ③他大学研究者との共同研究について、学会発表(デジタルポスター)を行った。				
来年度の進捗目標	①これまでの科研費で蓄積された研究成果について、さらに学会発表や論文作成を行う。 ②病院や他大学研究者との共同研究を継続し、学会発表や論文作成を行う。				
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
IV 学会等及び社会における主な活動					
2021年3月～	日本心理学会 専門別代議員(第3部門) 会員				
2020年12月	宮城大学 教員人事委員会外部専門委員 委員				
2020年	「Journal of Health Psychology Research」(日本健康心理学会) 会員				
2020年	「心理臨床学研究」(日本心理臨床学会) 会員				

2019年～	日本がんサポーターブケア学会 会員 会員
2017年7月～	東北心理学会 理事 会員
2017年7月～	東北心理学会 理事 会員
2017年7月～	日本健康心理学会 機関誌編集委員会 委員 会員
2017年～	日本心理学会 第82回大会準備委員会 委員 会員
2015年8月～	東洋大学 21世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター 客員研究員 (私立大学戦略的研究基盤形成支援事業プロジェクト「社会的逆境後の精神的回復・成長をもたらす個人的および社会的資源」) 委員
2015年8月～	東洋大学 21世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター 客員研究員 (私立大学戦略的研究基盤形成支援事業プロジェクト「社会的逆境後の精神的回復・成長をもたらす個人的および社会的資源」) 委員
2015年7月～	関西学院大学 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業プロジェクト「情動概念の再構築:心理学の新たな挑戦」 学外参画教員 委員
2015年7月～	関西学院大学 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業プロジェクト「情動概念の再構築:心理学の新たな挑戦」 学外参画教員 委員
2015年7月～	関西学院大学 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業プロジェクト「情動概念の再構築:心理学の新たな挑戦」 学外参画教員 委員
2015年7月～	関西学院大学 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業プロジェクト「情動概念の再構築:心理学の新たな挑戦」 学外参画教員 委員
2013年4月～	宮城県 防災専門教育アドバイザー 委員
2013年4月～	宮城県防災専門教育アドバイザー 委員
2013年4月～	宮城県 防災専門教育アドバイザー 委員
2013年～	日本学術振興会 戦略的創造研究推進事業(社会技術研究開発)「広域避難者による多居住・分散型ネットワーク・コミュニティの形成」(代表 早稲田大学佐藤滋)における総合的評価システム開発グループ(代表 東洋大学 安藤清志)の研究開発実施者 委員
2012年～	日本健康心理学会 認定健康心理士資格認定委員会 委員 会員
2012年～	日本健康心理学会 認定健康心理士資格認定委員会 委員 会員
2012年～	日本健康心理学会 認定健康心理士資格認定委員会 委員 会員
2012年～	日本健康心理学会 認定健康心理士資格認定委員会 委員 会員
2012年～	日本健康心理学会 機関誌編集委員会 委員 会員
2012年～	日本健康心理学会 認定健康心理士資格認定委員会 委員 会員
2011年12月～	宮城県警察 部外相談員 委員
2011年12月～	宮城県警察 部外相談員 委員
2011年12月～	宮城県警察 部外相談員 委員
2011年12月～	宮城県警察 部外カウンセラー 委員
2011年12月～	宮城県警察 部外カウンセラー 委員
2011年12月～	宮城県警察 部外カウンセラー 委員
2011年～	The International Positive Psychology Association 会員 委員
2011年～	The International Positive Psychology Association 会員 委員
2011年～	The International Positive Psychology Association 会員 委員
2011年～	The International Positive Psychology Association 会員 委員
2011年～	The International Positive Psychology Association 会員 委員
2011年～	The International Positive Psychology Association 会員 委員
2011年～	The International Positive Psychology Association 会員 委員
2011年～	宮城県臨床心理士会 南三陸仮設住宅支援チーム 相談役 委員

2011年～	宮城県臨床心理士会 南三陸仮設住宅支援チーム 相談役 委員
2011年～	宮城県臨床心理士会 南三陸仮設住宅支援チーム 相談役 委員
2011年～	宮城県臨床心理士会 南三陸仮設住宅支援チーム 相談役 委員
2011年～	宮城県臨床心理士会 南三陸仮設住宅支援チーム 相談役 委員
2011年～	宮城県臨床心理士会 南三陸仮設住宅支援チーム 相談役 委員
2008年4月～	宮城県犯罪被害者支援審議会 委員 委員
2008年4月～	宮城県犯罪被害者支援審議会 委員 委員
2008年4月～	宮城県犯罪被害者支援審議会 委員 委員
2008年4月～	宮城県犯罪被害者支援審議会 委員 委員
2008年4月～	宮城県犯罪被害者支援審議会 委員 委員
2008年4月～	宮城県犯罪被害者支援審議会 委員 委員
2006年～	日本乳癌学会 正会員 会員
2006年～	日本乳癌学会 会員 会員
2001年～	日本健康心理学会 理事 会員
2001年～	日本健康心理学会 理事 会員
2001年～	日本健康心理学会 理事 会員
2001年～	日本健康心理学会 理事 会員
2001年～	日本健康心理学会 理事 会員
1999年～	日本学生相談学会 会員 会員
1999年～	日本学生相談学会 会員 会員
1997年～	日本コミュニティ心理学会 会員 会員
1997年～	日本コミュニティ心理学会 会員 会員
1992年～	日本パーソナリティ心理学会 会員 会員
1992年～	日本パーソナリティ心理学会 会員 会員
1989年～	日本臨床心理士会 会員 委員
1988年～	日本健康心理学会 会員 会員
1988年～	日本健康心理学会 会員 会員
1983年～	日本心理臨床学会 会員 会員
1983年～	日本心理臨床学会 会員 会員
1979年～	日本社会心理学会 会員 会員
1979年～	日本心理学会 会員 会員
1979年～	日本社会心理学会 会員 会員
1979年～	日本心理学会 会員 会員

#### V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

#### VI 学内における管理運営に関する諸活動

--

2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	水谷 修	大学院の授業 担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
<b>教育実践上の主な業績</b>		<b>年月日(西暦)</b>		<b>概 要</b>			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
[実習]公民館(市民センター)と連携した市民講座づくり実習		2020年5月8日～		仙台市生涯学習支援センターと連携して、学生が市民センター主催の市民講座を企画・準備・運営・評価を行い、報告書を作成する授業を実施した。学生の問題解決能力やコミュニケーション力の育成、および市民センターの若者対象事業のプログラム開発をねらいとしている。今年度は2講座を開催した。			
[講義]ゲストティーチャーとの協働による授業運営		2020年5月7日～		①「キャリアデザインⅡ」では、ゲストティーチャーの話から、自分の将来とそれに向けた大学生活について考える授業を行った。 ②生涯学習関係の授業では、行政・NPO・社会教育施設・高校などからゲストを招き、理論と実践の融合を図った。			
[講義]振り返りと導入の時間を取り入れた授業の実施		2020年5月7日～		授業の振り返りと取り扱ったテーマに対する考えの深化を目的に、授業の終わりに、独自に作成したシートを用いて、毎回、学生が文章を書きそれを複数の他の学生に見せコメントをもらう取組を行っている。また、次週の冒頭に一部の学生の文章を紹介し、自らの考えを見直す手がかりを提供した。			
[演習]NIEの実践		2020年5月7日～		生涯学習支援に対する興味・関心の深化と今日的な課題への気づきをねらいに、3年生のゼミの導入部分で、学生が持ち寄った新聞記事を手がかりにディスカッションを行った。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
「市民センター講座づくりの記録」の作成と活用		2020年5月8日～		「社会教育実習」では、学生の手による報告書作成の支援を行った。これらの報告書については公表するとともに、次年度の授業のテキストあるいは教材として活用している。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
大学と社会教育施設・NPOなどが協働して行っている教育活動(社会教育実習、ボランティア活動、ゼミ活動)の紹介		2020年8月5日		社会教育実習の授業の一環として行っている、学生による公民館講座づくりの概要と教育的意味について、各種講演(仙台市生涯学習支援センター、国立教育政策研究所社会教育研究実践センターなど)で紹介した。			
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
<行政・地域団体等が主催する各種事業における講師・コーディネーター・指導者・助言者>		2020年～		<ul style="list-style-type: none"> <li>・国立教育政策研究所「社会教育主事講習」</li> <li>・富谷市教育委員会「地域・学校・家庭をつなぐ取組研修会」(書面)</li> <li>・仙台市生涯学習支援センター「市民センター新任職員研修会」</li> <li>・北海道立生涯学習推進センター「社会教育主事講習」</li> <li>・宮城県高等学校生徒指導研究会例会</li> <li>・宮城県「元気会」勉強会 など</li> </ul>			
市民活動に参加する学生への支援		2020年～		<ul style="list-style-type: none"> <li>①宮城県警察本部ボラリスの活動支援 新型コロナウイルス感染症の影響で、今年度の活動が中止となった。</li> <li>②NPOによる高校でのキャリア・セミナーの運営 NPO法人ハーベストが実施する中学校・高校での出前型キャリア教育活動(キャリアセミナー)の運営にかかわった。</li> <li>③仙台市泉区中央市民センターの子ども対象事業企画へのゼミ生の参画支援 新型コロナウイルス感染症の影響で、今年度の活動が中止となった。</li> </ul>			
<b>現在の課題・目標</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>(1)大学と地域の連携・協働による授業の実践と学習効果の向上</li> <li>(2)学生の興味・関心を引き出す授業の実践</li> <li>(3)キャリア形成と学生生活について考えるための大人(社会人・学生)との出会いの支援</li> <li>(4)法改正に伴う社会教育主事課程の変更と授業内容の改善(特に社会教育実習の必修化に対応するプログラムの開発)</li> </ul>					



<p>今年度の進捗状況</p>	<p>(1)新型コロナウイルス感染症の影響で授業・事業が一部中止となり、十分なデータの収集ができなかった。  (2)①学生が興味・関心を持てるように、学生の経験と結び付けて授業をすすめるようにした。また、地域で活動する方々をゲストに迎え授業を行った。  ②学生の興味・関心を引き出すという観点から、映像教材の積極的な活用を図るとともに、授業資料(パワーポイント)の改善を図った。  ③遠隔授業の実施に伴い、ブレイクアウトセッション機能を積極的に活用して学生の興味・関心を引き出すとともに、学生の主体的な授業になるように心がけた。  ③課題に対する解答・解決策⇒他者からのコメント⇒解答・解決策の再検討を記述する用紙を活用した、学生の学び合いによる相互評価の手法を取り入れた授業に行った。  ?manabaを活用した授業運営を行った。  (3)以下のような実践に取り組んだ。  ①キャリアデザインにおいて、多様な職業の社会人をゲストティーチャーとして招いた。  ②生涯学習関係の授業において、社会人をゲストティーチャーとして招いた。  (4)2022年度に初めて実施される社会教育実習(1単位)の在り方について、受け入れ施設に予定している担当者との情報交換した。</p>				
<p>来年度の進捗目標</p>	<p>(1)地域の団体との連携・協働による授業・事業の改善をはかるために、引き続き効果測定の基礎データの収集に努めるとともに、分析の方法について検討する。  (2)①今年度と同様の授業・事業を実施する。  ②引き続き、実践の有効性についての評価手法を見出すための資料を収集する。  ③新型コロナウイルス感染症の影響が残ることが予想されることから、遠隔授業における学生の興味・関心を引き出す工夫について検討する。  また、学生同士の学びあいのためのシートの改善をはかる。  ④manabaの一層の有効活用を図る。  (3)今年度と同様の取り組みを行うとともに、新たなゲストティーチャーを開拓する。  (4)次年度の実施に向け、仙台市生涯学習支援センターおよび国立の青少年自然の家と協働して、新たな実習プログラムを開発する。</p>				
<p>II 研究活動</p>					
<p>著書・論文等の名称</p>	<p>単著・共著の別</p>	<p>発行又は発表の年月(西暦)</p>	<p>発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称</p>	<p>編者・著者名</p>	<p>該当頁数</p>
<p>A. 学術書</p>					
<p>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</p>					
<p>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</p>					
<p>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</p>					
<p>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</p>					
<p>基本的方向2「生涯学習」、基本的方向3「地域・家庭」学識経験者の意見『未記入』</p>	<p>単著</p>	<p>2020年8月</p>	<p>未記入</p>	<p>仙台市教育委員会</p>	<p>pp.54-55、82-83</p>
<p>社会教育と地域防災ネットワーク[「地域防災と社会教育計画」(『地域をコーディネートする社会教育計画』所収を加筆修正したもの)『未記入』</p>	<p>単著</p>	<p>2020年4月</p>	<p>理想社 浅井経子他編著『社会教育経営論』</p>	<p>未記入</p>	<p>pp.200-206</p>
<p>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</p>					
<p>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</p>					
<p>G. 学会における研究発表</p>					
<p>H. 翻訳(学術書や原典等)</p>					
<p>I. 特許</p>					
<p>現在の課題・目標</p>	<p>(1)震災復興や防災・減災における生涯学習振興の課題の析出  (2)地域と学校の協働による教育活動の課題の析出  (3)市民参画・問題解決型の生涯学習事業に関する課題の析出  (4)人口減少時代における生涯学習推進センター等の新たな役割に関する調査研究</p>				

今年度の進捗状況	(1)について 昨年引き続き雑誌論文等を収集した。また、以前執筆した「地域防災と社会教育計画」(『地域をコーディネートする社会教育計画』所収)を加筆・修正し、「社会教育と地域防災ネットワーク」(社会教育経営論)を公表した。 (2)について 富谷市及び仙台市(柳生小学校など)の実践にかかわることを通じて課題の把握を行った。 (3)について 新型コロナウイルス感染症の影響もあり、十分な調査活動ができなかった。 (4)について 調査研究チームの一員として研究計画の設計、調査票の作成などにかかわった。
来年度の進捗目標	(1)(2)(3)について、引き続き実践事例等の資料の収集と分析を行い、可能なところから成果を公表する。 (4)について、面接調査を実施したうえで報告書の作成を行う。

### Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
----------	----------	------------------------	-----

### Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2021年1月～	多賀城市教育振興基本計画策定会議委員長 委員長
2020年11月～	日本生涯教育学会会員 副会長 会員
2020年5月～	仙台市教育プラン検討委員会 委員 委員
2019年7月～	多賀城市教育委員会 社会教育委員 委員
2019年4月～	宮城県児童館・放課後児童クラブ連絡協議会理事 委員
2018年11月～	日本生涯教育学会会員 理事 会員
2018年7月～	せんだい男女共同参画財団「自立を目指す女性のための”学び直し”を通じたキャリア支援事業」実行委員 委員
2018年4月～	国立花山青少年自然の家運営協議会委員 委員
2018年4月～	仙台市教育委員会「教育に関する事務の管理及び執行状況の点検・評価」執筆担当 委員
2015年11月～	宮城県教育委員会 放課後子ども総合プラン推進委員会委員 委員
2014年1月～	一般社団法人教育総合支援機構ゆうわ理事 委員
2012年4月～	宮城県古川高等学校評価委員 委員
2011年4月～	宮城県泉松陵高等学校評価委員 委員
2009年10月～	富谷町教育委員会 地域・学校・家庭をつなぐ実行委員会アドバイザー 委員
2009年8月～	NPO法人ハーベスト 理事 委員
2001年4月～	せんだい男女共同参画財団 理事/2012年4月～評議委員 委員
1980年5月～	日本教育学会会員 会員

### Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

### Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

1.教養学部長 2.評議員
------------------

2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	准教授	氏名	泉山 靖人	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
遠隔授業の実施		2020年		遠隔授業において、毎回の授業後にミニ課題(授業内容の整理、あるいは原則論を講義した際には例外の取り扱いに関する自らの意見の記入)を実施し、原則として次回の講義の際にフィードバックを実施した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①授業内容の改善 ②成績評価方法の改善					
今年度の進捗状況		遠隔授業の実施に伴い、講義資料を全面的に見直すとともに、動画教材を作成した。また、評価方法について見直しをおこなった。 講義資料等については、動画と配付資料の構成を見直し、資料印刷等で学生の負担軽減を図った。 評価方法については、課題の見直しとともに、評価の観点の見直しを実施した。					
来年度の進捗目標		いずれについても、さらに見直しを進めていく。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
第1部館種篇 1 公立図書館『日本の図書館の歩み 1993-2017』	共著	2021年3月	公益社団法人日本図書館協会、初	日本の図書館の歩み編集委員会編 泉山靖人ほか	pp.18-36		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
地方創生から見た生涯学習－図書館事例を参考に－	単著	2020年10月	日本教育制度学会, 教育制度学研究(27)	泉山靖人	pp.196-197		
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		科学研究費補助金による研究「地方自治体の「まちづくり」「ひとづくり」施策と図書館施策の変容に関する調査研究」の期間は終了したが、同様の研究を進める。 『日本の図書館の歩み 1993-2017』(日本図書館協会、2021年3月刊行)の執筆を進める。					
今年度の進捗状況		2019年11月に日本教育制度学会第27回大会(宇都宮大学)の課題別セッションIV「地方創生にはたす教育施設・人材の新たな活用に関する日英比較研究」において報告した「地方創生から見た生涯学習政策～図書館サービス事例を参考に～」について、セッション記録原稿をまとめた。 『日本の図書館の歩み 1993-2017』の原稿を完成させた。また編集委員として原稿チェックをおこなう。					
来年度の進捗目標		申請が認められれば科学研究費補助金による研究(申請中)を遂行する。 日本図書館文化史研究会2021年度研究集会を念頭にシンポジウムを企画・運営する予定である。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	准教授	氏名	大迫 章史	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
講義プリントの配布		2020年4月1日		学生の授業内容の理解を促進し、復習でも役立ててもらえるよう授業では毎回担当者が作成した授業プリントを配布し、これにもとづいて講義をしている。			
授業アンケートの実施		2020年4月1日～		授業等の改善のため、manabaのアンケート機能等を活用して学生に授業アンケートを実施している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①学生にとってわかりやすく、興味・関心をもって自ら調べていこうとする意欲を引き出せる講義・演習をする。 ②講義・演習内容を学生が自らの将来と結びつけながら理解し、有用な知識等として定着していくことができる講義をする。					
今年度の進捗状況		①については、学生が興味・関心をもてるテーマを講義・演習等のなかで扱っているが、自ら調べようとする意欲を引き出す点にまでは及ばなかった。 ②については、毎回の講義等の終了後に小テストを実施するようにしているが、それが学生にとって将来必要となる知識であることを認識してもらう点では十分でなかった。					
来年度の進捗目標		①については、講義で扱った内容をどのようにして自ら調べ深めていけばよいか、学生に対してその方法を具体的に提示できるようにする。 ②については、講義等の終了後に実施している小テストがなぜ将来必要となる知識であるのかが伝わるような活用方法を検討する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
「第4章 幼児教育制度の歴史」『新版 初めて学ぶ教育の制度・行政・経営論』『第4章 幼児教育制度の歴史』『新版 初めて学ぶ教育の制度・行政・経営論』	共著	2020年8月	金港堂	牛渡淳編著	pp.69-100		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
総力戦体制下におけるカトリック高等女学校のキリスト教教育	不明	2020年9月	カトリック教育研究(37)	大迫 章史	pp.13-23		
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
明治期の女子教育と私立女子自助館－「忘れられたミッション・スクール」－	単著	2021年3月	東北学院大学人間情報学研究所, 東北学院大学人間情報学研究所『人間情報学研究』第26号	片瀬一男・大迫章史	pp.19-38		
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
宮城県のミッション・スクールとキリスト教教育－尚綱女学校を事例に－	単著	2021年3月	片瀬一男編『東北の女子ミッション教育の社会史』(日本学術振興会・科学研究補助金研究成果報告書)	未記入	pp.127-135		
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
戦後宮城における御真影	単独	2021年3月	東北教育学会第77回大会(日本)	大迫 章史			

昭和戦前期の私立学校政策－学校法人法・学校財団法に着目して－	単独	2020年9月	教育史学会第64回大会(日本)	大迫 章史
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>				
<b>I. 特許</b>				
現在の課題・目標	戦時下におけるキリスト教主義学校の動向について明らかにする。			
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度はカトリック学校の教育課程に関する動きを研究論文として執筆することができた。</li> <li>・宮城県・仙台市におけるキリスト教主義学校に関わる史資料を収集し、研究論文として執筆することができた。</li> </ul>			
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度はキリスト教主義学校を含む私立学校の設置形態をめぐる動きについて、文教政策との関係で明らかにする。</li> </ul>			
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>				
<b>競争的資金の名称</b>	<b>採用年度(西暦)</b>	<b>個別・共同の区分 共同の場合の役割分担</b>	<b>概 要</b>	
科学研究費補助金 日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究(B)	2017年度～2019年度	共同(研究分担者)	広島県における戦後の教会および教育研究所の動きを明らかにする。	
科学研究費補助金 日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究(C)	2017年度～2019年度	共同(研究分担者)	戦時下におけるカトリック学校の動きを文教政策との関係に着目して明らかにする。	
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2017年度～2020年度		<p>今年度は、研究助成最終年度であったので、研究成果の発表を中心に活動を行った。まず、7月14日15日、東北社会学会:片瀬一男「女子ミッション教育の歴史社会学」相澤出「2つのホームによる人々」前者は同窓会誌の内容分析であり、後者は同窓生へのインタビューの分析であった。</p> <p>つぎに、8月19日、日本教育社会学会:片瀬一男・高瀬雅弘「統制される「不良少女」」この報告は、以前に青山学院大学資料室から収集したMissionary Reportなどの文献資料などを中心として、明治後期における地方教育行政と地域社会、女子ミッション教育のかかわりを検討したものだ。</p> <p>さらに、『宮城学院女子大学付属キリスト教文化研究所年報』第53号に片瀬一男・相澤出・遠藤恵子「戦後日本社会における女性たちの「もうひとつの」個人主義——宮城学院同窓生の生活史の分析から——」を掲載した。この論考は、戦後直後に宮城学院に在籍した同窓生の談話から、同時代の同窓生の集合的記憶と体験の詳細を明らかにすることによって、当時の宮城学院同窓生の集合的記憶を理解するだけでなく、当時、同様のミッション教育を経験した女性たちの生活世界の諸相を戦後直後に在籍した同窓生の談話から、同時代の同窓生の集合的記憶と体験の詳細を明らかにした。こうしたアプローチによって、当時の宮城学院同窓生の集合的記憶を理解するだけでなく、当時、同様のミッション教育を経験した女性たちの生活世界の諸相を、大塚史学が仮定したものとは異なる「もう1つの個人主義」を理解する手がかりを得た。</p>	
科学研究費補助金 日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究(C)	2016年度～2019年度	共同(研究分担者)	東北地方のうち、とくに宮城県・仙台市におけるキリスト教女子ミッションスクールの教育の特徴を明らかにする。	
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>				
2020年11月～2021年1月	宮城県社会福祉協議会 保育士等キャリアアップ研修(マネジメント) 講師 講師			
2020年8月～	日本国際教育学会 理事 会員			
2020年8月～	日本国際教育学会 理事			
2019年9月～	日本カトリック教育学会 紀要編集委員			
2019年4月～	東北教育学会 紀要編集委員			
2019年4月～	仙台白百合女子大学カトリック研究所 客員所員			

2019年～	東北教育学会 紀要編集委員 会員		
2019年～	日本カトリック教育学会 紀要編集委員 会員		
2018年8月～2020年8月	日本国際教育学会 紀要編集委員		
2005年4月～	宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所 客員研究員		
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・教職課程センター</li> <li>・教務委員会</li> </ul>			

2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	准教授	氏名	岡崎 勘造	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<p>①授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切に、学生からの様々な相談に応じる。</p> <p>②知識の定着に加えて、その知識を日常生活の中で実践できるような授業を目指す。</p> <p>③継続して行っている被災地支援活動を継続して行うと共に、学生にも参加を促し、フィールドワークを通じた学びを推進することを目指す。</p>					
今年度の進捗状況		<p>①上記①について、授業後や研究室に来る学生の頻度が増加していることから、ある程度の進捗はみられたと考えられる。</p> <p>②上記②について、授業後のアンケートでは、今後の生活に活かしたいと記述する学生が増加しているため、ある程度の進捗状況はみられた。</p> <p>③上記③について、現在支援活動は継続して実施できている。またその被災地支援活動と学生との関わりも、実現できており、進捗状況としてはある程度目標に近づけたと考える。</p>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・来年度の目標について、学生とのコミュニケーションが増えるように、オフィスアワーの提示回数を増やすようにすることが一つ目の目標である。</li> <li>・二つ目の目標は、授業での知識を実践で活かしたいと回答した学生が多くなっているため、その数を数値化する事である。例えば、授業期間内での学生の行動変容を調査することを考えている。</li> <li>・最後に、被災地支援活動についてその活動と関わることによって本学学生の社会性を高めることに良い影響を与えていると学生本人も教員も実感できているため、その関わりを強化することが目標である。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		<p>①論文を2本投稿する。2本とも国外の雑誌に投稿することを目標とする。</p> <p>②論文を書くためにはデータが必要であり、データを取るためのフィールド活動を調整する。</p> <p>③新しいフィールドを開拓する。</p>					
今年度の進捗状況		<p>①筆頭著者として、国外雑誌に投稿したがリジェクトだった。現在も継続して修正し投稿しており、目標を達成できるよう努力する。</p> <p>②フィールドの調整については、順調に進んでいる。</p> <p>③宮城県内、都内病院との連携強化ができた。</p>					
来年度の進捗目標		<p>①和文・英文論文を各1本投稿し、アクセプトされること。</p> <p>②引き続きフィールドを調整したい。</p> <p>③新しいフィールドにおいても、研究協力者と連携し進める。</p>					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							



競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 科学研究費補助金 基盤研究C	2019年度～2021年度	個別(研究代表者)	<p>・子どもの生活習慣を明らかにすることは、健やかな成長を促す基盤づくりに貢献する。申請者は、子どもの生活習慣(活動量計による運動;質問紙による睡眠と朝食)を継続して調査してきた。その調査から、睡眠が子どもの元気に影響する大切な要素としてみられた。さらには睡眠と運動の関わりもみられた。睡眠は、起床・就寝時刻、睡眠時間と一緒に、その質も検討することが望ましい。睡眠は、その量よりも質による元気さへの影響が大きいとされている。近年、科学技術が進歩し、日常生活での子どもの「睡眠の量/質」を機器によって評価できるようになったが、その研究は依然として不十分である。</p> <p>・本研究は、「睡眠の量/質」、「強い/弱い運動」、朝食の生活習慣の現状を明らかとする。さらには、生活リズムを整える起点となる生活習慣を探り、その生活リズムと元気さ(Quality of life, ヘモグロビン推定値)との関わりを明らかにする。本研究の成果は、健やかな子どもの発育発達を促す健康教育の展開に貢献する。</p>

#### IV 学会等及び社会における主な活動

2020年9月	健康運動指導士及び健康運動実践指導者の講習会 講師
2020年	多賀城市 指定管理者選定委員 委員
2020年	仙台市 指定管理者選定委員 委員
2020年～	仙台市スポーツ推進計画(2022-2031の施策)検討委員会 委員
2020年～	宮城県小児科医会「宮城県小児肥満対策マニュアル」作成委員会コアメンバー 委員
2019年12月～	仙台市スポーツ推進計画検討委員 委員
2018年～	仙台市スポーツ推進審議会 委員
2014年8月～	教育事業 肥満傾向にある子どものための生活習慣向上長期キャンプ「カラダにeイイキャンプ」(独立行政法人 国立青少年教育振興機構 国立花山青少年自然の家)の講師として参加 委員
2012年1月～	日本発育発達学会 会員
2012年～	International Society for Physical Activity and Health 会員
2011年6月～	東北大学バスケットボール連盟 理事
2011年1月～	日本スポーツ産業学会 会員
2011年～	European College of Sport Science 会員
2010年5月～	日本公衆衛生学会 会員
2009年6月～	日本ウォーキング学会 会員
2008年7月～	日本教育工学会 会員
2006年8月～	日本体育学会 会員
2006年6月～	日本体力医学会 会員

#### V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
東北大学バスケットボールリーグ 1次リーグ (男子)	東北学院大学	2015年9月～2015年9月	2位
現在の課題・目標	①学生自らが考え工夫する主体性を高めるような指導をする。 ②大学の社会的プレゼンスを高めることに貢献する。		

<p>今年度の進捗状況</p>	<p>①来年度に向けて、新チームへと移行している。          ②東北では、良い成績を収めており、大学のプレゼンスを高めることができた。しかしながら、全国大会では初戦敗退であり、プレゼンを高める効果は薄かったと思われる。</p>
<p>来年度の進捗目標</p>	<p>①まだ新しいチームとして活動を始めたばかりのため、来年度の最終目標と、その目標を達成するために必要な細かい目標、この2つの目標を立てる。          ②全国大会に出場し、大学のプレゼンスを高める。</p>
<p><b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b></p>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・入試委員</li> <li>・人間情報学研究所編集委員</li> <li>・学生相談室兼任カウンセラー</li> <li>・学科将来構想検討委員</li> </ul>	

2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	准教授	氏名	金井 嘉宏	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
有斐閣現代心理学辞典(有斐閣)の下記項目を執筆した。帰属療法, 逆制止法, 系統的脱感作法, 現実エクスポージャー, 行動療法, 行動理論, 自動思考, 推論の誤り, 不安階層表		2021年2月26日					
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
東北学院高等学校の生徒に対する模擬授業		2021年3月11日		「ストレスや不安との上手なつきあい方」というテーマで模擬授業を行った。			
現在の課題・目標		① 学生が事象を批判的に、創造的に、深く考えることができるように指導する。 ② わかりやすいプレゼンテーションができるように指導する。 ③ 学生が主体的・能動的に課題に取り組むように指導する。					
今年度の進捗状況		上記目標①については、考え方の例の提供、考える時間や思考を広げる資料の紹介はしたが、より進歩させるために、教員からの質問を増やし、思考を深める援助をする。 上記目標②については、ゼミなどにおいてプレゼンテーションの練習の時間を設け、発表会では他の教員や下級生からもわかりやすかったとの反応があったことから、ある程度達成できたと考えられる。 上記目標③については、ゼミだけではなく、「健康の科学」という講義においても各自が調べてきたことを学生同士で教えあう活動を取り入れたことから、ある程度達成できたと考えられる。					
来年度の進捗目標		上記目標①については、学生の思考を深めるために教員からの質問を増やすとともに、学生同士で議論を行う際の観点を具体化するなどの工夫を行う。 上記目標②については、3年次からパワーポイントを使用したプレゼンテーションを行わせる。さらに、わかりやすい文書を作成するために、心理学領域で使用されるフォーマット、書式を遵守するように2年生の「心理学実験実習A」以降、繰り返し指導する。 上記目標③については、引き続き継続して、学生が主体的に課題に取り組めるよう、スモールステップな課題の設定、および学生の課題遂行に対するフィードバックを丁寧に行う。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>							
『有斐閣現代心理学辞典「帰属療法」, 「逆制止法」, 「系統的脱感作法」, 「現実エクスポージャー」, 「行動療法」, 「行動理論」, 「自動思考」, 「推論の誤り」, 「不安階層表」』		共著	2021年2月	有斐閣		子安増生・丹野義彦・箱田裕司(監修)	pp.145,150,1233,324,416
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
Translation and Validation of the Japanese Version of the Trait and State Post-Event Processing Inventory		共著	2021年1月	Japanese Psychological Research, doi: 10.1111/jpr.1232		Maeda, S., Sato, T., Kanai, Y., Blackie, R. A., & Kocovski, N. L.	pp.in-press
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野)</b>							
“HSP”の効用と限界『“HSP”の効用と限界』		単著	2020年12月	東北学院大学 学生相談室便り 第96号		未記入	pp.未記入
コロナ禍でのストレスとのつきあい方『コロナ禍でのストレスとのつきあい方』		単著	2020年11月	東北学院時報 第760号		学校法人 東北学院	pp.未記入
<b>E. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野に関連する領域)</b>							

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
指定討論 認知神経科学に基づく新たな介入法を探る	単独	2020年9月	日本認知・行動療法学会第46回大会 自主企画シンポジウム(日本)	未記入	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
『認知行動療法における治療関係 セラピーを効果的に展開するための基本的態度と応答技術 全般不安症(第5章) パニック症, 限局性恐怖症, 広場恐怖症, 社交不安症(第6章)』	共著	2020年10月	北大路書房	鈴木伸一(監訳)	pp.71-89(第5章) 90-105(第6章)
I. 特許					
現在の課題・目標	①社交不安症の認知的再評価distancingに関するfMRI研究について, 論文を完成させる。 ②社交不安症の情動調整に関する調査研究について解析を進めて論文を完成させる。 ③嗜好品の摂取が創造性に及ぼす効果に関する論文を完成させる。				
今年度の進捗状況	上記目標①については, 論文執筆を進めている。 上記目標②については, 解析をある程度行った。 上記目標③については, 個人対象の実験については国際誌への投稿した。				
来年度の進捗目標	上記目標①については, 論文を投稿し, 研究成果を公開する。 上記目標②については, 解析を完了させ, 投稿論文を完成させる。 上記目標③については, 査読修正を完了させ, 掲載まで達成する。				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要		
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2021年2月～	仙台少年鑑別所 地域援助業務アドバイザー 委員				
2020年8月～	一般社団法人 公認心理師の会 専門資格委員会委員長 委員長				
2020年6月～	日本認知・行動療法学会 公認心理師対応委員会委員長 会員				
2020年3月～	日本不安症学会 学術委員会委員 会員				
2019年9月～	日本認知療法・認知行動療法学会 常任編集委員 会員				
2019年8月～	一般社団法人 公認心理師の会 理事 委員				
2018年12月～	公認心理師の会 設立委員・運営委員 委員				
2017年7月～	日本心理学会「心理学ワールド」編集委員 会員				
2016年7月～	日本認知・行動療法学会常任編集委員 会員				
2016年7月～	日本認知・行動療法学会常任編集委員 会員				
2016年6月～	日本認知・行動療法学会代議員 会員				
2016年6月～	日本認知・行動療法学会理事 会員				
2016年6月～2020年6月	日本認知・行動療法学会企画委員会委員長 会員				
2012年8月～	宮城県薬物乱用対策有識者会議委員 委員				
2012年8月～	宮城県薬物乱用対策有識者会議委員 委員				
2011年8月～	日本認知療法学会編集委員 会員				
2011年8月～	日本認知療法学会編集委員 会員				
2010年4月～	日本不安症学会評議員 会員				
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					

来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	
学生総合保健支援センター学生相談室副室長	

2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	准教授	氏名	小林 信重	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
『デジタルゲーム研究入門:レポート作成から論文執筆まで』(小林信重編著)		2020年		「人間科学演習」「総合研究」の教科書。ミネルヴァ書房より2020年6月に刊行された。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		各学生に合わせた教育を行うために学生の能力・関心を調査する方法や、オンライン学習支援システム(Manaba)の利用法(学生のフィードバック、教材配布、成績評価など)、黒板とパワーポイントの併用法などについて学びたいと考えている。					
今年度の進捗状況		授業の実践や、学内のFD研修等に参加し、目標をある程度達成できた。					
来年度の進捗目標		授業やFD研修等で得た知見を活用し、授業の教育技術の向上や、学生の能力・関心、知識定着度の測定などを通して、教育技能を高めていきたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
村上春樹と麻枝准——1980年代の文化的文脈がビジュアルノベルに与えた影響	単著	2020年9月	現代風俗学研究会, 現代風俗学研究(20)	未記入	pp.33-39		
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
『デジタルゲーム研究入門:レポート作成から論文執筆まで』(編著者)『デジタルゲーム研究入門:レポート作成から論文執筆まで』(編著者)』	共著	2020年6月	ミネルヴァ書房	編者: 小林信重 著者: 小林信重、松永伸司、小山友介、玉宮義之、渋谷明子、加藤裕康 ほか	pp.0		
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
同人サークルによる創作活動の特徴とその変化——「同人ゲーム」制作者に注目して	単独	2020年10月	現代風俗研究会(日本)	未記入			
日本・英国・中国の課金行動の比較分析	共同	2020年9月	日本デジタルゲーム学会2020年夏季研究大会(不明)	小山友介, 小林信重, 田中絵麻			
日本・英国・中国のデジタルゲームプレイヤーの特徴—国際比較調査の結果から	共同	2020年9月	日本デジタルゲーム学会2020年夏季研究大会(不明)	田中絵麻, 小山友介, 小林信重			
日本・英国・中国のデジタルゲーム文化の特徴—国際比較調査の結果から	共同	2020年9月	日本デジタルゲーム学会2020年夏季研究大会(日本)	小林信重, 田中絵麻, 小山友介			
『デジタルゲーム研究入門』の入門	単独	2020年6月	デジタル・エンターテイメント研究会(日本)	未記入			
『デジタルゲーム研究入門』著者陣が語る「デジタルゲーム研究の進め方」	共同	2020年6月	日本デジタルゲーム学会オンライン研究会(日本)	小林信重, 小山友介, 田中絵麻, 島村真佐利, 藤本徹			

H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コンピュータゲーム創作活動の調査研究と国際比較</li> <li>・コンピュータゲームプレイ文化の調査研究と国際比較</li> <li>・コンピュータ利用とコンピュータ教育・学習の調査研究と国際比較</li> <li>・社会科学とゲーム研究の民主化</li> <li>・ピエール・ブルデューとバルナール・ライールの社会学理論の全体像とその背景に関する研究</li> </ul>		
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゲーム研究入門書を刊行した。</li> <li>・コンピュータゲームプレイヤーに関する国際比較調査を共同で実施し、分析結果を口頭発表した。</li> <li>・文学者とコンピュータゲーム制作者の関係に関する論文を発表した。</li> <li>・日本のコンピュータゲーム創作文化に関する研究を口頭発表した。</li> </ul>		
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コンピュータゲームプレイヤーに関する論文を学会誌で発表する。また、国際会議で発表する。</li> <li>・日本のコンピュータゲーム創作文化に関する論文を執筆し、作成中の共著で発表する。</li> </ul>		
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 中山隼雄科学技術文化財団助成研究	2018年度～2019年度	個別	日本・中国・欧州のデジタルゲーム文化・市場の比較調査研究を行う。
IV 学会等及び社会における主な活動			
2020年7月～2020年9月	東京ゲームショウ2020 「センス・オブ・ワンダーナイト」 選考委員 委員		
2020年7月～2020年7月	東京ゲームショウ2020 インディーゲームコーナー(選考ブース) 選考委員 委員		
2020年4月～	国際ゲーム開発者協会(IGDA)日本 同人・インディーゲーム部会 正世話人 委員		
2020年4月～2023年3月	コンテンツ文化史学会 運営委員 会員		
2020年4月～2023年3月	日本デジタルゲーム学会 編集委員・広報委員 会員		
2019年12月～2020年9月	関東社会学会 専門審査委員 会員		
2019年11月～2020年6月	DiGRA 2020 (The 13th Digital Games Research Association Conference), Program Committee Member 委員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
1) 予算委員会、2) 大学入試センター試験監督者			

2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	准教授	氏名	東海林 渉	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
『第12章 健康医療心理学の臨床的展開』	単著	2020年	『健康・医療心理学入門[改訂版]』有斐閣	島井哲志・長田久雄・小玉正博(編)	pp.発刊予定		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要				
科学研究費補助金 科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤(C)17K04399	2016年度～2019年度	個別	研究課題名:糖尿病夫婦の疾病受容プロセスの解明と家族介入方法の開発				
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等				
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>							



2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	准教授	氏名	鈴木 努	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>●学生とのコミュニケーションの促進。</li> <li>●学生が自ら考える機会を設けること。</li> <li>●難しいことを分かりやすく(難しく思わせない)伝える授業。</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>●学生との授業以外でのコミュニケーションはあまり活発ではなかった。</li> <li>●コメントカードやレポートで学生の考察を書かせていることから、ある程度の進捗がみられる。</li> <li>●一見分かりやすいと学生は簡単だと思って手を抜くということが分かった。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>●学生とのコミュニケーションを活発にする</li> <li>●レポートの内容が充実するよう課題の出し方を工夫する。</li> <li>●テキストや資料を活用して学生の主体的学びを促進する。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
『テキスト計量の最前線—データ時代の社会知を拓く』	共著	2021年2月	ひつじ書房	左古輝人, 橋本直人, 前田一步, 河野静香, 樋熊亜衣, 鈴木努	pp.1-176		
『「安全保障技術研究推進制度の助成を受けた研究者のネットワーク可視化—KAKENデータベースを用いて—』『テキスト計量の最前線—データ時代の社会知を拓く』所収』	単著	2021年2月	ひつじ書房	左古輝人(編)	pp.147-164		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>●科研費で行った研究の出版</li> <li>●新しい研究課題での科研費の採択</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>●科研費で行った研究について論文として出版できていない</li> <li>●科研費に採択されなかった</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>●科研費で行った研究について論文を出版する</li> <li>●研究代表者としての科研費の採択</li> </ul>					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要			
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							

V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
1.学生部副部長(泉キャンパス) 2.情報処理センター所員			

2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	准教授	氏名	坪田 益美	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		学生自らが積極的に思考し、深め広げる学びを提供する授業					
今年度の進捗状況		発問を増やし、学生自らが考える機会を増やす。					
来年度の進捗目標		ジレンマに直面するような場面を授業の中に取り入れる。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		博士論文の完成					
今年度の進捗状況		これまでの研究を総括し、博士論文に取りかかっている。					
来年度の進捗目標		学位(博士)を取得する。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
科学研究費補助金 基盤研究(C)		2020年度～2021年度	共同(研究分担者)				
科学研究費補助金 基盤研究(B)		2020年度～2021年度	共同(研究分担者)	18歳市民力を育成する社会科・公民科の系統的・総合的教育課程編成に関する研究			
科学研究費補助金 科学研究費助成金基盤研究(C)(一般)		2019年度～2021年度	共同(研究分担者)	人口減少社会における多文化的社会科教育に関する国際比較研究			
科学研究費補助金 科学研究費助成金基盤研究(C)(一般)		2017年度～2020年度	個別	アジア型多文化的シティズンシップ教育の教材開発原理に関する研究			
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
2017年10月～			全国社会科教育学会 JSSEA専門委員 会員				
2017年10月～2020年9月			全国社会科教育学会 JSSEA専門委員 会員				
2016年6月～			東京書籍 教科書編集委員 委員				
2016年6月～			東京書籍 教科書編集委員 編集委員				

2016年4月～	日本社会科教育学会 評議員、学会誌編集委員 会員		
2012年4月～	宮城県教育委員会 入学者選抜試験審議会 委員 委員		
2008年4月～	全国社会科教育学会 学会員 会員		
2007年6月～	日本カナダ学会 学会員 会員		
2007年2月～	日本国際理解教育学会 学会員 会員		
2005年4月～	日本公民教育学会 学会員 会員		
2004年10月～	日本社会科教育学会 学会員 会員		
2004年10月～	日本社会科教育学会 学会員 会員		
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	准教授	氏名	吉田 雄大	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
ICT(manaba, respon, Google各種機能等)を活用した双方向性を意識した授業		2020年		今年度はオンライン授業がメインの年度であり、manaba、respon、Google各種機能などを活用した授業を行うことができた。オンタイム授業では質問用responやチャット機能などを用いて、可能な限りリアルタイムに回答することを試みた。また、授業後にも感想および質問をresponで受け、次回の授業で回答することを試みた。今年度はオンライン授業がメインの年度であったが、学生の協力もあり滞りなく授業を実施することができた。オンラインで実施した授業評価の総合評価は全て4を超えていたため、学生の満足度も比較的高かったと考えられる。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		座学および実技、両方の授業において、一方的な授業にならないように心がけている。学生とのコミュニケーションの時間を大切に、学生からのさまざまな相談に応じる。オンライン授業では、学生の不利益が極力ないように心がける。					
今年度の進捗状況		毎回の授業の感想から、responでの質問ならびに回答については好意的な評価を受けているため、ある程度の効果があったと考えている。					
来年度の進捗目標		オンライン授業、対面授業問わずICT教材などを活用して、学生の理解を深める努力をする。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
車いすスポーツにおける機械学習を用いた姿勢及び動作の推定	共同	2020年12月	第21回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(不明)	松原敏成, 相原伸平, 吉田雄大, 塩野谷明			
機械学習を用いた人物と車いすを合わせた姿勢推定モデルの開発	共同	2020年11月	日本機械学会 シンポジウム: スポーツ工学・ヒューマンダイナミクス2020(不明)	松原 敏成, 塩野谷 明, 吉田 雄大, 相原 伸平			
Position-specific characteristics of running distance for Japanese junior rugby players measured using GPS.	共同	2020年10月	25th Annual Congress of the European College of Sports Science(不明)	©YOSHIDA, Y., SHIMASAKI, T., AKUTAGAWA, T.			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		スポーツ技能の評価に関する文献研究および調査を行う。					
今年度の進捗状況		スポーツパフォーマンスの分析にドローンを活用した実験を実施することができた。機械学習については引き続き研究を進めている。					

来年度の進捗目標	機械学習への理解を深める。 機械学習を用いたスポーツ技能評価の研究を進める。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2019年4月～2021年3月		体育測定評価研究編集委員(日本体育測定評価学会機関誌) 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
1.教養学部教務委員会 2.教養学部授業評価・FD委員会 3.2020年度入学生人間科学科グループ主任 4.人間科学科パンフレット編集委員長 5.「教養学部で学ぶために」編集委員長			

2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	秋葉 勉	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
manabaを用いて、遠隔授業(オンタイム授業)を行い、課題・小テストを実施した。採点と講評を速やかに学生に配信した。		2020年4月1日～					
英語の資格試験や留学の指導		2020年4月1日～		英語検定、TOEIC、TOEFLなどの英語の資格試験の指導、英語圏の大学への留学について指導している。			
研究室やZoomでの英語指導		2020年4月1日～		研究室やZoomを利用して、希望する学生と英語で会話している。また、学生に英語で日記を書くことを推奨し、添削も行っている。			
英語による授業の実践		2020年4月1日～		言語文化学科の英語のすべての授業において、英語で授業を行っている。学生たちが英語で発言できるように工夫をしている。他学科の英語上位クラスにおいても一部英語を媒介にして授業を実践している。			
英語基礎力の復習と養成		2020年4月1日～		学生の英語習得レベルに合わせて、英語の基礎的な文法・作文問題を授業の前半で毎回行っている。			
英語の辞書の使い方、辞書携帯の実践		2020年4月1日～		英和、和英、英英辞書の効果的な利用方法を教え、学生たちの辞書携帯を習慣付けるため、毎回の授業で辞書をチェックしている。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
英語教育センター委員		2020年4月1日～		英語教育センターの委員として本学の英語教育の改革に参加した。			
教養学部授業評価・FD委員としてFDのテーマを立案し、研修会に参加した。年2回。		2020年4月1日～2021年3月31日		教養学部授業評価・FD委員			
中高大一貫教育事業「TG English Academic Forum」		2020年1月～		「英語の効果的な勉強法」と題して講演の予定であったが、コロナ感染の拡大により中止。ただし、ほぼ毎年、東北学院中・高校で実施している。			
<b>現在の課題・目標</b>		(1)研究室の解放 (2)学生との英語によるコミュニケーションを図る。 (3)英語の基礎力をマスターできる授業の実践 (4)学生の能力に合わせた授業の工夫・実践 (5)TOEIC試験への対応					
<b>今年度の進捗状況</b>		(1)Office Hourを増やしたことで研究室を訪ねて来る学生が増えた。 (2)教室や研究室で学生が英語で話すようになった。 (3)英語の基礎的な問題を授業で教えた。 (4)習熟度の低いクラスで英語の力が英検3?準2級程度まで達した。 (5)習熟度の高いクラスでは英検2級合格者がでた。準1級程度まで伸びた。 (6)大学生向け教科書の今年度は作成はできなかった。					
<b>来年度の進捗目標</b>		現在の課題・目標に加え、基礎的な英語力を養成する大学生向けの教科書を作成する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	(1)アメリカ短編小説について研究し、論文としてまとめる。 (2)19世紀アメリカ文学について資料を収集し、先行研究を研究する。		
今年度の進捗状況	(1)特に2つの短編について研究した。 (2)短編小説の論文を作成中であるが、先行研究があつたため実現できなかった。 (3)コロナ感染の影響で資料収集がほとんどできなかった。		
来年度の進捗目標	現在の課題・目標に加えて、来年度はアメリカ短編小説1篇について論文にまとめたい。		
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
IV 学会等及び社会における主な活動			
1984年4月～		日本アメリカ学会会員 会員	
1984年4月～		日本アメリカ文学学会会員 会員	
1984年4月～		日本英文学会会員 会員	
1984年4月～		日本ナサニエル・ホーソン協会会員 委員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
教養学部授業評価・FD委員会委員 英語教育センター委員			



2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	アンドリュース デール	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
オンライン授業への対応		2019年4月～		全ての授業をオンライン(オンディマンド)授業に替えるために、Manabaの諸機能(小テスト、レポート、アンケート)を利用して授業を実施する。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
講義に配布する資料の作成		2011年～		パワーポイントに基づいた資料を作成して、受講生に配布することとなっている。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
中高一貫教育事業「TG English Academic Forum」		2021年1月27日		アメリカ合衆国の地方の方言について講演した。			
個人ホームページの利用		2019年～		学生のため、個人ホームページにクラス・スケジュールや授業の解説などを公開している。			
現在の課題・目標		① 学生の異文化理解を深める。 ② 自信がある学生づくりに努力する。 ③ 学生の受講を充実するために、授業のやり方を見直す。					
今年度の進捗状況		上記目標①については、異文化理解を深めるために、世界宗教について講義を新しく始めた。 上記目標②については、より良い出来のあるライティングができるように、様式に関して厳しくチェックしていた。 上記目標③については、学生の受講を充実するために、グループ・ワークをする機会を増やした。					
来年度の進捗目標		上記目標①については、学生に異文化の体験させる。 上記目標②については、来年度、学生パフォーマンスに対してフィードバックを増やす。 上記目標③については、学生の受講を充実するために、学生の意見や感想を聞く機会を増やす。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
From Digital to Analog: Kaomoji on the Votive Tablets of an Anime Pilgrimage『Emoticons, Kaomoji and Emoji and The Transformation of Communication in the Digital Age』	共著	2020年	Routledge	Dale K. Andrews	pp.227-246		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
Ghostly Musings: When Anime Fans Traverse into the World of “Natsume’s Book of Friends”	単独	2021年1月	Mutual Images VIII International Research Workshop(Ryukoku University)	Dale K. Andrews			
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		①他の専門領域の研究者との交流を進める ②新しい研究課題に挑戦する。 ③過去の調査資料を整理して、論文を書く。					

今年度の進捗状況	<p>上記目標①については、a. オーツグラフィー (orthography) のテーマで、国内外の研究者グループで海外の学術雑誌に特集のために論文を書き、投稿した。b. アニメ聖地巡礼の研究に基づいて、日本ポピュラーカルチャーと観光に関する国際ワークショップにて発表した。</p> <p>上記目標②については、オーソグラフィー (orthography) のテーマで、アニメ聖地巡礼者の日本語の書き方について論文を書き、学術雑誌に投稿した。</p> <p>上記目標③については、過去に調べた美少女セーラーームーンファンが奉納した絵馬からのデータを分析して、論文を書いている。</p>		
来年度の進捗目標	<p>上記目標①については、来年度、発表をしたり、論文を書いたりする計画を立てる。</p> <p>上記目標②については、来年度、学会に出て、発表をしたり、論文を書いたりする。</p> <p>上記目標③については、過去の調査データを整理したり、論文を積極的に投稿する。</p>		
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2018年6月～		日本民俗学会 評議員	
2017年10月～		日本宗教民俗学会 会員	
2016年6月～		日本民具学会 会員	
2016年6月～		現代民俗学会 会員	
2016年6月～2020年5月		印度学宗教学 監事	
2013年9月～		日本宗教学会 評議員	
2012年6月～		東北民俗の会 常任委員	
2012年6月～		印度学宗教学 理事	
2010年4月～		日本民俗学会 会員	
2009年11月～		Anthropology of Japan in Japan 会員	
2008年7月～		American Anthropological Society 会員	
2008年6月～		印度学宗教学 評議員	
2007年3月～		The American Folklore Society Lifetime Member	
2006年3月～		The American Folklore Society 会員	
2005年3月～		国際宗教学宗教史学会 会員	
2002年3月～		青森県民俗の会 会員	
1999年4月～		東北民俗の会 会員	
1998年6月～		日本宗教学会 会員	
1998年4月～		印度学宗教学 会員	
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
<p>① 英語英文学研究所の所員(平成23年4月1日～現在)</p> <p>② 東北学院大学英語教育センター所員(平成27年4月1日～現在)</p> <p>③ 推薦・AO A・帰国生特別入学試験実施委員</p> <p>④ 入学試験問題〔英語A〕整理編集委員</p> <p>⑤ 東北学院大学人間情報学研究所の研究員</p> <p>⑥ 言語文化学科スクーリング担当</p>			

2020年度								
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	今井 奈緒子	大学院の授業担当の有無	無	
<b>I 教育活動</b>								
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要				
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)								
manabaのオンライン小レポート機能の使用		2020年5月7日～		遠隔授業の実施に伴い、従来の出席カードに替わるものとして毎回オンラインによる小レポートの提出を義務づけ、学生に授業内容についての所見、質疑を記すよう求めた。優れた内容の、あるいは他の学生の参考になると思われるコメントを、次週の授業冒頭に(授業進行上その時間が取れないときは、プリントにまとめて配信)紹介し、質問に回答するなどしてフィードバックに役立てている。				
2. 作成した教科書、教材、参考書								
音楽(オルガン演奏)履修者に対するガイダンス動画の提供		2020年9月14日～		後期に対面授業が解禁となったが、初回授業としてオルガンの歴史、授業を提供する楽器・構造モデルについて紹介・詳説する動画を履修学生に配信し視聴させた。学生の、授業環境への不安を取り除く効果も狙った。				
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4. その他教育活動上特記すべき事項								
現在の課題・目標		教養教育科目では、一般的視聴覚教材の他、自身の関わった演奏録画や実際の演奏を利用して学生に鑑賞能力を持たせること。専門科目の音楽史では、リンクする音楽の専門知識の解説も盛り込むこと。						
今年度の進捗状況		オンライン授業の利点として、より丁寧、密接に情報を伝えることができ、学生にとって未知のジャンルの音楽に対し興味を持たせ、共感を引き出すことにある程度成功したと感じる。						
来年度の進捗目標		学生のより深い興味、理解を目指していくこと。						
<b>II 研究活動</b>								
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)		発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書								
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)								
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)								
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文								
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)								
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)								
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)								
G. 学会における研究発表								
H. 翻訳(学術書や原典等)								
I. 特許								
現在の課題・目標		礼拝奏楽及び演奏活動一般に必要な「即興演奏」技術の向上						
今年度の進捗状況		ワークショップ、研究会						
来年度の進捗目標		引き続きバッハのオルガン作品に関する著作を執筆する						
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>								
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>								
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>								
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所		開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等		

ムシカ・ポエティカ公演 受難曲の夕べ2021	武蔵野市民文化会館小ホール	2021年3月～2021年3月	淡野太郎指揮によるH. フォン・ヘルツォーゲンベルク作曲 教会オラトリオ《受難》op.93のオルガンパートを演奏した。
Project S 現代を生きるサクバット	日本キリスト教団霊南坂教会(東京)	2021年2月～2021年2月	15人のサクバット(バロックトロンボーン)奏者とパイプオルガンの饗宴。ヴィットリア、ガブリエーリ、ハスラーほかの作品12曲を共演、H. パーセル《ダブルオルガンのためのヴォランタリー》を独奏した。
横浜みなとみらいホール1ドルコンサート	横浜みなとみらいホール	2020年12月～2020年12月	J.S. バッハ《カノン風変奏曲》《パストレツァ》C.B. バルバストル ノエル変奏曲《イエス様がクリスマスにお生まれになった時》J. シヤルパンティエ《トランペットを持った天使》を演奏した。
今井奈緒子オルガンリサイタル	本学土樋ラーハウザー記念礼拝堂	2020年12月～2021年1月	宗教音楽研究所主催の今井研究リサイタル(無観客収録・配信 視聴回数631回)。共演者:鈴木美紀子(ソプラノ) M.ヴェックマン《第2旋法のマニフィカト》P.F.ベデッカー《今日キリストがお生まれになった》J.S. バッハ カノン風変奏曲《高き御空よりわれは来たり》BWV769a P.ヨン《幼子イエス》J.シヤルパンティエ《トランペットを持った天使》他を演奏。
早稲田教会	日本キリスト教団早稲田教会	2020年10月	共演者:水野 均(オルガン) 第2部ソロでJ.S. バッハ《クラヴィーア練習曲集第3部》よりキリエ・グロリア部分の9曲を、第3部オルガン・デュオにてJ.S. バッハ カンタータBWV35よりシンフォニア、G.F. ヘンデル 《オルガン協奏曲》ト短調、L. バウメール《ソナタ》ト短調を演奏した。
チャペルコンサート	日本キリスト教団霊南坂教会(東京)	2020年10月～2020年12月	25分間のオルガン独奏。以後11月18日、12月2日に行う。
バッハ・コレギウム・ジャパン定期演奏会	オペラシティタケミツメモリアルホール(東京)／神戸新聞松方ホール(神戸)	2020年9月～2020年9月	鈴木優人指揮によるJ.S. バッハ《ミサ曲 短調》BWV232 公演にて通奏低音を担当した。
東京芸術劇場ナイトタイム・パイプオルガンコンサート Vol.32	那東京芸術劇場コンサートホール	2020年6月	J. P. スウェーリンク《イオニア旋法によるエコー・ファンタジア》《我が青春は終わりぬ》H. シヤイデマン《ガリアルダ 二調》J.S. バッハ コラール編曲《バビロンの流れのほとりにて》《幻想曲とフーガト短調》坂本日菜《九品来迎図 其ノ肆》M. デュリュフレ《「来たれ創り主なる聖霊よ」によるコラール変奏曲》を演奏した。
現在の課題・目標	バッハのオルガン作品に特化した著作の執筆継続		
今年度の進捗状況	諸事情により中断		
来年度の進捗目標	上記継続と演奏・教育・研究活動の充実		
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
宗教音楽研究所所長として所員会議(オンライン)及びメール稟議を行い、宗教音楽の夕べ、今井本人の研究活動としてのオルガン演奏会、坂戸真美オルガン演奏会を主催、いずれもオンデマンド配信を行った。また宗教音楽研究所紀要第25号を刊行した。			

2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	小林 睦	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	佐伯 啓	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
講義「読解・作文の技法」におけるWeb活用レポート評価システム		2020年9月23日～		大人数の授業を効果的に運営するためのWeb活用を継続して実践。情報科学科松本章代先生のご協力により、Webを活用したレポートの提出・公開システムおよび提出されたレポートの新しい評価方法の試みを行っている。			
講義「読解・作文の技法」におけるスマホの活用とフィードバック		2020年9月23日～2021年1月27日		情報科学科松本章代先生のご協力により、その日の授業内容に関する意見や質問を毎回授業直後にスマホから専用サイトに送らせて、次の授業時に紹介したり質問に答えることで、授業理解が深まるよう工夫している。			
講義「読解・作文の技法」における毎時間のミニ作文課題と評価		2020年9月23日～2021年1月27日		その日に学んだ表現技法を用いたミニ作文(300～600字程度)を毎時間ごとトータル14回、全員に書かせて提出させ、次の授業時までですべて読んでコメントする。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
学科パラグラフノートの企画、制作		2020年11月～		パラグラフをベースとしたレポート・論文執筆をサポートする教材「Pノート」(言語文化学科新入生用)の改良版を企画、編集、制作。			
『大学生の作文練習帳Ver.3』のオンライン版作成		2020年8月～		読解・作文の技法で用いてきたテキストの全体を見直し、授業での反応と教育的成果を考慮しながら、本文の修正と練習問題等のバージョンアップを行なった。その作業をもとに『大学生の作文練習帳Ver.3』のオンライン版を授業担当者とともに作成した。			
ドイツ語検定3級・4級受験者のための指導		2020年4月～		ドイツ語検定を受験する学生のための予備対策として、過去問を編集して作成した教材で、文法、読解、聴解の指導を行なった。			
授業を補完する練習問題の作成		2020年4月～		教科書を補完するドイツ語文法練習問題や小テストを作成・印刷し、授業時に配付して活用。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
学科ポートフォリオの制作		2020年11月～		大学生生活の学習記録となるポートフォリオ(言語文化学科新入生用)の2021年版を編集・制作。			
学科新入生へのオンラインオリエンテーション		2020年9月		言語文化学科に入学した新入生のためのオンラインオリエンテーション(グループ主任として)			
スマートフォンを利用した外国語会話訓練システムの研究協力		2020年4月～2021年1月		情報科学科松本章代先生のご協力により、ゼミ学生の総合研究に協力し、スマートフォンをドイツ語会話練習に用いる教材作成とその効果を検証する実験を行なった。			
現在の課題・目標		1.『ドイツ文法A1 Ver.2』を授業で使用しながら、さらなる改善を目指す。 2.『大学生の作文練習帳 Ver.3』の新しい例文や練習問題を考える。 3.ドイツ語テキストとして刊行した『ドイツ百科ミニ読本』を中級の授業で使用し、語学的・文化的視点からその教育効果を考える。					
今年度の進捗状況		1.ドイツ語の授業で使用する中で気づいた改善点を随時リストアップした。 2.『大学生の作文練習帳』オンライン版の例文、練習問題の改定作業を行なった。 3.『ドイツ百科ミニ読本』を中級授業(音読では初級でも)で使用し、その教育効果を分析した。					
来年度の進捗目標		1.『ドイツ文法A1 Ver.2』の改善点をさらにリストアップする。 2.『大学生の作文練習帳』の例文、練習問題の改定の準備をする。 3.『ドイツ百科ミニ読本』をドイツ語中級(総合)とドイツ語IIの授業で使用し、教育効果を分析する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							

Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
Kleines Deutschlandbuch原典の日本語訳(第三版)『Kleines Deutschlandbuch原典の日本語訳(第三版)』	単著	2020年	Kleines Deutschlandbuch 教授用資料(第三版)の改訂 白水社, Kleines Deutschlandbuch 教授用資料(第三版)の改訂 白水社, Kleines Deutschlandbuch 教授用資料(第三版)の改訂 白水社	佐伯 啓	pp.S.1~23
I. 特許					
現在の課題・目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1.プロギウムナスマタの研究をさらに深め,古典古代から18世紀のGottsched,そして現代につながる作文教育の系譜を辿る。</li> <li>2.パラグラフに関する文献資料と佐々政一の作文研究書を精査し,論文にまとめる。</li> <li>3. Klexikon日本語版制作作業をさらに進める。</li> <li>4.ドイツ引用句事典の編集史を1冊の研究論文にまとめる。</li> </ol>				
今年度の進捗状況	<ol style="list-style-type: none"> <li>1.昨年度に続き、Gottschedのドイツ語原文資料の日本語訳作業をさらに進めた。</li> <li>2. 5パラグラフ型と弁証法的対比型の論述分構成に関する文献資料をさらに収集した。</li> <li>3. Klexikon日本語版制作作業を遂行中。</li> <li>4.ドイツ引用句事典の編集史をまとめる作業を大幅に進めることができた。</li> </ol>				
来年度の進捗目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1.Gottschedのドイツ語原文資料の日本語訳作業を継続する。</li> <li>2.パラグラフに関する文献資料の整理をさらに進める。</li> <li>3. Klexikon日本語版制作作業をさらに進める。</li> <li>4.ドイツ引用句事典編集史の最終原稿を今年度中に完成させる。</li> </ol>				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要	
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
1990年4月～		日本独文学会ドイツ語教育部会 会員 会員			
1989年4月～		東北ドイツ文学会 会員 会員			
1989年4月～		日本独文学会 会員 会員			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動					

2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	下館 和巳	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							



2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	津上 誠	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
『総合研究』における「身の回りの事柄の論文トピック化推奨」と「対話型指導の徹底」		1996年4月～		指導学生に対し、身の回りの事柄を論文トピックに立てることを勧めた上で、各人との間で2週に1回、60分以上かけ、資料収集、文献内容把握、論文構想、アウトライン作り、本文執筆の全局面での「ボールの投げ合い」を密接に繰り返し、当該トピックの文化論的探求を支援。指導下の学生全員に出席を求める研究経過報告会も月1回開き、各学生の取り上げる問題が決して個人的関心事で終わるものではなく、私たちが生きる社会で共有されうる問題であることを実感させる。年度にもよるが同趣旨の合宿も実施。			
演習系諸科目における課題提出の恒常化		1996年4月～		例えば『言語文化学演習』においては文化論系の多種多様な良質文献を毎週ひたすら読んでいくのだが、指定範囲を報告者だけでなく全員が毎週読んで来るよう、最低3時間以上の読みを義務づけ、とったメモやノートのコピーの提出を求めている。			
講義系諸科目は板書と口頭のみでの授業にし、対面的状況を確保している		1996年4月～		対面的状況を大切にするため、原則としてパワーポイントもプリントも使わず、板書と口頭のみで授業を行う。(新型コロナウイルス対策でリモート授業を余儀なくされる場合も、大型ホワイトボードをバックに授業を行う姿を映し、板書と口頭のみでの授業に準ずるものとする。)			
文化人類学系講義全般における授業時提出物の徹底を通じた、コミュニケーション双方向化および授業参加促進		1996年4月～		受講生150人位までの講義では毎授業終了前に10分程かけ、設問への解答、授業理解度自己診断、授業への感想質問等を書かせる「小テスト」を実施。書かれたことを授業運営に反映させて受講生とのコミュニケーション双方向化を企てるとともに、「授業に集中していなかったことが明白な答案には極めて低い評価しか与えない」と初回予告しておき、受講生の授業参加促進を図る。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
『論文作成の留意点』(約16,000字、指導学生に対する印刷配布のみ)		1996年4月～		『総合研究』指導用に毎年改訂配布して読み合わせ会を開き、以後1年間学生に手引きとして利用して貰うもの。大きく3部分から成り、第一部分では、論文とは「他者が提示する事実や事実解釈とあなたが観察した事実とを素材にしなが、あなた自身がある結論に向かって構築する物語」である旨を説明、この観点に沿うための技法として、第二部分では論文完成までの作業プロセスを、第三部分では引用表示等の体裁作りを、それぞれできるかぎり平易に解説している。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		(1) 授業時提出物(「小テスト」)に書かれた個別質問により細やかに答える。 (2) 例年、人数の多い3年の『言語文化学演習』において、各学生に個別テーマを設定してもらい実行させてきたフィールドワークに関し、質向上を図る。					
今年度の進捗状況		(1) 講義時間との兼ね合いがあるため、時間が取りづらいが、以前よりはできるようになっている。 (2) 平生の本読みに力を入れすぎた分、各自のフィールドワークについては1回だけの面接を経て成果発表が1回だけになる見込みであり、深みという点ではむしろ後退していると言わざるをえない。					
来年度の進捗目標		(1) よりよい方法を模索する。 (2) 質の高いフィールドワークを促す仕組みを作る。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							

D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
佐久間香子(著)『ボルネオ:森と人の関係誌』	単著	2020年11月	『図書新聞』(第3472号)	津上 誠	pp.不明
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標		近現代日本の家族/ジェンダー史(文化人類学的アプローチ)			
今年度の進捗状況		ある程度進捗あるものの、成果発表には行かず。			
来年度の進捗目標		関連領域に留意しつつ考察を進める。			
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要	
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2021年1月		「家族とは何か?～ボルネオ島の異文化研究より～」同友会大学(宮城県中小企業家同友会「同友会大学」におけるレクチャー(於・東北学院大学土樋キャンパス) 助言・指導			
2021年1月		同友会大学(宮城県中小企業家同友会主催)における講義『家族とは?～ボルネオ島の異文化研究より～』於:パレスへいあん 委員			
1985年3月～		日本民族学会(現日本文化人類学会)会員 会員			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等	
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動					
図書館分館長(泉分館)					

2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	塚本 信也	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2020年度								
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	楊 世英	大学院の授業担当の有無	有	
<b>I 教育活動</b>								
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要				
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)								
小テストや自己点検など		2020年		学生の学習状況を正確的に把握するために、教育方法の改善の根拠となるものである。TGベシク授業「地球社会を生きる」において課題調査をしました。				
2. 作成した教科書、教材、参考書								
語学教材として自ら作ったプリントテキスト配布		2020年		シラバスに基づきだけでなく、小テストや自己点検などによる学生に合う内容に(14回)90分授業の時間配分を着目する。				
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
なぜ外国語を勉強するか		2020年		中国語および外国語を学習する際、書くというものは如何に重要であることをこれまでの学生の失敗例をしたものである。授業中に学生を良く伝えた。				
4. その他教育活動上特記すべき事項								
遠隔授業manabaに関して		2020年		遠隔授業manabaに関して学生の個別指導を活かして学生からの質問や意見への回答を行いました				
現在の課題・目標		学生の教養知識を如何に把握するか、学生の学習意欲を引き出す						
今年度の進捗状況		小テストによる学生の学習意欲に刺激した部分があったが、十分ではない。						
来年度の進捗目標		教育方法の改善(大人数授業への対策、板書など)とくにリモート授業はパワーポイントの利用方を工夫する必要があります。						
<b>II 研究活動</b>								
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)		発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書								
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)								
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)								
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文								
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)								
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)								
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)								
G. 学会における研究発表								
H. 翻訳(学術書や原典等)								
I. 特許								
現在の課題・目標		アジアにおける経済発展過程に関する貧困問題を発生するメカニズムの解明						
今年度の進捗状況		アジア諸国とくに発展途中国の事例分析を行われた。						
来年度の進捗目標		アジアにおける経済発展過程に関する貧困問題を発生するメカニズムの解明、とくに先進国の日本の事例分析						
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>								
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>								
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>								

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	渡部 友子	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
Zoomを利用した質問受付		2020年4月1日～2020年8月31日		オンデマンド形式で実施した英語の授業において、授業の時間帯にZoomミーティングを設定し、質問がある個人が入室できるようにした。利用者数は少なかったが、「どこでつまづいたか」が明確になったため、それを課題の解説に反映させることができた。			
記述力強化の指導		2020年4月1日～2020年8月31日		複数の担当科目において、記述課題(～とは何か、～のはなぜか)を課し、優れた解答を紹介した解説動画を公開することに努めた。ただし対面の指導はできなかつたため、効果の確認は難しかった。			
アクティブラーニングの実施		2020年4月1日～2020年8月31日		「社会言語学」では、manabaの掲示板を利用して、受講者が事前課題に対するコメントを書き込み、互いのコメントを見ることができるようにした。対面授業ができなかつたため、グループワークはできなかつたが、事後に提出されたコメントを見る限り、学びの深さは維持できたように思われる。			
成績評価の可視化		2020年4月1日～2020年8月31日		小テスト、発表、宿題、発言などによる得点累計を毎週ハンドルネームで掲示し、学習成果を学生本人が確認しやすくし、意欲や危機感を持つことを促した。			
コンピュータや携帯機器の活用		2020年4月1日～2020年8月31日		manabaやGoogleドライブを利用して、講義資料の他、予習課題、小テストの予告、コメント集などを掲載した。またレポート機能により、提出物の電子化を推進した。新たにZoomを利用し、講義の動画配信も行なった。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
英文読解を助ける発問と補助資料の改善		2020年4月1日～2020年8月31日		「原典講読(英語)」において前年度作成した発問(前期400問近く)を改善し、再度利用した。内容理解を助ける動画資料も再度利用した。しかし残念ながら、オンライン授業であったためか、前年度ほど議論は活発にならなかつた。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
英語教員採用試験対策講座(本学教職課程センター主催)		2020年7月9日～2020年7月16日		リスニングとリーディングの2講座を動画で作成し、受講者に配信した。			
現在の課題・目標		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学生の英語習熟度に合わせて、教材や指導方法を変える。</li> <li>2. 言語文化学科で(第二外国語だけでなく)英語を学びたい学生に、英語力をつけさせる。</li> <li>3. 講義科目において、学生間の学び合いや講義外での学びをうながす。</li> <li>4. 英文を読むときに、自分の知識を使って行間を埋めることが重要であることを学生と教員に伝える。</li> </ol>					
今年度の進捗状況		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教養学部の2年生英語bクラス(中位層)の指導において、読み取りのつまづきを個別に観察する機会を得て、全体指導に生かすことができた。</li> <li>2. 教員採用試験対策講座において、スピーキングの重要性を説く機会を得た。</li> <li>3. 遠隔授業により、学び合いの方法を対面から掲示板に変更した。</li> <li>4. 論文にまとめるに至らず。</li> </ol>					
来年度の進捗目標		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2年生英語の担当から外れるが、再度担当する3年生のEnglish Theme Writingにおいて指導法を改善する。</li> <li>2. 教員採用試験対策講座において、スピーキングの重要性を説き、新年度の指導につなげたい。</li> <li>3. 講義科目において反転授業に挑戦し、学生間の学び合いの機会を増やす。</li> <li>4. 英文法の指導において、行間を埋めることの重要性を説く。現職教員対象の講座で扱う予定。</li> </ol>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							

<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>				
英語教育センターにおける遠隔授業への対応	共著	2021年3月	東北学院大学教育研究所報告集第21集, 東北学院大学教育研究所報告集第21集	◎渡部友子・ドンネレアリーセ・薄井洋子・矢島真澄美・阪口慧 pp.49-59
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>				
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>				
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>				
<b>G. 学会における研究発表</b>				
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>				
<b>I. 特許</b>				
現在の課題・目標	1. 「英文法」の本の執筆を目指し、講義を通して内容を精選する。 2. 「英語教育センター」の活動を引き続き学内で発表する。			
今年度の進捗状況	1. 6ヶ月の研修休暇を利用し、現職教員向けの英文法講座の内容を新規に作成した。 2. 英語教育センターの活動報告を、特任講師4名と協力して学内誌に発表した。			
来年度の進捗目標	1. 新規に作成した講座内容を文章化し、講座開講前に論文として発表する。 2. 教育研究所報告集第22集に報告書を掲載する。			
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>				
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要	
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>				
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>				
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等	
現在の課題・目標				
今年度の進捗状況				
来年度の進捗目標				
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>				
英語教育センターの副所長として、TOEIC Bridge実施の統括のほか、全学必修英語の運営に携わり、発生した問題の解決に動いた。 言語文化学科の英語新規人事において、選考委員長を務めた。				

2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	井上 正子	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
東北生活文化大学高等学校への出張授業		2020年7月31日		2020年7月31日:東北生活文化大学高等学校にて出張授業を行う。内容は「生活の中のジェンダー」。			
現在の課題・目標		①ゼミ:フェミニズムやジェンダーについて、自分自身の問題として分かりやすく伝えつつ、表象文化を理論的に分析できるようながす。 ②英語圏文学:モダニズム文学の諸問題(テーマ、手法、文体等)について考察をうながす。					
今年度の進捗状況		①ゼミの運営:表象文化とフェミニズムやジェンダー批評についての理解を深められた。 ②英語圏文学:モダニズム文学のテーマや手法についての理解を深められた。					
来年度の進捗目標		引き続き表象文化とフェミニズムやジェンダー批評について、学生の理解をより深められるよう工夫する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		①博論の加筆修正と和訳 ②理論書の翻訳(担当章) ?海外出版(担当章)					
今年度の進捗状況		①加筆修正 ②担当章の翻訳(英→和) ?担当章の西語チェック					
来年度の進捗目標		①博士論文の出版 ②共訳書の出版 ③海外論文を共著(論集)として出版					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
2019年4月～			MLA 会員				
2017年4月～			日本アメリカ文学学会会員 会員				
2016年4月～			日本比較文学学会会員 会員				



2013年4月～		The Society for Caribbean Studies (UK) 会員 会員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
1. 英語教育センター所員 2. 学生委員 3. AO入試委員 4. ハラスメント相談員			

2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	巖谷 睦月	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
教養学部長賞受賞(卒論指導)			2021年3月24日		高山未玖「2つの《若者と死》から紐解くモローの死への理想」		
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
1930年代と1950年代の政治と芸術をめぐる飛行の表現について:ルーチョ・フォンターナの経験から		単著	2021年3月	立命館言語文化研究, 32(4)		巖谷睦月	pp.51-82
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
〈未来派の世界再構築〉を読むー一目に見えないものの知覚と空間主義への影響		不明	2021年3月	「イタリアにおけるモダンとアヴァンギャルドの相克 I 未来派の宣言文を読む」於 立命館大学衣笠キャンパス 平井嘉一郎記念図書館1階カンファレンスセンター(日本)		巖谷睦月	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
科学研究費補助金 ルーチョ・フォンターナの新しいモノグラフィの為に:補完研究として		2018年度~2021年度	個別(研究代表者)		日本学術振興会 科学研究費補助金(若手研究)		
IV 学会等及び社会における主な活動							
2019年4月~				イタリア近現代史研究会会員 会員			

2018年6月～	イタリア学会 会員		
2009年4月～	日伊協会会員 会員		
2004年4月～	美術史学会 会員		
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	岸 浩介	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
manabaを利用した授業内・授業外課題作成		2020年～		講義科目(「言語基礎論IA」「言語獲得論」「原典講読A, B」)において、オンラインシステムmanabaのレポート機能を用い、授業外課題(振り返り課題)の作成を課した。また、外国語科目(「英語IA, B」「英語IIA, B」)において、同システムの小テスト機能を用い、授業内・外の演習問題解答課題を課した。			
responを利用した双方向形式授業の展開		2020年～		講義科目(「言語基礎論IA」「言語獲得論」「原典講読A, B」)と外国語科目(「英語IA, B」「英語IIA, B」)において、オンラインシステムresponを用い、教員と学生間の双方向の情報伝達を活用した授業を展開した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
高大連結事業の講師		2020年～		高大連結事業の一環として、2021年1月28日に、東北学院榴ヶ岡高等学校で出張講義を行った。			
現在の課題・目標		<p>①ワークシートによる課題作成や、manaba、Responを用いたコメント・課題提出を課すことで、学生の授業内容理解度の向上と主体的に学習する姿勢の定着をはかる。</p> <p>②manabaの振り返り課題のコメント・感想欄や、Responでのコメント・アンケート送信を通して学生とのコミュニケーションを図り、迅速な授業改善に役立てる。</p> <p>③初回の授業で配布した授業概要に教員の連絡先(メールアドレスなど)を記し、授業時間以外でも学生による質問や相談に対応できるよう配慮する。</p>					
今年度の進捗状況		<p>①上記①のワークシートについては、遠隔授業のため実施する機会が無かった。manaba、Responの利用については「言語基礎論IA」「言語獲得論」「対照言語学」「原典講読A, B」「英語IA, B」「英語IIA, B」などの科目で実施した。</p> <p>②上記②については、manaba、Responでのやりとりの中で、学生から寄せられた質問やコメント・要望の一部を授業で紹介し、ある程度応えることができたので、一定の効果があつたと言える。</p> <p>③上記③については、メールでの問い合わせや連絡が相当数みられたため、一定の効果があつたと言える。</p>					
来年度の進捗目標		<p>①上記①については、上記の科目では継続して実施、また、上記以外の科目でも実施する予定である。</p> <p>②上記②についても、同様に上記の科目手は継続して実施、また、上記以外の科目でも実施する予定である。</p> <p>③上記③については、来年度もメールやmanabaの個別指導機能を利用し、より幅広い対応を図る。</p>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		<p>①主に英語を対象とした、名詞句内の叙述・修飾関係、特に前位・後位用法を持つ形容詞による名詞修飾表現が持つ統語的・意味的属性の解明に向けた研究を遂行する。</p> <p>②主に英語を対象とした弛緩同格表現や挿入語句表現の統語的・意味的属性の解明に向けた研究を遂行する。</p>					

今年度の進捗状況	①上記①については、英語を対象言語にし、ラベル決定アルゴリズムと主要部配置条件 (Final-Over-Final Condition) を採用した極小主義理論の枠組みの下での研究活動に従事した。研究成果は論文にまとめ、現在、校正作業を行っている。 ②上記②についても、英語を対象言語にし、今年度も継続して、極小主義理論の枠組みの下で研究活動に従事した。		
来年度の進捗目標	①上記①については、出版に向け、滞りなく校正作業を進めたい。 ②上記②についても、極小主義理論の枠組みで、これらの表現がどのように派生されるかについて研究を進めたい。		
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2004年4月～	The Formal Linguistics Circle会員 編集委員		
2004年4月～	The Formal Linguistics Circle会員 学会開催責任者		
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
1. 学務部副部長 2. 英語教育センター実施委員会 3. 英語教育センター運営委員会			

2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	金 永昊	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
課題を提供し、それを解決することを通じた学習を実践		2020年		「韓国・朝鮮語コミュニケーション2」の授業で、日韓の文化の違いについて調査し、発言させた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
韓国における短編白話小説の受容—『古今小説』第三十一巻「闇陰司司馬貌断獄」と『夢決楚漢訟』—	単著	2020年8月	和漢比較文学会、『和漢比較文学』第65号	金 永昊	pp.19-26		
『安政見聞録』試論—安政大震災についての生々しい記憶と教訓—	単著	2020年6月	(韓国)韓国日本思想史学会、『日本思想』第38号	金 永昊	pp.81-102		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
東北地域における韓国関連専門家養成の現状と課題—東北学院大学の事例を中心に—	単独	2020年11月	駐仙台韓国教育院、『2020日本東北地域韓国語教育者シンポジウム』(日本)	金永昊	pp.pp.23-42		
H. 翻訳(学術書や原典等)							
『安政大震災についての生々しい記憶と教訓—『安政見聞録』訳注—』	単著	2020年12月	(韓国)ジェイエンスー	金 永昊	pp.1-235		
I. 特許							
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 科研費の研究(日韓両国の中国白話小説の受容様相比較)</li> <li>● 『安政見聞録』の韓国語訳を完成したが、出版社が見つからない。</li> <li>● 韓国で『(仮)日本近世文学研究—了意・義端・秋成一』を出版したい。</li> <li>● 博士論文を出版したいと考えており、現在のところ、70%ぐらい完成している。</li> <li>● 昨年からの課題であるが、明治期の教科書における神功皇后像について調べ、神功皇后の三韓征伐記事が、朝鮮を植民地にする直前の日本人の対朝鮮観にいかなる影響を与えたか調べたい。</li> <li>● 『(仮)父の時代 息子の記憶』を東北大学の金鉉哲先生、本学の卒業生で翻訳家の遠藤順子さんと3人で翻訳済み。出版社と交渉中。</li> </ul>						
今年度の進捗状況	いずれも問題なく進捗している						

<p>来年度の進捗目標</p>	<p>●韓国で『(仮)日本近世文学研究—了意・義端・秋成一』、日本で『(仮)近世初期小説研究—了意・義端—』を出版したい。          ●科研費の研究成果を韓国・中国で発表したい。          ●まだ韓国と日本の学界に知られていない英祖改訳本『三綱行実図』を発見したが、それについての朝鮮語史・文化史的意義を書きたい。</p>		
<p>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</p>			
<p>競争的資金の名称</p>	<p>採用年度(西暦)</p>	<p>個別・共同の区分 共同の場合の役割分担</p>	<p>概 要</p>
<p>競争的資金等の外部資金による研究 名著翻訳支援(韓国研究財団)</p>	<p>2018年度～2021年度</p>	<p>共同</p>	<p>本研究は、韓国研究財団(旧、韓国学術振興会)の支援により、井原西鶴の『武家義理物語』を韓国語で訳注、解説を付けて刊行する作業である。この作品の翻訳・紹介を通して、現在の日本人の考え方を支えている「義理」という概念はいかなるようなものなのか、これは我々韓国人が日本を理解するうえでどのように役に立つかを提示することが出来ると思われ、文学・社会学・思想・宗教などの関連分野において非常に重要な意義を持つと考えられる。</p>
<p>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</p>			
<p>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</p>			
<p>展覧会・演奏会・競技会等の名称</p>	<p>場 所</p>	<p>開催年月日(西暦)</p>	<p>発表・展示等の内容等</p>
<p>現在の課題・目標</p>			
<p>今年度の進捗状況</p>			
<p>来年度の進捗目標</p>			
<p>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</p>			
<p>1. 国際交流部副部長を務めている。          2. 言語文化学科の広報委員として、学科ホームページを管理している。          3. キャンパス禁煙化推進委員会の委員を務めている。          4. 将来構想人事委員会委員を務めている。</p>			

2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	金 亨貞	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
油谷幸利氏(同志社大学名誉教授)と共著で韓国語の初級読解テキストの『韓国語読解ポイント100』(仮題)を執筆中。2020年度に白帝社で出版予定。		2019年4月～2020年9月					
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							



2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	信太 光郎	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
授業の工夫		2020年		原典講読では科学論の啓蒙的テキストをよんでいるが、オンライン授業の機会を生かして、アプリなどで視覚的にイメージを具体的に見せることで学生の理解を促している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
有斐閣の論理学の教科書を出版		2020年					
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		(1) 抽象的な哲学的問題をなるべく学生の実感に近いところに戻して理解させる。 (2) 学生への多様な文献・資料の提示。学生による積極的な資料発掘への働きかけ。 (3) 自らの研究と授業との連携					
今年度の進捗状況		(1) 小テスト、レポートから判断すると、真面目に聴く学生にはそれなりの効果はある。 (2) 小テスト、レポートから判断すると、ビジュアル資料をふくめた多様な文献・資料の提示は学生に興味を起させる効果はあったと判断される。他方で学生が自ら積極的に資料を探すということにはあまりなっていない。 (3) 授業しながら自らも思考を深めるという良い循環ができつつある。					
来年度の進捗目標		(1) 自身の研究を深めることにより、抽象的な問題と個別の実感的な問題との架橋をいつそうすすめていきたい。 (2) 学生に自ら積極的に関連の文献・資料を探るよう働きかけを強めたい。 (3) 今後は自らの研究の進展をさらに授業にフィードバックしていきたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		(1) 戦争論の論文執筆中 (2) 論文執筆にむけ、ハイデガーのアリストテレス論の研究					
今年度の進捗状況		(1) 鋭意執筆中 (2) 資料の収集および読解					
来年度の進捗目標		(1) 出版 (2) 資料の読解。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
入試採点委員として、国語問題の採点にたずさわった。 AO委員として、AO入試の面接にたずさわった。			

2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	城山 拓也	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
専門科目(「言語文化学演習」)の授業方法		2020年4月1日～		ゼミでは、基本的に学生の主体的な発表と議論を促している。発表者1名のほか、別にコメンテーター1名を事前に指名しておき、発表内容についてコメントしてもらう。そのほかのゼミ生にも、質問事項を事前に考えてきてもらい、学生が主体的に発言できる場になるよう努めている。			
外国語科目(「中国語」)の授業方法		2020年4月1日～		外国語科目(「中国語」)については、適宜小テストを行い、学習へのモチベーション維持を図っている。また、1か月半～2か月が過ぎたところで、復習の週を設けた上で、振り返りの中テストを行った。その後、それぞれの学生の理解度に応じて、学習の方法について、きめ細やかに指導するようにしている。			
オンタイム授業におけるアンケート機能の重視		2020年4月1日～		2020年度は、学生にとっても教師にとっても、初めてのオンタイム授業となった。したがって、学生が授業内容を理解できているかどうか、また授業のスピードについてどう感じているか、適宜zoomのアンケート機能を用いて把握するよう努めた。			
オンタイム授業におけるペントップとホワイトボード機能の使用		2020年4月1日～		zoomでのオンタイム授業にて、ペントップ(XP-PEN)を用いて、zoom機能のホワイトボード機能で板書、説明を行っている。授業終了後、ホワイトボードを保存した上、manabaの掲示板に張り付け、学生が自由に授業内容を振り返ることができるようにしている。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
「「初めて尽くし」の授業運営」(『東北学院大学FDニュース』第32号、2020年11月30日)		2020年11月30日		「2020年度新任教員座談会」(2020年9月16日10:00～12:00、東北学院大学FD推進委員会主催)での発言内容である。			
出張講義		2020年10月20日		仙台向山高校にて、出張講義を行った。「中国語圏の言語と文化」というテーマでセミナーを開くとともに、学生の発表に対して質疑応答の練習を行った。			
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
連続公開講座「大人の教養倶楽部」——「ウィズ(with)コロナの時代」における新たな学び		2020年12月12日		「現代中国の作家と新型コロナウイルス—方『武漢日記』を読む」というタイトルで講演を行った(zoomによるオンタイム)。新型コロナウイルス騒動がはじまった当初の武漢の状況を紹介するとともに、日本人がいかに現代中国に向き合うのか、『武漢日記』を通じて考察を加えた。			
<b>現在の課題・目標</b>		<p>①1年生の外国語科目(「中国語」)は、全体的に、後期になると学生の成績の差が激しくなる傾向がある。</p> <p>②週一コマの外国語科目(特に中国語(文学部・1年次))の場合、中国語という言語の性格上どうしても無味乾燥な授業となってしまう(発音とピンイン練習に終始する)。結果として学生の学習へのモチベーションが低くなっているように思われる。</p> <p>③中国語中級(教養学部・2年次)の授業は、受講生が多いせいか、一人一人に対するきめ細やかなコミュニケーションがうまくいっていない。</p> <p>④言語文化学演習において、発表者・コメンテーター以外の学生が予習をしていない場合があり、発言の質も低いことが多い。</p> <p>⑤学生に尋ねると、泉キャンパスの学生は、ネイティブと交流する機会がないという。国際交流スペースの活用を望みたい。</p>					
<b>今年度の進捗状況</b>		<p>①授業の合間に中国・中華圏文化を紹介したり、また雑談を入れたりして、やる気のない学生のモチベーションが上がるよう努力した。ただし、やはり少数ではあるが、どうしても学習意欲が上がらない学生がいることも事実である。</p> <p>②発音の基礎練習の時間を短くしたうえで、会話練習に重点を置いた。ただし、それでも使える中国語になったとは思えない。</p> <p>③manabaのレポート機能を使って、スマホ録音による中国語朗読の提出、およびそのほか宿題を提出させるようにした。ただし、後期になるにしたがって、やる気のある学生は回答の質が上がる一方で、やる気のない学生はいつまでも低空飛行のままであった。</p> <p>④今年度は新型コロナウイルス騒動の影響もあり、雑談をすることを厭わず(もちろん教員が独りよがりにならないよう気を付けた)、学生一人一人とコミュニケーションをとるよう心掛けた。ただし、一部の学生に対しては、まだまだやる気が引き出せていないように思える。</p> <p>⑤新型コロナウイルスの影響により、対面での国際交流が叶わなかった。</p>					

来年度の進捗目標	①特に成績の悪い学生には、専用のプリントを配布するなどして、なんとか中国語の面白さを紹介したい。 ②発音の基礎練習をピンポイントに絞って行い、なおかつ会話も最小限のものを反復練習させる。(中国語の場合、週2コマの授業数が欲しいところではあるが……) ③2020年度の授業よりも、もう少し難易度を上げて、課題を多めにした方がいいかもしれない。(現在の中国語中級の授業は、一つの教室に対して受講者数が多すぎるというのが本音である) ④定期的に課題図書を提示して、レポートを書かせるつもりである。 ⑤新型コロナウイルスの影響が少なくなれば、国際交流スペースの活用を促したり、また留学生との交流の場を設けるなどしたい。
----------	---

## II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
-----------	---------	---------------	----------------------	--------	------

### A. 学術書

#### Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)

諷刺とユーモア——「小陳旅京記」と「留京外史」について	単著	2021年3月	中国書店、『夜の華——中国モダニズム研究会論集』	城山 拓也	pp.202-229
-----------------------------	----	---------	--------------------------	-------	------------

#### Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)

#### C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文

#### D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)

#### E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)

ダンスする中国の現代(研究員紹介)	単著	2021年3月	人間情報学研究, 26	城山 拓也	pp.99-100
-------------------	----	---------	-------------	-------	-----------

梅干菜の入った餅	単著	2021年3月	TONGXUE(61)	城山 拓也	pp.14-15
----------	----	---------	-------------	-------	----------

#### F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)

#### G. 学会における研究発表

#### H. 翻訳(学術書や原典等)

### I. 特許

現在の課題・目標	①個人研究1: 中国の画家・葉浅予の1920～30年代の創作の全貌を明らかにした上で、その文化史上の意味を明確にする。 ②個人研究2(科研費): 葉浅予の戦前から戦後にかけての創作の断絶と連続について、基礎資料を発掘、整理した上で検討を進める。 ③共同研究1(科研費): 中国におけるプロパガンダ芸術が、戦中から戦後にかけて、いかに継承、展開したのか、漫画研究の立場から明らかにする。 ④共同研究2(科研費): 戦時中の重慶の諸文化・芸術を、モダニズムというキーワードの下、漫画研究の立場から整理、検討する。
----------	---

今年度の進捗状況	①葉浅予の1920～30年代に関する研究論文2篇を執筆した。1篇は本年度中に刊行できた。もう1篇は新型コロナウイルスの影響で刊行が延期された(来年度中に刊行される予定である)。 ②研究書と影印本資料を購入し、閲覧した。ただし、新型コロナウイルスの影響で、研究報告ができなかった。また、中国出張も不可能であった。 ③打ち合わせとシンポジウムに参加した(いずれもzoomを利用した)。 ④研究書と影印本資料を購入、閲覧した。また打ち合わせに2回参加した(いずれもzoomを利用した)。予定していた中国出張は、新型コロナウイルスの影響で取りやめとなった。
----------	---

来年度の進捗目標	①これまでの研究成果をまとめ、単著を書き上げる。2022年度刊行予定。 ②新型コロナウイルスの状況を見極めつつ、中国へ出張し、資料調査を行う。今後の情勢が不透明であれば、研究の方向性を変えなくてはならないかもしれない。 ③論文を一篇執筆する予定である。2021年度刊行予定。 ④新型コロナウイルスの状況を見極めつつ、中国へ出張し、資料調査を行う予定である。
----------	---

## III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	戦火とモダン——日中戦争時期重慶の文化芸術における表現様式の研究
科学研究費補助金 日本学術振興会 科学研究費助成事業 若手研究	2018年度～2021年度	個別(研究代表者)	中国近代美術における漫画の役割——1940年代の葉浅予を中心に

科学研究費補助金 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2017年度～2021年度	共同(研究分担者)	建国初期中国を移動する身体芸術メディア・プロパガンダー戦時期からの継承と展開
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2020年4月～2021年3月	立命館大学 衣笠総合研究機構 国際地域研究所 客員研究員		
2016年4月～	日本マンガ学会 会員		
2011年4月～	中国人文学会 会員		
2010年4月～	中国モダニズム研究会 会員		
2008年4月～	日本現代中国学会 会員		
2008年4月～	中国文芸研究会 夏合宿幹事		
2005年4月～	中国文芸研究会 会員		
2005年4月～	大阪市立大学中国学会 会員		
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
国際学部設置準備委員会			

2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	高橋 直彦	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
『新視座 英文法一ひな形方式101 第1階梯』	単著	2020年11月	三恵社, 1, 1	高橋直彦	pp.1-348		
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等				
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>							

2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	原 貴子	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
遠隔授業における毎回の課題に関する学生同士の交流の促しと学生の意欲の維持に関する工夫を行った。		2020年4月1日～2021年3月31日		遠隔授業では、毎回の課題に関して、提出済みの学生同士が相互閲覧をして気づいた点をコメントした。学生同士の交流(コメント)を促すために、ある一定の期間、教員からも複数の学生たちにmanaba上で個別にコメントをつけるようにした。その結果、特に前期の授業において学生間の交流(コメント)が比較的多く見られ、他の学生からのコメントが励みになったという声や自分とは異なる考え方を知ることができて刺激を受けたという声などが聞かれた。また、毎回の課題に関して、学生の理解を取った上で、優れた解答やよく考えられた意見を書いた学生の氏名をあげてどこが優れているのかをmanabaの掲示板で解説した。この点についても、授業アンケートでやる気の維持につながったという評価を得た。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①小説を論理的に解説する力を養成する。 ②明治期～昭和初期の文学史的展開を理解した上で主要作品に関する知識を学生が身につけられるようにする。					
今年度の進捗状況		上記目標①については、manabaで実施した課題において、学生たちの意見がテキスト内から証拠を詳細に挙げながら構築されるようになってきたため、少しずつ達成されつつあると捉えている。 上記目標②については、日本文学史Ⅰ・Ⅱのテストの平均点が昨年度に比べて上がり、板書以外にメモを積極的に取る学生が多数見られたり、日本文学史の講義で扱った小説を自分でも読んでみたいと何度か言われたりしたため、かなり進捗が見られたと考えている。					
来年度の進捗目標		上記目標①については、学部学科によってばらつきが見られるため、文学に普段なじみのない学生たちにも伝わるように教育方法を工夫する。 上記目標②については、一部の学生たちにおいては、口頭による説明をメモすることに懸命になる余りに、90分という講義時間を超過してしまうことがあったので、板書量と口頭による解説の量のバランスを見直す。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
『『森鷗外の現代小説 不平等のなかの対等』』		単著	2021年3月	花鳥社		原 貴子	pp.1-270
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		森?外の現代小説の研究。					
今年度の進捗状況		対等・平等という問題に関わる森?外の現代小説に関する研究をまとめ、学術書として刊行した。					
来年度の進捗目標		対等・平等という問題に限らずにより幅広く森?外の文学を研究する。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2011年6月～		昭和文学会 会員	
2009年4月～		日本近代文学会 会員	
2003年4月～		上智大学国文学会 会員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
1.大学案内編集委員 2.慶弔委員			



2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	坂内 昌徳	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	房 賢嬉	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
総合研究における査読制度の導入		2020年5月1日～2021年1月30日		3年次のゼミにおいて、学生の発言が少なく、参加が消極的だったため、議論がなかなか深まらないという問題点があった。2020年度は授業が遠隔になったことで、さらに消極的になることが予想されたため、総合研究では学生が責任を持ってゼミに参加できるような仕組みを作った。具体的には、学期のはじめに発表者と査読者(主査1名、副査1名)を決め、①発表資料のアップロードは1週間前とし、発表者以外の学生が発表原稿に対して一言コメントをつける。②主査と副査は、発表者の発表原稿を細かく読み、コメントや質問をする。③発表者は仲間の質問に対する「回答集」を作り、ゼミの前日までにアップロードする。④ゼミでは主査の司会のもと、回答集に基づき、議論を深めるという一連の流れを作った。ゼミが終了したら、2日以内にゼミで見えてきた課題を「ふり返し」としてまとめ、アップロードすることで、次に何をすればよいかを言語化し、学生が主体的に卒業論文に取り組めるようにした。上記のプロセスを通して、学生の発言量が増え、議論が深まり、議論の進め方が進歩したと考えられる。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		オンデマンド型の授業で、学習者同士のコミュニケーションを促す方法を探る。					
今年度の進捗状況		オンデマンド型の授業でも、なるべく学生が主体的に考え、参加できるように工夫してきたが、学習者同士のやりとりはできなかつたことが課題として残った。					
来年度の進捗目標		manabaの掲示板を積極的に利用し、学習者が意見交換したり、お互いのレポートについてピア・レスポンスする機会を提供していきたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
台湾日本語教師の協働学習に対する期待と不安ー台湾の日本語教育における協働学習の発展を目指してー『『アジアに広がる日本語教育ピア・ラーニングー協働実践研究のための持続的発展的拠点の構築』』	共著	2021年2月	ひつじ書房	トンプソン美恵子, 房賢嬉, 小浦方理恵, 荒井智子, 張瑜珊, 羅曉勤, 池田玲子	pp.183-192		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		日本の大学院で学ぶ中国朝鮮族留学生が持つ複数の言語が生活においてどのように機能しているかについて共同研究をしている。複言語使用者として中国語・朝鮮語・日本語の三言語話者である中国朝鮮族留学生に注目し、三言語の福祉状況の評価として、彼女の言語使用と意識を当事者の視点から明らかにすることを目標としている。					
今年度の進捗状況		インタビュー調査や分析、論文執筆が完了し、投稿中である。					

来年度の進捗目標	今回の研究は、中国朝鮮族留学生1名に焦点を当てた研究だが、複言語話者が持つ言語が生活においてどのように機能しているかをより深く検討するためには、対象者を増やして調査する必要がある。今後、さらに複言語話者へのインタビュー調査を行う予定である。
----------	--

### Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2017年度～2021年度		<p>令和2年度は、以下2つの研究活動を行なった。</p> <p>1) 中国朝鮮族留学生を対象としたインタビュー調査の分析 昨年度実施した追加のインタビュー調査の分析を進め、バイリンガリズムの全体論的視点から、日本の大学院(博士後期課程)で学ぶ中国朝鮮族留学生の持つ複数の言語が、留学生活においてどのように機能しているかを探った。具体的には、以下2つの研究課題を設けてSCATによる分析を行なった。課題1. 三言語それぞれを使う話者自身のイメージはどのようなものか。課題2. そのイメージは、どのような言語使用経験によって構築されたか。結果、中国語を使う自分はお母さんと例えられ、その理由は「[ホスト社会における中国語の万能性]として語られた。韓国語を使う自分はおばあさんと例えられ、その理由は「[韓国語での感情表現と家族伝統性]とされた。日本語を使う自分はお父さんと例えられ、その理由は「[日本語での実力証明]にある」と語られた。三カ国語を使う自分はおじいさんと例えられ、その理由は「[高い権威]や[自尊心]であるとされた。また、この留学生の語りから、「公的言語としての中国語」と「私的言語としての韓国語」と「経済的な利益につながる日本語」を相補的に使用している様相が浮かび上がった。インタビュー・データの文字化と翻訳及び分析を完了させ、研究成果を論文にまとめて投稿の準備を行なった。</p> <p>2) 「複言語使用による内容と日本語の統合型学習」の教室談話データの文字化 国際関係を専門とする大学院(博士前期課程)の日英二言語プログラムにおいて、専門科目である日本の戦後史を内容とした日本語クラスの学習活動の一次分析として、日本語・英語・中国語の三言語が使用されている教室談話の音声の一部を文字化した。</p>

### Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2020年～	言語文化教育研究会 会員
2010年～	協働実践研究会 会員
2004年～	日本語教育学会 会員
2002年～	お茶の水女子大学日本言語文化学会 会員

### Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

### Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	フリック ウルリッヒ	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
遠隔式授業品質の向上		2020年5月1日～2022年1月28日		未経験の遠隔式授業の問題点を把握、そして分析の上、品質の保障と向上に尽力しました。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		語学の授業上、主に二つの課題があると感じています。一つはどのようにして学生たちを主体的に身に付けた知識を使うように導けるかとのことです。実用的なものとしては、言葉を実際に使用することが上達するために欠かすことができません。もう一つは中級レベルの授業で学生たちを原文のドイツ語テキストになじませることです。					
今年度の進捗状況		個別指導を実施できた限りには、上記の課題をうまく解決できたケースもあります。					
来年度の進捗目標		来年度はさらに広い範囲で上記の課題を乗り越えることを目標としています。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		今取り組んでいる研究プロジェクトをさらに深める他、次のプロジェクトにつなげるのは課題となっています。					
今年度の進捗状況		今取り組んでいる研究プロジェクトを進んでいます。					
来年度の進捗目標		今取り組んでいる研究を次のプロジェクトに展開させたいと考えています。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
2021年3月			史友会・学会出席 会員				
2020年12月			近現代東北アジア地域史研究会・出席 委員				
2020年11月			日本植民地教育史研究会定例研究会・出席 委員				
2020年10月			日本植民地教育史研究会定例研究会・出席 委員				
2020年8月			史友会・学会出席 会員				
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>	
言語文化学科のオープンキャンパス委員、そして教養学部実施委員として6/13に行われた初夏のオープンキャンパスと7/23に行われた夏のオープンキャンパスの企画と運営に関わりました。	

2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	松谷 基和	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		オンライン授業の運営でいかに学生の満足度を維持するか					
今年度の進捗状況		オンライン授業での試行錯誤が続いた。後期にはハイブリッド授業に先駆的に取り組み、英語教育センターの研修資料にハイブリッド授業の動画を提供した。					
来年度の進捗目標		オンライン授業で得た経験を、今年のオンライン授業に生かす。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
3・1独立運動における「万歳」の歴史的意--朝鮮王朝への挽歌と近代的ネイションとしての朝鮮の産声	単著	2020年10月	韓国・朝鮮の文化と社会 19号(韓国朝鮮文化研究会)、風響社、韓国・朝鮮の文化と社会 19号(韓国朝鮮文化研究会)、風響社	不明	pp.41-76		
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
2020년, 후쿠시마에서코로나 재해를 생각한다 [2020年、福島からコロナ災害について考える] 『2020년, 후쿠시마에서코로나 재해를 생각한다 한다 [2020年、福島からコロナ災害について考える]』	単著	2020年8月	※制限文字数50文字を超えたので『概要』へ移行。、※制限文字数50文字を超えたので『概要』へ移行。、※制限文字数50文字を超えたので『概要』へ移行。	不明	pp.pp. 208-223		
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		二冊目の単著出版にむけた研究時間の確保					
今年度の進捗状況		コロナ対応、調査出張自粛により、予定通りの活動はできなかった。					
来年度の進捗目標		単著に向けた調査の進展、翻訳書1冊の刊行					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				
科学研究費補助金 ※制限文字数50文字を超えているので『研究課題』にのみ移行。	2016年度～2020年度	共同(研究分担者)	東アジアにおける国家・市民間の和解に向けた取り組みの見直しと展望について、歴史学者として参画。				

<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
国際交流委員 学院史資料センター研究員(ブランディング事業による研究調査も担当) 新学科構想委員会 新学科設置準備委員会 全学改組委員会など			

2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	翠川 博之	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
語学の授業におけるノートの評価		2020年4月～2021年3月		期末試験の成績に偏った評価方法を見直すため、ノートの評価を評価観点(3割程度)に含める工夫をした。予習箇所を授業内に添削させることで集中力を高める効果があったほか、ノートの内容を充実させるために事後学修の時間が増すという効果があった。			
講読へのアクティブ・ラーニングの導入		2020年4月～2021年3月		一方的になりがちであった講読の授業にアクティブ・ラーニングを取り入れた。原文の解釈を終えたあと、記憶すべき文法事項や再考して欲しいテーマについてさらに詳しく調べるよう指示し、その成果を発表する機会を毎回設けた。授業への取り組みに積極性が生まれた。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
東北学院大学FD推進委員会主催「2020年度新任教員座談会」における報告「前期授業を振り返って」		2020年9月16日		今年度前期を振り返るかたちで、新型コロナウイルス感染防止対策として導入された遠隔授業をどのように実践したか、改善すべき課題がどのように生じているかについて報告した。(『東北学院大学FDニュース』32号19～20頁)			
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>① 学生の能動性と主体的取り組みの強化</li> <li>② 期末試験の結果に偏らない成績評価方法の工夫</li> <li>③ 質問や相談に対するきめ細やかな対応</li> <li>④ 遠隔授業における教育水準の確保</li> </ul>					
今年度の進捗状況		上記目標①②については授業方法の工夫によって一定の手応えを得た。③についても、LMSとして manaba course という新たな選択肢を得て十分な成果をあげることができた。④については試行錯誤を重ねているところである。					
来年度の進捗目標		上記目標①②についてはさらに工夫の余地がある。具体的には小テストや中間テストの回数を増やすこと、またその評価割合を上げるといった方法が考えられよう。今後、授業進度を阻害しない実施回数・実施方法を模索したい。③について、対面での対応が可能になればさらなる改善の見通しが立てられるだろう。来年度はすべての授業を対面で実施する予定であるが、コロナウイルスの感染状況によってはハイブリッド型授業の機会が増す事態も予想される。その場合、特に④について、遠隔での参加を希望する学生がグループ・ワークに加入できない現状を何らかの方法で改善したい。また、①②との関連から、ハイブリッド型授業における各種テストの公平かつ有効な実施方法についても考えたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
『J. ミシュレ『民衆と情熱—大歴史家が遺した日記 1830-74』II・1849～1874』		共訳	2020年12月	藤原書店, 2		大野一道, 翠川博之	pp.1-904
『J. ミシュレ『民衆と情熱—大歴史家が遺した日記 1830-74』I・1830～1848』		共訳	2020年7月	藤原書店, 1		大野一道, 翠川博之	pp.1-597



<b>I. 特許</b>			
<b>現在の課題・目標</b>		① J.=P.サルトルの演劇理論と演劇作品に関する研究 ② J. ミシュレの歴史学および思想に関する研究	
<b>今年度の進捗状況</b>		19世紀フランスの歴史家ミシュレの『日記』4巻を翻訳し、藤原書店より訳書全2巻を刊行した(共訳, J. ミシュレ『民衆と情熱?大歴史家が遺した日記 1830-74』I, II)。現代歴史学の成立に果たしたミシュレの役割, ミシュレ歴史学の方法論, その基盤となる思想・宗教観の内実と時代に応じた変化について考察し, 訳書の「解説」にその成果の一部を掲載している。また訳書に詳細な訳注を付す作業を通じて「日記」が歴史の証言として貴重な資料になり得ることを実感した。文学と歴史を架橋するジャンルとして「日記」研究の可能性に触れ, 研究テーマを広げることができた。	
<b>来年度の進捗目標</b>		① サルトルの戯曲研究については特に初期作品の考察においてさらなる深化を目指す。 ② ミシュレ『日記』の翻訳から得られた研究成果をいっそう充実させる。また, ミシュレの遺作『宴』の訳書刊行が決定しているので, 訳出作業と同時にその「共生思想」を詳らかにし, 現代の社会状況との比較, 現代思想との関連からこれを考察したい。	
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
<b>競争的資金の名称</b>	<b>採用年度(西暦)</b>	<b>個別・共同の区分 共同の場合の役割分担</b>	<b>概要</b>
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>			
2014年4月～		日本サルトル学会	
1999年4月～		日本サルトル学会 会員	
1997年4月～		日本フランス語フランス文学会 会員	
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			

2020年度								
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	李 承赫	大学院の授業担当の有無	無	
<b>I 教育活動</b>								
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要				
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)								
③ 多文化共生・グローバル化に関心を寄せる英語教育		2020年4月～2021年1月		国際的・社会的な問題を扱った英文を様々な視点から比較して読むことにより、多様な文化的な背景を持つ世界中の人々の文化を理解することが重要であることを認識させるのを目標とした、グローバリゼーションに相応しい英語力の養成を目指した。				
① 「推理能力」を養う、総合的な英語読解力		2020年4月～2021年1月		すぐ辞書を引くわけではなく、慣れない単語や表現が出て、まずはわかる範囲で内容の「大きな図」を把握し、そこから細かい内容の理解まで自力でたどり着けるよう、英語読解における「推理能力」の向上を指導した。				
② オフィスアワーを使った、英会話講座の実施		2020年4月～2020年8月		コロナ禍のZoomオフィスアワーの時に、希望する学生を対象に教員と英会話ができる時間を設けた。授業で習った用語と表現を使って自分の意見を簡単な英語で述べるように指導した。				
2. 作成した教科書、教材、参考書								
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4. その他教育活動上特記すべき事項								
福島県 安積黎明高等学校 出張講義		2020年12月16日		『コロナ後のグローバル世界と英語』というタイトルで、高校生に「国際人のツール」としての英語の重要性について講演を行った。				
現在の課題・目標		2020年に赴任してから、上述した「教育内容・方法の工夫」に基づいて英語教育を行った。その結果、実力とは別に、自分の英語能力に自信を持っていない学生が多いということが明確になった。学年度の授業が終了後、目に見える形で自分の英語力が伸びたということをどうすれば気づかせることができるか。これが主な課題である。						
今年度の進捗状況		有名な英語の本、あるいは有名な英語のスピーチを一冊丸ごと完全に読み切り、上述した「推理能力」に基づいた英語読解力で学生が自ら内容を理解できるように指導した。それによって、学年度が終わった時点で、自分の力で英語の本を全部読み切ったという、目に見える形の達成感が学生の自信につながった。						
来年度の進捗目標		今年度に採用した英語のスピーチと本とは異なる、もつと目標にふさわしい内容の本を選んで指導に望む。「アルケミスト」や「動物農場」を採用する予定である。						
<b>II 研究活動</b>								
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)		発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書								
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)								
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)								
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文								
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)								
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)								
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)								
G. 学会における研究発表								
H. 翻訳(学術書や原典等)								
I. 特許								
現在の課題・目標		英語小論文 “Influence of Geopolitical Beliefs in Japanese ‘Understanding’ of Korea and Its Bilateral Implications” の作成に取り組んだ。						
今年度の進捗状況		英語版のドラフトを完成し、2回の校正を行った。						
来年度の進捗目標		国際学会で、上の英論文が発表できるように手配した。2021年The World Congress for Korean Politics and Societyでの発表が既に決定されている。						

III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
IV 学会等及び社会における主な活動			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	文 景楠	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
オンライン講義での効果的な質疑応答など		2020年4月1日～		新型コロナウイルス対応のために必要となったオンラインでの授業を円滑に進めるために、技術的な面で様々な工夫を施している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
アカデミックライティングと論理学の教科書執筆		2020年～2020年10月30日		下記の教科書を共著で執筆した。 篠澤和久+松浦明宏+信太光郎+文景楠(2020)『はじめての論理学: 伝わるロジカル・ライティング入門』有斐閣ストゥディア、有斐閣。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
自主的な古典ギリシア語学習		2020年4月1日～2021年3月31日		総合人文学科の学生からの要望を受け、古典ギリシア語を学ぶ活動を毎週1回を目安に行った。			
現在の課題・目標		総合研究で哲学をテーマに選ぶ学生を育てる。					
今年度の進捗状況		3年次の演習や4年次の総合研究で哲学を扱うことを希望する学生が継続的に現れている。					
来年度の進捗目標		原典講読などを通して、より多くの学生が哲学をテーマに総合研究を進めることができるような環境を整える。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
「海外論文紹介」(Lorenz and Morisonを担当)	単著	2020年6月	古代哲学会 編, 古代哲学研究: Methodos, LII	文 景楠	pp.51-51		
G. 学会における研究発表							
酒井健太郎氏著『アリストテレスの知識論: 『分析論後書』の統一的理解の試み』合評会コメント	単独	2020年12月	酒井健太郎氏著『アリストテレスの知識論: 『分析論後書』の統一的理解の試み』合評会(オンライン)	文景楠			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. アリストテレス研究の一環として、「四原因」の相互関連に関する論文をまとめること。</li> <li>2. アリストテレス研究の一環として、「関係」概念を扱う論文を出版すること。</li> <li>3. 日本語と論理を扱う教科書を共著として出版すること。</li> <li>4. 英語で書かれたギリシア哲学の教科書を共訳として出版すること。</li> <li>5. 開発途上国における有機農業の可能性に関する応用倫理学的研究を進めること。</li> <li>6. 博士論文をいくつかの単著論文または書籍にすること。</li> </ol>					

<p>今年度の進捗状況</p>	<p>1. 学会発表原稿を論文化し、投稿を開始した。  2. 国際的な学術雑誌に受理されたので、後日出版される予定である。  3. 出版された。  4. 初稿を完成し、検討作業を進めている。  5. 東京大学東洋文化研究所の教員を中心とする研究会を続けている。  6. 英文への翻訳を進めている段階である。</p>		
<p>来年度の進捗目標</p>	<p>1. 2021年度中の採択を目指したい。  2. 出版をもってこの課題は終了とする。  3. 出版をもってこの課題は終了とする。  4. 2021年度中の出版を目指したい。  5. 関連文献の読解を進める。  6. 2021年度中に1本の翻訳を終えることを目指したい。</p>		
<p>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</p>			
<p>競争的資金の名称</p>	<p>採用年度(西暦)</p>	<p>個別・共同の区分 共同の場合の役割分担</p>	<p>概 要</p>
<p>その他の補助金・助成金</p>	<p>2019年度～2020年度</p>	<p>共同(研究分担者)</p>	
<p>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</p>			
<p>2017年9月～</p>	<p>ギリシャ哲学セミナー 会員</p>		
<p>2017年6月～</p>	<p>古代哲学会 会員</p>		
<p>2017年5月～</p>	<p>東北哲学会 会員</p>		
<p>2012年12月～</p>	<p>日本哲学会 会員</p>		
<p>2010年10月～</p>	<p>日本西洋古典学会 会員</p>		
<p>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</p>			
<p>展覧会・演奏会・競技会等の名称</p>	<p>場 所</p>	<p>開催年月日(西暦)</p>	<p>発表・展示等の内容等</p>
<p>現在の課題・目標</p>			
<p>今年度の進捗状況</p>			
<p>来年度の進捗目標</p>			
<p>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</p>			
<p>1. 教務委員 2. 入試関連</p>			

2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	講師	氏名	佐藤 真紀	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
遠隔による日本語教育実習の実施		2020年10月～2020年12月					
遠隔授業における留学生との交流の促進		2020年4月～2021年1月		新型コロナウイルスの影響を受け、留学生科目も前期はオンライン形式で、後期はハイブリッド形式で授業を展開した。対面の時同様、日本人学生にも多く参加してもらうことで、留学生とのプロジェクトワークを実施できた。また、提携校である韓国の平澤大学や台湾の輔仁大学の学生にも現地(海外)から参加してもらうことで、新型コロナ禍であっても双方にとって交流機会を失わず、活発なワークが可能となった。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
トリア大学とのタンデムプロジェクト		2020年11月～2021年1月		提携校のドイツ・トリア大学とタンデム(言語交換)プロジェクトを企画・実施した。全6回、zoomによる活動を実施し、トリア大学からは20名程度、本学からは30名程度の学生が参加した。ドイツ語、英語、日本語の3ヶ国語を駆使し、活発に交流することが可能となった。			
外国につながる子どもの学習支援の実施(LAMP)		2018年9月～		近年増加・多様化している「外国につながる子ども」の学習支援を行う団体(仙台LAMP)を立ち上げ、学生達を組織し、毎週1回90分～120分の学習支援を継続して実践している。2020年度以降は新型コロナウイルスの影響を受け、zoomを用いた遠隔支援を行っている。学生達が多文化共生において自分自身に出来ることを模索する場を提供できている。			
EPA介護福祉候補生への日本語学習支援の実施(みんび)		2018年6月～		名取市の介護施設に勤務するEPA介護福祉候補生への日本語学習支援を行うグループ(みんび)を組織した。言語文化学科佐藤ゼミで日本語教育学を学ぶ学生達と、地域構想学科菅原ゼミで福祉学を学ぶ学生達が協働し、インドネシアのEPA介護福祉候補生10名程度を対象に、毎週1～3回の学習支援を継続して行っている。学生達には多文化共生社会で自身に出来ることを自問自答し、模索する機会を提供できている。			
仙台市内を中心とした地域日本語教育の実施(HANDS)		2015年4月～		地域の外国人に日本語を教えるボランティアサークル“HANDS”の顧問として企画・運営に関わっている。毎週火曜と金曜の19:00～21:00に継続的な活動を実施している。対面活動が可能であった頃は土樋キャンパスにて活動を実施していたが、2020年度～2021年度は新型コロナウイルスの影響を受け、zoomによる遠隔活動を継続して行っている。当該団体に登録し活動をしている日本人学生は50名ほど、地域の外国人参加者も述べ40ほどである。日本語を共に学び、交流する活動を実践することで、参加者双方に多文化共生について考える機会を提供できている。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							

E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)			
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2020年10月～		仙台市「『日本語教育の体制整備』総合調整会議」への参加	
2020年7月～2020年12月		宮城県「ICTの活用を含めた多様な日本語学習のあり方研究業務」の受託 助言・指導	
2018年6月～		EPA介護福祉士の日本語学習支援「みんび」運営参加・支援	
2016年7月～		日本語教育学会 審査・運営協力員	
2016年2月～		協働実践研究会 会員	
2015年4月～		地域日本語学習支援サークル「HANDS」助言・指導, 企画, 運営参加・支援	
2004年3月～		特定非営利活動法人「子どもLAMP」企画, 運営参加・支援	
1999年12月～		日本語教育学会 会員	
1999年4月～		日本言語文化学会 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	講師	氏名	宮本 直規	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
・学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2020年4月1日～		毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概略を必ず説明し、授業終了時にはその回のまとめを行っている。			
参考図書・資料を可能な範囲で詳しく紹介する		2020年4月1日		「メディア文化論」「演習」などの授業では毎回、講義内容に関わる書籍を複数冊挙げ、学生の自主的学びを促す。			
・学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2020年4月1日～		毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概略を必ず説明し、授業終了時にはその回のまとめを行っている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①授業以外での課外の活動として、東松島をフィールドに地域産業を学生たちと共に学ぶ。 ②ゼミ、総合研究指導にあたり学生各人の興味関心に沿った指導を心がける。 ③授業中の時間の使い方に気を配り、効率的に学習が進むように配慮する。					
今年度の進捗状況		①活動も10年目に入ったが、毎年あらたに興味を持って参加を希望する学生がいることから、活動自体が安定してきていると言える。 ②総合研究のテーマの多様性を鑑み、ある程度は達成できていると思われる。 ③内容の性質上、特に進捗に関して報告できない。					
来年度の進捗目標		①地域との人的な交流を深める。 ②継続して取り組む。 ③フランス語の授業での成果があがることを期す					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		1. フランス語の論証表現について考察する 2. 同格表現について考察する					
今年度の進捗状況		1. コーパスチェック中,文献収集 2. コーパスチェック中,文献収集					
来年度の進捗目標		1. インフォーマントチェック, 文献収集 2. インフォーマントチェック, 文献収集					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			



IV 学会等及び社会における主な活動			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度								
所属	教養学部 言語文化学科	職名	講師	氏名	門間 俊明	大学院の授業担当の有無	無	
<b>I 教育活動</b>								
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要				
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)								
ドイツ語検定受験指導		2020年4月～2021年1月		希望する学生に、ドイツ語検定の受験指導を行っている。				
学生の理解度を知るための工夫		2020年4月～2021年1月		一部の講義において、講義内容をどの程度学生が理解したかを知るために、講義の後に毎回ミニレポートを書かせている。				
ドイツ語の理解, 定着のための工夫		2020年4月～2021年1月		ドイツ語の理解, 定着のために、小テストや練習問題を課している。				
2. 作成した教科書、教材、参考書								
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4. その他教育活動上特記すべき事項								
体育会「ソフトテニス部」の部長としての活動		2020年～		体育会「ソフトテニス部」の部長として、部員の勉学及び生活指導に当たっている。				
現在の課題・目標		1.ドイツ語の授業において、プリントの配布や小テストの反復によって、語彙の定着や文法事項の理解の深化をはかる。 2.ドイツ語検定向けの指導を強化することによって、4級,3級の合格率のアップを目指す。 3.授業時間以外に時間を設け、学生の質問にきめ細かに答えていきたい。						
今年度の進捗状況		1.上記1について、ある程度実践できたと考えてはいるが、引き続き努力していきたい。 2.上記2について、本年度は独検受験者の数が少なく、十分な実績があげられなかった。 3.上記3について、コロナによる遠隔授業等の影響により十分に対応できない面があった。						
来年度の進捗目標		来年度も、上記1.2.3を目標として教育活動を行っていききたいと考えている。						
<b>II 研究活動</b>								
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)		発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書								
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)								
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)								
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文								
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)								
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)								
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)								
G. 学会における研究発表								
H. 翻訳(学術書や原典等)								
I. 特許								
現在の課題・目標		1.ヴィルヘルム・ラーベの後期の作品いずれかについて、作品論を書き上げる。 2.ヴィルヘルム・ラーベの『薬局ヴィルデマン』について、翻訳を進捗させる。						
今年度の進捗状況		1.上記1について、資料の収集、読み込みに進捗はあったが、論文作成にはいたらなかった。 2.上記2について、下訳は終了したが、すべてを公表するには至っていない。						
来年度の進捗目標		1.上記1について、今年度はぜひとも論文を書き上げたい。 2.上記2について、今年度はぜひとも翻訳を完成させ、発表したい。						
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>								
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>								

1988年4月～	東北ドイツ文学会 会員		
1983年4月～	日本ドイツ文学会 会員		
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
1. 入試委員 2. 言語文化学科2年生グループ主任			

2020年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	教授	氏名	石田 弘隆	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
「情報科学基礎演習B」における「数学ソフトウェア入門」の講義資料および事後学習課題の作成		2020年9月～2021年1月		情報科学基礎演習Bにおける数学ソフトウェア入門の講義資料および事後学習課題(全5回)を作成し、manabaコースにコンテンツを作成した。			
「線形代数学I」におけるmanaba小テストおよびドリル機能を用いた事後学修教材の作成		2020年9月～2021年1月		manaba小テストおよびドリル機能を用いて練習ドリルと確認テストを作成して、「線形代数学I」における毎回の講義の事後学修の教材とした。			
「線形代数学I」におけるまとめ問題集の作成		2020年9月～2021年1月		線形代数学Iの講義内容に関わる演習問題として、まとめ問題とその解説をmanabaのコースコンテンツに準備した。講義で指定するドリルとは異なる問題を含めて補完するようにしている。			
「線形代数学II」におけるmanaba小テストおよびドリル機能を用いた事後学修教材の作成		2020年4月～2021年1月		manaba小テストおよびドリル機能を用いて練習ドリルと確認テストを作成して、「線形代数学II」における毎回の講義の事後学修の教材とした。			
「線形代数学II」におけるまとめ問題集の作成		2020年4月～2020年8月		線形代数学IIの講義内容に関わる問題演習として、まとめ問題とその解説をmanabaのコースコンテンツに準備した。			
「集合と論理」における問題集の作成		2020年4月～2020年8月		集合と論理の講義内容に関わる演習問題として、まとめ問題とその解説をmanabaのコースコンテンツに準備した。教科書だけでは演習問題数が不足するため、教科書の問題の類題と講義内容の理解を深めるために必要な問題を掲載した。			
「集合と論理」におけるmanaba小テストおよびドリル機能を用いた事後学修の教材		2020年4月～2020年8月		manaba小テストおよびドリル機能を用いて全13回の練習ドリルと確認テストおよび再テストを作成して、「集合と論理」における毎回の講義の復習教材とした。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
GeoGebra と Zoom によるオンタイム演習の試み		2020年12月19日		佐藤篤氏との共同で、「GeoGebra と Zoom によるオンタイム演習の試み」という題目の報告集を統計数理研究所共同研究リポート 449 (2021), 1-7 に掲載された。			
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		基本的な学修内容をしっかりと定着してもらうため、複数回反復することができるドリルを作成する。これを用いて、普段から反復して学修する習慣づけを行う。					
今年度の進捗状況		線形代数学I, II や集合と論理に関しては、従来のものをさらに有効なものとするために、加筆・修正を加える。					
来年度の進捗目標		来年度、新規に担当する代数学I, II においても基本的な学修内容をしっかりと定着してもらうため、複数回反復することができるドリルを作成する。これを用いて、普段から反復して学修する習慣づけを行う。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							

I. 特許			
現在の課題・目標	トリゴナル代数曲線束について、射影直線束の3重被覆で与えられる場合にその不変量間の不等式関係の究明および代数曲線束の構成方法に関して研究を進める。		
今年度の進捗状況	一昨年度から取り組んでいる射影直線束の3重被覆で与えられるトリゴナル代数曲線束の存在領域に関する問題について、得られた結果の発展を試みている段階である。		
来年度の進捗目標			
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(C)	2017年度～2021年度	個別	分岐被覆、微分方程式およびモジュライ空間を通じた代数曲線束のジオグラフィーの研究
IV 学会等及び社会における主な活動			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
数理情報学科(仮称)準備委員会委員長 情報学部設置準備委員会副委員長 教職課程センター運営委員			

2020年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	教授	氏名	伊藤 則之	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
Zoomを利用したオンタイム授業および総合研究指導		2020年4月1日～					
授業支援システムmanabaを利用した遠隔授業の実施		2020年4月1日～		授業の連絡、授業資料の配布、小テストやレポートの提出・回収を実施した。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
「情報システム運用法A」、「現代社会の諸問題」、「情報科学演習」の遠隔授業用講義資料		2020年4月1日		遠隔授業となり、科目によりオンタイム形式またはオンエマンド形式のいずれかになるため、それぞれの形式に合わせて学生が受講しやすいかたちの講義資料を作成した。			
「情報化社会の基礎」の遠隔授業用講義資料		2020年4月1日～		TGベーシック科目のために複数教員が同じ科目を担当するため、共通教材となる動画教材、前回授業のまとめ資料と確認テストを作成して、担当する先生方に配布した。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
1年生オリエンテーションへの参加		2020年		学科長として1年生オリエンテーションへ参加し、学生の履修計画作成を支援した。			
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・大教室授業での学生の興味を喚起することによる効果的授業の実施</li> <li>・ゼミ形式演習での実践的なデザインパターンを含むプログラミング教育</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>・大教室授業では新聞や雑誌の記事の引用などいくつかの新たな取り組みを実施</li> <li>・大教室授業でのアクティブラーニングの導入</li> <li>・ゼミ形式演習では予定通りの教育を実施。より理解度を高めるのが課題</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・大教室授業ではさらに新たな手法の実適用</li> <li>・ゼミ形式演習では予習・復習の教材を作成して、さらに理解度を高める施策を実施</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		2021年12月までにこの1年間の研究成果を論文化					
今年度の進捗状況		2021年3月時点で論文化するための実験環境を整えている状況					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・新たに実施した取り組みの論文化</li> <li>・ゼミ学生4年生の研究テーマの論文化とその発表指導</li> </ul>					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				

**IV 学会等及び社会における主な活動**

2021年1月	情報処理学会「東北支部研究会」出席予定 会員
2009年4月～	電子情報通信学会会員 会員
1988年4月～	情報処理学会会員 会員

**V 芸術分野や体育実技等における主な活動**

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

**VI 学内における管理運営に関する諸活動**

情報科学科学科長  
 総務委員会委員  
 全学組織運営委員会委員  
 財政専門委員会小委員会委員  
 施設拡充委員会委員  
 研究室運営委員会委員  
 入試管理委員会委員  
 ハラスメント対策委員会委員  
 知的財産審査委員会委員  
 大学案内編集委員会委員  
 不正防止推進委員会委員  
 教職課程センター所員  
 就職キャリア支援委員会委員  
 学部点検評価委員会委員  
 将来構想人事委員会  
 予算委員会委員  
 OC準備委員会委員  
 広報委員会委員  
 人間情報学研究所運営委員会委員  
 カリキュラム検討委員会委員

2020年度								
所属	教養学部 情報科学科	職名	教授	氏名	乙藤 岳志	大学院の授業担当の有無	有	
<b>I 教育活動</b>								
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要				
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>								
リモート授業サポートに関する学生向け参考資料の作成, 公開		2020年4月		MS365インストール, 初期PC設定 MyTG, manabaへの統合ポータルページの作成ツール				
会議資料・講義資料配布の仕組み		2020年4月		昨年度の「電波が届くとこだけネット」を利用した, スマホ・PCへのPDF文書配布の仕組み. 学科会議の資料配布に実使用				
外付けディスク起動による教材ノートPCの作成		2020年4月～		学生用教材PCとして外付けディスクから起動する, カスタマイズしたものを利用する. 実使用段階に達した.				
<b>2. 作成した教科書, 教材, 参考書</b>								
ノートPC用USB起動Linux ノートPCサポート		2020年4月		USBから起動するLinuxシステムを作成した また授業で用いるノートPCの各種サポートを行った				
技術的なWebページの最新情報への対応 講義ノートの改訂を含む		2020年4月		担当科目の講義ノートの改訂を含む, 対外的にアクセスできる, 技術的内容のWEBページの修正.				
新規に担当になった「自然の科学」の講義ノートの修正		2020年4月		「自然の科学」を ○ 自然科学を扱う基本的スキル ○ 「生活の科学」 ○ 先端科学の考え方 にわけて構成した				
電波が届くとこだけネット		2020年4月		ノートPCを用い, スマホで利用できる基本環境を作成した 実環境で利用できる設定を行った				
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</b>								
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>								
現在の課題・目標		新カリキュラムに対応した, 教育。						
今年度の進捗状況		想定していた範囲で進行している。						
来年度の進捗目標		新しい分野の開拓。成績の芳しくない学生のケア。						
<b>II 研究活動</b>								
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)		発行所, 発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>								
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)								
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)								
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文								
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)								
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)								
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)								
G. 学会における研究発表								
H. 翻訳(学術書や原典等)								
<b>I. 特許</b>								
現在の課題・目標		コンピュータおよびネットワーク環境の変化に伴う, 将来像を明らかにする。						
今年度の進捗状況		ベースとなるクラウド環境の構築を行った						
来年度の進捗目標		SDN, クラウドの方向を追求する						



III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
IV 学会等及び社会における主な活動			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	教授	氏名	小林 善司	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
総合研究発表会を合同で開催		2020年4月～2021年3月		総合研究発表会を合同で行い、他研究室の発表にも触れる機会をつくり幅広い成果の共有を図っている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
東北学院大学FD研修会に出席		2020年12月10日～2020年12月10日					
東北学院大学FD研修会に出席		2020年9月16日～2020年9月16日					
東北学院大学教養学部FD研修会に出席		2020年8月6日～2020年8月6日					
東北学院大学教養学部FD研修会に出席		2020年4月14日～2020年4月14日					
現在の課題・目標		1.「代数学」「複素関数」「微分方程式」では、数学の他分野との関連に注目した講義を行う。 2.「情報科学演習」では、学生の問題演習能力を養う授業を行う。 3.「総合研究」では、テーマの今後の発展を導く指導を行う。					
今年度の進捗状況		1.最近立てたばかりなので、今年度は進捗がない。 2.最近立てたばかりなので、今年度は進捗がない。 3.最近立てたばかりなので、今年度は進捗がない。					
来年度の進捗目標		1.講義中に事項と他分野との関連について説明する。 2.問題演習のさいに学生がどこまで理解しているか把握する。 3.総合研究発表会で今後の発展を導くコメントを行う。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		1.確率測度の研究をする。 2.高木関数の研究をする。 3.デジタル和の研究をする。					
今年度の進捗状況		1.最近立てたばかりなので、今年度は進捗がない。 2.最近立てたばかりなので、今年度は進捗がない。 3.最近立てたばかりなので、今年度は進捗がない。					

来年度の進捗目標	1.確率測度を定義する。 2.高木関数の計算をする。 3.デジタル和を定式化する。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	教授	氏名	坂本 泰伸	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
ラジオ番組と聴取者を繋ぐアプリケーションの開発と評価	共同	2021年1月	2021年度情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学)	秋山美姫, 坂本泰伸			
iBELLEs+とeramsの改良による英文読解教育の支援に関する研究	共同	2021年1月	2020年度情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学)	藤門 莉生, 坂本 泰伸			
高等学校教科「情報 I」の指導における単元別の難易度に関するアンケート調査	共同	2021年1月	2020年度情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学)	沼田 織花, 坂本 泰伸			
The Development of New e-learning Cycles based on the Aggregated Highlighting Information	共同	2020年10月	19th European Conference on e-Learning ECEL 2020(University of Applied Sciences HTW Berlin, Germany)	Takeshi Okada and Yasunobu Sakamoto			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2020年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	教授	氏名	菅原 研	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
<b>教育実践上の主な業績</b>		<b>年月日(西暦)</b>		<b>概要</b>			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
「考えて書く」の導入と「飽き」の防止		2020年9月11日～		講義中に適宜問題を課し、考えて書くことを促進した。また、学生が集中できる時間を考慮し、講義に関連するショートブレイク動画を使うことで飽きの防止を図った。			
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2020年9月11日～		毎回の授業の冒頭で、前回の復習と小問の解答、質問・コメント欄に書かれたものへの回答を示し、当日の講義にスムーズに入れるようにした。さらに、授業終了時に振り返りの時間を設け、学習した内容をresponの自由記述でまとめる作業を義務付けた。			
教師役の導入による学習深化		2020年5月7日～		教師役を積極的に割り振ることで学習の深化を図った。			
予習課題による学習効率の向上化		2020年5月7日～		次回の学習に必要な事前学習を可能とするワークシートを配布した。講義・演習ののち、その内容に応じた簡単な確認テストを実施した。			
振り返り小テスト、共同学習による理解の促進		2020年5月7日～		ほぼ毎回、小問を解く形で学習の振り返りを行った。また、学習内容に応じてグループによる学習を実施した。			
小規模グループによるプレゼンの練習		2020年5月7日		zoomのブレイクアウトルームを活用し、多数を対象としたプレゼンがスムーズに行えるように、小グループ化とメンバー入れ替えを繰り返した。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
科学的思考の基礎		2020年9月11日～		市販されている書籍に教科書として適するものがないこと、受講者の理解度に応じて柔軟な対応が必要であることから独自の細かい教材を作成した			
複雑系の科学		2020年5月7日～		教科書だけでは不十分な内容について補足するための、なるべく直感的に分かるように工夫した教材を作成した。			
プログラミング上級		2020年5月7日～		教科書だけでは不十分な内容について補足するための教材(主にアルゴリズムに関するもの)を作成した。			
メディア表現の技法A		2020年5月7日～		教科書だけでは不十分な内容について補足するための教材(主にマルチメディアに関わる技術的な面を説明するもの)を作成した。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
出張講義(東北高等学校)		2021年3月10日		「テレビゲームのウラ側」というタイトルでテレビゲームに関する技術を分かりやすく解説する授業をおこなった。受講者は2年生19名。			
講話(東北学院榴ヶ岡高等学校)		2020年10月23日		「問いの立てかた」というタイトルで1, 2年生向けの講話を行った。			
高大連携授業の講師		2020年7月13日		中高大一貫教育事業の一環として実施された榴ヶ岡高校出張講義においてオンデマンド型視聴資料により「コロナと情報科学」というタイトルで授業を実施した。			
宮城県視覚支援学校におけるプログラミング授業の実施		2020年～		宮城県視覚支援学校に赴き、視覚障害をもつ小学生(特に2, 4年生)を対象としたプログラミングの模擬授業を行った(9/16, 11/5, 2021/1/27)。			
<b>現在の課題・目標</b>		1)質問シート・演習シートを活用して講義内容の理解度向上を図る。 2)予習・復習を強力に補助することで学習効果のさらなる向上を図る。 3)演習において、単なる専門知識習得だけでなく、自己表現能力などの一般的な力の向上も図る。					
<b>今年度の進捗状況</b>		1)複数の講義にて実施した。シート内のコメントから、その有用性をうかがうことができた。 2)一部の授業にて実施した。有用性を客観的に図ることは難しいが、確認テストの点数および授業評価アンケートから、有効性が認められると考えている。 3)客観的な評価はできていないが、授業評価アンケートにおける回答から有効性を確認している。					
<b>来年度の進捗目標</b>		1)適用する講義科目を増やし、多面的に有効性を検証することを考えている。 2), 3)共に本年度と同様に実施しつつ、受講生からも意見を集め、より効果的な補助方法を検討する。					
<b>II 研究活動</b>							

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>					
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>					
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>					
確率的な方向制御を行うロボット群による物体搬送	単著	2021年3月	第33回自律分散システム・シンポジウム講演予稿集, 第33回自律分散システム・シンポジウム講演予稿集	◎小野晃任, 菅原研	pp.1B1-2
ワンチャンス型スワームロボットによる物体搬送	単著	2020年12月	第21回システムインテグレーション部門講演会(SI2020)講演予稿集, 第21回システムインテグレーション部門講演会(SI2020)講演予稿集	◎菅原研, 鈴木沙代	pp.3B2-14
自己駆動力をもたない群ロボットと物体搬送への応用	単著	2020年10月	第38回日本ロボット学会学術講演会予稿集, 第38回日本ロボット学会学術講演会予稿集	◎菅原研, 鈴木沙代	pp.RSJ2020A01
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>					
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>					
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>					
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>					
<b>G. 学会における研究発表</b>					
子ども向けプログラミング体験オンラインイベントの実施と学習効果の調査	共同	2021年2月	情報処理学会 コンピュータと教育研究会 159回研究発表会(不明)	◎松本章代, 稲垣忠, 菅原研	
身体運動でロボットを動かすシステムの試作とその応用	共同	2021年1月	情報処理学会東北支部研究報告(不明)	◎三浦彰仁, 菅原研	
視覚支援学校における低学年向けプログラミング教育環境の開発	共同	2021年1月	情報処理学会東北支部研究報告(不明)	◎川崎空, 菅原研	
自走しないロボットの集団による物体搬送	単独	2020年11月	第4回分子ロボティクス年次大会(不明)	不明	pp.P21
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	1)アリにみられる個体のリズム性と集団特性の関係性について行動ベースで研究 2)生成と崩壊のバランスに基づく構造物構築を実現する群ロボットシステムの構築 3)利己的な行動から協調行動が創発する群ロボットシステム 4)陽に協調する仕組みを有さない群ロボットによる協調搬送システム				
今年度の進捗状況	1)リズム行動、女王ワーカーの協調メカニズムの理解につながる基礎的な結果が得られた。 2)基本となるダイナミクスを確立し、シミュレーションによる検証と実機の試作を行った。 3)基本となるアルゴリズムを提案し、シミュレーションによる検証と実機の試作を行った。 4)粉体効果を応用した物体搬送システムについて、形状との関連等の知見を深めた。				
来年度の進捗目標	1)特定の振る舞いに着目した実験を本格的に行い、個体と集団の関係性についての新しい知見を得る。 2)数理モデルを構築し、深いレベルでの理解を目指す。 3)中規模なロボット集団を製作し、実機実験を主たる手段として研究を進める。 4)ヘテロ系への拡張、搬送対象の姿勢制御を目指す。				
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>					
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等	

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	



2020年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	教授	氏名	杉浦 茂樹	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
予習の促進と重要項目に対する知識定着の向上を目的とした小テストの実施		2020年4月1日～		学科専門科目に対しては、予習の促進、および、重要項目に対する知識定着の向上を目的として、毎回の授業の冒頭に小テストを実施し、解答用紙の回収後、解答と解説を行っている。			
学習前の知識状況の把握のための小テストの実施		2020年4月1日～		学科コア科目に対しては、初学者が多いために学習すべき事項が多くなる傾向があるため、学習すべき事項を学習者自身に絞り込ませることを目的として、毎回の授業の冒頭に小テストを実施し、正解を発表し自己採点を行わせている。			
授業資料のインターネットへの公開		2020年4月1日～		効果的に予習・復習に活用できるよう配慮した授業資料をインターネット上で公開している。また、授業を欠席した学生は自主的な授業内容の補完にも使用できる。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
「情報システム基礎論B」「コンピュータシステム論A」「アルゴリズムとデータ構造」「ネットワーク基礎論」講義資料		2020年4月1日～		遠隔授業に対応するため、従来の講義資料での受講方法の明確化と解説の改善を行い、さらに、小テストのオンライン化も行った。			
「情報化社会の基礎」講義資料		2020年4月1日～		TGベーシック科目である本授業をオンデマンド方式に対応させるため、他の担当教員と協力して解説動画を作成した。さらに、知識定着の向上を目的として、前回授業のふり返りのための資料の追加を行い、ふり返りの理解度の確認のためのオンライン小テストの作成を行った。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		①授業でLMS(Learning Management System)を活用する。 ②『ネットワーク基礎論』において学生の重要項目に対する知識定着を向上させる。 ③『コンピュータシステム論A』の講義資料を整備する。 ④『アルゴリズムとデータ構造』の講義資料を整備する。					
今年度の進捗状況		①遠隔授業への対応により、全授業でManabaとGoogle Driveを活用した。 ②～④遠隔授業化により、講義資料の整備が進んだ。					
来年度の進捗目標		①総合研究と情報科学演習でのManabaの活用を進める。 ②～④遠隔授業への対応で、講義資料の大幅な変更があったため、来年度は新しい講義資料の問題点の洗い出しと、それにもとづく修正を行うこととする。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							

現在の課題・目標	①研究活動支援システムの開発。 ②手話学習支援システムの開発。 ③大学研究室向けのシステム開発技法の検討。		
今年度の進捗状況	①週末のバッチ処理によるデータバックアップにより、最悪でも1週間前のデータに復旧できるようになった。 ②・③新型コロナの影響が大きく、残念ながら進展はなかった。		
来年度の進捗目標	①データのバックアップ方式を見直し、最悪でも当日中のデータに復旧できるように設計を見直す。 ②・③研究課題の再設定を行う。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2019年～		公益財団法人私立大学情報教育協会理事 委員	
2001年～		電子情報通信学会会員 会員	
1992年～		情報処理学会会員 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
情報処理センター長			

2020年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	教授	氏名	牧野 梯也	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
「感覚知覚情報論B」の改善		2020年9月～		<ul style="list-style-type: none"> <li>・manaba, responを用いて、双方向型の授業を可能にした。具体的には、1) 毎回の間をresponで提示し、受講生の解答をリアルタイムで示しながらコメントする、2) 各回の振り返りを翌週まで行い、良いコメントなどを次回の授業で紹介する、ということを実施した。</li> <li>・中間テスト、最終テストを廃止し、中間レポート課題、最終レポート課題を実施。さらに、提出課題を受講生自身で評価するようにした。具体的には、レポート課題提出の次の授業で1) 受講生にすべてのレポート課題を見てもらい、各自良いレポートに3つの異なる賞を与える、2) 受講生に4～5名の小グループを作るように促し、それぞれの賞を持ち寄って、グループ賞を3つ決める、この過程では、それぞれの賞に決めた根拠をグループ内で共有するよう議論を促す、3) グループ代表者に3賞とそれを選んだ根拠を発表してもらい、ことを実施した。</li> <li>また、上記の内容をZoom遠隔オンラインにより実施し、例年の対面授業と同程度の教育効果を上げることができた。</li> </ul>			
4年次総合研究の改善		2020年4月～		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゼミ生全員での週2回の進捗状況報告会ミーティングをするとともに、議論する機会を増やした。</li> <li>・研究テーマの意味を学生自身で掘り下げさせるため、過度の説明はやめ、重要ポイントに関わる問いかけを繰り返し行うようにした。</li> <li>上記のことを、Zoom遠隔オンラインにより試行錯誤的に実施し、例年の対面と同程度の教育効果を上げることができた。</li> </ul>			
3年次演習の改善		2020年4月～		<ul style="list-style-type: none"> <li>・読書量の少なさ、議論する機会の少なさを補うため、読解と議論の方法を体験的に学ぶために山田ズーニー著「あなたの話はなぜ通じない」のかの輪講を前期冒頭に追加し、読み・書き・議論の演習を交えながら実施した。</li> <li>・資格の錯視に関する心理物理実験パートを組み込み、コンピューターシミュレーションのみでなく、より体感できる学びの実践を行った。</li> <li>また、Zoom遠隔オンラインによる授業を試行錯誤的に実施し、例年の対面と同程度の教育効果を上げることができた。</li> </ul>			
情報科学科1年次授業「情報科学基礎教育」の遂行、講義内容の改善		2020年4月～		<p>2015年度より開始した情報科学科1年生にとっての「大学における勉学」への導入科目としての性格を持つ「情報科学基礎教育」(担当: 石田, 岩田, 菅原, 武田, , 松本)の講義内容の標準化を行った。すなわち、講義は3パートオムニバスのため、受講生への教授内容に不一致がないように、また各パート間の連携が取れるように、綿密に事前打ち合わせを行った。さらに、授業終了後、来年度に向けての改善点の洗い出しを行った。</p> <p>Zoom利用によるオンライン遠隔授業を効果的に行うための工夫を試行錯誤的にを行い、例年の対面授業と同等の教育効果を上げることができた。</p>			
TGベーシック「科学的思考の基礎」: 学生とのインタラクション		2020年4月～		<ul style="list-style-type: none"> <li>・manaba, responを用いて、双方向型の授業を可能にした。具体的には、1) 毎回の間をresponで提示し、受講生の解答をリアルタイムで示しながらコメントする、2) 各回の振り返りを翌週まで行い、良いコメントなどを次回の授業で紹介する、ということを実施した。</li> <li>オンデマンド授業教材を作成した。また、オンデマンドによる双方向型授業を可能にするため、manaba, responの活用をはかった。</li> </ul>			
「生命の科学」: 学生とのインタラクション		2020年4月～		<ul style="list-style-type: none"> <li>・manaba, responを用いて、双方向型の授業を可能にした。具体的には、1) 毎回の間をresponで提示し、受講生の解答をリアルタイムで示しながらコメントする、2) 各回の振り返りを翌週まで行い、良いコメントなどを次回の授業で紹介する、ということを実施した。</li> <li>オンデマンド教材を作成した。また、オンデマンドによる双方向型の授業を可能にするため、manaba, responの活用をはかった。</li> </ul>			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
「科学的思考の基礎」の教科書化		2020年4月～		<p>TGB「科学的思考の基礎」で利用可能な、文理を問わない大学1年生向けの教科書を、情報科学科菅原, 土原, 村上とともに執筆し、脱稿した。現在出版社で初稿ゲラを作成中。2021年9月出版予定。</p>			

3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4. その他教育活動上特記すべき事項						
東北学院榴ヶ岡高等学校での出前授業		2020年5月		「“情報”とは何か?～生き物の世界から考えてみよう～」というタイトルで、東北学院榴ヶ岡高等学校1年生用の広大接続授業に関するオンデマンド講義資料を作成した。		
現在の課題・目標		遠隔、オンデマンド教材の着手、充実。				
今年度の進捗状況		教材作成はおおむね達成した。 遠隔授業の実際の実施により様々な改善点情報を得た。				
来年度の進捗目標		2021年度も遠隔授業が主体となると考えられ、2020年度得られた情報を元に、各教材の修正、改善、ブラッシュアップをはかる。				
II 研究活動						
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書						
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)						
A cell model in the ventral visual pathway for the detection of circles of curvature constituting figures		不明	2020年12月	Heliyon Vol 6 (2020) e05397 (journal homepage: www.cell.com/heliyon), Heliyon Vol 6 (2020) e05397 (journal homepage: www.cell.com/heliyon)	Susumu Kawakami, Takehiro Ito, ©Yoshinari Makino, Makoto Hashimoto, Masafumi Yano	pp.39ページ
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)						
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文						
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)						
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)						
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)						
G. 学会における研究発表						
H. 翻訳(学術書や原典等)						
I. 特許						
現在の課題・目標		①嗅覚神経ネットワークにおける情報コーディングアルゴリズムの定式化 ②アルゴリズムを実装した神経ネットワークモデルの構築。 ③「曲率を用いて形態を表現するモデル」に関する研究の論文化				
今年度の進捗状況		①および②はモデルシミュレーションを進め、データを取得中であり、進捗した ③は継続中である				
来年度の進捗目標		①と②のデータを取得し論文として発表する ③に関して、2020年1月末投稿予定				
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)						
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要		
IV 学会等及び社会における主な活動						
2012年3月～			日本VR学会香りと生体情報研究委員会委員 会員			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動						
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標						
今年度の進捗状況						
来年度の進捗目標						
VI 学内における管理運営に関する諸活動						

1. 入試部副部長
2. 教養学部総務委員会

2020年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	教授	氏名	松尾 行雄	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。</li> <li>授業理解促進のために、授業の行い方を検討する。</li> </ul>					
今年度の進捗状況		・毎回の授業における理解度チェックを行い、授業の行い方について検討した。					
来年度の進捗目標		・引き続き、授業理解促進のための授業運営の検討、ならびに学生とのコミュニケーションのを促進する。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Intelligibility of chimeric locally time-reversed speech		単著	2020年6月	Journal of the Acoustical Society of America Express Letters, Journal of the Acoustical Society of America Express Letters		Ikuo Matsuo, Kazuo Ueda, and Yoshitaka Nakajima	pp.EL 523-528
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>海洋生態系の把握のための技術開発</li> <li>超音波を用いた農業分野への応用</li> <li>音声圧縮技術の開発と応用</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>広帯域魚群探知システムにより魚の分布ならびに行動の可視化を行なった。</li> <li>新しい超音波を用いた害虫防除技術を開発した。</li> <li>音声圧縮の評価を行った。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>鳴音を用いた生態系把握技術の開発</li> <li>害虫への超音波の有効性評価</li> <li>音声圧縮技術の実用化</li> </ul>					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
2015年11月～2021年3月			音響学講座編集委員会 委員				
2014年5月～			生物音響学会理事 会員				
IV 学会等及び社会における主な活動							

V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	准教授	氏名	岩田 友紀子	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
manabaでのドリル活用		2020年4月1日～2021年3月31日		manabaのドリル機能を用いて制限時間10分程度で無制限回挑戦できる小テストを課し、学生の講義の『復習』の時間を増やすことを図った。			
総合研究発表会を合同で開催		2020年4月1日～2021年3月31日		総合研究発表会を合同で行い、他研究室の研究内容を知る機会を設け、学生の幅広い分野への興味を高めることを図る。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		解析学I,II,確率・統計Iの講義に関してmanabaのドリル機能を用いた復習効果のある小テストをそれぞれ10回分ほど作成する。					
今年度の進捗状況		今年度は、解析学Iでmanabaのドリル機能を用いた小テストを8回分作成したが、記述のみの試験よりも学生の普段の家庭学習時間を増やせたように感じた。					
来年度の進捗目標		講義ノートをさらに充実したものに加筆訂正していきたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
A necessary and sufficient condition for constrictive Markov operators		単著	2020年	数理解析研究所考究録2176「ランダム力学系理論とフラクタル幾何学の研究」2021年4月		未記入	pp.153-158
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
STOCHASTIC FIXED POINTS AND NON-LINEAR PERRONFROBENIUS THEOREM		不明	2020年	Proc. Amer. Math. Soc. 146(2018), no. 10		未記入	pp.4315-4330
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等		



現在の課題・目標	マルコフ作用素及び、ペロン・フロベニウス作用素におけるAlmost everywhere convergenceに関して、スペクトル解析のみならず、周期的な挙動を表す $\sigma$ 加法族の研究をする。
今年度の進捗状況	現在執筆中の論文を完成させる。
来年度の進捗目標	現在執筆中の論文を雑誌に投稿する。
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2020年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	准教授	氏名	佐藤 篤	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
授業での数値計算ソフトウェアの活用		2020年9月～		「数理情報学」と「数値解析」の授業において GeoGebra, gnuplot, octave, pari-gp, R を利用したデモを行い、理解する助けとした。			
個人のウェブページの活用		2020年4月～		これまでに書いた文書を公開した。その中には過去の授業等で配布したものも含まれる。また、いくつかの文書については改訂も行った。さらに、「幾何学 I」「幾何学 II」「数理情報学」「数値解析」のページを作成し、配布資料等をダウンロードできるようにした。			
授業での動的数学ソフトウェアの活用		2020年4月～		「数値解析」の授業において GeoGebra を利用したデモを行い、定理等の意味を理解する助けとした。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
教材の作成		2020年4月～		「数理的思考の基礎」のオンデマンド授業用の資料を作成した。			
教材の作成		2020年4月～		「情報科学基礎演習A」の授業において「データ処理の基礎」の教材を作成した。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
岩手県授業力向上(免許更新)研修講座 講師		2020年8月5日		「ピックの公式とその周辺」という題で講演を行った。			
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
教員採用試験(数学)対策講座 講師		2020年12月9日		2019年実施分の宮城県・仙台市の教員採用試験(数学)の解説を行った。			
現在の課題・目標		(1) 講義全般について、受講者の現状に沿った内容にする。 (2) 演習について、学生とのコミュニケーションを重視し、「数学を理解すること」がどういふことなのかを学んでもらうよう努める。 (3) 数学科以外の学生を対象とした代数学の演習書を執筆する(共著)。					
今年度の進捗状況		(1) については、昨年度からは改善が見られるが、まだ満足できる状況とは言えない。 (2) については、まだ満足できる状況とは言えないが、発表の仕方に一定の進歩が見られる。 (3) については、自分の担当箇所についてはほぼ完成した。					
来年度の進捗目標		(1) については、引き続き講義内容の見直しを行う。アンケートでポジティブな回答が多くなるよう努めたい。 (2) については、適当なテキストの探索を続け、知識よりも考え方を重視するような演習を継続的に進められるようにする。 (3) については、共著者と共に早期の完成を目指す。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
On unramified abelian extensions of number fields arising from multiplication of elliptic curves		単著	2021年3月	人間情報学研究, 26		佐藤篤	pp.11-18
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
GeoGebra と Zoom によるオンタイム演習の試み		共著	2021年3月	統計数理研究所共同研究リポート, 449		石田弘隆 佐藤篤	pp.1-7
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							

G. 学会における研究発表				
GeoGebra と Zoom によるオンタイム演習の試み	共同	2020年12月	動的幾何学ソフトウェア GeoGebra の整備と普及(統計数理研究所)	石田弘隆 佐藤篤
H. 翻訳(学術書や原典等)				
I. 特許				
現在の課題・目標	(1) 楕円曲線の同種写像を利用して、代数体の不分岐拡大の塔を具体的に構成すること。 (2) 二次体上定義された、位数11の有理点をもつ楕円曲線の族を用いて、類数が11で割り切れるような代数体の無限族を構成すること。 (3) 楕円曲線上の点の還元に関する振る舞いと、形式群や Tate 曲線との関係を明らかにすること。			
今年度の進捗状況	(1) については、同種写像の核に属する全ての点が良還元をもつような素点の分岐について、一定の成果が得られた。 (2) については、コンピュータを利用した計算機を行ったが、計算結果が複雑で扱いかねる状態のままである。 (3) については手付かずの状態である。			
来年度の進捗目標	(1) については、引き続き計算を進め、代数体の類数の可除性の話に結び付けたい。また、近いうちに論文に纏めたい。 (2) については、あまり進展は見込めないかもしれないが、引き続き突破口を見つけるよう努めたい。 (3) については、まずは文献による学習を進め、特に形式群の理解が深くなるよう努力したい。			
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)				
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要	
IV 学会等及び社会における主な活動				
1992年4月～		日本数学会会員 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動				
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等	
現在の課題・目標				
今年度の進捗状況				
来年度の進捗目標				
VI 学内における管理運営に関する諸活動				

2020年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	准教授	氏名	高橋 秀幸	大学院の授業担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
3年生のゼミ生に対して、コロナ禍においても学生スマートフォンアプリコンテストへの出場の機会を得られるような教育・演習を行い、実際にコンテストへ学生が自主的に応募し、1次審査、2次審査の結果、2件の奨励賞を受賞するなどの成果を得ることができた。		2020年4月1日～2020年10月1日		3年生のゼミ生に対して、スマートフォンアプリの企画から2次審査出場に関わるプレゼンテーションやアプリケーション開発、デモビデオ製作に関する教育およびアドバイスを行った。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
コロナ禍において、ゼミ生(3年生)の2チームが情報処理学会 第8回学生スマートフォンアプリコンテストに出場し、両チームとも奨励賞を受賞した。		2020年4月1日～2020年10月1日		学生スマートフォンアプリコンテストに出場し、1次審査を経て、アプリケーションに関するプレゼンテーション、さらに企業の開発者や企業・大学・研究機関の研究者に向けて、デモビデオによるオンライン形式のデモストレーションを行った。具体的には、スマートフォンアプリとしてスマートフォンアプリとしてスマートフォンとセンサを組み合わせた「猫検知アプリ NYACOM(ニヤコム)」を出展しました。本アプリは、飼い猫が自宅の窓やドアを開けて自宅から脱走したことや自宅に戻ってきたことを検知し、スマートフォンに通知するアプリです。また、スマートフォンアプリとして「クイズ ON ダイアリー ～認知症予防も会話の彩りも～」を出展しました。本アプリは、旅行などの思い出などを気軽に日記に残し、後日、その日記の内容に関するクイズをアプリが出題することで、高齢者同士の友達や家族などと一緒に当時の思い出について話し合う機会を支援するアプリです。			
高大連携ICT専門教育事業に関して、東北学院榴ヶ岡高等学校にてオンラインによる出張講義を行った。		2020年		『情報科学への招待』に関するオンラインによる出張講義を行った。			
<b>現在の課題・目標</b>		授業準備の時間を十分に確保し、様々な工夫を行う授業を行うことで、学生が授業内容に関心や興味を持ち、自らさらに学びたいと思えるような授業運営を行うことが目標である。また、ゼミ生に対しては、学会発表などを自ら目指すような教育研究環境の構築が目標である。					
<b>今年度の進捗状況</b>		2019年度に本学に着任し年度末にはコロナ感染拡大となったことから、オンライン授業の準備に追われたり、前例のない状況下での新入生のグループ主任を担当したりと、想定外の状況が続いているため授業内容に関しては、十分に工夫をした授業を展開できていたとは言えない状況である。一方、コロナ禍においても3年生のゼミ生が学生スマートフォンアプリコンテストで賞を受賞するなど、一定の教育活動に関する成果や4年生が学会発表を行うなど一定の教育研究に関する成果を得ることができた。					
<b>来年度の進捗目標</b>		コロナ禍における授業内容の反省点などの改善、より工夫を行った授業展開を実施することが目標である。また、学生のスキル向上やアクティビティを高めるために積極的にプログラミングコンテストやアプリコンテストなどへの出場の機会を与えるとともに、研究内容についても学生が国内外の研究者と議論できるような教育を行うことを目標とする。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
Evacuation Guide Supporting System using UAV for Coastal Area	共著	2021年3月	IEEE, Proc. of the 2021 IEEE 3rd Global Conference on Life Sciences and Technologies (LifeTech 2021)	Hideyuki Takahashi, Kenta Katayama, Nobuhide Yokota, Kazuya Sugiyasu	pp.239-240		
Motion-Tolerant Method for Extracting Spatially Distributed Visible Light IDs	共著	2020年10月	IEEE, Proc. of the 2020 IEEE 8th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2020)	Nobuhide Yokota, Hiroshi Yasaka, Kazuya Sugiyasu, Hideyuki Takahashi	pp.267-268		

Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
第3編—情報技術の発展と展望[CDS]コンシューマ・デバイス&システム研究会『第3編—情報技術の発展と展望[CDS]コンシューマ・デバイス&システム研究会』	共著	2020年10月	一般社団法人情報処理学会60周年記念書籍『情報処理学会60年のあゆみ』	森信一郎, 神山 剛, 高橋秀幸, 寺島美昭	pp.148-149
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
IoT機器を活用した沿岸部地域向け避難支援システムの研究開発と地域実証	単著	2020年5月	一般社団法人 日本私立大学連盟 提言・事例集『私立大学理工系分野の研究基盤の強化と向上—科学技術イノベーションの推進に向けて—』	高橋秀幸	pp.74
G. 学会における研究発表					
沿岸部地域向け避難行動支援システムの試作と実験—福島県いわき市薄磯地区を事例として—	共同	2021年3月	情報処理学会第83回全国大会講演論文集(オンライン)	◎高橋秀幸, 片山健太, 横田信英, 杉安和也	pp.pp.4-431-4-432
ライフログと感情に基づく過去の出来事に関する手がかり提示支援機能の設計	共同	2021年1月	2020年度 情報処理学会東北支部研究会(オンライン)	角田脩, 高橋秀幸	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	学術論文への投稿および査読付き国際会議論文の発表を積極的に行い, モノのインターネット, マルチエージェント技術, 防災・減災に関する研究テーマについて国内外の研究者から評価を受けることを目標とする。				
今年度の進捗状況	コロナ禍におけるオンラインの授業準備や用務等で十分な研究活動を行うことができず, 論文や研究発表が例年よりも少ない状況である。一方, 筆頭著者として, 国際会議1件, 国内学会1件の発表を行うことができた。				
来年度の進捗目標	筆頭著者として研究成果に関する学術論文への投稿, 外部発表を積極的に行い, 国内外の研究者と議論を行う。また, 国際会議や企画セッションなどの開催も積極的に行い, 国内外の研究者とのコミュニティ構築や提供も行い, 国際共同研究プロジェクトなどの立ち上げを目指す。				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
科学研究費補助金 科研費・基盤研究(B)	2018年度～2020年度	個別(研究代表者)	採択課題「天災に適応し地域防災力を強化する避難行動支援システムに向けた実証的研究」 今後の大地震による巨大津波の襲来, 集中豪雨, 台風, 噴火などの未曾有の天災に備えることが喫緊の課題となっている。自然災害発生時には, 建物内の損壊や倒壊, 火災, 土砂崩れなどによって平時の屋内外の状況が一変する。そのため, 平時から大きく状況が変化する場合や突発的に発生する予測困難な災害が発生する場合に自然災害の状況や二次災害の状況に応じて, 刻々と対応の変化を求められる場合などを考慮した避難行動支援システムの実現が期待される。本研究課題では, ロボット, ドローン, センサ, 携帯端末などの通信機能を備えた人工物をIoT(Internet of Things)機器とし, そのIoT機器同士が自律的に連携しながら災害の状況および避難行動要支援者の状況を把握し, さらにSNS, 過去の災害アーカイブを活用しながら適応的に避難誘導を実現するための避難行動支援システム構築基盤技術の確立と実証実験の実施が目的である。		
IV 学会等及び社会における主な活動					
2021年3月～2021年9月			2021 IEEE SERVICES (2021 IEEE World Congress on Services) Program committee member		

2021年3月～2021年11月	2021 IEEE 10th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2021) Organized Session Chair
2021年1月～2021年7月	Symposium on Human Computing and Social Computing (HCSC) at IEEE COMPSAC2021 Program Committee Member
2020年12月～2020年12月	令和2年 福島県いわき市薄磯区津波避難訓練 助言・指導, 情報提供, 企画, 運営参加・支援, 実演
2020年9月～2021年5月	6th Special Session on Intelligent and Contextual Systems (ICxS 2021) in conjunction with the 13th Asian Conference on Intelligent Information and Database Systems (ACIIDS 2021) Program committee member
2020年9月～2021年8月	第20回情報科学技術フォーラム(FIT2021) FIT2021実行委員会・委員
2020年6月～2021年9月	14th International Workshop on Informatics (IWIN2020) Program committee member
2020年3月～2020年11月	2020 IEEE 9th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2020) Organized Session Chair
2020年2月～2020年10月	IEEE SERVICES 2020 (2020 IEEE World Congress on Services) Program committee member
2019年10月～2020年7月	Symposium on Human Computing and Social Computing (HCSC) at IEEE COMPSAC2020 Program committee member
2019年4月～2023年3月	一般社団法人 情報処理学会・コンシューマ・デバイス&システム研究会

#### V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
第14回 情報科学シンポジウム	オンライン開催	2021年3月～2021年3月	教養学部情報科学科主催の情報科学シンポジウム「情報科学が導く新たな防災」の開催を行なった。
情報処理学会 第8回学生スマートフォンアプリコンテスト	オンライン開催	2020年4月～2020年10月	ゼミ3年生の2チームがスマートフォンアプリコンテストに出場し、2チームともに奨励賞を受賞した。
現在の課題・目標	展示会などに積極的に出展し、現在取り組んでいる研究内容やプロジェクトに関する紹介を行う。さらに産学連携による研究開発を推進することを目標とする。		
今年度の進捗状況	東北エリアの大手企業およびベンチャー企業、地方自治体との意見交換を行い、様々な共同研究を推進するために討論を行なっている。		
来年度の進捗目標	産学官連携による共同研究やプロジェクトを開始し、新たな研究開発の推進を目指す。		

#### VI 学内における管理運営に関する諸活動

産学連携推進センター委員  
時間割調整委員  
2020年度新入生グループ主任  
2020年度情報科学科指定ノートパソコン担当  
情報科学シンポジウム委員  
ブリッジ教育  
学科紹介パンフ委員

2020年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	准教授	氏名	武田 敦志	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
自律走行するLEGOロボットを使ったソフトウェア開発教育		2020年4月1日～		LEGO社から販売されているLEGO Mindstormsを使ってソフトウェア開発手法に関する教育を行っている。この自律走行ロボットを題材としたソフトウェア開発教育では、現実に役に立つソフトウェアの設計や確実に動作するソフトウェアの開発に関する演習を効果的に行うことができた。			
PowerPointを使った講義資料の配布とWebによる予習・復習のための情報発信		2020年4月1日～		PowerPointを用いて画像やアニメーションを取り入れた資料を作成し、この資料を使って講義を進めることにより、黒板のみを使った講義よりも高い教育効果が得られた。また、講義資料のデータをWebで公開しており、予習・復習を容易に行うことができるようになった。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
プログラミング演習環境の整備		2020年4月1日～		情報科学科の学生を対象としたプログラミング演習環境をプライベートクラウド上に整備した。プログラムの作成から実行までをクラウドサーバで行うため、開発用のソフトウェアをノートPCなどの操作デバイスにインストールする必要がなく、インターネットに接続している様々な端末からプログラミングの課題に取り組めるようになっている。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
福島県立清陵情報高校にて出張講義を実施		2020年12月21日～2020年12月21日		福島県立清陵情報高校にて出張講義「人工知能って何?～コンピュータにできないことを探そう～」を実施した。データサイエンスや機械学習に関する技術の発展を説明し、今後の情報化社会の変化についての議論を紹介した。			
現在の課題・目標		情報系学生を対象としたデータサイエンス分野の教育方法の確立					
今年度の進捗状況		クラウド環境を想定したプログラミング演習方法の開発					
来年度の進捗目標		データサイエンス教育のための演習環境の整備					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
画像分類のためのDense Residual Networkの提案		単独	2020年8月	第23回 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2020)(日本)		武田 敦志	
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		自律走行ロボットを題材としたソフトウェア開発の教育環境の構築 深層学習を用いた人工知能アプリケーションの調査と開発					
今年度の進捗状況		画像認識・音声認識のための深層学習技術の開発 深層学習を用いた囲碁ソフトウェアの開発 小規模データセットを対象とした機械学習手法の開発					

来年度の進捗目標	画像認識のための深層学習技術の開発 深層学習を用いた囲碁ソフトウェアの開発 効率的な画像認識手法の開発		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 科学研究費補助金 基盤研究(C)	2019年度～2022年度	個別	グリッドニューラルネットワークと転移学習技術を活用することにより、訓練データが小規模であっても高い画像分類性能を有する多層ニューラルネットワークを実現する。
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2020年4月	東北学術研究インターネットコミュニティ(TOPIC) 幹事		
2019年4月～	情報処理学会MBL研究会 運営委員 会員		
2018年4月～	ETロボコン東北地区大会 技術委員 委員		
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			



2020年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	准教授	氏名	土原 和子	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
パワーポイントによる講義と授業用独自プリントの連動・併用、講義データのダウンロード		2020年4月1日～		講義をより効果的にするため、パワーポイントを使用した授業と、独自プリントを併用した。特にパワーポイントには写真や動画を多く採用し、また、プリントはカラーのため、HPをつくってそこにカラーの図表を講義前にアップロードしておき、ダウンロードできるようにした。			
オンデマンド講義における、わかりやすい動画の作成		2020年4月1日～		オンデマンド講義において、学生がわかりやすいように動画を作成した。90分しゃべり続けるのではなく、復習、イントロ、講義内容1、2、3、まとめのように区切って作成した。また、講義前に資料をアップロードし、講義を聴きながら書き込むなど併用できるようにした。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
独自プリントの作成		2020年4月1日～		学生が書き込める穴埋め式の配布資料も準備して「書いて覚える」ということを徹底した。これにより、学生はその単元のポイントがわかり、そのプリントをコピーして学生が使用し、しっかり復習できるようにした。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
「森林とバイオメティクス」 バイオメティクス・エコメティクス-持続可能な循環型社会へ導く技術革新のヒント-『「森林とバイオメティクス」 バイオメティクス・エコメティクス-持続可能な循環型社会へ導く技術革新のヒント-』	共著	2021年1月	シーエムシー出版、シーエムシー出版、シーエムシー出版	監修: 下村政嗣 高梨琢磨、土原和子、久保智史	pp.54-62		
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
チョウの幼虫の聴覚	単著	2020年5月	日本音響学会聴覚研究会資料 vol.50.No2, 日本音響学会聴覚研究会資料vol.50.No2	◎土原和子、山崎一夫、杉浦真治、井上大成、高梨琢磨	pp.135-138		
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		昆虫における感覚受容の解明					
今年度の進捗状況		チョウ目における音受容の行動解析をおこなった					
来年度の進捗目標							

III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
IV 学会等及び社会における主な活動			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	准教授	氏名	星野 真樹	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年 月 日 (西 暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		1. 双方向の授業展開を取り入れ、とくに教職科目で学生が能動的に考える機会を設ける。 2. 適切な研究課題を探せるように指導を行い、学生が研究を主体的に行える環境を整える。					
今年度の進捗状況		1. 今年度は特殊な状況だったこともありあまり実施できなかった。 2. 学生が自ら課題を設定して、総合研究を行えるように指導を行った。					
来年度の進捗目標		1. 双方向の授業展開を取り入れ、とくに教職科目で学生が能動的に考える機会を設ける。 2. 適切な研究課題を探せるように指導を行い、学生が研究を主体的に行える環境を整える。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文 (審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文 (審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー (専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー (専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評 (専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳 (学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		1. これまで扱ってきた方程式に関する結果の検討と改良を試みる。 2. 他の専門分野の資料を収集し、新しい研究課題に関して検討する。 3. 数学教育に関する資料収集と教材研究的な視点からの研究を行う。					
今年度の進捗状況		1. これまで扱ったものについて、資料を整理し結果について改善できなかった。 2. 資料収集を行うことができず、新しい研究課題を検討できなかった。 3. 資料収集を行うことができず、研究を進めることができなかった。					
来年度の進捗目標		1. 半線形熱方程式に関する結果の検討と改良を試みる。 2. 他の専門分野の資料を収集し、新しい研究課題に関して検討する。 3. 数学教育に関する資料収集と教材研究的な視点からの研究を行う。					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得 (採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度 (西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
2007年10月～			日本数学会会員 会員				
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日 (西暦)		発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							

来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2020年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	准教授	氏名	松本 章代	大学院の授業 担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
<b>教育実践上の主な業績</b>		<b>年月日(西暦)</b>		<b>概要</b>			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
オンデマンド型授業におけるzoomとresponの活用		2020年		オンデマンド型授業をZoomでライブ配信し、オンタイムでもオンデマンドでも受講できるようにした。またresponを活用してコミュニケーションを取り飽きさせないよう工夫した。			
プログラミング演習授業における作業手順動画の作成・提供		2020年		「コンピュータと論理A」においてプログラミングの作業手順を動画にして授業中に学生が各自閲覧できるようにし、自分のペースで作業が進められるようにした。			
「読解・作文の技法」用ネット課題提出システムの構築・運用		2020年		担当教員からの依頼を受け、学生が作文を投稿し、相互評価できるウェブシステムを構築し、授業における運用をサポートした。			
「読解・作文の技法」用コメント・質問提出システムの構築・運用		2020年		担当教員からの依頼を受け、学生からのコメント・質問を受け付けるウェブシステムを構築し、授業における運用をサポートした。			
外国語会話訓練システムの構築および運用		2020年		ドイツ語教員からの依頼を受け、外国語会話訓練システムを構築し、授業における運用をサポートした。			
プログラミング演習授業において学習者が能動的に学習に臨む仕組みおよび学習した内容が定着するような支援法の実践		2020年		学習者の予習・復習を含めた学習を支援する枠組みを作り、学習効果の実質的な向上を狙っている。			
演習授業における学生の意欲を向上させるための取組		2020年		演習の授業において学生の学習意欲向上を図るため、課題の題材を「学生の興味を惹き各自工夫の余地がある内容」にすることを常に心がけている。かつ、制作物をウェブ上にアップして公開するといった取り組みを行っている。			
プログラミング演習授業における掲示板の活用		2020年		オンタイム授業であったため演習に関する質問はZoomで受け付けた。寄せられた質問および回答はオンライン掲示板に掲載し学生間での情報共有を図った。			
プログラミングのレポート提出システムの構築および運用		2020年		学生が課題のレポートをウェブブラウザ上で相互評価できる仕組みを構築した。			
プログラミング演習授業における講義動画のウェブ公開		2020年		演習授業の解説部分を録画し動画にして、講義スライドとともにウェブ上に公開している。			
「コンピュータと論理A」用ウェブサイト作成		2020年		「コンピュータと論理A」のウェブサイトを作成し、公開している。講義資料の閲覧や課題の提出ができるだけでなく、課題のプログラムを提出すると入力ミスを指摘する機能がついている。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
「情報科学基礎演習A」講義資料		2020年		問題解決技法入門の講義スライドを作成した。			
「プログラミング初級」講義資料		2020年		講義用スライドを作成した。			
「情報科学基礎教育」講義資料		2020年		講義用スライドを作成した。			
「コンピュータと論理A」講義資料		2020年		講義用スライドおよび動画を作成した。			
「情報科学演習」講義資料		2020年		演習の説明用スライド、演習に利用する素材を作成した。			
「プログラミングの基礎」講義資料		2020年		講義用スライドを作成した。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
高校生を対象とした出張講義(オンデマンド)		2020年		「情報科学への招待」というテーマで榴ヶ岡高校1年生を対象として出張講義を行った。			
情報科学科主催公開講座の実施		2020年		情報科学科主催の公開講座「小中学生対象プログラミング体験教室」を企画し講師を務めた。			
視覚支援学校でのプログラミング授業		2020年		宮城県立視覚支援学校にて小学部の児童にプログラミングの授業をおこなった。			

現在の課題・目標	①「情報科学演習」において学生が主体的にプログラミングに取り組めるだけのスキルを身に付けさせる。 ②1～2年生向け実習科目「コンピュータと論理A」「プログラミング初級」において学生がプログラミングに興味を持つような指導を行う。 ③学生が適切なレポートを作成できるよう指導する。 ④学生に外国語会話を身に付けさせるためのシステムを開発・運用する。 ⑤manabaとresponをより多くの科目で導入し授業改善を図る。				
今年度の進捗状況	①「情報科学演習」では学生一人一人が自ら企画した作品を完成させており、ほぼ達成できた。 ②「コンピュータと論理A」では、スマホアプリという学生に身近な題材によって興味を惹く工夫をした。「初級」は実行結果を視覚化した。 ③「情報科学基礎教育」の授業において「読解・作文の基礎」を担当した。新カリから少人数教育になったということもあり、適切なレポートの書き方を習得できた学生の割合は旧カリの「初年次教育」より大幅に増加した手ごたえを得られた。 ④外国語会話訓練システムは今年度、音読トレーニングをおこなうAndroid/iPhone用アプリを開発し、言語文化学科のドイツ語の授業において運用を実現した。 ⑤「情報化社会の基礎」「情報科学基礎教育」「コンピュータと論理A」「プログラミングの基礎」「プログラミング初級」の5科目でmanabaとresponを活用し授業改善を図った。				
来年度の進捗目標	①来年度の「情報科学演習」についても目標を達成できるよう引き続き努力する。 ②プログラミングの初期教育において授業についてこられない学生の割合を減らす。 ③学生が適切なレポートを作成できるよう、指導をより徹底する。 ④外国語会話訓練システムにおける学習者の自動レベル判定の精度を上げ、配信データへの反映を目指す。また、動画配信をおこないたい。 ⑤manabaとresponをより活用し授業改善を図る。				
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
視覚障害児向けのプログラミング教材開発	共同	2021年3月	2020年度JSiSE学生研究発表会(オンライン)	細屋静花, 菅原研, 松本章代	
子ども向けプログラミング体験オンラインイベントの実施と学習効果の調査	共同	2021年3月	情報処理学会コンピュータと教育研究会 159回研究発表会(オンライン)	◎松本章代, 稲垣忠, 菅原研	
視覚支援学校における低学年向けプログラミング教育環境の開発	共同	2021年1月	2020年度 情報処理学会東北支部研究会(オンライン)	川崎空, 菅原研, 松本章代	
小学生向けプログラミング教材開発とイベント開催～プログラミング的思考力は養われるのか～	共同	2021年1月	2020年度 情報処理学会東北支部研究会(オンライン)	渡邊 太郎, 畠 竜斗, 松本章代	
教科横断の資質・能力の育成を支援するカリキュラムマネジメントシステムの検討	共同	2020年10月	日本教育メディア学会 第27回 年次大会(オンライン)	稲垣 忠, 後藤 康志, 泰山 裕, 豊田 充崇, 松本章代	
カリキュラムマネジメントシステムの国外動向に関する調査	共同	2020年9月	日本教育工学会 2020年秋季全国大会(オンライン)	稲垣 忠, 後藤 康志, 泰山 裕, 豊田 充崇, 松本章代	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					

現在の課題・目標	①文章作成教育に関する研究を進める。 ②ウェブ文書解析に関する研究を進める。 ③外国語会話教育システムに関する研究を進める。 ④プログラミング教育に関する研究を進める。 ⑤ルーブリックに関する研究を進める。
今年度の進捗状況	①については学生レポートの投稿・批評システムの改善を図った。 ②についてはショッピングサイトにおけるレビューの解析を進めた。 ③については音読トレーニングソフトをスマホ用に移植し運用した。 ④については子ども向けプログラミング教育のあり方を検討した。また、視覚障害をもつ子どもに対するプログラミング教育の研究を始めた。 ⑤についてはルーブリックのウェブシステムを改善し運用した。
来年度の進捗目標	①については学生レポートの投稿・批評システムの改善をさらに図る。 ②についてはSNSにおける書き込みや商品レビューの分析をさらに進める。 ③についてはディープラーニングを用いて学習者の自動レベル判定を目指す。 ④については子ども向けプログラミング教育のあり方を検討し実践する。視覚障害をもつ子どもに対するプログラミング教育の実践を本格化する。 ⑤についてはカリキュラムマネジメントシステムの開発に移行する。

### Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	初等中等教育における探究学習を対象としたカリキュラム・マネジメントの支援ツールを開発する。特にカリキュラムに関する研究とそれを運用するためのシステム開発を連携させた上で、学校現場での実証を試みる学際的なアプローチを特色とする。探究スキルの明確化は、高等学校学習指導要領(文部科学省 2018)より新設される「総合的な探究の時間」「古典探究」「地理探究」「理教探究」等の探究に関連する科目において、共通の基盤となるスキルを示し、その育成を小学校段階から系統的に行う手法を提案できる。ウェブ上のシステムについては、探究スキルを中心とした情報活用能力のマネジメントを支援するツールとして提供する。
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2019年度～2021年度	共同(研究代表者)	本研究の目的は、子ども向けプログラミング教材を開発して実際に運用し、教育効果の検証を行うことである。本研究では、まずオリジナルのプログラミング教材を開発し、それをを用いて継続的にプログラミング教育を行っていく。既存の教材との違いや学習前後の能力差などの観点からその教育効果を検証することを目指す。教育効果を測定するため、評価手法を検討し、論理的思考力との因果関係を明らかにする。

### Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2015年11月～	日本教育工学会会員 会員
2009年1月～	教育システム情報学会会員 会員
2008年9月～	日本データベース学会会員 会員
2007年7月～	電子情報通信学会会員 会員
2005年3月～	情報処理学会会員 会員

### Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

### Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

--

2020年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	准教授	氏名	村上 弘志	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
学習内容の実践による理解の促進		2020年4月1日～		毎回の授業の中で講義に関連したイベントなどを紹介し、実際に体験することで定着を図っている。			
授業への要望のアンケート		2020年4月1日～		毎回の講義に関する質問・意見や感想をオンラインアンケートで尋ねている。			
学習内容の定着と理解の促進		2020年4月1日～		毎回の講義の最後にその回の内容に関わる小問を出し次回以降に解説する。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
高校生のゼミ見学		2020年12月18日		「一日教養学部生の企画」により榴ヶ岡高校の生徒4名を交えてゼミを行った。			
公開講座の講師を務めた		2020年12月5日		教養学部主催の連続公開講座『大人の教養倶楽部「ウィズ(with)コロナの時代」における新たな学び』の第3回として「コロナ禍での星の楽しみ方」と題する講義を行った。			
高校への出張講義の講師を務めた		2020年10月15日		岩手県立盛岡第二高校にて「宇宙を探る情報技術」と題する講義を行った。			
高校への出張講義の講師を務めた		2020年7月13日～2020年8月25日		東北学院榴ヶ岡高校にて「情報科学への招待」と題する講義を行った。オンラインにより期間中に9つのクラスが受講した。			
現在の課題・目標		①学生の到達度にあわせた授業進行を行う ②レポートや練習問題で学生の理解度をはかる ③一方的ではなく双方向で意見を出し合いながら講義を進める ④「科学的思考の基礎」の講義内容を見直し、資料を改訂する					
今年度の進捗状況		上記目標①については例年と同様に練習問題の正答率などをもとに、習熟度が不足している項目の復習をより重点的に行った。 ②については各講義でのレポートに加え、特に演習系の講義での問題の解答状況や正答率から理解不足の点が明らかにし説明を加えるなどの対応を行った。 ③については少人数講義では学生との対話を増やし、学生自身に課題解決の方向性を決めさせる工夫をし、大人数講義では即時に回答が集められるツールを利用して意見を徴集しそれに対してコメントするなどの工夫を行った。 ④については特に日常生活への応用の点でよりわかりやすい説明に改訂した。					
来年度の進捗目標		上記目標①についてはresponなどのツールを利用し、よりきめ細かな到達度の把握を目指す。 ②については例年一定の効果が見られるため引き続き実施する。 ③については大人数講義での講義内アンケートなどをより増やす。 ④については、全体的に講義の内容や説明に用いる例題等を見直す。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							



<p>Screening and selection of XRISM/Xtend flight model CCD</p>	<p>共著</p>	<p>2021年1月</p>	<p>Nuclear Instruments and Methods in Physics Research Section A, 985</p>	<p>Tomokage Yoneyama, Hirofumi Noda, Maho Hanaoka, Koki Okazaki, Kazunori Asakura, Kiyoshi Hayashida, Ayami Ishikura, Shotaro Sakuma, Kengo Hattori, Hironori Matsumoto, Koji Mori, Yoshiaki Kanemaru, Jin Sato, Toshiyuki Takaki, Hiroyuki Uchida, Takaaki Tanaka, Hiromichi Okon, Yuki Amano, Takeshi G. Tsuru, Hiroshi Tomida, Junko S. Hiraga, Yukino Urabe, Kumiko K. Nobukawa, Mariko Saito, Masayoshi Nobukawa, Takashi Sako, Hideki Uchiyama, Hiroshi Nakajima, Akira Kashimura, Shogo B. Kobayashi, Kouichi Hagino, Hiroshi Murakami</p>	<p>pp.164676-164676</p>
<p>Experimental studies on the charge transfer inefficiency of CCD developed for the soft X-ray imaging telescope Xtend aboard the XRISM satellite</p>	<p>共著</p>	<p>2020年12月</p>	<p>Nuclear Instruments and Methods in Physics Research Section A, 984</p>	<p>Yoshiaki Kanemaru, Jin Sato, Toshiyuki Takaki, Yuta Terada, Koji Mori, Mariko Saito, Kumiko K. Nobukawa, Takaaki Tanaka, Hiroyuki Uchida, Kiyoshi Hayashida, Hironori Matsumoto, Hirofumi Noda, Maho Hanaoka, Tomokage Yoneyama, Koki Okazaki, Kazunori Asakura, Shotaro Sakuma, Kengo Hattori, Ayami Ishikura, Yuki Amano, Hiromichi Okon, Takeshi G. Tsuru, Hiroshi Tomida, Hikari Kashimura, Hiroshi Nakajima, Takayoshi Kohmura, Kouichi Hagino, Hiroshi Murakami, Shogo B. Kobayashi, Yusuke Nishioka, Makoto Yamauchi, Isamu Hatsukade, Takashi Sako, Masayoshi Nobukawa, Yukino Urabe, Junko S. Hiraga, Hideki Uchiyama, Kazutaka Yamaoka, Masanobu Ozaki, Tadayasu Dotani, Hiroshi Tsunemi</p>	<p>pp.164646-164646</p>

<p>Optical blocking performance of CCDs developed for the X-ray Astronomy Satellite XRISM</p>	<p>共著</p>	<p>2020年10月</p>	<p>Nuclear Instruments and Methods in Physics Research Section A, 978</p>	<p>Hiroyuki Uchida, Takaaki Tanaka, Yuki Amano, Hiromichi Okon, Takeshi G. Tsuru, Hiroshi Nakajima, Hirofumi Noda, Kiyoshi Hayashida, Hironori Matsumoto, Maho Hanaoka, Tomokage Yoneyama, Koki Okazaki, Kazunori Asakura, Shotaro Sakuma, Kengo Hattori, Ayami Ishikura, Mariko Saito, Kumiko K. Nobukawa, Hiroshi Tomida, Yoshiaki Kanemaru, Jin Sato, Toshiyuki Takaki, Yuta Terada, Koji Mori, Hikari Kashimura, Takayoshi Kohmura, Kouichi Hagino, Hiroshi Murakami, Shogo B. Kobayashi, Yusuke Nishioka, Makoto Yamauchi, Isamu Hatsukade, Takashi Sako, Masayoshi Nobukawa, Yukino Urabe, Junko S. Hiraga, Hideki Uchiyama, Kazutaka Yamaoka, Masanobu Ozaki, Tadayasu Dotani, Hiroshi Tsunemi, Hisanori Suzuki, Shin-ichiro Takagi, Kenichi Sugimoto, Sho Atsumi, Fumiya Tanaka</p>	<p>pp.164374-164374</p>
<p>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</p>					
<p>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</p>					

On-ground calibration of XRISM/Xtend CCD	共著	2020年12月	Proceedings of SPIE, 11444	Tomokage Yoneyama, Hirofumi Noda, Maho Hanaoka, Kiyoshi Hayashida, Koki Okazaki, Kazunori Asakura, Yoshiaki Kanemaru, Jin Sato, Toshiyuki Takaki, Koji Mori, Takashi Sako, Masayoshi Nobukawa, Mariko Saito, Kumiko K. Nobukawa, Hiroshi Murakami, Yuki Amano, Hiroyuki Uchida, Hideki Uchiyama, Hiroshi Tomida, Hiroshi Nakajima, Kengo Hattori, Shotaro Sakuma, Ayami Ishikura, Hironori Matsumoto, Hiromichi Okon, Takaaki Tanaka, Takeshi G. Tsuru, Yukino Urabe, Junko S. Hiraga, Akira Kashimura, Shogo B. Kobayashi, Kouichi Hagino	pp.1144425
Soft x-ray imager (SXI) for Xtend onboard X-Ray Imaging and Spectroscopy Mission (XRISM)	共著	2020年12月	Proceedings of SPIE, 11444	Hiroshi Nakajima, Kiyoshi Hayashida, Hiroshi Tomida, Koji Mori, Hirofumi Noda, Hironori Matsumoto, Tomokage Yoneyama, Koki Okazaki, Kazunori Asakura, Maho Hanaoka, Kengo Hattori, Ayami Ishikura, Shotaro Sakuma, Takaaki Tanaka, Hiroyuki Uchida, Takeshi Go Tsuru, Yuki Amano, Hiromichi Okon, Makoto Yamauchi, Isamu Hatsukade, Yusuke Nishioka, Yoshiaki Kanemaru, Jin Sato, Toshiyuki Takaki, Yuta Terada, Tessei Yoshida, Takayoshi Kohmura, Kouichi Hagino, Shogo Kobayashi, Hiroshi Murakami, Hikari Kashimura, Hideki Uchiyama, Kazutaka Yamaoka, Masayoshi Nobukawa, Takashi Sako, Kumiko Nobukawa, Mariko Saito, Junko S. Hiraga, Yukino Urabe, Masayuki Yoshida, Tadayasu Dotani, Masanobu Ozaki, Hiroshi Tsunemi	pp.1144423

Status of x-ray imaging and spectroscopy mission (XRISM)	共著	2020年12月	Proceedings of SPIE, 11444	Tashiro Makoto, Maejima Hironori, Toda Kenichi, Kelley Richard, Reichenthal Lillian, Hartz Leslie, Petre Robert, Williams Brian et al.	pp.1144422
--	----	----------	----------------------------	--	------------

D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)

E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)

G. 学会における研究発表

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	①XRISM搭載用CCD検出器Xtend-SXIの評価および動作検証 ②銀河系中心のブラックホールの過去の活動性の解明 ③X線CCD検出器の新しい駆動方法の評価 ④X線CCD検出器の新しいイベント抽出法の研究 ⑤将来の天文衛星計画の検討
----------	--

今年度の進捗状況	上記目標①については新たにプロジェクトとして認められたXRISM衛星のCCD検出器チームのsoftwareチームのリーダーとして試験に使うsoftwareを整備するとともに、過去に試験に携わった経験を活かし全体的な検討に参加している。②については引き続き「すざく」衛星の観測データを共同研究者とともに解析中である。③は、国際研究会での発表により欧米の衛星での使用を目指している。④については、CCDのより良い利用を目指しフィッティング法の研究を進めている。⑤については、FORCEプロジェクトの一員として高エネルギーX線帯域における高角度分解能観測の実現に向けより具体的な計画を策定を目指している。
----------	---

来年度の進捗目標	①については、打ち上げに向けた最終段階の試験に参加する。②については、観測データをまとめていく。③については、引き続き運用中の衛星での使用を働きかける。④については、XRISMでの利用を想定した評価を実施する。⑤については、引き続きFORCEの実現に向けてミッションの計画策定に携わる。
----------	---

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
----------	----------	------------------------	----

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2013年7月～	日本物理学会会員 会員
2003年7月～	国際天文学連合(IAU)会員 委員
1999年8月～	高エネルギー宇宙物理学連絡会会員 委員
1997年7月～	日本天文学会会員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

1. 泉情報処理センター主任
2. 中高大一貫教育事業ICT教育専門委員会
3. 学院総合ネットワーク管理委員会

2020年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	教授	氏名	岩動 志乃夫	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
1年生の「地域構想学基礎実習」でフィールドワークと発表会を実施		2020年10月19日～2021年1月18日		地域構想学科1年の地域構想額基礎実習で仙台市内の都市構造を学ぶ目的で、旧奥州街道、芭蕉の辻、仙台浅草、仙台銀座を調査した。学んだ内容をまとめた発表会を実施した。10月19日,11月23日,1月18日の3回。			
地域構想学演習B,卒業研究B受講生の地理学会への参加		2020年10月10日～2020年10月11日		東北地理学会春季学術大会に地域構想学3年演習B,4年卒業研究Bの受講生を参加させ,最先端の研究成果に触れ,研究内容および発表方法,議論の展開について学ばせている。			
2年生の「社会と産業発展実習B」で仙台市の都市構造形成に関するフィールドワークを実施		2020年10月1日～2020年10月15日		10月1日と15日に地域構想学科2年「社会と産業発展実習B」受講生と共に仙台市の都市構造を探るため,四谷用水の歴史や水路沿いと六郷用水・七郷用水の巡検を実施し,地形と水路の開削特性、水利用に伴う産業の発展、都市の成長について学習した。			
3年生の「地域構想学演習B」で学習した成果『東日本大震災10年目を迎えた津波被災地における商業施設の復興—大型店の動向と仮設から本節商業施設へ—』を製本した。		2020年9月18日～2021年1月22日		地域構想学科3年演習A・Bにおいて,夏期休業中に岩手県紫波町で実施したフィールドワークの成果を『岩手県紫波町における集客施設の新設と中心商店街の影響』と題する報告書にまとめた。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		・学科の学生に対して,1年生は地域巡検を通して地域を見る目を養い,その成果をスライド等で口頭発表できることを目標にしている。2年生はフィールドでのヒアリングを実施し,その成果をポスター発表で報告できる能力を養うことを目標にしている。3年生は合宿を通してヒアリングや観察による調査方法を修得してその成果を報告書にまとめる能力を養うことを目標にしている。4年生は卒業研究に取り組み,卒業論文を作成することを目標にしており,達成度がより高い学生は学会発表をすることを目標に指導している。					
今年度の進捗状況		・新型コロナウイルス蔓延防止対策のため,種々の制限があり,予定していたいくつかの計画は中止・縮小せざるを得なかった。その中で1年生の基礎実習の巡検,2年生の発展実習の巡検は概ね目標を達成できた。また例年卒業生による春の学会発表は学会自体が開催中止であったため参加に至らなかった。					
来年度の進捗目標		・今年度を踏襲し,1年生は市内巡検を通して地域調査の喜びや楽しみを習得すること。地域調査を通して2年生はポスター発表を目標に,3年生は合宿を伴うフィールド調査から報告書の作成をそれぞれ目標にしたい。4年生は卒業研究指導が中心となるが,一部は学会での発表を目標に定めて指導していきたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
『1964年と2020年 くらべて楽しむ地図帳』	共著	2020年12月	二宮書店	松井秀郎編	pp.40-43(岩手県・宮城県)、46-47(山形県)		
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							

G. 学会における研究発表					
東日本大震災後にみる仙台市の大型商業施設を企画開発するディベロッパーの特性	共同	2020年10月	東北地理学会2020年度秋季学術大会(仙台(オンライン)), 73, 1	◎岩動志乃夫,佐々木優樹	pp.37
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	①三陸沿岸の都市をフィールドにして,さらに震災後の商業地復興に関する調査を進めること。 ②東北地方を対象とした地域振興や観光交流に関する調査・研究を進め,各種学会で報告し,出版物や論文にまとめること。 ③専門を活かして行政機関や地域の諸事業の発展に寄与すること。				
今年度の進捗状況	今年度は新型コロナウイルス蔓延防止対策実施のため,多くの制限があり,一部予定していた目標を達成することができなかった。				
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>東日本大震災からの復興調査を進めること。</li> <li>東北地方を対象とした地域振興や観光交流に関する調査・研究を進めること。</li> <li>専門を活かして行政機関や地域の諸事業の発展に寄与すること。</li> </ul>				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
科学研究費補助金 文科省科研費基盤研究B	2017年度～	共同(研究分担者)	「観光の組織化と地域構造変容のダイナミズムに基づく次世代観光戦略の構築」というテーマのもとで研究を遂行している。		
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2020年6月～2022年5月	立正地理学会 副会長				
2020年4月～	日本地理学会 代議員6期				
2019年8月～	宮城県特定大規模集客施設立地誘導審議会 委員				
2019年4月～	日本観光研究学会 会員				
2019年4月～2021年3月	東北地理学会 編集委員				
2018年4月～	宮城県七ヶ浜町長期総合計画専門部会 委員				
2017年4月～2021年3月	東北地理学会 評議員5期				
2015年4月～	仙台市泉区区民協同まちづくり事業評価委員 委員長				
2015年4月～	仙台市大規模小売店舗立地法専門委員会 委員長				
2010年6月～2020年5月	立正地理学会 幹事				
2006年4月～	東北都市学会 理事				
1999年4月～	東北都市学会 会員				
1997年4月～	経済地理学会 会員				
1990年4月～	日本都市学会 会員				
1988年4月～	人文地理学会 会員				
1984年4月～	立正地理学会 会員				
1984年4月～	日本地理学会 会員				
1982年10月～	東北地理学会 会員				
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動					
大学院人間情報学研究科長(2019年4月～2021年3月)					



2020年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	教授	氏名	佐久間 政広	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①オンライン授業に適した授業方式と内容を考案し、実施する。 ②対面が困難な状況下での地域調査実習のやり方を工夫する。 ③卒業研究の指導方法を再検討する。					
今年度の進捗状況		①オンライン授業に関しては試行錯誤を重ねたが、うまくいったとは言い難い。 ②地域調査に関する実習は、担当教員としてはそれなりの成果があったと感じたが、受講生にとってどうだったかは確信がもてない。 ③卒業研究の指導については、学生によってうまくいったケースもあればそうでないケースもあった。					
来年度の進捗目標		①オンライン授業の方式と内容についてさらに工夫し、充実をはかる。 ②コロナ禍での地域調査に関する指導方法を工夫する。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
震災被災者にとって被災前の居住地はどのような意味を持つかー東日本大震災における強いられた移動をめぐってー	単著	2020年11月	農山村文化協会、年報 村落社会研究第56集 人の移動から見た農山漁村ー村落研究の新たな地平、56	佐久間政広	pp.215-233		
震災被災者にとって被災前の居住地はどのような意味を持つか	単著	2020年11月	農山村文化協会、年報 村落社会研究 第56集 人の移動から見た農山漁村ー村落研究の新たな地平、農山村文化協会、年報 村落社会研究 第56集 人の移動から見た農山漁村ー村落研究の新たな地平	日本村落研究学会	pp.215～233頁		
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>							
<b>I. 特許</b>							
現在の課題・目標		①現在担当している諸業務を勘案してどのような研究活動が現実可能なかを検討し、課題を設定する。 ②上記を遂行するためにも社会学、とりわけ地域社会学・農村社会学の研究動向を把握する。					
今年度の進捗状況		①コロナ禍のもとオンライン授業の教材準備に追われ、研究活動の点では実現可能な課題を設定することができなかった。そうしたなかでも、「震災被災者にとって被災前の居住地はどのような意味を持つかー東日本大震災における強いられた移動をめぐってー」(『年報村落社会研究58 人の移動から見た農山漁村』農山漁村文化協会、2020年)を公表できたのは成果であった。 ②まったく達成できなかった。					



来年度の進捗目標	①ここ数年継続してきた丸森町調査を本格的に実施し、論文化に向けた作業を積み重ねる。 ②社会学、とりわけ地域社会学・農村社会学の研究動向を把握する。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2019年11月～2021年11月	日本村落研究会副会長 会員		
2019年7月～2021年7月	東北社会学会会長 会員		
2009年10月～	日本村落研究会理事 会員		
1992年9月～	日本村落研究会会員 会員		
1983年9月～	日本社会学会会員 会員		
1981年4月～	東北社会学会会員 会員		
1981年4月～	東北社会学研究会会員 委員		
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	教授	氏名	菅原 真枝	大学院の授業 担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
<b>教育実践上の主な業績</b>		<b>年月日(西暦)</b>		<b>概 要</b>			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
教育方法の工夫		2021年1月		「健康と福祉発展実習B」においてNPO法人「仙台夜まわりグループ」の新田貴之氏を講師として招聘し、仙台市におけるホームレス支援活動の現状や課題について講義いただき、現代社会における福祉的課題について考える授業を企画・実施した。			
学外におけるゼミ活動による社会貢献		2020年10月～2021年2月		「地域構想学演習」および「総合研究」において、「笑ってほしい♪スマイルもりもりプロジェクト」を実施した。泉中央地域包括支援センターの協力のもと、「いきいき健康教室」(全4回)および「きらめきカフェ」(認知症カフェ)にて、学生による指導のもと地域の高齢者を対象として介護予防運動をおこなった。			
教育方法の工夫		2020年9月～2021年1月		「健康と福祉発展実習B」において、対面参加と遠隔参加の学生がグループワークを円滑に進めるため、manabaのコースコンテンツを使用し、スプレッドシートに各グループの学習成果をそのつどアップロードしてもらった。授業内容と計画の進行具合を共有しながら、そのつど目標をたててグループワークを進めることにより、充実した学習成果が得られた。			
事前学習および事後学習への主体的な取り組みを促す工夫		2020年9月～2021年1月		「福祉社会論」において、講義時に学習の振り返りを促すための資料を提示し、さらに次の講義への予備的学習を促すような課題を提示した。講義の冒頭にそれらの課題について解説することにより、予習や復習の課題に主体的に取り組めるよう工夫した。			
学習内容の理解促進		2020年9月～2021年1月		「福祉社会論」において、毎週responを活用し、理解できたことおよび疑問等を記入してもらった。次の授業の冒頭でそのコメントに回答しながら前回の授業の講義内容を確認し、理解の促進に努めた。講義の終わりにその回の全体のまとめを箇条書きで示し、そのつど学習内容の振り返りをおこなった。responに記入のあった疑問はすべてmanabaのコース「掲示板」を利用して回答した。			
学習内容の理解促進		2020年5月		「健康と福祉基礎論A」において、毎週responを活用し、理解できたことおよび疑問等を記入してもらった。次の授業の冒頭でそのコメントに回答しながら前回の授業の講義内容を確認し、理解の促進に努めた。講義の終わりにその回の全体のまとめを箇条書きで示し、そのつど学習内容の振り返りをおこなった。responに記入のあった疑問はすべてmanabaのコース「掲示板」を利用して回答した。			
学習内容の理解促進		2020年5月		「福祉心理学」において、毎週responを活用し、理解できたことおよび疑問等を記入してもらった。次の授業の冒頭でそのコメントに回答しながら前回の授業の講義内容を確認し、理解の促進に努めた。講義の終わりにその回の全体のまとめを箇条書きで示し、そのつど学習内容の振り返りをおこなった。responに記入のあった疑問はすべてmanabaのコース「掲示板」を利用して回答した。			
教育方法の工夫		2020年5月		「健康と福祉基礎論A」において、PowerPointのスライドショーに解説を録音し、動画としてエクスポートして授業動画を作成した。学生が理解しやすく見やすい教材の作成につとめた。また動画変換ソフトを用いてデータ量をおさえた。			
教育方法の工夫		2020年5月～2021年8月		「社会福祉論」において、PowerPointのスライドショーに解説を録音し、動画としてエクスポートして授業動画を作成した。学生が理解しやすく見やすい教材の作成につとめた。また動画変換ソフトを用いてデータ量をおさえた。			
学習内容の理解促進		2020年5月～2020年8月		「社会福祉論」において、毎週responを活用し、理解できたことおよび疑問等を記入してもらった。次の授業の冒頭でそのコメントに回答しながら前回の授業の講義内容を確認し、理解の促進に努めた。講義の終わりにその回の全体のまとめを箇条書きで示し、そのつど学習内容の振り返りをおこなった。responに記入のあった疑問はすべてmanabaのコース「掲示板」を利用して回答した。			

予習または復習への主体的な取り組みを促す工夫	2020年5月～2020年8月	「社会福祉論」において、講義時に学習の振り返りを促すための資料を提示し、さらに次の講義への予備的学習を促すような課題を提示した。講義の冒頭にそれらの課題について解説することにより、予習や復習の課題に主体的に取り組めるよう工夫した。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>					
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>					
教育活動の公開	2021年2月	ゼミ活動「スマイルもりもりプロジェクト」の成果発表として、「泉六大学まちづくりフェスティバル」において発表動画が公開された。			
教育・研究成果の公開	2020年10月	地域構想学演習で実施した「スマイルもりもりプロジェクト」の成果として作成した介護予防運動のテキストを、泉区内の介護予防運動教室等で無料配布した。泉中央地域包括支援センターが主催する「いきいき健康教室」および「きらめきカフェ」でも、本事業について宣伝した。			
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>					
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 具体的な事例で関心をひきつけながらも、学問の基礎的なコンセプトを理解してもらえるよう工夫する。</li> <li>② 引き続き外部機関と連携する。</li> <li>③ 学生たちが授業をとおして社会実践活動に自ら主体的に取り組めるように促す。</li> <li>④ ゼミ学生とOB・OGとの交流の機会を積極的に確保し、活用する。</li> <li>⑤ 支援が必要な学生に対するきめ細やかな対応を、より一層心がける。</li> </ul>				
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 授業内容がマンネリ化しないよう、社会の新しい動向を取り入れた授業内容になるよう工夫した。</li> <li>② 外部機関との連携により、学生との社会実践活動をより大きなものへと広げることができた。</li> <li>③ 学生との社会実践活動をアピールする機会を増やした。</li> <li>④ ゼミ学生とOB・OGとの交流の機会を積極的に確保し、活用した。</li> <li>⑤ 支援が必要な学生に対するきめ細やかな対応を、より一層心がけた。</li> </ul>				
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 授業中に発言する学生に偏りがでないように配慮する。</li> <li>② 引き続き外部機関と連携する。</li> <li>③ 学生たちが授業をとおして社会実践活動に自ら主体的に取り組めるように促す。</li> <li>④ ゼミ学生とOB・OGとの交流を持続的なものにする。</li> <li>⑤ 支援が必要な学生に対するきめ細やかな対応を、より一層心がける。</li> </ul>				
<b>II 研究活動</b>					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 批判的社会理論研究に関する文献研究を継続し、研究発表をおこなう。</li> <li>② 研究代表者として科研費が取得できたさいには、計画にもとづいて研究遂行する。</li> <li>③ 科研費の共同研究者として、外国人ケアワーカーに関するフィールドワークを充実させ、成果を得る。</li> <li>④ 震災ボランティアに関する共同研究の成果を、学会発表または論文として公表する。</li> </ul>				
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 批判的社会理論に関する研究会に参加した。</li> <li>② 社会的実践および研究の成果を学会で公表した。</li> <li>③ 自らが研究代表者となる科研費を獲得し、老人ホームでの調査研究を実施した。</li> <li>④ 自らが研究代表者となる科研費を獲得し、海外調査により貴重なデータ資料と情報を得た。</li> <li>⑤ 共同研究者として従事している科研費をもとに、外国人ケアワーカーに関する知見を得た。</li> </ul>				
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 批判的社会理論研究に関する文献研究を継続し、研究発表をおこなう。</li> <li>② 科研費の研究代表者として、計画にもとづき研究遂行し、その成果を学会または論文で公表する。</li> <li>③ 科研費の共同研究者として、外国人ケアワーカーに関するフィールドワークを充実させ、成果を得る。</li> </ul>				

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
その他の補助金・助成金 仙台市泉区「いずみ 絆プロジェクト支援事業」	2019年度	個別	事業名「笑ってほしい♪スマイルもりもりプロジェクト」、泉中央地域包括支援センターと協働し、いきいき健康教室(全4回)および「きらめきカフェ」(認知症カフェ)で地域の高齢者を対象に介護予防運動をおこなった。またオリジナルの軽運動を開発し、テキストおよび動画の作成をおこなった。
科学研究費補助金 科学研究費基盤研究(C)	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	研究題目「社会統合の展開と可能性—外国人ケアワーカーのキャリアと移動の選択に注目して」、研究代表者 篠原千佳(桃山学院大学)
科学研究費補助金 科学研究費基盤研究(C)	2018年度～2022年度	個別	研究題目 外国人ケアワーカーの来日動機と定住意向を規定する要因に関する社会学的研究 研究代表者 菅原真枝
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2020年4月～		大崎市男女共同参画推進審議会委員長 委員長	
2020年4月～		公益財団法人仙台市スポーツ振興事業団評議員 委員	
2020年4月～		第36次宮城県社会教育委員会委員 委員	
2019年3月～		日本在宅ケア学会会員 会員	
2017年2月～		特定非営利活動法人とっておきの音楽祭 理事 委員	
2016年9月～		特定非営利活動法人仙台バリアフリーツアーセンター 理事 委員	
2016年4月～		東北学院大学教育研究所 所員 委員	
2006年～		日本福祉文化学会 会員 会員	
2006年～		大崎市男女共同参画推進審議会 委員 委員	
2003年～		福祉社会学会 会員 会員	
1998年～		日本社会学会 会員 会員	
1996年～		東北社会学会 会員 会員	
1996年～		東北社会学研究会 会員 委員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	教授	氏名	高野 岳彦	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
講義系授業(東北地域論, 地理学, 地誌学 I, 地域システム論, 都市地域論)		2020年5月11日～2021年1月20日		変動する地域や世界の実情に即したカラー図表を作成・配布するとともに, 意見・課題カードを配布して次週それを解説して, 受講生の興味関心の創発と意思疎通を確保する工夫を心がけた。			
演習系授業1(基礎購読)		2020年5月11日～2020年8月10日		仙台を対象にした人文社会分野の研究論文を輪読しながら, 文献読解と発表の基礎技能, 各事例の比較表の作成を通じた情報整理技能の習得を行った。			
演習系授業2(演習, 総合研究)		2020年5月8日～2021年3月31日		学生の興味関心に対応して地域研究の指導を行った。本年度のゼミテーマは「農業の六次産業化」, 「観光の地域づくり」で, 宮城, 福島, 岩手県内各地の事例を通して地域調査の基本を習得させた。			
実習系授業(社会と産業発展実習, 地域データ分析)		2020年5月7日～2021年1月25日		地域研究に役立つ地域統計データのPCによる分析方法とその分布図化の基本技能を習得し, 最後には会得した技能を活用して, 任意の地域分析を行わせた。			
<b>2. 作成した教科書, 教材, 参考書</b>							
「地誌学」資料		2020年9月29日～2021年1月26日		地誌学の視点と, それをアメリカ合衆国に応用したカラー図表資料を作成。			
「地域システム論」資料		2020年9月29日～2021年1月26日		地域のシステム現象を例示するカラー図表資料を作成。			
「地域データ分析」課題資料		2020年9月28日～2021年1月25日		地域統計データの分析法とその地図化の方法を具体的に解説するカラー図表資料を作成。			
「都市地域論」資料の作成		2020年5月12日～2021年8月11日		都市の歴史, 都市問題, 都市計画に関する各地の情報を収集してカラー図表資料を作成。			
「東北地域論」資料		2020年5月11日～2021年1月20日		縄文から現代までの東北地方の地域性の形成を解説するカラー図表資料を作成。			
授業資料のweb公開		2020年4月1日～2021年3月31日		受講者の事前事後の学修を助けるために, 授業資料をすべてweb公開している。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表, 講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
卒論指導		2020年4月1日～2021年3月31日		ゼミ指導学生の研究が, 昨年の学科長賞に続き, 今年度は学部長賞に選ばれた。			
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・地理・地誌学の授業は, 絶えず変化する国や地域の政治経済的な出来事や社会・文化状況そして自然事象や環境問題に即して, 時宜を得た内容の精選に努めることが求められるので, そうした知見と情報の収集・整理が継続的な日々の課題である。</li> <li>・その上で授業においては一方通行の講義に終始しないよう受講生との意思疎通を確保するため, 講義系の授業では意見・質問カードの利用, 実習系授業では理解を促す課題の工夫, 演習系の授業では学生の興味・関心を引き出してそれに即した課題テーマを提案し, 自主性を創発させることが目標である。</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>・上記の目標に対応すべく世界や地域の情報を毎日チェックし, 授業への応用を検討している。</li> <li>・講義系授業では意見・質問カードの提出をほぼ毎時間行っており, 受講生から提出されたカードや課題は早朝と休日にそれをチェックし, 授業で返却・解説を行った。</li> <li>・演習系授業では学生の興味関心に即した指導を心掛け, 実地調査にできるだけ同行し, 成果の報告を行うことができた。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度までの経験と実績に基づいて世界や地域の状況にあわせた授業内容と課題のさらなる改善に精励することが目標である。</li> <li>・実習系授業のうち地域構想発展実習では, 新2年生受講者の興味関心と自主性に即した指導を通して, 地域問題への認識を深めさせるとともに, 調査研究の作法を体得させることが目標である。</li> <li>・地域データ分析では, より効果的な操作の教授法と理解を促す実習課題の改善に努める。</li> <li>・演習系授業では, 5人の新4年生, 6人の新3年生と普段から交流を深め, その興味関心と自主性を創発させ, 調査研究の方法をさらに向上させて, 研究論文に結実させることが目標である。</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
<b>A. 学術書</b>					
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>					
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>					
復興特需期の仙台市における人口の増減分布 ち属性変化	単著	2020年12月	東北学院大学教養学部地域構 想学科、地域構想学研究教育報 告、11, 東北学院大学教養学部 地域構想学科、地域構想学研究 教育報告、11	不明	pp.35～42
花泉古代稲生産組合の稲作付加価値化の取り 組みと課題	単著	2020年12月	東北学院大学教養学部地域構 想学科、地域構想学研究教育報 告、11, 東北学院大学教養学部 地域構想学科、地域構想学研究 教育報告、11	◎高野岳彦・高橋光	pp.1～20
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>					
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>					
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>					
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>					
<b>G. 学会における研究発表</b>					
花泉古代稲生産組合による稲作の六次産業化 (再論)	単独	2021年2月	経済地理学会北東支部会(不明)	不明	
花泉古代稲生産組合における稲作付加価値化 の取り組み	共同	2020年10月	東北地理学会(不明)	◎高野岳彦、高橋光	
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・津波被災地域の水産業について、沿岸地域の多様性をふまえた復興プロセスと持続性課題</li> <li>・福島盆地における放射能風評被害後の農業振興の動向</li> <li>・中山間地域における第一次産業の付加価値化の現状と課題</li> <li>・地方都市の地域振興課題</li> </ul>				
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・花泉町の農業の六次産業化の実態を調査</li> <li>・七ヶ浜町の六次産業化の取り組みを調査</li> <li>・福島・伊達管内における大規模農産物直売所の地域効果に関する調査</li> <li>・ご当地コスメの地域産業としての意義に関する調査</li> </ul>				
来年度の進捗目標	・上記の進捗状況をうけて、来年度も新たな事例地域を設定して研究を継続する。				
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>					
2019年6月～		東北地理学会会長 会員			
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>					

2020年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	教授	氏名	高橋 信二	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・(講義科目)基礎的および専門的知識・スキルを習得させる</li> <li>・(実習・演習科目)知識・スキルの習得と応用</li> <li>・応用分野での知識・スキルの実践</li> </ul>					
今年度の進捗状況		順調に達成している					
来年度の進捗目標		専門性の高いスキル(実験, データ分析等)の習得水準を向上させる					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Use of Stroop test for sports psychology study: cross-over design research		単著	2020年12月	Front. Psychol, Front. Psychol		Takahashi S, Grove PM	pp.https://doi.org/10.3389/fpsyg.2020.581111
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		身体活動のタイプが生理的および心理応答, 認知機能, 脳の活性性及び効果の検討					
今年度の進捗状況		やや遅延気味だが目標達成に向けて進んでいる					
来年度の進捗目標		データ収集					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(C)一過性運動のタイプが認知機能と脳活性に及ぼす影響		2017年度~2020年度	個別		どのようなタイプの運動が高次認知機能と脳の活性を向上させるのかを明らかにする。具体的には、単純な有酸素運動であるランニングと専門的な技術と戦術的な要因を含む複雑な運動を行い、各運動後のストロープ課題の成績と前頭前野の血流量を比較する。		
IV 学会等及び社会における主な活動							
2020年				国内外の学術誌査読担当(国際誌:5編;国内誌:3編) 委員			
2013年~				日本体育測定評価学会理事 会員			
2010年~				European College of Sport Science学会員 会員			

2001年～	American College of Sports Medicine学会員 会員		
1999年～	日本体育学会学会員 会員		
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
<b>展覧会・演奏会・競技会等の名称</b>	<b>場 所</b>	<b>開催年月日(西暦)</b>	<b>発表・展示等の内容等</b>
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>			



2020年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	教授	氏名	平吹 喜彦	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
東日本大震災と復興に向き合い、活動する学習機会の導入		2020年～		「持続可能な地域の構築」、「健全な生態系・環境の持続を基軸とするSDGsの推進」という視点から、東日本大震災と復興について考え、行動につなげる機会を、すべての授業に導入してきた。また2011年以降、学術団体や市民団体、被災地住民らと協働で学習会やフォーラム、被災地での復興支援活動を企画・運営し、学生教育にも注意深く導入してきた。ただし、2020・2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため、対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかった。			
「ヒトと自然のかかわり」に対する知的理解とともに、学習者の自己形成が育まれるような教育の創出		2020年～		景観生態学・植生学・ESD(持続を可能にする教育)を専門とする立場から、野生生物の生活史、およびヒト-野生生物-環境間のつながりについて、その多様性や形成史、保全・保護に触れながら学習が深化し、あわせて学習者自身の自然観や人生観、世界観が醸成され得るような教育を心がけてきた。そのための一助として、身近にある自然や暮らしを見つめ直す学習、あるいは地域の児童・生徒や住民と向き合うフィールドワークの開発を積極的に行いながら、実体験と学習者自身による課題解決を重視した取り組みを続けている。ただし、2020・2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため、対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかった。			
「企画する、段取る、遂行する、分析する、まとめる、表現する、伝える」ことのス킬アップ		2020年～		さまざまな学習の内容・形態の中に、「学び」の基本として、このスキームを挿入してきた。ただし、2020・2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため、対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかった。			
「ローカル(地域)」と「グローバル(地球, 世界)」を俯瞰し得る視点の獲得をめざした学習の構築		2020年～		さまざまな学習の内容・形態の中に、「地域と地球・世界」、「多様性の意義」といったテーマや視点を挿入し、持続可能な地域の構築、あるいは地球市民の育成に貢献しうる教育を心がけてきた。また、海外学術調査に赴く際には、国内でフィールドワークを積んだ大学院生や学部学生に同行を促し、異なる自然や風土、文化を体験し得る機会を提供してきた。ただし、2020・2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため、対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかった。			
導入教育として、「自然に浸る」体験を準備		2020年～		自然科学を志向する学生であっても、入学当初から豊かな自然体験を有する者はごく少数でしかない。そこで、「ヒトと自然のかかわり」を学ぶ際の導入段階にふさわしい、学内や近郊の二次的自然を活用した体験学習プログラムを開発してきた。この学習活動では、五感を働かせて自然を認知することの楽しさを味わうとともに、自然界(生態系)の営みが非日常的なスケールで複雑に展開していることに目を向けることをめざしている。ただし、2020・2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため、対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかった。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
自然教育・環境教育・ESD(持続を可能にする教育)・SDGs(持続を可能にする開発目標)にかかわる学習素材・教材アーカイブ		2020年～		自然教育・環境教育・ESD・SDGsを推進する任意団体を組織し、体験学習フィールドの開拓・維持や学習プログラムの開発を進めてきた。2020・2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため、オンライン学習への対応となった。			
講義・実験・実習で用いる説明文・図解資料(印刷物やパワーポイント映像、動画など)、および標本類。2020・2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため、オンライン授業の教材開発に努めた。		2020年～		学習者の理解を助け、しかも自立的な学習活動を織り込んだビジュアル教材の作成に努めてきた。2011年以降は、東日本大震災と復興、持続可能な地域づくりに関わる教材づくりにウエイトを置いている。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							

<p>東日本大震災に伴う大地震・大津波とその後の復興事業によって大きく変遷する海岸エコトーンと沿岸地域に着目して、「南蒲生/砂浜海岸エコトーンモニタリングネットワーク」と「生態系サービスの享受を最大化する‘里浜復興シナリオ’創出プロジェクト」(いずれも世話人代表)、「地域の自然と歴史に学ぶ里浜復興研究会」(世話人)の3つのプラットフォームを運営。現場・地域に根ざした学術調査で収集したデータに基づいて、「ふるさと・里浜復興」に向けた情報やアイデア、実践の発信・分かち合い・学び合いを推進</p>	<p>2020年～</p>	<p>被災地住民や市民団体、学術団体、行政機関などのステークホルダーと協働して、「砂浜海岸エコトーンの構造と恵み、自立的再生に立脚したふるさと・里浜の復興」に関する学び合いを推進した(主な催しについては、前年度までに報告済み;なお、2020・2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため、対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかった)。それらの活動の骨子は、ホームページ <a href="https://sites.google.com/site/ecotonesendai/">https://sites.google.com/site/ecotonesendai/</a> (随時不定期更新)などで自主的に公開した。</p>
<p>宮城県仙台市新浜地区や亘理町吉田浜地区などで、学生が現場で「地域づくり」を体験しうる「地域・市民団体と連携した学習活動」を実施(世話人)</p>	<p>2020年～</p>	<p>住民・市民団体の皆さんの手厚いサポートの下で、「里浜・里地・里山における景観の読み解き、自然環境と伝統的な暮らしの探求、賢い資源利用や災害適応術の考究」を体験活動として織り込み、復興・持続可能な地域づくりのあり方を模索する学び合いを企画・実施した。ただし、2020・2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため、対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかった。</p>
<p>市民団体・学校・学術団体等が主催する講座・自然観察会・環境保全活動を推進(講師・支援者)</p>	<p>2020年～</p>	<p>新浜町内会(仙台市宮城野区)主催の「新浜フットパス」、仙台市高砂市民センター・仙台市立岡田小学校ほか主催の「岡田新浜 花咲く浜辺づくり計画2020/2021」、新浜町内会(仙台市宮城野区)ほか主催の「新浜の自然と歴史の学習会」、東北学院中学校(2020年度)および高等学校(2021年度)「総合的な学習・中高一貫教育事業」などに参画して、学びの機会を提供した。なお、2020・2021年度ともに、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るために、当初に計画していた活動の多くが中止となった。</p>

<p>現在の課題・目標</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 自然や地域というフィールド、そこで生き生きと活動する人々に直接触れ、触発され、考え、活動する体験的な学びの提供。</li> <li>2) 文章や図表などの作成とそれらの編集・公開を通じて、表現力・コミュニケーション力を高める学びの提供。</li> <li>3) 「企画する、段取る、遂行する、分析する、まとめる、表現する、伝える」ことのスキルアップ。</li> </ol>
<p>今年度の進捗状況</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 「現在の課題・目標」1)～3)については、主に地域構想学発展実習や総合演習、総合研究といった学部2～4年次の授業において、個々の学生と向き合う中で対応できた。しかし、「学ぶ楽しさ」を感じ取ることができた学生の割合は未だ半数程度に留まっており、授業づくりにさらなる工夫が必要である。</li> <li>2) いわゆる教養教育課程の講義においても、ビジュアルな教材の利用や新聞記事を活用した学習、ゲストティーチャーの招聘、新聞・広報ちらしをイメージしたレポートの提示といった工夫を盛り込んだ。また、予習・復習の意義と効果に関する自己認知を促すべく、課題の設定や授業時の自己点検などで試行錯誤を行った。しかし、学習意欲と基礎学力の向上に繋がらない状況がなかなか改善できず(とりわけ、受講生が150名を超える授業)、模索が続いている。</li> <li>3) オンライン教育システムの導入・活用に取り組み、前後期の授業に対応することができた。</li> </ol>
<p>来年度の進捗目標</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 受講生と接する機会を大切にしながら、「学生による授業評価アンケート」の結果などを踏まえた信頼関係の醸成・授業の改善。</li> <li>2) 受講生自身が興味・関心を発見しうる授業の展開。</li> <li>3) 受講生が作成するレポートや要旨、プレゼンテーションに対するていねいな対応・指導、および取り組みの共有化。また、ていねいな板書を心がけ、受講生とのコミュニケーションも工夫する。</li> <li>4) manaba course をはじめとするオンライン教育システムの一層の活用を図る。</li> </ol>

<p>II 研究活動</p>					
<p>著書・論文等の名称</p>	<p>単著・共著の別</p>	<p>発行又は発表の年月(西暦)</p>	<p>発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称</p>	<p>編者・著者名</p>	<p>該当頁数</p>
<p>A. 学術書</p>					
<p>『大津波と里浜の自然誌』</p>	<p>共著</p>	<p>2021年3月</p>	<p>蕃山房. ISBN978-4-9911802-0-0</p>	<p>岡浩平・平吹喜彦(編者)</p>	<p>pp.114</p>
<p>巨大地震・津波で攪乱された仙台湾岸の生態緑化ー砂浜海岸エコトーンと生物学的遺産の重要性ー『在来野草による緑化ハンドブック 身近な自然の植生修復』</p>	<p>単著</p>	<p>2020年5月</p>	<p>朝倉書店</p>	<p>平吹喜彦</p>	<p>pp.306-311</p>
<p>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</p>					
<p>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</p>					
<p>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</p>					
<p>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</p>					

宮城県環境アドバイザーからの総括 植物群落『東日本大震災 宮城県河川海岸復旧・復興環境配慮記録誌』	単著	2021年3月	宮城県土木部	平吹喜彦	pp.334-335
仙台湾を縁取る海岸林のこの10年『自然保護』	単著	2021年3月	公益財団法人 日本自然保護協会, 580	平吹喜彦	pp.10-11
海岸減災、生態系の抵抗力を生かしてこそ『市民環境ジャーナル』	単著	2020年7月	市民環境ジャーナル事務局, 2020年7月号(第18号)	平吹喜彦	pp.4-5
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>					
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>					
<b>G. 学会における研究発表</b>					
海浜エコトーンの再生を目指した防潮堤法面への覆砂効果	共同	2021年3月	日本生態学会第68回全国大会自由集会W16 大規模攪乱後の仙台湾沿岸部における植生再生(企画: 富田瑞樹・菅野洋, オンライン開催), W16-3(日本(オンライン配信))	◎松島肇・鈴木玲・鐘向梅・岡浩平・平吹喜彦・木村浩二・橋本喜次	
大地震・大津波から10年間の海辺のできごと: 5つの要点	単独	2021年3月	東日本大震災からの再生 沿岸環境の変化10年と今後の課題(主催: 応用生態工学会 仙台(仙台市(オンライン配信)))	平吹喜彦	
震災後に生育地が広がった海浜植物の今	共同	2021年3月	日本生態学会第68回全国大会自由集会W16 大規模攪乱後の仙台湾沿岸部における植生再生(企画: 富田瑞樹・菅野洋, オンライン開催), W16-2(日本(オンライン配信))	◎岡浩平・栗栖寛和・平吹喜彦・松島肇	
仙台湾の海岸域における津波後9年間の植生変化	共同	2021年3月	日本生態学会第68回全国大会自由集会W16 大規模攪乱後の仙台湾沿岸部における植生再生(企画: 富田瑞樹・菅野洋, オンライン開催), W16-1(日本(オンライン配信))	◎菅野洋・富田瑞樹・平吹喜彦・原慶太郎	
仙台湾岸における津波後9年目の海岸植生	共同	2021年2月	自然環境復元学会第21回全国大会(オンライン開催), 13(東京都(オンライン配信))	◎菅野洋・富田瑞樹・平吹喜彦・原慶太郎	
ゴミムシ類を指標とした「大津波・復興工事で攪乱された砂浜海岸エコトーンの立地多様性評価」の試み	共同	2021年2月	自然環境復元学会第21回全国大会(オンライン開催), 12(東京都(オンライン配信))	◎平吹喜彦・神室理徳・五十嵐由里	
2011年大津波によって倒壊した海岸クロマツ林の植生変化	共同	2020年11月	植生学会第25回大会(オンライン開催), C07(日本(オンライン配信))	◎岡浩平・平吹喜彦・松島肇	
仙台湾南部海岸の10年間からとらえた「砂浜海岸エコトーン」のレジリエンスと人のふるまい	単独	2020年11月	グリーンインフラ・ネットワーク・ジャパン全国大会(GIJ2020) M34 砂浜海浜エコトーンにおけるグリーンインフラ: 東北地方太平洋沖地震津波被災地からの報告(企画責任者: 松島肇)(日本(オンライン配信))	平吹喜彦	
仙台湾沿岸におけるCSG海岸堤防に定着した植生の初期動態	共同	2020年11月	令和2年度日本海岸林学会米子大会(オンライン開催), O13(米子市(オンライン配信))	◎岡浩平・平吹喜彦・松島肇	
仙台湾岸における防潮堤法面への植物の侵入・定着について	共同	2020年9月	日本景観生態学会第30回大会(オンライン開催), 2-2-2(日本(オンライン配信))	◎鐘向梅・松島肇・鈴木玲・平吹喜彦・岡浩平・木村浩二	
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					

現在の課題・目標	<p>1) 南蒲生/砂浜海岸エコトーンモニタリングを基軸として、東日本大震災に伴う生態系の破壊および自律的修復を長期(10年間以上)にわたって追跡すること。その上で、景観生態学の視点から「海岸エコトーン」の概念と構造、機能、ダイナミズムを整理し、「バイオシールドとEco-DRRの創出・管理」に取り組み、一般化すること。</p> <p>2) 生態系サービスの享受を最大化する‘里浜復興シナリオ’創出プロジェクト・地域の自然と歴史に学ぶ里浜復興研究会と新浜地区との協働を基軸として、「ふるさと・里浜の復興」のあり方を実践的に探求すること。さらに学際的な議論を経て、沿岸域における「統合的な地域マネジメント」や「持続可能な地域づくり」のあり方へと一般化すること。</p> <p>3) モンスーンアジアの「Satoyama」を景観生態学的な視点から比較・分析して、共通原理をESD(持続を可能にする教育)とSDGs(持続を可能にする開発目標)にインプットすること。</p>
今年度の進捗状況	<p>1) 新型コロナウイルス感染拡大を防止に向けて計画を変更しながらも、南蒲生/砂浜海岸エコトーンモニタリング、生態系サービスの享受を最大化する‘里浜復興シナリオ’創出プロジェクト・地域の自然と歴史に学ぶ里浜復興研究会の活動をリンクさせて、基礎調査と復興まちづくり実践を、多くの協働者・支援者とともに1年間を通じて粘り強く推進した。①仙台市新浜地区の皆さんと協働した多様な取り組み、②国内外の学会や市民学習会などで積極的に実施した成果発表と議論、③宮城県の海岸域(特に、仙台湾南部海岸域)で実現した復興事業主体との率直な情報・意見交換および保全のしくみ・対策の実現は、その象徴といえる。また、海辺の自然環境の自律的修復とその保全の必要性について社会的認識が広がり、人的ネットワークをさらに拡張できた。</p> <p>2) 一方で、東日本大震災に関連する取り組みに時間を要し、ライフワークと位置づけて取り組んできた内陸部や海外の「Satoyama」に関する研究およびESD実践を、ほとんど進めることができなかった。</p>
来年度の進捗目標	<p>1) 南蒲生/砂浜海岸エコトーンモニタリング、生態系サービスの享受を最大化する‘里浜復興シナリオ’創出プロジェクト、地域の自然と歴史に学ぶ里浜復興研究会の活動を継続する。とりわけ「蓄積されてきた研究・実践成果の分析・公表(学術的な論文・著作を中心に)」と「協働・支援ネットワークのさらなる実質化と拡大」に力を注ぎ、市民と世界に向けて情報発信を行いながら目標達成に迫る。</p> <p>2) 新浜地区を中核とした「被災した海岸エコトーン・里浜」における取り組みと、モンスーンアジアの「Satoyama」における取り組みをリンクさせて、「自然環境(生態系)と調和した持続可能な地域づくりのあり方」について、一般化を進める。</p>

### III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究(C)(一般)	2019年度～	共同(研究分担者)	
科学研究費補助金 文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究(C)(一般)	2019年度～	共同(研究分担者)	
科学研究費補助金 文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究(B)(一般)	2018年度～	共同(研究分担者)	
科学研究費補助金 文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究(A)(一般)	2017年度～	共同(研究分担者)	

### IV 学会等及び社会における主な活動

2020年～	亘理町史編纂委員会 委員
2020年～	日本景観生態学会 生態系インフラ活用検討委員会
2020年～	自然環境復元学会 副会長
2020年～	植生学会 表彰委員長
2020年～	植生学会 運営委員
2019年～	仙台市広瀬川清流保全審議会 副会長
2019年～2021年	大崎耕土「居久根」の保全活用に関する検討会 委員長
2018年2月～	環境省自然環境保全基礎調査検討会植生分科会 委員
2018年～	岩沼市史編集専門部会(震災部会) 委員
2018年～	東松島市大浜湿地整備指導委員会 委員
2018年～2020年	国土交通省仙台湾南部海岸「緑の防潮堤」植生管理検討委員会 委員
2016年～	国土交通省河川水辺の国勢調査アドバイザー(阿武隈川水系・名取川水系) 委員
2016年～	宮城県土地利用審査会 委員・会長(2019～)
2015年～	環境省希少野生動植物種保存推進員 出演, パネリスト, コメンテーター, 司会, 取材協力, 編集長, インタビュアー, 編集, 講師, 助言・指導, 情報提供, 企画, 運営参加・支援, 実演, 調査担当, 報告書執筆, 寄稿

2015年～2020年	自然環境復元学会 学会誌編集委員長
2014年～2022年	仙台市科学館協議会 委員・会長(2016～2018)
2014年～2020年	植生学会 企画委員
2013年～	宮城県野生動植物調査会植物群落分科会 分科会長
2013年～	宮城県文化財保護審議会松島部会 副部会長
2013年～	宮城県希少野生動植物保護対策検討会 委員
2013年～2021年	宮城県環境アドバイザー 委員
2011年3月～	東日本大震災で被災した海岸域で、「ふるさとの自然環境と調和した持続可能な地域づくり」をめざして、市民・行政・専門家らと協働で復興支援活動を展開 出演、パネリスト、コメンテーター、司会、取材協力、編集長、インタビュー、編集、講師、助言・指導、情報提供、企画、運営参加・支援、実演、調査担当、報告書執筆、寄稿
2011年～	日本景観生態学会 会員
2011年～2020年	日本景観生態学会 震災特別委員会委員
2010年～2020年	自然環境復元学会 理事
2009年～	環境省自然環境保全基礎調査植生調査東北ブロック調査会議 委員・東北ブロック統括委員(2019～)
2009年～	自然環境復元学会 会員
2008年～	宮城県文化財保護審議会 委員
2003年～	「仙台市杜々かんきょうレスキュー隊事業」や「子どもゆめ基「仙台市杜々かんきょうレスキュー隊事業」や「子どもゆめ基金」の助成を受けるなどして、里山や栗駒山などで、市民を対象とした環境教育活動を実践(ただし2020年度以降は、コロナウイルス感染拡大防止のため、実質的な活動を控えた) 出演、パネリスト、コメンテーター、司会、取材協力、編集長、インタビュー、編集、講師、助言・指導、情報提供、企画、運営参加・支援、実演、調査担当、報告書執筆、寄稿
1990年～	International Association for Vegetation Science 会員
1987年～	日本森林学会 会員
1985年～	植生学会 会員
1980年～	日本生態学会 会員

#### V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

#### VI 学内における管理運営に関する諸活動

- 1) AO入試委員
- 2) 学部授業評価・FD委員
- 3) 「学生による授業評価」実施委員
- 4) 地域構想学科3学年2グループ主任

2020年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	教授	氏名	増子 正	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①フィールドワークを活かして、実感できる学びを提供する ②3・4年生のつながりをつくり、ゼミでの学習と取り組みを継続させる ③地域の住民との交流をとおして、学生自らが地域福祉活動に参加する機会をつくる					
今年度の進捗状況		①七ヶ浜町社会福祉協議会の活動計画づくりの住民ニーズ調査の分析を学生たちが担当した ②泉区加茂まちづくり協議会とゼミの学生の合同研究会を毎月開催して、加茂地区の共助のあり方を検討した ③角田市シルバー人材センターと共同で、シルバーセンターの地域での新しい役割を検討した					
来年度の進捗目標		①泉区加茂まちづくり協議会との研究会を継続して、今年度に検討した「地域通貨」による共助の実際の実施の仕組みを検討する ②角田市シルバー人材センターと共同で、シルバーセンターの新しい役割をゼミ生が提言する					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
地域共生社会の実現に向けた共同募金運動の変遷からみる寄付文化醸成に関する一考察		共著	2021年3月	十文字学園女子大学紀要、51、十文字学園女子大学紀要、51		◎二瓶さやか、増子正	pp.95-104 頁
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		地域福祉の財源としての共同募金の方向性として、ファンドレイジングの視点でのマネジメントのあり方を模索する					
今年度の進捗状況		共同募金のマネジメントについて、募金額の伸びが著しい韓国の中心部と地方都市の違いの調査を実施した段階					
来年度の進捗目標		ファンドレイジングとしての共同募金のマネジメントについて韓国とフィンランドで調査活動を行う					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>							
2020年8月			宮城県地域福祉支援計画策定委員 委員				
2020年4月			宮城県利府町地域福祉計画策定委員 委員				
2012年4月～2022年3月			七ヶ浜町社会福祉協議会地域福祉活動計画策定委員会アドバイザー(七ヶ浜町社会福祉協議会地域福祉活動計画策定委員会アドバイザー)				

V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2020年度								
所属	教養学部 地域構想学科	職名	教授	氏名	松原 悟	大学院の授業 担当の有無	無	
<b>I 教育活動</b>								
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要				
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)								
アクティブラーニングの活用を工夫した。		2020年4月1日～		講義形態を変え、従来の一方的な講義形態から、学生との双方向的な授業に改善した。毎回の小レポートやテーマに基づいたグループワークを取り入れた。				
2. 作成した教科書、教材、参考書								
担当講義のパワーポイントの作成		2020年4月1日～		担当する専門科目(地域構想学基礎論、スポーツ指導論)において、最新の情報をもとにパワーポイントを作成し、講義において提供した。				
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
スポーツ指導論における実践方法の改善		2020年4月1日		スポーツ指導論において2回の指導実践にすることとしていたが、1回は希望者のみ対面で行い、1回はZOOMでランダムなグループを作り活動できるようにした。				
4. その他教育活動上特記すべき事項								
実習系科目の改善		2020年4月1日～		地域調査の集団での活動が困難なため、地域構想学発展実習(2年)演習(3年)の授業では、各自が暮らしている地域について、個別に調査を行い、よりよい街づくりに対して成果を報告させた。				
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学内の講義においては、学生への授業参加、課題への取り組みについて、グループワーク、発表などを取り入れて積極的な学修を促す。</li> <li>・コロナによる影響でまとまった活動や地域住民との接触到影響があるが、学生個人が活動できるような課題設定として、スキルの修得に努める。</li> <li>・新たな生活様式に対応した健康活動を考えていく。</li> <li>・地域構想学科1、2年生の基礎教育について、教員間でのカリキュラム内容統一を図る。</li> </ul>						
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>・スポーツ指導論においては、指導の実践を2回行ってきたが、コロナの影響で希望者のみ1回の指導実践を行い 希望しない学生には指導案の提出を課した。また、ZOOMの機能を活用してグループを作成しての指導実践を実施し、コミュニケーションスキルの獲得をすることができた。</li> <li>・実習、演習の授業では、集団での調査ができないために、地域調査の項目を学習し、個別に調査を实践させ、成果を発表させることで、調査スキルを学習した。</li> </ul>						
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業に関しては、グループワーク等を通じてのコミュニケーション能力を高めるとともに、内容の充実を図れるように、予習、復習に取り組めるように働きかける。</li> <li>・新たな生活様式の中での「健康と福祉」活動について具体策を学習していく。</li> </ul>						
<b>II 研究活動</b>								
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)		発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書								
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)								
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)								
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文								
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)								
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)								
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)								
G. 学会における研究発表								
H. 翻訳(学術書や原典等)								
I. 特許								
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・新たな生活様式の中での「健康と福祉」活動を構築する</li> <li>・大学のスポーツ施設、スポーツ関連の人材を活用した、大学と地域との連携活動について研究する。</li> <li>・客観的な資料に基づく競技力向上の方策を研究する。</li> </ul>						



今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生個人が育った地域について、現状と将来を調査し、意見交換を行った。</li> <li>・リモート授業を通じてという条件でのコミュニケーションスキルの獲得に努めた。</li> <li>・制限下でのプロスポーツ事業について、各クラブと意見交換、改善点を模索した。</li> </ul>		
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新たな生活様式、各種事情を抱えた住宅地の健康活動を啓発する。</li> <li>・制限下でのプロスポーツ活動について、運営会社とサポーター・ファンとの交流を図る。</li> <li>・大学のスポーツ資源としての施設、人材を活用して、地域のスポーツ少年団を対象としたスポーツ教室を開催し、地域スポーツの改善点を研究する。</li> <li>・特定の活動団体を対象に、長期トレーニングによる競技力向上を目指し、データ化を行う。</li> </ul>		
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2016年4月～	仙台市クラブリーグ連盟会長 委員		
2001年4月～	日本サッカー協会マッチコミッショナーとして日本フットボールリーグの運営を補助 2019年からはJリーグも担当している 委員		
1980年4月～	日本体育学会会員 会員		
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
教養学部地域構想学教員として各種委員会に取り組んだ			

2020年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	教授	氏名	松本 秀明	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
「環境の科学」(教養教育科目)ほか: 予習・復習の誘導		2020年4月1日～2021年3月31日		各回の授業冒頭で、前回の講義内容を復習し、授業の最後には簡単なまとめとともに次回講義の概要(キーワード等を含む)を明示し、予習・復習の実施を誘導した。毎回の授業内容について、受講生個々に、200字程度のまとめを提出させた。予習・復習については半数程度の学生が実施したようであるが、残り半数の学生については、予習・復習の手がかりが与えられたとの認識に至らない点は大いに改善を要する。受講生前期279名、後期126名。講義はオンライン(オンデマンド方式)で実施。資料や動画についてはmanabaを通じて配布、視聴させた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
カリキュラム外の学修機会活用への誘導		2020年4月1日～2021年3月26日		希望する学生に対し、地形学分野の知識の取得や理解を深めるためのフィールドワークを実施した。本年度は、東松島市宮戸島における湿地復元プロジェクトに参加した。卒業単位には直接結びつかないものの、知りたい、身につけたいという学生の意欲への対応として実施した。			
現在の課題・目標		○学生を学会等の研究発表の場や社会貢献の場に積極的に参加させ、学生の研究意欲や社会貢献の意義についての意欲を向上させる努力を継続する。これは学内やカリキュラム上での研究や学修ばかりでなく、広い研究交流、社会貢献を学生に体験させることにより、より上を見せる意識をもつ学生の育成につながるものと考えている。					
今年度の進捗状況		○今年度は野外調査の実施は行えなかったため、特段の進捗は見られなかった。					
来年度の進捗目標		○カリキュラム上の講義・演習・実習以外でも、学生の勉学意欲に十分対応するための時間の確保やフィールドワークが実施できるよう努力したい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
第1章 第1話 仙台平野と砂浜海岸の成り立ち『『大津波と里浜の自然誌』岡浩平・平吹喜彦編』	共著	2021年3月	蕃山房	松本秀明(部分執筆) (岡 浩平・平吹喜彦編)	pp.18-22		
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		従来実施してきた過去の津波堆積物に関する研究に加えて、過去の巨大洪水に関する情報を地層・地形調査から明らかにし、住民の防災意識を醸成するための基礎的研究をつづける。					

今年度の進捗状況	今年度はフィールドワークの実施を行わなかったため、これまでに収集したサンプルの分析を実施した。また、宮城県東松島市宮戸における湿地復元プロジェクトに参加した。これは従来、「保護」に重点が置かれてきた文化財(考古学分野)を、一般市民の教育にも積極的に利用・活用しようとするプロジェクトであり、全国的にも先駆的な試みである。このプロジェクトについては完成まで参加し続け、大きな成果としてゆきたい。		
来年度の進捗目標	① 過去の洪水現象の把握に関する研究を継続したい。 ② 防災を目的に、地形的そして地理的知見を小学生、中学生、高校生、そして一般の方々に向けてわかりやすく情報発信してゆく方法を試みてゆく。同時に、このことにより地理学的視点の意義・重要性について広く一般に理解していただくための幾つかの試みを実施したい。		
<b>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
<b>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</b>			
2020年5月～2021年5月	東北地理学会 評議員		
2018年～	亘理町誌編纂・執筆委員会 委員		
2017年4月～2020年	東松島市 大浜湿地化事業に係る指導委員会 副委員長		
2013年4月～	宮城県 文化財保護審議会 特別名勝「松島」部会 委員		
2013年4月～	東松島市 特別名勝松島保存管理専門委員会 委員		
2008年～	東松島市 発掘調査指導委員会 委員		
1998年～2022年3月	宮城県考古学会 会員		
1985年～	日本地形学連合 会員		
1980年～	日本第四紀学会 会員		
1977年4月～	日本地理学会 会員		
1975年～	東北地理学会 会員		
<b>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
<b>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</b>			
2006年度～2020年度 学生相談室兼任カウンセラー			

2020年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	教授	氏名	柳井 雅也	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
柳井ゼミ学生地域調査報告書「消滅危機下にある土湯温泉こけし工人の生産販売実態」『地域構想学研究教育報告』No11,p21-p34の発刊。		2020年9月1日～2021年1月31日		消滅危機下にある、土湯温泉こけし工人を調査した。現地では絵づけ体験(描彩の難しさも体験)、工人から聞き取り調査を行った。その結果、後継者がいないことや、原材料確保の困難さ(広域化)、新型こけしも作る(以前はなかった)、価格の低迷、販路確保の困難さ等が分かった。			
少人数(20人以下)授業で感想文の共有化		2020年4月1日～		少人数(20人以下)授業では、毎回感想文を学生に書いてもらい、名前を伏してPDFに集約して学生に配布している。これにより、私の講義に関する課題を発見するだけでなく、学生同士の「気づき、考える視点、理解の深さ」を「見える化」している。			
地域調査を行う教育		2020年4月1日～		ゼミや発展実習では経済地理学的に学習効果のある地域の調査(主に商工業)を行っている。今年度はゼミ生と土湯温泉こけし工人調査、石巻水産加工工業調査、防災集団移転跡地における企画考案等)の調査・実習を行った。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
現在の課題・目標		学生の習熟度の計測方法が課題で、その把握に立った講義の実行が目標である。特に実習系の授業では現地で討論と指導を徹底したい(特に東日本大震災被災地を対象に)。また、ゼミ活動においてはゼミ参加時の発言や意見の内容をより良いものにしていくことが課題となっており、この講義の進め方の工夫を改善していくことが目標である。					
今年度の進捗状況		毎回、授業に関する要望・課題・感想を書かせている。これによって学生の学修に対する要望や課題が見えてきた。実習系ではグループディスカッションの課題設定を行って、議論が散漫にならないようにした。					
来年度の進捗目標		習熟度をより多面的に測るため、中間試験以外にミニ作業と評価を行う。また引き続き東日本大震災被災地に学生を連れていき、現地の被災地状況の把握とその復興策を考えさせたい。					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
「東日本大震災による気仙地域水産加工工業の被災と復旧」『法政大学地理学会創立70周年記念論文集』	単著	2021年2月	法政大学地理学会, 法政大学地理学会	法政大学地理学会	pp.p263-p274		
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
「観光分野での東日本大震災と熊本地震の比較分析」『熊本地震と熊本県の観光』『観光分野での東日本大震災と熊本地震の比較分析』『熊本地震と熊本県の観光』	共著	2020年7月	成文堂, 成文堂, 成文堂	伊東維年, 鈴木康夫編著	pp.印刷中		
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
「東日本大震災から10年 それぞれの3.11を物語る。」(座談会)『東日本大震災から10年 それぞれの3.11を物語る。』(座談会)』	共著	2021年3月	東北学院大学後援会『GUROT H』vol.38,2021., 東北学院大学後援会『GUROT H』vol.38,2021., 東北学院大学後援会『GUROT H』vol.38,2021.	東北学院大学後援会	pp.p3-p9		

「東日本大震災から10年 今、改めて問われる突破力」『東日本大震災から10年 今、改めて問われる突破力』	共著	2021年2月	『岩手・宮城・福島の産業復興事例集30 2020-2021』(座談会), 『岩手・宮城・福島の産業復興事例集30 2020-2021』(座談会), 『岩手・宮城・福島の産業復興事例集30 2020-2021』(座談会)	復興庁	pp.p14-p17
「東北再生だより」『帝国ニュース』2020年4月号よりコラムを毎月掲載「感染症とイノベーション」等『東北再生だより』『帝国ニュース』2020年4月号よりコラムを毎月掲載「感染症とイノベーション」等』	単著	2020年4月	帝国データバンク「帝国ニュース 東北版」2020年4月より毎月連載中, 帝国データバンク「帝国ニュース 東北版」2020年4月より毎月連載中, 帝国データバンク「帝国ニュース 東北版」2020年4月より毎月連載中	帝国データバンク仙台支店	pp.p2(毎号)

#### F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)

「道内観光地の将来展望— 交通体系の変化を見据えて —」(2019年度 登別地域大会報告: 座長所見)	単著	2020年	『経済地理学年報』第66巻, 『経済地理学年報』第66巻	登別地域大会実行委員会	pp.pp355-356
---	----	-------	------------------------------	-------------	--------------

#### G. 学会における研究発表

#### H. 翻訳(学術書や原典等)

#### I. 特許

現在の課題・目標	東日本大震災からの経済復興について研究、日系製造業の海外進出の実態調査
今年度の進捗状況	大津波被災地である三陸沿岸諸地域の産業地域研究を行った。
来年度の進捗目標	東日本大震災に関する復興に関する研究継続。

#### III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
----------	----------	------------------------	----

#### IV 学会等及び社会における主な活動

2020年4月～	宮城県土木部グランドビジョン策定委員会 委員 委員
2020年4月～	総務省「日本ふるさとづくり審査委員会」委員 委員
2020年4月～	復興庁「令和元年度被災地における先行事例収集業務」監修委員会 会長 委員
2019年4月～	多賀城市長期総合計画策定委員会 会長 委員
2019年～	復興庁「東日本大震災復興の教訓・ノウハウ集の作成に向けた調査分析事業」有識者会議委員 委員
2019年～	塩釜市長期総合計画策定委員会 会長 委員
2019年～	北陸港湾ビジョン委員会 会長 委員
2018年4月～	仙台市郊外住宅地西部地区プロジェクトの審査会 会長 委員
2018年4月～	復興庁「東日本大震災復興の事例収集・調査分析事業」委員長 委員長
2018年4月～	復興庁「ハンズオン支援事業委員会」委員長 委員長
2018年～	経済地理学会評議員 会員
2009年4月～	富県宮城推進会議幹事 委員

#### V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

#### VI 学内における管理運営に関する諸活動

- 1.地域構想学科長・同関連委員(～2021.03まで)
- 2.地域連携センター所員(2020.04～)
- 3.学部改組(地域学部)委員長(2021.04辞任)

2020年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	教授	氏名	和田 正春	大学院の授業 担当の有無	無
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
オンライン講義への対応と講義の質の確保		2020年4月1日～		<p>COVID-19感染症への対応として、オンライン講義が導入されたが、導入科目を数多く担当していることから、講義の質を低下させることなく、オンラインのメリットを拡大することで、新しい講義の手法の創造を目指した。受講者数が多い講義が大半であるため、動画配信のスタイルを取らざるを得なかったが、manabaを通じて質問を受け付け、それに丁寧に回答する(全て動画にし、自由に閲覧できるようにした)ことで、それぞれの疑問に答えるとともに、他者の考えを理解する機会にもなり、オンラインで失われがちな他者意見を知り、自分の考えと比較するきっかけにもなった。個別対応を進めたことが、受講意欲にも反映され、極めて負担の多い講義ではあったが、学生の満足度はとても高かった(学部内でも最高の評価を得た)。</p> <p>個別対応重視は以前から取り組んできたことではあるが、オンラインにおいても継続することができた。対面が復活しても、この手法の成果を活かして、教育効果の向上を図りたい。</p>			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
理容師・美容師向け教科書の執筆		2020年1月10日～2020年6月30日		<p>公益社団法人日本理容美容教育センター発行教科書「運営管理」の編集委員長として執筆にも関わってきた。国家試験への対応を含め、感染症対策など、新しいテーマを盛り込んだ教科書の改訂作業を進め、初稿を完成させた。今後厚生労働省のチェックなどを経て、教科書として利用される。</p> <p>業界のサービス基準を構築するという意味でも教科書の持つ意味は大きい。</p>			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
高校生向けワークショップの実践指導		2020年		<p>多賀城高校災害科学科の活動に関連して、ワークショップの実践のための指導を行っている。</p> <p>防災関連の講座、会議などでワークショップを運営する機会が多い高校生のために、年数回ファシリテーション研修を行い、高校生の社会活動の支援を進めている。次年度は教材の製作を行う予定。</p>			
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
東北学院榴ヶ岡高校との長期課題探求プロジェクトの実施		2020年4月1日～		<p>今年度、榴ヶ岡高校の2年生を対象に、課題探求プロジェクトを実施している。内容は、仙台市交通局から依頼された自転車の交通安全という課題に対し、チームで提案を行うというものであるが、1年をかけた長期的なものであることや大学生がファシリテーターとして関わることなど、新しい要素を含んでいる。ありきたりな内容でなく、様々な調査や実験を行ったり、それを踏まえて提案を作成していくことで、高校生には示唆に富んだ内容になったが、大学生にとってもコミュニケーション面での学びが大きく、大きな成果が得られるものになった。次年度も継続していきたいと考えている。</p>			
地域企業や行政と連携しての学生指導 → 地域の課題への発展		2020年4月1日～2021年1月25日		<p>地域の企業や行政と連携し、学生にインターンシップなどの機会を提供することに加え、地域経営の現場に学生を参加させることで、より実践的で高度な学習成果を実現することに関与している。こうした取組は長く継続して行っているが、その功績が認められ、最近では多くの地域企業から協力を求められることになった。今年度はその関係を活かし、株式会社ユーメディアと連携して、地域の課題関連の科目3つ(地域の課題Ⅰ、Ⅱ、地域課題演習)において具体的な課題を提示して頂いたり、学生の取組に助言をもらったり、インターンシップを受け入れてもらったり、と幅広い取組につなげることができた。それは学生にとってよい学びであると同時に、企業側にもよい学習の機会となり、WinWinの関係を構築することで、地域の大学としてよい取組を実現できたといえる。実際に共同でプロジェクトを実施することもでき、素晴らしい成果につながったと考えている。</p>			

ビジネス・プランコンテストを活用した主体的学修への取組	2020年4月1日～2020年12月25日	演習学生を対象に、株式会社博報堂が毎年実施している「Branco」を促している。ここ5年ほどは毎年参加しているが、今年もチャレンジした。単なるビジネスプランコンテストと異なり、問題解決のプロセスが明示されており、抽象的な検討から具体的な提案までしっかり行わなければならない、とても良い学びになっている。今回は動画審査で、惜しくも準決勝には進めなかったが、毎年強豪校に交じって善戦しており、この結果が就職活動にも活かしていることから、次年度も継続して関わっていききたい。			
現在の課題・目標	アクティブ・ラーニングの実践について、大人数で施設的な制約もある中で、どのような実戦が可能かを検討している。オンラインツールを活用することが可能になったことで、新しい方法を試験できるようになった。それを踏まえて、新しいプログラムを更に考えていきたい。 企業や自治体などと連携した上で、実践的な教育の場を確保し、その中でできるだけ多くの学生(ゼミ単位などではない)が効果的に学習を進められるための取り組みを検討している。COVID-19により、実践は難しかったが、その中でもいくつかのプロジェクトを実施できているのはよかった。				
今年度の進捗状況	COVID-19により、実践形式の取組の多くは中止を余儀なくされたが、その中でも新たなプロジェクトをスタートできた。 次年度はそれを踏まえ、学生の負担を増やさない方法の検討を進めたい。				
来年度の進捗目標	企業との連携による課題解決型プロジェクトを複数実施すると共に、自治体との連携の案件を進めていきたい。高大連携の可能性を拡大すると共に、企業との共同学習型のプロジェクトの実現にも一層取り組んでいきたい。				
II 研究活動					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	地域の観光に関する研究を進めている。政府方針でDMOの設立を促進する動きがあるが、それは必ずしも多くの地域の実情に合致していない。地域の実情を踏まえながら、現実に取り得る方策の可能性を検討している。次年度も栗原市での調査を続けるが、運営上の問題もあるので、別の地域でも調査を続け、地域に貢献する事業につなげていきたいと考えている。				
今年度の進捗状況	栗原市から助成金を頂いたこともあり、調査は大きく進展した。地域の産業や観光に関して幅広く課題を分析することができたので、それを今後につなげていきたい。				
来年度の進捗目標	栗原における調査についてはその成果をまとめると共に、ゼミ活動などとの連携を強化し、さらに実践的な取組へと発展させていきたい。				
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要		
IV 学会等及び社会における主な活動					
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
VI 学内における管理運営に関する諸活動					



学長室副室長

学生活動団体(4?LEAVES、もりまちCoAL)の顧問

2020年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	准教授	氏名	天野 和彦	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
SPORTS POLICY FOR JAPAN2020に指導ゼミチームが参加し、UNIVAS特別賞を受賞		2020年		全国の大学生によるスポーツ政策提言の発表コンテスト。			
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生との授業外も含めたコミュニケーションを大切にすること。</li> <li>・専門領域の講義をより判り易く、取り組みやすい実践を含めた内容に改良すること。</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>・双方向、コメントの活用や模範解答の提示などを積極的に行っている。</li> <li>・教材のアップデートを行っており、随時改訂している。</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・併せてネットの活用をはかる(DROPBOXの更なる活用)。</li> </ul>					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
シリーズスポーツ政策 I「公共政策の中のスポーツ」第八章「自然環境政策におけるスポーツ」『シリーズスポーツ政策 I「公共政策の中のスポーツ」第八章「自然環境政策におけるスポーツ」』		共著	2021年3月	晃洋書房, 晃洋書房, 晃洋書房		真山達志、黒澤寛己、内藤正和、内海和男、天野和彦、◎成瀬和弥、小林塁計7名の共著	pp.pp117-134
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		大規模災害とスポーツの関係について明らかにする。					
今年度の進捗状況		蔵王を事例に、登山者、所管する団体、競技団体、スキー及びスノーボーダーに質問紙調査とインタビュー調査を行った。					
来年度の進捗目標		自然災害とスポーツ組織の関係を掘り下げる					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要		
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等		
全国学生庭球選手権大会		四日市テニスセンター(三重県)	2020年11月～2020年11月		予選3名(女子1名) 本選2名(男子2名 女子2名 複を兼ねる)		

現在の課題・目標	練習の「質」の確保。
今年度の進捗状況	東北学生リーグ1部優勝(男子)、女子1部優勝。
来年度の進捗目標	東北学生団体、個人優勝、大学王座1勝。
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>	
教務委員、優秀卒論選考委員	

2020年度								
所属	教養学部 地域構想学科	職名	准教授	氏名	遠藤 尚	大学院の授業担当の有無	無	
<b>I 教育活動</b>								
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要				
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)								
教員独自の授業改善活動を実施している。		2020年		実習を除いた全ての講義で毎回responを用いたミニレポートを実施し、学生の意見に応じた授業改善を行った。また、オンデマンドの授業においても、実習のような内容を取り入れた。				
2. 作成した教科書、教材、参考書								
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4. その他教育活動上特記すべき事項								
現在の課題・目標		オンデマンドの授業においても、できる限り学生の意見を取り入れた双方向の講義を行う。学生が主体的に取り組めるオンデマンド授業の実施。						
今年度の進捗状況		ほとんどの授業において、responを利用したクイズやアンケート、ミニレポートを毎回実施し、またそれらに対して回答、解説、授業改善などを行った。「ハザードマップポータルサイト」を用いた実習を取り入れた。						
来年度の進捗目標		受講者数が100人以上のオンデマンド授業を活性化する。						
<b>II 研究活動</b>								
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)		発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書								
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)								
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)								
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文								
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)								
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)								
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)								
G. 学会における研究発表								
H. 翻訳(学術書や原典等)								
I. 特許								
現在の課題・目標		2017?2019年度に実施した現地調査の結果の分析を進め、学会発表と論文執筆を行う。また、それらを元に、具体的な次の研究課題を設定する。2021年度以降に行う現地調査の準備を進める。						
今年度の進捗状況		調査結果の分析、共同研究等の結果をまとめた共著の英語書籍の校正などを行った。展望論文の原稿執筆を進めた。						
来年度の進捗目標		調査結果を元に学術論文を執筆、投稿する。執筆した展望論文を投稿する。2021年度後半以降、海外渡航が可能となり次第、現地調査を行えるよう調査準備を進める。						
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>								
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要		

科学研究費補助金 基盤研究(C)	2020年度～2022年度	(研究代表者)	本研究の最終目的は、インドネシアを事例に、発展途上国における経済成長に伴うフードチェーンの変化による農村社会と農村世帯生計の変動について明らかにすることである。この点について考察するために、国内での商品調達が不可欠な生鮮野菜に注目して、外資系大型スーパーに至るフードチェーンの実態を捉える。そして、外資系大型スーパー向け生鮮野菜産地における生産状況、スーパー向け野菜導入による世帯や農村社会への影響を明らかにする。これら2点について検討するために、外資系大型スーパーや中間業者等に対する聞き取り調査と生産地における世帯調査を実施する。
科学研究費補助金 基盤研究(B)	2017年度～2020年度	(研究分担者)	<p>本年度は、前年度に引き続き、国内村落調査として上田上塩尻村を、海外調査としてバリ北部および南部の村落調査を行った。</p> <p>1)国内調査については、上田上塩尻村に残された村落史料について、昨年に引き続き藤本蚕業歴史館の所蔵文書の調査と撮影を行った。これによって、近世期から明治初期にかけての上塩尻村の蚕種市場および地方金融活動(永統講)と村落および地域的共同組織との関係についての実態分析が可能となった。これらの資料調査に基づく研究成果は、『近世日本における市場経済の形成と共同性(仮題)』として刀水書房から2021年に出版刊行予定である。</p> <p>2)海外調査については、2019年の6月、11月、12月、ならびに2020年2月の四回にわたってインドネシア共和国バリ州の村落調査を実施した。具体的にはブレレン県サワン区のスクンプル村、サワン村、ベベティン村、スダジ村の4つの村々について慣習村(アダット)および行政村(ディナス)、スバック・スバカビアン組織、そして村落観光開発の実態について、関係者からのヒアリングを実施すると共に、村内に残されたアウィッグ・アウィッグ(村内規約)やモノグラフィ(歴史と現況をまとめた村誌)といった資料の閲覧と撮影を行うことが出来た。また南部ギャニール県ウブド区内の観光関連事業者と県文化局調査を行い、村落と観光業の関連に関する実態についての情報と資料を獲得することが出来た。3月に現地協力研究者と実施を計画していたアンケート調査はコロナ新型肺炎パンデミックのため、残念ながら実施できなかった。</p> <p>3)国内上塩尻村の研究成果については2021年の出版を予定しており、海外バリ州の研究成果については、海外協力者のイカデ・アンタルティカ氏(ガネーシャ教育大学)が、9月にフランス・パリで開催されたヨーロッパ農村史学会と11月に日本で開催された日本村落研究学会において成果報告を行った。</p>

**IV 学会等及び社会における主な活動**

2019年4月～	東北地理学会 評議員
2018年9月～	東北地理学会 幹事
2005年5月～	アジア政経学会 会員
2003年12月～	東北地理学会 会員
2002年8月～	人文地理学会 会員

**V 芸術分野や体育実技等における主な活動**

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

## VI 学内における管理運営に関する諸活動

1. ハラスメント相談員
2. 学科総務委員会委員
3. 学部教務委員会委員(演習部会)
4. 学科教務委員会委員
5. 就職キャリア支援委員会委員
6. 2020年度2年生G主任

2020年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	准教授	氏名	大澤 史伸	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2020年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	准教授	氏名	目代 邦康	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
サイエンスコミュニケーションの場としての日本のジオパークの可能性	単著	2021年3月	東北学院大学人間情報学研究 所, 人間情報学研究(26)	未記入	pp.61-71		
栗駒山麓ジオパークのジオサイトを素材としたオンラインでの発展実習	単著	2020年12月	東北学院大学教養学部地域構 想学科, 地域構想学研究教育報 告(11)	未記入	pp.43-46		
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
「地形学教育の新しい展開」に関する総合討論の記録	単著	2020年12月	日本地形学連合, 地形(41・4)	目代邦康・土井彩華	pp.387-395		
特集「地形学教育の新しい展開」によせて	単著	2020年12月	日本地形学連合, 地形(41・4)	未記入	pp.339-342		
愛媛県西予市における肱川氾濫による洪水災害の実態と, 平常時と災害時における四国西予ジオパークの対応	単著	2020年6月	東京地学協会, 地学雑誌(129・3)	◎目代邦康, 長谷川修一, 河本大地, 柚洞一央	pp.N29		
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
小木 佐渡島の玄関口『小木 佐渡島の玄関口』	単著	2020年4月	日本地図センター, 地図中心(571)	未記入	pp.23-25		
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
博物館・ジオパークでどのように地形に興味をもってもらうか	単独	2020年11月	日本地形学連合2020年秋季大会(日本)	未記入			
日本地形学連合における地形学教育の扱い	単独	2020年11月	日本地形学連合2020年秋季大会(日本)	未記入			
自然保護における地理学の役割	単独	2020年10月	2020年度日本地理学会秋季学術大会(日本)	未記入			
地学的自然遺産保護のための評価項目の検討	単独	2020年7月	JpGU-AGU Joint Meeting 2020(日本)	未記入			
上高地・上宮川谷沖積錐における巨礫群: 分布, 岩質および定置プロセス	共同	2020年7月	JpGU-AGU Joint Meeting 2020(日本)	寺松夏乃, 荻谷愛彦, 目代邦康			



中部山岳国立公園上高地における自然公園管理の現状	単独	2020年7月	JpGU-AGU Joint Meeting 2020(日本)	未記入	
活断層地形の価値の評価と保護の現状	単独	2020年7月	JpGU-AGU Joint Meeting 2020(日本)	未記入	
庄川断層帯南端部に生じた水沢上地すべりの地形・地質特性と1586年天正地震	共同	2020年7月	JpGU-AGU Joint Meeting 2020(日本)	栗本享宥, 苅谷愛彦, 目代邦康, 山田隆二, 木村誇, 佐野雅規, 對 馬あかね, 李貞, 中塚 武	
<b>H. 翻訳(学術書や原典等)</b>					
<b>I. 特許</b>					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
<b>III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</b>					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
<b>IV 学会等及び社会における主な活動</b>					
2019年8月～2020年7月		日本第四紀学会 評議員 会員			
<b>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</b>					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
<b>VI 学内における管理運営に関する諸活動</b>					

2020年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	准教授	氏名	柳澤 英明	大学院の授業担当の有無	有
<b>I 教育活動</b>							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
<b>1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)</b>							
オンライン講義型の授業でもできる限り、実習形式の課題を出す。		2020年4月1日～		作図や簡易的な模型など作成する実習型の課題を出す。			
<b>2. 作成した教科書、教材、参考書</b>							
独自のプリントをオンライン配布する。		2020年4月1日～		授業に沿ったプリントを作成し、メモができるようにしている。また学生が授業内容を復習できるように、PPTをホームページにアップロードしている。			
<b>3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</b>							
成果発表会を行う。		2020年4月1日		実習型の授業で実施した成果についてパワーポイントでまとめて、発表会を行っている。			
<b>4. その他教育活動上特記すべき事項</b>							
建築研究所講師		2020年4月1日～		建築研究所にて海外の研修生に対し、津波シミュレーションについて講義している。			
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・初期段階において学生の技術レベルに差があるコンピュータ授業(GIS実習、基礎コンピュータ)において、学生のレベルに合わせた適切な課題量を設定すること</li> <li>・授業時間外における適切な課題量を設定すること</li> <li>・授業において適切な難易度を設定すること</li> </ul>					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> <li>・コンピュータ授業においてタイピングテストを行うことで、自宅学習を促している</li> <li>・GIS実習ではフリーソフトを取り入れ、自宅学習ができるようしている</li> <li>・授業内において練習問題を行うことで、理解を促進している</li> </ul>					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生自身が考え、自分のアイデアを反映できる課題を設定する</li> <li>・自宅での学習時間を増やすようにする</li> <li>・毎年の学生のレベルを適切に把握する</li> </ul>					
<b>II 研究活動</b>							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
<b>A. 学術書</b>							
<b>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</b>							
<b>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</b>							
<b>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</b>							
<b>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</b>							
<b>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</b>							
<b>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</b>							
<b>G. 学会における研究発表</b>							
日本地理学会秋季学術大会	共同	2021年3月	低価格 Lidar を用いた簡易 3D スキャナーシステムの構築— 測量・マッピングへの応用 —(不明)	不明	pp.2		
Tsunami modeling by marine landslides and reduction of disasters	共同	2020年7月	JpGU-AGU Joint Meeting 2020(不明)	Yuichiro Tanioka,Hideaki Yanagisawa,Kei Ioki,Tatsuya Nakagaki			
Numerical simulation of debris avalanche and tsunami caused by the 2018 sector collapse of Anak Krakatau	共同	2020年7月	JpGU-AGU Joint Meeting 2020(不明)	Hideaki Yanagisawa,Tatok Yatimantoro			

H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他分野との連携を進める</li> <li>・数値シミュレーションの高度化するとともに汎用化を進める</li> <li>・あたらなる調査フィールドを見つける</li> </ul>		
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地すべり分野との連携を進めている</li> <li>・並列化に対応したコードを開発している</li> <li>・文献調査より未調査な部分を抽出している</li> </ul>		
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人文系との連携を進める</li> <li>・シミュレーションの高速化を行う</li> <li>・あたらなるフィールドを調査する</li> </ul>		
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2018年～		日本地理学会会員 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			